續群書類從

第拾六輯上

東京
續群書類從完成會

續群書類從第拾六輯上目次

和歌部

卷第四百卅一
權中納言爲相卿集（藤谷集）……一
卷第四百卅二
入道大納言爲兼卿集二通……一七
卷第四百卅三
前大納言爲廣卿集（清玉集）……六六
卷第四百卅四
前大納言爲廣卿詠草……一〇五
卷第四百卅五
前參議敎長卿集（貧道集）……一二八
卷第四百卅六
前參議爲冬卿集……一七三
卷第四百卅七
前參議時慶卿集……一八五
卷第四百卅八
參議時直卿集……二二四
卷第四百卅九
藤原爲賴朝臣集……二四四
大江匡衡朝臣集……二四九
藤原家經朝臣集……二五五
卷第四百四十
平忠盛朝臣集……二六二
藤原信實朝臣集……二六四
卷第四百四十一
紀伊國造俊長集……二七五
卷第四百四十二
松田丹後守貞秀集……二八一
心珠詠草……二八六
卷第四百四十三
贈從三位元就卿詠草……三一七
若狹少將勝俊朝臣集……三三一
卷第四百四十四
珍譽法印和歌……三四八

寂身法師集……三五〇
卷第四百四十五
閑谷集……三七六
卷第四百四十六
閑放集……三九四
卷第四百四十七
權大僧都心敬集……四〇〇
卷第四百四十八
道堅法師詠草……四二〇
和泉式部續集……四三六

續群書類從第拾六輯上目次終

續群書類從卷第四百卅一

總檢校保己一集
男　源　忠　寶　校

和歌部六十六

藤谷和歌集

春歌

嘉元々年百首歌奉りし時立春

くるはるも都の空をはしめとて長閑き色に今朝かすむらん

元日

むつきたつけふこゝのへにふる雪や衣にうけし人をしる覽

此歌孝武常大明十一年正月朔日雪降。義泰以衣受雪。爲佳瑞。

春たつこゝろを

いつのまに霞の色と成ぬらんきのふは雪のふる年の空

平宗實朝臣すゝめける十首歌に早春

ふるとしの雪けは空に殘れともはや山風はゆるくふくなり

嘉元々年百首歌奉りけるに若菜

萌初るわかなすくなき春日野の雪つみませて歸る里人

若菜をよみ侍りける

けふことのとえたの卯杖つきすして君か若菜は萬代のはる

嘉元々年百首歌奉ける時霞

かこ山のむかしの日影立かへり思へは遠くかすむ(空イ)はるかな

おなし百首に梅

誘ふへき風は霞に隔て梅か香しらぬまとの明ほの

折人のつらさもいはし梅の花さかぬやとにはさそなゆかしき

平貞時朝臣家屛風歌

おりてみん軒はの梅の紅に(をイ)薄くふりなす雪の一えた

式部卿親王家歌に春月

いとひつる雲の外なる影も猶霞をいてぬ朧よの月

嘉元々年百首歌奉りける時鶯

宿ちかくめくれる竹をふる巣にて谷よりまたぬ鶯の聲

春の歌の中に鶯

さのみやはものうきねにもともなはむ（わかはるカ）若葉に告よ（軒イ）やとの鶯

新拾　文保三年百首歌奉りし時

三吉野の瀧のしらいと春くれはあはにとけ行薄氷哉

嘉元々年百首歌奉し時春雪

山かせの吹まく空にかつ消て庭まてふらぬ春の淡雪

おなし百首歌に霞

眞柴たく煙をこめて山もとの里あるかたは猶かすむなり

名所歌の中にみな瀬河霞

鹽よりも霞や空に滿ぬ覽みなせの川のあくる湊は

嘉元々年百首歌奉りける時柳

岸遠き河せの霞すゑ晴て柳にみゆる春風の色

正和二年家の六首歌に

咲ましる花の日（ひかりイ）よりも三吉野の玉松かえの春のひと時

名所歌の中に

くれかゝる霞のしたの小倉やま花より外は其色もなし

嘉元元年 百首歌奉りし時山花未開といふことを

花はまた（宿イ）えたにこもりて山櫻またぬ若葉の色に先（そイ）たつ

嘉元々年百首歌奉りし時花

くれぬ間は中々かすむ山のは（のイ）に入日さやかに花そいろつく

春の歌の中に

立ならふ嶺の梢をふくから（見わたせはイ）に松よりちれる山さくら哉

百首歌奉りける時花

けふはまた路ふみかふる櫻かりきのふの花は（山イ）誰かとふらん

平宗實朝臣すゝめける十首歌に霞

花鳥は猶所わく情にて霞のみなる春そあまねき

正應五年三島社十首歌に海邊霞

くるゝ日のゆふ浪遠き波路より霞をいてゝかへるふな人

嘉元二年仙洞歌合に

立かくす遠の霞のひとむらに煙あまらぬさとの朝明

百首歌に花

ひとえたは何國の花そあふ人に咲初（けイ）たるかたをとはゝや

心ありてのこすか花をけふこそは誘ひもそむる春の夕風

名所歌中に

立ましる花のむら雲たえ〲に杉の葉うつむあしからの山

嘉元々年式部卿宮家千首歌に糸遊

雲おほふ雨の空には見えさりきはるゝ日待てあそふ糸遊

名所歌の中に古寺花

あはつ野や遠き霞に聲もりて花の香つたふ入相の鐘

永仁二年藤原能清家にて名所花といふことを

尋れきてかくみるからにかつまたの花の陰こそ立うかりけれ

名所歌の中に

佳馴しやとは小倉の山櫻花のこゝろにむかしとはゝや

名所の花といふことを

たかし山花たにやとをおしますは只越えのこせけふの行する

春のうたの中に

みよし野の大宮ところ尋見んふるきかさしの花や殘ると

春の歌の中に花あまたよみける中に

忘られぬみはしの花の名殘かなみしはあまたの春ならねとも

詩歌合に

なへてよの種とは見えぬ梢哉玉のうへ木の花のすかたは

はるのうたの中に

けふあすの花なき枝にふきたてゝ咲なはよはれはるの山かせ

嘉元々年百首歌奉りし時春月

はるゝ夜のあはれはいはし月影の朧にうつるすまの浦なみ

家六首歌に磯若草

岩かねのいそのした草もえ出てよすれは青きこよろきの波

文保百首歌奉し時

玉藻かるかたやいつこそ霞たつ淺香の沼の春の明ほの

嘉元々年式部卿親王家の千首歌に野遊

ひき初し子日そはしめ春日のゝ花の陰まてなるゝさとひと

前大納言爲世卿歌合に春霞と言ことを

出る日のうつろふ嶺は空晴て松よりおくの山そかすめる

前大納言爲兼卿家歌合に春夜といふことを

花かほり月霞むよの手枕にみしかき夢そ猶別れゆく

楚忽百首に菫

織女もすみれ摘てや天の河秋より外に一夜ねぬらん

家六首歌に苗代

春ふかき小田の澤水せきかけて草かりいるゝ賤か苗代

嘉元々年百首歌奉りける時歸鴈

我かへる道は稀なるふる里に年〳〵かりのやすくとふらん

鳥百首の中に燕

あはれみの後のはる迄殘りけりつはめのあしにつけしいと筋

嘉元々年式部卿親王家千首歌に雲雀

はるの野にあかるときのみ聲はして草葉になかぬ夕雲雀かな

春述懷といふことを

花鳥に猶あくかるゝ心かな老のはるとも身をはわすれて

名所歌の中に躑躅

つゝし咲ならひの岡の松かけにおなし夕日の色そうつろふ

分のほる行てのきしの高せやま手折らてみつる岩躑躅哉

あつまにくたりけるに三河國赤坂にて

外山なる花はさなから赤坂のなをあらはして咲つゝし哉

嘉元々年百首歌奉りける時欵冬

くれはつる春の餘波（なごりに咲てイ）にやまふきの花さく色の（へ春をイ）おしみかほなる（けるかなイ）

名所の藤といふことを

えたひたす汀の松に咲ふちの花よりあまる宇治の川波

あつまにくたり侍けるに清見か關を過るにきしの邊に藤の咲たるをみて

清見潟岸にかゝりて咲藤の花もや關と人とゝむ覽

嘉元々年百首歌奉りける時藤

はるくるゝ梢の藤のかたえ（はらイ）たにまたこと花のみえぬころ哉

暮春藤

暮のこる春の日數に咲初て盛は夏にかゝるふしなみ

嘉元元年百首歌奉りける時暮春

ちる花の別にこりぬこゝろとて殘りのはるを又暮すらん（したふイ）（やしたはんイ）

夏歌

四月朔日奏氷

待えたるけふより夏の氷のためし絕す備ん長月迄に

文保三年百首歌奉しに

續後拾　卯花の咲ちる頃や初瀨川しらゆふ波も岸をこゆらん

嘉元々年百首歌奉りける時卯花

をのか咲色よりも猶卯花の月と雪との情をそしる

おなし百首歌に郭公

新千　時鳥いまやと思ふ一聲にたのめてくもるむら雨の空

百首歌の中にはつほとゝきす

我爲と聞やなさましほとゝきすぬしさたまらぬ己か初音を

百首歌奉りしに時鳥

鳴聲もひはらかおくにこもり江のはつせを出ぬ郭公かな

過やらてなけ時鳥立待の月も今宵のあかぬ詠に（なごりをイ）

正安二年家の百首歌に

吹しほるけしきは見えて夏山の若葉によはき風の音哉

名所歌の中に興津螢

岩こゆるおきつの浪に影うきてあら磯つたひ行螢哉

嘉元々年百首歌奉りける時螢

行螢神たにけたぬおもひとや御手洗川の波にもゆらん

夏歌の中に螢

眞木の戶もさゝて涼しき宵の間の簾に透てゆく螢哉

名所歌の中に江螢

しけりあふこやの入江のあしの葉にかくれもやらて行螢かな

乾元々年仙洞の歌合に夏夕

みたれゆく螢のけしき晴みえて月におとらぬ夏のゆふ暮

源惠僧正家障子にから崎に時鳥書たる處

から崎の松のひと木をやとりにて外山にかよふほとゝきす哉

百首歌の中に

山路より出てやきつる里ちかきつるか岡部に鳴ほとゝきす

あつまにくたりけるに近江の國かゝみ山にて

月のこるかゝみの山の時鳥峯より里にかへりてそなく

嘉元々年百首歌奉りける時夏月

まち出しは山の木の間茂りあひて影遠くなる月のには哉

おなし年式部卿親王家十（チイ）首歌に早苗多

をそくときかた社かはれ山賤のさ苗の小田にたゝぬ日そなき

嘉元々年百首奉る時五月雨

日をかさね軒はにおほふ雨雲のよそにもならぬ五月雨の頃

乾元々年二月百首歌に五月雨

みなと川か（ウイ）は波はやく立越（かつイ）てしほまて濁る五月雨の頃

嘉元々年百首歌奉りける時廬橘

袖の香のあはれうき（いくイ）世にのこる覽やとのふる木に匂ふ橘

永仁二年內裏歌合に夏夜

みたれゆく螢のかけや瀧なみの水くらきよの玉をなす覽

仙洞の歌合に夏朝

夏を淺み露おくとしも見えねとも草葉涼しき朝明の庭

嘉元々年百首歌奉りける時夏草

時きぬと野にも山にも置露の君か惠になひく夏草

仙洞歌あはせに夕立

夕立のなこりの庭のひとしめり涼しく成ぬ淺茅生の露

東にくたりける時あふみの國守山にて

鳴蟬のなみたしられてもる山のしけみにおつる木々の下露

永仁二年內裏歌あはせに蟬

木隱てしはしすゝしき風をたにあきにはなさぬ蟬の聲哉

嘉元々年百首歌奉りける時ゆふ立

はるかなるなかめも涼し難波潟生駒の雲（山イ）のゆふたちの空（雲イ）

仙洞歌合に夏神樂

岩かれに波かけ（サイ）こゆる川やしろのゝ衣やほさて涼しき

嘉元々年式部卿親王家千首歌に山家夏

すゝしさはいつくもとはし山かけて松よりおつる風の下いほ

植物百首に菱

ふなはたをたゝくもさひし宵の間に菱とる舟や江にかへる覽

嘉元々年百首歌奉りける時納涼

せく水も便ありける木隱に袂すゝしく暮すけふかな

秋歌

嘉元々年百首歌奉りける時初秋

先たつはいつれともなし草の原露と風とのはつ秋の空

文保三年百首歌奉りしに初秋風

新後拾　昨日まて人にまたれし涼しさを已といそく秋の初かせ

嘉元々年百首歌奉りける時七夕

新後撰　歸るさの袖ぬらす覽鵲のよりはにかゝるあまのかは浪

古集百首歌の中に鵲橋悲織女歸

名殘をやなれもしるらん七夕の別をいそくかさゝきの橋

百首歌の中に

〔新千〕天川水かけ草の幾秋かかれなてとしの一よ待らん

初秋朝といふ事を

〔玉〕今朝よりは吹くる風もをく露も袖にはしめて秋そしらるゝ

海道名所百首歌に菊川七夕

波にいまうつしてみはや菊かはの名も便ある星合の空

嘉元々年百首歌に露

〔風〕年へぬるうれへの袖に置なれて草葉にしらぬ閒の白露

おなし百首うたに萩

〔玉〕植さりしいまひともと（もイ）の悔しきは花咲のち（比イ）の庭の秋萩（萩百千葉）

おなし百首うたに荻

あさまたきなかはゝ露にかたふきてひとむら（かたイ）そよく風の下荻

嘉元々年百首歌奉りける時薄

岡のへやすゝきかたよる秋風にはるのやなきの俤そたつ（心ちこそすれイ）

式部卿親王家三首歌に秋草

見れはかつうは葉にあまる白露のちるをも結ふ軒の下萩

嘉元々年百首歌奉りける時秋夕

こゝろからゆふへの秋になかめすは色なる空の雲もうからし

おなし百首に虫

聲絶てうらむる虫の我計身を秋になす物は思はし

むしを

露しらむ庭はまとをに鳴虫の木陰の草によを殘す聲

嘉元々年百首歌奉りける時鹿

山里は枕さためぬ鹿の音に秋とて夢のなかきよもなし

高瀨山秋

高瀨山夕波むかふ嶺風にかはりてくたるさを鹿の聲

里遠くみきくひとなしに棹鹿の聲は高瀨の山の秋風

暮山鹿といふ事を

夕霧の籬の山に妻こめて猶うちとまる棹鹿の聲

山鹿（イ鹿をさくりてよみける歌に山鹿）

ひとつれはすそ野に出て小倉山嶺にものこる棹鹿の聲

名所歌の中に

つまこひはをのれもならぬ思ひとやふしのすそ野（野イ）に鹿の鳴覽

露はらふ葛の下ふし夢絶て鹿の音近きうつの山道

おなしくは鹿なくかたに宿もかな秋しもこゆるさよの中山

風そよく竹の下露袖に落て鹿の音寒きあしから（山イ）のせき

永仁三年家の歌合に

啼鹿の聲もほのかに成にけり秋風うつむ夕霧のやま

元亨三年七月廿一日三首歌に朝草花

吹風もおよはぬ庭の萩かえに朝露ほさて花そさき添

文保三年百首歌奉し時霧

おくみえぬは山のきりの曙にちかき松のみ殘るひと村

遠江國名所歌に大井川初秋

浪よりも秋や立覽大井川わたる瀨ことに風はすゝしき

嘉元々年百首歌奉時月

くれぬより月の姿はあらはれて光はかりそ空にまたるゝ

嘉元百首歌奉りしに月

風誘ふかきほの下の草はまて落れは露をしたふ月影

嘉元々年式部卿親王家千首歌に古寺

みるまゝにかけ社しらめ飛鳥のあすかの寺の明かたの月

嘉元々年百首月の歌の中に

なかめこし身はいたつらに秋をへて行末思ふ月は悲しき

正應五年三島社七首歌に月

時しらぬ富士の煙もはるゝ夜の月の爲にやたゝすなるらん

當座十首歌に月

殘くまは關屋に立る松計さらては月の須磨の浦風

地儀百首歌に寄月海

和田の原月をひたせるしら波の八重のくまゝて寓のこまして影はすむとてらし(夫木)

五十首歌に河月

さしのほるみなのせ川の夕汐にみなとの月のかけそ近つく

嘉元々年竹園御會

露をしく御垣か原の淺茅生にふかきかけ見る秋のよの月

同元年式部卿親王家續千首歌に曉月

秋寒きあらしの窓は明やらてねさめにみよとすめる月影

嘉元々年百首奉ける時初鴈

霧のうへにあまた聞ゆる聲よりもみれはすくなき鴈の一つら

永仁二年内裏の歌合に鴈

月しつむ山のはかけを行鴈の翅にうすき明ほのゝそら

嘉元々年百首歌奉ける時霧

露しろき草のうへより晴初て遠かた野邊に殘る朝霧

源惠僧正家障子に關守かきたる所

逢坂の關の戶みゆる秋風に霧もへたてぬ入相のかね

嘉元々年百首歌奉りける時擣衣

ふくる夜の月影したふ山かつは庭に出てや衣うつらむ

秋夜を

庭のむしよその礎の聲〳〵に秋のよふかき哀をそきく

百首歌奉りけるに月

宵のまの光にも似ぬ哀かな人しつまりてむかふ月影

永仁三年家歌合に

くれかゝる梢の日影袖に落てはらふ衣のうす霧の空

式部卿親王家續千首歌に野徑月

めくるともすそ野に道をふみかへて月にはゆかし槙の下陰

文保三年百首歌奉りし時

雪ふれはたかく成行鈴鹿山いかなる霜にかれひゝくらん

正應五年三島社十首歌に松上雪

あらはるゝ雪のしつえのふかみとり松の情は冬そしらるゝ

題しらす

この頃の時雨雪けにくもる日はあしたのほとそしはし長閑き

初雪を

雲寒き夕やまおろし吹おちてこよひは雪にみゆる空哉

名所歌の中に富士川千鳥

風おろす富士の川せの小夜千鳥みなとにむかふ聲の曙

嘉元々年百首歌奉りける時千鳥

新千 夜を寒みつはさに霜やをくの海のかはらの千鳥更て鳴覽 之イ

鷹狩を

新千 御狩野に草をもとめてたつ鳥のしはしかくるゝ雪の下柴

源惠僧正家障子に勢多橋に雪ふりたるところかき
たるに

打わたす朝けの袖も白妙に雪をかけたる勢多の長橋

冬歌中に

時雨ゆく雲間によはき冬の日のかけろひあへすくるゝ空哉

家の六首歌に神樂

男やま曉めくる神垣に神樂をうたふ聲のさやけき

歲暮を

續後拾 いまはたゝしたふ計の年の暮あはれいつまて春を待けん

嘉元々年百首歌奉りける時歲暮

我身よにうきてはてある年ならは近つく春もいそかれやせん

羇旅歌

嘉元々年百首歌奉し時旅

行先のとまりや遠き此里のあさたつほとはあふ人もなし

旅眺望といふことを

聞こえてうち出の濱のしのゝめにあとよりなくる鳥の聲かな

平宗賢朝臣すゝめける十首歌に旅

けふはや越こそなつめ太山路や昨日分こしのへにならひて

永仁三年家歌合に

めにかけし雲の尾上を分こえてきのふは遠き山路をそ行

旅歌中に

續千 ふるさとの夢のかよひ路闇もゐは何を旅寢の思ひ出にせん

題しらす

なれきつる山の嵐を聞すてゝうら路にかゝる旅衣かな

旅歌の中に

こゝろのみへたてすとても旅衣山路かさなるをちのしら雪

かり初の草の枕のよな／＼を思ひやるにも袖そ露けき

草枕いかにむすはんふる里のかた身の夢もあらし吹也

あつまにくたりける時海道百首歌の中にあふみの

蒲生野
尋てもそのよとはゝやかまふのゝつるはむかしの跡に住らん
同し國玉井里
おもはすもぬるゝは里の名もつらしむすはて過ん玉の井の水
美濃國不破の中山にて
さとつゝきしはの籬を分過て道もこくらき不破の中山
尾張のくろたの里にて
遠近の(もイ)いまはたみえすむは玉の黒田の里のゆふやみの空
三河國やつはしにて
ふりにける名をのみかけて八橋のあとは水行河たにもなし
遠江國小夜の中山をこえ侍るとて
名に高きさやの中やまあかなくに坂こえやらてかへりみる哉
同し國のみつけといふ所にて
我そなくいなさほそ江の友千鳥あとふみつけしむかし思へは
駿河國うきしまか原をいきぬとて
水近きふもとの沼のよそなからいまいる鳥のさたかにはみす
あつまにくたり侍りける時筥根山にてはしめたる
道をゆくにとの外に高き嶺のはるかにみえしを人
にとへはあれこそもとの道といふを(まイ)聞て
本こえしみちともみえす筥根山梢の雲にあかる高根は
戀歌
嘉元々年百首歌奉りける時初戀
思ひあへぬ心より猶先たちて涙のしけき戀となりけり
同し百首に忍戀
をのつからかたりあはするかたもなく心ひとつにそふ思ひ哉
名所歌中に寄垂井戀
我袖の雫にいかゝくらへみんまれにたる井の水のすくなき
忍戀
かひなしや何と忍ふの浦とても浪こす袖をほさてみせなは
嘉元々年百首歌奉りける時不逢戀
ひとよたに待もならはぬ心にはそれもゆかしき空たのめ哉
おなし心を
あふをはのりの小船のいつかたにしはし心のとまり尋ねん
衣〳〵は我またしらぬ道しはのあしたの露ははらふともなし
下紐につけたる草は名のみして心にあかぬひとのおもかけ
うきかたにいかなる夢のかよふ覽我思ひてはひとつ俤
嘉元々年百首歌奉りける時待戀
(新拾)雨舌もかきりあれはとたのむよに幾度ふけて獨寢ぬ覽
おなしこゝろを
さのみやはこりす待らん變人を(もイ)忘れやするにならぬ(ふよもかなイ)よはをも
嘉元々年百首歌奉りける時初逢戀
ぬれなからかさね初つる我袖にいつはらさりし泪とはしれ

おなし百首歌曉別戀

（新續古）あくる間のかねをもまたぬつらさかなよふかき鷄の聲に別て

戀歌中に不遇戀

（新千）あふことのなきさの小船何かたにしはしこゝろのとまり定ん

嘉元々年百首歌奉りける時逢不遇戀

むすはてもあらましものを馴しよの契をいまの夢（はイ）としもせん（しりせはイ）

おなし心を

道もなき蓬か庭にみるもうしとはれしほとはしけらさりしを

はしめより只一かたにつらからて情をませしいつはりそうき

嘉元々年百首歌奉りける時被忘戀

なれしほとは思ひもしらてわすらるゝ後こそ人の心をもしれ

おなしこゝろを

（新千）そのまゝにまた影見えぬ（もみぬイ）忘れ水袖にはふかき流とそなる

たのめてしとの葉なるゝ玉章をあらぬ筆かと人にみせはや

嘉元々年百首歌奉ける時恨戀

（同）あらさらん後の名まても思はねはうき同世になき身ともかな

前大納言爲兼卿家歌合に寄月戀

（風）みるからに戀しさをのみもよほして人を誘はぬ月もうらめし

題しらす

たかちきり誰恨にかかはるらん身はあらぬよのふかきゆふ暮

嘉元々年竹園千首歌に寄檀戀

ことの葉をこれにならひてちらす哉玉つさつくるはしの一枝

延慶三年八月十五夜平貞時朝臣よませ侍し五首歌
に

（新千）うき人の我俤といひをかはこぬよの月もなくさみもなし

題しらす

（同）かれねたゝよし住の江のきえもせぬつらさ計の草の名もうし

文保三年百首歌に

（新續古）たまさかに契りし夜半もまたふけぬまたれぬ鐘を音信にして

戀の歌の中に變戀

（玉葉）我袖の涙のいろのかはるさへ人の契のしるへかほなる

元亨二年九月禁内裏五首歌合に恨戀

それも猶いとふ便と成にけりつもる恨の数をかたらむ

戀歌の中に寄舟戀

あふことのなきさの小舟いつかたにしはし心のとまり定ん

永仁二（三イ）年藤原長清家歌に

我袖のほかにな出そ涙川うき身なるみ（偶（夫木））はせきあへすとも

嘉元二年竹園千首御會に寄枕戀

わか袖のほさて（もイ）かくちんおく山のたつをたまきのしけき雫に

閑居百首歌中に戀

めくりあはん契の末は長造繁の神のしるへを頼むはかりそ

契不來戀といふことを

たまさかに契りしよはもまたふけぬまたれぬ鐘の音信にして

雜歌

嘉元々年百首歌奉りける時曉

あまたなくゆふつけ鳥の聲やみてまた靜なるあかつきの床

雜歌中に

風 谷陰や木ふかきかたにかくろひて雨をもよふす山はとの聲

嘉元々年百首歌奉りける時松

新拾 あらましの心のうちの手向草まつとはしるや住よしの神

前大納言爲兼卿家歌合に述懷

風 うしとてもうからすとてもよしやたゝ五十の後の幾程の世は

中納言拜任の時よめる

同 のほるせのありけるものをひく人のなきにもよらぬ淀の川舟

嘉元々年百首歌奉ける時竹

新拾 むなしきを友とはすれと吳竹のうきふしはかり身にそ數そふ

おなし百首歌に山

代々のあとをたとるもかなし位山親にこえたる人もある世に

永仁二年家の歌合に國

しまのほかも波おさまれるあまつ（きイ）國道ある君か惠をそしる

玉照君のこゝろを

時しもあれさそうかりけん都出しみさへいつきのあきの心は

嘉元々年竹園十首歌に山榊

かこ山の峯の眞榊くちせすはかゝみをかけし枝もかはらし

正和五年九月佛國禪師かまくらより下野のなすへくたり侍りける時春はかならすくたりてやまの華を見るへきとちきりけるに十月入滅し侍けれは佛應禪師のもとに遣はしける

風 咲花の春を契しはかなさよ風の木のはのとゝまらぬよに

平貞時朝臣みまかりて後四十九日過てそのあとにいひつかはしける

あとしたふかたみの日かす夫たにもきのふの夢に又移りぬる

題しらす

玉 さとゝしもよそにはみえぬ遠島の松にましりて立けふりかな

雜歌中

同 足常の老のよはひに生れあひてひさしくそはぬ身をそ恨る

これのみそ人の國よりつたはらて神代をかけし鋪嶋の道

持明院殿にて題をさくりて人々歌讀けるに玉を

玉 藻屑にも光やそはん和歌の浦やかひあるけふの玉にましりて

前中納言定家卿遠忌に秋懷舊

同 廻りあふ秋のはつかのはつかにも見ぬよをとへは袖そ露けき

百首歌の中にほや

すゝきふく穗やの軒はの一方になひかは神のしるしともみん

神祇のこゝろを

代々を經てあふく日よしの神垣に心のぬさをかけぬ日そなき

嘉元々年百首歌奉りける時神祇

新置し末をも絕すてらしみよいまは日よしとあふく神垣

おなしうたの中に川

さゝれ行玉しま川のあた波はほり江になれはおとそのとけき

おなし百首うた橋

たよりある嶺のいほりのかけとめて末にわたさぬ山川のはし

おなし百首歌に關

わすれすよゆふへの雨に關越て鐘聞初しあふ坂の山

嘉元々年百首うたに海路

いそけともまた山見えぬ波のうへに雲を隣と向ふ舟人

同し百首歌に山家

處ちかきつま木の道や暮ぬらん軒はにくたる山人の聲

百首うたに山家

嶺高き構あまたにつたひきてひところゐになる軒の春風

嘉元々年百首歌奉りける時田家

山本の竹よりおくに家居して田面をかよふ道の一筋

おなし百首歌に述懷

君に我つかへん爲といひ置し道にもなとか物おもふ覽

百首うたに同しこゝろを

ことの葉も人の數にやもれぬらん雲ゐをしらぬ身の類ひとは

嘉元々年百首歌に夢

おもひ出も人にかたるは稀なれとよる〳〵つねにみゆる夢哉

おなし百首うたに祝

續千 君はたゝ心のまゝのよはひにて千とせ萬代數もかきらし

おなし百首歌に釋教

新續古 隔なよつゐには西と賴む身の心をやとす山のはの空

名所歌中に野洲川舟

雨ふれは舟よりそひくやす川のやすく渡らし瀨をはたとりて

海道百首歌中に馬淵近江

日もくれぬわたせその馬淵もなき此一川は瀨ふみせすとも

長濱同國

きのふみし道の長濱へたゝりて猶したひくる浪の音かな

小野あふみ

湖もみやこの山もみえ初てさか越えくたる小野のふるみち

醒井あふみ

河となるすゑまて淸し岩間よりあまりて出る醒井の水

今淵あふみ

よちのほる嶺にひとしく立出ていますゑみゆる山本の杉

柏原あふみ

おりくたる山のすそのゝ柏原もとつはましり茂るころかな

をしや川三州

せをはやみ流るゝ水はをしや川あやしきはしを渡るかち人

しかすか遠州

眞砂こす浪かとみれは數しらすかもめむれゐる沖のはなれ洲

勝間田遠州

いとふなよ菊河わたる道をよきてとはんと思ふかつまたの里

池田里遠州

そのかみの里は河瀬と成にけりこゝも池田のおなし名なれと

懸川

これもまたところならひか門ことにほすてふ布をかけ川の里

岡部里駿河

夕日さすけしきも淋し松たてる岡部のさとは山陰にして

せな川同

同しくはちかくわたせせな河上のはしははるかにめくりてそ行

興津同

ふりにける松のこゝろもあらはれぬおきつのあまの昔語りに

竹下さかみ

山ふかみ杉のしけみに吹落てふもとによはる竹の下風

小田原同

作りあへぬ春のあら小田はらひ兼よもきなからに今かへす覽

大磯同

松のこたち岩うつ波のけしきまて實もところは大いその濱

片川同

ひとよともやとをもかへすあまたゝひ立よりてみる片河の里

片瀬河同

うちわたすいまやしほひのかたせ河思ひしよりも淺き水かな

脊懸

いつの間にこの山河の增りけんもくつかけをく岸の岩かと

百首うたの中に祝

和歌の浦海士のたくなはなかゝれと祈るかひある君か御代哉

山寺竹といふことを

山ふかき寺のそとものひとむらや世のうきふしにあらぬ吳竹

題しらす

玉ほこの道のぬかりもなかりけりさゝれにはるゝ夕立の雨

寄菖蒲祝

君か代に引こそそむれ谷陰の菰の菖蒲長きためしに

嘉元々年式部卿親王家續千首に寄沼述懷

世にしつむとの葉にかりのはへてもいかほか沼の水陰（みかくれイ）そうき

百首うたの中に

古の神のみとしろ跡しあれは今も種まけあまのむらわせ

楚忽百首歌に

田あるものは田をそ憂ふる苗代のみつから身をは苦しむる哉

海道名所歌の中橋本

[illegible]

[illegible]

くれてはや望みちぬらしうら〳〵に釣舟よせてをる〻あま人

寛元二年[illegible]

いにしへも思ふ[illegible]

[illegible]百首歌の中に[illegible]

とこ世には[illegible]かへらぬら[illegible]島や[illegible]のえの浪にかへらむ

[illegible]

〔右權大納言[illegible]〕

和歌部六十七

爲兼集

春

子日

初はるのねのひのこ松引そへてかさなる千代のすゑそ久しき

朝霞

空は猶雪けなからの朝曇りくもるとみるも霞之けり

山霞

朝みとり霞の衣立かへて山は雪けのくもゝのこらす

面影もよそには見えぬ鏡山やまかき曇りかすむ春哉

いつのまに霞立らん足引の山のみとりも色まさるまて

浦霞

わたつ海や鹽のひるまのはま松霞のみをやまた埋むらん

霞てそなをかきりなきわたの原八重のしほちの春の明ほの

河霞

つくはねの峯の梢は見えわかて霞におつる皆の川水

鶯

朝またき長閑き風にさそはれて花のかたとる鶯のこゑ

初鶯

梅かえに去年のやとりをたつぬなりいまた旅なる鶯の聲

早春鶯

あら玉のとしのはつねも心あれたかきをしりてうつる鶯

朝鶯

けさの日け鶯鳴て我宿のそとものこのめ春かせそ吹

明ぬとて竹のねくらを鶯も日かけとゝもに出てなくなり

谷ふかきをのかふるすの朝戸いてにあくれはいそく鶯のこゑ

夕鶯

歸るへき時とやさそふ鶯のねくらの梅の春の夕かせ

雪中鶯

咲そむる花かとみれは鶯の木つたひ散す春のあは雪

鶯の聲の色こそうつもれね木つたふ梅は雪そかゝれる

竹鶯

夜をこめて春とつくなりくれ竹の籬にきぬる鶯のこゑ

いつしかとねくらにしめて竹のよゝ我よも春と鶯のなく

（曉歟）寢覺鶯

曉の鶯の音きかぬ山里にねさめもよほす谷のうくひす

若菜

野へははやみゆきけぬらしもろ人の若菜つみにと今いそくえ

若菜つむ野もりのかゝみかけ見えてしらぬ翁にとやとはまし

摘若菜

けふそつむいくかと待し春日のゝとふひののへの春の若菜は

澤若菜

けふはみな若菜つみにとそともなる野澤の水に袖やぬれなん

としをへん身こそ老ぬれ澤水にいかなる草か若な成らん

里人は山さは水のうす氷とけにし日よりわかなつみつゝ

餘寒

春の空いつまて冬の名殘とて霞なからに猶もさゆらん

立わたる霞の衣きさらきの空ともいはすさゆる山かせ

餘寒月

かすむへき月のかつらのおりしらて猶さえやまぬ夜はの春風

餘寒風

白雪のきえぬかきりは嵐吹谷の下かせ春としもなし

春きても霞のまそて猶かすみさむさかはらぬ山嵐かな

餘寒氷

日影さす軒はに風はさゆれとも春とはかりの雪の玉水

二月餘寒

立かへり又きさらきの空さえてあまきる雪に霞山のは

春雪

久かたの空には春やをそからむ猶晴やらて淡雪そふる

消かてのこそのなこりも有物をふるにつもらぬ春のあは雪

春あさき野へのみとりにかつきえてふれともみゆる雪の下草

岡殘雪

春のくる跡とそみゆる水くきのをかのやかたの雪の村きえ

梅雪

梅かえは花もさなから埋れて雪より匂ふ軒の春かせ

梅

あさあけの窓ふきいるゝ春風にいつくともなき梅か香そする

里梅

此里のかきねつゝきの梅かゝにあくかれそめて旅ねしぬへし

庭梅
梅かえにそむる心のいろをさへさそひやはてん庭の春風

尋梅
さそはれていつくにみこそ梅の花そこともいはす匂ひきぬ覽

梅薫枕
手枕の袖には梅のかをしめてみるとしもなきうたゝねの夢
さそひ行匂ひそとまる梅の花袖こそ風のやとりならねと

梅香
梅の花匂ひを袖にうつしもてさそふ嵐にしらせすも哉

折梅
色もかも知ぬものから諸人の折かはあやなのへの梅かえ

紅梅
このまゝにしはしはのこれ紅の色そふ梅の雪のむらきえ
紅のこそめの梅の花さかりかこそ哀といかゝおもはん

落梅
見るまゝに花のかゝみそくもり行この下かけの庭のいけ水
ちれはこそ今は浦むれ梅の花匂ひしまては風やいとひし

若木梅
御園生の梅の若木もさきぬめり千とせの春を君に契りて

梅風
玉たれの隙もる月はほのかにて梅かゝ寒き春の夕かせ
吹しより軒はの梅の匂ひをは花にもそへすさそふ春風
匂ひこそうたてよそにもさそはるれ風にまかせぬ宿の梅かえ

依風知梅
わきて猶こそめの梅の花の色も夕くれなゐに匂ふ春風
梅かゝを心にしむる夕風は袖はかりにはうつらさりけり
ちるとてもなかめはすてし梅の花にほふ軒はに月うつるまて

梅薫風
あけはまた行てとふへき梅かゝをよのまもをくる窓の春風
吹すくる風につけてや梅の花匂ひをとをく人はしるらん

古宅梅
風吹は雪とふるやの梅の花折によるとてとふ人もなし

隣家梅
中かきの隙より匂ふ梅かゝの花の心やわれをへたてぬ

梅移水
匂ひをは散りての後やうつさまし梅咲宿の庭の池水
さく日より花のかゝみとみゆるかな梅のした行庭のやり水

柳
たをやめのきしの柳のあされかみかけもみたれて春風そ吹
百敷やみかきになひく青柳の糸ものとけき御代の春風
青柳の糸をはいとゝよりかけて霜のみたれに春風そ吹
なひけ共音はきこえて青柳のみとりによはる春風そ吹

柳露
をく露もまたほしあへぬ朝あけに春風よはき庭の青柳

行路柳
立よりてみてこそゆかめ玉ほこのゆきゝの道の青柳のいと
駒とめてしはし水かふ川柳うつるもなひくかけそ見えける

池柳
打殘る池のつゝみのふし柳かたえの春は波にそめつゝ
枝をそめ浪をもそめて青柳のいとにそかゝる庭の池水

岸柳
ぬれてほすみとりもふかし春風になみよる岸の青柳の絲
影うつす川せの水のあさねかみあらふとみゆる岸の青柳

池岸柳
風吹は浪のあやをる池水にいと引そふるきしの青柳

池邊柳
春風に池のこほりのとけしより結ひかへたる青柳の糸

門柳
我かとの五もと柳いつまてもかはらぬかけになひけとそ思ふ

若草
から衣すそのゝ草のうらわかみ春しきぬれはあさみとり之
冬かれも殘る雪まの朝みとりやゝみえそむるのへのわか草
見渡せはひとつみとりの草わかみそれとも見えぬのへの色哉

路若草
かけろふのをのゝふる道絶〳〵に雪まを春ともゆる若草

早蕨
ふりつみし雪の下草いつしかとやくとみしまにもゆるさ蕨
春たては雪けの水やぬるからんまつもえ出る下わらひ哉

春夜
かつちるも梢も今をさかりにて月もる庭の花の下かけ
山のはに月まつ空のにほふより花にそむくる春のともし火

春月
春のよのあらしや空にさむからし霞もなれぬ月のかけ哉
そことしも別れぬ空の光にて霞ににほふ春のよの月
久かたのおなし空にはみゆれ共かすみてかはる春の月かけ
かすむよのみねにさきたつ光にもいてゝまさらぬ春の月哉

山春月
春そ猶なくさめかぬる山のはにかすみてかゝるをは捨の月

春月雨
さやかなる影もみましを春かすみ立るそ月のつらさ之ける
侘侘てよに光なき我身こそかすめる月のたくひなりけれ

春雨
山かけに花まつほとのさひしさの詠にそへて春雨そふる
くもらてもふるかとそみる霞のみ立そふまゝの春雨の空

曉春雨

くもるとは思ひもわかぬ朝あけの空よりやかて春雨そふる

晴やらぬ雲もわかれす朝かすみたな引山の春雨の空

夕春雨

ふるとしも空には見えす若草の露にしらるゝ夕くれの雨

春雨に霞もふかく成にけり立そふ雲の夕くれのそら

くもりけり夕への雲をかすむかと詠る程に春雨そふる

庭春雨

春雨はかすめる雲にふりくれて音しつかなるのきの玉水

若草のみとりをこえて庭たつみなかれもゆかす春雨そふる

我庭はまつへき花のなきまゝにさひしさつらき春雨の比

もえそむる尾のよもきのわか葉より露けさみゆる春雨の内

櫻

この下のこけのみとりもみへぬまて八重ちりしける山櫻哉

花

白雲とあたにもいはし山さくらよそにみる名の立もこそすれ

一枝もおらてかへらはふる郷に花みぬ物と人やおもはん

尋花

咲ぬやとこえ行峯の山櫻霞にかゝる雲たにもなし

栽花

植かへん我宿とやさくら花うへて千年の春をまたまし

花處々

たえ／＼に雲こそかゝれ山櫻さけるさかさる猶しられて

初花

けふ櫻さきそめぬらし吉野山みしこともあらぬ雲の色哉

盛花

けふみすはかひなからましちりもせす咲ものこらぬ山櫻哉

見花

うつろはて猶みる色にしるきかなさかりは花の日数なりけり

をのつから染る心も色見えは花にや我をあはれとおもはん

櫻はなあかぬ心のあやにくに見ても猶こそ見まくほしけれ

翫花

色にそみ匂ひにうつる我こゝろ春はさなから花になりつゝ

依花待人

咲花の梢に宿のよそよりもみゆらん物をとふ人もかな

都人いつかとはんとふる郷の花のあるしにまかせてそふる

折花

みぬ人のためとて折は山櫻あかぬ心を花にたゝまし

ちらぬまにしはしかさゝむ櫻花折てにゆるせ春の夕風

あかすともをしてこそみめさくら花を近人の名にかさすらん

交花

いとゝしくあかぬ心も山さくらなれてしらるゝ花のかけ哉

今いくか春の山へにましりても花の色にはあかすあらまし

山花

あらし山千本の櫻たねしあれは吉野の春の色に咲也

老の身にくるしき山の坂こえて何とよそなる花をみるらん

庭花

花みてもかひこそなけれたらちねの春なしらせぬ庭の教は

夕花

夜のほとに吹嵐のあるやとて夕はいとゝ花をみるかな

夜花

せめてたゝ花のさかりのほとはかりかすまて照せ春の夜の月

禁中花

をる人をわきていさめん九重のみはしの花に風はふくとも

雲の上に立そふ色も九重のみはしの花は今さかりかも

峯花

月殘るみねの木末は明やらて風にわかるゝ花のよこ雲

谷花

今そみる谷の老木の櫻花風たにしらて春やへぬらん

さそひくる花はいつくの花ならん谷には春もよその春かせ

杜花

山吹木末ははるもなく成てをみれ花さく杜の下草

山家花

心たにとまらはすまん山里にのかれえぬ世を花にまかせて

みよしのゝ山のかひとそ詠つるわれとは植ぬ庭の櫻を

閑居花

人とはぬ春やむかしの宿の花我身ひとつの友とこそみれ

み吉野や花みんとてのかくれかに山のあなたをとふ迄もなし

花交松

高砂の松にかゝらぬしら雲はおなし尾上のさくら之けり

社頭花

神もさそ小鹽の山のみつかきの久しくみせよ花のさかりを

さそひゆく風にもあへすうつるなり神のいかきにさける櫻は

榊葉にかゝるしらゆふ打なひき風しつかなる花のいろかな

古寺花

初せ山尾のへの花はちりはてゝ嵐に殘る入あひのかね

吹風ものとかなれとははつせ山花のためにや猶いのらまし

池邊花

吹風もをさまれる世にすむ池の花のかゝみはいつもくもらん

瀧花

石はしるたきつ岩ねの櫻花落てもあはのかすまさりつゝ

落花

いたつらに雪とふりぬる山櫻けふたつねてもよるかひそなき

いつよりかさそふ嵐の吹そめてちるといふその花にそひけん

枝をたにならさぬ風の心もてさそはし物を花のちるらん
かくてたにしはしやみまし消かての花の雪ふる庭の木のもと

山路落花

ちらぬまはこゆへかりける山路とも跡つけかたき花に社しれ
雪とふる花にしほりもうつもれて又ふみまよふ春の山道

歸鴈

玉章のうはの空なる跡みへてあくる雲まの歸るかりかね
春をへてかへりなれたる古鄕にまつへきものと鴈や行らん
かへるかり都の春にいつなれてありなは花のうきをしるらん
春ことに別はいつもしたへともあひも思はてかへるかりかね
かへるらん行衞もしらぬ明ほのにたのむの鴈の空ふかき北
春のかりかへる道にし立ぬれはとゝめもあへす遠さかりつゝ
過ぬなりかすむ雲路の春のかり消行程を面影にして
今はとてかへる雲路になく鴈はたか爲おしき名殘なるらん
よしさらはわかると人に見えぬまて霞もはてよ春の鴈金

夕歸鴈

深山へや夕の雲に音をそへてをのれも歸る春のかりかね

夜歸鴈

夢ならて夜より先はあひもみし立歸る夜の衣鴈金

曉歸鴈

これも又うしとそ思ふ有明の月にわかれの歸るかり金
あけてみぬたか玉章もいたつらにまたよをこめて歸鴈金

歸鴈幽

歸かりかすみのよそに鳴すてゝほとは雲井に遠さかる哉

雲雀

春の野のまたわつかなる草はかり空まてあかる夕ひはりかな

野雲雀

夕ひはり霞かくれに聲はして日かけのとけきあはつのゝ原

雉

草のはら霞もふかき春の日にありかそしらぬきゝす鳴之

岡雉

夕日さすむかひの岡になく雉聲よりくるゝ山かけの庵

喚子鳥

こたへする人なき山のよふこ鳥ひとりなきてや春を過らん

春駒

をしなへてみとりに歸る春のゝに草はむ駒やあれまさるらん
をのれとやはなれもやらぬ若草に人はつなかぬ野への春駒

苗代

をちこちのなはしろ水にせきかけて春行川は末そ別るゝ

山田苗代

たれかして山田に立るますらをか苗代水は心きよしな

路苗代

しつのおかあせのほそ道水こえてなはしろ小田にかはつなくなる

蛙

うき草のねをたえてなと清水のおとなし汀にかはつ鳴らん

もろこゑにいたくなゝきそきくはうつ池の蛙とも

夜とゝもになみの下にてなく蛙何ゆへふかき恨なるらん

田蛙

苗代の水の小山田かゝりてゆふかはつなくていとなき

雨蛙

雨しけき田のきはにあれしけきつはなすしりの音のみして

立かへり猶ふる郷にすみれさくまかきのくれに春風そ吹

籬菫

むかしたれこゝにすみれの花はかりまかせたる跡の垣

菫菜

野人のつゝむすみれの花かたみあかなふ色やうそにたすらん

躑躅

日をさふると山のつゝし照したてるかけは花の色かも

いさゝこか江そふの色とみてなつさはれぬるいはつゝしかな

杜若

咲ぬれはうつれる池のかきつはたたのか影をもへたてさり鳥

款冬

とふ人のなきやとよりや山ふきの心といはぬ色はみゆらん

岸根に咲見人にこととへはこたへぬ色にさけるやまふき

款冬露

行春の関をうらしといはれ共露やはおかぬ山吹のはな

きてもみよ春かせふかはちりぬへき露よりさきの山吹のはな

籬款冬

草ふかきまかきにさける山吹をいはぬ色とやとふ人もなし

咲てこそ思ひも出れ山吹のもとのまかきはあとゝしもなし

古寺款冬

口なしといはれはこそおもはすことにこたへしものゝ庭の山吹

池款冬

春ふかき池の心のそこまでもいはれは知らぬ山吹のはな

藤

いかりこし心のすゑを猶かきのみなみにかくる花のふちなみ

常のはかりもしるし池にすむをしのはかひにかゝる藤浪

咲かゝる桁の藤のむらさきにつれたき松も色かはりつゝ

岡藤

時わかすさきてをかゝれ夕月夜さすやおかへの松の藤浪

池藤

水の面にうつるを花のあるとみて咲より惜む池の藤浪

ふる郷の池の藤なみ立歸りみるへき春をかけて待かな

岸藤

住吉のきしの松かえふりぬれと春を忘すさける藤なみ

松上藤

みとりなる梢の藤の花かつらいく春かけて松にさくらん

古しへは猶さきまされ君か代をまつにかゝれる北の藤なみ

松かえのそのかみとりもうつもれて紫ふかき池の藤なみ

暮春藤

よしさらはしひてもおらん藤の花殘らは春をかたみとをみん

をしめともうつる日數に行春の名殘をかけてさける藤たみ

暮春

ゐにかへるふるすをいそく花鳥のおなし道にや春も行覽

惜むとてくるゝ日數のとゝまらは猶いかはかり春をしたはん

今はたゝのこる計の日數こそとまらぬ春のたのみなりけれ

年ことにけふの根にかさなれと猶つれなくもくるゝ春かな

したへともうつる日數に春くれて心のはなもとまりやはする

暮春月

花ちりし山の尾上の春の色をかすみて殘す有明のつき

暮春雲

行春の道をもかくせちりはてし花のかゝみの峯の白雲

暮春霞

春の色に今いくかあらはくれはとりあやなし霞立も殘らて

三月盡

花鳥のさきたつかたにさそはれてけふやとまらす春も行らん

あすはよもかたみともみしやよひ山けふたに花の跡の白雲

閏三月盡

ちりのこる後のやよひのやへ櫻かさなる春の花とこそみれ

夏

首夏

庭の池にかつしけり行あしつらの一夜に夏をへたてける哉

なにしかも花の色にしそめてけん袖の別の夏はきにけり

きのふかもかすみし物をあまつ空てる日の色に夏はきにけり

首夏朝

ひとへなるうすき袂のからころもけさ立かへて夏はきにけり

更衣

よしさらはぬきたにかへん花衣今はあたなる春のかたみに

花の香も昨日と思ふに夏ころもころもへすして立そかへぬる

朝更衣

なれ行もあたなる花のうき世とやそめし衣を今朝はかふらん

よとゝもに春のわかれをしたひきてあくれはかふる花染の袖

櫻色の衣にけさの袖ふれて猶うつりかに春やとめまく

殘花

夏山の青葉にましりさく花や春にをくるゝこすへ成らん

餘花

吉野山あを葉にましるをそさくら夏と春との色は見えけり
ちりのこる花かあらぬか夏山のあを葉の下にかゝるしら雪

新樹

よしさらは青葉にかゝれ峯の雲春にをくるゝ花かともみん

卯花

すむ月のかけかとみれは卯花の色より外は夕やみのそら
みるからにすゝしからまし雪とのみまかひもはてよ宿の卯花

籬卯花

卯の花のさけるまかきに影とめて空にしられぬ夏の夜の月
うの花のさけるあたりや夕くれのまかきの山の月とみゆらん

路卯花

卯の花の咲るあたりや夕やみの道はつねにもまよはさるらん

夜卯花

卯花のあたりを月のすみかにてよそのかきねは夕やみの比

葵

今はたゝよそにみあれの葵草猶そのかみをかけて戀つゝ
もろは草かけてわたりしむかしをは神もわするなかもの川浪

郭公

なれたにもかたらひすつな時鳥物おもふ比のよはのね覺を
今はまた聞そめしより時鳥あらぬ心にまたぬ日はなし
山遠き都の空の時鳥いくこゑなきて今かへるらん
なをさりに鳴てや過る郭公まつはくるしき心つくしを
時しらぬ深山かくれはほとゝきす出てさ月のねをや鳴らん
時鳥人もきかすはつれなさをわか身ひとつに恨みさらまし
遠近にはやなきふるす時鳥今は聞てもたれにかたらん

待郭公

なきもせす待もよはらて時鳥くら〔六帖〕へに日かすをそふる
時鳥今はまたしと待かねてねなんこよひや鳴て過なん
名残をは待にもかへんほとゝきす鳴すてゝ行一聲も哉
さりともと思ふはかりに時鳥きかぬに暮夕くれのそら
しゐて猶たのめぬ暮のまたるゝもうはの空なる時鳥哉
暮かゝる雲のはたてのたてぬきに峯のあやをる時鳥哉

尋時鳥

尋入山のかひなきほとゝきす近き音をや猶つゝむらん
一こゑも鳴てしらせよ足引の山時鳥いつくなるらん
尋行山ほとゝきす家つとにかたる計の一聲もかな

聞時鳥

今はまた夜ことに鳴てね覺する人を待けるほとゝきす哉
人よりは猶をそくとも（をそくきくともイ）郭公わか待えんをはつねと思はん
郭公わか待えたる一こゑを心つくさぬ人やきくらん
更るまてまたすは猶や時鳥なかぬになら〔し歟〕てあすもうらみん

郭公遍

さとことになきふりにけり時鳥たかてうらむる人もなきまて

めくみある時しりかほに郭公人をもらさて今そかたらふ

夢中郭公

思ひねの心つくしの夢ちにはみれともきかぬほとゝきす哉

寢覺郭公

時鳥あかつきかけてなくこゑをまたぬね覺の人やきくらん

ねさめして待と知らてや時鳥しのふ初音をもらし初けん

月前郭公

時鳥なかぬ木の間の月影に心つくしのかきりをそしる

雨中時鳥

時鳥夜〔マヽ〕の雨ふる聲に去年の涙や猶のこるらん

曉郭公

つれなくてやまぬ計そ時鳥名殘有明の空の一こゑ

曙郭公

きぬ〳〵のうさもしらしをあまの戸のおし明かたに鳴時鳥

一聲にあけぬと告てよこ雲の外に過行時鳥かな

朝郭公

待あかす今朝しも來なく時鳥心なかさのほとや知けん

いつくよりなきて出らん朝戸あけてなかむる空の山時鳥

夕郭公

僞の人こそあらめ時鳥まつゆふくれの空なすこしそ

五月郭公

いたつらにはつね程ふる時鳥待とせしまに五月きにけり

身をなけくなみたは時も別れぬに五月ときなく時鳥哉

山時鳥

さらに又待と告はや一聲を鳴ていなはの山ほとゝきす

里郭公

いく里の夢を殘してほとゝきすかたらふ聲のとをさかるらん

原郭公

み山をは今や出らん時鳥すそのゝ原のむらさめの空

なには人まち戀ぬらん時鳥來てもとはなんこひの松原

盧橘

うたゝねのとこよをかけてにほふなり夢の枕の軒の立花

軒近き花橘のにほはすはかたみや遠き昔ならましも

故郷橘

立花のにほはさりせはふりにける昔なからの宿もしられし

早苗

日數へて田子のもろ聲聞ゆなり今日にやつきぬ早苗なるらん

早苗多

ぬれまさるたこのもすその水なみに立つゝきてもとるさ苗哉

みしふつき猶とりやまぬ早苗哉たこのさ衣日數かされて

菖蒲

涙そふおいの袂にひきかへてけふはあやめのねをゝかけまし

池菖蒲

をのつからひく人あらは池水に生るあやめのねにはなかしを

簷菖蒲

山かつの軒の忍ふにみたれつゝあやめも分ぬ五月雨の比

五月雨

漕舟の入えのあしも水こえてさほにそさはる五月雨の比

五月雨久

五月雨は所〳〵に瀧落てみぬ山川のかすそそひ行

みよしのや雲をかさねて五月雨の一日もはれすふる瀧の空

夜五月雨

五月雨の雲行月も此比は雲のあなたにはれまゝつらし

はれやらぬ雲より影はもらねとも月にはしるし五月雨の空

故宅五月雨

はれまなき程にも過てふる郷の軒は朽行五月雨のころ

茂りあふしのふの露の五月雨にいとゝふるやの軒や朽なん

浦五月雨

たこの浦や日数かさなる五月雨にたゝぬまもなき空の波哉

浪かくる松のしつえも朽ぬへし日数つもりのうらの五月雨

水鶏

つれもなきたか槙の戸をあくる迄たゝきもすてぬ水鶏成らん

夜水鶏

夜にそくゐなはたゝくまきの戸のさしもとはれぬ宿のね覺に

照射

五月やみ誰にともしのみゆる哉をのへやしかの立となるらん

鵜河

う川たつせゝの岩波よる〳〵はさなからうきてかゝりさすこ

たきすさふ河せのかゝり影更てくたすう舟や又のほるらん

蚊遣火

月みしとたつる煙か心なきしつかふせやの夜半のかやり火

いとゝ猶わ〔[illegible]〕はふ里に夕けふりまた立そふるかやり火のかけ

螢

夏山の木のまたたとる夕やみに心有てもとふほたる哉

池螢

飛ふ螢もそこそやまれ池水のふかき思ひはけつかたやなき

みれはなくうつろふかけもおほさはの池の玉もに飛ほたる哉

浦螢

あまのたく浦のあし火のよる〳〵は浪にもゆるや螢なるらん

澤螢

いさり火の影かと見えて里のあまのこき出る舟の螢とふ之

谷螢

うきふしのなくはもゆへき思ひかは澤への蘆のよはの螢も

谷ふかくもゆる螢やよの中のうきたひことのおもひ成らん

水邊螢

まし水のをと斗きく庭の面に影と共にも行ほたるかな

もえて行思ひをこへす澤水やよるは螢のかゝみなるらん

飛螢さそはぬ水のあたりをも我かけとてやはなれさるらん

蟬

夏山の梢もたかく鳴せみはなか〳〵こゑそかすかなりける

樹陰蟬

夏ふかくしける木かけに鳴せみの聲も涼しき庭の夕風

夏草

しけり行草は夏のにふかくとも道ある代には人もまよはし

夏草のしけみになれは吹わくる風も跡なきのへのかよひち

夏草露

夕立のなこりの露に秋かけてなひくもすゝし庭のさゆりは

澤夏草

うちわたるあさ澤水のかけをたによそにへたてゝしける夏草

庭夏草

分なれぬ人はいかてかとひもこんわれたにまよふ庭の夏草

草花露

しはしたゝはらはてやみん白露のおくる朝のとこ夏の花

ちりならてまたやはらはんとこ夏の花のまかきにをける白露

庭瞿麥

紅の色こそまされ夕つくひさすやかきねの山となてしこ

たらちねのむかしは我もなてしこの庭のをしへそ露も忘ぬ

蓮

うき世にはきへなは消ぬ蓮はにやとらは露の身とも成なん

夕顔

咲てこそ人にとはるれ夕かほの花はいやしきかきねなれとも

夕立

くもりつるたゝ一むらの跡みえてまたなこりなき夕立の空

夕立の過つるかたの山のはになこりほのめくよひのいなつま

吹なくる風はかりにて夕立のよそにすくるも涼しかりけり

遠夕立

夕立をそなたとみせてほのめくはとをちのそらいなつまの影

河夕立

一しきり山路にしつる夕立の過てそにこる谷川の水

夏曉

月殘るね覺の空の時鳥さらにおき出てなこりをそまつ

夏山

夏なれと木々のするをもりかねて月こそさはれは山蔭山

夏朝

よひ〳〵にうらみなれぬるつれなさをけさはかたらふ山時鳥

夏月

みるまゝに涼しかりけり夏のよの月にも秋のかけやそふらん

うたゝねの夢よりも猶ほとなくてみはてぬ月の明る比かな

夏山のしけき木のまをかことにて見る空もなくあくる月かな

水上夏月

手にむすふいはゐの水に影とめて月もや夏をわすれはつらん

樹陰夏月

しけりあふ庭の木すゑを吹分て風にほのめく夏のよの月

氷室

夏衣立よる袖やうすからし山下風もさゆるひむろに

泉

涼しさは水の心にまかせけり秋をともにはせきいれねとも

納涼

くれ行は松かけ涼しみなそこにかよはぬ秋もくみてしる迄

よとむとてさのみはせかし山水のいはもる音そ涼しかりける

夕納涼

吹わくる風に夕日の影もりて涼しくなひく窓の呉竹

樹陰納涼

山風も身にしむまてはふかねとも秋をもほゆる松のかけ哉

夏秡

けふといへは麻の末はの霜のまにちよの数そふ御秡をそする

六月

過來つる夏の日数のはやせ河みそきにつけておとろかれつゝ

秋

立秋

秋のたつあさけの衣うちつけてやかて身にしむ風の音かな

立秋朝

いつしかと草葉にあまる朝露のおき出てみれは秋そ來にける

立秋日

せみの羽のこすゑに薄き夕日影さすかに秋とけふは見えつゝ

初秋

いつも吹おなしときはの松かせはいかなる音に秋をしるらん

露結ふけさも扇はをきやらて我手よりなる秋のはつかせ

けさのまはまた音きかぬ風たにも身にしむ秋そ驚かれぬる

初秋風

白露のをきいるけさと思ふまに立て涼しき秋のはつ風

おきのはの末こす風の音よりそほのかに秋を聞はしめける

初秋曉

吹風のきのふもけふもかはらねと身にしむ音に秋そしらるゝ

曉のね覺の床に露そをく枕も今や秋を知るらん

初秋露

老か身は涙の露のいとゝしくこほれやすきに秋そしらるゝ

初秋雲

こゝねふるよのまに秋や立ぬらん昨日はかゝる雲の色かは

七夕

雲ゐより雲井をあふく星合に思へはとをし天の川波

天河空にこそしれたなはたの暮を待まの秋の心を

彦星のまれにわたれる天川岩こす波の立なかへりそ

待七夕

織女に心をかして天の川けふの逢せは我そまさ（た歟）るゝ

あふことはけふと思へと七夕のくるゝ待まの心をそしる

七夕雲

あはぬ間に恨もはては七夕の雲の衣をけふはかさねし

よそにてもみまくほしきを七夕のあふよの空は雲なへたてそ

七夕露

彦星の行あひを待袖よりや秋は露けきならひ成らん

秋をしる七夕つめの袖の露こよひもほさぬ涙とやみん

七夕霧

神代よりへたてゝをきし恨さへけふこそはれめ天の川霧

明すしもあらぬ物ゆへ星合の空にへたつるあまの河霧

七夕橋

天の川わたせる橋の紅葉ゝにたえぬ涙の色やみすらん

七夕衣

七夕の妻こひ衣かへしつゝやあはぬたえまは夢を待らん

七夕河

たなはたの心をよせていそくらしけふのあふせの天の川なみ

天河あふせはしはしよとむともなかれてふかき契りそけり

七夕草

苔のむす天の河との岩枕いく夜結ひし契なるらん

七夕鳥

神代よりいなおほせ鳥にみなれてや織女つめも契そめけん

うきなからいひはなたぬ契りにて秋をかけたる鵲のはし

七夕絲

あひみても猶行すゑの契りをや結ひかさぬる七夕のいと

七夕舟

かへるさのあまの河舟かちをたへたとる波路に袖しほるらし

ひこほしのあまの川舟よせぬまは思ひこかれてつまや待らん

秋風

夕されは露もをきあへすあさちふのは末をしなみ秋風そ吹

露

いつくよりをくともしらぬ白露のくるれは草の上にみゆらん

聞をきしことの葉ことにわすれぬは庭のをしへの秋のしら露

秋露

すゑなひく千種の花の色をそめすかたをなすも秋の白露

曉露

月のもるねやの板間に露みえてねさめよふかきよもきふの宿

草はより猶そしほるゝねさめする袖をときにや露はをくらん

秋夕

いかなれは秋のならひをさしもやと思ふにも猶すくる夕くれ

ひたふるに心なき身の秋ならは夕の空に物はおもはし

秋きてはかはる草木はさもあらはあれその事となき夕暮の空

野徑夕秋

から衣すそのゝあさち分行ははや風立ぬ秋のゆふくれ

朝草花

白露のをきあへぬまにうつるかなあくる朝戸の秋はきの花

白露のをきそめしより朝な〳〵咲そふをのゝ秋はきのはな

草花露

露をもる小萩かすゑはなひきふして吹かへす風に花そ色そふ

萩

きけはまつ物を思ふもかなしきに萩のはよきよ秋の初風

萩風

おのつからはかなき夢もゆるさぬは萩吹風やうつゝなるらん

身にもしみ音にもとめて萩のはにやすくは過ぬ秋風そふく

萩

さても猶咲ちる色やあたならん露のしからむ秋はきのはな

萩露

萩の枝にをきあまれにや秋の露わくれは袖に色とまるらん

宮きのにうちはへて咲秋はきの枝よりあまる露やなからん

女郎花

白露や心をくらんをみなへし色めくのへに人かよふとて

野女郎花

女郎花はなの心のあたし野にいとゝなひけと秋風そふく

女郎花靡風

一かたになひくともなく女郎花おほかるのへは秋かせそふく

薄

のへことになひけはとても花薄袖をたのみてくる人もなし

山鳥のなにおふおろのはつお花したりてなひく秋かせそ吹

岡薄

わたつ海のなきさのをかの花薄をよはぬ波も立迷ひつゝ

行路薄

旅人の野へのゆきゝはしけからて隙なくまねく花薄哉

苅萱

言の葉の出るわか名をかるかやのみたれはつへき家の内かは

蘭

さきにけりたかぬきかけし蘭きてこそとはめにほふ限は

戸外槿

山かつの柴のとさしの明ぬれは露もをきける朝かほの花

葛

露なから色かはるより秋風の吹をうらむるのへのくすはら

鴈

秋霧の空にへたてゝきなくなり日も夕くれのころもかりかね

朝ほらけ霧にしほれてくるかりのつはさに結ふ露の玉つさ

初鴈

天河秋のみふねの立かへりまたとわたるとみゆるかりかね

かた山のはゝその梢色つきて秋風さむくかりそ啼なる

曉初鴈

うつゝとも思ひそわかぬほのかなるね覺の空のはつ鴈の聲

初聞鴈

秋風の吹とせしまにさそはれて空にそきなく初鴈のこゑ

月前聞鴈

さしのほる月のみ舟やいそくらしからろかすそふ秋の鴈かね

霧中鴈

過やらてかりそ聞ゆる夕霧のふかきみ空に道やまとへる

雲間初鴈

夕日さすたえま計はほの見えて雲にまきるゝ鴈の一つら

深夜鴈

鳴かりの聲聞時のたまくらに夜ふかき露や涙なるらん

遠初鴈

かきりなく遠く越路の旅なれや都にをそき秋の初鴈

遠近初鴈

我宿のわさ田かりかねいつしかと雲ゐをわたる友よはふなり

鶉

しけきのとあれはてにける宿なれやまかきの萃に鶉なく也

野鶉

から衣すそのゝま萩かつちりて日も夕風にうつらなくなり

鴫

くれ竹のふしみの里にふす鴫の床もよさむに秋風そ吹

澤鴫

秋いくは澤への芦のうきふしも猶数まさる鴫の羽かき

鹿

をしかなく山鳥のをのなかきよを獨ねかたき妻やこふらん

曉鹿

別てふことをはしらぬさをしかも鳴てやよそのね覺とふらん

夜鹿

なよ竹のなかき夜すから鳴鹿はをりつゝあらぬ妻やこふらん

をのれさへたのむよ比や深ぬらんひとりねかたく鹿も鳴也

野鹿

山かけやすそのに近く家ゐしてをしか妻とふ聲なれにけり

原鹿
みちのくのまのゝかやはら鹿そなくなひかぬ妻を面影にして

虫
こぬ人をわれとはまたて松虫のこゑにまかする秋の夕くれ

夜虫
秋ふかき夜さむの霜もふりはてゝ鳴よりよはるすゝ虫のこゑ

籬虫
夜寒とは思はぬ閨のきり〳〵す壁まてきてもねをのみそなく

庵虫
をのかねはうらかれまさるきり〳〵す草の籬やよさむ成らん

庭虫
野原なる草のいほりの夕露にたれにとへとか松むしのなく
かりねする草の庵の夜もすからところもさらぬ虫の聲哉

閨虫
古郷やとはれぬ庭のあさちふにかれなてたれを松虫のこゑ

駒迎
むくらはふねやのいたまは明やらて虫の音よはる秋の篠目

月
ひきかへて閨の戸さゝぬ君か代にいつ逢坂の望月の駒
秋そかはる月と空とは昔にて世々へし影をさなからそみる
くるゝまの空に光はうつろひてまた峯こえぬ秋のよの月
なれてみるおなし光の月のみや六十の秋の友となるらん
月の色も秋にそめなすかせのよのあはれうけとる松の音哉

秋月
足引の山のはたかく成にけり嵐のよそにすめる月かけ

初秋月
風わたる天つ雲ゐのよはの月いつしか秋の影やそふらん

八月十五夜
かそへねとこよひもしるき水の面に光をそへてすめる月影

立待月
人しれす待たてる哉足引の山とりいつるかつらおとこを

居待月
花すりの衣そ露にぬれにける月待よひの旅の芝居に

曉月
うき身世に猶有明のすみ佗てつれなしとこそ月もみるらめ
にしになる影は木のまにあらはれて松のはみゆる有明の月

山月
月のすむ水分山は雲晴て神さひまさる峯の松かせ
ときは山かはる梢は見えねとも月こそ秋の色にいてけれ

水邊月
よもすから空をうつして行水になかれてふくる月のかけかな
村雨の過行空は雲晴て月すみまさるよとのさはみつ

水上月
月やとるいしまの水をむすふてに秋のなかはを數へてそしる
禁中月
いかならんよゝも忘れし九重の秋の雲居になるゝ月かけ
社頭月
今も猶同し光のへたてぬは神代の月のいつもやへかき
庭月
更行はかきねかくれもあらはれて庭にみちたる秋の月影
霧
暮かゝるふもとはそこととみえわかて霧のうへなる遠の山のは
しのゝめのよこ雲なから立こめてあけもはなれぬ峯の朝霧
山路霧
雲よりも跡をそうつむ朝ほらけ霧たつ山の秋のかよひち
秋山
ふかくなる山路の秋をたつぬれは木のは時雨てさをしかの聲
秋田
山田もるかりほの庵に露ちりていなは吹こす秋の夕かせ
打なひく田面のほなみほの〳〵と露ふきたてゝわたる秋風
田家秋興
秋の田のかりほの庵の遠近にいとひもあへす鹿そ鳴なる
擣衣
むは玉の夜は長月のかけのうちに秋さり衣をとをたてつゝ
霜のうへにおきゐるしつや夜さむをも我のみしると衣うつ覽
夜擣衣
岡のへの松を秋風ふくるよにこゑうちそふるしつかさ衣
聞擣衣
今よりのね覺の空の秋風にいかにせんとて衣うつらん
月前擣衣
あくかれて月みるほとの心にもよさむわすれすうつ衣哉
遠擣衣
住人の有とも知ぬおく山の嵐のつてにきぬたをそ聞
菊
初霜のをきあへぬ色もかはりけり露の籬の白菊の花
うつろへはあたなる色の露霜に咲よりまかふ庭の白菊
菊帶露
いとゝしくうつろひやせん色そむる時雨の跡のきくの白露
菊霜
なか月の有明かたの露のまに霜をかさぬる庭の白菊
菊露
をく露もあはれやかくる庭の菊此花までとむすふ契りに
紅葉
いくしほそ露も時雨もくれなゐの色こき迄と染る紅葉は

初紅葉

をく露に下葉はかりは色付て時雨をいそく神なひの杜

山紅葉

たてぬきにをらぬにしきや山姫のおくさにそむる紅葉之けり

一しほは露のそめにし山の色のまた時雨そふなか月の比

行路紅葉

山わゆく袖さへ秋の色にいて〻ぬ木々の紅葉に嵐吹比

暮秋

あらし吹山の木のはの空にのみさそはれて行秋の暮かな

九月盡

きのふこそあすもあれはと思ひしか暮かたなくくる〻秋かな

歎こしたゝの思ひも行秋のなこりひとつにくる〻けふかな

九月盡

秋よたゝ物思ふ身のかきり共けふのこよひのわかれにそしる

冬

初冬

音たて〻梢をはらふ山かせも今朝よりはけし冬やきぬらん

初冬曉

木のはちる風にこたふる鐘のをとに冬とはしるし曉の空

初時雨

ふきぬと今たに染そ初時雨秋にはもれし山の木末を

時雨

風に行たゝ一むらのうき雲にあたりはしはれてふる時雨かな

山時雨

夕日さすたかねの雲は晴なから山もとめくる時雨かな

峯時雨

立迷ふ雲のたえ間にほの見えて時雨か出る嶺の月かな

嵐吹みねのうき雲とにかくにたちさためぬふる時雨かな

旅宿時雨

から衣はる〳〵きぬる旅ねにもいくたひとなく袖しくるらん

落葉

今よりの霜待えたる冬のはの心よはくもちるなかたかな

散はつる後さへあとをさためぬは嵐のすゑの木のはなりけり

をのつからふかぬたえまも嵐山名にさそはれてちる木のは哉

曉落葉

ありまかふ木の葉に空のくもられは時雨残れる有明の月

朝落葉

散迷ふもみちを空に吹たて〻朝日時雨る〻嶺の木枯

雨後落葉

むら雨はれつる跡の山かせに露よりもろき峯の紅葉は

山落葉

吹おふみねの木の葉は遠近のたつきも見えぬ山風の音

庭落葉

ちりはてゝ後さへつらき嵐哉庭の木の葉を又さそひつゝ

寒草

かれ殘る冬野のお花うちなひきたか手枕も霜やをくらん

野寒草

まくすはら露はのこらぬ冬枯にあられ玉まく野への夕かせ

秋の色もはてなくみえしむさしのゝ草はみなから霜枯にけり

原寒草

冬枯や朝けの霜も白妙の袖に色なきまのゝ萩はら

寒蘆

なにはかた入江にさむさ夕日かけのこるもさひし蘆の村立

池寒蘆

なにはえや蘆のよな〳〵霜こほりかれはみたれて浦風そ吹

冬木

木のはなきむなしき枝に年くれてまためくむへき春そ近つく

冬鐘

吹さゆる嵐のつてのこする〔マヽ〕にまたは聞えぬあかつきのかね

霜

夜をさむみ夢もよそなる手枕に霜のみ結ふ床のさむしろ

冬草のうへ計にはをかれともむら〳〵みゆるけさの霜かな

庭霜

しほれはや霜のふるはのあさちふにかれぬ嵐も音そさむけき

草霜

霜さゆるのはらのあさち秋風になひきしよりも色かはりつゝ

岩まよりもりこしたにもたえ〳〵にみし山水は氷りはてつゝ

田氷

閉初し山田のひたも音絶てあせもる水そ又こほり行

河氷

とちはてぬ水一すちの道見えてあたりはこほる冬の山川

けさよりは下ゆく水もせたえして音もきこえす氷田川

瀧氷

み吉野やこほりてたゆる瀧の糸のよるはすからにさゆる山風

池氷

をし鳥のよとこの池のうき枕こほらぬ水のひまもとむらし

冬月

さゆるよに衣もかたらてとこの霜袖のこほりに月やとるらん

ふりまさる我もとゆひの霜のうへに氷て月の影そあらそふ

冬曉月

さゆるよの雪けの空の村雲を氷りてつたふ有明の月

冬雲月

吹まゝに雪も木のはも晴のきて嵐にさゆる冬の夜の月

冬夕山

さゆる日の時雨の後の夕山にうす雪ふりて雲そはれ行

千鳥

立かへり跡もさためす夕浪のあらきはまへになく千鳥かな

うら風のさはけはさはく聲たてゝ浪とゝもなるさよ千鳥哉

曉千鳥

なるみかた有明の月の入しほに浦浪とをく鳴千鳥かな

夜千鳥

かたしきの袖のみなとのさよ千鳥夢の枕に聲さはく之

濱千鳥

吹上や夕なみあらき鹽風にみきはの千鳥跡そ亂るゝ

うら風の入しほ高く吹こせは空に聲して行千鳥かな

しほ風のさゆる浦はの浪の音に聲うちそへてたつ千鳥哉

水鳥

氷るまはうへたにさむき池水にすむにほ鳥の下くゝるらん

池水のつらゝの枕とこさえてひとりやをしのよはに鳴らん

池水鳥

をし鳥のならひの池やこほるらん更るにつけて聲しきる之

池水につかはぬをしはれぬなはのくる夜もなしとねをや鳴覽

夜網代

さゆるよも氷はゝらすはやきせにひをも淀よる宇治の網代木

鷹狩

箸鷹のとかへる山のかへるさにをきへさしあへすいそく狩人

椎柴のなれはまさらぬあら鷹をけふも狩場にあはせかねつゝ

神樂

明かたになれともよはの庭火なはそへてそうたふ朝倉のこゑ

夜神樂

立かへる雲ゐの庭の神あそひいと竹のねも月にすみけり

霰

聞のうへはつ〔ら歟〕られる雪に音もせてよこきる霰まとたゝく之

竹霰

をのつからあられの音のたゆむまも嵐にそよく窓の呉竹

雪

たか砂のおのへのあらし吹ほとはふれと積らぬ松の白雪

ふみわけん我あとさへにをしけれは人をもとはぬ庭の白雪

久かたの空につもるとみゆるかな木たかき峯の松の白雪

やたの野にうち出みれは山かせのあらちの峯は雪ふりにけり

初雪

降そむる今朝たに人のとひこねは憂身そいとゝ雪にしらるゝ

霜かれの草にやつるゝふる郷にけさ初雪のめつらしき哉

夕雪

くるゝまてしはしははら〔らは歟〕ぬ竹のはに風はよはらて雪そ降しく

夜雪

空は猶また夜ふかくふりつもる雪の光にしらむ山のは

積雪

いくへとはわけてもしらしあらち山雪とかさなる峯の白雪

山雪

おのつから時雨しまてそとをは山名もうつもれてふれる雪哉

野雪

秋わけし袖ともえやは宮木の丶ふる枝の萩の雪の花すり

雪山成道

しるへする雪のみ山のけふにあひてふるき哀の色をそへぬる

河邊雪

ふりつもる雪をかさねてみよしの丶瀧つ河うちに來る白波

松雪

山をろしの梢の雪をふくたひに一くもりするまつの下かせ

都雪

立かへる君しみやこの雪ならはふりにし道はたえもはてしな

禁中雪

九重やとよのあかりのさゆる夜は雪にそすれるをみの衣か

庭雪

けさはまつともなふかたにさそはれて人をもまたす庭の白雪

炭竈

炭かまのけふりに春をたちこめてよそめかすめるをの丶山本

炭竈煙

ますらをかすみやく比そ煙たつをの丶山里にきはひにける

爐火

きえすとてたのむへきかは老か世のふくるに殘る閨の埋火

神樂

月の入天の岩戸の明かたに神代おほゆるも丶末のこゑ

椎柴

時雨つ丶ふく山風に椎柴の枝はなひけと色はかはらす

佛名

年毎にとなふるとのたえはこそ三世の佛の御名は忘れめ

年内早梅

いと丶又花ともわかす白雪のまたふるとしにさける梅かえ

歳暮

いそちあまりくる丶と思ひし身の上に又かへりける年の暮哉

夜歳暮

おしめともとまらぬとしは吳竹の一よ計になりにける哉

惜歳暮〔[illegible]〕

おしましなうち身につもるとしなみも又立歸るならひ成とは

戀

初詩絲戀

人の爲人め思ふそくるしきや身ひとつならは身をも捨まし

ことのはゝいはしと思ふにしたかふなと心なき涙なるらん

忍久戀

いつまてかかくはつゝまん袖にのみとし月たえすかゝる涙を

せきかへす心ひとつはおもひ川いくとしなみの下にくちなん

とし月のふり行まゝにつゝめ共袖にもつもる涙なるらん

忍不逢戀

松かえのなひかぬ色はつらくともをとにたてそ山の下かせ

心よりさはるはしらて人めのみもりえぬ中とまつなけきつゝ

初言戀

今こそは思ふあまりにしらせつれいはてみゆへき心ならねは

聞戀

たへてしもつゝみはてしと歎ても昨日はみえし袖の色かは

見戀

よしやたゝあらやの里の夏の日にうきてよるてふその名斗は

いかゝせんあやなくけふといふ程の行ゑもしらぬ中に戀つゝ

見不逢戀

いもせ山中なるたきの音にのみきかぬ斗をなをやたのまん

祈戀

つれなさもよしや祈らし神たにもうけすは後の頼みなけれは

われはかり祈そかくる神かきに引しめなはのなかきちきりを

いかにせん神たにうけぬみそきしてかこつかたなき中の契を

祈遇戀

ちはやふる關もる神にたむけしてこよひそこゆる相坂の山

不逢戀

とへかしな雲のまてかたきのみやにまつに命の存命へもせん

人も又わかつれなさをなけくやと同し世にあるむくひとも哉

みぬ人をこふる心やさきの世にあかてわかれし名殘なるらん

初契戀

いひそめて心かはらは中〳〵にちきらぬさきそ戀しかるへき

契顯戀

うつろはぬ契ときくも頼まれすそのことの葉のよにふりしより

契變戀

ちきりしもたのまぬ物を今さらにかはる心のいかてみゆらん

月前契戀

ことの葉そうはの空にもたのまるゝ契りの末を月にまかせて

猶さりのちきりしらるゝことのはにこよひも曇る袖の月かけ

待戀

頼みける心と人のしるはかりいつはりとたにまつときかれん

ふけぬれはせめて頼みのなきまゝに今宵もあすの暮そまたるゝ

うたかはてこの夕くれは待やみんさのみは人も心かはらし

忍待戀

人もつゝみ我も重ねてとひかたみ頼めしよはゝたゝふけそ行

ふけて猶とはれやするとまたるゝは忍ふる中のたのみ成けり

月前待戀

面かけを待いつる月にさきたてゝみる空もなくふくるよは哉

逢戀

とけそむる我した紐はさきの世にたかむすひける契なるらん

初過戀

つれなさにすてし命もおしまれてあふにかはるは心なりけり

稀戀

うきなから恨みぬ程の契にてよな〱かすをかそへふれつゝ

別戀

いかにせんまたよはふかき鐘のをとになこりつきせぬ曉の空

よはゝまたありとも人の心よりいそく別をいかゝとゝめん

曉別戀

鳥のねにおとろかされてしたはすは思ひもあへぬ別ならまし

恨別戀

つれなしと恨そかくるしろたへの袖のわかれの有明の月

なこりをもおしまていそく心こそ別れにまさるつらさ之けれ

增戀

手にふれてのちそしらるゝ梓弓ひくもと末のよるの心は

片思

心かへする世なりともかくはかり我をは人のみやはおもはん

逢不遇戀

今はたゝ身をこそかこてあひみてもかはる心を我とかにして

あふまてをかりはの鳥の契にて又おち草はむすほゝれつゝ

絶戀

はかなくそ有し別のあかつきをこれを限と思はさりける

契絶戀

かはらしと聞しは人の僞りをうきにもえこそ忘れさりけれ

恨戀

つらくともこれを限(恨イ)といひやらんけに身をすては人や惜と

歎わひ人をうらみぬことはりの身にあまるこそ涙成けれ

はては又あまのすむてふ里とへはしるへたに猶身を恨みつゝ

わきて猶かはるはてこそかなしけれつまなかりしも恨なれ共

互恨戀

たれか猶うらみはまさるあまのすむ里のしるへを共に尋ん

言の葉はうきにつけてもなき物をかこつやあさき心なるらん

月前恨戀

人をこそうらみはつとも面影のわすれぬ月をえやはいとはん

遠戀

一筋にたのみこそせめはる〱ともろこしまても心かよはゝ

近戀

かくはかりまちかき中をあしかきのへたてもはてぬ契とも哉

旅戀

たひ衣かへす夢たにむなしくて月をそみつる有明の空

七夕戀

戀衣しほるゝ袖はたなはたにかしてこよひをほす隙にせん

夜戀

よはことに思ひねにみる夢にたに心かよはてあかす中かな

戀月

さもこそは身のならはしの影ならめあふよも袖にくもる月哉

寄日戀

みせはやなさこそは人の秋の日の影となるまてよはる我身を

寄月戀

こぬ人の面影なからふけぬとわれやゆかんいさよひの月

寄星戀

しるやいかにあま夜の星の見えすのみうはの空にも戀渡哉

寄雲戀

君か名のたつにはかなき契りかは身を白雲のかゝる戀せし

伊駒山へたつる中のみねの雲なにとてかゝる心なるらん

吹まよふあらしの空のうき雲のゆきあふへくもなき契哉

あま雲のよそなる中になにとかく心はかりをしゐてかへらん

しられしな風にまかせて行雲のうきかたにのみ消かへるとも

寄風戀

なけくそよ心木の葉とちりはてゝいひしなからも嵐吹比

寄雨戀

雨なみた身をしりかほにふりそへて戀のま袖はほす方もなし

待かぬる涙ににたる夕くれの空かきくもり雨はふりつゝ

寄煙戀

空にたになひくと見えて下むせふおもひの煙たちものほらは

いのれとも神たにけたぬ思こそふしの煙のたくひなりけれ

寄草戀

恨わひたゝそのまゝにほしもせぬ我袖のみやなみの下草

寄菊戀

いつよりかうつる心も色みえんまた身のよそにきくの白露

寄藻戀

あまのかる磯の玉藻の下みたれしらせそむへき波のまも哉

寄鳥戀

はしたかのとかへる山のしゐて猶つれなき色に戀つゝやへん

寄鴫戀

うたてなとにほのうきすの浮沈みたのみしえにもかはる契は

寄山鳥戀

かひなしや遠山鳥のよそにのみしられぬ中にねをはなくとも

寄獸戀

昔たにもねてと頼めはもろこしの虎ふすのへにもゝ夜成とも

寄鹿戀

いもにこひいのれられぬに足引の嵐〔を脱歟〕寒みしかもなくなり

〔と歟〕いもしする夏の丶鹿のねにたてぬ思ひもかくやくるしかる覽

寄猪戀

かひなしな臥猪のかるもかくとたにしらせぬ程の下の乱れは

うき中は名のみかるものかきたえてよそにふすゐの床そ荒行

夢をたにふすゐの床に賴まはやさこそかるものかきたえぬ共

寄虫戀

たえねはと思ふもかなし蜘蛛のいとはれなからかゝる契りは

君にそふ心もいさやかけろふの夕そわきておもひみたるゝ

寄螢戀

よもすからもゆる螢に身をなしていかて思ひの程をみせまし

寄蛛戀

たえぬとてまたすしもあらぬ蜘蛛のいとふにはゆる心とせは

かねてうき心つくしと成にけりたのみをかくるさゝかにの糸

さゝかにのあさひく糸のうちはへてくるゝをそしと賴斗そ

寄蛬戀

獨ねの枕のしたのきり〳〵すなれも秋とてなかぬよもなし

寄蝶戀

今はとてうつろふ花にゐる蝶のあくかれまさる我そはかなき

寄蛙戀

いてはてぬ池の心はしらねともなきて蛙のねをやきかせん

寄玉戀

つゝめ共袖にみたるゝよな〳〵の涙の玉のをゝはたのまし

寄鏡戀

わかれちにいそくつらさをます鏡われてあふへき心とはみす

はては又我面影のかはる世にむかふかゝみもうらみかれつゝ

寄枕戀

ひとりねの涙のしたのさよ枕くちなん後はたれかしらまし

寄衣戀

よしさらは我をふるせる名のみたつ秋さり衣身にはならさし

寄帯戀

今はゝや三重にゆふへきつねの帯のなからふとても哀いつ迄

寄絲戀

あふまての契りもまたす夏引の手ひきの糸の戀の乱は

寄書戀

ことはりの庭のかよひち跡もなしみし玉章もかきたゆる世に

寄硯戀

思ひあまりむかふ硯の水とたにいはすはいと丶袖やぬれなん

寄筆戀

戀しともかきもやられぬ水くきに流て落るわかなみた哉

寄繪戀

さらぬたに誠すくなきあた人を忍にかきてしも形見とやみん

寄扇戀

わか中は秋にあふきの風なれやうき身を人のならすよもなき

寄笛戀

しはしたゝねてもゆかなん笛竹の一よにさへや遠さかるへき

寄箏戀

身にそしむ玉のをことのしらへまて人の心のあきと思へは

寄弓戀

かへりてや恨みもすへき外さまに引はなされしまゆみつき弓

寄舟戀

波あらきみなとをさしてこく舟の心はよれとはてそあやうき

寄筏戀

はや瀬川のほる筏のうき中はとにもかくにもさはりかちなり

寄網戀

人めのみしのふの浦にをく網の心はかりはひくかひもなし

寄篝戀

猶さりにけたはけつへき篝火の煙よなにとくゆりわふらん

寄遊女戀

波のうへにうかれて過るたはれめも頼人にはたのまれぬかは

寄心戀

かひなしやうきになしても一かたに思ひもこりぬ心よはさは

寄涙戀

一すちに心なき身と思へともうきをは袖にしるなみた哉

雜

雲

ふしの山おりゐる雲はたちのほる煙のやかてなるにや有らん

山

天か下くもりなかれとてらすらしみかさの山に出るあさ日は

夕日さす山のはみれはたえ／＼に空行雲のかけそかゝれる

山路夕

谷風は今朝よりも猶山人のかへる袖にそ吹まさりける

山榊

神ち山玉くしのはにをく露のめくみをうくるやまともろ人

杣山

つらき哉山の杣木の我なからうつすみなはにひかぬこゝろは

嶺椿

おく山の八歳の椿八千とせの秋（本ノマヽ）まてと陰そさかふる

澗槇

谷陰やたかせにたねをまきもくの同しみとりを今もみすらん

原

あさちふの露にこはけやそほつらん朝の原にうつら啼也

關

いつかたも關の戸さゝぬ御代にあひて今我道そ末とをりぬる

河

我まてはよゝにかはらすつかへきぬ猶末たゆるせきのふし河

礒巖

梓弓いそへのあまはいはつたひひく鹽かれに玉もかるらし

礒浪

しほ風のあら礒かけておきつ波猶よせかへるおとのひまなき

籬草

古里ややつるゝ草の籬よりはるかにつゝく野への夕露

庭苔

とふ人の跡なき庭の苔莚しきしのはれぬ程もみゆらん

簷忍草

古郷は日をへて忍ふむかしとて軒はの草もしけりそふらし

田家

あひにあひて秋田かりほす民のとも賑ひにける國そしらるゝ

もりすてしいをしろ小田をきてみれは朝風さえて霜むすふ之

秋過て猶いかならんもるほともさひしかりつる小山田の庵

山家

さひしさも身のならはしの山里に立かへりてもすむこゝろ哉

この里は山かけなれは外よりは暮はてゝきく入あひのかね

さひしとも思ひける哉山里はとはれんとてのすみかならぬに

爪木とる道のあたりにすむ庵はとはぬ人めそみるかひもなき

淋しさのましはおりしく篠の庵一かたならすふしうかるらん

山家嵐

山里の松にさひしき嵐こそきかしとすれはしゐて吹けれ

峯の嵐軒はの松を吹過てふもとにくたるこゑそさひしき

山家水

山里のかけひの水のをとつれはたえねはとても淋しからすや

山家人稀

おもひやれかゝる人めの冬にたにかきらぬ山のおくの淋しさ

松

年もへぬなにをか今はかくて身の老になるほの待ことにせん

住よしの松の思はんことのはを我身にはつるしきしまのみち

池上松

池水のたえすすむへき御代なれは松の千年もとはにあひみん

山椿

かきりなきはこやの山はいく代ともしら玉椿しらす行すゑ

岡椎

染つくすちしほの岡の夕しくれ猶もつれなくのこる椎柴

竹

さ枝ふく風をも友と聞なれぬ植て年ふる窓の呉竹

吹風に窓うつ雨そはれやらぬ軒はの竹に露やをくらん

庭竹
呉竹のよとこねちかき風の音に窓うつ雨はきゝもわかれす
小篠
ふむ人もなき庭におふる玉篠にこたふる計ふるあられ哉
岡篠
露なすふむかひの岡の玉さゝに光うつろふ夕つくひかな
路芝
をのつから遠近人のわけぬまも風になひく道芝の草
澤芹
かくれぬの汀の芹のうきふしはしけさまされと知人やなき
江蘆
みこもりの入えに茂る蘆のねのうきにつけてはよを頼みつゝ
江菅
風さはく入江になひくしら菅の葉末は浪の下になりつゝ
河藻
山川のはやせになひくなかれ藻はねこめに水のさそふ之けり
岸苔
舟よせぬかた山かけの川岸に苔のみむして人はかよはす
かたふちの岩ねの岸にむす苔のうつる影さへふか緑なる
暁鶏
有明の月待出て白妙の夕つけ鳥も時やしるらん
またてきく夕つけ鳥の鳴音こそ時しる程のね覚之けれ
鶴
君か代の空にむれゐるたつなれは千年をかけてあそふ之けり
庭上鶴
君か代にちよをかさねて百敷の砌にたてるつるの毛衣
夜燈
老か世に昔なからにかゝけてもかすかに成ぬ窓のともしひ
暁燈
をのつからかゝけつくさぬ灯の影もふけぬと見ゆるよは哉
海路
こきいつる湊ちはるかに成にけりかちをとをしおきつしま人（と歟）
囲碁
打をける手なみの程のいかなれはくるへき道もなきさ成らん
蹴鞠
藤とふみ思ひし物を春くれはまりも松にはかゝりけるかな
眺望
海原やおきへしほせもひとつにて雲井につゝくやへの白なみ
山中春
鳥の音ものとけき山の朝あけに霞の色は春めきにけり
海邊眺望
浪の上にうつる夕日の影はあれととをつこ島は冬くれにけり
山家眺望

軒ちかくたな引みねの雲まよりたえ〳〵よりの空そはれ行

述懐

すてやらて心からなる身のうさをたゝ世のとかにいかゝ恨ん

をのつからうきを忘るゝあらましの身のなくさめは心之けり

身一つをたつるそからきもしほやく浦のとまやの烟ならねと

老後述懐

ふりはつる老のね覺の涙にそ身をしる袖はぬれまさりける

寄日述懐

いたつらにすくる日影を惜ますは何につけても身を照さまし

寄月述懐

なにとかくうき世のやみにまかふらん心の月は光けなくは

寄虫述懐

あひにあへる時とはしるや松虫の待にかひある御代の惠を

寄露述懐

はかなしやかへにおふてふ草の露きえやらぬ身も哀いつ迄

寄雲述懐

風はやみたてやらぬ身のうき雲は君にたのみををくる斗そ

寄霜述懐

いたつらにつもるみそちの袖の霜をき所なき身をなけくまに

寄雪述懐

代々の跡思ふ斗にあつめきて我もとしふる窓の白雪

庵懐舊

身をかくすさゝの庵りのふして思ひおきてそ忍ふよゝの昔を

閑居懐舊

つらからぬ昔の世をはいとはねと山の奥とて忘やはする

夕懐舊

幾度かけふもくれぬとなかめつゝかへらぬ方を忍ひきぬらん

夢中懐舊

哀にそなき面かけもかよひけるおやのいさめしうたゝねの夢

寝覺懐舊

行末も思ひやらるゝね覺にはまして昔のしのはれそする

夢

思ひ出て人にかたるはまれなれとよな〳〵つねにみゆる夢哉

さめてこそはかなかりけれ思ひねに數々みつる夢のなこりは

夜夢

夢のうちは三世やへたてぬこし方に行末かけてみつるよは哉

無常

さためなき人のうき世もよそならし風のすゑなる野への白露

曲水宴

から人の舟をうかへて遊ふてふけふそわかせこ花かつらせよ

乞巧奠

織女のあはすはなにを白露の玉のをこともけふはかさまし

重陽宴

九重に久しくめくるもろ人の老せぬ秋のきくのさかつき

騎射

ゐひらには菖蒲やさしくさしそへてひたちのまゆみけふや引覽

五月雨にくまのむかはきそほぬれて閏行（いてイ）はれやゝとる成らん

賀茂祭

神代よりけふはあふひの諸かつらかけてそ渡る昔かためとて

みつかきの久しき世よりあふひ草かくるや神のめくみ成らん

春日祭

こまなめて御笠の山へ行人はあめの下いのるつかひなりけり

おほみなるみかさの杜にさよ更て神まつれはや山ひゝくらん

石清水臨時祭

山あひの袖になれにしさくら花春のかさしは猶そわすれぬ

松尾祭

二葉さす松のを山のあふひ草いく世かはらてけふにあふらん

祝

月も日も光をそへてあきらけき君か御代をはさそてらすらん

今よりのちとせの後の千年をも君そかそへてありかすにせん

天の下誰かはもれん日のことくやふしもわかぬ君かめくみを

玉つはきときはかきはに色そへてかはらぬ影は君のみそみん

千とせをは君にはしめし數なれと猶あかなくの程やしられん

寄日祝

世をてらす四方の光も君かためわか日の本と出しそめけん

寄月祝

久堅のあめよりてらす月の神くもりなかれと世をまもるらし

寄星祝

あきらけき星のはやしをかそへつゝ君かよはひの有數にせん

寄雨祝

雨露のめくみをよもにしき島の道ある御代と民そさかゆく

寄風祝

神風のふきと吹にし昔より民の草木はなひきそめてき

寄國祝

みたれした君かめくみにあきつはのすかたの國の民の心は

寄都祝

四方の國よものこほりのみつき物君にそなへよ萬代までに

君か代のひらくる花のみやこ人待こし春に今やあふらん

寄水祝

神かきや影ものとかにいはし水すまんよとせの末そ久しき

寄竹祝

九重においそふ竹を此君の千世のみかけにならへてやみん

寄松戀

萬よとよはふる山の松かえに十度や花のさかんとすらん

鶯是萬春友

鶯のかはらぬ聲や君か代によろつかへりの春をかさねん

此一冊大納言爲兼以眞翰本令書寫。輙校合畢。

于時文安元年甲子年三月下旬

〔右爲兼卿集以内閣本校合〕

爲兼集

立春　伏見殿より人々にめされし五首つゝの内春二首

かすめ空とし立くれは年くるゝいさよひの月や春の朝明

雪のうちに春たつとてや久かたの神代ふりにし天のかく山

かすむそけふ唐土に日本をふりさけみてや春をしるらん

立春天

神代にやみとりを空の初にて立くる春の色となりけん

雪中早春

かねてより豊の年ある雪氷はるたにあつき惠みをそしる

都早春

ひらきいつる心の花の都とりとりさたまらぬ春のはつかせ

絲遊

新桑の木のめは春のまゆこもりいふせくもあらす遊ふ糸遊

春灯

春の夜のみしかくもゆる灯の色さへかへの草となりゆく

春

宇治河の車にかけし行衞とや苗代水もめくりきぬらん

立春

あら浪も音しつまりてよもの海春めくけふの八重の鹽かせ

若草〔菜歟〕

年とともに積とやすき初若な袖もゆたかにかへる婦人

春もまたあさ澤水にねを寒み若なつみつゝ立かへるらん

子日

我ひきし子の日の小松誰か又千代をかこちて猶いはふらん

八千代にも萬代かけて玉椿ゆらく子日の小まつひくらし

鶯

朝またき窓のくれ竹霜しろく羽ふきもよはき春の鶯

鶯出谷

谷の戸をいてゝそ春としらすけのまのゝかや野に鶯のなく

白き名の花にそ匂へ行過る遠方人は梅としらすや

梅薫

なをさりに移しもとめはとふ人にいかにこたへん袖の梅かゝ

柳

妹と植し門の柳の名をとめて今もたゝなる庭の青柳

玉にぬく露のよすかの糸はへて柳にかよふ春のあさかせ

菫

分入は野もせの草にまかひなくすみれにあかぬ春の日くらし

はなちやる野かひのうしも心せよ菫こそさけ里のあけまき

桃

影ひたすけふこそ花も數そへてとをつゝとをの桃のさかつき

さとりつる人の愛せし花そとは皆くれなゐのはな（さくイ）園の桃

雉

雉なくみねの下道行やらてくるゝもしらぬ春の山ふみ

妻こふる聲もしられすむさしのゝ果なき草にきゝすなく之

早蕨

山ふかみつま木ひろへる柴人の手すさみならし春のさわらひ

春なれや折えしみねの初わらひ是そことなる家つとにせん

はな

心なきたきゝをおへる山人もしはしは花のかけになかめし

花さかり松はつれなきみ山木のかたはらにのみ立ならひつゝ

きえ殘る雪社花とみよしのゝ山風かへるみねのまつかえ

春夜家に歌合しける時

かつ散も梢も今を盛にて月もる庭のはなの下かけ

竹間鶯

夜をこめて春と告なり吳竹のまかきにきゐる鶯のこゑ

庭春雨

春雨はかすめる空に降くれて夢（音イ）しつかなる軒の玉水

歸鴈

玉つさのうはの空なる跡みえて明る雲間にかへるかりかね

露

いつくより置ともしらぬ白露のくるれは草のうへにみゆる覽

月延慶三年九月十三夜五首歌

すみのほる月のあたりは空はれて山のはとをく殘るうき雲

聞時鳥伏見院に三十首歌奉りける時

時鳥人のまとろむほとゝてやしのふる頃はふけてなくらん

郭公夏の曉といふことを

月殘る曉の雲の時鳥さらに起いてゝ名殘をそおもふ

時鳥驚夢弘安八年八月十五夜三十首歌奉りける時

夢路まてよはの時雨のしたひきてさむる枕に音まさるなり

冬鐘

吹たゆるあらしのつてのこる聲にまほは聞えぬ曉のかね

霰冬の歌の中に

閨のうへは積れる雪に音もせてよこきる霰まとたゝくなり

雪山成道

しるへする雪のみ山のけふに逢てふかき哀の色をそへぬる
鶯是万春友正應二年内裏にて
鶯のかはらぬ聲や君か代によろつかへりの春をかされん
寄日戀
みせはやなさこそは人の秋の日の影となる迄よはる我みを
寄月戀
こぬ人の俤なからふけぬゝ我やはゆかむいさよひの月
寄星戀
七夕の秋のちきりよそれは猶たえぬはかりもたのむなるらん
寄風戀
なけくそよ心木葉と散はてゝいひしなからもあらし吹ゝ
寄雲戀
君かなの立にはかなき契かはみをしら雲のかゝる戀せし
寄煙戀
いのれとも神たにけたぬ思ひこそ富士のけむりの類なりけれ
寄霞戀
終にさてへたつる中に戀しなはかすまぬ空をあはれとはみよ
郭公頻
時鳥山田のひたのひたすらにきかぬもつらし秋の音つれ
郭公稀
花ちりてしけける櫻の陰にさへ年に稀なるやまほとゝきす

早苗
立民も山田のくろの社とやとりし早苗を手向てそ行
採早苗
さなへとる跡の山田の水すめはもとのみとりを峯のまつかえ
五月雨
山河や音すす浪の岩こすけ葉末もしたに五月雨のころ
夏草深
夢路とも人しらめやはよもきふの深き心の底のまろねは
螢
月夜にはあらそひかねてむは玉のねやそ螢のひかりなりける
江螢
とも君のむかしのよるの思ひとやみしま江口に螢もゆらん
遠夕立
旅人の袖しほりてや八百日行はまちやとなき末の夕立
旅夕立
坂下る木曾のあさ衣みをとほりいたむ斗のあらき夕立
寄初草戀
初草のはつかにみえし折〳〵もいつの雪まの契りなるらん
寄忍草戀
いかにせん軒はの草の忍ふにもあまる斗の露の亂を
寄髪戀

一すちによし絶はてね玉かつらかけてしいへは猶そくるしき

寄本結戀

末まてはむすひもとめぬ本結の打とけしさへ今はくやしき

寄枕戀

枕たにしらへはしらしよひ／＼の涙もらすなしきたへのそて

寄席說戀

よしさらは床のさ席朽果よかたしく神ものこりやはする

寄衾戀

かさねては又は心のかはらまし獨ふすまてうらみはてぬる

花色存久

八千代へん昔に相生の花の枝は風もならさぬ九重の春

菊花久芳

朝霜はこゝらをけとも白菊の久しく匂ふ花はな哉

時雨

おもはれぬ雲のけしきをみるからに我もしくるゝ神無月哉

江寒芦

なには江や芦のよな／＼霜氷かすは亂てうら風そ吹

落葉

時雨とはみゆる物から木のはのみふれは時行冬のよの月

千鳥

さすしほにみさきはやかはる小夜千鳥鳴つる聲の近く聞ゆる

氷鳥

をきへにもよらぬ玉ものとことはにうきて聞ゆる水鳥のこゑ

網代邊水

氷のみいふきおろしのあしろ木にひをさへよらぬやすの川波

鷹狩

みかりするかりはの清水氷けりこれや野守のかゝみなるらん

冬草

冬草のおのかさま／＼猶みえてつもらぬほとの雪そさひしき

竹雪

降雪に軒はの竹の埋もれて友こそなけれ冬のやま里

都歳暮

都をそひなの長路とみる斗民ののほるにくるゝ年哉

神祇

神ませは草のいほとはこゝをみす軒ははかやの宮はしらかも

夏夕

草しける野守のかゝみ春日野になかはみかけるゆふ月のかけ

氷室

氷むろ山高津の宮の定しや消ぬ氷のはしめなるらん

たつぬへし昔の翁いかならんよゝのためしのきえぬ氷は

釋教

草枕たゝかりそめに迷ひ出てあはれいくよそたひねしつらん

いかにせん心にくらき道芝をふみたとりつるみ社悲しき

獨懷舊

なからへて我みに過し昔をもこゝろならてはたれかしのはん

とにかくに思ひつゝけてねをそ鳴人にいふへき昔ならねは

菊契遐年

菊の咲谷の流を汲人やおほくの秋を過むとすらん

菊

仙人の心しら菊手のうちにうけし文字の消すも有かな

關花

關守やまつ植置し逢坂の花にそとまる春の旅人

瀧花

櫻花をちてもたきつ白波のとなせにまさる春の山かせ

寄霧戀

立いてん空にもしらぬ夕きりに心へたてゝ袖ぬらせとや

寄露戀

僞のことのは斗かれやらてはかなの露のかゝりところや

寄雨戀

おもふより空にうきたつ心社涙の雨の雲となるらん

寄霜戀

ことのはは人の秋より枯初てちきりもいかゝあさちふの霜

寄霰戀

閨のうへにふるや霰のたま／＼もとはれぬよ半や夢を結はん

寄雪戀

うき人の我をふるせる白雪のさてたにあらぬきゆるおもひは

寄床戀

をのつから頼む契も絶果てねられぬ床に殘るおもかけ

寄閨戀

月影と人にはいひてとゝめはやあくるわひしき閨のいたまも

寄隣戀

是も又つらき隔と成にけり心ににたる宿の中かき

寄簾戀

玉すたれひまもとめてもかひそなきかけはなれたる人の心に

朝霞

空はなを霽けなからの朝曇くもるとみるも霞なりけり

五月雨久

五月雨はところ／＼に瀧落てみぬ山川の數そそひ行

水邊螢

まし水の音はかりきく庭の面に影とともにも行螢哉

霧中鴈

過やらて鴈そきこゆる夕霧のふかきみそらに道やまとへる

野鹿

山かけやすそ野に近く家ゐしてお鹿妻とふ聲なれにけり

河氷

とちはてゝ水一すしの道みえてあたりは氷る冬の山河

夜神樂

立かへる雲井の庭の神遊ひ糸竹のねも月もすみけり

初尋縁戀

人のため人め思ふそくるしきや身一つならはみをやすてまし

山家嵐

みねのあらし軒はのまつを吹過てふもとに下る聲そさひしき

春夜[illegible]

かつ散も植も今を盛にて月もる庭の花の下かけ

秋露[illegible]

末なひく千種の花の色をそめすふたをなすも秋のしらつゆ

秋山寶治二年八月十五夜十首歌

ふかくなる山路の秋を尋ぬれは木葉時雨て棹鹿の聲

杜夕蟬

片岡の森の下かけ露落て夕たちをくる日くらしのこゑ

夕日さすならの廣葉に風過てぬれぬ雨きく蟬の諸聲

撫子露

しはしたゝはらはてやみん白露のやしなひたてし撫子の花

庭撫子

露たにもわするな庭の教にもかなふ計のなてしこの花

池蓮

さとりなは五のにこりにこりても胸のさとりの花もひらけん

垣夕顔

夕顔の咲る垣ねや心あての花の夕はいかてまかはん

小車の音聞ゆふへたれこむるすきかけ白き夕顔のはな

古郷花

故里はたゝ一本の花にわか心なくさむ春にもある哉

里花

あくかるゝ心は春のならひかと花なき里の人にとはゝや

山家花

みよしのゝ山のかひとてなかめつるをのつからなる庭の[illegible]た

山吹

よしの河きしうつ浪も山吹のうかへる花の色にうつろふ

いはぬ色の花にはあれと玉河の春の心は春としらなん

きることありて佐渡といふ國へまかり侍る時よめる

とゝめえぬみをうき草のと計もおもほえす行水の白波〔に歌〕

いにしへの雁につたへし玉札のたまさかにたる音信もなし

同國に侍りしとき

みの程に海士の業さへしられ憂からき鹽やきよを渡るとは

あら海のいかなる魚のゑそとみをなさはや思ふ比も忍ひし

八月十五夜[illegible]

くもらしと空にあふきてみる月も秋も哀中のなには澄けり
名もしるくこよひ千里の外までもてらす心のくまはなかりき
九月十三夜鶴といふ所へ人〳〵まかり侍るによめる
名殘ある月の影哉鴈鳴て菊咲匂ふけふのこよひは
秋もはや十といひつも三よの月曇りはてすもすめる月哉
人〳〵寄月述懐といふ事をよめる
更て行月にかこちて我涙老のならひにこほれける哉
初鴈
物を思ふ人をしりてや初鴈のをのか涙にさそひてそ鳴
曉鴈
有明の月影らすき遠山に鴈かね寒み雲そしくるゝ
祝言
君か代の千年といふもあまり有松もためしの外に社みれ
神も猶みもすそ川のなかれより君か萬代かねてしるらん
卯花匂
白妙の匂ふ垣根の卯花はうくもきてとふ人のなきかな
葵
今はたゝよそにみあれの葵草なをそのかみをかけてこひつゝ
尋郭公
尋ね入山のかひなき郭公ちかき音をや猶なかむらん
人傳郭公
時鳥われにつれなき初聲を鳴つとかたる人傳そなき
夜郭公
夕やみの月はつれなき山のはを先いて初るほとゝきす哉
岡郭公
わすれすはならしの岡の時鳥猶故里のことかたらなん
原郭公
難波人まつ戀ぬらん時鳥きてもとはなん戀のまつ原
夕立風
名殘あれや露もすゝしき木の下に夕立すくる風のはけしさ
夕立雲
雲の色はくまとるすみの移しゑに空涼しき夕立のあめ
水邊夏月
すゝしさを何と岩井の忘水結ふにやとるみしかよの月
朝貌
手折なは心朝貌露にのみはかなくひらく花の一しほ
七夕
天川岩きりとをし行水に数かきやらぬとのはもなし
七夕絲
手向する二のほしのあふよとて秋にしらふる糸竹の聲
水まさるあふせはいかに岩舟の(をカ)心してよせ(るカ)天の川岸
紅葉

から錦夕日にさらす立田姫しくれを待て色やますらん
あかれさす日かけに移る紅葉はに色や八入の名にそ立らん

初雪

めつらしき雪の朝のなかめをは又あとつくる人にかたらん
花をまつ梢にたまる初雪を春になしてや詠くらさん

立秋

蟬のはのこすゑにうすき夕日影さすかに秋とけふはみえつゝ
身を分て秋立空と白露の置まかふかに袖そすゝしき

夕荻

袖にのみ露をはとめて夕暮の心くたくる荻のかせかな
荻のはにこのよはいたく秋風の吹物思ふね覺さひしき

曉月

うきよには猶有明のすみわひてつれなしと社月もみるらめ

山月

月のすむ水分山は雲はれて神さひまさる峯のまつかせ

峯月

くれぬまのあらしに雲はつくはねの峯より出る月のさやけさ

谷月

谷かけや出るもかけの細ければやかて更行秋の夜の月

聞擣衣

終夜きけは涙の遠近にいそくきぬたの音のさひしさ

遠擣衣

住人の有ともしらぬおく山の嵐のつきにきぬたをそきく

栽菊

植置て後の秋とも頼まし我【よはひか】も旅なるやとのしら菊

菊露

置露もあはれやかくる庭の菊此はなまては結ふ契りに

落葉

散まかふ木の葉に空のくもられは時雨そ殘る有明の月

朝落葉

散まかふ紅葉を空に吹立て朝日しくるゝ峯の木枯

谷寒草

きえやらぬいく夜の霜なかさねらん日影をよはぬ谷のかけ草

岡寒草

霜となる岡への露の玉かつらはふきもさむき夕あらし哉

掛樋氷

たえ／＼に筧をつたふ山水もよとむとみれはかつこほりつゝ

河千鳥

をのれのみかよひもたえす泉河わたりをとをみ千鳥鳴也

浦千鳥

よもすから千鳥鳴之難波かた鹽干のあとにかよひわたれる

網代寒

あしろきにいさよふ波も氷るらし日をへてさゆるうちの河風

屋上霰

槇のやにあられの音もたへつゝ風の行衛になひく村雲

竹間霰

をのつから霰の音のたゆるともあらしにそよく窓の呉竹

峯雪

かつらきやいかに高間のみねならん雲より上につもるしら雪

谷雪

光なき谷のしら雪けぬか上にいくへまてとか降つもるらん

湖雪

降雪はなきさ計につもりけりこほりやはてぬしかのうら波

浦雪

踏分て玉もからなん降雪もけふはあさかのうらのあま人

遠炭竈

降雪を分てもとはむ炭竈の煙にしるしをのゝ山里

佛名

年とにとなふる事の絶はこそ三世の佛の御名はわすれめ

松上鶯

わかめかる春にしあれは鶯の木つたへわたる天のはし立

雪中若菜

若なつむ衣手さえて片岡の朝の原に淡雪そふる

庭梅久薫

ふりにける梅の匂ひを年〳〵のわかはにしむる庭の春草

春月

春のよを曇とみつゝまとろめは夢ちかすめる春の夜の月

夏夕

草しける野守のかゝみ春日野になかはみかける夕月のかけ

夏湊

浦ちかく落あふ水のみなと川にこるや蘆の田草とるらん

露

いつくより置ともしらぬ白露のくるれは草のうへにみゆらん

草花盛

いとへ風千種なからも夕露の紐ときわたす花の色〳〵

戀

恨むともせめてしらする中ならは哀をかくる折もあらまし

おもひねの夢斗こそ海と成枕の下のみるめつらけれ

さりともとおもふ心の浦さへにあはてはつへきみの契かは

つゝし

白く咲いはねのつゝし雲かともうたかふ斗よそめなるらん

松かねの下てらすゑ岩つゝし赤き夕日をしはしうはひて

閑居灯

かゝけつゝみぬよの人の言葉にあふこゝちするふみの灯

閑居竹
呉竹のなひく夕風そよさらに人音まれのよもきふの宿
祝言
和歌の浦やかくあつむるもしほ草代々の風社吹傳けれ
つる鶴の名に祝てもあまり有心よせしの和歌の浦浪
廿日月
民の戸もいてゝてらさぬ方やなきはつかゐなかの月の都に
弓張月
空にいる日はゝ(本ノマヽ)矢は見えねとも月や神よの天のかこ弓
月前風
花やさく袖こそ匂へ月の中のかつらを出る秋のさよかせ
岡竹月
松かけもあくる伏見の岡のへに竹のよなかく月そのこれる
礒月
月に出てさかな(マヽ)もとよの玉たれ(むれカ)のこかめを中の礒のまとゐに
野径鶉
末野行袖の下より立うつらあはれみなてしよもや有けん
秋鴫
明わたる秋の澤水霧はれて鴫の百羽も數そさやけき
擣衣
月草のはなたの衣うつたへに秋そ移ふよもきふのやと

岡葛風
片岡のまつの雪まの俤にかへる葛葉の月の下かせ
黄葉
秋そみるこかね花咲みちのくの山のこのはの色もかことに
紫菊
移ふもさらに老せぬ色なれや若紫の菊のまかきに
菊
仙人の菊うる市か花の袂に露あたゝむる朝日さすゝ
初冬
わきてなを出雲八重垣けふしこそ神の心に冬もきぬらん
冬立てけふより風も北になる故郷しのふ駒いはふらし
時鳥
冬やくる秋をとちめし天の戸も雲をひらきて今朝しくるゝ
色に染てふりにし葉をかりなから時雨もしらぬよものまつ風
瀧紅葉
山姫の瀧のしら糸むら染になして落そふみねのもみちは
岡紅葉
露霜の岡のやかたに色まさる紅葉のあるし誰をまつらん
山岸菊
花の色の移ふよりもねをあたにさす山岸の菊の一本
山河瓶菊

かさしてもあかぬ袂にこき入て歸る山路も菊をわけつゝ

初戀

淺からぬ色にそみゆる紅の涙ふりいつる袖のはつしほ

秋風の露そこほるゝ初いねの一本いてしとつゝむおもひは

忍戀

としもへぬ忍ふの亂かきりあらは心のおくの露やみえまし

聞戀

忘れすよかせに音する下荻のほのかにいひし名殘ならねは

見戀

かりそむるみるめにあらき波なくは磯立なれて袖やぬらさん

祈戀

きゝね川袖の涙のみかさゝへ玉たにちらぬせゝの岩なみ

家歌合し侍るに都氷室

まつかさき都のつとの雫かも朝露こほる道のなつ草

扇

夕顔の花のゆくへそおもひやるやとれる露もしろき扇に

海邊時雨

夕波や礫(くれイ)落かゝる入海の松のむかひの山ほとゝきす

浦夏月

はまつゝら月もすゝしき夕露に夏やこぬみのうら風そふく

牡丹

咲花の露も心もふかみ草たゝなをさりの色を(とカ)やはみる

早苗

小山田におりたつころもほと過てさなへも水も緑にそすむ

菖蒲露

引のこすあやめの草の袂にもさ月の玉をかくるしら露

廬橘

香をそへよなれしもしらぬ櫻あさの花たち花の春のかたみに

市中雪

たれかへと雪の花さく市柴に春をうるまの冬の里人

橋雪

わたらしよ朽め絶せし橋板を降つく雪もふかき山川

里雪

爪木さへともしき里の折ふしにぬれたる枝をふすへかねつゝ

江鴨

なかれても入江にあさきさゝれ水それにもたえぬ鴨の足波

鴛

底ふかき池の心を契にてつかひはなれぬをし鳥のこゑ

千鳥

ますけこす夕波さむみ友千鳥そかひにわたる千我(曾カ)の河風

夜千鳥

ねにそ鳴空によわたる友千鳥あとなき波に行衛をやしる

網代
かゝりたく網代に床やならふらん又うつ聲はよはのさころも
神樂
雲井まて庭火も白し月の中の宮人さへや袖ぬらすらん
鷹狩
山里のかきほの外のふかゝやに犬よひこしている狩人
炭竈
今朝いつるをのゝ山人持すみにふらぬ都の雪をみる哉
爐邊閑談
峯も尾も山そにきほふ烟立すみのかまとのあまたかまへて
かたりきくとのはことにたき捨てあすは今宵の友も忘よ
埋火
閨の上の雪にはなをも埋火をたきあかせともさゆる袖哉
歳暮爐火
霞にや明なは春の光みむ年ものこらす埋火もなし
(歳暮河水)
逢坂やはやくも年の行とくとせきとめかたき山河の水
海路鳥
大舟のちいさき鳥とみえぬへしをきのかもめは浪にきえつゝ
海路友
風よりもあらき舟子のとのはにしらぬ浪路をまかせてそ行
懷舊
したひてもとまらぬ露をあたし野に送りし風もさ社みるらめ
暮林鳥宿
山かけや竹のはやしに鳴鳩の聲はかりする夕くれのあめ
窓竹
竹のよの螢も雪もなにかせんみかきつくれる窓のひかりに
名所海
仙人のうへけん竹や及はまし千ひろの海の蜑のたく縄
暮山雨
雲となり雨となる山の暮やうき袖のひるまの夢のかたみは
海邊眺望
よこ雲をきほの綱手に引ませて山ちにかゝる沖津舟人
閑中灯
くらくなり又あかくなる灯の消まく近きよはふかくして
こぬ人はうき灯の花そめをかへなる草の袂にそみる
祝言
しつかにてみと心とを能しれは神ゝ佛に成もならすや
方便品
數おほく法の庭にゐるちりの立てそ三重の雲と晴けし
人記品
おなしなのちゝの聲する時鳥雲にきえせぬかたやなからん
序品

わしの山春こし方をてらす日に四色の花のとけし下紐

舟中遊女

待人もよもきか島も尋みぬみを浮舟に老となりつゝ

雨江飛鷺

あまつゝみ遠き江川のふし柳波こすなれや鷺そむれ行

遠村鶏

雲まよふ天津空ねに鳴鳥のをのへの里は猶やよふかき

古郷

たをやめのよゝふる袖の形見とやならのあすかに雲残るらん

残雁

山本の小田のいなくきふみしたきむれゐる雁も雪はらふなり

雪中残雁

雁のゐる翅の色をそれとみて落るか小田の雪のしらさき

庭雪

つもれたゝ庭のをしへの跡たにもあらはと思ふ宿のしら雪

歳暮

暮ことに年も年こそ積るらめよそけに人のうへに更行

椎柴

朝けもる旅あらはあれ椎のはの霜の花折やとの山かつ

陰(隱)士出山

よに出て今もかしこき人あらはもとのみ山に雪やかへらん

山家水

谷ふかみいはほしたゝくみつからとむすふ夢なきみねの松風

此大納言爲兼卿集亡父妙壽院所持之處。令懇望。二日之内爲灯下寫留畢。正本者中院大納言通勝卿手跡也。不可出窓外者歟。穴賢々々。〔本ノマヽ〕

慶長三己寅八月二日　下冷泉圖書　爲景判

右壹帖明日香井雅威の中納言にかりて。暇之灯下うつし侍りぬ。

寛政九年六月下の六日　従三位貞直花押

(後二條院御宇)爲兼卿佐渡島にして卅三首の詠作の内。二首は三十一首の沓冠にあり。又上の五七五七は短歌となり。下の七文字は文字くさりとなれり。并名號歌。此歌によりて嘉元二年に都へめしかへされ給ひ侍りぬ。自筆をは後に宇治の寶藏にこめられしとなん。

あら玉の春のこえぬとあふ坂の關さへかけて(あイ)かすむ木の下

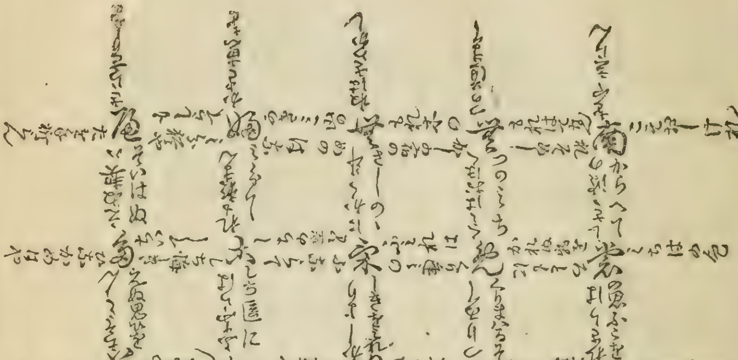
ふる雪にむかしの跡をたつねてや若なつむらん高まとのをの

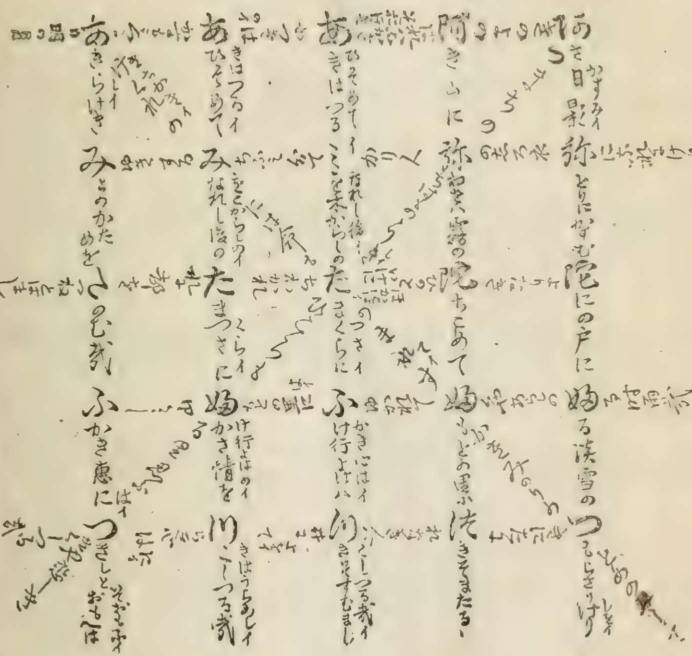
このほとはおとさへ(かはおとイ)たてゝ打とくる水の跡に(かなイ)のこるしら波

ときそめて(とイ)ひらく櫻(ひもとく梅イ)の花(玉イ)かつら心にかけてみるやわきもこ

おりてけに花をもみすは鶯の鳴より外に聲やきかまし
まちわひて初音をそきく郭公しのふる程はしはし斗か
たち花のかをなつかしみ夏衣袖そすゝしき風の吹にも
今ははや夕立しけりいかはかり露けかるらん森の雫の
津の國のあしまの螢ほの〳〵と明行空の後ももゆるか
河のせのきよき砌にみそきしてあとより軒のかせはふくかは
はるかなる朝霧かけてはましまやよさのふけいの濱による波
とまり舟笘引捨てよもすから待出る月をみてあかしつゝ
夕くれは野原をしなへ鳴鹿の淚をそへて露結ふ草
故里の庭の淺茅を吹風にはるのねかけて寒き衣手
誰もけにおしむかひなく秋もはやとまらて行かてまの關にも
すきのはにふる音すなり神無月しくるゝ空のもろき木のはか
きゝしにもあらぬ嵐のさえ〳〵て音さへ今はかはりてそ行
かきくらしふるしら雪の積るまで猶山深く雲かくれたゝ

けふも又かりはのま柴そよさらにあられを寒み玉はこゝのへ
したへ共けやくれはてゝうは玉の一夜にとしをへたてつる哉
ちきりしも僞とてそうき人を忘れんとすれとなれしとのは
かく斗あひもおもはぬ逢事をたのむ心をはてはつらきか
ひかた波うらみそまさるあま衣ぬるゝ袂にかゝるしら波
をのつから爰もうらめし人心うかりしまゝのみそとおもふを
かす〳〵に猶戀しきは月日へて忘れんとのみおもひける哉
みるもうしこえにし人の思ひより立やけふりのなひく夕を
西へのみかよふ心を極樂の道のしるへと思ひしらすや
まつ事もなき年月の明くれて積れは老とやかて成ぬる
かけまくもかしこきかもの葵草かけてそいのる神のはふり子
せなはやみなかれて絕ぬ水くきのあと斗みよこれそうたかた
てを折てかそへつくまぬ萬代を君より外にたれかしるらん





なきあとをなけく斗の涙川流れの末はなかき瀧つせ

むつましくむすふ契のむつこともむなしき空のむらさきの雲

あはれさも跡に殘りてあちきなくあけほのてらすあり明の月

みつ汐にみのりの舟のみなれ棹みたのちかひにみはうかみ皃

誰もみな頼をかけよたれんなくたりきの信そたゝほとけなり

二なくふしや（不捨）の誓願ふしきにて深きねかひそふたいとそ思ふ

拙子物の心を知初しより此かた。ふかく三寶に歸し。あつく一乘をねかふ。しかりといへとも暗事狗の眼のとくにして。出離の惡道〔要點〕をしらさりき。然をこのころ寶菩提院法印との緣ありて。不測に水魚のおもひを凝し師檀の約をむすふ。加之秘密金剛の内庫をひらきて。圓滿無礙の明珠をさつけ給へり。こゝに惠眼忽にひらけぬれは。穢土を出さる〔せ點〕に法身を得たり。玆に知ぬ座を超すして三摩地現前さんといふ事を。是多生の宿因にあらすんはいかてか此法をきく事をえん。剃髪染衣の禪侶すら猶たやすくうかゝひしる事なし。況や異生羝（テイ）羊の俗骨。寧たゝちに傳授する事をえんや。是を思ふに。おそれある事は薄氷をふむよりも危く。よろこはしき事は曇華にあへるよりも香し。此重恩を報せんとするに志ありて。投とするに珍財なし。こゝに適和歌の道を求めらる。もとより庭訓淺しく。つたふるとはなしといへとも。報恩謝植のため纔詠歌。大概一部の所談これをのこす事なし。是なを金をむくふるに瓦をなくるかことき物歟。抑俗典の中には三史五經百家の書を顯教とす。和歌一法是を秘密藏とす。故に秘中の極秘之。みたりにかろんすへきにあらす。たゝし和歌は十惡の中に綺語と稱せり。然は無明塵勞にことならねとも。是は日域の陀羅尼也。此三摩地にいらは。花の下には春の日光をまし。紅葉のかけには秋の月耀をそへん。豈觀念の媒（タン）にあらすや。

難波津魚翁在判

此壹帖明日香井中納言雅經卿。の本をかりて新寫し了ぬ。

こは寛政九年六月下の二日の夕　従二位貞直花押

續群書類從卷第四百卅三

和歌部六十八

前大納言爲廣卿集 稱清玉集

春

元日立春

なやらひし袖ひきかへて雲のうへや又節にあふ春はきにけり

立春

時しあれは神も昔やおもひ出る天の岩戸の春の明更

くれはとりあやに霞をゝりかけて今朝よりきたる春の山の端

今朝よりは色わく程に日影さすをかへの松に春はきにけり

み冬つき春來にけらし乙女子か袖ふる山に霞たなひく

立春子日

子日する松のよはひに契をかはこれや萬代の宿の初春

毎家有春

家の風ひかりある世に弓筆の道やはかたく春のきぬらん

早春

昨日けふ雲のはたても霞つゝ天津空より春はきにけり

早春待花

あし垣のよしのゝ山の朝霞まちかき花のおもかけそたつ

早春霞

筑波山めくむ霞の黛はこやはつ春の花にはあるらし

霞

春といへは四方のたかねも空の色の綠ふかめてたつ霞哉

山霞

松浦かた春はかすみや袖はへてひれふる山のすかたみすらん

霞添山色

世のめくみ大内山や雪は消てみとりの霞袖おほふらん

霞遠山衣

あま人の霞の衣ほしぬらんさほ路にはるゝゆきの遠山

嶺霞

三吉野の青根かみねはかすめとも苔の衣はたつとしもなし

海上晩霞

與古の海や霞吹みたす夕風に島めくりする舟そいさよふ

野外霞

大江山雪けの雲は立消ていく野のすゑや今朝かすむらん

霞隔浦

うら遠み立や霞のみつ汐にみらくすくなき礒の朝あけ

憐霞

野山にて心ゆるさは苔の袖も春は霞のたな引やせん

霞隔花

田子の浦の霞の水尾にしつく花の浪や俤うき島か原

鶯

霧にむせひ雪にこもりて山深み我春うらむうくひすの聲

里ちかみ人くと鳴て竹の葉のおしてあらはす鳥の聲〳〵

浪は又こほりにかへる谷かけを出てなかるゝうく(ひ脱歟)すの聲

山鳥の尾上の梅に宿しめてなか〳〵し日を鶯そなく

鶯知萬春

長閑しと君につけてや萬世も春にこてふのうくひすの聲

鶯有慶音

巣に住しその世の春に立かへり道あるときと鶯の聲

遐齡翫鶯

いく年の春かきゝけん乙女子か袖ふる山のうくひすの聲

海邊鶯

沖津波吹上のはまの濱風に花かあらぬかうくひすの聲

花間鶯

霧ふかき深山出ても花の香にまた聲むせふ野への鶯

野若菜

つまてやはよそにしもみむ若菜生る野守の鏡それかあらぬか

澤若菜

氷ゐし去年の雪けの澤水にふるはなからもつむわかな哉

雪中若菜

つみあへぬふるのゝ雪の花かたみめならふ程もなきわかな哉

わかなつむへく

消かてに雪はふるともあさひこかやえさす野へに若菜摘へく

殘雪

春の色はあさちか原にむすほゝれ風はあらちの山の白雪

谷殘雪

枝なから雪のとちにし谷の戸を春くとたゝく松風の聲

春雪

かすみあへぬ遠山まゆの綠さへ色にほのめく雪の村きへ

梅

梅かえの名たかき嶺に入月もおもかけかほる春のあさ風

軒ちかみ梅咲ぬらしたき物の匂ひあはするこすの追風

槇の戸をさし明かたの梅かゝにうき春風や夢さそふらん

梅風

匂ひをは風こそおくれ人はいさこゝろもしらぬ宿の梅かゝ

山路梅花

待くらし宿りとるともくらふ山あやにくならぬ梅のかけかは

戸外梅

夜の闇にも梅咲ぬらし松の戸をたゝくはかりにかほる朝風

社頭梅

さく梅の花のにしきを手向山春吹風も神のまに〱

梅契遐年

いく代かはふりさけ見けん春日なる三かさの杜の春の梅かゝ

梅有佳色

まつさくや千年の春の色ならん君か採に匂ふ梅か香

紅梅遲

山守の心をいつかゆるし色に咲て手おらん梅の一枝

澗落梅

ちる梅の花のかゝみやこれならんあらしにくもる谷の下水

柳辨春

くりかへし幾春そめんさほ姫のこゝろの色を青柳の糸

河邊柳

身は六十六田の淀のふる柳なに世中にくち殘りけん

窓柳

是も又窓のほたるのひかり哉柳にぬける露のしら玉

砌下垂柳

故郷の軒端の柳時しらぬ我世の春の末もたのまし

草漸青

こし春のかたちの小野や下もえの色にとらるゝ雪の村消

春草短

春淺みあるかなきかともえてけりこやかけろふの小野の若草

蹈路春草

かた重みおへる木こりはかへる日に折手見せたる野へのさ蕨

庭菫

春ふかみ垣ねに散し藤浪の花さきかへるつほすみれ哉

野徑菫

すり衣君か袖ふるはるさめにむらさきのゆき菫つみてん

蕨

鷺たてる小川の末の山かけになれも手にきる初わらひ哉

岡邊早蕨

岡野へや入日は消て下つゝしともすひかりに手折さわらひ

よそにしも人はゆきゝのおかのへにをのれ折手の初わらひ哉

さわらひあさる

賤手卷しつ心なく分入や早蕨あさる木のねいはかね

春曙

月の夜の千さともかすむ俤はこゝろにこもる春の曙

春月

是そ此月のかつらの花くもりかすむをよそになにうらみけん

江春月

秋見しも月は細江のみをつくしかすむや春のしるし成らん

川邊春月

駒とむるひのくま川の春の夜に影見る月もかすむ比かな

餘寒月

山高みふりぬる雪の玉水にくたけてかゝるまとの月かけ

春雨

雨のいとなか〳〵し日やあふにあけて昨日の空と霞はつらん

去邊のいもゐの庭の春の雨に草の莚のめくみをそしる

故鄕春雨

はつせ川かすみて音は夢原やふし見のさとのなか雨の空

歸鴈

秋霧を分こし鴈や霞にも空おほれせてかへり行らん

程もなき秋にこしちの月影を花にかすめてかへる鴈かね

折しあれは春の錦やこれならん柳櫻のころもかりかね

したふそよ春の有明の山のはに絕てつれなくかへる鴈金

夜歸鴈

おほろけの名殘ならぬを人やりの道とや月にかへる鴈金

櫻

有明も匂ひこほれて山まゆのうす花さくら春風そふく

櫻色の初花ころも露かけてかすみに匂ふ春雨の空

花

小泊瀬や檜原は花にうつもれて匂ひにくもる春の山風

うらみしなみん人からの色かとて花もたれまつ心なりせは

ゐる鳥はおとろきあへぬ花のすゝの哀嵐にかゝらましかは

移る世の色になれすはなからへて命にむかふ花を見ましや

咲花のくものかよひちかほるめりくたるや乙女あまつ春風

家つとによしさは手おれ山守はいかゝ岩ねのはつさくら花

さゝ竹の大みや人の春の色にさほ山さくら咲にけらしな

初花

おもひねになれこし花や今朝さくも猶覺やらぬ夢の俤

いく世より開しはしらすこれや此宿を千年の春のはつ花

山家花遲

かつとくる浪のはつ花色見せて匂ひうち出ぬ谷の下かけ

尋花

開初し去年の山路と分入や心のはなのしほりなるらん

栽花

うつし植て開し心の一花や天か下えの春をみすらん

花盛

雲やあらぬはなのよそめの夜の程に昨日の山そ稀に成行

翫花

已まつえいをすゝめて花の色のけふに任する今日にやあらぬ

春夕花

見すてぬと花ならうらみそ暮ふかみ心とゝめてかへる木陰を

暮山花

吉野山まかひしくもの色はくれて心に殘るはなの俤

山靜花芳

そことなくさそふ匂ひも霞はてゝ嵐にたとる花のおも影

社頭花

神もしれいやはねられん一夜まつ千世もとおもふ花の木陰は

古寺花

夕つく日雲に櫻はくれはてゝ入あひさひし志賀の山こへ

雨中花

なかめやる遠の霞はそれなから櫻にくもる春雨の空

雨後花

降はれし夜のまの雨は朝もよひ昨日の色にかすむ花哉

花似雲

山遠みさくもそらめと俤の心にかゝる花のしら雲

花如雪

よしさらは心まよひの雪とのみちりかひくもれはなの山風

近花

あかすみる庭のさかりの花ゆへに軒端の山のかけやくれなん

花下言志

老となる心の色は移りはてゝ見し世にかへる花の木のもと

挿頭花

かさしても身こそはあられ花は我はなに隱れぬ老木ならすや

依花忘老

老となる月はめてしのことはりも花にわするゝ春の木の本

花慰老

見るからにかしらの雪も思ひ出ぬ花や昔の香をさそふらん

羈中曉花

旅ねする木の下陰に影落て花のたもとも有明の月

花浮水

咲かゝるひかりを淸み榎葉井に白玉しつくはなの俤

大井川吹やあらしの風にかけ浪に絕ゆく花のうき橋

山路踏花

去年分し枝折ならすは雪とのみおもひけたれん花の山ふみ

風前花
名殘あれや梢吹拂ふ花の雲の明かたの月に山おろしの風
無風散花
ありはてぬ世のことはりを花やみよと風よりさきに分て散らん
惜花
やよ嵐櫻よかなんときありて咲てふ花もさもあらはあれ
惜花不拂庭
我たにも拂はぬ花の木のもとに心のなきは庭のはるかせ
落花
手折かねよそに見捨し木々の花ををのれかさして行嵐哉
松の葉の色にとらるゝ立田山あらきあらしや花のしら浪
風ふかはなしとこたへん門さして散らぬ櫻にあはさらましを
踏落花
來ぬ人をいとひしまてはなかりしにさても苔路の花の白雪
曉庭落花
軒ちかみ名殘有明の月影もこすのみたれの花のはる風
夕落花
人はちり花はむなしき山陰にひとりかすめるまつの夕風
花纔殘
したひわひうらみんとすれはかつ咲し梢にかへる花の俤
殘花薫風
影ふかき色は青葉にとられても猶これ春とにほふに山風
花もてはやす
春されは花もてはやす心こそ木々にしられぬ色香なりけれ
花そむかしの
人はおい花そむかしのとはかりな色香身にしむ春の哀は
野雲雀
沖つ島の霞に消し夕ひはり落ても浪のあはつのゝはら
呼子鳥
こたふるもそれとはなしやよふこ鳥うつる羽かひの山彦の聲
夕呼子鳥
鳥の名のよふ聲くれぬわきも子をきませの山の待とせしまに
林呼子鳥
よふ子鳥啼ねに花やちりぬらん林の木かけ春そさひしき
河欵冬
春ふかきよしのゝ川に移りけりさくやいもせの山ふきの花
松藤
石はしる瀧なき山の松かえに落くる水や春の藤なみ
藤爲松花
草ならぬ濱松かえの藤浪をけふの手向にさそなうくらし
暮春鶯
暮ゆけは身はうくひすの音にたてゝ啼計にもおしき春哉

暮春月

見るからちに春も今はと行月のわれて戀しき老にやはあらぬ

暮春殘花

行春やつれなしとみむおしむ世にしはしも殘る花の心を

閏三月盡

三月山かさなる雲の花ころもなれてもつらし春の別は

春色

與古の海や比良のねおろしかすむらし緑にかへる雪の白浪

水無瀨山なかめすてけん春の色の霞と消し跡そ悲しき

春草

夏はまた行衞見へこしむさし野やつかのまもなき春の若草

春水

つらゝとけむへも春そと岩そゝくたるみの中の音のさやけさ

春杜

絕て人きかすはいかゝまたさかむ花も老その森の下風

手向山

紅葉にはあくへき神もあかしとや花の手向の山風のこゑ

林變客氣宿雪紅

立田山梢の雪はつれなくて櫻をくゝるはるのくれなゐ

露暖南枝花始開

夏のくるかたえの梅の春はまつ露あたゝめて花や咲らん

夏

首夏

昔しけふ給ふ扇のうすからぬめくみを臣や分てあふかん

新樹

木々もはやかとりの衣袖かけてね覺のまとの露の下風

新樹朝風

朝な〳〵もみたす露に初あゐの色より青き夏木立哉

卯花

深緑はなは夢かとおもかけの立枝吹しほる朝風の聲

殘りけり月の入にし笹にも光はとめつ庭の卯花

葵

御あれそと松にあふひや人は神かみは人にも心ひくらん

神まつり

神まつる卯月の御注連一筋にそれと三室の山かつらせり

郭公

啼すてゝ雲(空しき雲ニイ)の行衞に心さへ空にはたれの初ほとゝきす

月影に聲のあやのみおりしもあれ鳴や賤機山ほとゝきす

絕てまつこゝろの色のくれなゐにふり出てなけ山ほとゝきす

待聞時鳥

やよいかに絕てまたすは郭公きゝし初音もはつねならめや

待客聞郭公

待人は傍のみに月夜よし夜よしとこたふ山ほとゝきす

曉月聞郭公

またてきく鳥は八聲を一聲の名殘の月や山ほとゝきす

曉郭公

短夜も老はね覺の有明をみすやきかすや山ほとゝきす

夕郭公

妻戀や身のくせならし百かへり夕とゝろき山ほとゝきす

時鳥數聲

いく聲とかそへよますはいよの湯のゆけたも今や山時鳥

山郭公

卯花のまかきの山のほとゝきす夜もこえてやなかんとすらん

海邊時鳥

ほとゝきすむへ心あれ夕浪の立てみゐてみ松からら鳥

惜郭公

したひわひぬよるのにしきか時鳥夢の一聲二むらの山

盧橘晩薫

暮そらきかへす袂も墨染の空おほれせてにほふ立花

樗

とのはのいやしきすかたいかならん折にあふちは花も咲世に

梅雨

見し春の花の白浪枝たれて五月の雨の梅のした水

瀧五月雨

秋山にあらぬ比しも色たきやこゝろそまよふ五月雨の空

川五月雨

たか里の便もしらす玉島や此川上のさみたれのころ

岡五月雨

五月雨はくり返す糸の長岡や古郷いかに賤の小手卷

古宅五月雨

荒行は軒端におよふ蓬生も同し忍ふの五月雨の比

五月雨晴

晴間そと立出てみれは夕月の影よりあくる五月雨の空

水鷄

陰深き葉守の神のかしは手になれもたゝきて啼水鷄哉

浦夏月

浦の名の十府のすかこもみふにさへ見る程なみの短よの月

樹陰夏月

はゝき木の陰いかならん更てたに有にもあらぬ短夜の月

遠村蚊遣火

村遠みもしほの煙たてかへて須磨のあまりにわふや蚊の聲

田邊螢

秋はまた遠山小田に稻妻のひかりほのめきとふ螢かな

雨中螢

岩浪は雨くらき夜に木舟川はたる玉ちる光さやけき

螢とひかひ

涼しさは夏か秋かの中川や螢とひかひ月はなかれて

瞿麥

露ふかき庭のおしへに咲てけりこやとのはの大和なてしこ

瞿麥勝衆花

春秋の色の絶間にさく花もなに敷島の大和なてしこ

夏草深

冬枯に見し俤もたとるまて心にしける眞野のかや原

夏草露

草ふかきまかきのもとのきり〴〵す秋まつ露や涙なるらん

百草はみなから青き淺葉野にわか露みするはなの紅ひ

風前夏草

里はあれて人はかけらん野嵐にけたてたく火や（ホノ）

朝氷室

夏までも殘るは君か世よしとてけさやつけ野の氷室成らん

夕立

ひろひみむ是やとはの玉篠にあられさやけき夕立の雨

湊夕立

殘る日の影の湊は名のみして入しほとをくくもる夕立

納涼

影清み月のなかれに託して秋と岩ねやしきも明さん

水邊納涼

涼しさは廣井もしらぬ廣瀬川袖つくはかり何思ひけん

路納涼

夏深き山路の夕日色くれて秋に涼しきならの下陰

納涼風

道の口袂すゝしく分こしや夏か秋かのこゝろあひのかせ

水風夜涼

柴川や不盡の根颪夜寒てこほるに深る六月のかけ

晚夏

川邊や七瀨のみそき一かたに秋をよせくる浪の涼しさ

晚夏螢

したひえぬ夏と秋との中川になれもなかれて行螢かな

夏秋

こむ秋の近きかはらや涼しさも手にとる程の御秡成らん

名所夏祓

志賀の浦や春の俤たつ浪の白ゆふ花に麻のゆふして

六月祓

飛鳥川今日者御祓登諸津人乃流須淺瀨仁替留淵鴨

欲迎秋近

今もきく笹の荻の小夜更て一葉のそはむあきの風かは

夏風
川岸に岩ねの柳うちなひき結ふ清水に山風そふく
夏夜
よしや月千夜を一夜の空とても猶おしからて明むかけかは
夏夢
心たゝ世は五月雨の雲と也夢と覺つる身のむかし哉
夏香
軒ちかみ何たとるらんほとゝきす花たちはなは香に匂ふえ
夏色
あさはかのわかとのはも紅のふりいてゝさけ大和なてしこ
夏鳥
うかふ身はくるしき物を鴨の子のかるの池邊に巣立かほなる
夏虫
日晩の啼音を風にたくへきてぬれぬ時雨を松にきく哉
夏杜
柏木にやとりの神も涼しさや風ならせとの杜の下陰
夏車
夕貌の露のちきりや小車のとこなつかしき形見也けり
夏力 本ノマヽ
あやめ草同し姿に置馴て枕の露やひかりそふらん

秋

立秋風
聞わひぬ世のはけしさもけふし明て昨日にかはる秋の初風
初秋
しかりとてそむかれぬ身の夕暮にまつなけかるゝ秋の初風
初秋風
一年の半も過ぬとはかりに聲ほのめかす風の下おき
初秋雲
物おもへと斗くるや秋ならむ心うきたる雲のはたてに
今よりのなかめへたつな嶺の雲露も時雨も色はわく[illegible]
初秋憶月
移りゆかむ梢の秋も一葉よりまつほのめくや三か月の影
初秋衣
こし秋は一よ二よの芦の屋に浪かけ衣すゝろすゝしな
行路初秋
行袖は千々にやもろき露ならん落る下葉の桐のした道
早秋
荻原や人はかれにし故郷にいてそよ秋と夕風の聲
いつまてか秋を心の松風も身にしむ程の月の涼しさ
殘暑
秋も猶すてぬあふきにあつき日の心はせをはいつかやふらん
秋きても秋を心のまつ風や身を分て夏にふかんとすらん

きけは猶てりそふ峯よ秋きてもいかなる影か日晩のやま
落あへぬ一葉〻千々の秋風に聞はかりなる夕すゝみかな

七夕

月の舟紅葉の橋をせめてさは二つの星のわたるともかな
袖つきてほすらんものか天の川八十瀬の浪は分まとふとも
さらてたに露にかしぬる苔の袖ほさしや星のうけん手向と

待七夕

よしやまてまつらんとのみおもひやる心そ手むけ星合の空
君やこむ我やとたとる夕暮の雲のはたての星合のそら

七夕夜迎

今宵そと星のあふせのやす川の月の御舟のふなもよひして

七夕夜深

更行はつきあへぬ袖に恨をもかさねむ夜半の星合の空

海邊七夕

袖の上やこよひほさまし七夕のあふせのうらのあきの初かせ

七夕天象

星合を待つゝをれは天の川河浪立て月かたふきぬ

七夕雲

白雲はたな引にけり七夕の天津ひれふる空にみるまて

七夕霧

彦星のまつ夕暮の秋風に霧たな引てあふ人もなし

七夕植物

露はかりかけんときはの色もなしけふの手向の千種ならては

七夕橋

初秋のもみちの橋の色よりや四方の梢も千々にそむらん

七夕舟

七夕の手向のみかは秋毎にけふの梶とる天の川おさ

七夕衣

隔ても夜半のつらさはうらむなよ七夕つめの中の狭衣

閏月七夕

天津ほし後の文月の夜は戀てねかひの糸やおもふ筋なる

七夕後朝

立かへりこん秋まてのかねとや天の川原のくすの下かせ

七夕つめの

待えても七夕つめのあふせやはやすの川浪今日立なゆめ

あへる七夕

天の川まれのわたりは是や此かめのうき木にあへる七夕

荻風

啼鴈をね覺の床におとろけは時しもあれや荻の上風

庭荻

いつの夜の秋の哀の風よりか軒端の荻の音信ぬらん

江荻

さす舟の入江の荻やさほの音も亂てそよく秋のうら風

夜荻

草の名のおきてなかめし夕ぐれはたへける物を夜半の秋風

曉荻

ね覺にはあはれ數そふ荻の音や見はてぬ夢のなこり成らん

萩露

露なから花すり衣きつゝ見む三かさと申せ宮城野の萩

愛萩

ぬれて見む誰そは露の下萩にとりし三笠そ宮城のゝ原

見萩

袖の露は人の心を染はてゝ萩の下葉の色そうつろふ

萩如錦

一夜にや紐ときそめし小車の錦とみゆる秋萩の花

朝萩

乘駒のあしたの原の露分ていさ見にゆかむ秋萩のはな

故鄕萩

植すてし本あらのかきの哀さへかれなてのこる小萩原哉

野萩露

誰跡そおらは落なんとのはの露のみやとる野への村萩

岡萩

妹と我ゆきゝの岡のまちはりに花すり衣こそめにをせん

草花

草の原錦ぬひものゝたてぬきに姿おりなす花のもろ人

折草花

折からに消なんとする玉さゝのあられもしかし萩の上の露

薄

梓弓入野のすゝき分まよひ遠方人にあき風そふく

風前薄

心とや尾花はやとす袖の露うけくに秋と拂ふ夕かせ

薄隨風

かり人は見えぬ野風にはしたかのきりふの薄誰まねくらん

野徑薄

分過て人はすき野の小薄や我袖ひとりつゆ拂ふらん

水邊薄

眞野の浦や汀も秋はさゝ浪の沖をふかめてさく尾花哉

苅萱

いつまてか鶉の床にたのみけん露にはかなき野へのかるかや

蘭

又やみんすそ野の原のふちはかま眞萩にすれる花のさかりを

原蘭

小薄の糸よはからしふちはかまぬふもほころふ秋の野原は

女郞花露

露はなとなひく心そをみなへし花よりよはき姿なりとも
なひきあへぬ露の色さへあるものをこゝろみたるゝ女郎花哉
露
浪のたまも秋にみたれて浦風の吹上の小野の葛の夕つゆ
袖露
秋といへはうるほふ袖や久方の月のかつらの雫なるらん
悲露
風にかゝる身を置てしも身の外に野山の露を露と見ましや
虫
秋されは千々のうれへの糸筋をいくはたたてゝ虫のおるらん
夜虫
秋されはね覺の床の露の底にきり〳〵す啼て小夜風そ吹
遠尋虫
歸るさの朝霧ふかし虫の音を夕露かけてたつねこし野に
野虫
したひ來て分る野へ哉風の上にそこともしらぬ虫の啼ねを
叢虫
野への色露の情よかはりけり庭にうつしゝ虫の啼音は
ねをなくむしの
露に移り霜に更行秋ならしねをなく虫のすゝろ寒けき
山初鴈
天津鴈秋は都にかへる山春の名たてになにうらみけん
月前鴈
浦遠み月の御舟に唐櫓をやおし明方の天津かりかね
左右聞鴈
月をまつ山の南に聞初て又きたになるあまつかりかね
鴈成字
雲をしのくたか筆ならんうす墨の空にほのめく鴈の俤
羇旅鴈
夢をこそさそひてゆかめ心さへ都につるゝはつかりの聲
はつかりの
初鴈の身にしむ聲に高圓の尾上の小萩色付ぬらん
鹿聲幽
磯山や嵐の末のきはの海にしつみもはてぬ小(さ歟)をしかの聲
遠聞鹿
山の名のあらしの末に聞ゆる月より西のさをしかの聲
鹿聲增興
萩ならぬ心の花のしからみもかけてをきくやさをしかの聲
故郷聞鹿
こぬ妻を待とせしまに荒はてゝ野となる庭に棹鹿の聲
秋窓鹿
小萩ちり霧ふたかれる山窓に我もしかなく夕ならすや

岡鹿
柞原またきもみちぬ片岡のすそのゝま萩鹿やわくらん
江鶏
捨舟は朽し入江の草かけにわか床かほのうつらなく聲
眞野のうらや入江の尾花咲ぬらしかれなて浪に鶉鳴也
澤畔鴫
夕されは身にしむはかり澤水の哀かすかく鴫の羽かせよ
秋田
秋山の麓のおしねこきたれてかり庵寒き時雨降なり
秋夕
袖ひかれかすみし春の曙もおもひけたるゝ秋の夕つゆ
秋夕情
虫はうらみ荻は聲してうき暮をとはゝ岩木もいかゝこたへむ
山家秋夕
山里のかきほの小鳥庭におりて木葉色つく秋の夕暮
閑居秋風
獨きく袖の泪に吹とめて月にのこれる荻の上かせ
月前秋風
をく露は軒端の風に亂來て荻にしらめる庭の月影
秋風滿野
今しはとうきを心のしめのゆきむらさきのゆき秋風そ吹
曙山霞
鐘の聲瀧のひゝきも水無瀬山霧みなきりて有明の空
河霧未曙
秋深み高ねは雪にあくる夜を麓に殘すふしの川霧
崎霧
今朝立し雲津ははるゝ夕浪にすゝの御崎そ霧の底なる
月
なからへてうけくに秋とかこちなは見なれし月や老を恨みん
秋月
影やとすしのふか原の秋風に露散月は猶みたれつゝ
秋月入簾
月見よと簾うこかす秋風に君待をれは夜そ更にける
晴夜月
見るまゝに心のくまもなかりけり月やうき世の外にすむらん
霧間月
立霧もへたつるはては妹背山今宵は秋の中川のつき
松月幽
山ふかみ雫音する松の戸に木くらき月も袖ぬらしけり
閑山月
音たかき夜半の滴の山陰にぬれて更行月の木くらき
山家月

岡の邊の松吹風に夢覺て軒端の山の月を見る哉

林月

名にたかき月の林は光なき身にしおられぬ桂ならめや

杣月

月の中の桂もきるや影さやにこよひ泉の杣の山人

河月

とれ川や月かけ清き秋風にいしはふむともいさ行てみん

湖月

さゝ浪や下くゝるにほの浦風に月のうきすも心たゆたふ

湖上月

秋更るかた田のうらの海士人は月にうたひていくよへぬらん

湖月似氷

あま人はぬるもかた田の秋の月氷の浪に袖をまかせて

海邊月

田子の浦やかけをも浪に吹ませて月に音する富士のね颪

藻汐くむあまの袖しの浦浪に宿すも心あり明のつき

浦月

いせの海や汐干のたつの聲たけてわかの松原月さえわたる

名所里月

此里はつせの鐘に夢覺て月をふしみの有明の空

旅宿月

月も見よ旅にしあれは椎の葉にもるいひしらぬ宿にかりねて

曉月

露茂き有明方の秋風に月影さひしふる郷のには

有明月

かたふかむ我世の末は有明の心ほそきを空にしれとか

殘月掛峯

入空の今はの峯につれなしと我世を見えむ月もやさしな

擣衣

浦ちかくあしの丸やの秋風に浪もひまなくうつ衣かな

聞からにすまのうらふれうつ音も哀しほらむあさ衣かな

擣衣寒

夜寒にやわきてなる尾のあさ衣浪もうつたへの松風のこゑ

宿さむみきけは衣をうつたへに里の名しるき秋風のこゑ

霜八度おきなさひ行仙人の鶴の毛衣誰かうつらん

月下擣衣

きく音のつゝきの里や月淸み風の行手に衣うつらん

重陽宴

今日給ふ菊のさかつきさしくみにしらむ千年や雲の上人

菊

みたれ碁のかけし心のたねとてや菊もあらそふ色のさま〱

菊露

咲そふは露のひかりを天津星のなにそはきくの名にし立らん
月前菊
をくとなき霜の笆の朝な〳〵月にうつろふ庭のしら菊
菊花映霜
松か枝はみさほつくれる秋の霜に瑩やすかた庭の白菊
池邊菊
うきしつむはなの姿や池水にをしの名たゝる菊の一本
名所菊
咲きくの花の淵とや水無瀬川秋は色かの有て行らん
紅葉
見し花の色をはちて霜のはに心そみゆく秋の山かけ
紅葉遍
心なは野山にとりて色ならぬ袂もなしやあきのもろ人
紅葉深
露時雨殘れる山のもみちはに夕日をそめて秋風そふく
紅葉如錦
下草の花はぬひ物のたてぬきを錦になすや木々の紅葉ゝ
紅葉如醉
春風の花にすゝめし醉の色を秋はた露や木々に見すらん
紅葉色々
蔦楓はゝその外もうき秋の色の千種にそむこゝろかな

紅葉透松
吹分る松の木の間に見えてけり嵐やしくれ嶺のもみちは
嶺紅葉
嶺たかみうつる夕日の色染て時雨むなしき秋の山かな
深山紅葉
花こにはあたら姿の深山木を又かたはらにみるもみちかな
遠村紅葉
風かよふ遠山もとのむら竹も匂ひこほるゝうら紅葉哉
蔦紅葉
宇津山分行袖の色那加良露於掛多留蔦濃葉桂
紅葉ふみわけ
故郷はもみちふみわけとふ人も秋より後の山おろしの風
秋不留
あすは春年はくれぬとしたひみむ秋のみとてや秋は難面き
暮秋
俤のきへすは有ともあすよりはしくれん雲を秋とみましや
暮秋山
長月や日もうす衣立田山もみちのにしきあらし吹なり
秋竹
しくるとも色はかはらし呉竹の園生の秋の代々の下道
淩天秋水白茫々

雲はれて浪のかきりも有明の月にうかふやにしの海つら

聞鷄鳴遲知夜長

夜なかしなそなたの里もいくたひのね覺の後の鳥の一聲

宮城野

さく花のにしきおりかく宮城野や行かふ人をたてぬきにして

明石浦

明石潟島かくれゆく月かけにみぬ夜もうかふ浪のうへかな

泊瀬山

心あてにわかはそわかむ初せ山ひはらの露に秋はなけれと

水莖岡

秋にそむ心の色もうかひ出ぬこやとのはの水くきのおか

冬

初冬

春もまた名たかき空や定なき時雨につれて冬のきぬらん

落そめし一葉はきゝし秋風もいてそよ冬と風のかせ

初冬朝

朝霞たつ空なから神無月春のものとは何しくるらん

初冬時雨

昨日今日冬にやならの葉かしわをならしかほなる村時雨哉

山路時雨

昨日今日神有月の空かけて雲の八重垣時雨きにけり

定なき時雨をみれは我も世にうきてつれなき村雲の山

關時雨

雲なから人はさまよふ道野へにひとり時雨やたゝこへのせき

田家時雨

暮すこき田中の庵のこもすたれかゝる時雨もたれか聞らん

寢覺時雨

おとろふる袖の時雨や天人の心よりふるねさめなるらん

落葉

やよいかにふかさらましや色しなき我とのはの木からしの風

山深み嶺松殘るはなのうへにうきをかさねて散木のは哉

夕落葉

夕附日さすや端山のみねの松のこる梢はあらしふくえ

落葉月明

よそにのみなかめ柏は散はてゝ月吹入る窓の木からし

落葉隨風

身はかろくおもひも捨ぬ山風につらさまさきの散まよふ聲

橋落葉

山ふかみ木のは散らん谷陰にあらしのわたるなみのうきはし

池寒芦

池水のみとりもあらぬ色かへてこほりにとつる芦の一むら

江寒芦

大井川入江にあらき松風のよはるや枯葉霜のむら芦

氷

みなの川浪はこほりて筑波根の嶺より落る山風の聲

水分の山は名のみによし野川おきやふかめて氷とつらん

氷閉細流

さらてたに岩まかくれし山水のこほりて後は俤もなし

懸樋氷

山ふかみ氷はてにし竹の樋のかけしや何の命なりけん

池氷

やへふきにあらぬ氷もひまなきや枯立あしのこやの池水

池草閉氷

どをつ人かりちの池は氷してひしのかれはも霜さゆるかな

芦間氷

あしの葉は冬枯はてゝ行舟のさはる入江や氷ならまし

橋下氷

竹川やかれなてさえし橋つめに氷はてたる浪の花その

冬月

月雪のよゝしといひし俤も心のみちにかへる空哉

寒月

貴舟川浪はこほりてさよ風に霰玉ちる月のさむけさ

寒夜月

霜まよふ枕のあらし聲さえて軒端の山にあり明の月

寒閨月

閨さむき枕の霜のこほる夜もとけて見よとの月のさやけさ

殘雁

引すてしひたの懸縄なかき夜のかり田の霜に落る雁金

千鳥

それとしもいさ白浪の磯千鳥いかなる筆の跡殘るらん

湖千鳥

菅蒲やさへぬ汐津の浪のうへにおのれみちたる村千鳥哉

水鳥多

あちむらは立さはく月の小夜風にこほりをくゝる鴨の海つら

寒夜水鳥

影更る月のうきすも浪きえて氷をくゝる鴨の水海

雨中網代

雨なから氷て落る山風にあしろの床やうちの川なみ

瀬々のあしろ木

見し秋に朽ぬこゝろと田上や又もり分るせゝの網代木

豐明節會

月雪のとよのあかりや糸竹のおりにあひたるしらへそふらん

屋上霰

小夜ふかみ眞屋のあまりにふる玉もくたけて散や霰成らん

古屋霞
我のみと霞きく夜にふりはてゝ槇の板屋もめはあはすして
閨霞
板間さへめはあはぬ夜と床の上にぬる玉霞みたれてそちる
狩場霞（霙歟）
かり衣みそれもうしや箸鷹のすゝのをふゝきさへくらす野に
狩場霙
降暮すみそれそさはり鷹の毛のうらむら（本ノ）かくれ狩つくすとも
雪
枝たはにさすかおられぬなよ竹の雪にもおのか姿見すらん
行てみむこゝろの色も朝な〳〵つもるや雪の浦のはつしま
冬されは散かひくもれ花なから匂ひむなしき山かせそふく
積雪
ふるまゝに嵐は雪にうつもれてひとり聲する松の下おれ
松はみとり増らんとするちかひより降をける雪を花かとそ思
禁庭雪
なしつほやとはの花も降雪の身のしろ衣朝かせそ吹
朝山雪
朝毎の花に詠めん色よりも鏡の山のさくら木のゆき
山路雪
三越路やそりのはや緒の一筋に雪を引ゆく山風の聲

遠嶺雪
心あれやさへしあらしの末の松まつらんものと嶺の白雪
行路雪
道遠みそりのはや緒の一すしに雪や心の行衛ひくらん
閑居雪
榊とるえやは心の松かせに人のためなる雪のやまかせ
窓前雪
ともし火を花のひかりに先立て窓の白雪春いそくなり
古寺雪
白雪のふり分かみのつゝいつに有原寺の跡をしそおもふ
竹雪深
埋れてそれとも見えぬくれ竹のありとやこゝに雪折の聲
常磐木雪
染かねし時雨のはてやときは木に雪と降ても色しかゆらん
山深み青葉も色にとられけり雪やひはらのかさし折けん
檜原雪
穴師川かは音寒し巻向の檜原や雪に埋れぬらん
原雪
夜嵐の音はよはりてこもり江のはつせの檜原雪積らし
江雪
湊風夜寒に成ぬあすやまたなこ江の田鶴の雪にうかれん

旅泊雪
下折の竹のとまりの浦舟やおのれと雪の蓬しふくらん
雪中望
和田つ海や雪の白浪立くらし中になる尾の松の一もと
雪中眺望
殘れ月花も紅葉もさもあらはあれあれの三嶋の雪の朝明
雪中客來
雪は猶友待かほの庭の面をまつとふ人や情つむらん
雪藏歸路
薪とるかへさよいかに分侘し落葉も雪のやまの北風
鷹
御狩野や木居せぬたかの振舞に衣かひてし鈴やときけん
取こほす鳥の毛花は名のみしてかほるやたかの姿成らん
鷹狩
寒くらすみ山の鷹の木ゐをなみ雪やこよひのとほこならまし
浦近き末野の鳥しかりゆけは陰さへみゆる鷹のみさこ羽
鷹の尾の松原かくれけふる日は立や鳥陰のむすほゝれ行
夕鷹狩
暮深き草の末野はたかの尾のたすけぬ鳥もぬす立やせん
炭竈煙
浦近く山陰しめてやくすみのもしほなからのけふり成らん

やかぬ間もまつたつ嶺のすみかまや消む空なき煙なるらん
閨埋火
霜の後松の扉の閨の中につれなくむかふうつみ火の本
寒夜埋火
槇の戸の音も嵐に我も又ふきおこさるゝねやのうつみ火
爐邊閑談
かたる間にかしらの霜もけぬはかり老をなくさの埋火の本
冬夜雞曙
さゆる夜の鳥のみたれや歎らんかしらの霜のしけきね覺を
杜神樂
うたふ弓のもと立道を更に今神やたゝすのもりの下陰
佛名
法の師の聲すみのほる雲の上に雪もかつけのわたを見すらん
都歳暮
行年の末葉なからもふし原や有し都のよゝをまつ身は
河歳暮
年浪はなかれてはやき熊野川世をすき舟の過かての身に
湖邊歳暮
うき秋はおもはさりけりさゝ浪や濱邊に年のくれん物とは
歳暮澗水
下水は氷したにの北風に薪とりあへす年そなかるゝ

爐頭歳暮

春ちかき廿日あまりの徒に身もうつもるゝ埋火の本

老後歳暮

たらちねのかしらの雪のふる年をしたふ哀は身にそ積ぬる

冬聲

さらてたにおもき薪のかへるさや雪をこつけの谷の北風

冬香

軒ちかき春まつ梅やたき物の匂ひあはせてまたき咲らん

冬色

ふる雪のこしの白根もうす墨の色にとられてくるゝ空哉

冬竹

一夜さへ夢やは見ゆる呉竹のふしなれぬ床に風のかせ

寒松

吹拂ふ浦風ならし松島やみとりにかへる雪のしら浪

因幡山冬

昨日こそ秋はいなはの嶺の松嵐にかはるふゆや來ぬらん

浮島原冬

降雪にふしのねかけて見渡せは松に色なきうき島か原

戀

初戀

わかむねにけふ下もえのおもひ草茂らん末は野山ともなし

汲しらむ心となしに初しほの何汐しめる袂なるらん

忍戀

くもる夜にこんと契らんそをたにもいはゝしらなん袖の月影

忍逢戀

いもせ川あさきあふ瀬にいかなれはつゝむ思ひの淵は有けん

忍傳書戀

ふみみんはわりなき道と人しれぬ心つかひやらちのやま風

言出戀

もらしなは見えぬ心と一とを淺きになして人やうらみん

請戀

とひわひぬ風をたよりの家島や跡なき浪の行衛いかにと

見戀

かいまみの甲斐なき名のみなかれてや我中川も袖にうからん

傳聞戀

近江路のつてとはきかて思のみすゝのをふゝきすゝろなる聲

增戀

くるとあくと心のねさしか(い歟)かならんいはぬはいふにまさのはかつら

返事增戀

しらせはやうき身をさめぬと斗の夢のかよひも我行衛とを

切戀

行衛なき煙くらへも絕て身に心よけたぬおもひとをしれ

たゝたのめいはゝや物を僞になさんうらみのはてをしらすは

祈戀

はてしなくまよふ戀ちの行衛をはえやはくるとの神も敎へむ

祈きてさてもうき名の立田山心のかせのはけしかれとは

寄月祈戀

神もさて哀はかけよおよはしのこれや戀路の天のうき橋

依戀祈身

祈ても身のなけきやはしけからん月の桂はきりつくすとも

逢戀

此まゝにかけはなれすはしめ繩の長きを人の契とおもはむ

きくやいかにいける限のとの葉もこよひ身にしむ宇治の山風

初逢戀

身にかゝる（のよそにきゝんイ）浪のあふせよ（かイ）きゝわかぬ聲をよすかの宇治の川風（浪イ）

あふ夜半の道はさゝ原そよさらに今身をうちの山風の聲

寄虎逢戀

忘れめや今宵の露のかねとは虎ふす野へのためし成とも

逢不遇戀

身は千々にうからん物か一たひのなさけにかへし命なりせは

不逢戀

人はいさうつり香とめん時ありてさくへき花は袖ぬるゝとも

おもひせく人の心のよとはしは渡らてつらきふしやつきなん

山鳥の尾上のさとは名のみしてかくろへかれし夕くれの空

詞和不逢戀

ことのはゝなひく姿もなよ竹のさすかおられん心ならめや

乍隨不逢戀

うき契結ひもやらぬあけまきのとくるけしきはいかて見え劔

來不留戀

したふをもとはる斗なき物をたかためまてもとひはきつらん

深夜歸戀

おくれ月明はつるとも別なん夢のやみ路はふかき夜そかし

別戀

さらすとてつらからなくに鳥の音を恨てしたふきぬ〴〵の空

後朝戀

朝床にあるかなきかのうつり香や消なん後の恨ならまし

後朝隱戀

今朝こそは別し袖の露の間にかはりてなとかしらすかほなる

朝戀

たか恨ふかきあしたの鐘の音も身にしむ物はうちの山風

僞戀

僞のなきとはりの天津ほしにいかなる雲か君さそふらん

ひたみちに人もうらめし心さへ身に僞のある世ならすや

僞敎在所戀

たのめしは跡なき雲の山風を松にやとりのならひしらすや

疑眞僞戀

こんとしの心まよひの床中におくとは夢かぬとはうつゝか

見僞書慰戀

よる浪のあはと消行鳥の跡に思ひなくさの濱風もうし

返書戀

うき中の形見はとめしと斗にうらみてかへる筆の跡かな

猒戀

我心空のみたれのうき雲の月のうへにも君見さらめや

猒賤戀

さていつをまつらん物と玉かつら思はぬ筋にかけはなれけん

顯戀

柏木や結ひし露のとはりをあたにも風の何ちらしけん

寄月顯戀

もれそめし露の行衞をいかにとも袖にこたへは月や恨みん

名立戀

ふしのねの煙のみとそ思ひしに我身のうへに有ける物を

はれやらぬ心まよひよ君ゆへに立名をせめて思ひわけはや

歎無名戀

つらしともうらしとも誰に夕煙立名はかりの室のやしまは

悔戀

身のとかと今こそはつる心こそこん世におよふなされ〔け歟〕也けれ

惜別戀

おもひそめし心をしれはうきもたゝ我からあゐの衣〳〵の空

稀問戀

とはれぬる情の色も時ありて咲てふ花のたねしならすや

舊戀

年月の心なかさや三重の帶のおもはぬ筋になりもはてなん

經年戀

あさはかのおもひのたねも年月をなにと心のすきの木深さ

遠戀

せめてうき夢になしてや手枕を我ものからに明てかこたん

暮春戀

契きてむなしき雲に入鳥のめわたる程もあひみてし哉

契晩夏戀

秋はまたほに出ぬ萩の白露にたのめぬ袖をなとかゝるらん

賴媒戀

いへはえにむせふは千々のおもひとを傳ふ便の人もあはれめ

不憑戀

たのめてもたのまぬ中や僞のかねてしらるゝ契り成らん

雜忘戀

薪つき身はきえぬとも俤や世々のほのほと成て殘らん

白地戀

しらせはや道行ふりの袖のかも心のしみにふかきおもひを

かりそめの道のたよりの梅のはなそのかにふれし袖そ忘れぬ

卜戀

いかにせんうきゝの龜のうらみてもあふせにあらぬ契成せは

卜遇戀

なひくやとかれゐてとふもうきは猶眞菅の浦の恨めしのよや

戀自我下人

山賤の歎きのほとをおもふにそ宿のけふりは立ける物を

戀學問妨

うき中に數そふ文の色かへてまなふる道に心そめはや

寄天戀

神かけしと葉のすゑも淺はかの夢路になすや天の浮はし

寄雲戀

言の葉の空おほれせは雲さへも跡なきものと人や見さらん

寄風戀

末は猶いかなる戀の陸奥のはけしや人の心あひのかせ

うらめしや恨やりても吹風のつてをいかにとゝはゝ社あれ

寄鳥戀

鷹の毛のうはらからたちそれよりもさはらん物は戀路とをしれ

何ゆへと見るらん妹か庭たゝきよしなき妻鳥もあらすや

はし鷹のおのれ逢事はかたき世に不知打たへて物をこそ思へ

寄名所戀

見るもうししゐておもへは別ての後世の山の有明の月

月よさていかに契りてしのふ山露より袖にやとりきぬらん

我戀はしらつき山のしられねは只ゆふたゝみゆふてたにみん

おもひのみすかのあら野よ憂中の心のくまも行衞しらはや

寄山戀

心よりいそくやとりはくらふ山明やすからぬ夜半もあやうし

寄川戀

袖の浪われこそくゝれにほ鳥の沖中川にあらぬ契りは

寄浦戀

我身社浪のゆく衞も何ゆへと聞や名たかの浦風の聲

寄磯戀

我やゆかん君やはたつねこよろきのいそくあしなみ浪荒く共

寄潟戀

淸見かたわりなきかたにかよひゆく心せきもるうら浪もかな

寄原戀

後の世も猶おもかけやけさならん身はあす夢のまのゝかや原

寄橋戀

せめてさは夢路にかけてかよはなん賴めし末のうたゝねの橋

寄門戀

たゝきなはあなかま夜半の妹か門さすかにこたふ心しりてよ

寄鐘戀

聲〳〵のかねのみたけよせめてさはこん夜もきかん別とも哉

寄石戀

なとかゝるおもひのつなそうき中は千引の石もかろき心よ

寄松戀

しらせはや餘所に鳴尾の松ひとりおもはぬ浪におほれ行共

寄宿木戀

契りきな思はぬ方にやとり木の枯なてつらき夜半ならんとは

寄草戀

かれねたゝおもひ入野の草のなにいつしか袖の色に出とも

しけしとてむすふ契りはかれ行に秋まつ草のしけらすも哉

寄玉戀

うき中の心のやみよいかさまに玉かとふ夜のひかりとは見む

寄衣戀

心まて二あゐの衣一重にもたのまは淺き色や見てまし

寄絲戀

くれと君いかなる床にふし糸の心とけても夜を明すらん

河内女か手染の糸のくるとあくとわれ思ふ心いくよをかへし

寄綸戀

うつし見は君か心もけた物のはけしき姿えやは及はん

寄催馬樂戀

せめてさは夢もかよはてみちのくのはけしや人の心あひの風

寄商人戀

戀ゆへにおもきなけきもいつか身にかちの市人心とははや

戀

盡さすはこんよもうきを契りそと思ふもつらき身のすくせ哉

うき人の心の秋の袂より月と露とはうらみはてゝき

戀香

見しや夢と斗おもふ枕香のきえすは有とも身やは殘らん

戀鏡

つらきかな見し俤もうつり行人の心のはなのかゝみは

なき名

しらせはやなき名とり川なかれても身は埋木の朽果し世を

わかなは立て

夜とゝもに我名は立て人はたゝ跡なき雲の心ならすや

戀わひぬ

人よさていかてつれなく存命へむ戀わひぬとも知てやみなは

なと僞と

人をのみなと僞と恨けんわれさへこゝろわれならぬ世に

夜ふかくこしを

露霜の夜ふかくこしを大方の心の色にいひやけたれむ

伏見里戀
甲斐なしや行もかへるも里の名のふしみる夜半の夢路計は
二見浦戀
二見かた逢夜も夢のと計に明てかひなきなみの手枕
雑
天
我心くるしと思ふ道よりそ天津三空に清く照らせる
日
朝彦か八重さすかけやかひかねもさやに見えたるさやの中山
星
四方にみつ星のやとりに雲の腰はや吹返し空も晴なん
曉
なき出てまつつかへよと鳥の音のいさめん道は代々に絕めや
聲〳〵の鐘の御嶽や待わふるそのあかつきをまつつきかすらん
晝
けふも先ひつしのあゆみ近しとをにしきも晝のなをとゝむ覽
名所夜
露もまたゆるさぬ月の袖のうへに幾夜か宿をかるかやの關
關路雲
鈴か山霧の丸はし末かけて雲一すちの關のした道
羇中雲
あし曳の山分衣たつ春の袖もほしあへす打時雨つゝ
野風
分まよふいなの小さゝのそよさらに風も宿とふ夕くれの聲
竹風如雨
あしからやあしとき雨は晴てさく晴ぬ音きゝ竹の下風
橋雨
鈴鹿山よそに成ゆく村雨の雲一すちや霧の丸はし
瀧
瀧水
五月雨にうつ音たかしこれや此天のつゝみの瀧の岩浪
瀧水亂絲
吉野川よしやうき身は瀧つせの岩にくたくる哀世中
長河似帶
山姬のおるや衣の瀧つせにくり出す糸の五月雨の比
河水流淸
石川やみとりの水のすへ遠みはなたの帶そ絕んともなき
晴後遠水
心たれにこりて世をし度會や大川水のきよきなかれに
眺望
浪にはれ明行よさの浦風に松をつくして出る釣ふね
ふしのねは雪より明て田子のうらや浪の霞のみほの松はら

一筆の繪しまか礒は浪はれてうかふや雲のあわち島山

江亭眺望

と浦のなかめよいかに難波江やあしのなひきの曙のそら

水郷

玉鋪のあとをしとへは水無瀨川袖こす浪の音計して

田家煙

守小田やたゝうき筋の暮ならんかひやか煙ひたのかけ繩

田家灯

たか庵そ空にしられぬ稻妻の小田にほのめく夜半の灯

田家雨

小山田のいほねんものかいな莚しく／＼雨のふりあかす夜は

山家

かしこしな横川の嶺に契有てよはひは杉の陰とふりにき

山家風

閑なれて今は誰をか松の戸に人たのめなる山風の聲

山家雨

やまふかみ柴の戸たゝく夜の雨を袖にこたふるわか涙かな

山家苔

とちはつる苔の扉の雫にもこたふやたゝく山彦の聲

山家稀人

春とひし人の心の色は秋に待みんもいさふかき山さと

山家友

此里は梢のさるに庭の鹿それならてたゝともなはゝこそ

山家夢

吹たゆむ嵐を松のくもてにて都にかゝる夢の浮はし

山陰は嵐も瀧も聲なれて心とさむる夜半の夢かな

林下幽閑氣味深

山ふかみ心の水は落葉にて（もイ）むもれむ物は木々の下庵

深山幽居

なかれては影もうつさしうき世そと捨し心のおくの山水

閑中待暮

夜も又いやはねられん松の聲瀧のひゝきに暮しかねても

餞別

白露のをくるゝけふの袖よりやたひねの野へをおもひ出らん

羇中枕

迚も身はやつすを苔の袂そと岩かね枕露もはらはし

旅夢

古郷にかよふもならぬおもひとや夢路むなしきふしのね處

水邊旅宿

むへ心あれなあら浪夢ならはゆかむ都か松からしま

海路

みやこ人まつらん物かまつら船はや緒の綱のくるとあくとに

吹かはる風もあやしの浦浪に眞襧しけぬけ興津舟人

渡舟

すてぬへき世をしかすかのわたし舟浮み沈みなにすくすらん

龜萬年友

萬代の陰さしくみに龜のうへの山もうかふや君か御池に

鶴遐年友

山人の道まなつるや老らくのこむ門入らて君につかへん

鶴有遐齡

幾年を立かさぬらん山高み春の霞もつるの毛ころも

君かよはひをのかよはひに取添ふる雲井の鶴の萬代の聲

名所鶴

朝なきやすゝめくりする浦舟になか濱遠くたつかけるみゆ

社頭鷄

道なをく關守神はあふ坂や夕つけ鳥の誰をわかまし

關鷄

あしからや關路の鳥のなくねよりいそけとくらき竹の下道

寢覺鷄

やよやいかに老をもはかり鳥の音をなかはね覺や心やすめん

鳩

はるゝ空も雨もよならし陰くらき竹のめくりの家鳩の聲

鵜

かはり行世のあた浪に島つ鳥うくもしつむもよそにやはみん

江邊鷺

あちむらはさはく入江の山風にたてるや姿なみのしら鷺

暮林鳥宿

一つれは寐くらしめけり村鳥のすゝめ色なる雲の林に

杜

引ふるも心にのろや鷺ならんつかれし駒のあしふちのもり

山榊

なをきなは鉾杉にみせて神の惠やとるや榊匂ふかくやま

社頭榊

神なみの三室のさかきうへそへて御世もどきはの陰祈るらし

松有春色

世は春と心もゆらく玉松や千年のほとを君につくらん

庭松弁每季

殿つくり三は四はの松かけに松立ならひ幾千世かへむ

松添榮色

君か代はまして常磐なる松かえの葉さへ花さへ幾春かへむ

嶺松年久

いつの世に生し岩根のたねならん嶺に久しき年の松かえ

松久爲友

君そみんよもとの松の陰しけみ雲ゐる嶺に生のほる迄

砌下有松
みきりにやなれてかそへむ君も臣も世にあひ生の松の行末
古寺松
松に吹もむなしき風の聲ならしうきにたへたるみねの古寺
岡松
ことゝふも古郷人は聲たへてをのれならしの岡の松風
竹
山本や里のけふりに立消て竹に殘れる秋の夕かせ
竹不改色
實をはまん鳥も出よとすなをなる御世の姿や庭のくれ竹
竹爲師
すくならは道しまなはむはしりつる庭の訓や窓のくれ竹
山舘竹
見し華も紅葉もあらぬ山本ににほひこほるゝ竹の下風
遠村竹
河上にさしのほる日も一さほの小舟ほのめく遠の村竹
岡篠
笠の端のそれとはかりや小篠原いてそよ人や岡へゆくらん
故郷草
荒はてゝ軒端におよふ蓬生や同しみたれの忍ふなるらん
寄枕雑
はけしさのうき世の夢もいつさめん嵐の枕あかしかねても
雜動物
さらてしも憂世の網にかゝる身の生洲の魚をよそにやはみん
馬
人もしれとすれはむちを大津馬のいたくも道は過かての世と
禁中
つかふ道や百の官のすゝのつなのたゞ一すちに心ひくら
将軍
八雲立いつも八重垣宮ゐせし契のすへは絶しとそおもふ
楊貴妃
宮のうちは露のうてなと成はてゝ消けん人の跡そかなしき
陵園妾
陰ふかみうきにとちむる松の戸をたゝく物とは山風の聲
僧
いかにせん　本　に玉ゆらのしはしはなれぬうき世也けり
樵夫
分いらんおく山人もさはり有世のなけきをはこりつくさめや
狩獵
かしこきをえ物にしけん御狩場はおもひくまなき心ならめや
遊女
誰も世の浪の上にてあまの子のたゆたふ舟をよそにやはみむ

橋

此里は山のかけはしこけふりて杉の下道とふ人もなし

垣

との葉の道守らし川口の關のあらかき荒き名もらし

夜燈

待出し夕の月はかたふきて軒端の竹に殘るともし火

遠寺鐘

泊瀬山嵐にまかふかねの音をふしみの暮に誰かきゝけん

筆

まなふへき三のすかたは筆の海の千尋の底のえやはしられん

みくり

よそにのみ身をつくまえのみくり繩苦しや浪に埋れこしよを

そほつ

心たれ法にひかれんかりの世と守田のそほつおとろかしても

高

月も日も及はぬ天やうへしなき君かひかりを始めなるらん

遲

いつかはとまつらん物か高野山そのあかつきの月のゆくすへ

疎

よし露の身をし宿さはわらの莚竹のすかきもさもあらはあれ

清

汲しらん我かはあやなわかのうらや立歸る浪の清きなかれを

厚

人の親や三たひうつせし哀みを心へたてむとなりならめや

述懷

代々かけてひとり步し昔そと忍ふもくるし敷島の道

何をまち何をえん身の行衛とてけふ幾年に堪ぬ命そ

したかはん耳ならなくに老の浪聞は六十やちかのしをかま

あれは有し歌のひちりよせめてわか心に師たる心とも哉

今更に心くたけてわかのうらやかへらぬ浪の跡をしそおもふ

我を人おろかにおもふ程はかり人をわか身のおもふよも哉

人もうし我身もつらしと計にとにもかくにもおつる涙よ

世にしらぬうき身なりともをのつから願の欠よ哭たかふな

寄歌述懷

よしやさはうき世の浪におほるとも吹たにのこせわかの浦風

寄弓述懷

桑の弓よもきのやしま治れる世にさへしつむ我身悲しも

寄名所述懷

吹つたふ風の姿を眞帆にあけていつかはゆかむわかの浦舟

里述懷

我よいさ春日の里に住とてもしるよしはせむ大和との葉

懷舊

更に今袖ぬらせとや廿あまり五月の雨のいとゝひまなき

たらちねの庭の訓はのこるともいさめし道の跡や戀しき

十あまり七年過し秋風は今も袂にふく心地して

逐日懷舊

移り行年とおもへはあるはなくなきは數そふ月日成けり

老後懷舊

うきにのみもにしたかひし六十餘四方も嵐のはけしかりせは

寄老懷舊

いかゝいひていかゝ定めんみしや夢有しやうつゝ老の古しへ

老とのみ身をなけきそしたふ世は昨日もおなし昔ならすや

世を秋の木々の木葉もかはり果し頭の色といつれたかけん

寄月懷舊

むかしのみ戀つ忘れつおもひ草なへては見へむ花かせの月

對月懷舊

むかし猶忍ふもくるし月といへは見まれみすまれ老か身の秋

對鏡知老身

むかふにもしらぬ翁にさらは身の昔をかたるかゝみとも哉

心靜延齡

うくつらくかゝつらひにし玉の緒やすつる深山は千世ものはへむ

草庵貽夢

夜の雨の袂ことはる苔の庵にうき世の夢のなに殘るらん

曉眠易覺

夢よりも猶いやはかに身の行衛おとろきあへぬ鳥の聲哉

無常

大方の夕の雲に寞えわか身をいつの空になかめん

光なき身とも歎かし灯の（ホノ儘）またゝく中もいさしらぬ世に

うかふ身はつなかぬ舟のいつちとまらぬ水の哀さ

冬尺敎

寺ふかみあか井の氷たきすてゝ花皿あらふ音もさやけし

寄雨尺敎

折〳〵に草木の色はかはれとももよほす雨はをのか灯

序品

世を照す光はひとつ光にてちかひは四方の法のともし火

勸發品

たのもしな法の衣の折にあひておほふ斗の袖の恵は

大光普照

秋の空心よりすむ法の月はてらし殘せる山の端もなし

邪婬戒

更てたにうきねにたつる我妻の外にはなにと心ひくらん

斎生

闇路にやまよひはつへき情をもしらぬ心の月のねすみは

法華

一枝の花の心のひらかすは露のなさけも知らすそ有らし

夏初

今そしろ高野の山にしむる庵はあけんうき世の夢の宿りと

神祇

交てやいともきくらん松のはのちりをつく世の住よしの神

冬神祇

神山や南にむかふ日影さへ袖にさえ行北まつり哉

夜神祇

かくら歌にうたふさゝ浪夜なれと日吉のちかひくもらぬ物を

寄山神祇

春日山その藤浪の末なから北野の松にかけてたのまん

神社

更に今君と臣との行あひのまことをたゝす住よしの神

慶賀

釣たれしそのいにしへもすなほなる君か光の璜とみすらん

祝

君か代は長非の浦のはかりなくほとりもしらぬ浪の行末

一すちにあふく心もやすくにや八百萬なる神祇そと

更に今君かひつきのさしなからあきらけきよを空にしれとや

すくなるをまとに定めまかれるを道におこなふそ我君のため

秋祝

四方のくにつくるにたへぬ民やすき稲葉の露の恵み有世に

寄日祝

やふしわかぬ日の本よりや月星の名高き國も光みすらん

社頭祝君

守れ君誰もむかしはつかへてし北野の道の末とをき世を

祝言

月星の名高き國もさもあらはあれあれな日の本明らけき世そ

旅祝言

都おもふ草の枕のかりねにもしつかなる世そ夢にみへける

寄道祝言

すなほなる君をしるへと千世の坂越てつかへむ敷島のみち

寄若菜祝言

道しある許のねさしと國栖とやよしのよくみてわかな摘らん

寄神祇祝言

くもりなき君か世出る心こそ日吉のかけのたよりなるらめ
千とせのためし

はてなきや君かとはの花ならん松は千年のためしあり共
ひしりの御代の

君〳〵につかへまつらんとの葉も聖の御代の道絶すして
松と竹との

君も臣も代々のねさしや是ならん松と竹とのたかき緑は

鈴鹿川

浪にのみ祈る御世とて鈴鹿川八十瀬の流にくたく心よ

雜躰

雜躰歌に

明けき御世のひかりをしるへにて四方にくもらぬ春はきに鬼

人々に六首歌よませ侍しに

今朝よりや霞の袖も廣瀬川淺瀬の水はかつ氷れとも

水無瀬殿に奉し五十首に

春はけふきひの中山霞之細谷川も氷とくらし

石淸水法樂に

出る日の影こそ霞め豐國のかゝみの山に春立らしも

片敷の袖の梅かゝ匂ふ夜は春のあらしにねんかたもなし

みるに梅花をかさりて（花山院前內府姉）內の女房につかはす

わたつ海のかさしの花はありといへと梅みる迄は思はさりしを

宮御方へ梅枝を參らすとて結ひ付侍し

おもひきや春しらぬ身の宿にさく軒端の花は君か爲とも

返し

花もさそ我を待えて嬉しきは君かとはの色なそへぬる

瓶に梅花をさして藤原尙豐につかはすとて此歌を

結ひ付侍し

菩提心無非中道にそむかすは一色一香の種や此はな

四季戀のかなの一字を頭にをきてその心を人〲

によませ侍しに

初瀬路やむかしの梅の便さへ心もしらぬ春の夕かせ

石淸水法樂に

露は猶いつれのかたにみたるらん軒の柳にさゝかにの糸

八幡名號を上に置て卅三首歌社頭に奉し中に

昔たれふる野の澤につみそめて形見のわかな袖ぬらすらん

水無瀨殿に奉ける歌の中に別奉納也

袖の色は花かあらぬか都人若菜つむ野に雪は降つゝ

多田院にこめ侍し五十首の中

いつの世の誰かゆかりにそほつらん菫つむ野に春雨そふる

折句をよみてかいたう花に付て（飛鳥井雅康卿）おなし人のもとへ

つかはしける

形見にといひてやさても手折ましうつろふ花のけふの梢を

返し

梢にはうつろふ色もおしからしとはの花のときはかきはに

水無瀨殿法樂とて三十首歌讀し中に

これもまた御幸の跡は哀之大内山の花のしたかけ

白藤に付て藤原の尙隆につかはしける

君か心すへの松山こさはこそ此よし浪のかけて恨みめ

返し

藤浪のかけてたのまはよもこさしふかき契りの末の松山
　三月盡日人々五首歌すゝめ侍りしに
夕月夜有明の影をしく花のかたみもつらし三吉のゝ山
梓弓はるくれぬめりいさゝらは彌生の空を引もとめなん
雲かへる三月の山のもゝち鳥散にし花に詠めなれても
歸りこん我身の春もしかりとてそむかれなくにしたふけふ哉
散し花殘れる藤の色までも獨なかめておしむ春哉
　藤原の倘隆一夜こぬ事侍しに五月六日あやめに付
　てつかはしける
みせはやなあやめの枕獨ねて今朝までかくる袖のうきねを
　五月朔日藤原倘隆につかはす
今朝よりのなかめも隙は有物をうき人ゆへの袖をみせはや
　返し
いかゝみへむ五月の雨の露にあらて本ノ
　六月晦日に北野法印禪椿社頭に侍しとて松虫をお
　くりたる次にそへ侍ける
君を祈る神かきなれは松虫も秋よりさきに聲よはふ之
　返し
名にしおはゝ秋も一夜にめくりえむ神の宮ゐの松虫の聲
　二十首歌讀侍けるに
夏虫は秋のかりてのそよさらにみそき凉しき浪の夕して

平等寺に七日こもり侍けるに道のまかきに荻のな
　ひくをみやりて
心なき賤かかきほのひまにたに秋をしらする荻の上かせ
　從一位富子もとより女房ともなひてまうてきたり
　けろか歸らむなと申を聞てつくりたる荻の有ける
　に付てことつけて侍し
みる人に秋のたよりはうとく共荻のうはの風につけなん
　返し
ほのかにも荻吹風のつてにこそ君かとはの便をもみれ
行人の便すくさぬ言傳をいかなれはたうとしといふらん
　人々に萬葉風躰の歌をすゝめて褒貶し侍し
駒なめて草かの山を分ゆけはあさちか末に霧立わたる
　月のいとあかき夜こんといひてさも侍らさりけれ
　は文のおくに
獨みる今夜の月のおもかけを空たのめなる人になしてよ
　水無瀨殿に奉し五十首に
あらし吹深山の秋を分行は月よりおつる松の下露
　四季をわかちて人〻歌讀侍しに
霜か雪かひとりなかめて小夜衣うちおとろかす有明の月
　雜躰の歌に
下紅葉うつろふ比の山風は月のためとも思はさりしを

内より紅葉のかた枝したるを賜はすとて
立田姫をるやにしきの青地にも枝に一むらみゆる之けり
御返し
から錦いつれの色も立田姫大殺（本ノマヽ）にはなとか織始けん
白　内裏紅葉賜仍奉之
いく秋か時雨ふりをける一木の色にならへむとのはそなき
柏木大納言もとより紅葉につけて
うすくこき此一枝は山姫のこゝろをいかてわきて染けん
返し
山姫のそむる心の色よりも君かとはやたくひなからん
初鴈を内へまいらせし文のおくに大納言三位（雅綱女）
のもとへかくなん
玉章は雲井の外に待もみち春（マヽ）別こし鴈はくれとも
返し　御製の短尺は惜を巻そへられて侍し
かけてくる鴈の翅の文ならていつか都に君を待みむ
依數奇誹難。計　天氣捧之處。如此眉目也。如何。
石清水社に奉ける卅首のうち
八重葎かこふともなき故郷に人こそ見へぬ松虫の聲
多田院にこめ侍し五十首の中
かたそきの行會の霜の夜や寒き衣うつ之住吉の濱
られふる事侍けれは奏し侍し
誰も又もれぬめくみの秋の露うき身はくちぬ谷の下草
御返し
萬代の秋も契やいやましにこたかかるへきまつのとのは
北野社へたてまつるとて人々にすゝめ侍し名號歌
に
いつくより雪けの雲に成ぬらんしくれも過ぬ四方のあらしに
周全法師出雲國へまかきの侍るをつかはす歌をも
送てんやと侍けれはよみてつかはし侍し
この比のいつも八重かきへたつとも時雨の空に君歸らなん
侍從中納言實隆公に筆を尋て侍しかは遣とてつゝ
み紙に書付て侍し
草かくれ霜の下なるきり／＼すいかなる春にあはんとすらん
返し
霜の下にうつもれぬとや茎とはの春にあはさらめやは
古今集に同文字なき歌とて侍るを上に置て卅一首
人／＼に讀せ侍し各冬之
吉野山落はの柿いかならんはやふるさとはみそれふるなり
石清水社に奉ける卅首の中
恨しないせおのあまの捨衣なるれはそれもぬるゝ袂を
あふ事はと云五文字を上にすへて讀し十首の中
逢事はいなはの山の秋のかせしくれぬ松の色もうらめし

雜躰の歌讀侍しに短歌の反歌とて
かきなかす谷の下水あわれともうき名をかけんとのはそなき
飛鳥井中納言雅康卿遁世とて江州松本と云所にまかりてかしらおろし侍と聞てとゝめ侍らん爲に重信を遣し侍しに年月の望にてかへる事なと申て
かしこしな君につかへし道ならはのかるゝ山の奥もとはれし
返し　十首遣す也
君に先つかへし道はさもあらはあれ遁るゝ山の奥はとひてん
梅子につけてつかはしける
哀にもおしへし道をきかぬ哉むかしの友はめくりあへとも
返し　中納言入道（二樂軒宋世）
教へすはそれ共わかし咲ぬまの草葉にましろらんもしらんも
つくりたる松に露のおきたるを筆に添て遣すとて
いくかへり松におく露つもりてか筆の海とはならんとすらん
返し　藤原尙隆
いく代にて松のとのはかき集めつきせぬ筆の海をたゝへむ
坂本より海をこして安養寺と云所へちんをよせ又しはらくそれに逗留し侍し中に女房のなかへのよしにて我君におくり侍し
坂本の濱ちを過て浪やすくやしなふ寺に住とこたへよ
返し
やかてはや國治りて民やすくやしなふ寺も立そかへらん
まかりと云所へ又陳かへし侍しに霜月廿日あまり中納言入道宋世もとより
かへりねとしかの浦浪たゝぬ日も君を都にまたぬ日もなし
返し
思ひとけはうき世之鬼しかの甕のわさもしつへき旅の日數を
同比褒〔雁歟〕のつはさに結付て侍從中納言のもとへ
此まゝにさてややみなん十あまりこゝのへの年は空に行とも
返し
遠きをも治めしる世は行かよふ鴈のつかひの空にみえけり
侍從中納言くたり侍しに御製を送給て侍し
君すめは人の心のまかりをもさこそはすくに治めなすらめ
御返し
人里のまかりの里そ名のみせんすくなる君か代につかへなは
後成恩寺殿の詠草を見て内大臣に返しつかはすとて包紙に書付て侍し
さくもゝのとはの花の鏡にもたつ面影の水くきの跡
彼作者桃花也。故如斯。
返し　內大臣（冬良公）
君か今みかきそへすは塵つもるとはの花のかゝみならまし
打聞の爲に五十首歌人〳〵によませ侍しに述懐ヵ

題にて大閤　おろかなる身なから世々の跡つけて
三たひそこへし閤の白雪と侍りけるを參らせし
かしこしなふりにしよゝの跡とめて三たひこえける閤の白雪
返し
曇なきよゝの跡にもこへつへし君かことはの玉のひかりは
姉小路宰相基綱卿自詠を百番歌合につかひて後成恩
寺關白判詞を書給ひしを一見し侍れは養祖濟時大
將の事を讀侍けれは返すとて包紙に書付侍し
我そまつしみはてにける水底の月に數しあとなられとも
返し
歎かしな君かひかりを賴む身はしつみもはてし水底の月
水底の月を哀となかめてそかゝることはの花もよりける
源義春僕に身まかりにけれは九月十二日あすは明
月の名をえたる空をおもひやりて
折にあへは名高き月もくもれたゝ跡のけふりを忍ふ斗に
女院御ことほとへて侍從中納言に申とて實望朝臣上
洛の次にとつて遣し侍し
おもひやれ花のはゝ木ゝかれしより玉の緒よはみなけく心を
返し
墨染の袖にめなれてことのはの世にゝぬ花そ置所なき
女院嘉樂門院。崩四月廿八日。此詠從事五月中澣也。愚詠
は初春のはつれのけふの玉はゝき手にとるからにゆ
らく玉の緒。此心也。但比興歟。
日比住侍りける所よりことかたへ移ける夜月のく
まなかりけれはおもひつゝけ侍し
軒端なる忍ふの露をかたみにて忘れなはてそ古鄕の月
北野社へ奉とて人々にすゝめ侍し名號の歌に
昔おもふかたみのみけしいかなれは千里の浪に袖はくちけん
神垣やみかきの松の手向草色なき露のことのはそこれ
石清水の社に奉ける卅首の中
いつかさて深山の竹に庵しめてうき世中を哀とおもはん
水無瀬殿に奉し五十首に
我こゝろまかれる枝はもとめねと人のなをきそ稀に成行
雜躰歌に
鷲の山たかねの花の匂ひてそひらけそめける法のことのは
月次會始鑑有遐齡此會に大納言入道
限なくよはひは雲井遙にて宿にきなるゝひなつる
の聲とよみ侍けれはつかはしける
契をく君かよはひも老つるの聲ふきかはせわかのうら風
返し
羽杖つき霜をふるまて老つるの惠みあらせよわかのうらはに
源宅行人丸名號の賛に愚詠をよみてと申けれはか

きてつかはし侍し
風のすかたあふきてみれは鋪島の山としたかき言の葉そこれ
古人の名にて人々歌讀侍しに　山邊
（敦名）春日山野へのさをしか心せよ秋萩さきて露みたるなり
忠岑
（敦ナ）古の有明の月のわかれより秋のすそのゝ限をそしる
順
（敦名）難波かたこと浦舟の名もつらしたかうき中に遠さかるらん
俊頼朝臣
（敦ナ）正木ちる峯のあらしの音信を聞けん人は逢よしもなし
爲家卿
（同）花のすかた俤にして散にけんその木のもとそ今も戀しき
頓阿法師
（敦ナ）今も猶袖にかりてそ思ひしる草の庵のとのはの露
雅世卿
つたかえて茂み分きてうつの山小夜更かたの露にぬれつゝ
いにしへの歌仙の名を花に人々讀けるに　俊成卿
行末に忍はれぬへきとのはやむかしの筆の跡にとめけん
爲兼卿
白玉の葉分の風やいにしへのふしみの竹のすかた成らん
源氏目錄にて雜躰歌よみ侍しに隱題

桐壺
秋の霧つほめる花の笆より獨ほに出てなひく萩原
榊
いかにせんかよふ玉つさかきたえて手にもたまらぬ水莖の跡
隱題　山寺
すむ月の中にあるてふ男山てらさん迄は猶そたのさん
誹諧歌に　鹿
とにかくに舟につきたる名えけりかひよと鳴もさをしかの聲
姉小路宰相（基綱卿）歌合の判をこひ侍しに詞にまかせ
侍し折句
折しもあれ夏なき床に清水もり時雨の松をならす谷風
八十島やみちくる汐のはる〳〵と松原かけてくもるなみかな
霜こほり露さむくなる山陰はさそなかれ行柴の下草
篷やかたも中の月の面かけてよる〳〵浪もしはし宿かせ
しらせはや野への小さゝをふみ分て通ひし袖に露かゝりきと
住捨て通ひし道も絶にけりよもきふふかき柴の網戸は
露なから月こそかゝれ萩はふ籬のもとの草のしけみに
よしやたゝきゝれとおもふ月草の形見の袖はひる時もなみ
源尙氏歌合の判をこひけれは書て遣し侍し折句
さひしさはうき身も秋の獨ねにともに尋て鹿そなくなる
山風に薄もきくもしほれけり峯の紅葉は時日と思ふに

折句の歌に　おもてかは

奥山の紅葉ややかて照すらんかたへの日影はや時雨つゝ

雜躰歌讀侍しに折句

朝日かけ山の尾上にめくりきてくるゝ雲より五月雨の空

夕間くれかた山かけにふる雪のかたへになひく柴の下草

宮御方へ折句をよみて芍藥につけて參らせし

しけり行山下陰のくさむらにやとれる露や暮をまつらん

御返し

白露のやとれるからに草深き山ちや秋のくるとみへなん

家君長谷より茸かりのとて松たけを硯のふたに入て送られたりけるを句の上におきて

ふみわけてたかかよひちもかひそなき隔て遠きすみかゝせは

返し

吹風に玉とみたれぬ萩の露きしの小すゝきぬきもとゝめて

海住大納言高倫卿御扶持あれといふ事を句の上におきてたひ侍し

心さし二心なく契りきてあ（本ノマゝ）君にはれいもたかへし

返し　こゝろゆる

是も又こくめ（本ノマゝ）ほとやろんすらん弓と馬ともるい代の道

雜躰歌讀侍しに折句

ふくろ夜は雪のたるひに軒閉て氷にさむき獨れの床

沓冠折句

夕たゝみむかひの山ち暮なからたか行方か雲にへたつる

旋頭

鶯の花とくと告る我宿の梅かゝに折しる比は猶そまたると

混本

しまつ鳥うのゐるいしにはふ松のねをのみそなく

續群書類從卷第四百卅四

和歌部六十九

爲廣卿詠草

永正元年九月廿四日禁裏御月次の會始に有明月

かたふかん我よの末も有明の心ほそさを空に見よとか

紅葉色々

蔦かえて柞の外もうき秋の色の千種にそむ心哉

稀問戀

とはれぬるなさけの色も時ありて開てふ花の種しならすや

同廿九日家の月次會に小鷹狩

おしや暮させてふ虫もなく野邊につゝりあし緒の鷹の一より

秋不留

一

田氷

浦かけて氷の八十の湊田は穂なみにかへるさゝ波もなし

馬

人の世の道の外かは高山に行なやむ馬のかはるけしきも

十月廿四日禁裏御月次に梅

咲梅の名高き嶺に入月も面影かほる春のあさ風

擣衣

聞からにすまのうらふれ打をとも哀しほしむあま衣哉

寄松戀

しられめやよそになるおの松ひとり思はぬ浪に（汚ははつイ）おほれ行とも

神社

さらにこの君と臣とや行あひのまとをたゝす住吉の神

海路

吹かはる風もあやしの浦浪に眞揖しけぬけ興津舟人

十一月九日大樹御夢想にて一心契以下各申いたさ

れ公式詠歌ありしに郭公何方

風の上に浮たる雲を行衛とや心みたれの初郭公

有去月十一日夜。大樹。大かたにいかてなかめん菊の花はなにも千世の籠ると思へはと。御夢想侍る三十二字を各歌の頭にをかれて御張行ありし也。為廣出題にて各へ相ふれ侍る（武田大膳大夫之）之。此時讀師三條中納言。（實望卿）發聲は為廣。講師源元信也。御製講師は藤宰相也。懸詠の發聲は飛鳥井中納言勤之。

十一月廿四日禁裏御月次に水鳥蘆

あちむらは立さはく月のさ夜風に氷をくゝるにほの海つら

行路雪

道遠みそりのはやをの一すちに雪や心の行衛引らん

社頭榊

神垣の御室の榊うへそへて御代も常磐のかけ祈るらし

十一月十三日家會雪埋松

武隈や埋もれはてし二木をは雪をみきとそ人に語らん

古寺濤

いつさめんうき世の夢の古寺に心をくたけ濤波のこゑ

同當座に七夕

天衣つまむかへ舟よるとても何あふ事のやすの川風

不逢戀

しらせはやけふの細布けふもさてあはすは胸の中いかゝせん

祝言

世に高き君か御影は久堅の空なる山もえやは及はん

十一月廿七日三條中納言亭會に曉千鳥

有明の月をかたみのうらふれて鳴や千鳥の妻したふ聲

屋上霰

あらましき嵐の音の深る夜に閨の板間もめにあはすして

内地戀

消わひぬ袖の上のみ行水のあはつか成し人の面かけ

同當座に門柳

世は春と出入人のこゝろより柳も眉をひらく門哉

寄國祝

神もやは心へたてん玉垣の内つの國の光ある世は

十二月十三日家月次會に爐邊閑談

かたれともよこ山すみの色なから雪をも埋むねやの火ひつに

老人惜歳

やよいかに頭の霜のをくと歎きぬとはしたふも暮る年哉

相互忍戀

我や人ひとや我をもうらみましらせすしらぬ中と思へは

同當座に檜原霞

人影は見えぬ檜原に袖かけてかさし折はへ立霞哉

久戀
朽はてん千束の後は錦木の立名はかりや身にし殘らん
寄市雜
心なる玉の外には何をさてうるまの市のさはかしの世や
寄衣雜
苔になす袂なりせは花の錦紅葉のぬ物それもそれかは
十二月七日三條中納言家月次會に衾
さゆる夜はなこやか衾なこやかにねてあかすへき床の上かは
椎
吹しほる月も光やむかへ尾に椎の葉白き山風のころ
舟
うき島は立空たかき浦浪に鴨といふ舟のよる汀哉
十二月廿四日禁裏御月次に故鄉萩
栽すてしもとあら垣のあはれさへ枯なて殘る小萩原哉
首夏
君しけふ給ふ扇のうすからぬ惠を臣や更にあふかん
狩場霙
狩衣みそれもうしや箸鷹のすゝのをふゝきさえ暮す野に
寄浦戀
［此間落丁］
これやこの法の光と春日山わしのたかねも有明の月

二月廿二日水無瀨社御法樂とて內より召れしに春
深微雨夕
暮ふかみ春も泊瀨の花の跡に雨そほ降て鐘かすむ聲
秋蘭已含露
秋もまた尾花か袖はわかぬ野にわか露結ふ蘭はかま哉
坐愁樹葉落
落葉さへたへて聞へき山窓に心吹しほる木枯のころ
莫問胸中事
身はつゐの薪盡ても殘るへき思ひのほとは問すともしれ
山中弄泉石
たのしまん心成せは岩のはさま朽木の陰もよしや山水
二月廿九日大樹常寂院の糸櫻を御らんし侍りて當
座のありしに夜花
灯をそむくる月も花の色は猶うとまれぬ春の夜半哉
關花
浦遠み波はかすみて淸みかたなのれ關守花の下道
翫花
さほ姫も君に引るゝ心とてけふは手染のいとさくらかも
三月八日三條中納言亭月次會に花下送日
分入てうつる日數に浦島か心うき出る花のしらなみ
暮春月

暮はては花の空めの月のみや霞し春の名殘とをみん

待戀

契りきな獨ねよとの鐘のこゑを身のうき數にきかんよはとは

同當座に若菜

日くらしにあかて摘へき若菜哉紫野ゆきしめの行つゝ

同十日詞篇院坊にて源政元なと出侍りて當座ありしに雨中花興

あひにあふ花の錦は降雨にたゝまくおしき木陰ならすや

雨中落花

よしやふれ散ともよしや幾春も養ひえてん花の春雨

二月十三日家月次會に鶯

うつり行羽風もあらき青柳に亂れもあへぬ鶯のこゑ

梅

とのはのつらなる枝もわきて世に匂はむ宿そ花のこのかみ

雲

暮て又雨となるへきとはりを朝立雲にみやはとかめぬ

同當座に春月

春といへは月の桂の花くもりかすむをよそに何思ひけん

浦松

都出てよそになるおの浦風に松もひとりの暮たへぬ聲

三月十三日家の月次會に瀧邊藤

閑藤の花か波かといへはえに岩瀨に匂ふ瀧津川風

春欲暮

憂物とかすへすよますいよの湯のゆけたやいくつ春の日數も

寄車戀

つらさのみ心にのりて幾夜半か人は契りのむな車そも

同當座に湯

有馬山有しはいつの御幸かと思ひいて湯のわくかたもなし

濱

大伴の松のうれこす波ならし聞も高師の濱風のこゑ

三月廿四日禁裏御月次の懷紙に花間鶯

霧深き太山いてゝも花の香に又聲むせふ野邊の鶯

花浮水

大井川吹や嵐の風にかけ浪にたえ行花のうきはし

暮春戀

契りさて〔き歟〕むなしき雲に入鳥のめわたる程もあひみてしかな

三月廿六日大樹御當座とてめされしに春關

袖ぬれぬかち人ならし相坂や分る霞のなみの下道

春嶺

根をたえぬ花も散ては山川にさそはれ行や木の葉

祝

くり返し限りしられぬ御代ならし君か玉の緒しつのをた卷

四月五日三條中納言月次會に首夏
花にのみ昨日歸りし鳥の聲もあらぬ色なる夏の山陰
郭公
子を思ふ道ならなくに見し夢のやみのうつゝや初郭公
述懐
捨はやの心や行て山深み先住なるゝ身ともなすらん
同當座に夏月
窓あけてむかひもあへす染（深歟）にけりとるてふ筆の短夜の月
磯浪
鴈のなす文字はかすみてあしてのみ殘る縮島か磯の夕浪
四月十八日家月次會に行路卯花
山にいり浦に出るや卯花の雪の下道浪の下道
漸待郭公
鶯は歸りし谷の古巣出て都にいそけ初郭公
濱霞
浦いくへ霞はつらん岩代や濱松かえの結ほゝれ行
時雨
うき秋に馴こし袖の時雨やは今はた冬の空としもみん
四月に雨のいと久しく降侍りけれはある人の方へ
つかはしける
櫻ちり卯の花くたしくたしてもくたさん物か春のおもかけ

四月十九日大樹鹿苑寺へ御成侍て當座の有しに五
月雨
朽行も限りしられぬ軒ならし生る忍ふの五月雨の空
砌松
過し世をさそふ水ある古跡（卿イ）に又聲そふや庭の松風
四月廿四日禁裏御月次短册に冬神祇
神山や南に向ふ日影さへ袖にさえ行北祭り哉
夏夜
よしや月千夜を一夜の空たにも猶おしからてあけん影かは
春杜
たへて人きかすはいかゝ又さかん花も老曾の杜の下風
秋祝
四方の國つくるにたへぬ民やなき稻葉の露の惠みある世は
冬釋教
寺ふかみあか井の氷たゝき捨て花さら洗ふをともさやけし
四月晦日に大樹御參內にて御當座の有しに春雨
ことのはの四方にうるほふ春の雨や君か惠を空にしるらん
月
あこかるゝ心の道や天の海の月の御舟の行衞なるらん
四月十一日龍安寺卅三回に經をつかはし侍とてつ
ゝみ紙に

年波のこえ行袖をことゝへは十つゝ三のみつの濱風

同龍安寺卅三回追善に一品經源政元各にすゝめはへりしに藥草喩品

姿とてわかん惠みの雨もなし峯の松かえ谷の陰草

懷舊

音にたつる身をとはらは郭公歸らぬ魂の行衛告こせ

五月十三日宗月次會に霖

滑まよひすゝ（しらイ）めくりする舟ならしはれぬ雲（ゐ敗）つの五月雨の空

扇

山は動き海はみなきる閨の中やならす扇のうつし繪の跡

闇

えふの世の心の闇をいつこえて菩提の山にすまんとすらん

同當座に　音羽川（春）

山風のせき入し雪や春といへは消て音羽の瀧津川浪

猪名野（夏）

一とをりこやの松原ふり晴て猪名の小篠にそよく夕立

五月廿四日禁裏御月次の懷紙に惜郭公

したひ侘ぬよるの錦か郭公鳴や一こゑ二むらの山

五月雨晴

晴間そと立出てみれは夕月の影より明る五月雨の空

古寺松

吹もたゝむなしき風の聲ならし浮世たえたる岩の古寺

七夕に禁裏よりめされしに七夕瑤琴

けふといへは波のをすけて玉琴に星に手向の天の川風

六月五日松田豐前守（源親元）張行せしに勸發品

月ひとり雲かくれてもとふ法の花の光は世にしみちけり

同廿四日禁裏御月次に日

朝日こかはへさす影やかひかねもさやに見えたるさやの中山

葵

御あれそとあひにあふひや人は神神は人にも心引らん

馬

人もしれとすれは鞭を大津馬のいたくも道は過かての世と

鷹

とりこほす鳥の毛花は名のみしてかほろや鷹の姿なるらん

筆

學ふへき三の姿は筆の海も千尋の底非えやはしられん

七月五日三條中納言家月次會に殘暑

降空の裏からぬ雪や秋も猶てる日なからのふしのねおろし

萩露

眞萩原人はをとせて秋風のおらは落へき露の古里

稀戀

銀河としの渡りにかけてけり見し手枕の夢のうきはし

同當座に夜郭公

結ひあへぬ夢の枕に過ぬめりねてか覺てかさよ郭公

恨戀

いへはえにいはてはてなは大方のうらみになして人や恨みん

七月廿日家の月次會に七夕

天津星何あふ事のやす川や八十瀨の浪は一瀨成とも

荻風

うき物と荻さへはらふ秋風をやとすや何の心なるらん（たへて心の何やとすらんイ）

山榊

山ふかみしけき葉若（若葉歟）の木陰をや神も御室と跡したれけん

當座に後朝戀

けさやかにをしやるきぬの音なひも身にしむ程の今朝の面影

祝言

戰ひの塲の行衞もよく防きよく護るこそ神慮なれ

六月五日三條中納言家月次會蟬

鳴ゆする梢の蟬の諸聲や秋風またぬ一葉をもみん

泉

山深みとはの泉波こえてつもらぬ雪の寒き衣手

笛

海つ神もおしむ心の一ふしや千々の金にかへし笛竹

六月十三日家月次會に浦夕立

浦遠み夕立すらし鹽竈の前にうきたる雲の一村

海邊夏祓

仕へこし身のかた代もうかふ瀨の御祓ともかな關の藤川

顯戀

世にちらん名こそはあらめ柏木の杜の下露消はてれとや

同當座に星

おき出ていたゝく星の位こそつかふる道の光也けれ

床

ゐる塵の對見るはかりうち日さす玉の臺の床のさやけさ

芝

わきてなを都の北野しかそ祈るおふる芝生の事しけき世は

大樹御庭の月を深るまて見給ひてかくなん三首あそはされける

影きよく照すのみかは庭の面の眞砂をみかく夏の夜の月

かけ高き月を御階の橘やむかしの袖の香さへなつかし

憂事も忘るゝはかりむかふ月よいにしへ人はいかゝなかめし

右かくのとくあそはされけるを和し申侍る

短夜も詞の玉の光そへて月にみかくや庭の眞砂地

昔そとさも面影の立花にかほりて殘る月もなつかし

たへてうきいにしへ人もむかひ見は月に心のくましあらめや

ある人申せしに往事眇茫

いつち行いつちゆけはか移る世はむなしき雲の果しなからん

七月廿四日禁裏御月次に江荻

村荻はあらぬ穗なみをなみにのみ見つる入江や秋の浦風

袖露

秋といへはうろほふ袖や久かたの月の桂のしつくなるらん

祈戀

祈りきやさてもうき名の立田山心の風のはけしかれとは

同廿七日諏訪法樂とて源宰相興行せしに神祇

人心直きにひかは梓弓もとをほかにはなさん神かは

八月五日三條中納言家月次會に冨薫枕

小夜深みたれぬき捨し枕より跡より匂ふ藤袴そも

月契秋

秋ことにうきは立そふなかめ哉月や我身の影と成らん

落中川

書捨る文をも川の行末よ思ふ都になかれ出なん

十二月十三日家月次會に爐邊閑談

かたれ友よこ山炭の色なから雪をも埋む闇の火桶に

八月廿四日禁裏御月次御短冊に若草短

春淺みあるかなきかに萌てけりこやかけろふのをのゝ若草

朝氷室

夏まても殘るを君か代よしとて今朝やつけのゝ氷室成らん

紅葉似錦

下草の花はぬもみゝたてぬきを錦になすや木々の紅葉は

傳聞戀

近江路のつてにはきかて思のみすすのをふゝきすゝろなる哉

逢日懷舊

うつり行年そと思へはあるはなくなきは數そふ月日之けり

重陽に禁裏よりめされしに逢年菊

いやとしに開そふ菊の百種も一とはの色香ならすや

九月廿日月次家會に原月

あれまくもおしとは誰か三日の原や月ひとりすむ大宮所

ふしおろし峰更ぬらし行月の松より西にうき島か原

浦月

むへ心なくてをみはや有明の波まにけふる松か浦島

月友

うつり來て名殘の秋も三友に何かはしかん月の爽蓮

同當座に暮春藤

藤浪のなみにしたふも越行や今はの春のすゑの松風

朝郭公

〔此間落丁〕

同八日兼純法師門弟に成侍て歌張行せしに松有佳

色

霜の花に十かへり見せて神無月春も名高き軒の松かえ

同當座に霞

白雪は消あへぬ嶺に紅の霞や春のひかりみすらん

鴨

草枯の入江の霜の朝な／＼をのれ青羽をのこす鳥かも

同廿一日細川典廐會に初春

世は春と時に臨める客の袖の色香やうたふ梅かえ

冬戀

月こほりいやかたまれる霜の庭に心くたけてちる霰哉

暮深みたれを心の松風にこたふ物とは山ひこのこゑ

九月廿四日禁裏御月次懐紙に百舌鳥

朝戸出や人は杪の秋の霜に枯なて寒きもすの一聲

深山紅葉

花こそはあたら姿の太山木を又かたはらと見る紅葉哉

秋不留

明日は春としの暮ともしたひみん秋のみとてや秋はつれなき

五月五日河邊菊花

水無瀬川うつろふ浪の色なからあかてゆかぬや岸の白菊

獨情暮秋

つらきをもいふかひなしと恨むなよ思へは秋も獨こそゆけ

疑眞僞戀

僞りのなきとはりの天津空も雲の亂れを君みさらめや

十月十九日月次家會に冬朝

冬去は日影待えて朝かほの一花霜に開籬哉

寒松

あはれとをよそにやはみん武隈や子もたる松の寒き姿を

待戀

思へたゝ我はねよとの鐘の聲をたか別路に君し聞らん（いとふらんイ）（うらむらんイ）

同當座に山居冬至

松のあみ戸竹のすかきのすきまさへ山風あらみ冬はきにけり

被厭賤戀

しるや君あさの袖とて一枝もおられぬ花のなけきやはある

互恨絶戀

我のみのうきになしつゝ恨しをうらみになして人やたえけん

隣里鷄

一方に鳴ぬときけは鷄の聲やつゝきの里の遠近

十月廿四日禁裏御短册に　春　手向山

紅葉にはあくへき神もあかしとや花を手向の山風のこゑ

秋　水莖岡

秋にそむ心の色もうかひ出ぬこやとの葉の水莖の岡

伏見里

かひなしや行もかへるも里の名のふし見るよはの夢路斗は

鈴鹿川

浪にのみいのる御代とて鈴鹿川八十瀬の瀧にくたく心よ

十一月十三日家月次會に鶴拂霜

はらひえぬ我頭そと見る霜を翅にかけて鶴も鳴之

石間氷

落瀧津浪は霰〔か脱〕の白玉か何そとはかり氷る岩かね

寄市雜

わたる世は淵ならなくにあすか川せにかはり行市人の聲

同當座に月前梅

短夜の名残有明の梅か香にかほりて夢のいつち行らん

名所原

吹つたふ風の姿にまかせてもことのはいかゝ和歌の松原

霧中浦

都出て何そはよけくあしの浦や身は浮舟の波風のこゑ

十月卅日三條家月次會に　落葉隨風

吹しほる木々の梢はむなしくて色なる風そ空に亂るゝ

不憑戀

身は鴈のねにのみたてゝみ芳野ゝたのむにはあらぬ心悲しも

田家

主しらぬ田中の庵のこもすたれかゝるや何の命なるらん

十一月五日三條中納言月次會に　住吉浦

降ませの霰松原かきくらし雪やつもりの浦風の聲

伏見里

枯やらぬ里の名いかゝすか原や伏見の夢のつらき面影

同當座に

山深みたれを心の松の戸に人たのめなるうくひすの聲

澤杜若

たれ栽て残る澤邊にいにしへの心隔てぬ杜若そも

寄枕戀

夢にても見ゆらん物と我床の枕をさへや君しいとはん

永正十三丙子年詠草

正月朔日吉書に

年をへてあふくも高し春日山世にくもりなき春の光を

同十三日家會始に寄世祝道

世に弘き内外の文のとはりも何そは是に敷嶋の道

同十九日内裏御會初に柳弁春

くり返し幾春そめん棹姫の心の色そ青柳のいと

同廿二日南昌院にて會始に竹不改色

色かへぬ宿そと鳥は實をはみて人は綠をくむや竹の葉

同當座に早春

松の雪瀧津氷を吹しほりむすほゝれ行春のはつ風

恨戀
よしさらは恨たえねの玉の緒も猶うかれとや世にかゝるらん
山家
いへはえに岩ねのしつくこゑさひて語るやけふも杉の下庵
同廿一日姉小路宰相亭にて嫡男元服し侍る祝言に
各を招き侍て梅久芳といへる事を各とをり題にて
よみ侍しに
難波津の詞の花に開繼て幾世にほはん宿の梅かえ
此次に詠し侍て宰相につかはしける
いちしるき初本結に幾千世をこ紫なる色の〔マヽ〕てこらさ
宰相返歌に
いちしるき詞の花そこむらさき初本結の立（色イ）もそへける
同廿三夜月待六首に春
時めける光のとかに春の風春の水にもうつる心よ
夏
諸つ人かたれはかたる一こゑを千々に分るや初郭公
秋
夕されは薄霧寒き小山田に月ほのめきて鴫の立聲
冬
いすゝ川神も慮やよせぬらんうたふも淸きさゝ浪の聲
戀
一言もせめて打出て戀しとをいはゝ恨のひまや有なん
雜
住吉の神もとはれ我道を守らむといひし松のことのは
去十六日典廐會始に池水久澄
五百年にすむてふ河をいくそたひせき入てみん宿の池水
同廿二日上池院會始に松有佳色
武隈や子もたる松もこの宿をしる八にせん若みとり哉
同當座に春
糸竹の聲も柳の花苑に亂れあひたる雲の上人
冬
御幸する野は枯色の狩衣昨日か花を分まよひてし
神
諸つ道も何かまよはん天の戸をいつの千分の神の光に
同廿七日妙滿寺といへる法花宗坊にて寄世祝
さらに又幾八千度かあひにあはん君と法との道絶ぬよは
同當座に初春
百敷や裳はしりの玉もゆらに光時めく春の空哉
戀水
しらしかし我さへいさや袖に落胸にとゝろきの瀧津心は
幽居
深山井は苔のしつくに松の風□にもこたふあまひこの聲

二月五日理乘坊にて梅花久薫

幾春か連る枝のこのかみと名のるはかりの花の匂ひそ

同當座に春天

草も木も天津緣の霞にやたなひかれつゝ春を知らん

春神

世は春と和らく四方の光こそ三十萬なる神慮なれ

同十二日上池院會に春色

さま〳〵にくはりしきぬや染分し心の色を春にみすらん

十二月十六日三條中納言亭月次會に雪

眞木の戸のをとのみ寒て明る夜にはや里の子の雪よはふ聲

歲暮

老行も何か惜まん年なみの立とやすき身とし思はゝ

山家鳥

さひしとて誰を心の松の戸に風ふくろふの山深きこゑ

同當座に閑居落葉

吹しほる落葉よりけにもろき身の露を忘るゝ山風の聲

海邊冬鶴

をと寒き波はより來るたこの浦に打出て行鶴の諸聲

朝戀

あなかまとよる朧捨しきぬ〳〵の今朝そよさらに物思へとや

十二月廿日家月次會に舊年立春

月も日も猶おしめとや一年を二年にして春のきぬらん

絶互悔戀

契りきな人も心にかけ氷のこほるも同し袖ぬらせとや

同當座に初冬木枯

冬と吹木枯の風も見し秋の心のいろは殘す山哉

寒閨月

我のみとなかむる月のさゆる夜に閨の板まも目はあはすして

炭竈煙

永正三年

同二月廿四日禁裏御月次短册に花

ぬる鳥はおとろきあへぬ花の鈴のあはれ嵐にかゝらましかは

虫

秋されは千々の愁のいとすちをいく機たてゝ虫のをるらん

雪

行て見ん心の色も朝な〳〵積るや雪の浦の初島

初逢戀

身にかゝる波のあふ瀨よ聞わかぬ聲をよすかのうちの川風

述懷

何をまち何をえん身の行衞とてけふよ〳〵と世に堪ぬらん

二月廿六日萬里小路追善とて張行し侍に夜

物ことに夜やは常なる出しより入とはりの月を見るにも
同廿二日水無瀨御法樂とて内裏よりめされしに關
路歸鴈
行空も宿はあらすやしたひ侘まよふ霞の關の下道
隣家荻
さよ深みいてそよ荻に見し夢は千里隔つる風の中垣
詞和不逢戀
いつ心やはら手枕貫川や詞の浪は氷とけても
峯雲
雲かへるひらの山風暮ぬらし高ねをこゆるよこの浦波
同廿四日禁裏御會御短册に河邊柳
身は六十六田の淀の古柳何世の波に朽殘りけん
曙山霞
鐘の聲瀧のひゝきも水無瀨山霧漲りて有明の空
祝言
月ほしの名高き國もさもあらはあれな日本あきらけき世そ
同廿三夜月次六首春
八千年の限もあらぬ花そとをうふる詞の玉椿かな
夏
神祭る平野の杜におふる杉のあやしや人のしけき行かひ
秋
迷はぬや君に引るゝ道ならし立しきり原の駒の足なみ
冬
殘りなく栬ちるらし月影の淸き川原にさゆる夜あらし
戀
戀しともうしともしらて過しつる心はたれか心なりけん
雜
祈る事三つ叶なる神慮直きはたれか隔てあるへき
同晦日釣閑といへる表德號に此心を人の所望し侍
るに
江の水に眠るかもめの心をもたゝ一すちに釣の糸棹
三月二日上池院會に藤
春日山露のひかりのやはらかは末葉も藤の花やたのまん
岡
さらてたに思ひの宅よいつ出て戀路の外の道に入へき
同當座に名所餘寒
消かての雪に閉ぬる櫻戸を花そと扣くしかの山風
名所杜露
身を秋の夕暮ことに消かへる何と老曾のもりの下露
同四日廣橋中納言亭にて當座に島霞
曙を波に浮めてむへ心あれなと霞む松かうらしま
戀鳥

待にのみなれつる夜はとそとも鳴ねあらそふ鳥さへもうし

同十一日外郎濃洲へ下り侍るとて所望せしに暗夜

梅

あやにくにくらふの山は明ぬともやとり取へく匂ふ梅かえ

同十四日寺井（武田被官）百ヶ日追善とて宗長張行し侍るとて前内府（二條尹房）申されしに藥草喩品の普皆平等の心を

八十隈もわかぬ光は心よりすむらん月の御霊ならすや

懷舊

見しはその夢と覺（讃川）行百草や枯なて千々に猶したふらん

同十六日有馬助亭會に初春

雲の上や老の姿の白馬も又こまかへる春の長閑さ

瀧水

見はやせと八十氏人をいさめつゝうつや鼓の瀧浪の聲

同十七日に南昌院會に花雲

行衛なくうつる心の色よりも野山にかゝる花の白雲

島花

浪遠み花はけたれぬ面影に霞にうかふ淡路島山

落花

淵川に花のうき橋をのれかけをのれわたるや春の山風

同當座にさほ姫の

棹姫の姿を四方にあらはして山のはことに立霞かな

あき風に

夕されはうきをすさひと秋風にいてそよ荻の名乘かほなる

同廿一日下笠方より牡丹枝に付て一本も君か詞の種なれは花の色のみ猶ふかみ草と侍けれは返事に

一本も千々の詞の花のたねとしる心こそふかみ草なれ

同廿三日月待六首春

行衛なく吹まよふ花に蝶鳥も心空なる春の山風

夏

草かくれまたなきあへぬ夕露の光あらはし飛螢

秋

秋されは茅原色つく夕霜に千鳥しは鳴川風そ吹

冬

あらましき嵐の雲の行衛より先けしきたつ雪の遠山

戀

やよいかにまたし今はの鐘の聲をたか別にか君し聞らん

雜

祈る身の光とも末の〔世字カ〕もてらすを月の心なりせは

同廿四日禁裏御會に夕落花

人はちり花はむなしき山陰にひとりかすめる松の夕風

川款冬

春ふかみよしのゝ川に移りけりさくやいもせの山吹の花

寄門戀

扣きなはあなかま夜半と妹か門さすかにうたふ　てよ

同廿九日住吉法樂とて人のすゝめしに

谷鶯

波の花をのかやとりと谷風にうきてなかるゝ鶯の聲

祝言

深緑いくかへりみん春そとも心やねさし住吉の松（印州新に侍る也）

後妙華寺殿（冬良公）薨し侍らんとての前のとし一休和尚塔
を拜し給ひて彼和尚弟子の踈壁軒へつかはされけ
る詩歌　曾聞小室有單傳　何識同參踈壁禪　仰見
林間孤塔影　風霜雖古蘚痕鮮　我やとの物にはあ
れと桃の花御法の名とは思はさりしをと侍る　和
韻を各し侍りければ馳兎毫者也

後妙華寺前傳陸大相國拜眞珠老師塔之次。祇夜與
和詠絕作有兩篇。呈予踈壁翁之猊床下。兹歲永子暮
春念七。丁殿下大祥忌之辰。慕哀今猶有餘。花鳥山
川無哭不慟。矧於人倫哉。是故各見和舊韻。予亦以
辱識之好。弗顧蕪語。應貢押副詠和風。以奉供那伽
定裡之一莞云。　桑門宗清

遺公曾以不傳々。平日縱成文字禪。八万四千祖師偈。淡
聲詩說絕言鮮。

物いはぬ花とやは見んさけはちるもとのさとりの春風の聲

卯月廿三日三條前内府廬山寺にて出家し侍て家に
かへるとて　故鄕に立かへるとてとかむなよ錦に
まさる墨の衣をとよみ侍るよし申されければよみ
てつかはしける

故鄕に立かへるとも心そめは墨の袖こそ錦なりけれ

同廿三夜月待六首に春

ちゝに引春の心やのとかなる霞の袖をはしめ成けん

夏

諸人のかくる五月の玉もゆらに色めく袖そけしきとなる

秋

秋篠や月淸き名もことのはの露に殘りし跡をしそ思ふ

郭公一聲

聞つとをかたりあはせて一聲も千聲になすや初郭公

鵜川

かつら舟波の高瀨もうかひ人のけたぬ思ひや篝なるらん

後の世はさもうき瀨々の鵜飼舟うかふはしつむ浪路ならすや

うかひ人浪の高瀨にさす舟もけたぬ思ひやかゝり火の影

戀名殘

別路にかこちし鐘の聲をさへ名殘の數に今したへとや

冬

はけしさはうき世にならふ心ともしらて吹しほる木枯の杜

戀

よしさらは限もはてしいとふこそ身をしれとての情なるらん

雜

年へても思ひくまなき心とは祈らぬ月よ身の光なれ

同廿四日禁裏御月次の短冊に書

けふも又羊の歩ちかしとを心のむまはおとろきもせし

鷹

鷺たてる小川の末の山陰になれも手にきる初鷹哉

鶴

かはり行世のあた浪に鳥津鳥うくも沈むもよそにやはみん

同廿八日南昌院月次會に朝更衣

今朝のあさけ心の花の色はかり消すは有とも袖やかへまし

夕郭公

鳴捨て物思へとや郭公雲のはたてに遠さかり行

夜尺敎

天津空夜はすからにむかふとも心の月は心とやみん

同當座に春

物の音もしるき柳の花苑に鶯うたひまふこてふ哉

冬

吹はらふ物にもかもや色しなき我ことのはの木枯の風

恨

いつまほの心の舟にあふみのや八十の湊はうらみはてゝも

旅

風の傳も思ひたえにし故郷にかよふ物とは夢のうきはし

五月十二日與既亭にて曉郭公

峯高み月こそいらぬ有明の空おほれすな山郭公

寄鐘戀

待よはり我はねよとの鐘の聲をたか別路に君うみむらん（らむ）

名所鶴

しほしまゝ心のまつに契りてよかはす詞のわかの浦鶴

市商客

問はやな大和ことはのたまく〵もうる道いかゝみわの市人（いさしらんイ）（まほしイ）

寄星祝

天津星の名高き國も日の本の光に及ふ光ならめや（つきにイ）

同當座に天

二はしら立名も代々に高かれやそのことのはの天のうき橋

夜

烏羽玉のよるともにさてさゝしかし我世のやみの夢の浮舟

南

かほり来る風のやとりの陰ふかみありとやこゝに軒のたち花

六月二日本（常一也）行坊にての懐紙に竹爲師
窓ふかく學へる文や春秋も葉かへぬ竹をしる人にせん
同當座に摠
六月の光の雪に鳴ぬめりこや時しらぬ山ほとゝきす
水
さしくみに先しるけふよときをきし八年の法の水の心も（有注）
有。法花衆にて本行坊侍りけれは。夏中をのつから法
花の法談侍れは聽聞し侍りて。法談はてゝ歌會侍れ
は。其心をよみ侍也。然るに有注と付之也。
同十四日南昌院の月次に夏香
筑波山嵐吹らし橘のにほひさはらぬは山しけ山
夏人事
糸竹の聲も流れて川水のしらへ涼しき浪の月影
同當座に名所嵐
はけしさの人の心をいさめつゝ吹やはつせの山風のこゑ
名所冬
月よ花よ紅葉もよしやさもあらはあれ（わた脱歟）のみ崎の雪の朝明
名所帶
祈りきてけふにめくりし常陸帶の思ふすちをは神そしるらん
名所玉
光そへて見るらんたれそことの葉の玉造り江に淸き月影

同廿三夜月待六首　春
くろ春のすみ（須彌）の緑や野も山も色の千種のはしめなりけん
夏
辛崎の松は一木を諸つ人や陰に御祓をすかぬきぬらん
秋
深わたるあきしの里や朝なけに吹もあらちの山風の聲
冬
夕されは茅原枯たち霜さえて川原の月に鳴の一聲
戀
戀しなん命そ人のなさけなるさてもや後の世にしあはんと
雜
老よいかゝ賤のをた卷くるとあくと祈るもうきを筋ならん世は
同廿四日禁裏御短尺に樵路春草
肩を重みおへる木こりはかへる日に折手みせたる野への早蕨
秋窓鹿
小萩ちり霧ふたかれる山窓は我もしかなく夕ならすや
初冬朝
朝霞立空ならて神無月春の物とは何時雨らん
閑中待春
よろも又いやはねられん松の聲瀧のひゝきを慕しかれても
七月七日禁裏御會に七夕霧

水無川天の雫の外にしも霧の隔てやほしうらむらん

　永正十三年七月二日（六イ）南昌院當座に關草本

來る春はへたてぬ道もかすみ行人の心やうやむやの關

　菊色々

もえし春は一つ緑に見し菊もあけうはふ色や花の紫

　曉神樂

うたふそとねさめてきけは薦枕たかせの波も聲かはる也

　七月十七日家會に殘暑

置かぬる心はせをの扇をは破るとなしや秋の初風

　草花

百草の野守のかゝみよそなからみやは過てん花の面影

　絶戀

たえはてゝ戀路よいかに七曲の玉も行衞はありてふ物を

　同當座に玉露

よるの雨に置あへぬ露の玉柳玉の緒とけて朝風そ吹

　たまくしけ

形見かほに殘れ詞の玉くしけ身はさすらへん浮世成とも

　同廿三夜月待に春

春としもえやは思はん祈るてふ心の花のひらけさる世は

　夏

我やとの詞の泉清き手に八十氏人のこゝろをそくむ

　秋

かひなしや幾秋かけてたのみこし心を月の照さゝりせは

　冬

何ゆへそ春夏秋と過しきて冬またのむ老の心は

　戀

戀しとを詞にいてゝいひやらはせめてなくさむ方やありなん

　雜

あなたうと神や佛とあふかすは身（え敗）やはうかまん此世後の世

　同廿四日禁裏御月次に初秋衣（イ廿六日也）

こし秋は一夜二夜の芦のやに波かけ衣すゝろ凉しな

　秋野忘歸

斧の柄の朽にし山も秋の野の花にうつろふ日數成けん

　寄鳥戀

何ゆへと見るらん妹か庭たゝきよしなき姿鳥もあらすや

　七月晦日禁裏御會和漢發句に

折えんは椎もいさゝ萩か露

露くたく萩の葉風や玉の聲

　右二句叡覽にそなへ侍りけれは萩をとの叡慮也

　八月三日南昌院月次に鴈

海原や鴈はから櫓をこゑ〳〵にをし明かたの天の鳥舟

　月

松の戸を峯の嵐にたゝかせてたゝすむ影や月人男

　　烟

ふしおろしいかに吹はか神たにもけたぬ烟の立空もなき

　　同當座に春

花盛いける佛の御國をもよそに隔てぬ春かすみ哉

　　夏

諸神も心よすらし河社しのに涼しき浪のゆふ風

　　秋

結ほゝる心のきつな人よいかに神はいけるをさも放つ世に

　　旅

岩木さへ姿はかはる深山そと都のたれを忍はすもなし

　　同四日問田掃部頭所にて草花盛

こん秋は幾百かへり百草の花の盛りも宿の盛も

　　八月五日不斷光院會に萩壽延引

花にたれ根さりけん一本の萩を野山の風のやとりと

　　同十六日家會二首懐紙に月前聞鴈

月に吹ふしのねおろし秋さえて雪より落る天津かりかれ

　　月霧中友

身のやつれ月もおもなやとは歎きかくは親しむ旅のよな〳〵

　　同當座に朝花

夢路より先さく花や朝には雲と成てもまかふ面影

　　田家雪

守捨し田中の庵のこも簾捲もおろすも雪の山風

　　同十七日駿河の蓮阿張行せしに

五色の光もいさや花の香に有明かすむしかの浦風

　　不逢戀

年へてもわたらぬ中のいもせ川何あさはかに思ひ初けん

　　永正十三年九月十三日夜於播州飯川山城守張行せ

　　しに山月

行衞なくうつる心をまほにあけて月の御舟の山風そ吹

　　崎月

入空も波をかきりと箱崎や月より西は山のはもなし

　　同月　月十二日赤松亭當座春天象

ひらけてはすむを天そとみん月にかすむや何の春の夜の月

　　秋雜物

秋風のしらへそひ行物の音や身にしむ雪を猶さそふらん

　　黑

萬代と思ひのすちに黑髮のおひさきしるき宿のみとり子

　　同年　月十七日赤松亭春色

空かけて波も綠の朝風や柳つゝきのはるの海はら

　　同年　月十三日上月中務亭にて島月

故郷は浪のへたてのいもか島月をかたみのうら風もうし

橋月

雲井なるこれや黒戸のはし柱立名も高き月のさやけさ

同二月赤兵亭にて當座瀧霞

音はして空に成行鈴鹿川八十瀬の瀧や霞はつらん

樹陰照射

五月闇さつをのゆつる一すちにさすやともしの檜原槇原

杜露

袖に置身に消かへる暮ことの秋に老曾の杜の下露

連峰雪

明てさへよそに高ねは殘る夜に獨ほのめくふしの白雪

忩別戀

さらてたに別れん空をことそとも鳴れ催す鳥の心よ

神

神慮たなひく雲や八幡山三の衣の姿見すらん

同月五日赤兵へつかはしける

旅衣都こふ夜は音にたてゝ我もしかなくね覺とをしれ

返事赤松兵

住馴し我たにあれは旅衣さそなれ覺の夜半の鹿の音

於播州也 同月五日統秋へつかはしける よはみ歟

秋寒き旅の心の緒を　させてふ虫のなくねさへうし

返事統秋

秋寒みつゝりさせてふ虫のねもひとへにつらきかたしきの袖

同九月十日於播州若公御會に鹿

吹つたふ都ともかな諸聲に我もしかなく秋の山風

蒙本ノマヽ

そみそまぬ人の心の秋の色を時雨も分るむら紅葉哉

戀

よしさらは恨もはてし恨みしをうらみになして人やつらきと

重陽に赤兵より　よしさらは千年の洞の菊までも

けふさてかさせ君か袂にと侍れは返しに

幾秋か君にひかれて仙人の心もくまん菊の下水

同十日於播州若公御所御當座に日といふ事を予公

御代に

朝ことに出る日影や立かへる御代の光を空に見すらん

乙法師といへる童の代に　竹

すなほなる竹の世よしと實をはまん鳥も住へきこの砌かも

愚分　文

天照す神も内外の文の道や學ふもなをき世を守るらん

寶

ありとある七のたからも何ならし一つ心の玉し清くは

同十三夜赤兵より　いつはあれと猪名高しな君こ

ゝにみんとそすめる秋の夜の月と侍るに

敷わふる草のかりねもことのはの光を月の都とそ見る

九月九日に無住（墨イ）かたより　君のみやくみてしるらん積りては露もなかるゝ菊の下水と侍れは返事に

諸ともに千とせの秋もくみしらん露の惠みや菊の下水

同十日雨降侍るに赤兵へつかはしける

さらてさへ旅はうけくに秋の雨の糸くり返し袖ぬらせとか

返事赤兵

とのはの花をもさそふ秋雨は旅のうけくのなくさならすや

同十六日赤兵へつかはしける

山姫の心の色を今朝見せて夜半に時雨し梢ならすや

返歌赤兵

時雨つるその山姫の心より君かことはを千入とそ見し

同十六日上月孫三郎并勝覺寺（播州にや入也）等來て當座に天象

秋の山たか一筆のうつし繪か素きを後と霧（のイ）も立らん

曉

かきつめし老のねさめを人とはゝ涙の落葉鴫の立聲

同十七日に秋雨物すこく降侍れは上月中書へつかはし侍る

旅衣身をしる雨を大かたのうけくに秋と人や聞らん

返事中書

大かたのうけくにきかん雨もなし旅ならぬさへ秋の袂は

同日勝覺寺につかはしける（勝覺寺り播州にてはかりねにて侍るゝ）

聞やうき我もかりねの枕より跡より虫の音にきをふ夜を

返事　勝覺寺の政範法師

枕にも跡にもしけき虫のねを君か聞にはうからましやは

同廿三夜月待六首　春

うつり行花よ紅葉とことのはの色に（の歟）千種に春やきぬらん

夏

たへてまつ心ならすは初音とも聞やはわかん山ほとゝきす

やよいかによしつらかれな郭公まつ心こそ初音なけれ

秋

夕されはまさきらつろふ山風に月かけそよきすかる鳴聲

冬

折かへしたれうたふらん深る夜の霜も八度の榊葉のこゑ

戀

ことのはの昨日の雲よいつはりのなき斷の空とやはみん

雜

仕へこし世をは捨ても子を思ふ心の道に何まとふらん

同十三夜に上月中書にての發句に

名そ二夜心は千々の秋の月

同廿六日藥師寺越前代＝

紅の筆の林や秋の山

同廿七日相河阿波守所にて
春近し年やしたはん秋の暮
同九月二日に赤兵亭にて當座に窓落葉
昔おもふね覺の窓に見し夢の名殘ももろく散木葉哉
寄瀧戀
契りきな心はよそになる瀧や思はぬせゝを袖にみんとは
同四日赤兵より菊の枝に付て
過て行秋の名殘や龍田姫や染のこしたる菊の一本
返事
草も木も秋の色をは龍田姫や昔ゆへ殘す菊の一本
同六日赤兵にて當座に五月五日
うなひ子かけふぬきもてる太刀かたなあやめも同姿ならすや
寄世神祇
曇りなき代々の日嗣や天照す神の光と四方に知らん（あふかんイ）
同八日に赤兵より　神無月しくれぬ空はいつはり
のなき世見せたる光ならすやと侍れは
時雨ぬも光ならすや神無月空もいつはる世にしならはゝ
同九日英保左京亮所にて赤兵なと出られけるに當
座夜
あくかるゝ人の心の道ならし四方に晴行月のかけはし
祝
庭廣き心しらひを幾世とか岩のおひさき松のおひさき
道春法師をこひ侍てその裂紙に身こそあらねゝゝ
ゝゝゝ
返し
〔此間二行闕〕
人はやはかくともしらんかくなはの名は立なから亂れ心を
雜
神よ神佛よ佛とはかりにいのるいのりのいつかなひてん
同十月廿六日於播州藥師寺越前守代に發句
春をゝきて花や十かへり霜の松
極月五日不斷光院にて年内早梅
冬さくは連る枝のこのかみと見るへき花の姿ならめや
霜月十六日家會に海邊冬月
冬されは浦こしさえて月影も音にくたくる霰松原
禁庭雪
みやつこも清めすなつめ天人のしくらん玉の塵の砌は
述懐
老は身にいかなる物そ六十あまりむつましき友も遠さかり行
同當座霞をわけて
春されは心の花も行衛なく霞をわけて匂ふ山かせ
まつはつ浮を

玉すたれ横立峯の朝戸出にまつ初雪を見やはとかめぬ

極月六日南呂軒にて神樂

祈る世のよしあしわかは難波潟うたふに神もなひかさらめや

爐邊閑談

いつみんの櫻のほたや埋火にかはす詞の花さそふらん

田家雨

こも簾かゝるやすさひ降雨のいねこきたるゝ小田のかり庵

同當座に春曉

明かたの遠山かつらほの／＼と幾里かけてかすみ行らん

秋木

梓弓矢田野をゆけは露霜の百枝の櫨に心引めり

年

一やは耳順はん六十あまりむつましからん道のをしへも

極月十六日家會に清瀧川

左

政みちある君か代にしあれはしゐてもいはんとふきそなき

右

家／＼のたのしむ道もくらからし千代もとあふく君か光に

左歌。句をは隔て侍らねと有ノ字二あり。自然の作例も侍らんすれと。わさとつゝけてよめるとは見え侍られは。このましからさるに。第四句もいさゝか思ひたくや。右の歌。道もくらからしと侍て。君か光になと侍る。難なきに問勝とや申へからん。

右爲廣卿詠草以彼卿自筆書寫之訖。重得閑暇可遂清書耳。

右二條爲廣卿詠草壹册。元祿己巳歲。以板垣宗憺所借書肆林白水本寫。

彰考館識

續群書類從卷第四百三十五

和歌部七十

貧道集

春歌

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき立春
をよめる

をしなへて賤のふせやをけさ見れは松とともにそ春は立ける

立春歌

いつしかとみかきのはらの朝霞あやしやなにの春のしるしそ

み渡せはよもの山への霞めるを春たちぬとはいふにそ有ける

春たてはこほりの泪うちとけてけふそなくなる谷のうくひす

みよしのゝ山路の雪をけさ見れはとくるや春のしるし成らむ

あさ緑空にそいとの遊ひける春はこちよりくるとこそきけ

あふさかの關のすきはら霞たつ春のしるしはみわもたつれし

新千載 いつしかと末の松山かすめるは波とともにや春のこゆらん

俊成卿十首の歌よませけるうちに立春をよめる

初春のちよもといはふしるしにはまつ一年をけふそゝへつる

處々立春 句題百首

九重にけふくるはるのやへ霞たちやはすつるふるきみやこも

むつきのついたちによめる

初春のちよのとのはひきかへて西へといそくいはひをそする 久安六年

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられしとき舊年
立春をよめる

つきよめはまた冬なからさきにける此花のみか ケイ 春のしるしは

やまてらにつれ〳〵としてこもりおるに舊年には
るのたちけれはよめる

一年にふたゝひ春はたちにけりまたふる年のゆきのまに〳〵

はるかすみ年のうちにしたちぬれは池の氷のかたへとけゝり

おしみしを思ひしりてや白雪のまたふる年にはるのきぬらん
鶯もはるたちぬとやしら雪のまたふるすよりいそきいつらん
讃岐院百首中に早春の心を
峯の雪谷のこほりもはる風にいつれかまつはとけまさ（はしむイ）るらん
讃岐院くらゐにおはしましゝ時百首歌たてまつれ
とおほせられしとき子日をよめる
九重に子日の松をひきうへてけふこそちよのはしめなりけれ
同院百首歌のなかに
ねのひする人なきのへのひめこ松霞にのみやたなひかるらん
おなし心を
しるしらぬなこやかのへにむれきてそ春は子日に心やりつる
春をにさかゆるのへの小松原ちよのためしにむへもひきけり
子日群遊（句題百首）
のへをにけふは子日とうちむれて宿にはとまる人もあらしな
讃岐院位の御時百首歌たてまつれとおほせられし
に霞を
いつしかと朝のはらのやへ霞またよをこめてたちにけるかな
同院百首のなかに
いはねとも霞たなひく雲井にてそらにそしるき春のけしきは
同院位におはしましゝとき人〳〵霞をたいにてう
たよむついてに
春霞けふりとみえてたらにけり今こそのへはもえわたるらめ
公通卿十首歌よみけるにおなし心を
をくら山霞わたるとみる程にやかて日くれになりにける哉
山寺にすみ侍るにかすみをよめる
はるたてはやへの霞にうつもれぬ雪またきえぬ谷のいほりは
賀茂に歌合す（治承二三十五日）とて蝦轎朝臣歌よめとて題かおくれ
るに同心を
あさ霞をしほの山にたち　けりいはねとしるし春のけしきは
霞のこゝろを
花にあかぬ人のためとや菅の根のなかき春日となりはしめ劔
春霞といふをたいにてよめる
やへにたつ霞の衣うちきてそはるのすかたはあらはれにける
しからきのとやまの霞立ぬれはみやきひくなる聲のみそする
みや（またた歟）きもり春はひはらにてもかけて霞にのみやたなひかる覧
朝かすみ春のしるしにいつしかとめにたつものは霞なりけり
たひ人のいそくたつきもあさまたき春は霞そさきにたちける
わくらはにたつれんひとも谷深きやとは霞にうつもれぬらん
春霞こゝろなきなやたちぬらんいもせの山のなかをへたつる
やへ霞天のはらまてたちぬらしたかまの山もみえすなりゆく
山路霞（句題百首）
朝またきしかの山越するほとにさきたつものはかすみなりけり

おなし題を

春きては霞のそこもたとられすふみならしてしいはのかけ道

なか〱に霞のまゝにわけゆけはしらぬ山ちもこえにける哉

霞隔關路

朝霞われよりさきにたちこめてたつきもみえすあふ坂のせき

霞籠寺深

やへ霞難波のみつのてらこめてすみけんあまの跡もしられす

あきしのはおりならすとや春はたゝ霞のうちに立かくるらん

始聞鶯といふを題にて

ふるすをは春とゝもにやたちつ覽けさ鶯のうひになくなる

同題のこゝろまたよめる

鶯のこゑにはいろもみえねともけふきゝそむる心にそしむ

いとはやも谷の鶯きなくなりいつくもこれやはつねなるらん

〔題落〕春雨のやよひのつきのはつるまてふりせぬものは鶯のこゑ

讃岐院くらひにおはしましゝ時百首歌たてまつれ

とおほせられしに鶯をよめる

鶯はみなみやこへと出はてゝはつれそきゝしはるのやまさと

同院百首歌めしゝ時おなしたいを

うくひすのたにより いつる初聲にまつ春しるはみやまへの里

鶯のねくらのたけはときはにてなにゝつけてか春をしるらむ

大宮中納言伊通歌合に

くれ竹のいつれのえたかふしところあさいせられす鶯そなく

讃岐院位におはしましゝ時人々あまたうたゝてま

つれるうちによめる

うくひすのはつ聲きけはこほりせぬ心さへにもうちとくる哉

うくひすの歌とてよめる

やとりする梅はふゆよりさきぬるをなと鶯のはるきてはなく

よのまにや谷のふるすを出つ覽またあかつきのうくひすの聲

鶯はなれかこゑをやしるらへにてやかて古巣をいてゝきつらん

苑中鶯句題百首

花さかぬやとのそのふのくれ竹に春をしらするうくひすの聲

讃岐院御時鶯曉囀といふたいにてよめる

あけゆくか八聲のとりのもろこゑにもゝ囀のうくひすそなく

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

若菜をよめる

君かためはるをにつむ若菜こそおいすしなすのくすりえけれ

同院の百首のなかにわかなのこゝろを

新古今 若菜つむ袖とそみゆるかすかのゝとふひのゝへの雪のむら消

老人採若菜句題百首

〔此[illegible]題[illegible]共詠歟〕幾年に若菜つみつゝなりぬらんかしらにつもる雪もさなから

おなしこゝろを

冬かれし春日のゝへのしたもえに若菜つむへき程はきにけり

讃岐院位の御時の百首のうたに殘雪をよめる
きえのこる春のこすゑの白雪を花さくまてのかたみにもせん
おなし題を
冬なからきえせぬゆきは谷ふかく空〔深歟〕まて春やたちこさるらん
いはしろのむすへる松にふられともまたうちとけぬ谷の白雪
きぬかさをかのほとりにすみ侍し時ゆきのふれる
をよめる
春たちてやなきかされとみゆる哉きぬかさをかの松のしら雪
澗底殘雪句題百首
谷深み春にしられぬ雪のみそうきよにきえぬためしなりける
讃岐院位御時百首歌にむめをよめる
むめの花うす紅のいろよりもあやなくかこそ身にはしみけれ
同院おほせにて
雪の色も薄くれなゐも梅の花かほるかにてはわきそかれつる
同院御時歌めしゝに
梅かゝを吹くる風はさそふとも色をはあたにちらさゝらなん
梅をよめる
梅の花にほふかきねの山里はしらぬあるしのなさけをそみる
内裏會に梅有佳色
梅の花にほふさかりはわひ人のよそにみるたに物思ひもなし
泉殿御室にて人々うたよみけるに霞中嶺梅と云題
を
やへ霞くらふの山のむめかゝはみれこす風のつてにこそしれ
梅花薫闇句題百首
梅かゝのよとこ匂はすうれしくそ槇の板戸もさゝすれにける
同題を
梅かゝのれ覺のとこに匂ひきてそらたきものとわれはかくゑ
隣家梅花と云たいをよめる
我宿の梅とやみえむなかゝきをみちゆきふりの人はしらすて
中垣のあなたの梅もこちふけはかはわか宿のものにそ有ける
京やすみうかりけんゐなかなるやまてらへまかる
みちにしつのかきれなるむめのかうはしかりけれ
はよめる
いなしきもかきれの梅のかほるかは花の都にかはらさりけり
讃岐院位御時百首に柳を
しら露のつらぬきかくる時にこそたま柳とはいふへかりけれ
同院の仰にて柳の心をよめる
春雨のふりしむまゝに青柳のいとにつらぬくたまそかすそふ
柳被染雨
さをひめは柳のいとをくりかけてふる春雨にそめさするかな
柳臨池水句題百首
しらま弓をしてはる雨いろなしにいかてそむらん青柳のいと

池水にきしの柳のいとたれてむかしつりせしこゝちこそすれ

讃岐院位御時わらひをよめる

春のゝにさわらひおると旅人のゆきもやられぬをきのやけ原

入山尋花題として

花みすはかへらしと思ふわれやそのよもきか山を尋ねけん人

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

櫻をよめる

くれぬ共花のあたりに宿りせんよのまの風にちりもこそすれ

同院百首歌たてまつれとおほせられし時

春のよも久しかりけりあけはまつ花みにゆかんとおもふ心は

このもとに宿らさりせはみましやはつきさしかはす花の光を

高砂のをのへの櫻なみたてるまつにときはをならひやはせぬ

いかにしてさきはしめけん我宿のものにはあらぬはな櫻かな

下集 えたしあらはまたもさきなん風よりもおる人つらき花櫻かな

千載 山櫻かすみこめたるありかをはつらきものから風そしらする

中納言伊通歌合に花をよめる

昔よりかくこそ花はをしみけめたかならはしに散はしめけん

清輔朝臣の歌合に花をよめる

なつさふに花のなたてのみなれ共木の下陰はすきもやられす

讃岐院御時花をよめる

山さくらおしむ心はときはにてあたにも花のちりぬへきかな

同御時法金剛院にて花をよめる

さくよにたくひもあらぬ花なれはあかぬ心もとしのみかは

俊成卿歌あまたひと〱によませけるときによめる

たかさこのおのへの花のさかりにはこゝもなみこす末の松山

花のこゝろを

みよしのゝたかきの山の櫻花ならふにほひはまたなかりけり

ひとかすの我とはなしに山櫻たつぬるみちはまつそさきたつ

吹風に花の匂ひはぬすまれぬなにをまもりのかわとかはせん

花みむといそく心をしるへにてしらぬやまちにさそはるゝ哉

わかきつるかたもしられす櫻はなたつね行まに山ちくらして

さくら花とくゆかしさに春霞かゝらぬやまのわれもなきかな

櫻花さくへきほとになりぬれはたつねぬ山のかひなかりけり

よしの山花のさかりになりにけりきえにし雪のさらに積れる

さく花そ思へはつらきかくはかり惜むにとまる年しなけれは

おく山の櫻かしたのこけ莚ちりかゝれとやかれてしくらん

わかやとにいかてさきけん櫻花かゝるうきみにあはぬ匂ひを

我よをは花のかけにやつくさまし春をかきらぬ匂ひなりせは

筑波ねのこのもかのもを尋ねつゝ山のかひある花をこそみれ

おいてこそいとゝも花はおしまるれ又もみるへき齢ならねは

ちりぬともいかゝかへらん山櫻あかぬなこりの花のこかけは

山櫻あかすや人もくることにすかたもしらす立ましりつゝ
さくら花ちりてときはに匂ふともあかぬ心はつきしとそ思ふ
山さくらさくにつけてやならのみや花の都のなをはたてけん
としをへて花の匂ひのあかなくにをしむ心はつきぬなりけり
はるごとにあかぬ心のつきせぬはとしにや花のさきまさるらん
やま櫻あたらにほひのやさしくも苔のたもとに散かゝるらん
高砂のいそへのさくら咲ぬれはいそくふなても忘られにけり
よそならは雲とやみましなにたかき吉野の山の花のさかりを
さくら花とまれる年もなき物をいつにならひて猶おしむらん
やま櫻ちらはこゝろしくたくとも花の盛りを見やはすつへき

毎年見花

さくら花ちるをはみしと思ひしにをしもこりすおしみつる哉

終日見花

なかしてふなをもたのまし春の日の花みる程のあかぬ心は

山寺にこもりゐて侍し時遙見山花と云こゝろを

たにこしになかめをやらん山櫻いたらはみちの程にもそちる

深山櫻花

とりたにもこゑもきこえぬみ山にも花こそ春を忘れさりけれ

山路花をよめる

ちらぬまは花の陰にをすまゐせんいかにすらしもしかの山越
ひとはいさしかの山越我はせし花のさかりをいかゝすくへき

春櫻占花

山櫻はるをかきらぬいろならはやとに歸らぬ身とやならまし

泉殿御室花御らんせし日よめる

いはれとも花は心のありけれはきみゝるけふそ匂ひましける

あひしれる人のもとより八重さくらをゝりてつか
はしけるかへりことに

八重櫻おれる匂ひにかされても猶このもとそゆかしかりける

かへし　　譯覺

中々におるはのとけし八重櫻ちるこのもとをみるかうけれは

深山尋花

春ふかくたつねいる哉たにかくれ風にしられぬ花やにほふと

讃岐院の百首のうちの落花

櫻花いかなる風にさそはれてをしむ人をはしらぬなるらん
咲しよりちらむ物とはしりなからはかなくをしき花のかほ哉

ちるはなをよめる

新拾遺 よしのかは花のしら波流るめりふきにけらしな山おろしの風
はかなくもおしみける哉常ならぬうきよしらする花の匂ひを
物いはぬ花とはきけとさけはちるうきよを誰にとひて知けん
風雅 ちらさしのもとの心は忘られてふまゝくをしき花のにはかな
ひときつゝ花はさかなん山櫻ちりをくるゝをひかすみるへく
高砂のおのへのさくらちりはてゝなみの花ともなりにける哉

落花のこゝろを

高砂はいそならねともふく風におのへもはなの波そたちける

公通卿の會

雪とのみたゝみよしのゝ山櫻ちるはふゝきのこゝちこそすれ

泉殿御室にて溪流落花といふたいをよめる

やまさくらみれこす風のふきためて花にせかるゝ谷かはの水

花泛澗水

谷河のなかれやいつくかさこしのみねより花の波そしつめる

をのれかつうしとも思へ山櫻ちれはそたにのみくつともなる

はなのちるをみてよめる

よをすくす心〳〵はかはるとも花をゝしまぬ人はあらしな

内裏三首會花漸少

さくら花散くるまゝにみよしのゝ吉野の山の雲のむらきえ

讃岐院位の御時の百首の春雨の歌

もえいつるのへをもそむる春雨に水のみとりも色やますらん

御在位時の歌

山さくらたをりにゆかん春雨の日數つもらはちりもこそすれ

同御在位時百首にはるこまをよめる

さらぬたにまたつなゝれ〔かイ〕ぬ春駒のさも若草におれまさる哉

江邊春駒句題百首

春駒はともゝあしれをあさるとやなにはのみつの影をみる覧

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

歸雁の心をよめる

秋霧にこしかりかれの歸るさもかすめる空をたとりやはする

同御時歌めしゝかは

霞わけ越路にかへるかりかれの聲にそとものかすはしらるゝ

歸雁をよめる

はる〳〵と越路にかへる雁かれの聲もかすかにとをさかるゝ

玉つさのまたひもとかぬ心地して霞のうちにかへるかりかれ

朝見歸雁

なかむれはいもにあひみし心地してあけ行空に歸るかりかれ

おなしこゝろを

夕暮にかへらましかは雁かれをこゝそとまりといはまし物を

讃岐院の位の御時の百首のなかによふことりを

きく人もなき奥山のよふこ鳥きのまろとのになかはなかなん

晩喚子鳥句題百首

ひかすゆく旅のとまやはかはれとも同しこゑする呼子鳥かな

山寺にてよふことりをきゝてよめる

山寺のいりあひのかねにたくひつゝほの聲すなるよふこ鳥哉

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

苗代をよめる

さくらかは苗代水にせきかけてひくしめ繩をはなかとそみる

苗代有遅速句題百首

苗代はくろをへたてゝ種まくとみつひきおとろかたも有けり

讃岐院の位の御時の百首菫菜の歌

たかやとゝぬしはしられと紫にさけるすみれのむつましき哉

野徑菫菜句題百首

むさしのはゆきもやられす紫のいろむつましき菫つみつゝ

讃岐院位におはしまし〻時百首歌たてまつりしに

杜若のこゝろを

難波江のあしふにましろ杜若はなしさかすはたれかわかまし

杜若繞石句題百首

いつかたもすきまもみえす杜若雲のはたへもいかゝふろへき

讃岐院百首のうちの躑躅歌

くれなゐにさき亂れたるいはつゝしまたありかたき花の色哉

おなしこゝろを

ときは山みとりかしたの岩躑躅みなくれなゐの色そはへける

躑躅満岡句題百首

隙もなくさけるをみれはけふ社は躑躅の岡のなにはおひけれ

三日桃句題百首

盃のなかれにうかふけふなれはゑひてもみゆるもゝのはな哉

讃岐院位の御時百首歌たてまつりしに藤花をよめる

松かえにかゝるとならは藤の花おなしときはに久しからなん

同院の百首のうちの藤の歌

むつましや春のかたみにとゝめをくわか紫のいけの藤なみ

藤花似雲句題百首

藤の花あきくろかたのくもかとてわかむらさきの心にそしむ

泉殿御室にて藤花簡寺といふたいを人々によませさせ給しうちによめる

難波潟みつのはまへのてらみれはたゝ藤波のかけぬまもなし

攝政の家に藤艶榮久といふたいを人々よむとて人のうたゝつれしかはかはりてよめる

かみよゝりたえすさかゆるそのなかに流れ久しききたの藤波

讃岐院位におはしまし〻時百首歌たてまつれとおほせられし時款冬をよめる

吉野川きしの山ふきさきぬれはまた我ならぬなみもをりけり

款冬漸散句題百首

ひにそへてちろとみれともつきもせすいくへ咲けむ山吹の花

旅宿春月

霞はれ草のまくらにつきさえて露もあきにはかはらさりけり

ふるさとを霞とゝもに立いてゝつきをたひれのともとする哉

いまよりは霞のたにゝ旅れせし月をおほろに春はなしけり

旅寝するきよみかさきに月はれて夜さへ空にあそふいとゆふ

空はれて隈なき月はあそふ糸のみえぬやよはのしるし成らん
一しほのいろますまつも白妙に月すみわたるあまのはしたて
天の川またきこほりやとけさらん春とて月のさえわたるかな
春なれとよるは霞やたゝさらんつきのひかりのくまもなき哉

雪消客來といふたいをよめる

山さとにつもりし雪の春きてはとくるにつけて人もとひけり

水草纔萌

つらゝとけ水の緑とみえつるやもえいつる芦の二葉なるらん

春閑携絃

松風にかきなすとはかよはれと春すかのねいたくひなきかな

暮春歸鴈

けにやさそ暮行春はしたはしきおなし雲路にかへるかりかれ
鴈かれはこしちはるかに歸るなりいつくへ春のくれて行らん
かりかねはとも引つれてかへるゝひとりや春のくれて行らん

山寺にてむつきのついたちによめる

春くれは花にこゝろをつけしかといまはゝちすの迎をそまつ

おなし日のあかつきにきつれのなくをきゝてよめる

きく人のさかゆといへはよを寒みなくなるきつを哀とそきく

讃岐院位の御時百首歌たてまつりしに暮春の心をよめる

うきみには春の光のよそなれはけふのくるゝもをしまれぬ哉

同院百首歌めしゝに同心を

ちるはなにおしむ心はつくしてきくれ行はるは人にまかせん

山寺三月盡といふことを人々うたよむついてによめる

初瀬山いりあひの鐘の音きけはくれぬる春といまそつくなる

山家三月盡

つきなみもしらぬ伏屋もしるき哉とまらぬ花に春つきぬとは

小三月盡句題百首

暮殘るこのやよひしもいかにしてみそかにたらぬ月と成けん

夏歌

讃岐院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりしに更衣をよめる

限あれは花のたもとをぬきかへて春はいとひし風をさへまつ

俊成卿人々にあまた歌よませしときおなしこゝろを

袂にはゝきかはなすりうつられと衣かへするなつはきにけり

更衣

けふはまた夏の衣をたちそきる冬にかへしはきのふと思ふに
けふよりは花の袂をぬきかへてきるにものうきなつころも哉

女房更衣句題百首

わたつみの底の玉もの打なひきすけるにけふはぬきかへて見

讃岐院の百首のなかに首夏心をよめる

終夜はるを殘せるともしひのなこりはけさもけさしとそ思ふ

卯花纔開と云題を人々よみし次に

さきそむるこの一枝をたをりてはたれ卯花のかきれとかみん

讃岐院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりし
に卯花をよめる

今よりはかきとたのまし卯花のさけはてとにおりすかしけり

同院百首歌たてまつれとおほせられしに同し心を

白雪のじき〳〵ふれるこゝちして枝もとをゝにさけるうの花

卯花の歌

山かつはをのかゝきれの卯花をやかてしててや神まつるらん

杉たてるかとならねとも垣根には夏のしるしにさけるうの花

ますらをの垣白妙にさきにけりあなうの花のたちところやも

やまふきもつゝしもふちも散はてゝ白きをのちとみゆる卯花

内裏十首會に遠近卯花と云ことを

何せんにたつねきつらん卯花はわかかきれにもかはらさり見

おなしこゝろをよめる

卯花のかきれにさかぬ宿ならは白くみゆとやそこをとはまし

卯花夾路句題百首

いつれをか折てゆかまし卯花のさきをとりたる方しなければ

卯花爲隣牆

君とわれやとをわけたる卯花をたかなさけとか人のみるらん

讃岐院位の御時の百首の葵の歌

けふみれは葵かさゝぬ人そなきあまねき神のちかひと思へは

公通卿人々に十首歌あとらへしに待郭公歌

なか〳〵におもひもたえて時鳥たゝひとこゑは猶またれけり

樹陰待郭公

ほとゝきす人よりさきにきくやとて花橘のしたにまつかな

郭公未遍

よをかさねまつにはなかて時鳥たつねゆくにそ一聲もきく

讃岐院の位におはしましゝ時百首の歌たてまつり
しに郭公をよめる

かすならぬわかみなれとも時鳥人におとらすこゑはきかせよ

同院の百首のうちの郭公の歌

おもひねの夢にやきかん郭公またうつゝにはをとつれもせす

郭公いかてきかましわかやとに花たちはなのにほはさりせは

千載 たつねてもきくへきものを郭公人たのめなるよはの一聲

さぬきの院位の御時の百首のなかに

こよひのみ聲なつしくそ郭公あかぬこゝろはいつかたゆへき

俊成卿の十首歌のうちの郭公の歌

よもすからまつにはなかて郭公おもひのほかのけさの一聲

まちかれてまとろむほとの郭公夢かうつゝかきゝもさためす
はつこゑをいかてきかまし郭公山路はるかにたつねさりせは
ほとゝきすたゝ一聲にすきぬなりたかまつ宿をいかに鳴らん
ほとゝきすさつきのゆはり一聲にいるかをくにすきぬなる哉
郭公このしたつゆにそてぬらしまちつる山のかひになくなり
郭公たつねくれはそあふ坂やをとはの山のかひになくなる
郭公垣のもとよりあかすしてまつにそかゝる藤の末葉も
みやこにはゆきゝの人のしけゝれはよるのみきなく郭公かな
郭公あかぬこゝろやをしなへて高きいやしきひとしかるらん
ほとゝきす雲井遙にすきぬなりたか宿まてかをち歸りなく
よをすてゝおもひいりにし山里に哀かたらふほとゝきす哉
郭公こかれのたまのこゑなれやしての山まてあかしと思へは

郭公早過[讀百首]

ほとゝきすきゝたにあへすすきぬれと聲は心にとまるなり鳬

内裏十首會に同心を

郭公まちあかしたるかひもなくたゝ一聲にすきぬなるかな

曉郭公

時鳥まつよのかすはつもれともこのあけくれに一聲そなく
まちかれてしはしもねなは時鳥いかてきかましあけくれの聲
ほとゝきす曉かけて聞つれとさりとて宵をまたすしもあらし
有明の月まちいてゝほとゝきすさやかに今そなきわたるなる

夕郭公

みなとりはねくらさたむる時にしもやま郭公なきわたるなり

暮山時鳥

いそけともこよひはこえしをとは山くものはたてに郭公なく

禁中郭公といふ題をよめる

ほとゝきす鳴音たつねてゆく程に雲の上にそわれはきにける

故郷郭公〔[illegible]〕

いかるかの人やとそむかしいひけれと山郭公いまそなくなる

郭公留客

稀にきて歸らむ人をほとゝきすとめむとめしは聲のまに〳〵

馬上聞郭公

駒とめてこゝにやとらん時鳥なくやまちをはいかゝすくへき

遠聞郭公

きゝつともいかゝかたらん時鳥をちの山へのよはのひとこゑ
ほのかなるたゝ一聲の郭公たかまつやとにちかくなくらん

水鷄をよめる

[新古今]わか爲とたゝくくゐなや思ふらんさゝれとあくる天の岩戸を

獨聞水鷄

たゝくとも心まとひをせましやは妹とぬるよのくゐなゝせは

月夜水鷄

月影のさすほともなき夏のよをいかにあけよとたゝく水鷄そ

雨中水鷄

あめもよにまきの板戸をたゝく哉誰かはとはん水鷄ならては

連夜水鷄

忍ひきてまれにも妹やたゝくとてさのみ水鷄にはかららるゝ哉

讃岐院位御時百首の菖蒲歌

年をへてひけとたえせぬ菖蒲くさ久しかるへき宿にふきけり

同院百首の歌のなかに同心を

袂にもかゝるのみかは宿毎にあやめはけふのつまにそ有ける

あやめのうた

我宿の庭のよもきをかりあけていつくにひける菖蒲ふくらん

五日菖蒲 句題百首

時なれはけふの菖蒲はぬまゝにたつねてひかぬ人はあらしな

あやめのうたのなかに

菖蒲草をのかよとのにねをたえて宿のつまとそけふは成ぬる

讃岐院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりしに早苗のこゝろを

さ苗とるてまうちやめす急くめり室のはやわせこやそ成らん

雨後早苗

苗代にほそたにかはもひかてこそ雨のなこりは早苗とりけれ

門前早苗 句題百首

さ苗とるけふ社たこのすたくとていたゐのみ草拂はれにけり

讃岐院位の御時百首の歌たてまつれとおほせられしに照射をよめる

ともしする比にしなれは五月山ほくしの影のたゆるよそなき

同院位の御時十五首歌人々よめるうちの照射歌

夏虫をなにはかなしと思ひけん鹿もともしにみをはかへけり

連夜照射 句題百首

ますらをの鹿たつのへに照射していてはかへると幾夜積りぬ

晝鵜河 句題百首

うかはにはさはしる鮎の數みえて浪のよるとも限らさりけり

讃岐院位におはしましゝ時百首のうたゝてまつりしに五月雨をよめる

いとゝしくひともとひこぬ山里にをやみたにせぬ五月雨の空

おなしこゝろを

さみたれのをやみたにせぬ時しもそいとゝさらせる布引の瀧

難波なる蘆のまろやもさみたれてしほたれ衣ほすひまもなし

五月雨はみつかけ草のみかくれてそこのたまもと成にける哉

連日五月雨

五月雨はいつかはるへき東屋の軒のしのふもくちやしぬらん

河邊五月雨

五月雨にわたせもみえす大井川いつくかもとの瀧なるらん

おなし心を

五月雨にみむろのきしも水ひちていつらたつたのもとの流は

閑居五月雨

五月雨のふりこめぬたに我宿を立いつるよはまれになりにき

東路五月雨句題百首

みやきのは木の下露に五月雨のひかすふるこそ猶まさりけれ

さぬきの院の位の御時の百首の廬橘歌

かほるかはなつかしけれとゆふかせに花橘のちりやしぬらん

內裏十首百首會におなしこゝろを

わか宿の花たちはなを吹風はたかためにとかゝをさそふらん

夜花橘

月影に花たちはなのちるみれはきえぬ雪とそにはにつもれる

隣家廬橘句題百首

なかゝきも花たちはなの吹風に匂ひくるをはへたてさりけり

廬橘浮薫

おひかせに花橘のかほるかをやかてしるへにたつねゆくかな

さぬきの院の位の御ときの百首の螢の歌

やへむくらしけみかしたも夏のよのすたく螢にかくれなき哉

叢端螢火句題百首

はるやきしのへとみゆるは夏草のはとにもゆる螢なりけり

隔竹望螢

かゝり火のほのめく影やかは竹のはこしにまよふ螢なるらむ

海邊螢

さのみやはあまの漁火ともすへき思へはすたく螢なりけり

社頭螢火

よもすからてらす螢をたまつ島ころもとをりし光とやおもふ

さぬきの院位の御時の百首に蚊遣火をよめる

かやりひのしたにふすふる煙もや雲井はるかに立のほるらん

おなしこゝろを

あしふきの軒の庭のいふせきにいとゝふすふる庭のかやりひ

たにのとに夏はふすふるかやりひの煙やみねの雲となるらん

遠村蚊遣火句題百首

蚊遣火のさとはそこともしられねとも煙そよそのしるしえける

さぬきの院の百首のうちに牡丹をよめる

くれなゐの色ふかみ草さきぬれはおしむ心もあさからぬかな

同院十五首會瞿麥を

咲しよりわか瞿麥としめをきてよるも露たにさらすこそみれ

おなしこゝろをよめる

とこなつの花のいろ／＼散ゆくは秋のとなりや近くなるらむ

近見瞿麥句題百首

めかれせぬ我瞿麥のよそならはにしきをしける庭かとやみん

泉殿御室にひと／＼庭上皆瞿麥と云題をよめる次

に

とのとよりあるしもとはて歸りなんいらは瞿麥ふまんまゝおし

瞿麥繞籬

をく露にもとくたち行なてしこは籬のよもにさきそかゝれる

苔庭瞿麥

庭もせの苔のむしろに色はへてねよけにみゆるとこなつの花

處々瞿麥

春風に花ちりしきし庭のおもはあきくろかたもとこなつの花

讃岐院位の御時の百首の蓮の歌

むめ櫻ちらぬまはかりなつさへと蓮はのちのよまてとそ思ふ

おなし心を

にこりにもしまぬ蓮の花みれはわれも心そきよくなりゆく

さぬきの院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりしに氷室をよめる

つれもなく夏まてとけぬ氷室哉いかにむすひし名殘なるらん

同院位におはしましゝ時の百首の泉歌

昔よりぬしさたまらぬやまへにもむすふ泉そすみわたりける

對泉忘夏 句題百首

涼しさはあきとのみこそ思ひつれなにゆへむすふ泉なるらん

對泉避暑

岩まよりむせふ泉をきてみれはむすはぬさきに凉しかりけり

納涼のこゝろを

千載 いはそゝく谷の水のみなとつれて夏にしられぬみ山への里

風そよくならのはかけの苔むしろ夏な忘るゝまとゐをそする

終夜いはゐの水をむすへともうかへる月はてにもたまらす

そゝやふく風にや秋のたくふらん夏わするゝゆふまくれ哉

林中趁涼生

思ふとち木々の木葉を垂こめて夏にしられぬまとゐをそする

對月恨宵短

夏はたゝ月をのこせる短夜をたれいたつらにねてあかすらん

泉邊翫月

よもすからむすふ泉にすむ月はてにもたまらぬこほりなりけり

水路夏月

短夜をあまのかはせに舟とめんなかるゝ月やともによとむと

月先秋明

山のはをさえても月のゝほる哉こよひや秋のかとてなるらん

讃岐院の百首のなかに夏風を

花ゆへに厭ひそめてし風なれはまたや夏とてまたれしもせす

水風似秋

たつた川なみより風の吹こすはなにかは秋のけしきならまし

さぬきの院位の御時松風似秋と云題をつかうまつれる

ときはなる松吹風のいかなれはわきても秋のけしきなるらん

高野はやまふかくしてうつきのはつかまてはなの
さかりなれはよめる
櫻花今さかりなりみ山には春かへりぬとしらすやあるらん
夏草のこゝろを
夏草はたけこす計しけりあひてもとみし道のかたもしられす
讃岐院位の御時人々歌たてまつれる次によめる
あけゆけはいつもいとへと夏の夜やわきてわひしき葛城の神
さつきのみしかよもめのさめぬれはかくなんおも
ひふしける
よを殘すおいの寢覺におもひいつる昔のとそともとなりける
さぬきの院位におはしましゝ時百首の哥たてまつ
りしに荒和秡をよめる
御秡して川せにたつるみてくらをゐせきに越る浪かとそみる
日暮六月祓句題百首
ゆふかけてなこしゝつれはかみも神あらふる心みなつきの空

秋歌

讃岐院の位の御時の百首の立秋歌
夏のうちも風ふくごとに思ひいてし秋の立日はけふにそ有ける
同院の百首のなかに同心を
つれよりもすゝしくなりぬ吹風に秋のたつひを誰かつくらむ
山寺立秋句題百首
はつせ山おろす嵐のかせすゝし峯より秋やこえてきつらん
泉殿御室にひと／＼まいりて秋來夜始涼と云題を
よめる
夏とのみひるの氣色はかはられとよことに秋はきたる乙けり
讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつれとお
ほせられしに牛女をよめる
あきとゝいかにちきりてひこ星の心つからにこひわたるらむ
同院の百首の歌に同心を
七夕のくれを待間の久しさとあくるをしさといつれまされる
七夕のかへる道にはかさゝきのはしたなきまで袖やぬるらむ
七夕の歌とてよめる
七夕はあふ隙あらしこのよふるいそちはひとひ一よとそきく
心をもかすものならは七夕のあふうれしさをよそにみましや
たなはたはあさひく糸のいかにしてたえぬ契を結ひそめけむ
たなはたも夜寒なりとや天の川あふせを秋とちきりそめけん
秋ごとにあふたなはたとはかなくそわか短夜のならひにはみる
牛女契久句題百首
天の川すまんかきりは七夕のわたらぬ年はあらしとそおもふ
讃岐院位の御時の百首の萩歌
野原ゆくはきの花すりうつりてはつゝりの袖もいとはれぬ哉
同院の百首に同題をよめる

置露のおもけにみゆるこはき原はらはゝ花のちりもこそすれ
同院位の御時のはきの歌
秋はきの枝もたわゝに置露をいとふものからはらはてそみる
萩花寫水句題百首
萩か花したゆく水にうつれともちらぬかきりは流れさりけり
萩滿野亭
鹿のなくくさふのゝへを我宿のやかてにはとそ思ひしめつる
野徑萩
露重みこはきおれふす宮城野はいそきそかぬるけさの朝たち
ひとのもとにさけりけるはきを人のほりにつかは
したりけるあるしにかはりてよめる
みまくさにかるも昔はおしみけり今のれこしのなさけなき哉
秋草
いろ／＼の萩のにしきを白露のたまもてかさる秋のゝへかな
色々の花はにほへとみやきのゝはきの錦にしくものそなき
草花繞閑
咲そむる萩のにしきをたつねつる我よりさきに人やみつらん
山家草花
みやこにもさきにほへとも鹿の鳴なにをふくさは秋の山さと
凌野花尋人
すきぬとて我をうらむな立かへり君とみやきの萩よまたなん

雨後草花
我宿にいたらさりつる村雨のふりにけらしなはきのしほれる
讃岐院の位の御時の百首の女郎花歌
霧はれぬをくらの山のをみなへし吹くる風のかにそしりぬる
同院百首におなし心を
けさみれはおきゐる露にあやなくもおれふしにける女郎花哉
中宮權亮經定家歌合女郎花をよめる
をみなへし朝けの風になひきては又ゆふ露におれやふすらん
さぬきの院歌めすうちの女郎花の歌
女郎花くちなし色にさきぬれはおくしら露はなのみなりけり
寄情女郎花句題百首
をみなへし老のすかたをいとふとも心は露もはなれやはする
朝見女郎花
あさほらけいくのゝ道の女郎花千草のなかにまつそめにたつ
女郎花近水
こゝろからみむろの岸の女郎花かせもたつたの波にならるゝ
草花繞閑
のへみれはたくひもあらす女郎花またきに咲て人におらるな
讃岐院位の御時の百首の薄歌
追風に心ならすそまねくらんいさたちよらししのゝをすゝき
薄留客句題百首

花薄まねくうらわに舟とめてひれをふりけんむかしおもほゆ

　薄當路滋

いと薄風にみたるゝさよりはにわけそわつらふをのゝほそ道

　さぬきの院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりしに苅萱をよめる

しのひかれかる人もなき苅萱はいとゝしとろになりにける哉

　戸外苅萱　同百首

山里はしとみにしける苅萱にたけのあみともあけそわつらふ

　古渡苅萱

苅萱のまたものいはゝとひてましたかよにゆひしをのか籬そ

　讃岐院の位の御時の百首の蘭歌

はなまつとわかしめしのゝ藤袴あやなく人のきてやみるらん

　同院百首のなかに同心を

ふちはかま匂ひを風にたくへてや霧にたちとを人にしらるゝ

　蘭香入簾　同百首

ふちはかま匂ふにほひのへたてれはゆきにをあけむ玉の簾は

　おなしこゝろを

ふちはかま吹すきてくる夕風の匂ふにしるしこすのうちまて

　處々草花

女郎花れたみやすらんふちはかまにほひにうつるあた心とて

　讃岐院の位の御時の百首の荻歌

風ふかはあらし物ゆへ荻のはにはかなくすかくさゝかにの糸

　風疾荻　同百首

なみさはく濱のしほ風はやけれはあへすおれふすいせの濱荻

　隣家晩荻

ゆふされは吹くる風に荻のはのそよく音をはかきもへたてす

　草花未遍

百草の花のひもをやときはてぬかたみなせにもみゆるのへ哉

　草花のこゝろを

秋のゝの花にいろ〳〵しろき哉夏わかさりしなへてみとりも

秋のゝの千草にめをもうつす哉花こゝろとはこれにや有らむ

あきのゝの花のいろ〳〵あかなくにいつれのもとに草枕せむ

春うへしちくさの花を秋みれはやとにあまれる庭のおもかな

　讃岐院位の御時百首の歌たてまつりしに雁をよめる

けさのあさけ雁鳴渡るむへしこそ淺茅かうれも色つきぬらめ

　同院の百首のなかに同心を

雁かねはきたにとよめよ秋風はふきて日數のへぬとしらすや

　雁聲驚眠　同百首

世中をかり〳〵とのみなくなる聲にみはてぬ夢そいやはかなゝる

　雁行知聲

夕やみにはねうちかはし飛雁もなのれは空にかすそしらるゝ

さぬきの院の位の御時の百首の鹿歌

たつた山峯こす風やさむからむこよひを鹿のいたくなくなる

同院の百首に同心をよめる

きく人もおとろかれけり鳴鹿はをのれのみやは秋をしるらむ

太皇太后宮亮經盛家歌合に鹿を

山里はつまこひかぬる鹿のねにさもあらぬ我もねられさりけり

讃岐院位御時鹿歌

さを鹿のつまとしめたる秋萩のうつろふ袖やこゝらなくらん

遇人聞鹿 句題百首

山里のあるしはのちにとはすともこの鹿のねを又きかしとや

遠近鹿

やま里のそとものをたの鹿の聲をやめはをちの峯になくなり

遠聞鹿

をひ風にたくはさりせは鹿のねやおのかすむのに獨なかまし

讃岐院位の御時の百首の露歌

朝ほらけをくしら露を玉かとて袖にはかなくひろひつるかな

篠上露 句題百首

ひまもなくおく白露をけさみれはむへ玉さゝと人もいひけり

讃岐院位の御時百首歌たてまつりしに霧をよめる

霧ふかくたちやこむらん箒木のよそめにさへそみえすなり行

同御時きりの歌人々よめる次に

秋霧のまたよをこめて立ぬれはあくるもえ社しられさりけれ

秋霧籠橋 句題百首

かは霧の朝な夕なにはれせれはおきやいふせきうちの橋もり

霧中遠帆

風ふけはあさたつ霧のたえ／＼におきこく舟のほのみゆる哉

讃岐院位の御時の百首の槿花歌

よとゝもにちらぬとこそかたからめ夕露はまてあさかほの花

槿花掛籬 句題百首

さきかゝる竹のまかきの朝かほをちよふる花と思はましかは

讃岐院位の御時の百首の駒迎歌

ひく駒にあふさか山の月影はいつれもおなしあしけなりけり

遙思駒迎 句題百首

駒むかへおもかけにたつ今宵哉もしのせきやにもる月をみて

讃岐院位におはしましゝ時百首の歌めしゝ中に月をよめる

ひさかたの月のひかりのさやけきに心さへにもすみのほる哉

同院の百首に

しらま弓はりてかけたるみか月は程なくそいるたかまとの山

數しらぬ我身なれとも月をみておかぬや人におとらさるらむ

玉葉 けにやさそにしに心はいそかるゝかたふく月も今はをしまし

くまもなく月すみわたる天の川なをたにかけし雲のしからみ

わたつみの清きはまへによる浪のよるともみえすてらす月影
いにしへにたくひもあらし月影はまたこん秋のこよひなり共
かれてよりひるとみゆれは秋の夜のあくるもしらす有明の月

經定家歌合に月をよめる

くまもなき月の光をあけぬとてやこゑの鳥のこゑやたつらん

清輔家歌合に

あかなくによな／＼月をみつる哉さらすは老や積らさるへき

經盛家歌合

わきてしも惜まさらましてる月の秋より後もくまなかりせは

俊成卿十首會に

なにせんに闇にまよふと思ひけんかくる隈なき月もすみけり

讃岐院人々に歌あまためしけるに

わたつ海のそこの玉もゝみゆるまて心ふかくもすめる月かな

出家の後高野にて人々月歌よみし次に

しらたつのそのゝ衣の心地してこよひの月はすみそめもなし

月歌とてよめる

われこそはかへさに月のいりぬとも光(ひとりイ)はやらし君をやまちに
限ありていりたにあかぬ月影のいかにせよとか雲かくるらん
すみのほる月に心はたくへともかたふく影はおしみかねつゝ
いつもみる光なれとも天の川になかれたるあきのよのつき
情あれや秋しもわきて長きよは月みよとてやかゝりそめけん
なさけなきえそも秋をやしりぬらんつれによなるつきの光を
あきのよやすみまさるらん天の川とわたる月のときにさやけき
雲晴てなきたるわたの月みれは浪よりいてゝなみにこそいれ
うきよとて思ひもすてしくまもなく月の光もすみわたりけり
山のはをなにかいひけん有明の月をのこせるよこそつらけれ

內裏十五首會に月不如秋といふ事を

いつとても月にあくよはなけれ共秋としなれはねられさり鳧

明月夜靜

いさしらす月の鼠やさはくらん今宵のはれはのとけかりけり

大江廣經河原院にて水上月と云事をよませしつい
てに

雲はらふ風とはなれと月かけのやとれる水のなみのさはきよ

海路月

なみまわけこき行舟はさしなから月にこゝろののり(のとりイ)にける哉
ふなをさよともろなをしそ浪たてゝやとれる月を閑にもみむ

湖上月

あきのよはしかのうらわに月さえて氷をよすとみゆるさゝ波

月照松

ちゝの秋にかはらぬ松もこよひこそ月の光のいろにみえけれ

月照菊花

やへなからいかてかみまし菊の花こよひの月のおほろえせは

旅宿月

古里へかへらむからにまつとはん今宵の月をかくやありしと

たけす垣ふしもさためぬかり庵にくまなく月のいかてすむ覽

夕露にのはらかきわけやとりつゝ我よりさきに月はすみけり

旅泊月

くまもなき月の光にたつぬれはこゝそ明石のとまりなりける

山ちをもをくりし月は行舟のとまるうらわにまたやとりけり

月山家友といへることを

月ならてさしくる人もなき庵は鳥のこゑさへおとつれもせす

月任人に

人はみなこゝろ〳〵にあるものを月はかはらぬ友とこそなれ

社頭明月

月きよみ白くそみゆるこれのみそひるにかはれるあけの玉垣

寺閑月明

夏すきてさひしき寺はとはたてゝ月のはなさす秋にまかせん

月前聞鐘

有明の月まちいてゝあかぬまにいかにや鐘のおとのきこゆる（あくるかねきこゆなりイ）

讃岐院六條殿におはしましゝ時月あかく侍し夜御
ふれにたてまつらせたまひて月前言志と云ことをよ
みてはへる

（同花）みか月のまた有明になりぬるやうきよにめくるためし成らむ

月前談往事

何ゆへにむかしかたりもつくす覽月たにいらはみな歸りなん

月影にむかしのことは思ひいつときみきまさすは誰にいはまし

たれもみな月にこゝろのすみぬれは昔かたりもくもりなき哉

對月戀古といへることを

月影や心のうちもてらすらんすきしむかしのくまもなきかな

くまもなき同しむかしの月なれは見るにすきにし方そ戀しき

高野山はことにたかくてそらもちかきやうにおほゆ
るにつきいとあかきよゝめる

月影のいたらぬくまはなけれとも所からにやすみまさるらん

八月十五夜句題百首

むかしよりなにおふよはの月なれはたえぬところもなき光哉

障子のゑに八月十五夜もち月にむかひてかゆくへ
るかたかけるところによめる

望月にもしほの粥をもりみてゝみちてもよゝにすまんとそ思

九月十三夜によめる

いのちさへせめてそをしき又もこむ今宵の月をかへす〳〵も

くれの秋せきとはみれと天の川なかるゝ月をえやはとゝめぬ

おいぬれはいとゝも月のをしき哉又もこよひにあはむ物かは

秋くれて殘りすくなくなりぬめりこよひそ月のかたみ成ける

末の秋あかき紅葉にはやされて月のいりあやまふとこそみれ

今宵こそふゆのとなりの近つけは過ぬる月にさえまさりけれ
秋のうちはこよひそ月のせきなれは心とまらぬ人はあらしな
月影は又こん年のこよひまてあるへきみたになしからしやは
すくの君たちはこやにめして歌うたはせさせたまひし時九月十三夜いとおかしかりし次の夜ふけゆくまゝに月いとおかしけれはよめる
さのみやは今宵も月のとならむ聲にひかれてすむにそ有ける
かへし　惟宗廣言
こよひさへとなる月の光をはきみしゝらすはいかてしらまし
十三夜に人々みなねてやあらんとをとつれたる人のかへりとに
かくはかり光ひらけててる月にさりとも誰かまとをとつへき
かへし　法眼静賀
我宿のまきの板戸はてもかけす月のひかりのさすをまちつゝ
讃岐院位の御時の百首に擣衣のこゝろを
すかいねのなかきよすから唐衣たかためにとかいそきうつ覧
擣衣夜曙句題百首
から衣してうつゝちの音きけはいもかよとこは塵つもるらむ
西山邊終夜擣衣と云たいをよめる
いりあひの鐘よりとりのやこゑまて衣うつなる音そたえせぬ
遠聞擣衣
衣うつ音そたえ〲きこゆなる風のたくひやさためなからん
讃岐院の位の御時の百首の虫歌
山さとは虫のねはかりをとつれてとふ人もなき秋のゆふくれ
同院の百首の歌のなかに
まつ虫のこゑきく時そうちはへて君かちとせの秋はしらるゝ
讃岐院位の御時人々歌あまためしゝ中に虫をよめる
のへことにはたおる虫のこゑすなりふく秋風やよさむなるらむ
床下蟋蟀句題百首
きり〲すつゝりさせてふいかにして寒けき床の上を知らん
隔河聞虫
虫のねはむかひのゝへに聞ゆなりまをにこれやなかゝはの水
深夜虫聲
秋ふかみ寝覺のとこのさひしきにあはれをそふる虫の聲〲
旅宿虫
くや〲とわれをそいもは草枕たれまつ虫のこゝらなくらむ
讃岐院位の御時の百首歌の中菊をよめる
今よりはみかきのうちに咲菊の露のまにこそちよはおくらめ
同院の百首のなかに同心を
長月のけふをいかてか菊の花おりしりかほにさかりなるらむ
九日菊句題百首、

ちよふとも折たかへしとみゆる哉さきときめかすけふの白菊

公通卿歌あまた人々にあつらへしとき殘菊を

誰かそのゝこれる菊といひをきしうつろふ色そかさりみける

讃岐院の位の御時の百首の紅葉歌

このはちるしたやすきつる旅人のすけのをかさに錦かけたり

同院の百首に

時雨にもあかれさしけり紅葉ゝは朝日夕日のかけなられとも

經盛朝臣家歌合におなし題をよめる

もみちはゝいりひのかけにさしそひてゆふ紅にいろそとなる

紅葉を

山さとの紅葉の色のくれなゐにあくとなくてかへるへしやは

山めくりしくれはそむる紅葉はをいかに嵐のふきはらふらん

しくれの雨をのか色かは紅にきゝのこのはをいかてそむらん

初時雨降いてゝそむる紅葉ははむへくれなひのやしほ成らん

紅葉淺深 句題百首

もみちはゝいかてか同し色ならむそむる時雨の定めなけれは

東山邊にて連峯紅葉

紅葉するよもの高根をみわたせはそらに錦をひきそめくらす

山めくりしくるゝたひにみ渡せは深くなりゆく峯のもみちは

古寺紅葉

かきにこけかはらに松は老ぬれと錦をきゝにかくるもみちは

讃岐院の百首に落葉を

もみちはのちりてうかへる池水は錦あらひしえにやかはらぬ

内裏十五首會におなしこゝろを

吹風に紅葉のにしきふきてけりいつらはしつの伏屋てふなは

落葉歌とてよめる

おほゐ川ゐせきにかゝる紅葉はゝなれし我身とやかて成る

大井川ゐくひによとむもみちはゝまたはたにをす錦なりけり

えにあらふ錦とそみるもみちはゝぬるゝ時雨に色しまされは

嵐とはなにこそたてれもみちはをうたて庭まて吹ちらすらん

はつしくれそめし紅葉のから錦にはにうちはふ風そしくめる

みる人もあらしやゝとの庭の面にあたら紅葉のにしきしく覽

花ちりしはるは紅葉の秋もありと思ひしいろを風そしくめる

雨中落葉

空はれはちりやとまると紅葉はに茜さす日をたちゐこそまて

東山邊江上落葉

紅葉ちる風になみたつ住のえの松のしつえにしきをりかく

おなしこゝろを

しらかはのなかれもみえす散つもるみな紅のもみちのみして

關路紅葉

こゝきうすきちりもとまらぬ紅葉はになをやかふらん白河の關

行路落葉

神な月なへて紅葉はちりしきぬいつれを道とわきてゆかまし
行末もゝみちは雨と降ぬらんこゝにしもやはたちとまるへき

紅葉滿林

はゝそ原そめのこしたる方そなき村時雨てふなにはふれとも

歌林苑影供會に故郷落葉と云ことをよめる

紅葉ちるたかつの宮をきてみれはなにはにしける錦なりけり

おなし心を

古郷のみかきかはらに風ふけは紅葉のにしきこゝにてそきる
風ふけはちる紅葉はの古郷とこすゑさへにもなりにけるかな
みよしのゝみかきかはらに風ふけは紅葉も雨とふりにける哉
むまやとの垣根の紅葉ちりぬれはとみのをかはに錦をりかく

惜落葉こゝろを

いかにして時雨に染し紅葉はの霜にはあへすちるをとゝめん

はつ秋のころ山寺なしありきけるにちひさきかへてのもみちたりけるをみてよめる

秋きぬと空にしりてやわかゝえて(と[illegible])こすゑ許のもみちそむらん

新院位御時田家秋雨題を人々によませさせたまひしに

眞ふきの山田の庵の隣なあらみもりくる雨にもらせて(さかイ)そみる

泉殿御室にて人々まいりて詩會ありしついてに秋日山寺即事と云ことをよめる

秋くれはくちはかつちるみ山への嵐にたくふかれのをとかな

秋夜長ことをおもひてよめる

秋ふかみさひしきやと(とこイ)の寢覺にそけに長き夜は思ひしらるゝ

秋歌とてよめる

あきのよはやまたのひたの音にこそ鹿ならぬ身も驚かれけれ
いとはやも老のねふりの覺ぬるになへてそ秋のよは殘りける

あるやまてら(台歟)にてよもすから歌よみなとしてそのあしたりにむかしみし人なれはかくなんよみてつかはしける

むつともつきぬにあくる秋のよはいまも昔もかはらさりけり

かへし　覺延闍梨

けにやさそかはらさりけるむつとにその古への秋そこひしき

うりは七月におくらんと申けるひとのもとへおとろかしつかはしける

うりをきみたなはた時ときゝしより彦星とのみ我そなりぬる

かへし　權律師範玄

七夕のおりとちきりしとのはゝ空たのめにてあらんとそ思ふ

秋のつくる日うくひすのなくをきゝてよめる

くれていにし春とつきにし鶯のこゑは秋なもおしむとやなく

山家秋暮

足ひきの山かたつけるいゑゐには人もとひこす秋はくれゆく

今日は又くるれは過る秋をしかおしとや宿のそともにはなく

旅宿秋晩

くさ枕冬のとなりにちかけれはやゝよさむにもなりまさる哉

讃岐院位の御時の百首に九月盡のこゝろを

よはり行むしの聲にや山かつはくれゆく秋のほとをしるらん

同院の百首に

風雅 ほにいてゝまれくとならは花薄すきゆく秋をえやはとゝめぬ

やまてらにて九月盡によめる

くれて行秋は西へやかへるらんさらはいとゝもしたはしき哉

九月盡をよめる

老はてゝはてはやまひに沈みぬるわか身も秋もかきりこえけり

俊成卿の十首會に九月盡をよめる

秋のいろと紅葉をそみる今宵さてあけは形見とあすや成へき

閏九月盡句題百首

長月のかさなる秋をみなれてはいとゝもおしきけふの暮かな

冬歌

讃岐院の位の御時の百首の初冬歌

風寒しつまきこりつゝけふよりやをのゝ里人ふゆこもるらん

同院の百首に

千載 秋のうちは哀しらせし風の音のはけしさそふる冬はきにけり

初冬嵐句題百首

いつしかとけさは嵐の寒けれは身にこそ冬をしりはしめけれ

讃岐院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりし
に時雨をよめる

たか里をおとろかす覧まきふきの閒を時雨はすきぬなる哉

同院の百首に

散つもる楢の枯葉のなかりせは時雨ふるよをいかてしらまし

同心をよめる

なかきよはねられぬものを明方になにと時雨のおとろかす覽

時雨易晴句題百首

もみちはをそむる時雨に旅人のかつくたもとは色もかはらす

神な月時雨にぬるゝならのはのかはきもあへす空そはれぬる

林下時雨

風雅 時雨のあめ何とふるらむはゝそ原ちりての後は色もまさらし

清輔朝臣影供の時山家時雨と云ことを

あきはてゝ紅葉ちりにし山里になにをそむとて時雨ふるらむ

東山邊同題をよめる

槇の戸をたゝく時雨に東雲はこのはもよはもあけにそ有ける

讃岐院位の御時の百首の霰歌

夜を寒みうはけの霜やはらふらんをしのはたゝく音聞ゆなり

同院の位御時人々歌あまたゝてまつれとおほせら
れしに霜をよめる

ときはなるなさゝかはらも霜ふれは同し枯野にまかひぬる哉

淺茅霜句題百首

ゆきかへる淺茅をかれて見さりせは何に置たる霜としらまし

歌林苑會に山家始霰と云ことを

もみちはに思ひやるらんみ山へのやとに霰のふりそゝめぬる

東山邊にて同題を

外山よりおもひやるらんみ山への里はあられのふりにける哉

讃岐院位の御時の百首の霰歌

霰ふるころにしなれは百敷のいとゝたましく庭にそありける

同院の百首に

もゝしきの大宮ちかきやとなれと霰のをとをいかゝつゝまん

霰如珠句題百首

よをこめて霰たはしる音すなりたましく庭をあけはまつみん

行路霰

いそきつゝまたよをこめて立ぬれと我よりさきに霰たはしる

旅宿初雪

初雪にいかゝは跡をふみつけむけふの朝たちいさとまりなむ

いそけとも我はたちてしいかてかは跡ふみつけんけさの初雪

都にはまたふりそめし山ちたにこれそことしのはつ雪といふ

讃岐院御時人々に歌めしゝ次に行路初雪

急くとていかゝはふまん初雪のかのこまたらにふれる山ちを

同院位御時の百首の雪歌

とふさきもしほりも雪に埋れていつれわかこし山ちなるらん

同院の百首に

よそにみるひらの高根の雪なれと冴るはとこの物にそ有ける

篠薄のしらふにかよふ（まゝ）雪なれは野守のかゝみよそにたに見す

雪積りまのゝかや原むすほれてとけむ春をやしたにまつらむ

同御時人々歌あまたゝてまつれとおほせられし時

雪積して

降雪にかつうつもれて道もなしいかにか駒のあとをたつねん

俊成卿十首歌人々によませ侍しにゆきを

み山へのやとはみ雪にうつもれて立けふりにそそこと知ぬる

東山邊にて雪

よもすから籬に風はさえなからされこそ雪のはしめなりけれ

山ふかみしなりも雪にうつもれてもとの越路はいつく成らん

しら鳥のさきさか山にふる雪はなのまに〳〵もあまきらす哉

さらすとてたちやはいつる谷の戸をふる内雪のなに埋むらん

千載

み山へはかつふる雪にうつもれていかてか駒の跡もたつねん

雪つみて谷のとほそをとちつれは又ふる年のおくるをそまつ

降雪にそこともみえすいかゝしつむ月のみかの松もきるへき

年くれてかしらにつもるしら雪を山のうへとはなにおもふ覧

雪不擇處句題百首

ふるかひもなきよのなかに住宿をわかすそみゆるけさの初雪

東山邊にて朝見山雪

常磐山秋はしくれにかはられとよのまの雪にいつらみとりは

雪朝見行人

ゆきふかき道にあさたつたひ人はよそにもしるしいそく心を

雪中客來

こゝろさしありとはなしに山里の雪みかてらや人のとひくる

雪埋寒野

つらゝゐる野中のしみつ雪つみてもとの心もいかゝくむへき

野宿雪

霜枯のかやかゝりいほに□□よはにそつけり雪のうはふき

旅行雪

朝たちにかしきもしらて旅人のふりそふ雪をわけそわつらふ

社頭雪

天のとのあけし昔の心地しておもしろしとや神もみゆきを

ふる雪に神のみむろもをしなへてしらゆふかくるあけの玉垣

榊葉もかくるにきてのいろ〳〵もみな白妙にゆきそふりつむ

連日雪

みな人のれかひを松のひろまへにめくみそつもる千早ふる雪

わか宿をとひこむ人もひかすふる雪のそとはいかゝしるへき

讃岐院位御時の百首の歌に寒蘆をよめる

かれはてゝいりえの芦のおれふすに波の花こそ又さきにけれ

内裏十五首會に葦のこゝろを

風ふけはみきはになひくあしのほをたつ白波とおもひける哉

寒蘆礙舟 句題百首

かれはてゝおれふすあしの亂葉にさせとのほらぬたかせ舟哉

讃岐院位御時の百首に千鳥をよめる

難波かたつきのてしほやみちく覽ゆふなみ千鳥うらつたふ也

同院の百首に

つらゝゐるきよき川瀬は音たえて空にちとりの聲のみそする

内裏十五首會によめる

白浪とゝもにたちゐるはま千鳥聲はかりこそまきれさりけれ

東山邊にて千鳥題にてよめる

冬のよのたひれをすまの浦千鳥なくれにいとゝ床そさえける

千鳥

さよ千鳥ともよひかはす聲すなりさほの河霧たちやへたつる

千鳥驚浪 句題百首

はかなくもこりすむれゐる濱千鳥浪うつたひにたちさわく也

渚近聞千鳥

さよちとり草の枕にこゑすなりやかて浦路のあまのとまやは

讃岐院位御時の百首の氷の歌

よもすから峯のあらしのさえつるにこほりにけりな谷川の水

同院の百首

難波江のあしは氷にとぢられてふけども風になびかざりけり

連夜氷厚同百首

冬深くさえゆくまゝによを重ねこほりますたの池とこそみれ

東山邊氷止水聲

よをさむみいしまをくゝる谷川のをとも氷のとぢてけるかな

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

水鳥をよめる

冬の池にうかへるとりのゆくかたに流るゝ水と思ひけるかな

同院の百首の歌に同こゝろを

水鳥の霜うちはらふ羽風にやこほりのとこはさえまさるらん

内裏十首歌合に

よもすからつかはぬをしの鳴聲にめもあはてこそ我も聞つれ

氷の歌とものなかに

よをさむみ氷すらしもこやの池のみぎはに鴨のなく聲そする

水鳥のうはけの霜をけさみればみなしらさきとなりにける哉

みつ鳥ゝしたの氷をいかにしてうはけの霜をうちはらふらん

かもめ鳥あなしふけゐの浦なれて浪の騒きにたちもおからす

歌林苑影供會水鳥夾鳴

みなれたるかもの村鳥つらとてやわけ行船にたちもさはかぬ

水鳥近馴

こやの池の汀のやとはやへふきもみなるゝをしの羽音寒しも

水鳥馴人同百首

こやの池の浪にたはるゝあし鴨もかへは人にもみなれぬる哉

江邊水鳥

冬ふかみ難波堀江のあしかものねのかあをはゝ霜かれもせす

嶋邊水鳥

浪のかくゐしまか礒にゐるをしのいろゝりたりとみえ渡る哉

寒沼水鳥

かくれぬの蘆のあをはゝかれはてゝ鴨の上毛の色そまされる

讃岐院位御時の百首に網代を

網代木にひをと共にはよりくれと浪はしきにもとまらさり鳧

網代遊覽同百首

月きよみあしろにひをも寄浪もおもしろからぬをのなきかな

泉殿御室にて人々月照網代

うちかはのせゝの網代によるひをのよるともみえす月の光は

讃岐院位御時の百首に神樂を

神樂にゆふしてかけてよもすから神の心をとるにこそ有ける

社頭神樂同百首

千早ふるみたらし河の浪たかくあそふや神のこゝろなるらん

讃岐院位御時の百首に鷹狩を

山歸りまたてならさぬあら鷹をけふのみかりにあはせつる哉

鷹狩路遠 句題百首

かへるさの道をはしらす狩ゆかんほのもとたちのみえん限は

讃岐院位御時百首に炭竈をよめる

ふる雪になのゝすみ竈うつもれてけふり計やしるしなるらん

冬深炭竈 句題百首

風ぬるき春もきかたになりぬなりなに炭竈をやますたくらん

讃岐院位御時の百首に爐火心を

埋火の上にけしきはみえねともあたりにゐては冬もしられす

爐火如春 句題百首

うつみひのあたりはあやな忘れつゝ春きにけりと思ひぬる哉

東山邊にて雪中佛名と云ことをよめる

白雪のつもるにしるしとなふなる佛のみなにくろききえぬと

となふなる佛のみなのときしまれしろきのりとや雪積るらん

處々佛名

いつくにも佛のみなをとなへつゝ年とゝもにや罪もつきぬる

やとことに佛のみなを唱ふなりいつくにつみかとゝこほるへき

ひのひかりてらせはきゆる露霜は佛のみなにあへるつみかも

冬のよあかしかねてよめる

長夜をまちつる鐘はつくなるに伏屋のひまのなとかしらまぬ

冬のよねさめかちなるやまさとにてよめる

はかなくも夢にゆめみる世中をさむるをさむとおもひける哉

冬夜

みな人の明しかねたる冬のよをあかすやなけくかつらきの神

獨ぬる床に氷はとちれともさえまさりけりとふのすかこも

寒夜旅宿

しつやしつ何やとりけむたかす垣風もとまらぬふしとえけり

顯輔卿家歌合冬月

限もなきけしきは秋にかはられとさゆるにしるし冬のよの月

東山邊にて冬月

冬のいけの氷にやとる月影はそこまてえこそすみもとをられ

山家冬閑と云ことを

雪つもり山路たえぬる谷の戶はさゝてふせやにひとりふす哉

山家冬深といへることをよめる

山里はとしの行衞もしら雪のつもるや冬のたくひなるらむ

讃岐院百首歌に歳暮を

續古今 立かへる年の行衞をたつぬれはあはれ我身につもるなりけり

東山邊にて同題を

年くれてなかるゝ水とはやけれはおもてに浪はとまるなり鳧

年くれてかしらにつもる白雪はおしむしるしをみする成けり

老惜歳暮

行末のまたはるかなる人たにもくれゆく年のおしからしやは

山寺にて極月晦日年くれぬるをみてよめる

おきぬふしおかしくらすとする程に哀今年もけふはかりとか

讃岐院位御時の百首に除夜を

あすよりは春と思はぬけふならはくれ行空をいかにおしまむ

俊成十首歌に夜をよめる

年くれて流るゝみつと早けれとおもてに波はとまるなりけり

除夜述懐〈百首〉

いつしかと春に逢へき人たにもけふのくるゝは惜からしやは

戀歌

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

初戀をよめる

けふこそは思ひそめつれ紅のいつしかいろにいてにけるかな

内裏十五首會に初戀を

うけひかんとはしられと今まてになとかは君を見初さりけん

おなしこゝろをよめる

〈風雅〉行すゑを思ひこそやれけふこそはいひそむるよりおつる涙を

しはしこそ袖にもつゝめなみた河たきつ心をいかにせかまし

さのみやはあはぬためしの有へきと又そこひちに思ひ立ぬる

いつしかといひそむるより紅の末摘花の色にいてにけり

初聞名戀〈百首〉

いふ方もしらす荒ふる鬼すらもなを聞れてはなこむとそきく

讃岐院位御時の百首忍戀のこゝろをよめる

あふまては思ひもよらすこひわたる心をたにもしる人そなき

内裏十五首會に同心を

君こふるなみたの玉を人とはゝ露にぬれにし袖とこたへん

おなしこゝろを

しの薄はにたにいてゝ戀しなはなにゝかへたる命とかいはん

〈續後撰〉戀わひてたえぬる玉のおとゝかもたてれは行はいかゝ知へき

なみた河人めつゝみにせかれつゝ君にさへ社もらしかねつれ

いかにせん涙に袖のくちはてゝむなしき戀を何につゝまん

夢にたに誰かはしらん戀わひていひあはすへき人しなけれは

わきもこか戀しとかける玉章をしのふものから誰にみせまし

たくひなき戀の涙をたはをれはなへてふりての衣とや見ん

戀しさはいふもおろかに成ぬへし何によそへて君にしらせむ

なそもかく獨伏屋の軒にをふる草のなにしもかゝりそめけむ

忍戀

思ひかねけふやま水のもらす哉いはてやむへき戀路ならねは

忍久戀

わか戀のおなしいろなる衣てにふりぬるなみた猶つゝむかな

憚人目戀

せきあへぬ涙の色をいかにせん世のはかなさにいひはなす共

讃岐院位御時の百首の不遇戀歌

たつぬれは北もみなみも知ぬへしなと我戀のあふかたもなき

おなしこゝろを

春のはな秋のもみちもちりぬれとつれなき人はかはらさり鳬

年ふれとあはてこかるゝわか戀はよもきか山をとめしふな人

いかにしてあくてふよをみにしめて難面き戀の色をかへに（まイ）し

おもはしと思ふかつ／＼戀しきやこひにまけぬる心なるらむ

日をへつゝ戀の病にむすほれて君かとくへきかたもしられす

いかにせんあはぬ歎のつもりなは戀にこかるゝみとそ成ぬる

とならはや玉のをも絶なゝむつれなき人のなきよとやなる

人こゝろまたあらたかに筑波山しけきこひにそ思ひかれぬる

みつわさす殘もしらぬ老のよをやさしや戀にあやなこかるゝ

ありしにもあらすなり行老のよにこひの心はかはらさりけり

我やわれ戀にこゝろのくらされていとゝもやみにまよふ比哉

しのひかれいろにいてにしむさしのゝ若紫はあはれともみよ

戀しとはいふもおろかになりぬへし心のうちを人にみせはや

とわりやわかおもひにもとけぬかな君か心のこほりならねは

こひしさは君かつけたるをなれやわか心とはけされやはする

年隨不遇戀句題百首

秋風になひくものから花すゝきまたおれふさぬこひもする哉

行不遇戀

つきにいてし昔の人もわかことや主にもあはてゆき歸りけむ

讃岐院の位御時の百首に初遇戀をよめる

秋のよはみしかゝらしをあひみてのあかぬ心ははやあけに鳬

毎夜遇戀

曉をなになけきけむゆふつゆのをきてのみこそ袖はぬれけれ

すまの浦の月のてしほに袖ぬらしひろま／＼を待そわりなき

葛城の神にたかへる戀なれやくるゝをなけきあくるをそまつ

讃岐院位の御時百首の後朝歌

あはてのみ歸し道をけさよりはあへもそするとかへて社ゆけ

題輔親家歌合に同心を

なか／＼にあはて歸りしよひよりもけさ道芝に露そこほるゝ

後朝待事〔書缺〕句題百首

いつしかと妹はまつらむ歸るさをつくしもあへぬけさの玉章

後朝隱戀

いつしかとゝへはなしとかあけぬとて恨しや何に歸來つらん

けさきつる我と共にや出つらんやかてとへとも行へしられす

曉不返戀

あけぬとて君をはやらしあちきなし暮をまつまも定なきよに

定なきうきよをやしるおきつ涙よせて浦わにしはしとまらぬ

讃岐院位の御時の百首に遇不遇戀をよめる

あすかゝはあふせはふちと成はてゝ又も渡らぬそかなしき

内裏十五首會に同心を

あやなくもけふさへ暮をいそく哉あひ見しよはの心ならひに

おなしこゝろをよめる

つらかりし昔なからの橋ならは今はおもひもたえましものを

絶後戀

いかにしてさらに戀しといひやらん君か思はんともやさしく

讃岐院位の御時の百首に旅宿戀をよめる

くさ枕をくしら露をかこたんとおもふにすきてぬるゝ袖かな

旅宿遇戀 同百首

あふをはくさの枕にむすへともつゆもあたには思はさらなむ

閨中戀

戀わひてわかふる里はいてしかと草のまくらにいかゝ露けき

內裏十首會船中戀

あけくれに何と船出をいそくらん君にあふへき旅のうちかは

讃岐院位の御時の百首の思の歌

戀しさにたちし烟のあひみてもやかて思ひにまたそこかるゝ

同百首に片思

はかなくそ思はぬ人をおもひけるいかなる鳥のはねならふ覽

同百首に恨を

いまはたゝおもひたえなて唐衣かへす〳〵もうらみつるかな

讃岐院の百首のなかの戀歌

河のせにおふるたまものうちなひき君に心はよりにしものを

かくはかり涙のかはのはやけれはたきつ心のよとむまそなき

いかにせんあはの鳴戸に引汐のひきいりぬへき戀のやまひを

きく人はなき奥山のよふことりかひなき音のみ我もなきつる

千載 夕暮はおきのうは風そよとたにいふ人もなきこひそくるしき

いかはかり戀路は遠きものなれは年はゆけ共あふよなからん

逢事はせめてなこやのあつ衾あるにかひなししほれのみして

戀わふる心なくさにあひみんとかよはかりもたのめやはせぬ

つれもなき君まつら山まちわひてひれふる計こふとしらすや

こひしなは戀もしれとや思ふらんあはゝあふへき程の過ぬる

戀すとはそのはにこそいはさらめ涙のいろをいかゝしのはん

涙かはみかさまされは忍ひこし人めつゝみもせきそかねつる

夢にたにあひみんとのみ思ひしはたゝ戀しなん爲にそ有ける

新勅撰 つらしとて思ひかへらぬわか戀や流るゝ水のこゝろなるらむ

昔たにもこむといひせはぬは玉のよとこに玉もしかまし物を

君まつとゝふの菅菰みふにたにねてのみあかすよをそ重ぬる

つらさをは恨みんとのみ思ひしもあひみる時は忘られにけり

千載 から衣かさぬるよはもあけゆけは戀路にかへる袖そつゆけき

千載 戀しさはあふを限ときゝしかとさてしもいとゝ思ひそひけり

敷たえの枕はかへしわきもこかねくたれ髪にふれてしものを

內裏十五首會

後撰 逢みんといつはりにたにたのめをけ露の命のかゝるはかりに

俊成十首會

千載
よしさらはきみに心はつくしてんまたも戀しき人もこそあれにしきゝもちつかに今はなりなまし賴めしを賴まさりせは

清輔朝臣家歌會
あはてのみゆきてはかへる道芝やわか戀草のしけるなるらむ

經盛朝臣家歌合
あふをのいつともしらぬこひ妻やまつにかはらぬ常盤成らむ

對月戀
あやなしやくまなき月はなかむれとこひに心をかきくらす哉

逐日増戀
我戀はひをふるたにもわりなきに年も積らはいかゝたふへき

歌林苑臨時會延約日戀
たのめてはみてそ明ぬる中〳〵にさもあらぬ今宵まち心みん

夜戀
獨ぬるとこにはいとゝ秋のよのわかためにとやあけす成けん

歎短夜戀
またとたに契らさりせは(明題)短夜の歸るあしたの露とけなまし

寄歳暮戀
秋たにもまたむつをはつきす共きたれはあけぬおなら此夜は

煩戀歳暮
つれなさを年とつくして春たゝはなこやの風に靡けとそ思ふ

契歷年戀
ゆく年と戀のやまひやつきなましあひみんとをはると契らは

隔山戀
白浪のたつたの山ときゝしかと戀にひかれてこえぬよそなき

近隣戀
をち方にみれともあかぬ妹をゝきて花にもよらぬしかの山越
ゆきかへる心はへたてなきものをたゝなか垣は人めなりけり

隔河戀
たなはたも逢せはとしに天の川わたらぬ袖そわれはひちぬる
ゆきかへりあはて年へぬあはれとはわれをや思ふうちの橋守

隔墻戀
よをかされやへの雲路を尋ねこは心さしをもみるへきものを
わか思ふ人をへたてぬ時たにもいふせきものを蘆のやへかき

田舍戀
思ふにはたけのあみかきふしなれぬ玉の臺よさもあらはあれ

不知在處戀
あふ坂のなをこそせめて惜むとも關のし水のすむやいつくそ

返迎車戀 句題百首
わかすみかおなし思ひのいへとてや牛の車にのらてかへすは

讃岐院戀十首めしゝ時寄晴戀と云事をよめる
さのみやはくもらぬよはの月影のいとはれてのみ立歸るへき

寄關戀

いなのみすさの清風ふきくれはよするなみたのせきあへぬ哉

寄苔戀

あふをまつの岩根にとしふりて苔むすはかりなりにける哉

寄弓戀

あさましやたつかの弓のそりはてゝいかなるよにかまたはふすへき

寄鏡戀

いとゝしく戀をますみの鏡かなまたかけたにも人のみえれは

寄錦戀

おくるまの錦のひものとけはこそ君かゆきゝを頼みしもせめ

寄琴戀

さよふけてかきなすとに松風のかよふを人のこゝろともかな

寄笛戀

我戀はふかてへにける笛なれや一夜かほともれかたかるらむ

寄舞戀

忘るやと袖にはゆきをめくらせといとゝも戀にきえぬへき哉

寄催馬樂戀

衣かへせすとも戀のなみたにはすゝかれぬらむ袂かはなすり

寄郭公戀

よもすからなく時鳥君こふるわかなみたにもいさくらへみん

内裏會寒鷹添戀

冴わたるよはのねさめの鷹かねは戀せぬにたにいかゝ悲しき

寄更衣戀

ふしのれのもゆる思ひにこかれつゝ蟬の羽衣きるかひそなき

隔簾過戀

みつからと契りしをはかはられと簾こしとはおもはさりしを

見簾忍戀

かゝらすはみすはといひし古への人をもむへと思はましやは

歌林苑影供會立聲歎戀と云事を

色にこそ戀はいつなれこゝろにさへ忍ひかねてそ身に餘りぬる

聞音増戀

悔しくそこゝろなたにとは思ける戀のいろこそすはへしにけれ

歌林苑影供會失返事歎戀のこゝろを

うけひくとかゝさりしかと水莖の跡はかもなくいかゝ成へき

疑後戀百首

あひ見てはたかならはしに忘られてさもあらぬ人に心置らむ

歌林苑影供會改名隱戀と言をよめる

我に君なをたゝしとや尋ぬれはさいひし人もなしとこたふる

秘傍女戀

今もかもかたみのみ見てつゝむまに玉章をたに傳へやはせぬ

秘知音戀

深き思ひいひさまたくるとやあると隔てぬ人を今そへたつる

藏從者戀

とのはゝちりもやすると戀しさを人傳にてはいひもやられす
ともにくる人もやあると我宿をいつるさへにも忍ひつるかな

會友談戀

心ある人とおもへと戀しさはいひあはせともかひなかりけり

被妨親戀

戀しなんみちとしらてやかそいろはこの相坂の關となるらん

互憑誓言戀

神かけてともに契り(ちかひイ)しこよひをは我もたかへし君もまつらむ

嫌賤戀 句題百首

峯たかく心はゆけといやしきはくるしかりけり賤のをたまき

依戀被謗人 句題百首

戀しさのとも思にあらはこそつゝみもあへめ人のそしりも

内裏三首會夢會戀と云ことを

春の夜の夢には人にあふとみつ今はうつゝにまさしからなん

同會難契不來戀を

なか／＼にたゝ歸りれといひもせて頼めし君を待あかしつる

臨期違約戀

もれきかん人はかけても思はしを枕ならへてみさほなりとは

隔物談戀 句題百首

いひかはす戀は傳へつわれなから我ことのはそうらやまれぬる

競人戀 句題百首

行ちかひ心くらへのひまもあらは我もさきにと思ひをそとく

告女待戀

わきもこか音信れんとは契れともそれ迄待たん心ちこそせね

不告遠行戀

逢ことのかたき關／＼こえぬ共かくとたにやはしらせさるへき

依戀惜餘算

あふことをせめてこのよと思ふには殘りなき身をまつそ恨むる

雜歌

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

祝の心をよめる

かそへつゝまさこの數もしりぬへし君かへんよは限なきかな

同院の百首に慶賀を

きみかよはちよとかきりていはし水神の心にまかせてを(ぞイ)みん

おほ空をおほはん袖につゝむとも君かへんよの數やあまらん

祝歌とてよめる

君かよはあまてる神にまかせてきとよのほくひのさゝお限は

かきりなき命をたのむ君なれはかつらのよにや萬代をへん

年をへておひそふ竹のふしことにこもれるみよの數もしられす

かれてよりちよのけしきやしるからむ君諸共に松にすむつる

行水となかるゝ年ははやけれと君かすむへき(杉のしるしの門はたつねしイ)みよはのとけし

さき草のみつはよつはの宿のとみむへちよかれてとふ泉かな

ちとせとニ松の常盤[マヽ]もちきるなる君かみよをはいつと契らし（リイ）
君か祈るてのてをのかれの音のつくともつきし末のよまてに
萬代とさしてもいはし君かため思ふこゝろのかきりなけれは
萬代も君か爲にはあかすとてつきぬよはひを神そさつけむ
おのゝえのくちし山ちをひきかへて君か宿にやちよをゝく覽
藤の花よろつよふへきしるしにや常盤の松にかゝりそめけむ
内裏の十五首會に祝をよめる
幾とせと限もしらぬためしには君かみよをそひくへかりける
讃岐院法性寺の殿下の許へわたらせたまひて松契
千年といふことを
きみのみや千年の春にちたひまて花さく松のいろをみるへき
同院鳥羽殿にて竹遐年友と云ことを
かそふれと數もしられぬみよなれはさのみや竹も友と成へき
むつきのなぬかの日いつみのゝりといふものそう
のもとにつかはしける
奉るわけるいつみのゝりなれはたすくる君そいとゝ榮えん
解文のとくにそおとしあけ眞名にてかけりける
こゝろさし深きいつみのゝりなれは流れ久しく榮えさらめや
人の弟子の加賀となあるちこの出家すへかりける
かそのとのひぬと聞て師の許によみて遣はしける
よろこひをくはふる君はその宿を急きいてゝも何にかはせん

さぬきの院位の御時の百首の別歌
新續古今 思ひやれおか月とのわかれたに暮をまつまはいかにかなしき
同院の百首に
新後撰 歸りこむ程はそのひと契れとも立別るゝはいかゝかなしき
修行に出侍とてともの許へ云つかはしける
後にとはんをは命ときゝしかと殘りすくなき身をいかにせん
ひとのくにへまからんといてたちしところにとも
の物へいくときくはいつかかへらんするなとま
したりしによみてつかはせる
たのみつる思ひや空にかよふらん同しこゝろになりにける哉
はかなくて老にけるみの悲しきは後にあふひをえこそ契られ
かへし　阿闍梨覺意
もろともに心は空にかよひつゝ雲をへたてんとをしそおもふ
君はおい我身は末になりぬれは後にあふひをいかゝまつへき
ひたちにまかりて侍しおり京に侍ける人のもとへ
我なからしらて過けりいかてかくうきに絶たるみとは成けむ
かへし
なれさりしうきをはたえてしのふとも都のとは思ひいつらん
高野にすみ侍したり人の許よりゆきのあしたあま
のりをゝこすとて
音にきく鷲のみ山もかくこそは雪のしたにてのりをみせけめ

返
あひかたきのりをうれしくえつる哉雪のみ山の跡をたつれて
讃岐院の位の御時の百首に旅心をよめる
わかおもふ人とゝもなる旅ならはなにふる里を思ひいてまし
たひの歌とてよめる
人やりのみちとはなしに旅衣たちかへるへきひをそかそふる
このたひそ幣も殘さす手向つるかへさは神よたゝらさらなん
讃岐院の百首の羇旅歌五首
春花
（詞花）ふるさとにとふ人あらは山櫻ちりなむ後をまてとこたへよ
夏郭公
とふ人もなき旅ねするみ山へになのりして行ほとゝきすかな
秋月
あかさりしおなし都の月なれはたひの空にもかはらさりけり
冬雪
ふる雪にいかて家路をたつれましおしふる駒の跡なかりせは
戀
くさ枕おきゐる露は君をのみいもねてこふるなみたなりけり
東山邊にて氷爲旅鏡と云ことを
いそきたつあさの衣のすかたのみ氷のかゝみゝるもかひなし
みちのへのみつはかゝみと氷れとも我古郷のかけはうつらす
道すからいつくのみつもつらゝゐて鏡にあける旅にもある哉
とほきくにへつかはされける時ひとの許へ云遣は
せる
落瀧津水のあはとは流るれとうきにきえせぬ身をいかにせん
とにあたりてあつまのかたにまかりけるにおほい
なるかはのほとりにゆきてひもくれかたにわたし
もりはやわたらなむといそかせはいとものかなし
くてふねにのらんとするにこのかはをはなにとか
なつくるとゝふにこれなむすみたかはといふはむ
かし在中將のいさことはむみやこ鳥とよみけむを
思いてられてきしかたゆくすゑものあはれなるこ
とかきりなくてよめる
すみた川今もなかれはありなからまたみやこ鳥跡たにもなし
おなしみちにてのりかへにかけなる馬の侍したつ
れ侍しかはあしをやみてさかりたると申侍しかは
日の光てらしすてたるうきみには影さへそはすなりにける哉
かくてひたちの國まてによそかあまりにまかりい
たりぬいたらんするところはしたのうきしまとな
んまうすうみのほとりにふれにのりける時によめ
る
ひをへてもすきし都のつゝきそと思ふ岸へをけふそはなるゝ

讃岐院百首に神祇をよめる

榊とるほとにしなれはから神のおもしろしとや心とくらん

すみよしの神を風もやまつるらんまつにゆふしてかくる白浪

廿八品の歌のなかに

序品

かゝりけるそのいにしへを思ひいてゝいまも光を空にしる哉

方便品

いさゝめに結ふちきりをたれとして誰も佛ととくそこのゝり

ときをきし花のみのりをきゝしよりたれも佛の法のはちすを

譬喩品

諸人をみなことゝけるのりなれはみちひかれんは心なりけり

數ならぬ我身とおもへと諸人を皆ことゝけるうちにもれめや

藥草喩品

ふたよまて露もこゝろにたかはぬは法のはちすの匂ひ乙けり

隨喜功德品

つたへ行いつそちまてのともはをきくも嬉しきみとそ成ぬる

法師品

結ひをきし花のみ法をとくきけはやかて佛のみとそなりぬる

露はかり法の蓮をきゝそめてやかておきゐんみとそなるへき

見寶塔品

限もなき月のみかほのならひしによものゝ人さへ空にすみにき

普賢經

長夜につもれる霜のあたものはめくむ朝日にきえぬとそきく

念佛時よめる

年つもりほけにこゝろはかたふけつ我思ふとうるはしみせよ

乃至以一花

かりそめのたゝ一ふさの花たにもやそちの種に榮ゆとそきく

さもこそはうきよの中といひなからか計物を思ふへしやは

常在靈鷲山

鷲の山つねにすむへきしろしにやつるの林にかけかくしけむ

誓弘深如海

わたつみのふかき誓にすくはれて何かうきよに沈みはつへき

以佛教門出三界苦

色もなき雲ゐの空にそすゝめいたすかみをきはめし人のとのは

新院百首に釋教の心をよめる

信樂大乘　不信各別

我身にも佛のたねのありなしは花のかつらをかけてこそしれ

覺心不生　入不中道

木草まてさゝちぬたるまの水上はたゝとはむの流なりけり

一道無為　一乘佛性

しな〱にみつの車のすゝめすは乘はつれたる人やおちまし

極無自性　三界唯心

千載 はかなくそみよのほとけと思ける心ひとへ（つイ）にありとしらすて

秘密莊嚴　即身成佛

同 てる月の心の水にすみぬれはやかてこのみにひかりをそさす

不淨觀

風雅 わたつみを皆かたふけて洗ふとも我みのうちをいかゝ淸めん

無常思

いつろいきのいろをもまたぬ世中をいつ迄人の上とかはみん

空本迷

明暮はむなしき空をあふけとも我身をしかとしらぬはかなさ

無我念

うつ蟬のはかなきからをなにかみん我も空しき身とはしらすや

地獄

ならくかの烟の底にむせふみはさきのむくひのかゝるえけり

不殺生戒

をしなへておしむ命をゆめゆめたつてふとは思ひたゝなん

不偸盗戒

秋のたのそのひとほをもぬしならて我物とやはかりに思はん

終夜供花

くろとあくとてまうちやめす奉つる花は佛のみとそ成へき

願極樂要發四弘願。我今無力在濁世中。何時能拔衆生。因茲求生淨土方。爲衆生應知。念佛修善爲業因。往生極樂爲花報。證大菩提爲果報。利益衆生爲本懷。愛修念佛三昧。是第三願行。法門無邊誓願知。隨有所伏滅。是第二願行。煩惱無邊誓願斷。遠近結頁緣。是第一願行。衆生無邊誓願度。積功累德。是第四願行。無上菩提誓願證。白餘衆善例知不俟。

衆生無邊誓願度

入日さすかたへそいそく思へとも我もうみにていかゝ救はん

煩惱無邊誓願斷

むかしより心のくまにゐる塵をたてゝそきよき風にまかする

法門無邊誓願知

つきもせぬ法の雨にはみなぬれん佛のたれをあらはさんまて

無上菩提誓願證

續後拾遺 山のはにかくれし月をもとめても我身のためと思ふものかは

極樂依正。功德無量。算分喩分非所知。今擧十樂而讃淨土。猶如一毛渧大海云々。而題此十樂之讃嘆。詠其十首之歌頌。夫動天地感鬼神。莫宜於和歌。又動佛界感聖衆。惟同者歟。謂倭歌者我國之言也。漢土言偈頌。天竺云唱陀南。而題經論之所心。擧佛法之髓腦。以偈頌爲規模。因茲爲我國風俗。以和歌展彼十樂。豈非云誠一心之讃嘆乎。隨則大聖文殊者諸佛智母也。代飢人立答班鳩宮太子之麗詠。稱行基菩薩

靈鷲山釋尊之佳儔。加之弘法者東寺密法之鼻祖也。涌五七六義之言泉。寄返報於高津葛、傳教者天台圓教之先哲也。作三十一字之詞條。訴冥加於神山矣。自爾以降。云貴賤云聖凡。無以和歌不通情。爰我等之懇志在極樂。以倭歌呈之。其詞云。

聖衆來迎樂

唱置しあみたはみなに答へてそあまたさましてけふは迎ふる

蓮花初開樂

ひらけぬる蓮の花のたのしひは露もこゝろそをきところなき

身相神通樂

數しらぬ佛のくにもくらからすみより光のさすにまかせて

いさきよき光さすみとなりぬれはなにも心にかなはぬはなし

五妙境界樂

たへならぬをのなき哉おほ空もにはもうてなも池もうゑきも

快樂無退樂

押なへて皆樂しきをせきつれはうきよにかへる道はとちてき

引接結緣樂

おほかみはまついつれをとわかれ共結ひし契とくそみちひく

聖衆俱會樂

よそなからなをのみきゝて賴みこし聖とゝもに立居をそする

見佛聞法樂

めに近く月のみかほの照さすはまことの道をいかてきかまし

やみ萬春のすかたをおかみつゝきゝとしきくも法ならぬかは

隨心供佛樂

かた〳〵の佛にはなをひきそへん我この國のあるしのみかは

增進佛道樂

玉葉
誰もみなわたす心をはしとしてかみなき道にすゝむなりけり

題不知

あみた佛とたひとなふる聲の中にいつはゆゝしき罪もきゆ也

星

空にのみかゝやく星を今そしるわかみよにふるその儘そとは

按察使公通十首會に野風を

は月とはなにこそたてれ野分して千草の花をさやはゝらはん

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに

曉の心を

曉のかれのこゑこそきこゆなれやかてうきよの夢をさめはや

夜

いそけともあけてをゆかん有明の月もをくらぬよはの山路は

夜聞水聲

あたれするよかはのふれのせゝらきを秋の雨とそ驚かれぬる

讃岐院位御時の百首の山の歌

むはたまのわか黑髮をゆふの山いつしか雪のつまんとすらん

同院位御時百首歌たてまつりしに海路をよめる
有明の月のひかりもさしいてぬとまりしめたる舟もなくるな
海路名所 句題百首
玉葉崇德院御製
すきかてにみれともあかぬ玉つ島むへこそかみの心とめけれ
東山邊にておなし心をよめる
昔よりなを高砂の磯なれはいきとまりなん日はくれすとも
けふも又もしのわたりに舟とめつ浪ちあらしの風やせきもり
風ふけはあらふとみゆる白波のいかにいろとるゑしまなる覽
ふなをさよさしてはやめよ玉つしま神も心をこゝにとめけり
讃岐院位におはしましゝ時の百首に河をよめる
いさら河水のみとりの色をみてわたらぬさきに淵瀨をそしる
同百首に野の意を
たまほこの道たにみえぬ夏草にのなかのしみついつくなる覽
同百首のうち關歌
涙たてはわたりそかぬるあまを舟吹くる風やもしのせきもり
同百首に橋をよめる
かつらきのくめちの橋は中たえて雲はかりこそ立わたりけれ
仙洞齡久 句題百首
定めなき浮世の外のかめの內はいかてかかう（うへイ）を盡さゝるへき
山家尋友 句題百首
淋しさをきてとふはかり山里はよのうきよりも住よしといへ

讃岐院位の御時百首歌たてまつりしに山家をよめる
いつとなくさひしかりけり山里は峯のあらしの音はかりして
繞竹到山家
露しけき竹のは山はふもとよりあなたの宿にたつねてそこし
讃岐院の位の御時の百首の田家歌
鴫のゐる門田のなるこひきならしかりほす迄に我そもりつる
同百首に松をよめる
年ふれとかはらぬ松は君かよのいつれの春かはなもさくへき
松不知年 句題百首
すくしけん年の數をはしられとも神さひにけりすみよしの松
讃岐院位におはしましゝ時百首の歌たてまつりしに竹をよめる
こゝのへのみかきのうちにくれ竹の齡も君におとらさらなん
砌下竹 句題百首
雨ふれは軒のしつくにくれ竹の枝もたわゝにもとくたちゆく
公通卿十首會に竹爲友と云ことを
竹をうへて風もそよとはから人もたゝわかとや契りそめけむ
讃岐院位の御時の百首のこけのうた
跡たえて人もかよはぬおく山にたかため苔のむしろしくらん
同院位の御時の百首に鶴をよめる

久かたの雲井にたつの聲すなりこよひの空やなきわたるらん

鶴鳴皐 句題百首

おひしける澤への芦のはかくれは聲にやたつの人にしらるゝ

東山邊にて山家鶴馴と云ことを

しらたつは君をちとせの友とてやかめのを山に宿をはなれぬ

林間鷺 句題百首

月清みさやにもきゝにゐる鷺のいつれの枝にこゝろよすらん

讃岐院の位の御時百首歌たてまつりしに述懐をよめる

いかにせんうき身なりとも白河の波のなかれは我をしつむな

内裏十五首會に同心を

數ならぬみをうきくもは吹風にゆくへもしらすきえぬへき哉

おなし題をよめる

うき身にもさすか心はありま山いてはくらくてふりにける哉

このよには數ならすともこゝの品たつる蓮のみとはなりなん

數ふれは身はなゝそちをへぬれとも又みとりこの心なりけり

たまゆらの草葉の露はかゝらしを何とてさはく月のれすみそ

海路述懐

いかにせん暮まつ程もはかなきを潮路はるかにかゝる舟出よ

讃岐院位の御時の百首の懐舊歌

いにしゑをあゆく草葉に思ひいてゝ露のとにもぬるゝ袖かな

少將基家朝臣會に過去無常

さきたゝむ我をもかくやまとゐしてとまらん人の思出つへき

さぬきの院の御時たかひになれたてまつりて後世中ちり／＼になりにけれは申かよはすこともなきをいかなるふしにかよみてつかはしたる

前大僧正覺忠

てたまゆら曉のをたまきくりかへし昔のことをかけぬまそなき

返

たかれよりちりくることのはをみるもむかしの風の名殘こけり

讃岐院位におはしましゝ時百首歌たてまつりしに夢をよめる

このよとてうつゝならぬに春のよのはかなき夢と思ひける哉

田中眺望 句題百首

秋のたのなるこの音も聞えこぬほとものちにはかゝるなり鬼

海上眺望

續拾遺 浪の上にうかふこのはとみゆる哉こきはなれ行あけのそほ舟

やまさくらちりにし物をわたつみは風にそ波の花はさきける

曉餞人 句題百首

あすしらぬ別れをゝしみかきくらす心のやみやあけくれの空

讃岐院位の御時の百首の無常歌

みし人のなきか多くもみえゆくはいつ迄とてかよそに聞へき

同院百首のうちに
秋風にあふはせをはの砕けつゝ有にもあらぬよとはしらすや
新古選
水のおもに浮へる泡の程もなくきゆるをよその物とやはみる
東山邊にて無常歌とてよめる
あさかほのつれなき身とは知なから夕暮まつとなにたのむ覽
行末をいかゝたのまん白露のしらすやきえんほともなきみを
ありはてぬよとはしる／＼誰もみな今行末といふそはかなき
うきよには終に誰かはとまるへきおくれ先たつとはありとも
はかなくそあすも花みんと思ける暮まつ程もさためなきよに
つねに行道とはよそに聞しかと我にそしりぬきのふけふとは
歳暮無常といへるを
行年のゆきとわかみにつもりつゝはかなくきえん命ちかつく
無常不嫌人
世中に有かひあるもかひなきもいつらは終にとまるためしは
數ならぬうきみなれとも世中のさらぬ別をいかゝのかれん
こゝろもありかひある人のとしもおとゝなる身ま
かりにけれはよめる
うきみのみなになからへて置露のきゆるを人のうへとみる覽
やまてらにすまんとてのほりたれともたちよるか
たもなけれは
さもこそはあたしのゝへの露ならめしはしもをかぬ山颪の風

おいのねさめにかねのおとをきゝてよめる
曉のかねうちきけはあはれわか殘すくなきこのよなりけり
こゝちそこなひてたのもしけなくおほえけるにほ
とゝきすのなくをきゝて
しての山われはこゆまし時鳥たゝこゝにて（してイ）を聲つくしてよ
年おひぬれといまゝてまかりかくれぬをなけきて
よめる
露のみの今まていかに消さらん明ぬくれぬとおきぬふしぬと
このよには待もつゆもなきものを何にかゝれる玉のをならむ
物へまかりけるに船岡のほとりをすくるにたかき
いやしきつかとものひまなきをみて
みな人のはては蓬生こけのしたさかえし宿はいつくなるらむ
としもおいやまひをもくなりぬれはしつかならん
山さとたつねあるきてよめる
今はとて露のすみかをたつぬるやうきを離るゝかとて成らん
をはりのためにとしめたりけるやまさとのあひた
かふをありてたちさりけるときよめる
露むすふ草の庵もあくかれておきところなきみをいかにせん
やまひおもくてさすかにいきはかりはかよひてひ
さしくなりにけるをりもといひなれたるをなれは
かくなんよめりける

いきもせすしにもやられぬ物故になにときえやらぬ露の命そ
かくてみまかりにけりとそ

遊女不定宿句題百首

かりのよをおもひ知てや白浪のうきたる舟によるへさためぬ
歸及七旬。請迷六義。然而猶携君之風骨。養我之露
命。再遇中興之節。將勤下愚之性而已。

年よれるおもての浪もわすられて心はわかのうらにかへりぬ
讃岐院御時御方違の所にて人〳〵におほみきたま
ひてよもすからあそはせたまひしに左京大夫顯輔
にたひとに人々さけをすゝめけれはしひてなにと
なくいへりしとを歌にとりなし侍

あさなへの心地こそすれ千早振つくまの神のまつりならねと
ともたちの御山をいつとてかくともつけさりける
かへりまいれるによみてつかはしける

とはりやかすならぬ身のから衣たちいてぬとも何かつくへき
かへし

たちかへりけふきたるにて唐衣かされてまたは恨みさらなん
後のよまてとちきりける人のたえてひさしくなと
つれさりけれはよみてつかはしける

忘れしの行するまてのことのはゝまつこのよにてかれにける哉
返　廣言

わすれしと契るはかりのことのはに露もかれぬと思はさらなん
やとちかきほとなりける人のつれにをとつれける
かその所をさりてのちひさしくなとせさりけるた
ま〳〵このほといかになといへりけるかへりこと
に

心さしふかさあさゝはやとからの近き遠きになにかよるへき
かくいへるかへしにめといふものをゝこせてよめ
る
廣言

こゝろさし深さの程はわたつみの千尋の底のみるめにてしれ
としもおいやまひもせはしく北山のほとりにこも
りをるころに人々きたれるなこりむつかしきとゝ
ものありけれはよめる

今はとてたちましろはぬみ山へもまさきのかつら猶そ苦しき
京やすみうかりけむゐなかなる山てらにまかりて
みやこを思いてゝ人の許につかはしける

住なれし思ひのいへをあくかれてさらぬ別のかとてをそする
かへし　頼政朝臣

我もさそ思ふおもひのいへゐには今まて出ぬこゝろおさなこ
とものひさしくなとせさりけるかたま〳〵消息し
たりしに

昔にもあらす成ゆく身のためは人のこゝろもかはらさらめや

返　登蓮

すかたこそみしにもあらす成ゆけと心はいつかゝはらぬ物を

のちのよまてとふらはんなと申けれとそのゝちお
とたにせぬ人の許へ

忘れしのゝちのよまてのとのはゝいかになりにし契なるらん

かへし　廣言

契をきし後のよまての言葉は露もあたにはなしとしらなん

人のまきものあつらへたりけるかきてやるとて

濱千鳥跡ふみつくる水くきのなかれてのよのかたみともせよ

人のもとよりたかむなをこひにおこせたるつかは
すとて　よみ人しらす

たかうなをもとめえしこそ古へも二心なきためしなりけれ

かへしによめる

たかうなを雪の内にはわけれとも心さしをもぬきいてつる哉

静蓮か許より申つかはせる

老はてゝみ山かくれにすむまてもわかの心のうせぬかなしさ

かへし

くちはてゝ谷の底にはむもろともわかきの花をいかゝ忘れむ

讃岐院百首歌に物名もちつゝしのはな

人とに弓はもちつゝしのはなし何をかりこのやにはゝかまし

十五夜月

五月雨をくろしふこやのつき橋もうきぬ難波のえこそ通はれ

東山邊にてうくひす

いとあなうくひすめくらす程もなき人に何とてつかへ初けむ

ほとゝきす

朝もよひするほとゝきすしたる哉耳はあ（かイ）りとも口にすゝかむ

契置しほとゝきすきぬいかゝせん今はむなしき時にこそれめ

ときのふた

いつしかとときのふ立出し都こそけふはすからに戀しかりけれ

おものたな

ものゝふのおものたならす弓のれも駒の足かきしけきのへ哉

觀身論。命旦暮在近。述懐言志。心情寛休。但寄源流。
愁呈雜體。

混本歌

おいはてゝあしもやすめすありなしにたとるよそかし

長歌

ひく水の思はぬ方に流れつゝうきせにあひし心地こそすれ

旋頭歌

かりそめのくさはにかゝるつゆのみをしはしたにおかてあら
しのふきはらふらむ

短歌

ちはやふる神のみよゝりまほろしのよはあたなりときゝなからあたにもあらてすこせともわきてうきみのかなしきはなかるゝみつのあはなれはむかしもいまもありそうみのなみにたゝよふかもめとりとりところなきあらたまのとしのみたかくなりはてゝいまはの山の山あらしふきはらはるゝこのはとそなる

返歌

おいぬれはよろへなしとかきゝおきし昔の人や我身なるらん

讃岐院百首歌たてまつれとおほせられし時そへて

たてまつれる長歌

あつさゆみはるたちぬとやみよしのゝやまにかすみのたなびけはこのめもいまはゝりぬらんいつしかとのみはなまつとこのもかのもにたちましりいへちわするゝかひもなくさけはかつちるはかなさをあはれいつまてなけきつゝわかみのうへに（なりはてんイ）なるみちもをはしらてなつくれはしけきこすゑになくせみのむなしきからと秋はなるかくはつれなきよなれともくまなき月をなかむれはものおもふをもわすられてこゝろひとつそほこらしきさてのつもりはおいらくのみにせめくるもしらつゆのしもとしなれはふゆのゝにむら／＼みゆるくさのうへはみなしろたへになりにけりこれをはよそとおもひこしわかみなからもいまはたゝくろきすちなきたきのいとのくる／＼きみにつかふとておもひはなれろうきよなりけり

「右前參議教長卿集以佐々木信綱氏本及村井[illegible]書本校合了」

和歌部七十一

爲冬集

春

立春

あけわたる空にしられて久堅の雲ゐはるかに春やたつらん

歳内立春

さらに又こそとやいはん年のうちにふたゝひ同し春は立なり

初春

新千載春 うちなひき里こそかすめ遠近の朝けの煙春やたつらむ

早春行

あまのとのあけ行そらに霞つゝまたあらたまる春はきにけり

子日

初春の子日の小まつ引そへてかさなる千代のすへそ久しき

子日松

續拾遺兵部卿臣 谷かけや子日にもろゝ岩ね松たれにひかれて春や（ぞイ）しるらん

霞

雲の色はまた暮はてぬ空なから霞に消る遠の山のは

朝霞

空は猶雪けなからの朝曇くもるとみるも霞みけり

山霞

朝みとり霞の衣立かへて山は雪けの雲ものこらす

浦霞

わたつ海や鹽のひろまも濱楸かすみのみなや久うつむらん

鶯

かきくらし猶しら雪はふるすにもかはらぬ春と鶯そなく

初鶯

なかぬまは春もあらしとおもへともけさたのまるゝ鶯のこゑ

朝鶯

朝な〳〵おのれ鳴てや鶯のとし立かへる春やしろらむ（をイ）

谷ふかきをのかふるすの朝戸いてにおくれはいそく鶯のこゑ

雪中鶯

咲そむる花かとみれは鶯のこつたひ散す春のあは雪

竹鶯

夜をこめて春とつくえくれ竹の葉にきゐる鶯の聲

若菜

新千載藤原爲道朝臣

いつしかも野へに心のおくかるゝ春のならひとわかなつむ之

たかしめしのへともわきてみえぬまてよもの里人若なつむ之

摘若菜

けふそつむいくかと待し春日野の飛ひのゝへの春のわかなは

澤若菜

けふはみなわかなつみにとそともなる野澤の水に袖やぬれ南

あしひきの山田のさはに雪きへて若菜つむへき時はきにけり

雪中若菜

新續拾遺

里人は今や野原にふる雪の跡もおしますわかなつむらん

餘寒

玉葉

さへかへり山風あらしときは木にふりもたまらぬ春のあは雪

二月餘寒

新拾遺

立かへり又きさらきの空さえておまきる雪にかすむ山のは

春雪

吹まよふ嶺山あらし春さえて沖つ鹽あひに淡雪そふる

立わたる霞の上の山かせになを空さむく雪はふりつゝ

梅

尋ねてそ梢につらき梅かゝのしるへとまちし風のまよひは

梅薫袖

袖にこそうつしかさぬれ道のへのかきねあまたの梅の匂ひを

梅風

さそひ行にほひそとまる梅のはな袖こそ風のやとりならねと

梅薫風

咲しより軒端の梅の匂ひをは花にもそへよさそふ春風

梅のはなしるへなくとも尋みむ吹かたにほふ風のたよりに

柳

新後拾遺

朝みとり色そめかけて春風の枝にみたるゝ青柳の糸

行路柳

立よりてみてこそゆかめ玉桙のゆきゝのみちの青柳のいと

道のへの河そひ柳いとはやも春くる色にうち靡つゝ

柳露

青柳のいとのみとりも長閑にてちらさぬ風にむすふ白露

若草

日影さすかきほの雪のむら消にまつもえいつる春の若草

みわたせは一つみとりの草わかみそれともみえぬ野への色哉

早蕨

春たては雪けの水やぬるからんまつもえいつる下わらひ哉

春月

新千載 はるのよのあらしや空にさむからし霞もなれぬ月のかけ哉

春雨

山かけに花まつ程のさひしさの詠にそへて春雨そふる

櫻

新古大納言爲明 この下の苔のみとりもみえぬまて八重散しける山櫻かな

花

新千載世 行さきの雲は櫻にあらはれてこえつる峰の花そかすめる

續後拾遺 雲のたて霞のぬきになりはへて花はにしきのなこそ立けれ

栽花

君かへむ御代の爲とやさくら花うへて千とせの春をまたまし

盛花

けふみすはかひなからまし散もせす咲ものこさぬ山櫻かな

禁中花

新千載 なる人をわきていさめむ九重のみはしの花に風はふくとも

社頭花

さそひ行風にもあへすうつる也神のいかきに咲る櫻は

花鏡

うたてなとうつるかゝみの池水にくもるをしらて花の散らん

落花

いたつらに雪とふりぬる山櫻けふ尋てもみるかひそなき

歸鴈

新千載世 いつのまにとをさかるらんかへるさの跡は霞の春のかり金

歸鴈知春

おもひたつをのか時とやあまつ空かすみより行春のかりかね

雲雀

雲ゐまてあかるひはりもある物をうきかけしつむのへの澤水

春ののゝまたはつかなる草はより空まてあかる夕ひはり哉

苗代

新千載世 小山田の苗代水もせきわけて豐なる世にまかせてそみる

暮春

暮かたき空にはなにゝ思ひけん過る程なき春の日數を

三月盡

花鳥のさきたつかたにさそはれてけふやとまらす春も行らん

夏

首夏

けふよりは蟬の羽衣をりはへてたゝひとへにそ夏はきにける

更衣

よしさらはぬきたにかへむ花衣今はあたなる春のかたみに

新樹

青葉にもしはし殘るとみし花の散はさなからしける頃哉

卯花

みるからにすゝしからまし雪とのみまかひもはてぬ宿の卯花

卯花如月

新古今白河院
卯花のむら〳〵咲る垣ねは雲まの月の影かとそみる

新葉遺兵子
袖にこそうつらさりけれ卯花の垣ね計のよはの月かけ

行路卯花

山里の卯花垣の中つ道雪ふみ分し心地こそすれ

葵

もろは草かけてわたりし昔をは神もわするな賀茂の川波

鵑

新千載爲藤
なれたにもかたらひすつな子規物思ふころのよはのねさめを

新拾信實
一聲のおほつかなきにほとゝきすわれも聞つといふ人もかな

尋子規

ひと聲も鳴てしらせよ足引の山郭公いつらなるらん

待郭公

續後拾遺
人つてに聞そめしより時鳥なか鳴こゑをまたぬ日はなし

まてはこそつれなかるらめ郭公おもひすてゝや初音きかまし

初時鳥

時鳥またうちとけぬ一聲もうの花かけに有つゝそなく

聞時鳥

風雅集
ほとゝきす人のまとろむ程とてや忍ふる頃はふけて鳴らん

新千載爲藤
またれつる身をこそたのめ時鳥かたらふ聲はたれとなけれと

寢覺郭公

時鳥曉かけて鳴こゑをまたぬねさめの人や聞らむ

五月時鳥

續古小宰相
里わかすなけやさ月のほとゝきす忍ひし比はうらやみはせし

雲外郭公

おなしくは聞さためはやとをさかる聲は雲ゐの山子規

廬橘

軒近き花橘のにほひにはかたみや遠きむかしならまし

故郷橘

たち花のにほはさりせはふりにける昔なからの宿もしられし

早苗

新後爲家
道のへの山田のみしめ引はへてなかきひつきにさなへとるこ

山田早苗

山かけやたこのをかさの夕風にすゝむともなくとるさ苗かな

簷菖蒲

あやめ草何とふくらむ五月雨はもらてあるへき軒ならなくに

五月雨

玉葉爲家
さなへとるしつか小山田ふもと迄雲もなりたつ五月雨の比

五月雨雲

五月雨のけにふる空はとちはてゝ雲の行きゝをみるほともなし

水鷄

つれもなきたか槙のとを明ろ浴たゝきもすてぬくゐな成らむ

鵜川

壬二集 大井川いく瀬のほれは鵜かひ舟嵐の山のあけ渡るらむ

螢

新拾爲世 くるゝより露とみたれて夏草のしけみにしけくとふ螢かな

夜螢

消やらぬおもひ成らし夏のよのみしかき程にもゆる螢は

夏草

しけり行草は夏のにふかく共道あるよには人もまよはし

澤夏草

うちわたるあさゝは水の影をたによそにへたてゝしけろ夏草

瞿麥

續古行家 露をたにうちもはらはぬとこ夏のたかうき中の花に咲らん

夕立

曇りつるたゝひとむらの跡みえてまたなこりなき夕立の空

夏月

新後拾爲遠 更てこそなくへき露をよひのまにしはしみせたる夏のよの月

みるまゝにすゝしかりけり夏のよの月にも秋の影やそふらん

氷室

夏衣立よる袖やうすからし山下風もさゆるひ室に

納涼

新後拾雜孝 山本の檜の木かけの夕すゝみ岩もる水に秋風そふく

納涼忘夏

わすれては秋かとそおもふ小くら山音をすゝしきみねの松風

水邊納涼

續千載 風ふけは河邊涼しくよる波の立かへるへき心地こそせね

山陰納涼

清水せく山下かけの苔莚こゝにはしかし秋きたりとも

野(草イ)邊秋近

暮かゝる夏のゝすゝき初を花秋風またて露そこほるゝ

六月祓

千讀人不知 みそきする河せにさよや更ぬらんかへる袂に秋風そふく

秋

初秋

續拾季景 袖のうへにいつともわかぬ白露の草はに結ふ秋はきにけり

いつしかと秋の初をけふとてやまつ身にしみて風の涼しき

初秋風

新後拾爲相 昨日まて人にまたれし涼しさをのれといそく秋の初風

いとはやも身にしみぬるか吹そめてけふはいくかの袖の秋風

初秋露

[illegible]
露結ふしの丶をすゝきほに出ていはねとしろき秋はきにけり

七夕

玉爲家
久かたの雲ゐはるかに待わひし天津星合の秋もきにけり

七夕月

天の川空すみわたれゆふつくよおほつかなさもはるゝ計に
久かたのあまつ星合のかけそへて雲ゐにみゆる夜はの月影

七夕露

秋をしる七夕つめの袖の露こよひもほさぬ泪なるらん（とやみんイ）

七夕河

天河あふせはしはしよとむともなかれてふかき契りそけり

七夕瀬

續古爲氏
天河いかになかれて七夕の年にあふ瀬はかはらさるらん

七夕草

彦星のつままちえてやはこふらんちりつもりにしとこ夏の花

七夕舟

やすらはてはや渡さなん一とせにひとたひかよふ天の河ふね
かへるさの天の河舟かちをたえたとる波路に袖しほるらん

露

玉爲雅
いつくよりをくともしらぬ白露の暮れは草の上にみゆらん

夜露

露やなをきまさるらん野原なる草はもわきて夜そしらるゝ

秋夕

いかなれは秋のならひをさしもやと思ふにもなをすゝろ夕暮
山里もかくやはおもふさひしさの心にかよふ秋の夕くれ

野径夕秋

から衣すその丶あさち分行ははや風立ぬ秋の夕暮

荻

下荻のはのほる露をほともなくしつくになして秋風そふく
荻のはに今はた露を吹たてゝ人にしらるゝ秋のはつ風

籬荻

風吹は今や籬の荻のはもおのれそよきて秋を知らん

萩露

玉爲家
乙女子かかさしの萩の花のえに玉をかされる秋の白露
萩の葉にをきあまれはや秋の露わくれは袖に色と成らん

葛

露なから色かはるより秋風の吹をうらむるのへのくす原

初鴈

新千爲道
さそはれて今そなくなる秋風のふかはと待し初鴈の聲

鴈

玉爲氏
かた山のはゝその梢色つきて秋風さむくかりそ鳴なる

初聞鴈

秋風の吹とせしまにさそはれて空にそきなく初鴈のこゑ

遠近初鴈

新千爲氏 我宿のわさ田かりかれいつしかと雲ゐをわたる友よはふなり

曉鹿

別てふをはしらぬさをしかも鳴てやよそのれさめとふらん

風前鹿

あしひきの山の秋風さむきよに猶妻戀の鹿そなくなる

野鹿

山風やすそのに近く家ゐしてをしか妻とふ聲なれにけり

虫

玉爲教 鳴あかす友とはきけと蛬思ふ心はかよひしもせし

夕虫

新千爲氏 我計涙はあらしきり〳〵すおなしね覺にねをは鳴とも

夜虫

夜さむとはおもはぬ閨のきり〳〵す壁近きてもねをのみそ鳴

駒迎

續拾爲家 夕暮の月より先に聞こえて木下くるゝきりはらのこま

月

續後拾爲藤 久方の雲井に月はすみぬれはてらさぬ方もあらしとそおもふ

秋月

新千爲藤 あしひきの山のはたかく成にけり嵐のよそにすめる月かけ

立待月

人しれす待たてる哉あしひきの山よりいつるかつらをとこを

居待月

花すりの衣そ露にぬれにける月待宵の旅の雲ゐに

山月

風爲氏 ときは山かはる梢はみえれとも月社秋の色に出けれ

山端月

千爲忠 ふかきよの露ふきむすふ木枯に空さへのほる山のはの月

浦月

續古定爲 しきたへの床のうらはの波まくらやとるや月のうきね成らん

海邊月

新千後鳥羽院 もろこしの山人今もおしむらんまつらかたきの明方の月

禁中月

いかならんよゝもわすれし九重の秋の雲ゐになるゝ月かけ

閑居月

むすひをく柴の庵のしはしたに月みぬよはゝえやはすまれん

月前雲

新後拾爲道 まちいつる月のあたりの浮雲によきよとはらふ松風そふく

月前霧

新拾 空にのみたつ河きりもひまみえてもりくる月に秋風そふく

秋田

白露もろやかりほの小山田に猶いねかての秋風そふく

聞擣衣

今よりのねさめの床の秋風にいかにせよとて衣うつらん

菊

新千載

初しもの置あへぬ色もかはりけり露の籬のしら菊の花

初紅葉

續古今

くちなしの一しほ染のうす紅葉いはての山はさそ時雨らん

行路紅葉

新千載

玉鉾の道の行てのはし紅葉をちこち人や折てかさゝむ

冬

初冬

新後拾遺

いつとてもかゝる人めの山里は草のはらにそ冬をしりける

初冬時雨

新千載

冬のくろあらしを寒みかみなひのみむろの山や先しくるらむ

山時雨

いつしかとけさはしくれのをとは山秋をのこさすちる紅葉哉

初時雨

はれくもるほとたに見へす初時雨ふりあへぬまに冬はきにけり

落葉

新千載

なのつからふかぬたえまもあらし山なに誘はれて散このは哉

雨後落葉

むらしくれはれつる跡の山かせに露よりもろき峯の紅葉は

寒草

風雅

ふりはつるわれをもすつな春日山おとろか道の霜の下草

江寒蘆

風雅 讀人不知

みなと江の氷にたてるあしのはに夕霜さやきうら風そふく

冬木

玉葉

木のはなきむなしき枝にとし暮て又めくむへき春そ近つく

霜

冬草の上計にはをかれともむら／＼みゆるけさの霜かな

草霜

（此間□□）

續古今 右大臣

はやきせにぬくるみなはのうきなから氷りてとまる山川の水

田氷

春きては先せきわけし苗代の田中の水も氷る頃かな

河氷

新拾遺

立かへるをともきこえす冬河のいしまに氷る水のしら波

池氷

をし鳥のよとこの池のうき枕こほらぬ水のひまもとむらし

冬月

新拾遺

さゆるよに衣かたしく床の霜袖の氷に月やとるなり

冬曉月

新古今集
なかきよのね覺の涙ほしやらて袖より氷る有明の月

千鳥

壬生二品
てる月の天の戸わたる友千鳥さやかにつくる萬代のこゑ

濱千鳥

鹽風のさゆる浦はの波の音に聲うちそへてたつ千鳥かな

水鳥

氷るよはうへたにさむき池水にすむにほとりの下こほるらん

池水鳥

續後拾遺集
池水につかはぬ鴛はれぬなはのくろよもなしとれをや鳴らん

野徑霰

分行は野へのをさゝのうへよりも袖にたまらてふる霰かな

雪

千載集
ましはかるをのゝほそ道跡たえてふかくも雪の成にけるかな

初雪

霜かれの草にやつるゝふる郷に今朝初雪のめつらしき哉

歳暮

玉葉集
春秋のすてゝわかれし空よりも身にそふとしの暮そ悲しき

戀

忍不逢戀

せめてわれ後のうきなはしらす共あひみん迄も猶やしのはん

月前忍戀

袖までもまたもらされはよな〳〵の月たにしらぬ泪之けり

忍不言戀

忍へたゝしらせて後のつらからはいはぬ頼みもあらし物ゆへ

顯戀

たへてしもつゝみはてしと歎ても昨日はみえし袖の色かは

契憑戀

あたにのみむすひすてける契をもなをさりに待夕くれそなき

語戀

いか計あひみんよはをかされてか我むつヿのかきりしられん

疑戀

かれてより人の心もしらぬよにちきれはとてもいかゝ頼まん

月前待戀

こぬ人をまつのこのまのよはの月ふけてそまさる心つくしは

毎夕待戀

僞のうきにもたへてまたれける身はならはしの夕暮の空

恨別戀

つれなしとうらみそかくる白妙の袖のわかれや有明の月

爭戀

契らすと聞にも誰かまよはまし忘られぬへきヿのはならは

互恨戀

新續古今集
ヿのはゝうきにつけてもなきものをかこつや淺き心なるらん

七夕戀

七夕のとしのわたりのはるけさも我中河のあふ瀬にそしる

寄月戀

續千載　面かけをわすれぬ計かたみにて待しにゝたる山のはの月

寄松戀

あふことをまつとしならはことのはゝかはらぬなかの契ともかな

寄虫戀

君にそふ心もいまやかけろふの夕そわきておもひみたるゝ

寄螢戀

續千載　よもすからもゆる螢に身をなしていかて思ひの程をみせまし

寄弓戀

かへりてやうらみもすへき外さまにひきはなされしま弓月弓

寄舟戀

新千載　大舟のまほの手なはの風をいたみひくかたしけき人に戀つゝ

雜

曉

新拾遺　のとかなる老のねさめの淋しさに鳥の八聲を（たつなイ）かそへてそきく

山路夕

谷風は今朝よりも猶山人のかへる袖にそ吹まさりける

分わふる行ゑもいとゝしら雲のかさなる山にくるゝ空哉

春秋野遊

立かへりおなし野原にあくかれて花も紅葉も身にそなれぬる

磯波

鹽風のあら磯かけておきつ波猶よせかへる音のひまなき

田家

秋過て猶いかならんもるほとにさひしかりつる小山田の庵

山家

峯となみ吹すきてくる松風にこたへてそよく庭のかきしは

山家嵐

風雅　山もとの松のかこひのあれまくに嵐よしはし心してふけ

山家水

新後拾遺　すまはまたすまれこそせめ山里はかけひの水のあるに任せて

嶺松

足引の山としたかきみねに生る松は千とせのかけそ久しき

里竹

しはましろそのゝむら竹折かけて里しめてけるたれか垣ねそ

岡篠

露しけき岡へのをさゝ折ふしに我世なにゝおもひわふらん

江蘆

みこもりの入江にしける芦の根のうきにつけてはよを頼つゝ

岸苔

舟よせぬかた山かけの河岸に苔のみむして人はかよはす

暁鶏

新續古爲氏
旅人の曉いそく關の戸は鳥の音よりや明はしむらん

島鶴

あしたつのたてるやいつく島かくれ波のたえまに聲計して

夜燈

なかきよの更行程のかけみえて光そうすき窓のともしひ

浦舟

こきいつる浦路はるかに成にけりかちをととをしおきつ島人

行人過路

續後拾爲氏
もろ人のゆきゝをいそくたよりにそ道ある御代の程は知るゝ

山家眺望

軒ちかき松のこのまのほとなきに千里の空のはてをみる哉

述懐

いきてよにさのみは何か歎くらん思へは人のかすならぬ身を

[illegible]
身一つをたつるそからきもしほやく浦のとまやの煙ならねと

寄虫述懐

あひにあへる時とはしるや松虫のまつにかひある御代の惠を

懐舊

續後拾爲氏
過にけるよそちあまりの程たにも猶しのはるゝ我むかし哉

月前思往事

新拾爲氏
めくりあふ雲ゐの月にいく度かいてゝつかへし秋をこふらん

夜夢

さめてこそはかなかりけれ思ひれに數々みつる夢の名こりは

相撲

とりものに顏は隱れてみえわかす出るかたては誰にか有らん

重陽宴

九重に久しくめくる諸人の老せぬ秋のきくのさかつき

射場始

御垣守つきしあつちにいつしかとけふ社まとをかけ始けれ

臨時祭

音さゆるみたらし河にかけみえて袖をつらぬる春の舞かな（するかイ）

祝

新千爲世
今よりの千年の後の千とせをも君にかそへてありかすにせん

寄日祝

やすみしるやまといはれの君か代をてらす日影の限なき哉

寄雨祝

道しあれは日數のまゝにふる雨の惠やよもの海にみちなん

寄社祝

千早振みむろの榊ゆふかけて祈るも君か萬代のため

花添春色

新千爲道
花の色は千とせをかれて古往のためしにまさる春にも有哉

池月久明

[illegible]雲のうへに光さしそふ春の月やとれる池に千代や住へき

松契遐年

こたかくて緑もふかき松にこそ君か千とせのかけはみえけれ

松色春久

千代やへむ君か齢の春にあひて松もときはの色まさりつゝ

右爲冬卿集以浪花人尾崎□□本書寫一校了

文化二乙丑秋閏八月　藤原元晴

〔右前參議爲冬卿集以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百三十七

和歌部七十二

時慶卿集

愚若詠 永祿十二年夏中百首大畧 鼠巣ニ成其殘少々 時通

落花

麓には散なこそみめ春かせのたひ／＼さそふ山のさくら葉

寄橋戀

吾こひは昔なからの橋なれやいつ思ひかけてつれなかるらん

寄月戀

くもりなき月に恨やそひぬらんしのふる夜半の君かあたりは

天正二年夏中百首同鼠喫殘少々

海邊霞

ゆふ鹽につなてひかれて行舟の跡もほのかにたつ霞かな

夕虫

閑なるこの山かけのゆふくれをまつしろものは松むしの聲

寄墻戀

へたてある人の心はあし垣のまちかけれともあふよしもなし

閑居月 天正三飛鳥井殿亭月次 二首 三賀茂會

かく計すむ山かけのさひしさに月影ならてとふ人もかな

曉眠易覺

鐘の音鳥も八こゑのかすのうちに明るよしろき我れ寝覺かな

清見關 同年七月廿六日月次

秋のよの月の光の清見かたかたふくかたの關守もかな

佐野舟橋 同

中絕んちきりなりともなき人に思ひかけにしさのゝ舟橋

夕紅葉 同月廿一 二首

わきてなをうつろふ山のゆふ日かけおなし梢も深き色かな

夜灯 同

徒にむかふとみえむともしひの影はつかしき窓のうちかな

寒松同十二月廿一日當座

雪はみなはらひ盡して松か枝に殘る嵐の音そさむけき

戀組

待れても花のひもとくはるも有を人の心のなとかつれなき

向爐火同當座二首

かされても薄き衣の寒きよは埋火ならてえやはあかさん

薄暮松

ときはなる軒端のまつもゆふ暮はさひしき色に吹あらし哉

天正四元日詔待者有識言韻は眞

君も臣も世をおさめんと政はひしりの時を又興らん

山櫻同時同年記同年

遠近の山の端わかすおしなへてひとつ色なる朝霞哉

萩漸綻開同七月廿七日當座二首

眞萩はら秋たつ日より咲そめて露に殘らぬ花の色哉

寄遠叢戀

したひつゝ難面き人に身を盡しなにはの事もとふかひなき其時無

落花浮水大本寺相國寺にて當座

うすくこき木々の木葉の散て又同し色なる庭のいけ水

歳暮限今日予廿五歳時述懐

かそふれは五十年半もいたつらに暮ておとろく入相の鐘

伏見の脂月にて明月を

所から名たゝる月を今宵しもあかすふしみのさはにうつして

霞添山氣色禁中會始

白妙の衣にかはる雪のいろも春にそかすむ天香久山

山館天正五正廿日思明會當

鹿のこゑ鳥のなくねをすさひにて住もわひしき山かけの庭

梅有佳色同廿九日禁中會始

植しより年にかはらぬはるの色を花にそみする庭の梅かゝ

雪中鶯同當座

さえかへる空にまかせて降ゆきにはろをたとらぬ鶯のこゑ

山春月同十月十八日二首當日殿中

霞さへさはり成しをまつ杉のは山をいつるはるのよの月

忍久戀

もらさしとつゝみし袖の白露もわか身も共にふり増りけり

同年春前殿下歸住ましくける庭のいとさくらい
つより花多くさきたりしを

なひきそふ梢にさける花のねにかへるかとみるいとさくら哉

同年南殿櫻の盛の比月卿雲客花のあたりに立より
し感に

よそにいかに立よりてたに雲の上はみな白妙の花さかり哉

松久緑天正四年飛鳥井家御會始

千世までとへぬへきかけは今年生の松にこもれる若緑かも

庭上松同六年正廿日陽明御會始

年をへて雲井にやみん二葉より植にし庭のまつのみとりは

山霞同當座

柴人もふみやまよはん岩かれのかさなる山の深き霞に

歸鴈同年三月十三飛中月次二首

行かたの翅もわかす春のうみのかすめる波にかへる鴈かれ

待戀

幾度かれやのとほそを開つゝ音する風そ待に物うき

祈戀

おしからぬ命なからもあふまてもたのむ計を神にまかせん

梅是萬春友陽明御會始正廿

年〱も色香かはらぬ咲梅やなを萬代の春になれなん

鶴契遐年陽明御會始

幾とせの春をか宿に契るらん砌のまつのひな鶴のこゑ

初春祝飛鳥井家會始

萬代の限もあらしたちかへる春に齡をちきり置かは在歟

梅漸開飛中月次

日數へはなをもにほひやそひなまし木の間の梅のはなの春風

天正二年中之詠連左。

花散風飛中月次兼二首

獨のみちれるをさへもいとひしにちらはしつらき花の春風

初冬同當座

行秋もきのふけふかの中空にをはりしろき村しくれ哉

被厭戀

いかにせん思絶よのをのはもすてやはてん身にしあられは

夕立飛中月次

あかなくもよそに過行夕立の涼しさのこす軒のまつかせ

暮林鳥宿

夕くれははやしかくれのさはく哉やとりもとむる鳥の鳴音に

天正同三年中

依花日短飛中月次

さらぬたにおしまん空をはなの本にうする程なきはるの一時

夏河同

暮まちてさしこそくたせうかひ舟大井の河のなみのまに〱

野旅同

日數へはなをやしほれん袖の露おくにまかする野への假ねに

池蓮同

池廣みさゝなみよする朝風にをけはこほるゝ露の蓮葉

納涼

立ならす袖はすゝしき松かせやあつき日あかてけふも暮さん

谷樺

山人のかよひ絶たる跡なれや苔のみ深き谷のかけはし

落花似雪

散しきぬはなとはさらに白雪のふるかと計さそふ春かせ

伊勢山田にて

立よれは涼しくもあるか神かせのきよき山田の杉の下かけ

鈴鹿山にて

はる〳〵と分のほりつゝ昔かれた跡ならし行鈴鹿山かな

櫃屋のけふり立なみて先年亡父このほとりを越身まかられし事共思ひ出て

たらちねの越し跡までおもひ出る折しもけふる浦のしほかま

手枕松根あかりとは云夢口麁聞ト云

よもすから音のみたかきあら波にねいらてしもや手枕のまつ

月下萩

雲霧も吹はらひつゝ萩の葉に月のやとせる夜半の月影

月前紅葉

露に染る色たにあるを紅葉ゝの一入深き月のよな〳〵

九月十三日夜

折しもあれ所からさへ長月の月の都の月のひかりか

天正四(三歟)同年十二月廿四日西三條家大納言亭にて二百首伊勢春日兩社法樂

十三見花

なのつから嵐もふかぬゆふくれは心ちらさて花なみかるな

十八松間藤

春かせのもりくる松の木の間より花の露ちりにほふ藤なみ

七里螢

誰里のしるへなるらんゆふやみはもゆる螢のまかふ燒火に

三七夕後朝

ほしあへぬ袂なるらし七夕のわかれよりしもつらき心は

八當盤木雪

おもかけははなかとそ思ふみわの山雪に明行杉の村立

一寄雲戀

半天に人はなしつゝうき雲の浮事多き吾おもひ哉

十五獨述懷

いたつらに學はぬふしは我のみに積る月日の程そ侘しき

十七往事如夢

ゆふくれにけふも成きてあすもまた夢とや過んあなう世の中

十六漸待花後百首

咲いてん春を思へはかねてより花にうかるゝ心なりけり

廿三暮春歎冬

はるもはやくるゝなしたふ庭の面に殘るにほひは山吹の花

十八林頭蟬

あつさこそはやしかくれは隔つれとさはくもくるし蟬の諸聲

初秋薄

きのふけふ秋くる野へは村すゝきみたれて露の置もすくなし

三十三 霧籠紅葉

みるか中に色こそわかれもみち葉を隔つる山の秋の夕きり

九 窓落葉

梢よりもりきて月は窓の面に落葉のゆるす光なるらん

廿二 旅泊雪

積りなは日數へぬへし引かへて舟路にかへし雪の山路は

天正四年中

聖門庭前瞿麥を

秋かともみゆはかりなりなてしこの花に置そふ露の籬は

高明院殿七回忌爲追善六字名號を頭字にをきて

なかき世のかたみとけり黑髮もたゝたらちねのすちと思へは

紫の雲のうへまて思ひいつる過にし人の行末のそら

秋きても詠るからになを覺る澄ぬる月のにしへ行にも

みし人のその面かけはうつし繪の外にはいかて人もあふへき

たれもみな行へきみちとしりなから又忘れてそうち歎きけり

ふたつとも三ともあらし一筋に法に入へき道のをしへは

天正五年

同六年雅敦卿八月初比被薨し歎のあまりに彌陀尊號を頭字にすへて六首をつゝり侍るものならし

名斗を殘し置つゝそのからはさらにとゝめぬ習かなしも

むら雲もこゝろの霧も晴〳〵て影さやかなる月をみるかな

あらしにもさそふはおしな秋萩の花のさかりの露もこほれて

みし夢のあたに覺ぬる世中を思へは萩の聲のみそする

手折つゝなを手向まし今よりや心の花の散らぬ限りは

ふりすてゝ歸る野原の煙にもひかたき袖のなみたなりけり

同年關東修行不破關にて

むかしたにあれにしあとは行袖をとむへきふわの關守もなし

伊吹にて

わきてなを寒きあらしの伊吹山旅の衣のやつれのみして

津島にて鳴海を

滿しほに濱もなるみの浦千鳥なきこそわたれ浪のまに〳〵

寶間にて

とも人の急くもしはしあち酒をうるまなくれそ市のかへさに

伊勢朝熊にて富士のみえけれは

海原の雲消てみつふしの根の雪にまかはぬ山しなけれは

朝熊にて極樂のはしを渡るとて

たのしみを極むるはしと聞からに賴をかけてわたりそめまし

神路山

雲はみなみれの松かせ吹はらひ神路の山にすめる月影

同山田にて

あふけなを山田の原のさか木葉に幾代かゝけつ神のゆふして

鈴鹿川

しら雪のふり行まゝにすゝか川八十瀬の浪の音のさやけさ

大淀浦

枯はつる後もみるめは大淀の浦はのまつになをやのこらん

忘井

山かせのはけしきみちの遠さをもむすふにしはし忘井の水

月讀杜

よもすからみるともあかしさやかなる光をそふる月よみの杜

右詠は妻籠より此地へ廻國時に綴侍る。

天正五同七年中

梅や松芳句寄に望月か会始

散うせぬまつの葉こしに咲梅やさそふ嵐を匂ひなるらん

元日勢州にて

明ぬれはきのふをこそと新き年は一よをへたてにはして

大浦を舟中にて

皇の御代おさまれる時なれはなみも音する大の浦かせ

大磯にて

磯まくらふるさとおもふ夢のうちをとろかす(うちお驚か)波は侘しな

早朝鎌倉へこゆる船中にて

朝なきに漕行舟はかすめともみるめかりつむかまくらの山

武蔵野にて

冬かれに成にし草はみなからにもえ社いつれ武蔵のゝ原

霞の關にて

あふ人にとはゝやとはん立まよふ霞の關の道の行衛を

立野を行馬上にて

旅ころもたつのゝ駒にまかせ行心もともにいさみぬる哉

堀兼井見にまかりけれは水はなくして若草のみ有
しに

武蔵野の堀かねの井は若草の色のみ水のみとりなる哉

三芳野を杳に堀兼よりみやりて

はる／＼と霞へたてゝみよしのゝ田面のかりや立歸るらん

同武蔵にて二月十五夜月入方古郷を思遣又西方
淨土佛入滅の事を心にしめて

二月の半もこよひいりかたの月に哀もまさりぬる哉

奥州安積沼にて

旅にしてかなしといひしみちのくの淺香の沼なけふみつる哉

奥州二本松といふ所へこゆる道より會津の山をみ
れは卯月のくれかたに雪いとしろく殘れるをみて

里とをくへたてゝみえし會津根のみねには夏も殘るしら雪

信夫もちすりの石をたつねて

みちのくのしのふもちすり尋きてみたれし人の心をそしる

奥州馬場といふ所にて白川關を人にたつねて
程近くきてたにもみすかたりつる人傳ときく白川の關
正月廿日あまり比船中より富士を雲の晴まよりみしを
名に高く聞しよりなを半天の雲にそつゝくふしの白雪
奥州米澤郡定禪寺にて老母事心地惡しく夢みし夜廿三夜曉月にむかひて
故里の人のよはひを久かたのつきせぬ光に祈をきつゝ
同禁中を思ひやり奉りて
海山をへたてゝ遠きこしかたも光やおなし雲の上の月
會津より南の山といふ所へまかる原に萩多咲たりしを
みちのくは玆もそ同し眞萩さく色やはかはる宮城のゝ原
標茅原春も宇都宮へこしたりけれともしるへする人なくて落みたり秋になりぬるにたつれあふて
はるもはや行めくるまにうつりきてしめちか原に秋風そふく
室八しま七月初つかたに行暮しゝに
暮わたる室の八しまは中空の霧や煙に立まかふらん
淺間山上野佐野へまかる道より杳にみし
遠近の人にとひつゝしなのなるあさまのたけの煙をそみる
同筑波根をみやりて
よそにみて思ひ社やれ筑波ねのこのもかのもにしけき木陰を
黑髮山を杳に
東路をけふこえくれはむは玉の黑髮山もちかくみえけり
小餘キ磯 大磯同所也上洛時病中にて
さはかしき音のみそ聞岩かれに浪こゆるきの磯枕して
天正同八年中
多年翫梅 陽明御會始
色〳〵のあるか中にも咲やこのはなにそあかぬ春や幾春
都春曙 陽明御月次
またたくひあらしとそ思ふ九重や霞こめたる春の明ほの
洩始戀
いひ出て今より後の人心いかにとおもふ程そくるしき
梅薫風
春かせに色はみえれとさそはるゝ匂ひそ梅のたち枝成けり
尋花
はる〳〵と分入花によをこめてまたみぬかたの道いそかまし
野瞿夏露
刈のこせ露も色なるなてしこは夏のゝ草の中にありとも
梅雨
晴ぬへき限もしらぬ山窓や雲引とつる五月雨のそら
羇旅

住なれし都のほかはいつくにも心とまらぬやとりなそかる

夏蓮

さむしろをよそにや敷もかへなまし閨なる間の暑きよな〱

庭山萩

野への色も忘にけりな秋萩の花咲庭に心うつして

秋懐舊

秋へても枯こそやられおもひ草葉末も露のふりまさりけり

當座月次於□にて八月十四日當座

岩かれに碎る瀧のしら玉をひろはゝ月に袖やぬれなん

山月陽明にて當座

木かくれもあらしとそおもふ照まさる大内山のあきのよの月

雲間月

銀河よわたる月はしはしたゝ雲のなみまにかけやそふらん

納涼陽明月次十二月十二初會

槙檜原木隱ふかき谷の戸は夏としもいさしらて送らん

衾月次當座

冬のよをいかてたへまし戸さしても床に衾をかされさりせは

埋火

さゆるをもおもほえぬまて閨の内によりそひあかす埋火の本

瑞籬

譃せしな君かめくみは瑞籬の久しき代々の末か末まて

安土信長公へ爲　勅使まかるに相坂にて雨降出け

れは宿り侍る比は霜月七日

もみちはのみなちりぬれはあふさかや關もる神に何を手向ん

池蓮陽明月次

池水のすゝしさそふるゆふかせにこほれてにほふ蓮葉の露

同九年

春松契千年陽明御會始

春日山千とせの春を松か枝にかゝるもしろき北のふちなみ

海路

江州兵部といふところより雅敦卿にかはりて三月

十日發句なかめト飛大被遣

妥とてもさかりは花の都かな

同三月十二日江州日野鴨生より公家門跡方へ法花

品經歌所望雅敦卿にかはりて方便品十方佛土中唯

有一乘法無二亦無三除佛方便説

薄くこき色はありとも四方に咲花そひとつの春にこもれる

初櫻を一枝紹巴法師より陽明へ奉りしに各詠吟有

し予亦

君かためおれる心のふかき色やたゝ花のえにあらはれぬ覽

聖門白后御庭の櫻咲たるに當座有しに予亦

さかぬまは名のみなりしをけふそみるはな社花の都之けれ

林喚子鳥陽明月次題飛六

鳴行もはやしかくれはわかなくに誰よふこ鳥いつち過らん

逐日増戀

日にそへてわれそやつれのます鏡うき面影の身をしはなれぬ

わかやとの陽明月次

奥深くいりてきかはや我宿の梢にうとき山ほとゝきす

郭公遍陽明月次

深山よりはふき出てや九重のうちもへたてすなくほとゝきす

旅行友

おもふとちかたりもて行道はたゝしはしわするゝうき旅の空

松虫陽明御月次

夕より秋のあはれをまつ虫のなく野ゝ露やなみたなるらん

初鴈

秋かせにをのか翅をまかせてや雲井にわたる初かりのこゑ

契戀

契りおくわかならはしよ行末もかはらしとおもふ心なりけり

獨〔マヽ〕

南都愛染院有夢想三十一字の頭字の首各一所望是

宗二禪門爲追善也探題の竹雪

軒端よくあらしのさそふ竹の葉にたまりもあへぬ淡雪そふる

夢戀　愛染院

名殘あるとの葉草もかきたゆる身はあたなれや今朝の別路

八月十四日夜飛鳥井大納言亭にて一色左京大夫なとより合しに有詠歌予またよむへきに頻に被申しかけ義員のうたは後にみえすなりにけり

あすの名のとの葉におく露の玉に光そそふるあきのよの月

陽明にて五首當座に嶺月

かつらきや嶺のよこ雲とたへして月影のみやすみわたるらん

通天橋のもみちを陽明一覧予も詣てゝ侯ひしにうたよみ酒のみし中にころは神無月十日ころにて有し

散ちらぬ影をうかふる水の面はもみちもわたる谷のかけはし

時雨晴陰陽明御月次

一方ははれてうつろふ日のかけや時雨の雲のたへまなからん

山家人稀

山深き奥のすみかはさひしさをとひとはるへき友もすくなし

白后有親朝臣逐宥まし〳〵し夜話引して後朝に短册おくられしに予亦一首相そふる比は霜月はしめかた

衣〳〵にさそはれて出し袖さへも霜に消ぬる心ち社すれ

曉千鳥聖門にて當座

有明の月かたふける影をしもしたひてこそは千鳥鳴らめ

憑誓言戀
さりともとおもふ心にかゝりぬるかゝそかつは命なりける
陽明内府或寒夜に丶丶添臥し侍るよ明て退出の
折に
空にしもあやしき星の出し代やかゝるそひねのためし成らん
白后へ有親めされし夜度〳〵の使の次て予かはり
てつかはす折ふしも霰ちりしに
あられふる音につけても篠の葉のうきとももとはん暮そ待るゝ
かへし　　有親
數ならぬあまの礒やにかく計りよせてうれしきわかの浦なみ
初雪降散たる日白后に奉る
こぬ春をまたき空にや急くらん風にうち散雲のはつ花
御返し
世にはまたこぬ春なからもとの葉の花より雪や散まよふらん
二條御所にをきて近内府御輿行ありし蹴鞠の次に
一當座三十首題は親王御方
寒月
吹はらふ雪氣の雲の跡よりもかけさへわたる月のさよかせ
白后にて當座　水鳥
さゆるよの風ははらはぬ鴛鴨のうはけの霜や羽吹出らん
名所瀧
おのつからさらす計にしらいとのみたれておつる布引の瀧
初雪陽明御月次
いつしかにしくれし空のうき雲はけさしもかはるみわの白雪
神樂
更にいま天の岩戸のそのかみにかへるやうたふ榊はのこゑ
歳暮忩同月次
君につかへつかへぬ人はおしなへて世にいとまなき年の暮哉
忍久戀
さりともとおもひ〳〵て春秋をふるまてつゝむわか涙かな
夏比嵯峨の倶生神に參籠の曉に時鳥の小倉山のか
たになくきゝて
おほつかなかたしくよはも時なくに小倉の山に鳴ほとゝきす
嵐山を
朝またき起てむかへはすゝしくもわきておほゆるあらし山哉
龜山を思ひて
萬代も千世もへぬへき龜山の松によはひをたれかおもはぬ
天正九年同十年中
寄若菜祝飛鳥井家會始
幾年も生田のわかな君か代につみて盡せぬためしをそ思ふ
南枝暖待鶯二條御所御會始親王御方御出題
長閑なるみなみはわきて咲梅のたち枝に來なけ園のうくひす

椿葉契久 陽明御會始

うつしうふる君か砌のたま椿八千代の春やちきりこむらん

藤埋松

まつの葉はかはらぬものを咲ころは色にそつゝむ花の藤なみ

春霞 陽明御月次

遠からぬ程もへたてゝうみ山のさかひわかれすたつ霞かな

春岡

はる雨のそゝきし跡はかた岡の草のみとりも顯はれにけり

菫 同

けふも又わけこそくらせ露なからすみれ摘野に家路わすれて

寄瀧戀 同

獨ねの枕におつる袖のうへの涙やさらに音なしの瀧

氷 同

すはのうみ氷のはしはなみかけて嵐のかせやさえわたるらん

信解品 霜月十二大覺寺前准后爲追善

つたなきに馴〳〵て後おやそともなのるや深き心なるらん

年内早梅 同

雪のうちにたくひもあらぬ花咲て春のこなたに匂ふ梅か枝

葵露

引袖にさらすもあれなあふひ草露もかさしの玉とみえなは

獨述懐

いひ出んともゝなけれは世のうさも我心とそなくさめてまし

寄月顯戀 月次

くもりなき月の光のやとらすは袖のなみたのいろはみえしを

依花日短

永しとは誰かいひけん春の日も花にめてゝはおほえさりしを

隱士出山

治まれる世をしたひてや隱家の山にかしこき人そ殘らぬ

交野

降雪にかたのゝ眞柴うつもれて狩場の鳥のおちもわかれす

天正十一同十二年

春子日祝道 飛鳥井家會始

子日するときはのまつの散うせぬ種をやまきしとの葉のみち

落花隨風 陽明當座

枝よりも散をいとへは木の本につもるもさそふはなの春かせ

寄花述懐

世にふれと人しれぬ身は埋木のはなさかてしも朽や果まし

寄忍草戀

おもふそのこゝろをたれと忍ふ草いつまきそめて猶茂るらん

絶久戀

おもひ捨し心なからもかゝりきて幾年經ぬる命なるらん

川上夏月 當座

川霧は涼しき風に消はてゝみしかよおしき波の上の月

寄道祝

いにしへを仰もてきていまもなをしたへは盡ぬとの葉のみち

曙に鵑を

朝いせはきかさらましを明ほのに初音つけくる山ほとゝきす

月五月に相當

霞にも霧にも遠き大空をま近くみする夏のよの月

春

數ならぬみやまの奥の山かつも春はこゝろの長閑ならすや

扇蔭風生竹六月當座

竹の葉にすゝしき風のなかりせはならす扇を忘ましやは

觀身不言戀

年ふともいはてそやまん數ならぬ身の苦しさを人しとはれは

陽明御庭のしら萩に當座おの〳〵ありしに

咲はなのいろはさなから白露の枝もたはゝに置かとそみる

八月十五夜相國寺方丈にて玄以法印興行

うき雲は任他名にたかきこよひの月を詠すてめや

見戀月次當座

泪にも袖はぬらさしよそなからみるてふとのなからましかは

故郷花

ふる郷となりははてゝもさく比のなかめやおなし志賀の花園

深山花

里ちかき梢はまたき散にしを深山そはなの盛なりける

花下送日

けふのみと思ひ〳〵て花のかけにめて暮しつゝ家路わすれぬ

月前竹風

影すめははけしき風もみつる哉竹の葉わけに月はもりきて

海邊月

よせかへる音すさましき浦なみにさはらぬ空の月やすむらん

月前草露

百草のたゝ一もとも月かけのみかゝぬ露の置はあらしな

寄風戀

夕くれのさむけき風もいとはしなそなたの空を詠めやるには

寄衣戀

身にふるゝわか衣手をしはしたに君かみけしと思はましかは

北山金閣寺にて長月廿日より紅葉見に主の喝食催

玄以法印陽明御供申侍歌有しに

うすくこき木々の木葉のうつろへは錦をひたす池〔有興〕のさゝなみ

蔭涼清寂和尚薩陽へ下向に送尊の詩ともめけし陽

明白后侯詠を申請予また瓦礫を送

なれにける都の月をおもひ出は入ぬるかたに心とゝむな

別戀二條殿下にて月待夜十五首當座

更にまた逢みん中もわかれぬる袖のなみたはえこそつゝまれ

冬月浮 當座

木からしは落葉のうへに吹すてゝ霜白妙の夜半の月影

北山石不動に參籠なし夜半に松かせ物侘しきを に照

大かたに常は思ひし松かせを此山かけの旅ねそしろ

神力品

末とほきつたへを思ふ心にやあやしき法の程をみすらん

攝津中島天滿宮法樂萬句發句所望せしに

梅か〻に隣はあらぬかきほかな

又或所望

青柳のすへ葉はかへるなかれかな

初春祝 廿 飛中將會始

梓弓やしまのなみもたちかへる春は盡せしすへらきのかけ

鶯告春 同

朝またき聞ははるてふとの葉にわたせる計うくひすのなく

初春祝 親王御方御會始正廿一

立歸るはるの光を君か代の盡ぬためしとなをやあふかん

禁中花下にて月さやかなりしに人々さけのみける

に

春のよも名のみなりけり月花の光をそふる玉しきの庭

朝花 陽明御月次三晦飛中興行

朝またきこすゑみれは風たえて花の香しめる露はふかしな 〔[illegible]〕

閑曉 同四月廿日當座

鐘のこゑかそふ斗のあかつきはすめる心のちりやはらはん

閑河 五月當座

風絶てなみも音なき江の水にうかふ鷗のこゝろしろしも

時雨 [illegible]

近くなり遠くなり行山の端やめくるしくれの雲にわくらん

かきつはた 〔當座〕

淺澤の水にしちけとむらさきの色はふかむるかきつはた哉

おもかけに

忘れんとおもふ物からみそめつる人のみいとゝ面影にたつ

秋旅

秋かせの身にしむほとをを更に旅にしあれはおもほえにけり

白后三井に籠りますに送奉る

こなたには出るをまてはそなたにはその曉の月とみるらん

〔當座〕醍醐山にのほりし曉嵐谷川の音をきゝて

谷川の水岑のあらしの音きけは旅ねに絶る夢のうきはし

雨中萩 玄川法印にて

露にたにうつろふ色を雨はなを中〱なれや花の萩か枝

逢戀 同當座

行〱てあふ嬉しさにもろ泪せはき袖にしつゝまれやする

月契多秋 飛鳥井亭にて玄貝法印テ招興行

行末の秋もたかふな久かたの月の都のくもりなきよは

汀千鳥

岩かれに影とみしか川なみにおとろかされてはふくおし鴨

聖護院准后留巣日數を被送とて西山岩倉にますを

尋詣てゝ歸るみちにもみちを

うこきなき岩倉山のもみちはは風は吹けとも散らしとそ思ふ

同道大原野にて

はなさかり思ひやられて大原や小鹽の山もけふ社はみれ

桂の色暮過ぬとて

歸るさのくれはつるとも久かたの月のかつらや道をてらさん

同十四年

元日

あたらしき年をむかふろすまゐには植をく松のかけや頼まん

梅交松芳 陽明御會始

うへそふる童木の松の木の間より色さへもれてふかき梅かゝ

寄鶴祝 親王御方御會始廿七於小御所

末とをき雲井になるゝとも鶴の千とせの春も君やかそへん

立春霞 於陽明殿十五首當座詞人

東路をたちてや來つるはる霞かすみの關もさはらさりけん

夕喚雀

中空に床しむるかとあかりしか暮れは草に入ひはり哉

尋花

たよりなきみちもおもはす分てこし花をし告は知人にせん

寄草戀

人はいさかれぬるものをわか爲は茂りそひ行思草かな

柳先花緑 於飛中將家二月十四日爲玄貝法印興行

花はまた色しみえねはわきてなを心をそむる青柳の露

岡雉 同當座

日のうつろ岡へは雪の消まあれやはれ音しつゝ雉子なくこゑ

夕花 於聖門御當座三首

永日と誰かいひけん暮ぬるを花におとろくかねの音かな

松間花

山まつの木の間すくなき花の色も葉分のかせに顯はれにけり

主上より殿下へ御詠被遣しに御返し有て其後人參

上各禁中花をよめとありしに

みる人の心やそめし玉しきのおまへのはなのふかき色香は

木かけをもきよむるまゝに咲はなの光もそふや玉敷の庭

鞍馬寺の花を

白妙にはな咲ぬれは木陰も名のみくらまの山櫻かな

同明日曙に起いてゝ

いつれともわきてなかめん花の木に宿かる春のゆふへ明ほの

禪昌院有和尚庭の牡丹咲たりし桃花陽明誘引中民部卿法印玄以詣て當座有しに

咲いつる花を尋てみる人の情も色もふかみくさかも

朝花桃花坊にて民部卿法印めして酒宴次に十五首當座

あくるをもまては遲きに朝いする人さへそうきはなの比哉

常盤木雪同

まつ杉のえこそかくれれ緑なる梢はいつらつもる白ゆき

野篠霰同

さゝの葉もさゆる野風にみたれ合てちれはくたくる玉霰かな

歳暮雪

身につもる月日ならても降雪のまたおとろかす年のくれ哉

天正十五年

元正

いつはあれとわきて雲井も新玉の年ゆたかなるけふにも有哉

同發句雨のふるを題にて

雨雲や去年のへたてかけふのはる

庭鶴飛羽林にて會始當座に

砌なる木高きまつのこすゑこそ千とせあらそふ鶴のもろこゑ

松契多春陽明御會始

若緑さもそはりなんうつし植て千とせを松のかけたのむみに

夕雲雀ヲ當座三十首

ゆふ日かけかくろひぬれはそことなく霞の中になく雲雀かな

卯月はかりに櫻の咲たるに若葉のもみちましりたる枝を折て久しくとはさりける人の許へ遣はしけるとて

春秋もとはれぬ人にわかやとのはなも紅葉も色やみすらん

中島天滿宮にて昔にかはり荒はてたるに

神垣のうちさへあれていにしへの松はしるしもあらし吹なり

杜月三西亭にて興行

さやかなるいつはありとも秋になを光やそはん月よみのもり

月前霧同

うき雲の外にも心盡しけり霧たちのほるあきのよの月

月契多秋同亭

いつのまにかたふきにけんあやなくも霧の上行よはの月かけ

身につもる年もおもはす月みれは行衛の秋もたのみ社をけ

初逢戀

こよひしもかはしそめぬる手枕をさても思へは夢かうつゝか

菊露三西月次

袖ふれて折人さそなしら菊にこほるゝ露もふかきにほひを

暮秋

くれて行秋のけしきの冷しき空とそおもふ有明の月

鷄告曙陽明へ薩摩守義久被召テ廿首當座於相國寺長老

人はいさしらてぬるよのあけほのゝ空をとはる鷄のこゑ

　神無月末つかた都は夜の程打時雨しに明てみれは
比叡山に雪いとしろかりしを

時雨つる空ともみえす大ひえの山にし白き今朝のしら雪

　雪 三西亭月次

中空の空かあらぬかさそひきてさなから雪もちりひしの山

　思

かく計盡す心をいかにせは思ひしらるゝ思ひならまし

　内侍所御法樂百首經賴卿にかはりて橋紅葉を

散たひに水こそさそへ谷川のはしそ木葉のつもるまゝなる

　千鳥 同

いつかたの川へのなみに立わかれ友よひかはし千鳥なくらん

　天正十六年

　元日

雨なから出行空にうつる日のくもるそまたき霞なるらん

　發句

けふよりや雪きそふへきよるの雨

　禁庭花を

白妙にこすゑもつゝく花さけはたちかさなれる雲の上哉

　夏日陪　行幸聚樂亭同詠寄松祝和歌

君かためうへし砌の姫小まつ木高きかけやなをもみてまし

　翫花 紹巴より或人夢想只字武所望題を探て

とし〳〵の春を待つゝ咲いつる花の色香に袖ふれてまし

とふ人もわれにひとしき心とや花の木かけを立もかへらぬ

　新樹葉盛陰 攝州小寧相亭にて

降さへしけき若葉のへたつれはたゝみ山への木かくれのさと

　樗誰家 同當座

たかやとゝとはまほしきは紫の雲にまかへてあふち咲かけ

　古寺鐘

舟なから旅れの夢をおとろかすかねこそひゝけ三井の古寺

　殘菊草霜

霜かれになへての草は成ぬれとにほひ殘れるしらきくのはな

折のこすまかきのきくの枝をおもみ人こそ霜のはなも咲けれ

　窓竹 同亭にて

かけふかく住もて來けりくれ竹の代々に絶せぬ窓の學ひは

　行幸へ仙洞より御製ありしに人々うたよめとおほ
せられけれは

豐なる御代のめくみは盡せしとあふかさらめや末かすへまて

　天正十七年

　元日

あら玉の年たちかへるあしたそといひあへすしもかすむ空哉

降そめてけふよりなかしはるの雨

軒端に竹うへたりしにうくひすの初て來鳴けるあ
したに
うつしうへて待しほとなく今朝そ聞軒はの竹のうくひすの聲
飛鳥井羽林會始に松樹增色といふ題またいとけな
き女をむかへしに
うつしうふる砌のうちの姫小松の若緑そふ陰にならさん
梅契多春陽明御會始
春の日の光うつろふやとはなをとし／＼梅のにほひそひなん
俄逢戀同當座
うれしともいひこそあへれ今夜しも思はさりける新枕して
有和西堂有詩或日白后へ語申せしに和答有り
櫻指紅雪漸闌々。恨不哦詩陪雅莚。人世難期吾老矣。花時勿
道有來年。
白后御詠
またこんもなをたのまれぬよはひ哉春の花みし去年に今年は
と有しに予また
この春はよし暮るゝともなをやみん花の都のあらんとし／＼
また白后御庭の櫻ちりかたに雨の洒き捨しをみて
春雨の洒とみしか木のもとにあやしやつもる花のしら雪
橋本實情〔清カ〕朝臣一章箱底より見出したるに一入舊友
の程をおもふに涙眼にさへきりし折しも時正のこ
ろなれは則彼玉章を翻して彌陀の名號を百八煩惱
の數にかたとりて書付次に六字を句の頭におきて
片時のほとに蜂腰を綴侍て備香・責〔異歟〕顔侍る
長からぬ玉の緒計いましはもとゝめんかたのなき人にして
淺からぬかたかひ馴し友にしもゆかりよりけの哀をそ思ふ
水くきの哀きえぬをみるにいまふりにし友にあふこゝちして
たつれきていとゝ袂をぬらす哉かすむ苔ちの露のまに／＼
吹からにむれのむら雲風にきえて高れの月やすみのほるらん
禁中に月の百首有へき由聞えしかは下よみ人にか
はりて
月憶初秋
秋のくる空よりかよふ風にしもかれてそすゝし月の面影
未出月
月しろのみえみみえすみまたるゝはいつくの山か影隔つらん
半出月
はつかなる影こそ月はめてたけれ山端すきは夜や更なまし
漸昇月
山きはの霧立のほる秋のよは影さそはれて月や行らん
停午月
傾かんかけをおもへは中空の月たにいとゝみらくすくなき
稍傾月

更過て雁なきをつるかたみれは稲葉の雲にかゝる月かけ
例ならす侍れ覺に
いつはとは時はしられとつゐに行道を思へはおちきなのよや
八月有明かたの月に山かつらのかゝりたるをみて
天やかせ空吹まよふあかつきの月は秋さへ朧なりけり
大坂江参上おの〳〵被下し船中の月九月十三夜なれはのほるとて
行末をいそくも月に明れとは思はさりけるよとの川ふれ
さしのほる棹の雫のかけもみつ舟こそくまよ川つらの月
白后へ詣たりしにかめに菊の色あやしく開たるを予にえさせ給けるをまかり出とて忘たりしを跡より此白后の御詠そへられて
いまそしる忘る草の種そとは思はさりしを菊のひともと
と有し御返し
ひと本のわするゝ種しなかりせは草にも葉の花もさかしを
愚亭月次發句
池水の色なるなみやふちのはな
同十八年
元日
けふよりの日かす幾日とまつほとも心は花に先そめてなん
今朝ふるはひまも有けり雪の庭
頃暁の寝覺に有門空門心を
ありと思ひなしとおもへる心よりあまたの罪や世に作るらん
春夕月（陽明御會始）
ゆふ日かけ残れるほとは中〳〵にかすむともなき空の月かな
於臨江齋月次興行
青柳は本の雫やすゑの露
吹わけよ霞にはなに春のかせ
春月朧（竹花坊御月次）
浮雲のたえまは影のさやけきにかすむまゝなる春のよの月
忍久戀
いつまてかふるき軒端に生るてふ草の名つらき心ならまし
柳（同當座）
白露の結へるまゝに絲はへてなのかをはる玉柳かな
旅行友
都にてまたみぬ人にとひかはす道こそ旅の便りなりけれ
白后御庭櫻咲しをみよとも告給はぬを程へて詣て
散かたになりしを見て
とふ人をいとふあるしのいひなしと思へは庭の花そ散ける
栂尾の春日開帳有しに陽明御参詣次に御垣の花盛なるを
榊葉もかほりそひつゝ神垣の外にもあまる花さかりかな

行末をかけてそおもふあひにあひくみかきの内の花の白ゆふ

池水鳥 桃花御月次

水晴る池の鏡になれ〳〵てかけをも友となしやうかへる

暑き比ほひ宵ふくるまで空を見ふけりて

夏のよはほしのかすみもはし居かな

前兵衛督隆雅十三回忌爲追善讀ておくりける八月
七日に

あたし野の露ときえにしその思ひおもへはいとゝ夢の世の中

八月十五夜禁中小番候ての次に

さらぬたに寝ぬへきものか宿直もるこよひの秋の雲の上の月

同夜人々内々へめしてうた遊しけるときゝて殿上
の月をひとりなかむとて

こよひしもおなし雲井の月なから人にわきてや光みすらん

又螢を聞て

きり〳〵すいたくな鳴そ萩の戸のあたりに聞もわひしき物を

毛利輝元卿亭にて當座白后

夏草のひとつ色なるまつか枝の千とせのかけや宿にそふらん

御返しに

うつしうふる一本〳〵の茂りそひて松の幾世か宿をしもみん

桃花御月次に杜蟬を

しけりそふ杜の木かけはぬれぬかと思へはせみの時雨めく聲

輝元卿亭に赤白萩ませの中にうへられしに白后御
詠有し次に

しら露のおけると絶るませの中にこき紫もさける萩かへ

松木中納言宗滿卿白萩種所望有しに遣しけるか赤
く咲たりとて一枝送られしにそへて

あか萩をいかにもしろく云なしてあまたの人を時よしと有し

返しに

いかなれは尾籠さうにもみせらるゝ松木とのゝあか萩の色

これより前は狂歌とも書付。

禁中より頃各へ貝香すくせらるゝ事切々成し私事
に

すれ〳〵と仰なけれと時よしは貝香よりもうすひらうする

夏のころより秋の末つかたまて例ならすして紙帳
つりてぬとて

わか宿の風をふせくに蚊のために夏冬紙ちやうつりて隠るゝ

また或人吾宿はいつくの程そととひしに

我宿は内裏のひかししかそすむよに西のとひと人はいふ之

しはすの廿日ころに人の許より度〳〵使おこせた
る返事に

借せんなとふ人おらはすまぬれに手をたれつゝも侘と答へん

同十九年

元日雪[illegible]

長閑成る御代のしるしと久かたの空にみせたるけふにも有哉

今朝やまた降しまゝなる去年の雪

若菜遅年[illegible]を

あら玉の年も幾度ゆきかへり摘へき野への若なゝらまし

翫梅花[illegible]

咲しより心をそめてたちなれぬ軒はの梅のはなの色香に

餘寒雪同當座詠之

霞むかとみしけしきさへかはりきて去年の嵐や雪さそふらん

庭上竹[illegible]

うくひすのなれくる竹を移しうへて幾世の春を宿にかそへむ

はる風もたゝにやはきく色かへぬ軒端の竹のよろつ代の聲

山残雪[illegible]

立そへはつもれるほとも白雪の霞にきゆる天のかくやま

都にはさへかへりてものこるとはあらしのわかつ山のしら雪

寄雲戀

うき雲にあらぬ物からわか身たゝたちゐにもうき思ひ成けり

夜花[illegible]

春かせの吹もいとはしひらき置閨の戸くちのはなのにほひに

ともしひをかゝけてみはやよはまても花にそおしむ春の一時

古寺松

ふる寺の軒のかはらの苔のいろもおなしみとりの松の木高さ

古てらのゆふへをつくるかねの音に聲うちそふる軒の松かせ

一人二人ともなひ比えの麓へまかりて樹ほりてか

へさに高野の社頭の花の本にて知人酒をもたせて

すゝめけるに

思ひきや山路のすへにまよひきてかゝる桔の花をみんとは

龍山后夢想御詠卌一字頭に置て人々にうたよませ

られしに

川上柳

幾村の柳の髪を春かせに吹みたしつゝあらふ川なみ

水鳥

水はるゝ池の鏡におかなくもかけを友とやおしのうかへる

山家

庭におふる松の木かけをおのつから千とせの友とすめる山里

三月半にう月の節に替り行日ほとゝきすの一こゑ

啼たりしを

やよやまていまひとこゑははるか夏かとはゝやとはん山郭公

若王子にまかりてつゝしのおかしく山に咲たりし

を後亭よりみて

松たてる軒はの山の岩つゝしこれもや春の錦なるらむ

松陰避暑[illegible]

立ならす松の木かけは秋もはやかよふ計の風のすゝしさ

年のくれに四十にみちたりしとを思ひ出て

まとはすと人はいへとも身にはまたしらすも送る年のくれ哉

九月十三夜西園寺亭にて卅首うたよみしに月前鴈を

つらなれる鴈か鳴音のなかりせはさやけき月の雲とみてまし

寄月述懐

佇むによも更にけり妹かあたり月はいかにととはまほしさに

寄月恩

よな／＼のさやけき月に消れたゝ螢よりけにもゆる思ひは

同廿年

禁中御香参勤之折節烏丸大納言梅之紅白兩枝を献是を題にて御製の詩被賦て云〔被下〕臚日野亞相

早梅間看此春風。香色携花袖中吟。枝抹過勝認景。一枝如雪一枝紅。

と有て亞相に和答を可申上旨仰有し次に下官にも可申上有しかは

わつかなる枝とはみしかとの葉のかけまて深きむめの紅

春日侍　行幸聚樂第同詠池水久澄倭歌

影うつる汀の松にすむ鶴も池の鏡に千とせをやしる

行幸の中に大閤より

花の色はうつりかはれる世の中に千とせをへてよ雲の上人

と有しにもをの／＼共答を申せと有しかは

咲つゝく都の花は君か代のかきりしられぬかさしならまし

勸修寺入道前内府九十賀せられしに九十首うたよませしに秋田

末とをき田面の原の稲葉より秋に色なるなみに立らん

余分

君か代の廣きめくみになひく田の稲葉の末は限りしられぬ

同山榊　時康にかはりて

分のほろうへよりうへも榊葉のなをいや高き天の香久山

余分

年へてもかはらぬ色に神山の榊とりつゝ世をやいのらん

葵露

日のかけにむかふとすれは朝露も消てすくなきあふひ草哉

朝日かけきえてもなをや夕露をまつの尾山のあふひなるらん

雨夜虫

そはたつるまくらのうへにあめきけはなれも侘しく松虫の聲

雨洒くよはの寝覺のたもとにはなく虫のねや涙そふらん

文祿二年

元日

もろこしの空もひとつにくる年の光やけふにあらたまるらん

あらためて近き曆や去年去年（今歌）

民部卿法印つくしの陣へ下向に紹巴法橋昌叱法師なと送て鳥羽の川のほとりにて名殘をおしみてくちすさみけり

はるかせの吹をくるとも行袖になをくりかへせ青柳のいと

宿梅咲たりしに

大かたはそはしとそ思ふ心さへいろかにうつすやとの梅かへ

さためなきうき世なからも咲梅の花は色かのはるにかはらぬ

正親町院御中陰二尊院にて被執行參上各御法事間候せしに烏丸の大納言一番にて越しに龜山へ登て

春かすみわけてのほれる龜山の松吹かせよさくら散らすな

小倉山にて花

ゆふ日かけうつろひぬれは小倉山名にもかはれる花の色かな

嵐戸難瀨の瀧をみやりて

あらし山嵐のかせはと絕ても戶なせのたきのおとゝきこゆる

定家卿山莊の跡とて松一木立たりけるを

松一木たてるかけにしいにしへの山にさためし家をしそ思ふ

禁中へをの〳〵めして歌よませられし初ての御會

兼日卯月待郭公

夕月夜かけもうつろふうの花にまたれすもかな山ほとゝきす

同百首當座に遠歸鴈を

幽にもきかすはしらし明ほのゝ雲にわかるゝ天つかりかれ

みるか中に趣きえても白雲にこゑや殘して鴈歸るらん

更るまて灯を挑て花を見とて

ともしひの光をそふる花の色をいかてか夜のにしきとはみん

禁裏に諸家の月次兼日二首和歌五月雨

立まよふ雲したえれは天つたふ日かけもしらぬ五月のころ（百首歌）

寄神祝禁中當日

いまもなを神のむかしの人の代となるより絕ぬ惠をそしる

うこきなき御代のためしや石淸水すむにまかせて猶や仰かん

河柳同

河つらにかけもかたふく青柳の枝はおられぬなみの度〳〵

秀次公于時關白於聚樂月次初

夏日同詠竹契遐年名盛は不書官名字

生そひて廣き園生の若竹に末遠き世をたのめをきける

田家水同當座

おろかにも誰かはおもふ小山田に住てふ賤も水をたのしむ

故院爲御追善禁中御千句九百韻めの發句予つかふまつる

卯月廿日初

行水の泡雪しろきなかれかな

淡雪はみとりにかへるこけちかな

氷室公宴御月次三首
茂りそふ梢つゝきに日のかけはもらてしももる氷室山かな
夕顔
白妙にはな咲ぬれはたそかれもそことしらるゝ夕顔の宿
憑戀
一度はとけもやするとたゝたのめさりとてつらき心みゆとも
名所瀧
川なみもまさりやすらん雨はなをふるの瀧つせ聲たえすして
西園寺家妙音辨才天新造の會に瞿婆勝衆花といふことを
草/\の花さく中にこのねぬる床なつかしき庭の朝露
新樹風同當座
おもかけのこゝろ若葉におとつるゝ風も花を忘れさりけん
吹分る風なかりせはなつ山の茂る木の間はいかてみましや
七夕琴禁中御會
年の緒のたえぬ手向やたなはたのあふきにならす露の玉こと
浦松同當座
うらかせに晴のこりたる鹽かまのけふりとみしやをちの松原
名所月公宴御月次二首
鹽風につもる木かけのをのはゝかきも盡さし和歌の浦まつ
うらかせに波のよる/\行月をみやはとかめぬすまの關守

山家嵐
世をはなれすむ山かけもをとつれのたえせぬものは嵐之けり
苔同當座各一字題
松かねの岩の雫のつたひきて苔むす庭は塵もつもらぬ
薦
しけり行池の眞薦の雨ふれは水のふかみや刈のこすらん
公宴に一字題百首有へき由候私に詠置歌又五首之
内鴫
小雨ふる片山もとのゆふ暮をはとなく澤に鴫やしるらん
鶴
冬きてもをのか寒さはたえてまし霜うちはらふ鶴の毛ころも
鷺
明ほのやまた晴やらぬ雪の中にむれたつさきは聲のみそきく
鶏
いかてかはふる雨のよのあかつきをあやしくつくる庭鳥の聲
〔千鳥歟〕鵆
友さそひさそはれてなくさ夜千鳥ね覺はわれもゆく心かな
同三年
元日四十三歳の齢を思ひて
積りこし老をはよそにみつるものを更に身にしる年は越けり
雪とけし流にそふやけふのあめ

陽明西國へ左遷のやうに物し給に人々名殘おしみ

よまれ給侍に侍て

なかれ行流の川水はやきせに立かへるへき末のしらなみ

探早苗飛鳥井月次　二首御巴合點

朝露にぬるゝもしらて早苗とる田子のもすそは秋の面かけ
やまかけ、いつゝもイ

名所野

夏草は結ひをきても旅人のみちや迷はんむさし野のはら

百草の茂りし比はかすか野ゝ若むらさきもみとりなるらし

河五月雨同月次二首

をちこちの里の中川なみこえて往來稀なる五月雨のころ　白石御示例

もとは五月雨に里の中川水こえて人の往來なみの通路　［ヒ附箋］

なみ高み舟もかよはぬ川しまに雲たちわたる五月雨のそら

契経年戀白石御示例

かねその末たに人のかはらすはとおもふ程に年はへにけり

又

たのめつゝよそに過しを三年たにまたぬ心はいかにみしかき

右歌は逍遙院の歌にあるとて。三西實隆卿いかゝの

よしに候ゆへ止也。

螢照窓二首

夏むしの飛かふまとのともしひに光あらそひ行ほたるかな

ともしけち消なは窓のともしひをほたるののちに挑てやみん

初戀

いまよりもふかくやならん涙河なかぬ暮してあふ瀬まつまに

わひしさを誰にかたらん枕たにまた數なれぬ閨のをきふし

里梅同二首

梅かゝのあまる計に咲ぬれはあるにもあらぬ里の中垣

瞿麥

一もとの種にしあれとくれなゐに薄きもましろ大和なてしこ

杜蟬同月次

茂りそふもりのした道わけ行は木隱れもなき蟬のもろこえ

夏祓同三首

岩れこす川瀬のなみのすゝしさにしはしはてたる夏はらへ哉

正月初つかた亭德院一溪還化のよしきゝ驚てよみ

て正純少貳送りける

咲て散木高き梅のあはれさなしれとや四方に香をうつすらん

亞相雅春卿被薨し比は正月十日あまりなるに諒闇

品にそへて贈る

あらましの世のはかなさもしら雪の消し苔地はみるに悲しき

隆雅十七回忌に品經のうた有しに囑累品

すゑのよを思ひをかすはかく計つたへたゝしき法にあはめや

無人のかたみは書置たらん物にはしかしされは反

古ともえらひし中に惠照院隆雅筋とも有しをみる

にたゝにやは有へきとおもひ追善のために則彼玉章を翻して法花一品を書寫し幸に十七回忌に相あたりし日彼佛前に献
もしほ草かき殘せしをあつむとて二たひぬらす袖のうらなみ
西園寺の亭にて十五夜に月十五首有しに雨後月を
雨雲の跡さりけなくすみのほる月はこよひの名をや忘れぬ
同古寺月を
ともしひはかゝけすてしもふる寺の軒もる月や光そふらん
公宴御月次倭漢發句可申旨有九月十日比御會に
瀬ちる岩にはうこく風もなし
夕初雁飛鳥井家月次二首
ゆふ霧の空に翅はわかれともそれとまかはぬ初かりのこゑ
海邊月同
かりてほす海士なられ共秋のよのあかぬみるめや浪の上の月
郭公同當座三十首
聞まかふ人もあるかとほとゝきす名のりてそ行明ほのゝ空
ほのかなるこゑをそしたふほとゝきすなくや五月の有明の空
紅葉
露霜にまさりやすらん行てみる心のそめし木々のもみちは
九月八日飛鳥井亭月次三首
おりとれる袂に露はこほれも〔て欤〕匂ひは散らぬしら菊のはな
色とに露はをきても咲菊のはなのかほりはかはらさりけり
暮秋
長月の有明かたの月にまたわか身の秋そおとろかれぬる
昨日といひけふといひつゝうつる日の猶侘しくも秋のくれ行
山家
山里のつてきくよりもおり〳〵に折たく柴のけふりをそみる
ゆるされぬ身こそはすてれ山里に心のゆきてすまむとすらん
時雨同當座
木の葉をは染盡しても降めくる雲に色なき夕しくれ哉
風わたるみねよりみれはと絶しを時雨てかゝる雲のかけはし
落葉如雨飛鳥井家月次二首　但此會は延引にて終無之
木の葉とは明てこそしれ閨の上に夜のまは雨の音に聞しを
いたまより雫はもらぬよの雨の音に木のはゝふりよかへても
夕陽映島
夕なきに日かけうつれははるかなる奥の小しまも波にま近き
夕日かけいさよふなみにうかひ出てちかくもなれる浦の遠島
同四年
〔題元日欤〕梅かえは去年より咲ぬけふは又けにあたらしく花を待哉
空にけさたちかされけり八重霞
松久緑飛鳥井家會始　今日初子日也
子日せし小松を宿に引うへて千世のみとりのはしめとやみん

東山慈照寺龍山后へ正月廿日詣しに御會始とて當座に懐帋つかうまつる

庭松契久

山松をみきりのうちにしめをきて千年の春やかれてしるらん

別戀同當座

別れつるけさの袂の露けさをおひみるまてはほさしとそ思ふ

別戀

から衣ふれし人香は殘りても歸るあしたのうらめしき哉

馴戀題を見ちかへ初に別戀を詠侍又改之一首を清書

諸共にあはれとおもふ身なりせはなるゝ日數は嬉しからまし

しらさりし程こそいまは戀しけれなるゝにつけて物思ふ身は

尋花不知梅飛鳥井家月次

小泊瀬ややとりもとはすゝきにけり梅より後の花に分きて

禪閤龍山后御臺之圖子の御亭糸櫻盛に常座有しに

青柳に立ならひても咲ころは雪をみせたる花の色かな

清水寺かみの寺より下の花をみて

山高み梢をしたにみる花の中にそむせふ瀧なみのこゑ

白后御庭の紅櫻さかりの比

近くみるこすゑに霞たち消てゆふ日を殘すはなの色かな

他日又彼庭の花見に龍山后被申しに　　春

手折とや人のみるらん端ゐする袖にした枝のかゝる花ふさ　　白

けふまてと惜みもてこし花よ唯散らはちらなん雪とたにみん　　時

時ありて散もおしまん花の枝にけふはと絶よ庭のはるかせ　　春

かけふかき砌のはなにみよし野も分つくしたるわか袂かな　　白

みよし野や去年のしをりを思ひ出ぬけふもみはてぬ庭の櫻は　　時

もろともにあわれとやみん砌なる花もこゝろにみよしのゝ山　　春

咲かゝる軒端のうちはかめにさすたちえともみる花の色哉　　白

かめにさす花も散てふかきりあれは軒はの櫻風もうらみし　　[illegible]

折とりてかめにはさゝしをのつからたてなからなる庭の櫻は　　春

はるかせに散かさなれは池ならぬ庭によりくる花のしらなみ　　白

梢にはくれなゐふかき色とみしもうつろへは又花のしらなみ

慶
かよひくるあらしに花の浪たては水なき空となとかいひけん
報恩院殿雅僧正身まかりけるに愚詠をつゝり聊述
卑懐而以贈尊靈
行春のかきりもまたて散はつる花に苔地をおもひやるかな
野夏草飛鳥井月次二
旅人やふみまよはまし結ふともなつ野の草のしけさまされは
名所浦
うつされし跡をみつゝも思ひいつる煙はたえし鹽かまのうら
見花
蝶鳥にあらぬものから梢にもこゝろのゆきて花をこそみれ
咲しよりなかめそめつゝ紅の花にはいとゝあくとしもなき
山月
やまたかみ雲はふもとにふかれきて嵐のうへそ月はさやけき
高しま郡へまかるとて志賀にて湖上に朝きりのた
つを
山端はみきはを遠み明そめて霧にそむせふしかの浦なみ
比良の山のもみちを
もみちはのこきも薄きものこりけり色〳〵に吹ひらのやま風
同瀧を
山ひめのもみちのにしきおりかけてさなからあらふ瀧の白糸

眞野濱にて
うつらなく聲こそきかれいまも又尾花ふきしく眞野の濱かせ
堅田にて
又やみんかた田のうらに引網のめもはるかなるあきの夕なみ
竹生しまへわたるへき湖上波あらくして漕かへる
舟中にて
おもはすも波にあふみの舟なからみてこそすくれ沖のうき島
同五年
元日
一年のはしめそとけふ降雨の時をたかへぬ空はしるしな
行末をなをやかそへんけふの春
鶯是萬春友飛鳥井家會始
萬代の友とやきかんかすかなる三笠のやまのうくひすのこゑ
公宴御月次御會正月廿日ころ發句めされしに
解そひて池水廣き氷かな
さほ姫のかさしか露の玉柳
風靜花芳飛鳥井家會始
九重の中には風のあらくしもふかぬや花のなをにほふらん
老母なくなられし秋の比照高院殿より提婆品にそ
へて贈給
先散しなけきをそとふ柞原あらしにもろゝ方はなけれと

返し
はゝそ原散しなけきをとはるれはうれしきにさへ袖の露けき
老母心ちよはり給て
なかれ行水は二たひかへられは残りおほさの色をみすらん
とよみてはかなくなられしに
[此間二行闕]
螢似露 [illegible]月次
草むらにやとるもはかな露にまたよるの螢のひるはきえつゝ
ほのあける影は螢とみしかともうつれは露もわかれさりけり
羈中花
とゝはん人さへもなき旅にしてかれるまくらそ友となりける
ふる郷の人ははとをしへたてゝも夢にかたらふくさまくら哉
盧橘 [illegible]
家のかせ吹つたへたろ軒端にやはなたち花はなをにほふらん
庭竹
植てこそとりの音もきけ朝戸明てむかへはふかき呉竹のかけ
あけぬれはよのまの雨ときゝつるも砌の竹の戦くなりけり
年内早梅 [illegible]
雪なからかきほの内に先さきて春のとなりはしるき梅か香
いそかれて遅くはなさく木々の中にはる待あへぬ園の梅かゝ
海邊暁雲
うらなみに月の御舟もあかつきの雲にあひてや入まよふらん
社頭花
榊葉のかほりやなをもそひてましいかきの内の花のさかりに
咲しよりしつ枝のかゝる神垣はと絶もみえぬはなのしらゆふ
初秋露
秋のくるみちかと計草のはもふみわけかたきけさのしら露
草の葉にあらぬ袂も秋くれははしゐの程に露はをきけり
老母世にいませし時は歳の暮ごとに星なとつくらし
め身つからの年をも又はらからのをもかそへられ
しとを思ひ出て
たらちめとよはひを共にかそへしもなを思はるゝ年のくれ哉
年の暮にとたらぬとを歎きて戯に
なへてよにあるとはいへと金銀も我にはくれぬ年そわひしき
これを詠せし後に内より人々に銀子を給たり。万歳
々々。
慶長二年 改元は去十月廿七
元日
山〳〵の雪のふる年たちかへてけさは霞のころもきにけり
うくひすの聲またて聞あしたかな
老母なくなられし明る年の始に墓所へまうてゝ
さらにいまおもふもかなしとひよりて苔の下なるはるの心を

早春松（飛鳥井家會始）
庭に生る松のみとりも立かへるはるに千とせや兼てみすらん
夢中に老母事花見次に思出し侍りて
花みてはなをなけかるゝ心哉あらましかはの世をしおもへは
禪閤（龍山房）御夢想の御詠頭字を置て題をさくり侍て
夕萩風
風の音さゝなれぬるもゆふくれは軒はの萩そわきてさひしき
名所松
雲かゝる梢とそなる大原やおしをの山のかけの小まつも
くれぬれは風の音さへ高砂の尾の上のまつのしらへそへつゝ
野路薄（三條西亭夢想の哥頭字に置て題を探て）
野へちかきみちのしるへやほに出てまねく尾花の末の一むら
水邊菊
枝よりも露のおちくる香をとめてあかす結はん菊のした露
忍戀
れぬるよの夢よりほかは涙をも人にみえしとしのふ侘しさ
陽明御庭のいとさくらを
青柳を一木にみせて咲いつるはなのさかりは枝そすくなき
聖護院殿にて櫻をなかめ暮してまた月に成るまて
木本にて歌よみしに
永日のくるゝもしらて木の本に月と花との色をみる哉

入江殿にて昨日花見有しに歌よまれしとて予にも
よめとの給ふ
けふみれは雪とこそ散れ心有てきのふや花のさかり成けん
花色映月（飛鳥井家月次二）
咲つゝく梢の花はありあけの月にかゝれるをちのしらなみ
柳（同當座）
くり返し結ひもとめす末葉よりこほるゝ露の玉のを柳
池邊紅葉
秋かせのと絶る池に影みえてちらぬ（もみち歟）うかふ紅葉ゝのいろ
春秋野遊
花ちれる明ほのもみつうつらなくかたのゝ月のかへるさの萩
なかめやるよその雲さへ秋はたゝひとりかうへの夕なりけり
瑞籬
あふけ猶まもるにつけて神の代は遠きも近きかものみつかき
松雪（飛鳥井月次）
つもれるを人ははらはぬ梢よりをのれとこほす松のしら雪
述懐
うつり行光のかけのいかにして身にかさなれる齢とはなる
末のよとへたて來ぬるも傳へきく昔にこそはなくさめてけり
庭藤咲りのころ德善院僧正（玄以）尋ねられし次にめくみ
有事侍りしを招巴法眼きゝてよみ人しらすと有て

咲はなのしたにあつまる人おほみ有しにまさる藤の陰かも
と有しかへし
咲藤のしたにあつまる中にしも有しにまさるなさけ社あれ
藤長とやらんのよみ侍るとなん申遣はしけるとて
〔此間數行闕〕

同三年
元日
けふよりも世はかしなへてあら玉の年と齡やかそへそふらん
ちる雪の花もみせけりけふの春
寄道祝飛鳥井中納言會始
傳へきて今もたえぬ數しまの道こそ家のしるしなりけれ〔せ脱歟〕
鶯入新年諸卿同前會始
くる春をいかてかはしるをに出てつくるはかりの鶯の聲〔恐落歟〕
軒ちかみ去年は來かぬ鶯の音にあらはすや歌のことはり
湖歸鴈
みるめなき浦とや思ふにほの海の霞のをちにかへるかりかれ
にほの海や水の烟のたえ〳〵に羽ふきしられてかへる鴈かれ
名所山
春秋や心に染てわけいらんたつ田の山の花に紅葉に〔恐脱歟〕
朝夕に詠なれておほひその雪こそふしのすかた成けれ
霞隔殘花飛鳥井宰相次但相延不遂
消のこる跡はかすかにかすみたつたつたの山の花のしら雲
木かくれはしはし嵐にもれぬるをかすめはちれる花の色哉
夏月如秋月次予與行
五月雨の雲の晴まのかけはたゝ霧より出るあきのよの月
湖早春同當座
にほいうみの汀のなみも打出つ氷のひまに春やきぬらん
にほいうみや水のけふりも春くれはやかて立そふ朝かすみ哉
惜別戀
鳥のれにおきわかれ行袖をしもしはしとゝむる關守も哉
旅泊波
ふる郷をおもふあかしのとまりふれなみより歸る夢の通路
磯まくらかりそめなからうちぬるも心をくたくなみのをと哉

同四年
元日
けふよりは冬こもりせし花の木も咲へきほとの日數をそ思ふ
うくひすはいまより待んあした哉

同五年
元日
けふに明て神代の春も遠からぬ一よやあまの岩戸なるらん
いつれも平野社造營の事を思ふ成へし。
わかみとりけふよりそはん小まつかな

松添榮色 陽明御會始

千とせへんやとのしろしやわか緑立かへる春にあひ生のまつ

春ごとにみとり立行かけはたゝ雲にやそはん庭のまつか枝

江藤 同當座

春かせの吹くろからに住の江のまつのこすへをこゆる藤なみ

山家木 禁裏御夢想御法楽 頭字當座

ろりをしく瓦の軒を山さとはよそにへたつる松杉のかせ

多年翫梅 仙洞御會始

春ごとに立よる袖にうつしてもなをあまりある宿の梅かゝ

谷雪 刻卯法楽被定對題行序は於伯三十首

山風はけしきかたはつもれるも中〳〵あさき谷のしら雪

あらしをはふりもかくさて谷川の音たゆるまてつもる雪哉

野暁望 同當座

今更におもひをそへて吾妻のゝ月の行衛そなかめわひぬる

五月雨

いとゝなを水かさやまさる五月雨の日數もふるの瀧つ川上

五月雨の雲のうちなる山里や雪ふりつもる日數なるらん

降ほとはなかれも濁る五月雨の晴れはすめる庭たつみ哉

と絶たる雲こそなけれふる程は千里もおなし五月雨の空

初逢戀

こよひたにあふはあふかは何事もまたかたらはて明る侘しさ

あら玉のみとせ限れるならひさへまたてかはせる枕とをしれ

宿の梅を

梅かゝをたれかはぬすむ墻うちにうしろめたきは軒の松かせ

千年へん後なをにほへむめの花うへにし宿の名をしたふまて

三月十日月のあかき夜庭の花の木にて

あはれをも知人さそな月なから木のま殘らぬはなをみるよは

荻聲近枕 公宴百首十廿三首

門のとはさし籬りてもおきの聲かよふ枕の夢はむすはす

よる〳〵のまくらの夢はかれはてゝ物おもへとや荻のはの聲

初花

先咲をあはれとやみん散ぬとも遅きにかはろはなをおもへは

花有遲速

いまよりも咲こそつかめ九重の花のなみ木に山のさくらは

時雨

くれ過る雲とみえつる浮雲に入日をもらす村しくれかな

落つもる木の葉におとを殘しつゝ時雨てかへる山のはのくも

聖護院殿へ庭の白藤を幽齋めされての同席にて云〔マヽ〕

ゆふ露のいろにひとしく咲藤のはなもそれと誰なかためん

玄旨

これもまたなにのはなそと人とはん藤さく庭のたそかれの比

まつか枝にかゝれる色のあやしきはたそかれしらぬ花の藤浪
一　慶
松か枝なわきてし北に咲ふしの花のしらたみかけて社思へ
同十六年〔慶長〕辛丑
元日
すへらきの畏き御代のひのためし更にそなふるけふにも有哉
うくひすもつけくるけふのはつ音哉
二月七日薄暮に庭前梅に奇瑞の氣たてり則席にて
五首を綴列に記之
なにはつのむかしの春の梅かゝもうつりもてきて今や咲らん
咲散と外にやみえん春ともにゝほひはつきぬやとの梅かゝ
鶯はこゝろしてなけ音をとめて人のとひくる梅のさかりに
くれなゐに匂ふのみかは八重一重咲かさなれる梅のあやしさ
松か枝に枝さしかはし咲にほふ梅に千とせの春をしそおもふ
岡雉〔慶長六年二月廿五日〕
日のうつる片岡のへの雪まあれやあさりいてつゝ雉子なく也
朝時雨
あけぬまは木葉の音にまかひしを今朝はひたふる時雨也けり
雲となり雨とちかひし行末をけさしもみする村時雨哉
庭櫻のちりすきて侍る朝につとめて起いてあめは
れてけるに
雨とのみなとか思ひし今朝みれは庭のさくらの雪とふりしく
庭藤を
千とせまてさかへさかえん庭の松の梢にかゝるはなの藤なみ
曉の雨に枕欹てありしに
されはこそ雨夜の空のほとゝきす人誰きゝし初音なるらん
ほとゝきすたかれさめにか音信てわれにかたらふ夜半の一聲
魚の名十
こちふくに雨ふりますや岩清水口すゝきてそ日をはむかへん
三順齋〔梅坊〕母にをくれしときゝて彌陀經にそへて
つかはしける
百とせになりぬる親になくれてもかなしき身より思ひ社やれ
同七年壬寅
一雨年四方拜なかりしに
主上御快ましく〳〵てとしは出御有しに
となふるや星の光もあらたまの春てふけふの雲井しるしな
百年のなかは越けりけふの春
昔の年より御斎に候せしに四方拜早參の人々にい
れなからいひかけゝる
御免あれれのひなからのけふの禮
野草〔於花坊会始ニ進〕
綠なる野への小草の中に生るすみれや袖にわきて摘まし

行袖も立とまりつゝはるのゝに色なつかしくすみれ咲ぬる

梅近聞鶯陽明御會始

簾まく軒端の梅になれ〱て羽ふくもにほふ鶯のこゑ

咲しよりのきはの梅にうつりきて猶朝さらす鶯のなく

餘寒月同

いか計空に吹らん春のかせもさゆれは更に冬のよの月

吹おくるあらしの雲のたえせねはさゆるもかすむ春のよの月

さえかへるあらしに空の雲消てかすむもしらぬ春のよ　月

北野七百年星霜經給し年に法樂の萬句有發句松梅

院より所望の間進上

散しきて眞砂地ひろきあられかな

又昌叱に相談

散音も葉腐柏のあられかな

網代同御會於勸修寺門にて

山かせのきり吹分るあしろ木に朝日いさよふうちの川なみ

星夕驪書公宴御會

もろこしも大和もけふは星合の空に手向の文のかす〱清書

もろこしのかしこき文も日の本の手向もおなしけふの星合

七夕になれもかしつや玉しきの庭の白洲に鳥の跡ある

平野社法樂夢想の頭字を置て曙時鳥

聲きゝて起こそいつれあけほのゝ空にまちかき山ほとゝきす

こゑきつゝ初音そつくる明ほのゝ雲のをちなる山ほとゝきす

陽明にて昌叱源氏よみし席にて卷の名を題にて當座に題を探侍しに匂宮を

春秋の草木の花に袖ふれてにほふや消ぬ名に殘るらん

覺澄三十三回忌佛事の次に

思はさりき三十あまりの秋の今日にうつる昔の跡とはんとは

夕花

遠方の霞にくるゝ日のかけも梢にしらぬはなのいろかな

あかなくもこゝろを染てみる色はなを一しほの花のゆふ榮

發句共未出

散れはこそ雪をもみつれはなの庭

梢には立かへらぬやはなのなみ

咲ちるにしつ心なし花の春

朝比や心ひとしきはなのとも

花の香をかせのぬすまぬ陰もなし

花ちりてあらし計のこすへ哉

朝ほらのさかりもかもな遲櫻

慶長八癸卯元日曉雪天

試筆

雪なから明行空はさもあらはあれけふより花の春日かそへん

としはけさこしの白根や雪の山

二月三日公宴御會當座二首谷春雨

山ふかみまた解やらぬ谷川の氷やくたく春雨のなと
日のかけもみぬ深谷は解残る雪なもさそふはるの雨かな

名所月

あき風のふけはおの上の雲消てひかりもしろし高圓の月
あふ坂の關の戸さゝぬよもすから杉まに月やもり明すらん

積善院僧正所望夢想頭字擣衣

とたへなきなみのよる〳〵秋寒き眞野のうら人衣うつらし
とり出てうちこそしきれ秋のよの月に衣やさらしなの里

旅

かへりこん日かすかそへて行かたにとめぬや旅の心なるらん
門出よりはるけきみちを思ふにも先うちつけに旅そ物うき

春風草々生禁中御會二首

雨かせも時をたかへぬ春なれはみとりそひ行野へのわか草
吹かせものとかになれは春日のゝ雪まの草はみとりそふ之

水石歷幾年

神の代は杳にふるの瀧つせの岩ふれ落る水のみなかみ
うつされし都にちかきかも川の石間の水は末も絶せし

松添榮色式部卿智仁親王會始正廿二

千とせへんしるしとそみる春ごとに木高くなれる松のみとりは
わかみとり立歸るはるのしるしとや陰いや高き軒の松かへ

寄莚戀同當座幽齋法印同席

獨れにあまり有けるかたはらをさむしろとたに思はましかは
露かゝる袖はさなからいな莚いなせもいはぬ人のつらさに

山家人稀

ならへすむいほりすくなき山里の人より外はとふもめつらし
月はなのをりよりほかはとふ人もあらしの通ふ山里の庵

花有遲速飛鳥井家にて

待〳〵てさけるさかさるなそへなくはなの梢にゆく心かな
またきより散も有ける花園におくれて咲もあはれならすや

庵春雨同當座二首

ならへすむ人しなければ音聞もうき身ひとつの庵の春雨
せはしきに住は馴てもさひしきは草のいほりのはるさめの空

寄嵐戀

よしさらは身は消やらて立めにもはれぬ思ひや峯のしら雲

寄松戀

おもふにも數ゝゝぬみれの松まつともしらて人のつれなき

陽明にて庭糸さくら咲初たりし人々よめるに

開そむる若木の櫻をじよりちとせの春をふくむ色哉
纖なる枝なからまつとしより千とせをかけて咲櫻かな

又糸櫻に瀧を人々よみしに

風ならて青葉の中におりくるはをとせぬ瀧のいと櫻かな

大坂諸禮に下向して歸る途に天河邊にて中院也足
軒此いひかけられたりし
乘駄ちん牛引程もあるかれはよき馬ほしな天川かな
又
馬よりも宿かせかしな天川越も一年に一たひの禮
返し
天川牛引星のあれはとて迎馬にもいかてかゆへき
又
彥星にまさりこそすれ天河宿をはからてわか家にゆく
山崎の甍をみて云かけゝる
山崎の家のとなりのたからてらいらかをたゝに數へてそみる
中院かへし
山崎の寺のいらかのおほけれと寶ひとつを所望にそおもふ
江雪腰煩たゝさりけるに宿の白藤を折て遣はすと
て
立いてゝみん人のため一枝はしゐて折けるはなの藤なみ
公宴御會に參仕の留守に宿の藤見に陽明よきり御
座す次に廣橋亞相淸原秀賢御供に候ひて詩歌書附
をかれし題三月晦日　宿守平氏　秀　賢
遊處尋來日已闌。家人在外與猶安。花今可耐待公駕。架上紫
藤春未殫。
かそふれはけふをかきりの春に猶咲りはなかき藤の花ふさ　杉
よそにみてかへらぬ人と思ふまてあるしをたとる宿の藤なみ　同
長日の限りもしらてとふ宿にかへらぬ人をまつの藤なみ　兼　勝
と有しかへし
和答淸原朝臣芳作　時　慶
佐久藤濃奈賀喜日影毛於牛〔マヽ〕卒保江須間爾曾惜乎波流乃殫遠
拜酬
春の限とはれしよりも夏かけてにほひやそはん宿の藤なみ
よそにみる標とそ思ふ折つるははひまつはれし藤にや有覽
永日となとかいひけん咲藤のたそかれまたて君か歸れる
照高院殿一乘門主卯月十日比によきりおはします
藤かけにて　白
夏かけて藤のしなひの永日もわするゝ計くめるさかつき
茂りそふ庭の木すゑも咲藤のかけにかくるゝ花さかり哉　楊
と有しに
夏かけてさけるかけをし問人のさかへはしろき北のふちなみ
吉野花比一見路次の記別に有し紹巴一周忌爲追善

興行發句

一とせも夢の名殘やほとゝきす

餘分

なくころにけふやおとろくほとゝきす

うの花もきえてはかなし雪のいろ

公宴聖廟御法樂六月廿五日二首御當座

卯花作墻

うの花なうへてすますは山賤の垣はありともいかてしらまし

さかぬまは隣もしらぬ山里のみちなわかてる庭のうのはな

旅人渡橋

旅人の心やすくやかよふらん濱名のはしのなみのと絶は

朝ほらけ降つむ雪に旅人のわたる音なき瀬田のから橋

六月卅日曉かたに時鳥の一こゑ鳴けるをきゝて

秋近き夜半の寢覺の一こゑは初音にまさる時鳥哉

虎

世の中のはけしき道は臥虎の尾上なふめる心ちせし哉

文月三日うへの御代參に鞍馬寺へ詣る途にて川へ

一葉のなかれけるを

山川のおちおち早き一葉かな

南隣は照門被申入酒宴の半に題を探りしに庭雪

賤人

散しくな花としみれは踏人の跡さへおしき庭のしら雪

庭の椎に雪のつもりたるを

風ふけはそれかとみえし椎の葉にまかはてつもるけさの白雪

同九年甲辰

〔元日〕閑からに去年のあらしの音かへてけさは長閑になる心かな

こえこけふさはらぬとしのは山哉

烏丸家會始　初春祝道

敷しまのみちあるときと家〳〵に筆心むる春はしるしも

於陽明卯月比月のおもしろかりけるにうの花と月

花名殘をおしむ歌有しに

白露のかきなる枝とみえつるは咲うの花にうつる月かけ

夏木たちおもへはあたに散はてゝはなの名殘や露の月かけ

同十年

〔九日〕呉竹のかけなしめすは鶯のはつれのけふないかてしらまし

わか水になかれそひたるこほり哉

庭梅を

松かせも心してふけ枝かはすのきはの梅のはなのさかりは

霞むころ遠山ならぬ山もなし

はなの香なへたてやはする八重かすみ

初秋雲八講頭當座二首

きのふけふ吹たつ風も秋きぬとゆふへの雲にみえてすゝしき

夕日影すゝしくなるやくる秋の雲のはたてのたちへたつらん
雲のはたて。入日の後かと中院不審せられ侍り。書付之。可勘舊歌。

恨戀

つれなきに心盡してつらみしと思ひもはてぬ我さへそうき

祝言

仰くよりひらのゝ松の木茂きやつきぬ千年のためしならまし
かしこしなおさまれる世と吹風も雨も時をやたかへさるらん

禁裏御千首當座。予廿五首詠。六度ニ書付。清書次第又探題ヲ詠テハ廣蓋ニ居。題之盛様。四季戀雜別ニ硯ノ蓋。

立春都

山端は霞にみせて九重のうちはゆたかに春たちにけり

遠村紅葉

遠方の村に林はへたてゝも梢はちかきもみちはの色

河時雨

河上のあらしにつれて瀬のこゑも更にそひ行夕しくれ哉

夜水鷄

はしゐしてやゝふくるよの月影にたくひやはある水鷄なく聲

寄水鷄戀

ひとりねの扉をたゝく水鷄かとつれなき人をおもはましかは

寄日述懷

愚なるうき身のうへもたのまゝしあまてらす日の光なりせは

舊梅

外にこそにほひをとめて立よらめわかすみならす軒の梅かえ

餘花

木かくれをしらてや風の殘すらん若葉の中にましろ一はな
今みれは一花よくもあらす

閏月

さよかせのよしや吹とも閨の戸をさし入る月は詠すてめや

蘭露

わけゆけは打拂露に袖もまたおなしにほひの藤はかま哉

瀧氷

岩ほより落くる瀧のしら糸を冬やこほりの結ひとむらん

寄苔戀

たのめてもとひこぬ人をまつかれの苔生るまて成にける哉

徑霞

詠めやる道は絶しを行人の袖にさはらぬ霞なるらし

夕月

中空に光やそはん夕くれはまたほのかなる山はなの月

寄宿木戀

あふ事もあらぬなけきに宿木のれもみぬ末や終に枯なん

寄雪述懷

降をける黒髪山の雪ならて我身につもるよはひおとろく

山家雨

よそにいま降晴ぬるもやま里は岩の雫にのこる雨かな

大原野

長岡の宮まもるてふ大原の神のめくみはいまもかはらし

岡早蕨

萌いつるころは岡への里人のほかにもとめすおるわらひ哉

崎萩

はる〳〵と露を分きてけふそけにみそめの崎の秋萩の花

寄江戀

なには江のあしのほのみし面影を夢になしてもいかて忘れん

田家煙

眞柴たくと絶も小田のかり庵にせきかけし水の煙たつらん

寝覺鶯

竹近き床のね覺の侘しきになれもなく音や老の鶯

老後懷舊

無をしもかそへ出れは哀にも涙さしくむ老か身そうき

寄碇戀

いかりおろす舟はたゆとふ浦浪の下にのみやは思ひはつへき

又下首にて後當座懷帋に菊有傲霜枝

おくしもの後さへ花の色そへは枝もたはゝにみゆるしらきく

夜思山雪

都さへ床さえまさり散雪に思ひやらるゝさよの中山

同十年〔題缺〕

十二年丁未

〔題元日歟〕一とせのはしめと告てあくるよや岩戸の關の鷄のこゑ

出る日もかすみそひけりけふの雨

春松契千年飛鳥井家會始

十かへりの花咲ぬへき春をしもまつの新葉の影しむるやと

同十三年戊申

〔題元日歟〕散雪もよのまのほとに晴そめてけさあらたまの年はしるしも

宣命使に參勤心を

みとのりのふる心そけふのはる

同十四年己酉

同十五年庚戌

〔題元日歟〕よのほとに年は越けりみねの雪みきはの氷り解やそむらん

花の春なかゝらん日のはしめかな

飛鳥井家會始寄松祝

千とせへん松のよはひはわか緑立かへる春にわきて色そふ

新緑勝花親王御方會始

花はたゝ軒端計にみえつるをみやまをうつす庭の夏山

余分

花の枝にみさりし色よ染かへてわか葉に結ふ庭のあさ露

歳暮近 同當座

手を折て過る月日をかそふれは又程もなきとしのくれかな

こえぬへきみねのこなたの麓まて雪とゝもにもつもる年哉

東よりくるとおもひし年もはや春のとなりと成にけるかな

名所市

なにか吾わさにし思ひたつの市のうる事もなき身とや成らん

續群書類從卷第四百三十八

和歌部七十三

參議時直卿集

所々詠草

海邊春月慶長九年二月於也足當座

春といへはかすむ計に浦〳〵もみらくすくなき空の月影

寄居戀

つれなさになお限りなき思ひもや絶ぬ鹽屋の煙ならまし

水鷄何方同五月二十日同所にて當座

そことしも聞こそわかれよ深くもくゐな鳴なる夢の枕は

寄名所戀同

はかなくも思ひかけしをつれなさに絶ぬ涙や袖のうらなみ

朝更衣同短尺

なくをまたてまつ立けりな今朝はゝや薄にかふる蟬の羽衣

寄灯戀同

面影よそひてもきえぬともしひのほのかなりつる名殘殘さて

秋田面同後の八月十五日　公宴御當座

露もなを色になひきて小山田のいなはにはるゝ雨そ涼しき

旅行友同

きし方を思ひやりつゝ諸共に契るも旅は哀ならすや

九月盡同九月晦日於也足軒當座

けふのみと木末の秋はなりぬともさそひなはてそ風の紅葉は

橋邊雨同

はれ間なき雨に水かさのまさりつゝ波たち渡る里の中はし

床間虫同當座

秋もやゝさむさ覺るよ床にちかよる虫の聲哀なり

歸戀同

つれなしや契置つゝとふにしもあはてかへさの道まとふまて

浦雪 同十二月二十日 當座 近衛殿において
きてみれは田子の浦より遙と富士の高ねそ雪に明行
船中雪
うな原やこき行船のうちにしもはらひそわふる雪のすかみの
慶長十年正月二十二日於也足軒
鶴迎年友 懐帋
長閑なる砌になるゝまなつるの千世のよはひや宿にかそへん
寄雨戀 同當座
わかおもひ晴るゝまもなき苦さに雨よりも猶ふるなみた哉
露暖梅開 同二月八日 短尺 公宴御會始
をく露も日かけさしそふかたへよりひらきや出る軒の梅かへ
十五夜月 同
久かたの雲もこよひやなにしおふ月の光を空によくらん
風破旅夢 同
結ひよる草の枕をおとろかす風にたえたる夢の程なさ
園中櫻 同二月廿五日 内裏にて御當坐 聖廟御法樂 〔花歌〕
散をしもいとふ計よ櫻哉香をは吹こせそのゝ春風
田家水 同
かけひより行ての道にせき入は水に涼しき小山田のいほ
隔一夜逢戀 同五月十七日 御當坐 公宴
淺からす契りきぬれは一夜をしへたてゝ又もあふそ嬉しき

不知身程戀 同
數ならぬ身はいかにせんと計と思ひしらすもおもふはかなさ
賤忍貴人戀 同
忍ひよる釣簾の隙さへおよひなき思ひをしつの身の哀しれ
雨中螢 公宴御當坐
難波江のあしの葉分もさみたれにかけほのめくは螢こけり
寄水雜 同
涼しさをのつからにもせき入るゝ底さへ清き庭のやり水
遊士行月 同七月廿三日 御當坐 式部卿宮ニテ
立とまる方もさためすあくかれて月にうそふく袖はしるしも
江邊鶴 同
さひしさもいとゝそひけりうつらなくまのゝ入江の秋の夕暮
庭萩 同八月五日於也足亭 懐帋
〔御歌〕
ませのうちは風吹ちらしそ咲しより露もしめゆふ花の萩かえ
戀月 同
とはれんの其かね事に待よひの更そむる月そ數はわりなき
待久戀 當座
淺はかにおもひやすらん秋のよの更る待間も人にまたれて
山館竹 同
詠やる遠山本の竹の葉になひく煙や栖なるらん
歸雁幽 同八月廿三日社廟にて 與行當座

眞木の戸を押明かたやかすむらん雲路にきえて歸る鴈かれ

欲顯戀四

忍ひつる心とならて末つゐに涙や袖の色に出けん

歳暮四

いたつらにをくりもてこし月日をも更に驚く年の暮哉

有明 同八月廿五日公宴にて御當座

思ふとちむかいみるよは有明の更るまてしもめかれやはする

禁中御千首御當坐時直十六首

慶長十年九月十六日

花挿頭

手折をも人なとかめそ花のえをかさしにさして家つとにせん

花便

みよしのゝ里より奥も咲はなの便待まそしつ心なき

閏三月盡

花とりの色香にあかておしむ哉のちのやよひのけふの別れを

田家卯花

かきねには月をまかひて白妙に卯花さける小山田の庵

墻夕顔

たそかれの比にもなれは草垣にひもとく花の夕貌の露

初秋衣

葛の葉のうらめつらしき衣手にふるゝも涼し秋の初かせ

岡刈萱

岡のへやしところにしほれなみよるは誰ふみ分し跡のかるかや

秋田露

門田よりひたのかけ繩引ほとやいなはの露もこほれそふらし

庭寒草

をくしもはらふとはなき庭の面にかれ立草の色そさひしき

檜雪

綠なる檜原かすゑはかきくもりふる白雪の色にまかする

寄萱戀

つれもなき人の心はかるかやの露に亂るゝ思ひくるしさ

寄郭公戀

待宵の更るうらみのなみたをもとつてやらん山郭公

江菅

みしまえやあしの葉かくれ生ぬれは波の白すけかる人もなし

名所橋

川なみもこゆるはかりの音はしてをやます雨はふるの高はし

寄國祝

めくみにはいかてもれまし雨風の時をたかへぬ國にすむ身は

寄杉祝

年をへて平野の宮に立杉のなをき御代をはあふかさらめや

菊有傲霜枝 御千首すみてとふ題にて

朝な／＼籬に結ふ霜をおもみ移ふえたもにほふ白きく

古郷夕花 同しますト五日公宴 御當坐

いたつらにとはて過すなふる郷のはな咲比の春のゆふくれ

名所松 勅題を中出於飛鳥井興行

うらなみのなかめをしかの辛崎や松に昔そおもひやらるゝ

慶長十一年二月廿五日公宴 豐國御法樂

挿頭花

色も香も衣にうつせ手折つるかさしの花の散は透とも

山近聞郭公 七條門主にて興行五月のあらまし のひ六月四日に有之懐紙

行かへり都の空のあけほのに鳴や音羽の山ほとゝきす

野萩 同當座

なびきそふ薄か中に立交る色もことなる野への萩かえ

初紅葉 同

露しくれしくれし峯や日の移るかたへとりまつそむる紅葉は

寄月戀 同八月十五日夜於也足軒

覺てしも夢の名殘の侘しさは獨ぬるよの月のさむしろ

慶長十一年神無月の初のころおの左大臣公へ點取
へきよし竹内孝治亭にてもよほされ歌よみ侍ける
おの／＼五首つゝ當座之愚詠點の歌はかりをかき
のせ侍りける

夕落葉

山かせの音も夕そたえにける木々の木葉をさそひ盡して

原寒草

花咲し千種なからもひとつ色にかれわたりぬる武藏のゝ原

深夜千鳥

川風の茅原にかよふ度／＼に立ちさはきたるさよ千鳥かな

花滿山 同十一月十日於式部卿宮

みれも尾もおなしにほひにさく比は花の白雲へたてやはある

鶴作仙齡 元日和歌所の會始 慶長十一

仙人のすむてふ庭にあそふつるのよはひに契る侍は盡せし

慶長十二年二月十九日於也足

梅香留袖 懐紙

咲しその木かけなられと春かせに梅の匂ひそ袖にふれける

春月 當坐

蜑のかるみるめもいかにしほかまの浦はかすめる春のよの月

瀧水 同

山高みおちくる瀧のしらいとをくりためてなかす水の一すち

鵜河 同二月廿七日於也足軒當座

かゝり火のしはし計に大井河くたすう舟ややみにまよはぬ

久戀

人はたゝつれなきまゝにつれなくも思ひに年をふるそ苦しき

池月久明 十二八月十三日於公宴 御當坐懐紙

いく千世も君やみてまし池水のすむにまかせてやとる月かけ

更衣 同日短尺

ぬきかふる花のたもとはおしめとも今朝たちそむる夏衣かな

見戀

すゑつゐに契る心のかはらすはこん世もなをや頼み置かまし

月前 於石清水法樂於也足 八月廿五日

身なから人もやきかんかれのおとのま近くすめる難波江の月

杣川筏 同

杣かはやみなきる波に筏士の袖吹かへす嵐はけしき

しもつき末つかた也足軒へ十首進之

點取通村朝臣催され人數頭弁（總光朝臣點二首）源少將（重定朝臣點二首）冷泉少將（爲賴朝臣二首）時直二首四條侍從（隆致三首）滋野井少將（冬隆一首）通村（七首也）

十首の中點の歌

時雨

はれて行雲吹おくる松かせのおとに時雨や猶殘るらん

遠村雪

うちなひく末葉もしろし吳竹の伏見の里の雪の明ほの　みとりなる末葉こともたらしく候や

雪中待人 於也足におゐて懷帋 慶長十六分

雪に明てみ山そおもひやられける都も人の待にとひこぬ

曉千鳥 同短尺 同十年分

曉の夢をさそひしうら風に友まとはして千鳥鳴なり

寄雨戀 同 同十年分

よしさらは音にたにたて我袖の涙の雨を人のとふまて

田家雲 公宴當座 同十年分

風わたる山田の庵のゆふ暮にいなはの雲も立さはくえ

寄水尺教 同 同十年分

一すちに心の水のにこらすはまとの道にまよはさらまし

心王院僧正夢想の歌かしら字にせられて人〳〵にうたよめと云ければよみ侍りける

別戀

りひわかす袖に立行涙哉けさの別れはかねてしらぬに

照光院准后道澄三得御意也。

慶長十三

夏草露 二月初卯也足軒にて

をのつから涼しさみせて夕露の結ひなれたる庭の夏草

雪埋竹 同

窓近き床にしきけは吳竹のをれかへる音や雪のつもれる

竹不改色 二月十八日於也足懷帋

萬代の春もかきらし千尋なる軒はの竹のみとりなるかけ

夜梅 同當座

春のよのやみにし風の匂はすは梅の木かけを誰かしるへき

寄硯戀同

うらみをもいひやるへしとむかいぬる硯とりあへす物思ふ袖

松契多春同二月廿一日於飛鳥井懐帋

かれてより千年の春やこもるらんうへし軒はの松のみとりに

谷花同當座

にほひをもしほりにしつゝ谷風の霞む行衛の花やたつれん

花祝同

あふけなき心有てや咲はなの白ゆふかくろかものみつ垣

月出山八月十五日也足におゐて石清水法楽

松かせも吹しつまりて男山月もこよひの名にやすむらん

栽竹同

うへそふるかけはふかしな夏冬の色もわかれぬ軒のくれ竹

松上雪此歌会所失念

十かへりの色をふくみて庭の松の花にそみゆる枝の白雪

寄国祝飛鳥井におゐて会始

おさまれる程をしれとて秋津洲の波も静に立霞かな

慶長十五年四月廿五日於御方御所

新緑勝花懐帋

花もやは咲かへさまし古木さへわかはかさなり深き陰には

梅落衣御當座

往と来と袂におなし香やとめん梅散かゝる野への通路

苗代蛙同

苗代に雨はふられとあつまりて水増るまて蛙なくなり

五月雨於飛鳥井懐帋同五月廿二日

須磨の浦のあまならねとも顯たるゝころも侘しき五月雨の空

寄月戀

むかいつゝかこつなみたもわりなしや別し中を月はしらぬに

早春山同日當座

きのふみし雪影きえて今朝はゝや山立かくす春霞哉

月前花同

月かけのなかめもおりにあふ坂の花のとゝむる関におりゐて

翫月同五月廿五日於[illegible]御方御所御當座

なかきよも忘そはつるあつさ弓入へき月のかけをしたへは

窓月

まなひえぬ身のおろかさの憂ふしにたくへてむかふ窓の呉竹

待郭公於御方御所御當座

夏のよのみしかき程もほとゝきすまたれ〳〵て明しかれつる

時雨過同

めくろかとみしよりはやく夕時雨はるゝ雲間に月やすむらん

湖歸鴈於飛鳥井當座

志賀のうらや奥こく舟のかちかとも霞む波間に歸る鴈かね

寄枕戀

わかれちもあふせも夢のうちなれは枕の外に誰か恨みん

藤爲松花 於飛鳥井月日しれす 慶長十九三月廿五後に日時見出

咲かけて行衞も松の十かへりをかれてそみする花の藤なみ

野擣衣 於八條殿御當座 月日しれす

里人は衣うつ也くれ竹の伏見の野へや夜さむそふらん

薄暮煙 同同

遠近の村にたなひく煙よりゆふへの空となれる程なさ

嶺林猿叫 於公宴御當坐 月日しれす

さひしさは嶺の林の椎柴とあらしに落るさるの一聲

慶長十六年正月十九日 於御方御所御當座

古溪花

かけはしの朽ろ絶まも散敷て花社わたせ溪の下道

寄道祝世 御即位有て御會始 五月十二日

親に子のしたかふ道のある世そときくにそ頼むしもかしも迄

夜鹿 公宴 六月

枕たにまたとりあへぬ柴の戸にれ覺しらるゝさをしかの聲

織女契久 七月七日 公宴

七夕のなかき契りのためしにそれかひの糸を手向そめける

新秋露 七月廿四日 當座 公宴

秋きぬと告てしかせの跡よりもあへす結ひし庭の朝露

萩如錦 同

眞萩原わけ行まゝにちる野へはこや中たゆる錦なるらん

寄月戀 同

何をかもかとにせましよはの月出にし後もまちふかす身は

籬槿 八月廿四日 公宴御月次

中垣に咲かゝりたる朝貌の花はへたてもわかぬ道哉

寒月 同

池水のこほるかたより置そひて霜のうへなる月そさえたる

籬菊新綻 九月九日 公宴詠進

山路にはけふもしらしなまかきより先咲初る庭の白菊

秋深夜長 同廿四日 公宴御月次

あきもやゝ更行比はさむしろにひとりぬるよそ長月のそら

紅葉添雨 同

いつの間にそめ出すらん雨にしも笠取山の紅葉はの色

世治文事興 同

文の道おとろへぬるもたゝしきてすなほなるよや猶仰くらん

虫 十月 公宴御月次

ふりすてゝえこそかへられ色〳〵の花野にすたく鈴虫のこゑ

雨

はれてたに木の下露の風に散や又ふる雨に猶まかふらん

冬月 十一月 御題 公宴御月次詠進

木からしの音きく程は晴やらておち葉かうへの月そしつけき

川水のなかれにさゆる月かけは結ひもとめぬ氷りそけり

雪朝同

諸人のけさふみ分る百數の庭につもれる雪のふか沓

難忘戀

よしやさはきえぬ命も惜からすうきをわすれぬ身の苦しさに

霧十二月廿四日　公宴御月次

春かすみあはれむよりも秋山のなかめにきりやたち増るらん

寄河戀

おもひきやあふせもしらて生田川底のみくつと成り果んとは

慶長十七年正月十八日公宴御會始

松契多春

千とせへん松に小まつを植そへて盡せぬ春に君やなれまし

雲雀同二月九日於　仙洞御會座

陰ふかき芝生に床はしめなから聲あらはなるゆふひはり哉

夏祓二月廿四日　公宴御月次

秋かけてなみの白ゆふ殘るとも御祓や夏の限りなるらん

古郷戀

ふる里はいくへの雲のをちにても思ふるための心へたてし

欵冬三月五日於飛鳥井

ちるとみしなかれも果ぬ吉野河きしの山吹かけうつるらん

寄神祝

すなほなる世のためしとや波かせもしつめもてこし海原の神

花滿山三月廿四日　禁中御月次

白雲のたつたの山の峯つゝきこえぬもしろき花盛哉

社頭花同

枝かはすこすゑは花につゝまれてしるしもわかぬ三輪の神杉

花浮水

谷川の水はあさきちちりきてや花の色香の深くなすらん

涌出品三月廿五日也足三回忌

行めくる國の中にもまたみれはみるにあやしき人の數〳〵

鵜川公宴御月次　四月廿四日

うかひ舟くたす程なきかゝり火のきゆるとみしや明るなる覽

寄水雜同　短尺の時三首まてもはね字くるしからさる由也院御所得御意

岩ふれておちくる水のしたゝりや苔のみとりの色となるらん

水鷄五月廿四日　内裏御月次

さすとしもなき柴の戸を終夜たゝく水鷄の音そあやしき

瞿麥

夏草のみとりの中に咲てしも色はとなるなてしこの花

切戀

瀧津せのたきれるよりもくるしきはおつる涙そせく袖のなき

叢虫六月廿四日　公宴御月次

種〳〵の花のにしきの色もまたはたをる虫の音にやそふらん

歳暮同

われのみとおとろく計おもふ哉獨〳〵に年はくるれと

乞巧奠七月七日　公宴當座

七夕にひかて手向る玉とのしらへないかて空にしるらん

早涼到七月廿四日　禁中御月次

きくからにうはの空吹風の音も秋立日より更にすゝしき

行路萩同

咲しよりあたのおふ野の往かひにおらは落ぬへき萩の上の露

閑中燈

なこたらぬ心よりしもむろの戸に獨むかふや法のともしひ

卯花〻月　禁中御月次詠進

いつれともわきてなかめん卯花の雪と月とにまかふ垣ねは

海路

わたの原こきわかれぬとみし舟もくるれはおなし泊ならすや

月照菊花九月九日　公宴詠進

影きよき籬のほかも色そひて月さへにほふ白きくのはな

追日紅葉深同廿四日　公宴御月次　停滞

日にそひて色しまされは小倉山名のみえける峯のもみちは

暮秋送客同

〔歌闕〕

夢中契戀同

はかなしなうつゝと思ひし手枕の夢のうちなる夢の契は

落葉十月廿四日　公宴御月次　當座

風さそふ木葉分行衣手は過るもぬれぬ時雨なりけり

寄鳥戀

たのめつるよはも空しく更行は我のみ鳥のねにやなかまし

聞落葉十一月廿四日　公宴御月次　停滞

そめ〳〵てさそふあらしの音はまた木葉にゆつる時雨えけり

古郷雪

ふるまゝにあれにしあともしら雪の花にそかくす志賀の古郷

隱名戀

數ならぬ憂身をかへりみるからにいひよる途も名をつゝむ哉

寄鏡戀十二月十三日　會所失念

物おもふ身のおとろへはいとゝ猶ますみの鏡かけもはつかし

隱磨浦十二月廿四日　公宴御月次

須磨の浦や秋はもしほの煙さへおなしなかめになひくゆふ霧

鳴海浦同

かけし契りいかにせよとか人心よそになるみの浦のあた波

慶長十八年正月十九日公宴御會始

鶯是萬春友

よろつ代の春にも君や馴なれん竹の臺のうくひすのこゑ

落花二月廿四日 公宴御月次

ふもと河みなきる水にちりゆけは音にもたてる花のしらなみ

草庵花同

吹ぬへき花の爲とやふる雨もあまりさひしき草のいほ哉

花たちはなに五月廿四日公宴御月次

風さそふ花たちはなに郭公なかなく方や猶にほふらん

神代のとも世出題に如此

をしほ山神世のともしらゆふのかゝる松をし誰かうへけん

うちもねす同

物思ふ憂身にしあれはうちもねす月にはいとゝなかめ明しつ

氷室六月於飛鳥井懐帋

御狩せし野へのおきなのおしへより今も絶せすひむろもろこ

籬草

花をおもみ籬の外もなひきそへはおのれしめゆふ露の草〳〵

霞春衣同當座

白妙の雪はのこらぬ香久山や霞の衣たちかさぬらん

時鳥幽同

一こゑはそれかあらぬかうたゝねの夢ちもたとる山郭公

織女雲爲衣七月七日 公宴

かさねてはまれにあふよも七夕の雲の衣のうらみ忘れん

秋風七月廿四日 公宴御月次

すゝしさの色はみえねとゆふ暮は松より出る秋風のこゑ

秋草同

程なきにうつし植てし種〳〵の花はひろこるませの內かな

秋戀同

玉つさをいさをつてん詠めやるそなたの空にわたる雁かね

社頭月八月廿四日 禁中御月次

神山やしらゆふかくる木間より殊さらすめる秋のよの月

月前蛬同

こゝをせに鳴にけらしなきり〳〵すさかのゝ月の秋のゆふ暮

小倉山八月十五日於飛鳥井懐帋

小倉山みれはかさなるゆふ暮にへたてやはする棹鹿のこゑ

若浦同

いかにしてかきはあつめんとのはの玉藻よせてよわかの浦波

橋月同當座

かつらきや久米路の橋のとたえさへ影すみわたる秋のよの月

湖月同

こよひしもいつくはあれとさゝなみや鳰てる浦の有明の月

對菊契秋九月九日 公宴詠進

仙人のすみ家ならねと移しうへて千世の秋みん白菊のはな

瀧紅葉九月廿四日 公宴御月次

秋かせの音羽の瀧の白糸もいろにみたれてちれるもみちは

寄海戀
いかにせは忍ふ心の奥の海の深きうらみの有としられん
依雪待人 霜月廿四日　公宴御月次
柴の戸はとはれぬものを夫なから雪にしうとき人をしそ思ふ
夜思山雪 同
さよあらし吹すさふより白雲のふるの山へやなをつもるらん
松風入琴 同
色〱にしらふる聲そきゝまかふとちにかよふ軒の松かせ
述懐 會所失念但石清水法樂中院　賦
山里にかくれすむてふ人さへも浮世の外の物とやはおもふ
慶長十九年正月十九日 公宴御會始
幸逢泰平代
すなほなる御代の春をし仰きつゝ人の國まてなひき來にけり
柳糸新綠 近衛殿御會始但年號しれす懐紙
秋は菊に心うつせし心をも染かへてみん青柳のいと
夕眺望 同御當坐
志賀のうらやかすむ波間の詠こそ秋は有とも春の夕くれ
故郷梅 二月廿四日　公宴御月次
津の國の難波の春の昔にもかはらぬ色や深き梅かゝ
岡新樹 同
かたをかの松になみ木の花ちれは絶間もあらぬ若葉之けり

月照網代 聖廟御法樂 二月廿五日　公宴
川霧のきゆる方より影すみて月に數そふ瀨々の網木〔代脱歟〕
八重櫻 三月廿四日　公宴御月次
みよしのやみな白雲のやへ櫻花の匂ひも奥やふかけん
躑躅紅
をかのへは入日の後もくれなゐに夕を殘す岩つゝしかな
名所浦 同
もしほたれわひにし人そ思ひ出る須磨の浦わの蜑のしわさに
風前花 三月廿五日於飛鳥井當座
雲とみしも峯のあらしに散はなは麓の里にふれる白雲
殘菊 四月廿四　公宴御月次
君かためうつし植つる種なれは秋のかきりも白菊の花
瀧水 同
糸すしの絶間もみえぬ水上に誰かはさらす布引の瀧
五月雨 五月廿四日　公宴御月次
須磨の蜑のしほたれ衣中〱にほすまあるらし五月雨のころ
庭夏草 同
池水のみとりそふまて生そふやかけをふかむる庭の夏草
寄松戀
葉かへせぬまつのたくひか人心つなしつくれる中とおもへは
菖蒲 六月廿四日　公宴御月次

ひきてこそ淺澤ぬまのあやめ草深きねさしの程もしらるゝ

霜同

冬くさもそれとわかれす片岡のあしたの霜の花のなかめに

寄鳥戀六月廿五日　聖廟御法樂公宴

かりにたにとはぬ恨はふか草の野への鶉の音にたてゝなく

七夕迎夜七月七日　公宴

偽いおる世にいかて七夕のこよひたかへす契りきぬらん

殘暑七月廿四日　公宴御月次

玉簾ひまやもとめぬ袂にはふるゝともなき秋の初かせ

草花同

往と來とまねくまに〳〵秋のゝの道まとはせる花薄哉

逢戀同

とにかくにひるをしらて朽なまし逢よ嬉敷袖もなみたに

蚊遣火八月廿四日　公宴御月次

我さへもけふる庵りは立出て又ましりきくよはの蚊のこゑ

落葉殘秋

山川のせゝになかるゝ紅葉はの色にや秋をせきとゝむらん

紅葉一樹九月廿四　公宴御月次

染出す此一もとに四方の山の木々のもみちの色もみせけり

鐘聲送秋同

くれて行秋のとまりのいつくまて道しるへする入相の聲

遊山催興同

みしはなの面影のこす白雲は分過かたき志賀の山越

菊延齡九月九日　公宴當座

君かため手折て秋の白菊をかさせは千世の種と社なれ

霜菊有餘馨九月十日　仙洞にて御當座

花もなを咲そひけらしをく霜の色よりあまる菊のにほひに

葛風十月　公宴御月次

行人もなき岡のへにはふ葛のうら吹かへす風のさひしさ

祈戀

よの人の心にかなふ誓あれは我いのるをもうけつらめやは

慶長廿正月三日以飛鳥井

鶯是萬春友此道にて先年公宴當座始進詠仕候節に題同前たり失念

篠竹の大宮人は萬代の春もやきかんうくひすのこゑ

柳先花綠公宴御會始　十九日

さかぬ間は花の木すゑも一木かとみとりになひく春の柳か

草漸青二月廿四日　公宴御月次短尺

野をかけて生そひにけり春雨のふるの山への草の綠は

樵歌入山同

山ひこも友かとそおもふ谷ふかく分る木こりのうたふ聲して

氷留水聲聖廟御法樂　公宴

岩かねの波も氷のとちそひて名のみ音羽の瀧川の水

雨夜思花 三月廿四日 懐帋 公宴御月次

よるの雨に目をさましつゝ思ひやる心の花も咲そふるまで

霧中見花 同

おもひきや旅に日をへて夢にしもうつの山への花をみんとは

無風花散 同

いとひつる風もおやなしをのつからうつろふ花は散行ものを

岸夏草 四月廿四日 禁中御月次

松たてるかけ行道はあつさをも忘草生る住吉のきし

初秋虫 同

おとろくは更に萩吹風ならて虫の鳴音に秋のはしめを

樹陰蟬 公宴御月次

いかてかは時雨にこゑのかよふらん木葉は蟬のそめぬ物から

納涼月 同

池水のほとりは夏も白波のよせくるかけやたゝ秋の月

草庵雨 同

すきまもる雫にしるし草の中は降音きかぬよるの雨にも

遠村紅葉 禁中御月次

ゆふ日かけ残るとみしは山本の里のみたゝす紅葉えけり

寄名所嶺戀

白雲のたつたの嶺にあられともへたてゝ稀にみるはかなしき

夏野 壬六月 公宴御月次

暑き日はたちとよる〔依歟〕へき方もなし野中の水もかれ／＼にして

冬夜 同

かされてもさむさ覺る冬のよに麻の衣のうすきをそおもふ

寄山戀 公宴 聖廟御法楽

心たにかよはゝたのめ人めのみ忍ふの山に住身なりとも

元和元年七月廿四日 公宴御月次

深更荻

更行や軒はの松のひゝきにもいや高くなる荻の上風

淺茅露 同〔霧歟〕

なくまゝに色そひ行は白露も名のみえけり庭の淺ちふ

不言戀

わりなくもしゐて涙のこほるゝやいはて絶んと思ひとりても

夕立 同八月廿四 公宴御月次

なる神の音するかたにさそはれて晴るれは晴るゝ夕たちの雲

籬菊

花さけは籬のほかもなきあまる露さへにほふ秋のしらきく

翫宮庭菊 九月九日 公宴詠進

うつしうへて幾千とせをも白菊は老せぬ色と君やかそへん

暮秋霜 公宴御月次

秋もはや末野のをさゝ村／＼にかれ立色や霜結ふらん

暮秋鐘 同

誰かまたあはれにきくもとかむらん秋の限りの入相のかね

暮秋海 同

くれて行秋の名殘もなみの上に何をかたみのうらとなかめん

常盤木雪 公宴御月次

をたまきに立ましりてもわきて積る雪に常盤の影はしるしも

雪中鷹狩 同

狩人の分る跡さへ散しけは雪社たとる鳥のをち草

關路曉雪 同

白雪に明行物をあふ坂の關にはよはを殘す鳥の音

元和二年正月十九日 公宴御會始

霞添山色

目に近き山のなかめはなれなから遠きや霞む色をなすらん

曉花 二月廿五日 公宴 聖廟御法樂

白妙のはなの高峯は曉の雲の外なる雲そたなひく

初秋風 六月廿四 短尺 公宴御月次

手にならす扇ならても朝な〳〵たもと涼しき秋のはつかせ

寄海戀 同

みるめたにかるものならは片敷の床の海をもいとはましやは

船中月 六月二十五日 聖廟御法樂 公宴詠進

梶まくら敷津の浦の波の音も月も夢みぬすさみならすや

牛女年々渡 七月七日 詠進 公宴

七夕やくちぬ契りにいくとせもたえす渡せる天の岩船

風告秋 七月廿四 懐紙 公宴御月次

秋の色はまた夫としもいたられと先しる物は荻の上風

行路萩 同

咲ころは今行野への道さへもあまたにみゆる秋萩の花

寄河戀 同

いかにせん音なし河のたくひともなかるゝ袖の涙せく身は

瀬月 八月廿四日 公宴御月次

行水のくまこそなけれ月影も清瀧川のせゝになかれて

月前夢 同

目離せすむかひし月も更行やおほえす結ふ手枕の夢

九月九日 重陽 公宴

君かためけふくみはやす諸人も千とせやへなん菊のさかつき

擣衣 九月廿四 懐紙 禁中御月次

閨の戸をもりきて寒き月影に猶白妙のころもうつ也

紅葉 同

なへてふる時雨もわきて染なすや色そやしほの岡のもみちは

海路 同

須磨のうらや關吹こゆる鹽かせに行衞さためぬ舟そたゆたふ

晩夏 十月 公宴御月次詠進

ならの葉の涼しき陰はよきつゝもよそにや夏のくれんとす覽

河
水はたゝまさらし物をよひ〳〵に雨よりけなる瀬々の川音
望山雪十一月　公宴　御月次詠進
よこ雲はまた夫なからしらみ行や軒はの山の雪のあけほの
雪如花
にほひをも咲ならひなはいかならん花よりけなる木々の白雪
寄雪戀
とひこかし閨の戸ほそをとつるまて雪の積るも恨ならすや
元和三年正月三日於飛鳥井中將
梅花久薫
行末の春に盡せし色もかも咲そふ梅の花のわか木は
初春祝正月十九日　於宴御會始
くつ人のまつ吹そむる笛竹の代々のためしを君はしらすや
鶴伴仙齡正月廿日於近衞殿御會始
なれつゝも霞の洞に幾千代かかさねそきぬる鶴の毛衣
善詰君試筆答不二庵和尚依所望よみ侍る之正月二
十五日
おもへなを年の始にこゝろむる筆を友としまなふ終りを
祈戀二月二日於　仙洞御當坐
思ひきやうけ引へしと祈つる神もつれなき心ありとは
神樂同二月十一日於　公宴御當坐
そのかみの跡をしたひて月弓をうたへる聲は宮もとゝろに
寄渡戀同
我袖のなみたの雨の苦敷は佐野ゝ渡りにかよふ心か
見戀同二月廿四日　公宴御月次
末終に床の海とやなりなましみるめ計の袖のなみたに
戀筆聖廟御法樂　公宴二月廿五日
あはれなとなけの情の一筆にふかき恨のかすはそふらん
船中月同四月十一日　公宴御當坐
須磨のうらやおもはぬ方の月そみる波ゝ〔なこ〕本に舟もよせきて
擣衣卯月廿四　禁中御月次
深草の里の名にゝく露霜をはらひわひてや衣うつらん
ものおもふ床ならねとも千度うつ砧の音にいやはねらるゝ
余分点も御合點　仙洞へ得御意也
見花五月十一日　公宴御當坐
春の日のなかきといひしゝ草は花みぬ人の心なるらん
公宴御當坐とをり題にておの〳〵五首つゝよみ侍
る也たゝし御製四首此うち〔マヽ〕、點取のよし也御人數
正親町三條中納言四辻宰相中將點二首中御門宰相一首
阿野宰相中將二首　中院宰相中將三首　時直二首　嗣長
朝臣公福一首親顯一首　等之點者烏丸大納言光廣卿也
夏河
飛鳥河きのふの瀬々の波たにもけふたちかはる夏はしるしも

夏木
しけりてはもとのかえならぬあたりまて葉ひろ柏の木陰えけり（しけりあふ心は無不足候）
夏鳥
一こゑをきゝつとかたる人傳に心いらるゝほとゝきす哉
夏衣
いつしかもなれにならひて蟬の羽の薄き衣は夏の日もなし
夏戀
夏のよも人まつ程の久しさをあふ手枕に其儘も哉
照射五月廿四日　公宴御月次當坐　懐帋
星とのみみえつる山のともしをはしらてや鹿のやすく臥らん
恨戀
せめてさはつもる我身を恨をもしりてとかむるこゝろとも哉
旅同
むすひしは同し都の空なるを覺て旅ねの夢そかなしき
袖五月雨六月十八日　公宴御當坐
引人もいかてあらなん名にしおふ朽木の袖の五月雨のころ
松間月同六月廿四日　公宴御月次
月はなを隈こそなけれ松風の聲すみわたる天の橋立
石間氷六月廿五日　聖廟御法樂　公宴
さゝれ石も波のよせきて其儘に氷る汀はいはほとそなる
七夕絲七月七日　公宴詠進
結ひ置し契りはこよひ七夕の手引のいとのめくりあふらん
萩露七月八日　公宴御當坐
白菅の眞野とはいかに咲色は千種にみゆる萩のうへの露
秋　宮城野七月廿四日　公宴御月次當坐　懐帋
宮城野の露に色めく秋萩はたしかしからむ花にそ有ける
秋　常盤森同
葉かへせぬときはの森の松か枝は風にや秋の色をしるらん
雜　相坂關同
おさまりて戸さゝぬ御代にあふ坂の關こそ山の名たてえけれ
八月廿六日崩御　年月めしつかはれし君崩御なりしをまとの夢とも
おもほえすわすれてはうつゝのやうに侍りけれは
忘れてはうつゝとむかふ夢かとも思ひさためぬうつし繪の前
野の御供に鴈のなくをきゝて
なく鴈のなみたそへつや袖のつゆ
夕鐘十二月廿二日飛鳥井故大納言弟三回忌に大納言勧をかれし題廿五首有之におの／＼うたよみ侍るなり
さらにとふ昔にうつるけふの日も入相の鐘の聲そかなしき
元和四年正月十三日公宴御會始閣詠のうちなれは式日に無之
池水久澄
年經てもくもらぬ池のかゝみ社あきらけきよのためしえけれ
梅萬春友同廿日於近衛殿御會始
萬代も袖にふれなんもとつ香のもとの心にさける梅かゝ

祝言二月廿二　水無瀬御法楽　公宴

雲もなみたちかさなりて宮はしらふとしくみゆる水無瀬山哉

炭竈二月廿五　聖廟御法楽

目にみえぬ風のたくひか音にのみきくにそまよふ心はかなき

織女惜別七月七日　公宴詠進

七夕の袖のみかさもまさるらん天の川なみかへるあしたは

竹不改色詠弓の御衣あらためおはしましての後御会始

移しうへて千世萬代とみそのふの竹は葉かへぬ君かためしか

終日翫菊九月九日　公宴詠進

かさしつゝくらせる袖もおひにあふ九かされのしらきくの花

忍戀公宴御會

人やりの道ならぬ道にいり物〔マヽ〕てあはれ忍ふの山の名もうし

元日侍元和五年正月三日に有之　和歌所同詠鶴宿

松梅和歌　　少納言時直

松かえもたのか
齢の友とてやなれて
すむなるひなつる
の[□]ふ〔己題〕

如此清書。同字親ト參會ノ眈ハ加書之。

春日同詠花有喜色同十九日　公宴御會始

和歌　　少納言平時直

たのつからかめの
尾田はよろつ代な木の
めにふくむはなのい。
ろかな

松久友同廿日　近衛殿御會始

よろつ代の友としきくや氏人のみかさの山の松風のこゑ

春色浮水二月六日　懐帋　公宴　御月次當座

志賀のうらや氷りし跡となみの色のかすみにけらし春の袁に

祝言二月廿五日　公宴　聖廟御法楽

みつかきの久しき神のしるしたもみさほの松の氣色にそしる

元日元和五試筆

さほ姫の姿なるらし音もけさなこやかに吹春の初かせ

今朝立や四方にこよなき春霞

殘花公宴御月次三月六日短尺

待程の心盡しはむかしにて遲きたはなのうへにしそおもふ

水鳥五月六日公宴御月次短尺四月二八不參

冬されは池のみ草も色なきに色社のこれたをしの一つれ

寄道祝五月三日薩摩守於　八條宮興行

ちかひ[□]神の恵のみちよりも豐あし原の國そさかふる

樹陰納涼 六月六日 公宴にて會紙
枝も葉もおほうち山の木の下はよそにしられぬ秋かせそ吹

螢 聖廟御法樂廿五日
蜑のたくほかけとみれては難波えの芦の葉分にとふ螢かな

月前鐘 於公宴 月日失念
うら波のよる〳〵ちかしかねの音も清見か崎の月にいさめて

逢戀 於公宴 月日失念
心よりこゝろの奥の果なきもおひそめてそおもひしらるゝ

鹽屋煙 同 同
やくしほのけふりの色に海はすこし遠き詠めを須磨の浦人

[此間闕]
木々の葉はつくしても久さよ時雨きゝやはわきし松風のこゑ

慶長十九年十一月廿四日前に書おとし加之

時雨驚夢 [illegible] 仙洞へ得
夢さそふ軒の夜間のさよ時雨もらぬ音にも袖ぬらせとや

氷間細流 同
河なみも廣き瀬々をはわきてけりほそき流れや先氷るらん 右書なし
道のへになかるゝ水を夏は手に冬はこほりに結ひかへけり

寄名所戀 同一昧にて[illegible]し清書
ふしのねにおちぬ我身の思ひにも胸の煙や空にみえけん

元和六年正月十九日

鶯告春 公宴御會始
雪はまたふるえの梅にうつりきてはつ鶯の春をしらする

竹契齡 正月廿日於近衛殿但此歌は新宅にて御會始歟失念
萬代も共に絕ぬへし千尋ある竹をみきりになれて住身は

寄月戀 六月 聖廟御法樂
契りても人はとひこぬ夜床寢に面なれてうき月のさむしろ

七夕地儀 七月七日於公宴
星合のまれなる中の思ひをもふしのけふりの立にしれとや

早涼知穐 七月廿四日於公宴懷紙
秋きぬとゆふへの月のかけもなを三池の波のよせてすゝしき

萩半綻 八月於禁裏
なへておく露もいかてか秋萩の花さきわくる色にみたるゝ

菊香隨風 公宴詠進 九月九日
咲色はまかきのうちにわかちても空さへにほふ菊のうは風

時雨 月日失念 公宴御當座
ふりめくる跡さへしはし山川の瀬々は時雨の音そ殘れる

千鳥
沖津かせ吹かや波もこゆるきのいそへはなれて千鳥鳴也

野旅
行暮し宿はなくしてありま山ゐなの丶篠の一よたにうき

元和七年正月一日

試筆

合坂の關より年のこえきぬとゆふつけとりの聲も長閑き

鶯の音も初そらのあした哉

同鶯爭囀 二月十九日 [illegible]

よろつ代も關みん君か心指龜のすむなる池のかゝみに

寄若葉祝 [illegible]

氏人の數そへはなを春日野の雪間はおほき若葉をそ摘

擣衣 二月廿五日 [illegible]

手も須磨にうつ音すゝ鏡人の波かけ衣うら寒きよは

椿葉契久 [illegible]

霜にさへ葉かへぬ色のたまつはき君か八千世は花にふくみて

忍涙戀 [illegible]

ふして思ひ起くそ歎くわか袖につゝみかねたる涙もろさを

郭公 六月十六日 [illegible]

るいもなしや有明の月の哀にも一聲つくる山ほとゝきす

花滿山 六月廿五日 [illegible]

雲の色にさえかさなりて高間山よそにも花のさかりみよとや

織女情曉 七月七日 公宴續歌

神代をもこよひやおもふ星合の空明やすき天の岩戸に

菊花滿庭 九月九日 公宴續歌

さくかけは星のはやしとみる菊も香に顯はるゝ雲の上かな

竹 [illegible]七十の賀宴 十二月廿六日

千世を竹の影に數へん十つゝも七のかしこきたくひと思へは

元和八年正月一日

試筆

めくみある君か心をくみてしれとゝよみき給ふ千世の初春

[illegible]

色そひとつけふはむ月に六の花

毎山有春 公宴御會始 正月十九日

山〳〵の春のけしきはおかしけにみする霞のたゝすまひかな

松有佳色 近衛殿[illegible]會始 廿日

いつまてもいつはの松の緑なるかけをみえ〔マヽ〕かに年はつまゝし

郭公頻 二月[illegible]

時鳥名のりもしけき曉や明つけ鳥の聲をかりても

海近聞鶯 [illegible]二月二日

おらせしの梅になれきく鶯の聲は花のみかきもりなれ

寄虫戀 [illegible]二月廿二日

われからと物を思へは音にそなく藻に住虫のたくひはかなや

野徑薄 公宴[illegible]廿五日

わけ入らん道はしるしな秋の野はまねく尾花の袖にひかれて

月

影やなをみかきそまさる玉敷の庭にくまなき秋のよの月

述懷 同 同

我身さへわかまゝならぬ心もてなにかは世をも捨んとすらん

續群書類從卷第四百三十九

和歌部七十四

藤原爲頼朝臣集

あつまよふ山の道近夕まくれおりゐる雲そ知へなるらし

十一月廿八日前大納言なとして酒まいりしに

人をこそあらましかはと嘆きしか我かは誰かおもひいつへき

とおもひたまへるに今日なんすこしたのもしう侍る

別れてはまたもあひ見んよはひにてなとて歎きし昔ともかな

いとたのもしかりし句なとそ人しれすおもひたまふる

おほかたの空のつゆかは君かため萬代かけておけるきくなや

たふさにけかるのさま

ことゝはゝ傳そとかもきくのはな昔うへてしきくのもとゝは〔つくイ〕

あひて後のわかれ

みしほとにきえなましかは別れての後さへ物は思はさらまし

おりつれは心もけかるもとなから今のほとけに花たてまつる

つくろうためつらしくやまわ〔さきイ〕

珍しくやまゐにつけんあふひ草待かけてのみ年はへにけり

かへし

ゆきすりのやまゐの衣珍しく獨〔いつはイ〕ならすは見えすそあらまし

きよきをせさすとて女房君のもとにものし給とこ

ろあめもろときゝて

曇なき君かみむろの空はれてうろのやとりないかゝみるらん

かへし

うろなれと君かさやけきやとのうちに

たいしらす

ちりぬとてなけきし花は咲にけり戀しき人そはるけかりける

春はなをこぬ人またし花をのみ心のとかにみてをくらさん
中務のみやの御
花もみなちりなん後はわか宿に何につけてかひとを見る(まつイ)へき
なか〳〵にあたなる花はちりぬとも松を頼まぬ人のあらめや
また宮
櫻花まつによそへておるひとゝ千とせの春そ見るへかりける
月の歌少將にかはりて
秋かせに夜やふけぬらん大空の月のかつらのなびくかけ見ゆ
ひとりゐて月をなかむる秋のよはなにをなかは思ひのこさん
見る人をかそへ盡していつまてか歎くは君とふれはなりけり
たいしらす
人のよをあるにまかせて花をのみおしむ心やかつはかなしき(くるイ)
人のよはへんにまかせて有ぬへし花をはえこそ思ひかへされ(はなれイ)
思河
ひせにくたるいもうとのもとに
古さとの草葉をまたもむすふへきはるけきみちは命ともかな
かへし
古さとにむすひし草の契あればちとせの春はたれもたのまん
長德二年十月廿二日花山院の東宮におはしましゝ
時殿上にて右中辨の五節たてまつりしときなにこ
とにかといひしかはなにもこゝならんものをたて
まつらんといひしに忝りくしもとめてかせとあり
しかはかしたりし後かの辨もなくなりくしもたり
し人もなくなりてわすれてやみにしをことし五節
たてまつるに何事をかせんと右京大夫のゝたまふ
にかのくしやあるときたのかたにあないせらるゝ
に本のくしのいたされたれはいとあはれにて
かきなてゝさしけん櫛は神さひてあるにつたへし人のなき哉
小野宮の御忌日に法住寺にまいるとておなしほと
の人のおほくまいりしを思ひいてゝ
世の中にあらましかはと思ふ人なきか多くもなりにけるかな
小おほきみこれをきゝて
あるはなくなきは數そふ世中に哀いつまていきんとすらん
常ならぬよはうき身こそ悲しけれ其數にたにいらすと思へは
なつのはしめつかたいへのもえきをみて
老にけり庭のもえきのこくらきにそこはかとなき涙とまらて
つのかみなりしときはりまのかみむこにとりてい
への庭ところ〳〵すのかたになしたるにあめのふ
るころうみにしたり
うちつけに播磨潟にもにたる哉いかなるあまかよひ通ふらん
住よしと見えこそわたれうら遠みいかゝ有へきはりま潟まて
正月十三日ひとひまいりたまへりしのち左兵衛督
の宮にまいらせたまふ

あかさりし君かにほひの戀しさに梅の花をそけさはおりつる
みや
今もとる袖にうつせるうつりかは君か折けるにほひなりけり
いへあるし
こひしきにはなをおりつゝなくさめは驚きゐん枝ものこらし
このころ今上の春宮なとに人〳〵まいりつかうま
つるときゝて
身をよせん方もおもへはなかりけり戀を厭はん人しなければ
いたう夜ふけて車のをとのしければ
さ夜ふけていつち車のつきならん山のへさしていろにや有覽
かやり火にやあらんおりすきたるけふりのたちけ
れは
なつはてゝ秋まてくゆるかやり火は昔いかなるとかありけん
越前へくたるにこうちきのたもとに
なつころもうすき袂をたのむかないのる心のかくれなければ
人のとをきところへゆくはゝにかはりて
人となるほとは命そおしかりしけふはわかれそ悲しかりける
正月ついたちころいろある人の御もとにせんよう殿
よりあゆのかたをつくりてありければ
虫にたにあさむかれしと思ふ身をいかなるあゆのかはる成覽
むまこのをうなにてむまれたるをきゝて
きさきかれもし然らすはよき國のわかき受領の妻かれかもし〔ならイ〕
この人からものゝつかひにゆきたるころ月をみて
思ふひとあるかたへゆく久方の月のかつらにふみやつけまし
おなし人くたりしころ
いとゝしく老はそふとも行かへるひからはしはし短からなん
いまの左大辨の御子のいかにおほわりこのふたに
いちひめのかたちなとかけるところに
市姫の神のいかきのいかなれやあきなひ物にちよをつむらん
ものおもひにをとろへにけるかほをかゝみのかけ
に見はへりて
なましゐにとまれるかほをけさみれは鏡やつらき涙とまらす
はらからのみちのくのかみなくなりてのころきた
のかたのなまみるをこせたりしに
磯におふるみるめにつけて鹽かまのうら淋しくも思ほゆる哉
藏人なるからものゝつかひにくたる殿上人の餞に
かはりてとしかへりてはからふりたまはるへかり
けれはなるへし
まちゐるもよの常なれや中〳〵に年のかへらんをゝしそ思ふ
わかゝりしおりにつれに女のもとよりかへされて
雁の子もすもりはありといふめるをなとて夜とに我かへる覽
いなりにまうてあひたりける女のもとに文やりけ

るをほかさまになれりときゝて
わかためはいなりの神もなかりけり人の上とは祈らさりしを
はかりてあはさりける女によひ〳〵に
しら玉か涙かなにそよひ〳〵にはかるあたりの袖にこほるゝ
くりしまの汐やひろらんこの冬は見慕ぬもの〳〵（みえぬもの〳〵イ）めつらしき哉
しれる人なかゝはへたてゝありけるに七月七日の
よる
たなはたのくもちはしらすなかゝはをはやうちわたれ鵲の橋
加階したりけるかたのさはにしなろに山ふきのお
ほうつれりけるを東のさとにてや
山吹のさけるみきはをみわたせはそこゝそ花のさかり之けれ
きみの御ふくなりける所のたてしとみにさうふの
ねをかけたりければ
いにしへは袂にかけしあやめ草けふはなかねを何によすらん
これは三條との
草まくらしのふるたびのから衣露にたもとそあらはれぬへき
かへりに
色ふかき袂のほとはきてそ見るいとゝ都のなかめらるゝに
五月のすゑにさくらのもみちたるにつけて
わか宿の木末にのみは秋こしをいかにもみつる夏のなかはに（そイ）
かへし
うちつけにすゝしくもあるか紅葉みる里にはなかす郭公さへ
（頭書缺）にる人の心にいたるこゝろそとなかくそ頼むたえすもあら南
丹波の國府にて三月のゆふやみに
ほつかはにまかふ汀のあやめ草月ゝつよひはみしかゝらなん
故あはたの右大臣との〻はかなくなりたまひての
年の十月に
神な月いつもしくれは悲しきをこゝゐの杜はいかゝみるらん
はきに露のかゝりてたまかとみゆるをおりにやり
てみるにみなきえてなければ
朝露をひたけてみればあともなし萩のうはゝに物やとはまし
ものおもへる女にかはりて
しら露のきゆるをみてもうら山しはきの下葉に宿やからまし
人にかはりておとこのたえたるころはきを見て
枯はつる冬もありけりあき萩の下葉の色をなに思ひけん
こなくなりてなきれのゆめさめてうつゝとおほえ
つるとて前のせんさいをみて
なてしこを夢に見てこそいつしかとあけて空しきとこ夏の花
屏風繪にぬす人たゝかひたるかた書たるかいつれ
かたゝの人とも見えぬに
ぬす人の立田の山にいりにけり同しかさしの名にやけかれん
いもうとの老たるかもとよりとしころの人なくな

りたるをとひたるに
いけらしと厭ふにしなぬ老の身を惜むにきゆる露そともかな
としころあひそひたる人なくなりたるころ中つか
さの宮のはゝの女御の御もとより
この代にてちきりしををあらためて蓮の上の露とむすはん
右大臣とのゝ女房さとへいてんとてくるまかるか
すとて
またしらぬこひの山路にまとふ哉里へとさそふ人もあらなん
かへし
はかなくて消にし露を蓮葉に君しむすはゝうたかひもなし
おなしころかのゝ宮の中納言きたのかたになくれ
てのたまへる
よそなれとおなし心そかよふへき誰も思ひのふたつならねは
かへし
ひとりにもあらぬ思ひはなき人もたひの空にや悲しかるらん
またせんようてんの民部のめのとのもとよりおな
しころ
君はいかにね覺すらめや思ひやる我たによをは思ひあかすな（はイ）
かへし
ねさめとはまとろむほとのあらはこそうきよを夢と見る計之
むまこのいたゝきもちゐをこせたれは

年をへて數増るへきさゝれ石のいはほとならん程をしそ思ふ
しれる人つくしのかたにくたるほとあふきにふれ
のかた書たるをこれはうちのきみにとてとふらふ
人のありしかは
思ふ人かすふか浦のきみか爲とみくさつめる舟にやはあらぬ
まきといふ人を心にもあらてわかれたりしころつ
のくにへくたりしにつりふれのとものあそひしを
いつこそとゝひしかはまきのさとゝいひしかは
なにしおはゝいさ舟とめんまきの里戀つる人もありといふ之
はやうけさうしける女つのくになかたのもりとい
ふ所にありときゝてやりける
命たになかたの杜のなかりせはたよりに君かやとを見ましや
故院の歌合にくさむらのむしをたつぬといふ題を
おほつかないつれなるらん虫のねを尋ねは草の露やみたれん
水上秋月
みつのうへに光さやけき秋の月萬代までのかゝみなるへし
岸のほとりの秋花
時しるき花そみたれてにほふなるなみの心やかけておるらん
おものもちの人の物とるを見て
獨してあまた恨むるおものもちもたるわたをそ尋ぬへらなる
一條のおとゝかくれたまひての秋いつれの夏にか

もゝその丶殿をはしましゝおりをおもひいてゝあはれにきこえしに

おほかたの秋とみるたに花すゝきうへし君ゆへ袖はつゆけき

とのゝ御返し

うへをきしおはなにかゝる白露の消ぬさきにそ先まれかまし

つかさめしにのそむとありけるころさぬきのすけこれすけか馬をかりけれはすけのかさたまはらはとらせんと思ふ馬なりとてかしたりけるをかへすとて

心ありてかひける駒のいはゝしにあやなくのりて我も頼もし

三條中納言つのくにゝらうしたまふところに御ともにまてゝはまへちかき所にせんさいなとおかしきにかれたるすゝきのうへより見えけれは

濱風になひくおはなは朝ほらけまかきによする浪かとそ見る

みちのくにのかみのおくりてかへるに女車あふさかのせきにてゆきあひたりむかし心かけたりける人にきゝなしてやる

いにしへは越かたかりし逢坂をいつちとかへるなみそ悲しき

この女さるやうありて伊勢にかよふにそありけるきゝしともあれとひかとにやとてとそ

〔右藤原爲頼朝臣集以圖書寮本校合〕

大江匡衡朝臣集

あせちの大納言のさふらひにてほとゝきすをまつ心を人々よみしに

卯花のかきねならても時鳥心のうちのまつになかなん

女のもとにまかりたりけるにあつま(ことイ)をさして出して侍りけれは

あふ坂の關のあなたもまたみれはあつまのこともしられさり鳧

あせちの大納言の御ものいみにこもりて侍けるに御さふらひのものともさうゝしかりて人にさけをこひたりけるにせにふたつらぬきをつけておこせたるに菊の花をつけていかにといはましといひ侍けるに

あやしくも一もと菊に露玉のふたつらぬきに成にけるかな

八月十五夜

雲わけて秋の半をてらせともこよひの空にみてる月哉

はなか(むし歟)うしを人よみしに

埋木はなかむしはむといふなれはふるのはし／＼心してふめ

五月四日女に

うらやまし明日をまつめる菖蒲草我身の上はいつにか有けん（覧イ）

又女に

あけたてはあさまの山のもえ殘りもゆれはよさ（とイ）の浦の戀しき

たひ〱返事をせぬ女に

見やしてしみすや戒にしおほつかな恨みつとたに答やはせぬ

閑院の大將殿の女房のさうしよりまねきけるによりたりけれは物もいはていまはおはせといひけれは

よふやなそかへすや何のすき物そその故ありやなしや答へよ

綸に玉の非といふ其名所かけるを

望月のうつれるほとをみる人やいひはしめけむ玉の非の水

とし比けさむする人に十二月はかりに

まつ程に年の末にもなりにけりいかなる涙かこえんとすらん

さかなき人思かけたりときく人に

あら浪の立よらぬまに住吉（の江イ）のきしの松かせいかにしてこん（みイ）

返し

住の江の岸の村まつかけ遠み浪こゆるせ（よイ）を人はみきやは

山寺にこもりたる女のすゝもたるをみて

戀侘く忍ひにおつる泪こそ手につらぬける玉とみえけれ

いみしうつれなき女に秋ふかきころ

嵐ふくこゝゐの杜のした草はしつくをとほみかくれぬとしれ

さていとひさしくおともせさりけれは女のもとよりいもせの契そしたるへき

契りこしいもせの山の中なれとなとか吉野の水も絕ぬる

とあるかへし

水もらぬよし野の山の中なれとたえぬいもせは瀧をこそしれ（みイ）

七月八日女に

七夕の朝の床は天川なみたはかくやけさしくるらん

けさうして久しく成ける女に

ふるめかすとはなけれとも石上袖は野中のこゝちこそすれ

女のおやもゆるさすときゝて

はゝそこそ秋の色にもかはるらめこならの露はしはし廻らん

又女にきゝやるとて

かた野なるなきの雉のひとひにも人つかひにはならしとや思

月比いとつらくてのみ女を思ひたえなむとおもひて

たえぬへき命の玉のいきのをにかゝりて猶もおもほゆるかな

はつせ（の歟）にまうてたる（ちイ）を聞て

つまこひに更にひとりの渡りけむいつかともこそ思やらるれ

ふなをやるとて

さまかへて身をこゝろみむ飛鳥河戀ちにゑゝるふな人そこは

女のもとにかたたかへにいきたりけるにそのよい

かなるとかありけん朝に
夜やとりの萩の原の女郎花うつろかたにや人のとかめん
十月の月のあかきに女とものかたりしてゐたるま
たくもらすなから時雨のあらゝかにしたれは女
月影をかくなからにてしくるれは落る紅葉の色にぬる（をとかそきくイ）袖
といひ侍る返事に
月ももり時雨もそゝく宿もせになにゝか袖をまつぬらしつる
女に物いひて朝に
けふのうちに二たひ物を思かなとく明ぬるとおそく暮ると
大やけ所にて人をかたらひて
かたかりし岩はにさせる松のはに（うへイ）はかなき露な結ひあはせ（せかイ）そ
兵衛佐なる人のおもひかけたるをうたかひて
柏木のけしきの森に成にけりなけきを今はいつちやらまし
返し
かしは木やならの葉いかに成とても森（かイ）のけしきの秋深からし
女のいたく物思ひあなつりたるに
塵ときくはかりにかゝる露の身のかろくおほゆる罪おもき哉
なをちひきのいしにてなといへる
まつとせし宿に石をは積をきて更にちひきに身をはなせとや
といへる返し
まつ山の石はうこかぬけしきにてめくりかへらん（おもひかくらんイ）浪にこす哉

うらむる事ありてけふよりは聞えしといひて出に
けれは
あすならは忘らるゝ身と成ぬへしけふを過さぬ命ともかな
といひたる返し
遅れゐて何かあす迄世にもへむけふを我日にまつやなさまし
恨てひさしくいかて秋風のいたく吹けるをとこな
つにさして
霜やおく風にやなひく床夏のはるの（よイ〔ハなカ〕）うへこそとはまほしけれ
竹の葉に霜のいたくおきたるつとめて日のさし出
るまゝにとけて落るしつくの露とみえけるに
さゝの葉に結へる霜のとけぬれはもとの露とも成にけるかな
といひたる返事に
さゝむすひとけて露とは成ぬとももとにおつれは霜と社見れ
おほやけ所なる女のうしろめたくおほえて
虫のちをつふして身にはつけす共思そめてし色なたかへそ
返し
むしならぬ心をたにもつふさては何につけてか思ひそむへき
此女あひかたくのみ有けれは十月一日時雨のする
に
よそにふる泪の雨のひまなきにうたて時雨のけふも降かな
なをあはすのみあれは

我戀はさかさまにこそ成にけれ昔をいまになすよしもかな
　三河守けさうすと聞て
すまひ草たふるゝかたに成ぬるか心こはしとかつはみえつゝ
　返し
何にかは心もとらむすまひ草思うつるにかく（たイ）こそ有らめ
　又さいふへきまや有けむ
花ちらす鶯の羽風にちらされて長閑きふちはおらしとそ思ふ
　人きたるなといふをや有けむ秋のを成へし
かりつゝと（かりにくとイ）菊に心のみえぬれは世を秋風に思なるかな
　文ちらすと聞てかへさんと女のいへは
浮橋の下のふかみをきゝつみつふみかへしては我しつめとや
　母のもとへ出さりける女に
我をこそ戀すもあらめさほ山のはゝその紅葉見にはこしとや
　心ならす女のもとに物いみにさしこもりて思ふ人
　のもとに
身はこゝに心はそらにとふ鳥のこにこもりたる心ちこそすれ
　返し女
空にのみならへる鳥の心にもなを此めにはさはるとそみる
　こと人の車をかりて里へ出たるを恨て
門のとの車に乗て出しかはおもひにむれの中そこかるゝ
　さはる事ありてひさしくいかぬをいかなる所にあ
　ると聞に女
我やとの松はしるしもなかりけり杉むらならは尋きて（なイ）まし
　とありし返事
人をまつ山ちはくれすありしかは思まとふにふみ過にけり
　道にておそろしき人みたりけるころ女に
玉ほこの道の空にてきえもせはうき事有と誰に（かイ）つけまし
　同人返事もせぬを心とわすれはせしおなしくは我
　とたかはてなむわつらふ比にて返こと
命たにたえぬへかりしみなれ草うきにたゝよふをはことはり
　わつらふをなをおこたらてえあふましかりけれは
　女にやる
住の江にはれうちかはすあし鴨のひとりにならむほとの秋風
　津の國にかよふへきやうありて女に
（後拾遺）戀しさに難波のをもおもほえすたれ住吉の松といひけん
　女の物語して世のはかなき事をおもひしりなから
　え思ひたえぬなといひて
世中はみなむなしとは知なからうき身のうきにさはるへき哉
　けさうする女のつれなきに
岩城のまつにかゝれる露の命たえもこそすれ結ひとゝめす（とイ）
　よしのふか四十九日のうちにすけちかゝかうふり
給はりたりくはんもんつくらせたりしおくにかき

つけたりし

〔續古〕いろ〳〵に思こそやれ墨染のたもともあけになれるなみたを

返しすけちか

墨染にあけの衣をかさねきて泪のいろのふたえなるかな

女のもとより返りつとめて

濱千鳥けさのねくらをおきて父やすらはれつるほとの苦しさ

おろかなりとうらむる女に

あさは野の篠のわきはにかけろひて露もおろかに君を思はす

たかうなををさなき人にやるとて

おやの爲昔の人はぬきけるをたけのこのためみるもめつらし

返し

霜わけてぬくこそ親の爲ならめこはさかりなる竹とこそみれ

されかたの中將みちの國に侍りしおりやり侍し

〔後拾〕都にはたれをか君か〔セイ〕おもひ出る都の人は君を戀ふめり

返しされかた

〔同〕忘られぬ人のうちには忘られすまつらむ人のうちにまつやは

四月八日

忍ふれと泪に人はあらはれてけふの佛のまれをこそすれ

こしのかたへ思ふ人やりたる人の月のあかきをな
かめてゐたるをともにあはれなといひて

こしちなる人しるらめや都にてこよひの月をともに見る哉〔とはイ〕

つかさめしにもりてのとし大井にて殿上人舟にの
り侍しに

〔後拾〕河舟にのりて心のゆく時はしつめる身ともおもほえぬ哉

三條院の東宮と申せし時山吹の花を給はせて歌よ
めと仰られしかは

山吹を春の都にたつぬれはこゝのへに社いろはさきけれ

子を藏人になして侍し年南殿の櫻を人々よみしに
此うへの嬉しき事より外にのみ此北さらにおほえ
すとて

花をみん心も空になかりけり子をおもふ道におもひみたれて

おはりに二度なりてくたり侍しに初雪ふりしに

はつ雪とおもほえぬかな此度はなをふるを思ひ出つゝ

女のもとにさうそくせさせ侍しにゑむするを有て
おともせぬにしはてゝおこすとておひに結ひつけ
たる物に

結ふともとく共なくて中たゆるはなたの帯のこひわひにする〔はなかゝイ〕

とある返し

むすへとかとけとか帯のゆふかたをまつに扇の風そすゝしき

百さかにやそさかそへてひやくおくのをのか様々いかに有覽

返し中將のあま

我身をしちかふのたひの上になるそこらの數にいらす成けん

とありし返事

身はたとひちかふのたびにいらすとも結ふ心に入ぬへき哉

馬のそうこのむまれたりし家をさりて後其子の藏人になりてかの家に住人をかたらひて通ひ侍し其家なる紅葉を折て其家のあるし昔見し梅の紅梅になりたるみよとておこせて侍し

みとり子の植し梅の花みぬほとにとしはあけの色にかよへる

又中將のあま

色まさるやとからならは紫のちしほの色に染しころ見む

またかへし

紫のちしほの山の色ならは萬代よはふ聲もなひかむ

此花は老木に成たる事なといひて侍しにこの家はかすかといふ所に侍しかは

此花を老木にしわて昔なさはかすかの野へのわかなつみてん

返し中將のあま

あひおひの若菜はおなし春日野に年はかりをそつまは摘へき

二月に雪のふりしに同所にやり侍し

古徑の雪いかならんかすかなる三笠の山を思ひこそやれ

返し中將のあま

春日野に雪ふるとはたえたれとこゝにとふ日は又こそ有けれ

いちこをひわりこのけに色〳〵とゝのへてもりてけさうする女にやるとて

くれなゐに袖匂ふまてうける玉何のものともよそへかねつゝ

さいふへきやうありし女に

こと〳〵に心はなりてしかすかの我身にいとふをそささきたる

たえてみとせはかりに成たる人に

新續古 あひみてははや三年にも成にけり一日もふへき心ちやはせし

つかさめしにもりての春毀の御物いみにこもりて山の花を思ふといふ題にて

さきやせむさかすやあらむ櫻花そのみ山木はかすもしられす

返しはかりする人の後はせさりければ

いまそしろ夢路にわたる橋ならてふみ見し程をたゆる物とも

思ひやれかつらき山の神たにもわたしわひたる橋のとたえを

返し

かつらきの橋はひろこそかたからめ夜わたさしとなと契けん

又返し

かつらきの一とぬしのこりすまにあなわつらはし夜も契らし

つれなき女に七月六日

數ならはあすと思らん七夕にみなあふとはおとらさらまし

かへし

あふとをあすになしても七夕に契はかりはおとらさらまし

さはる事ありて女のもとへえゆかて雪の降に

六方にあれはあるとや思ふらん心は君にゆきてこそあれ

返し女

雪ふりの道のたよりも過にけりこゝろは何のとくるともなし

いかなるをりにか

下枝にはほれやふれたる鶯の人にとはれぬ物にそありける

うちわたりの人に山吹にさして

九重にへたてし月のさまかへてひとへにたのむ山吹のはな

又女に

戀すてふ名は高砂に立ぬれと尾上の松といふ人のなき

物いみにてつれ〳〵に侍るに

ちりかへすさきの契し深けれはつなかぬ舟ののとけからまし

いましはしありてといへは

つなかねはのとけき舟もかたき哉風のこゝろを我にのとまれ

君のらは我もおくれしあまを舟みろめと共に年をつみつゝ

人に

月影のこまのぬしにや誰ならんあなおほつかな空のけしきや

月影のさやかなからにかへさしとくもらむ空のとにつくらん

又人に

おとにきく音羽の瀧の白糸をむすはゝいかにこなたよはれに

人しれすつゝむ泪にこほれ出るみし日なからにほとをふる哉

忍ひしに心のかきりつきにしをあやしや何のものはおもふそ

いさよひの月の光のさしくもり時雨心ちのまたきするかな

岩間よりおひ出る松の二葉とて根なかき物といかに成らん

かれたらは忘ましやは岩の松野へに我身は出ぬはかりそ

秋風に聲よはりゆくすゝ虫のつゐにはいかにならむとすらん

以高田與清本一校了

文政七年　忠實花押

〔右大江匡衡朝臣集以圖書寮本校合〕

藤原家經朝臣集

殿上人花見ありきけるに長樂寺に少將の尼ゐたりときゝて

山櫻さかりにゝほふこの比はうらやましくもみゆる宿かな

しなのにくたるみちにて

詞 かさこしの峯のうへにてみる時は雲はふもとの物にそ有ける

遊山寺詠落葉繞樹

風をいたみ紅葉ちりしくこの本にかへらん方も忘られにけり

大井河落葉滿流

新古 たかせふれしふくはかりにもみち葉の流れてくたる大井川哉

九月廿九日惜秋

秋をわかおしむ心にまかせはやこよひもあけぬあすも暮さし

山家梅
すむ人の心の程は山さとの梅のはなさく春そ見えける
野晩霞
日もくれぬけふは歸らしこし方をそことも見えす野への霞に
夏月のまへにともをまつ
あきよりも見る程ひさし夏の夜の月には人をまつへかりけり
五月法花懺法詠空言有所
虚しきをむなしき空とたとへても思ひ〳〵の（おもふおもひのイ）あるはあるかは
居易初到香山心をよむ
いそきつゝ我こそきつれ山さとにいつよりすめる秋の月そも
落葉如雨
後拾 紅葉ちるをとはしくれの心ちして梢の空はくもらさりけり
西八條にて人〳〵ふたつの題をよみけりときゝて
たれともなくてさしをかせたる
よし野川みきは涼しとはやきていは間の水の音はせねとも
秋のはな夏ひらく
風ふかはかくれもあらし花薄あきにしられて人まねくとも
返し二首
人しれすむすふと思ひしかくれぬの水のあやしくもりにける哉
秋にたにしられさりしを花薄ほのめかすらん風にとはゝや
山さとにありときゝて女院の大輔のをもとのちかき山さとより
うらさひてくすはひかゝる山里の家ゐたつぬる人もあれかし
かへし
くすかつらくる人もなき山里に我こそかくはいはまほしけれ
ある女のもとに石橋のあるをこふとて
我やとにわたさはわたせ石はしの下ゆく水もさてそすむへき
錫杖歌
これやこの手にとりならす人は皆よゝの佛になるといふもの
はやうしりたりし女のもとよりのりをつゝみても
にすむゝしのとかきたる
いかにしてかきたえにけんもしほ草をはりなりや人の恨むる
送能因入道二首別をおしむ
春は花秋は月にと契りつゝけふをわかれと思はさりせは
たかさこのまつ
音にのみきくたかさこの松風にみやこの秋をおもひいてよ君
ものにかくへきとて人のよまする三首あふさかの
せきにゆくたひ人あり霧たちわたる
逢坂のゆきゝも見えす秋霧のたゝぬさきにそこゆへかりける
しかすかのわたりにゆく人たちやすらふ
金 ゆく人もたちそわつらふしかすかの渡りや旅のとまり成らん
おはすて山に月をのそむ客あり

久方の月はひとつをおはすての山からとにみゆるなりけり
西河寺和歌二首かはきり
行人やたつかはきり〔にカ〕と見えさらん近くもとりのわたるなる哉
みかきのはら
秋はたゝまとろむほともふる里のみかきか原そ夢に見えける
於西宮詠山家秋月
都人いかにかいふらんやま里の月はこよひとみゆる秋かな
山里に人〳〵あつまりて就菊花下抱盃人々
山さとはみきはのきくの咲時そ音なき人のかけも見えける
於西宮詠紅葉未遍
中〳〵にかたえもみちぬ折にこそ青葉にはゆる色は見えけれ
女のもとに
なにとも心にかなふ身ならねはよのつねならぬ戀もするかな
女のしくれするよれてやあるとひたるに
れぬ人そしろへかりけるかみな月時雨は袖の名にこそ有けれ
もみちにはつゆきのふりかゝりてあるをみて白河
院にさふらふ女のもとにやる
〔行古〕山里はみちもや見えすなりぬらん紅葉とゝもに雪のふりぬる
十月五日にあすかならすいてよと女のもとにいひ
たるにいてしと〔よカ〕いへは
戀わひぬあすはいさよひ月かけのけにや出ぬと待こゝろみん

女のもとにきのふをとつれて
いはてもやありぬへき迚こゝろみに昨日の空は暮しかねてき
うらむる事ありて女のもとにいひやる
人心うきをは更にみちのくのいはてそたゝにいくへかりける
ある人のもとよりとりをこすとてとや有けんかく
いへり
野へに出てかりの心や見えにけんきしかたくゆる人を社きけ
返し
おほつかなかりはのをのゝきし方をくゆるや誰そ戀するや我
かものしものみやしろにあるをんなのまいりあひ
たるにしのひてともの人に
うれしくも加茂のかはらの川みつにふかき心をしらせつる哉
梅の木おまたありときゝて人のもとより
梅かえに鶯たてゝすへなからかつなかせつゝうつしうへてん
返しほりにやりたるにひんかしのえたにしるしつ
く
鶯はこれにそきゐる梅のはなまつさく方の枝なたかへそ
卯花
うの花のたはゝにさける盛りには忍□な・　くそかきね成ける
閑郭公
まちいてゝもねられさりけり時鳥なきなん後と思ひしかとも

四月のつこもりにある女かたはらなるつほれをひ
きけりときゝてかくいひける
いつ方〔にカ〕ゐまたてひきける菖蒲草れたしやれたしかけてやみ南
返し
五月こて〔とカ〕いつかはひきし菖蒲草かけて伊勢六帖もしらぬとこな尋れそ
五月に八條の山庄をある女しのひて見けるにすゝ
りのはこにかきつけたる
こも枕かりのたひねにあかさはや入江の蘆のひとよはかりに
のちにみつけていひやる
まこも草かりそめにとて明さなん長くもあらす夏のしのゝめ
五月儀法次詠二首入於靜宅
心のみすめはすみふるしはのとを入にし日よりとふ人もなし
思惟此繩
思ひゐて心のやみし晴ぬれは雲かくれにし月も見えけり
晩夏二首川へにあそふ
詞風ふけはかはへすゝしくよる浪の立かへるへき心ちこそせね
とこなつをもてあそふ
草枕つゆはをくともとこ夏の花しさきなは野邊にこそねめ
ある女のつほねにさたくにの受領のゐたるを見て
いひやる
いさり船こきもやゆくと思ひしをよさの浦浪ひまなかりけり

返し女
うらみむと思ふへしやはいさり船なみまもまたてかへる心は
同女のもとに和泉守のゆくなりけりと人のいへは
またいひやる
いさりふれ浪まもまたしいつみなるしのたの森の風も吹なり
かへし女
いさり船浪や風やにと〔とイ〕つけてうらよりをちに成とこそ見れ
ある人のかたゝかふとて九條によるとまりて櫻の
えたにむすひつけたまへる
時雨せぬ夏たにふかきもみ葉はけふより後の色そゆかしき
返し
たひれする君か玉章かくやとてまたき木のはの色つきぬらん
七月七日人のもとにやる
わたるせにこそもふけにし天の河ふなて計はよるならてせよ
古曾部入道有様引詞在九條別業有白贈以一首于時
雪降
降つもるあさちかうへの白雪にゆくへき道もわすられにけり
かへしいよにくたるほと
あやなしや淺茅かうへのとの葉にふなてする身の心とゝむる
同入道伊與よりをくれる歌
今夜わからうらやましきをたちかへりあすは都にいてん月かも

返し
ゆきめくりみやこに出る月影のいりつるにしを忘れかねつも
暮春詠尋花日暮
尋れこし花にもあかすくれぬれは春の過ぬる心ちこそすれ
於西宮惜落花和歌
年をへてかしらの雪はつもれともおしむに花もとまらさり鳬
三月卄日向西八條
散殘る花もやあると尋れつるやとの櫻も殘らさりけり
とこ夏の花を女のもとにつかはせるにかくいへり
とこ夏に匂へる花の色よりもおれる心のほとをこそ見れ
返し
ふかき色わきて折つる〔有カ〕とこ夏の花に心の見えにけるかな
詠瞿麥勝衆花　序者
たつたひめとにやそめし春も秋もとこ夏にして花のなきかな
或人の山庄にてさなへをとりほとゝきすをきくと
いふ二の題を
さ苗とる時しきぬれはみたや守まかする水におりたちにけり
郭公なく山さとのかきねをはかきたえすこそとふへかりけれ
八條の家にて人〳〵詠二首水上月
かけやとす水のにこると見えつるは空なる月や雲かくるらん
荻の葉に秋をしらせて風の音の松に木高く聞ゆなるかな

物詣のみちに舟中月といふ題にて
こきゆけと離れぬかけを久かたの月のふれとや人はみるらん
悲歎之間無情放遊被(サイ)率好客至東山跗(旧跡歟)不能倦忍愁悶(遊月イ)
詠水知山葉之事而已
我袖のしつくとやみる奥山のもみちしらする谷川の水
落葉埋菊
もみち葉の外よりたかく積れるやきくのさけりし所なるらん
梅の花ちるこのしたに行水のなかれをみてや人のきつらん
道雅三位西八條障子繪歌合
時鳥待そかひなき山ちかみなにゆへにすむやとならなくに
かはのほとりにあやめかる人ありはしのもとにむ
まをとゝめてひとこれをみる
あやめ草人のかるにもわか駒はひきとめらるゝ物にそ有ける
〔題落歟〕あまのかはみきは涼しき秋風にけふはおふきの風も忘れぬ
暮秋もりのもとに車をとゝめてもみちみる
わか宿にしらて待らんもみち葉のあかぬ心にけふはくらしつ
歳暮雪つもり門のまへに人きたる
山さとのまきの葉しのき降雪にいかてか人の尋れ來つらん
同三年閏正月三日ちもくにつかさたまはらて人の
もとにいひやる
年ふれと□むもきは□かすそふ春のかひなかりけり

二月つこもりに左京大夫道雅さくらのはなのえた
をおりてことしうへたるにとあるに
うへしとき花咲にけり我のみそ春にしられぬためしなりける
三月つこもりに忠命法橋のをくれるうた
しのひねもまたしかるらん郭公やとからなれや鳴渡るなり
二三日をすくしておくれる返し
待にこそねぬよへにけれ時鳥我もきゝつといはまほしさに
ある女の人にあふてときゝて
花薄しはしなひかてこゝろみよふきくる風もさためなきよに
紅葉する山の時雨を音にのみきくそよにふるかひなかりける
返し左大辨
音にこそきくへかりけれしくれする山の紅葉に心まとひき
美作守にくたるにむまつかはすとて
うちこえん駒のあし音たえすしてくめのさら山行かへりなん
かへし
ゆきかへりくめのさら山こえぬへき駒の足こそ嬉しかりけれ
冬日於西宮詠行客吹笛　序者
笛のねは月に高くそ聞ゆなるみちのそらにてよや更ぬらん
於左大辨八條別第詠冬夜長
ねさめして後も久しき冬のよはおひぬるひとそ先しられける
永承四年十一月九日殿上歌合月
金 よとゝもにくもらぬ雲のうへなれは思ふとなく月をみるかな
同五年賀陽院一品宮歌合櫻
さてもなをあかすやあると山櫻花をときはにみるよしもかな
郭公
時鳥かたらふ聲を聞ときはまたと〳〵そおほえさりける
鹿
後拾 しかのねそねさめの床にかよふなるをのゝ草ふし露や置らん
齋院邊のさとにたつぬる人の院にさふらひていて
ぬに
ほともなく明ぬる夏の月かけもひとりみるよは久しかりけり
返し
さそはるゝ心とならは山さとに月をいるまて見てそゆかまし
又やる
まてとたになけの童にきかませはいる迄月をみさらましやは
於源亜相六條水閣對泉忘夏
したくゝる岩間の水のあたりにはあふきの風をかる人もなし
夏の夜の月
夏の夜の月し出れは山のはもやかて明ぬるものにそ有ける
秋をまつ
秋をのみ立ゐまつかなたなはたの渡る川瀬の浪ならなくに
七月さぬきにくたるに美作守みちよりまかりなく

れる

高砂のまつとてけふそ暮しつるふなちはともそとまりえける

返し

まつとたにいかてきかまし浪間わけとわたる船の便ならすは

正月讃岐よりのほるほとに河尻にて入道能因のい

そく事ありてまかりぬといへるにつかはす

ふりすてゝ君しもゆかし難波方あしのつのくむ春もきぬるに

かへし能因

命あらは世かたりにせん思ひ出てなにはの浦にあへる君かな

さぬきにくたるに人〳〵京よりもろともにかはし

りにまかりくたるとてふれの中に春くれぬといふ

題

ちりのこる花もたつれて見るへきにふなちに春も暮にける哉

河尻に人〳〵日比とまりて欵冬の花さける家にて

なにはえのあしまにゝほふ山吹の花をいてかと思ひけるかな

〔右藤原家經朝臣集以圖書寮本及丹鶴叢書本校合〕

續群書類從卷第四百四十

總檢校保己一集
男源忠寶校

和歌部七十五

平忠盛朝臣集

春部

新院百首歌めしけるにまいらせんとて梅を
しらぬまにまかきの梅は折てけり袖なつかしき人をとかめん
主しらぬかこそたもとにうつりぬれかきねの梅に風や吹らん
はるころはりまよりのほり給けるにあはちのおき
のかすみたりければ
なには江やけさは霞に玉柏かつ〔ろ歟〕もれのこるあはち島やま
たいしらす
いつくとも春はすみかそなかりける心をさそふ花にまかせて
山家花を
尋くる花も散なは山里はいとゝ人めやかれむとすらん
はりまのかみに侍ける時三月はかりにふれよりの
ほり侍けるに津の國にやまちといふところに參議
爲通朝臣しほゆあみて侍ときゝてつかはしける
なかゐすな都の花も咲ぬらんわれも何ゆへいそく船出そ
かすみの中のはなといふ事を
かすめたゝもろこしまても敷島のやまとのみかは花のおも影
あめの中の花を
はなは世におなしにほひの春としも思ふ人なき山さくらかな
あかつきの花を
あけなはとたれおもふらん花のうへに心をやとす春のよの空
おなしこゝろ
花に色にうつろひきえし明る夜のたかねに霞むかれの聲哉
備前のかみにてくたりける時江暮春といふ事を
すみよしの松もや思ふ月もまたほそえにかすむ春のなこりを

夏部

ほとゝきすをよめる

すみよしのまつとしらすや時鳥きしうつ浪のよるもなかなん

題しらす

きくたひに身にそしみける郭公聲はいろなるものならなくに

新院百首歌めしけるに

夏山のならのはそよく夕くれにいくへかされつせみの羽衣

秋部

草花

武藏野のしけみにましろ女郎花こもりしつまの心ちこそすれ

旅宿草花

草枕たひれのとこのをみなへし一夜はかりの契とやおもふ

はりまのかみにてくたりたまひてあかしの月をみて

思ひきやあかしのうらの月影をわかものにして眺むへしとは

故郷月

いつくとも月はわかしを故郷はもの淋しかるかけそゝひける

丹後守爲忠朝臣ときはにわたりて山家曙月を

ありあけの月をなかめて我ひとりいくよに成ぬみ山への里

社頭紅葉

み笠山いかてこの葉のもみつらん時雨はよそのものとゝゝろ

冬部

山家霰

かきくらし霰たはしるみ山へは心くたくるものにそ有ける

新院御會に曉千鳥

ありあけの月のてしほやみちぬらんいそつたひして千鳥鳴之

同心

よさのうらの松風さむみれ覺する有明の月に千鳥鳴之

戀部

(題闕)つらきにもうきにもおつる涙かはいつれの方かふちせ成らん

新院御會はしめの冬こひ

さも社はあき果られし身にしあらめいかにしくるゝ袂成らん

雜部

備前へ下向してのほりたりけるに白河院御前めして道のあひたいかなる歌かよみたるとたひ／＼御たつね侍ければむろと申とまりにてかせにふかへられて日かすつもりはへりしかはつかまつりたるよしそうしける

花のちる春のみとこそ思ひしにふなちも風のいとはしきかな

をはりへ下向し給けるに爲義かのかみといふところにて馬をひきたりけれは

こゝろさし都のほかにみえぬれはたひ／＼人をうれしとそ思

百首別

程もなくたちかへるへき君なれと別れてふなは悲しかりけり

七月七日白河院かくれさせたまひたりければ

またもこん秋をまつへき七夕のわかるゝたにもいかゝ悲しき

右一册者爲家卿以自筆之本不違一字書寫了。

見勅撰歌

月のあかゝりけろ比明石にまかりて月をみてのほりたりけるにみやこの人々月はいかにとたつねければよめる

有明の月もあかしのうら風になみはかりこそよるとみえしか

殿上申けるにゆるされさりければよめる

思ひきや雲井の月をよそに見て心のやみにまとふへしとはしたしき人にわさの事はてゝかへり侍けるによめる

いまそしろおもひのはてに世中のうき雲にのみましろ物とは

新院殿上にて海路月といふ事をよめる

ゆく人も天のとわたる心ちして雲の浪ちに月をみるかな

たいしらす

ひとかたになひく藻鹽の煙かなつれなき人のかゝらましかは

遍昭寺にて月を見て

すたきけんむかしの人はかけたえてやともる物は有明の月

たいしらす

あふ坂の關こえてこそ中〳〵にゆふつけ鳥のねはなかれけれ

備前守にてくたりけろ時むしあけといふ所の古き寺のはしらにかき付侍ける

むしあけのせとのあけほのみるおりそ都の事も忘られにける

臨時祭の舞人にて侍けるにははかる事ありて御前へまいらてむまはにたちて侍りけるかたうとけなる僧の侍けるにかたらひつきて殿上のそみ申けるいのり申つけて侍けろか程なくゆるされければかの僧のもとへよろこひ申つかはすとて

うれしともなか〳〵なれはいはし水神そしろらむおもふ心は

〔右平忠盛朝臣集以黑川眞道氏藏本校合畢〕

信實朝臣家集

春歌

新六帖題にて人々歌よみ侍しにたつはる

けさよりは春たちぬとや久方のそらさへ更にのとけかるらん

一條入道太政大臣家にてすみよしの廿首人々よみ

侍しに

朝な〳〵山の木のめのかすむより春の緑そあらたまり行

寛元三年八月右大辨入道法華經の料帋のうらの百首とて人々にすゝめられ侍しによめる

うくひすの聲きくなへに改玉の年も春へとかすむ空哉

前藤大納言人々に百首歌よませられ侍しに

春きてもなをうら寒き朝氷なみたさなから鶯そなく

入道二品親王人々に五十首歌よませさせ給しにゆきのうちのうくひす

新後撰 またさかぬ軒はの梅にうくひすの木つたひちらす春の淡雪

經のれうしの百首に

春はまつとふひのゝへに打むれてゆくや誰そもわかな摘也

攝政殿人々に百首歌よませさせ給しにわかなをつむ

春の野に我身ふりぬる袖なれはつめと若菜の名こそたまらね

前藤大納言家にて五十首歌人々によませられ侍しになかのわかくさ

〔此間數行闕〕

しもけたぬいまたむ月の空さへていつらはよはの月朧なる

おなし五十首にかへるかり文字にゝたり

あやしともえやかきそへん玉章のもしならひしてかへる鴈金

經のれうしの百首に

玉つさはところたかへもある物をかならす北にかへる鴈かれ

九條前内大臣家にて歌合侍しにあか月かへるかり

續拾遺 あけて見ぬたか玉章もいたつらにまたよをこめて歸る鴈かね

家に五社歌合とて人々をすゝめ侍しに歸鴈

春の田はいれてふこともなき物をいそくや何そかへる鴈かれ

西園寺卅首とてよませられ侍しに

續拾遺 雲よりもよそになり行葛城のたかまの櫻嵐ふくらし

貞永元年前攝政家五首題の百首にはな

きても見ぬふるさと人のなそ櫻ちりのこれりと猶やつけまし

前藤大納言家五十首に花たにの水にうかふ

みよし野の水わけ山のたに〳〵のせゝにわかれてちる櫻かな

はなのうたとてよめる

新勅撰 山さくらさきちる時の春をへてよはひは花のかけにふりにき

九條前内大臣家にて當座百首歌人々によませさせ給しにくれのはる

新勅撰 暮て行そらをやよひのしはしともはるの別はいふかひもなし

夏歌

右大辨入道すみよしの卅六首とて人々によませられ侍しに

卯花の咲ぬと人につけやらはこてふにゝたり月にまかへて

前藤大納言家にて十五首歌人々によませられ侍し
にほとゝきす
しのゝめのしからき山の郭公ひはらかうへの雲になく也
同家五十首にかすかにほとゝきすをきく
ほとゝきす今一こゑの後にこそきゝさためても人にかたらめ
經のれうしの百首に
いつまてか聲をしのひし郭公五月となれはよたゝ鳴之
同百首に
五月雨のみかさかたよせ河へなるつゝみのうちに早苗とるえ
かちわたりやすのかはよと行駒に波もせこしの五月雨の比
すみよしの卅六首に
五月雨によとのかはせのつなはてを猶引はえてのほる舟人
前藤大納言家百首に
新六撰 さす棹に水のみかさのたかせ舟はやくそくたす五月雨の比
建保元年和歌所の五首題百首にさみたれ
水の音は深きにしもそよはるなる井せきをこゆる五月雨の比
法性寺入道關白殿左大臣御時人々に百首うたよま
せさせ給しに山のさみたれ
山河のさゝれもふちとかはるまて瀨をせくものは五月雨の比
西園寺卅首に
五月雨のころそつれなる飛鳥川きのふの淵のかはる瀨もなし

新六帖題歌にさ月
玉葉 ゆくさきのみちもおほえぬさ月やみ位の山にみはまよひつゝ
同題の歌に夏田
千早振神のみむろのみとしろにみな月かけて早苗とる也
すみよしの卅六首に
くさのはにかけをとゝめて飛螢露やおもひのかすにもゆ覽
經のれうしの百首に
ひろふてふ玉にもかもな楸生るきよきかはらに螢とふなり
九條前内大臣家にて海邊のほたる
ともしひのあかしの浦のあた浪のよるの螢はあともさためす
承久元年内裏御歌合水邊夏草
續拾遺 をのつからの中のし水知人もわするはかりにしける夏草
攝政殿御百首にふれの納涼
むろの浦のせとの早舟浪たてゝかたほにかくる風の涼しさ
新六帖題歌に夏野
風かよふのもりかやとのさゝむしろ木陰なられと夕涼みせり
九條内大臣家御會に夏夕
夕附日木すゑをそむる立田山またき無名の秋はきにけり

秋歌

貞永元年前攝政家五首題百首にはやき秋
新六撰 よる波のすゝしくもあるか敷妙のそてしの浦の秋の初風

前藤大納言家五十首にたなはた秋を期す
秋といはゝなをもいそかて七夕の何か七日の暮をまつらん
寛元三年九月法性寺殿にて秋卅首うたかうせられ
侍しに
天河うきつの御舟小夜更てわたるかちをとはやいそくな
秋のうたのなかに
新勅撰 なをさりの音たにつらき荻の葉に夕をわきて秋風そ吹
攝政殿御百首に閑居のすゝき
かくれかとたのむすみかのしの薄ほになまねきそ人も社とへ
九條内大臣家にて閑居の薄
新勅撰 まねけとてうへし薄の一村にとはれぬ庭そしけりはてぬる
建保五年内裏御歌合に
新後撰 秋の野の尾花にましる鹿のねの色にや妻を戀わたるらん
新六帖題歌にすゝき
夕くれはふきもさためぬ秋風にまねく尾花の袖かへる見ゆ
草花はやしといへる事を
いかなれはをのか盛をつねよりもひきあけて咲藤袴哉
法性寺殿〔ふ卅〕卅首に
秋かせのきけるさひしさも高砂の尾上の鹿はなかすもあらなん
攝政殿御百首に田家鹿
わかゝとの板井をかくる小山田にさとゝをしとや鹿の鳴らん

經のれうしの百首に
山もとのむかひのわさた見渡せは稲葉色つき秋風そ吹
新六帖題歌にきり
續拾遺 雁啼て夕霧たちぬ山本のわさたを寒み秋やきぬらし
同題の歌におきのゆふへ
續古今 物をのみさも思はするさきのよのむくゐや秋の夕なるらん
法性寺殿卅首に
なく涙露にそはれるわたくしの老のよかなし秋の夕暮
九條内大臣家にてゆふへのむし
秋かせにそらも夕の悲しきを草のはにのみ虫の鳴らん
經のれうしの百首に
さひしさは月にそみゆるみかの原くにの都の秋の夕暮
新六帖題歌にねまちの月
玉葉 まとあけて山のは見ゆる閨の中に枕そはたて月を待哉
寛元三年八月十五夜將軍家の御會に月
續千載 くろゝよの嵐は何を拂ふらんかねて雲なき山端の月
法性寺殿卅首
暮やらてまたかたおかきそらの色やかて出そふ月のかけかな
何をしていたつらなりと思はぬは月みるあきのわか心かも
攝政殿御百首になみのうへの月
續古今 名にしおふさかひやいつら明石潟うら波遠くすめる月かな

同百首にあさちの月

淺茅生のしけみの庭の秋風に露を哀と月にみるかな

經のもうしの百首に

（續古今）老と成つらさはしりぬしかりとてそむかれなくに月を見る哉

霧はるゝゐなのをゆけはむこか崎月をそ見つる宿はなくして

前藤大納言家五十首に月ふるき心をもよほす

しるへする月ゆへ今もわすれぬは西といふかたや昔なるらん

八月十五夜一條入道太政大臣家會に關の月

（新後撰）秋風にふはのせきやの荒まくもおしからぬまて月そもりける

貞永元年八月十五夜大殿御歌合に名所月

（續古今）なしは山おのへの松の秋風に神よちふりてすめる月かけ

五社歌合にかはの月

道のへのかはをとはやみ寒きよにせまくし[らイ]みえてすめる月影

新六帖題にありあけ

いつまてか月にも見えん世中にまた在明のほともはかなし

攝政殿御百首にうみのきり

きりかくれうたふ舟人聲はかりするかの海の沖にてにけり

經のもうしの百首に

しら玉のをすての山の秋の露つらぬくくさも今や枯なん

秋の歌の中に

（新勅撰）ひを經ては秋風寒み棹鹿のたちのゝまゆみ紅葉しにけり。

承久元年内裏歌合に擣衣をきく

うつまゝに衣やうすくなりぬらんきぬたにちかきつちの音哉

攝政殿御百首に擣衣をきく

山かつの身はしもなから衣打音に哀やきこえあくらん

大宮三位入道人々に歌すゝめられ侍しに擣衣

さひしさの音をしるへの里遠み人もとへとや衣うつらん

貞永元年高攝政殿五首題百首にもみち

むへしこそ松は紅葉にのこりけれ同しえをたにわきて染れは

攝政殿御百首にわたりのもみち

泉河はゝその梢見わたせはわたりを遠み紅葉しにけり

九條内大臣家御會にもりの秋

またちらぬあきの盛のもみちはにたかゝれをの木枯の里

貞永元年前攝政殿の五首題の百首にもみち

（[illegible]）はれくもりしくろゝ數はしられともぬれて千入の秋の紅葉は

法性寺殿卅首に

ことに今ふる里寒き長月のかつらのもみち秋風そ吹

前藤大納言家五十首にはのむしやうやくおとろふ

庭草のもとくたちゆくさかりなるやゝ過るねに虫の鳴也

新六帖題にあきのはて

けふかへる秋の道しはいかならん庭の淺ちの色を見るにも

冬歌

二品親王五十首にあしたのしくれ

続後撰
冬きぬといふはかりにや神無月けさは時雨のふりまさりつゝ

前藤大納言家五十首にはしめの冬のしくれ

はやすくる時雨やなにそ神無月はるゝを見るも冬はきにけり

經のれうしの百首に

冬のくるあか月かたの一しくれ哀袖こそぬれまさるなれ

新六帖題歌に初冬

けふしこそ時雨もことにふりまされ思しことそ冬の初は

すみよしの卅六首

きつゝ又過行冬と見ゆるかなしくれてとまる雲のなけれは

經の料紙の百首に

ふゆ山のしくれは又もしくれなん音たゆるまて降木のは哉

新六帖題に初冬のしくれ

さらてたにねさめかちなる長夜に時雨を冬とおもはすもかな

建保五年内裏七首御歌合に山のしも

新拾遺
菅の根もうつろひかはる冬の日に夕霜いそく山の下草

同御歌合に冬のせき

新勅撰
須磨の浦に秋をとゝめぬ關守ものこる霜夜の月はみるらん

建保四年おなしき御會にさむき月

嵐ふく峯の梢の冬枯にはやまもしらぬ月のころかな

經のれうしの百首に

冬の夜のしくろゝ空の雲たえすさすらひいてゝすめる月かな

吹あろゝ霜よの風は寒けれと身にかへてこそ月をなかむれ

道たえていくかになりぬうは氷とつなのはしはくろ人もなし

大宮三位入道の會に

いかなれはをしのうきねのたえぬらん氷も水の上ならぬかは

前藤大納言家十五首

續後拾遺
神なひのいは瀬の杜の冬枯にみむろの山は雪降にけり

經百首に

都まて寒さそ見ゆる峯こしの比良の遠山雪降にけり

さえ〳〵てゆふたつ雲に白雪のかきたれふれは風はゐにけり

西園寺の卅首に

續後撰
下折の音のみ杉のしるしにて雪のそこなるみわの山もと

法性寺の入道殿左大臣の御ときの百首になかのゆき

山かつのいそくあさ戸も明わひぬむかひの岡の雪のふゝきに

前兵部卿會にうらの雪

わくらはのみちもやいとゝ絕ぬらんとはれぬ浦につもる白雪

建保六年内裏七首御歌合に冬海雪

續拾遺
田子の蜑の宿まてうつむふしの根の雪もひとつに見ゆる冬哉

かすかの歌合に

窓あくるあかりやいつく軒はまてつもりふたかる庭の雪かな

七十首歌よみ侍しに

玉もかるうらはの千鳥しは鳴て人のゆきゝのよは更にけり

住吉の卅六首に

みなといる沖つしほかせ寒きよにかはしまかくれ千とり鳴之

經のれうしの百首に

鹽風にわたるや遠き明石かたと中の千鳥聲しきる之

家にすゝめ侍し河合のやしろの歌合千鳥

霜さゆるつゝみのうへのかはむかひなち方きけは千鳥啼之

西園寺卅首に

なかめつゝわかよ更ゆく月たにもあり明過てくるゝ年哉

きしの千鳥といへる事をよめる

住吉のきしもせくとや小夜千鳥永井のかたへ浦つたひ行

戀歌

經のれうしの百首

なみこしのゝ坂の浦の舟よそひ人を見しよに戀やわたらん

ひとめもる袖をはいはす思ふ事心にためぬわか涙かな

逢事のかたきをやくとかはらやにくるしや煙たゆるよもなき

つらくとも終にいもせの中ならは吉野の瀧のおちはあはまし

枕より袖より戀の色に出てしのふところもなき涙かな

さりとてもふちにもあらぬさ莚に身をなけふして物思ふ哉

同しくはこえてくたけよ岩の浪さのみやれたくよせて歸らん

きぬ／＼をしたひもゆかて哀わか心おくれのあか月の雲

此暮もまたみたれなはあや杉のめみ〔マヽ〕をはにくゝや人の思はん

見しや夢行衛もしらすはては又あふにかきらぬ戀の道哉

〔新續古〕いける身の爲社うけれそれをたにかこつ方とて戀やしなまし

前齋大納言家九十首にむしろによせてまつこひ

秋風のふくゐのむしろ寒きよに心つくしのいもをまつ哉

住吉の卅六首に

横山にたつきふかみてつくるてふいたくも戀の苦しきやなそ

攝政殿御百首にきく戀

立わたるきりのした行山川のたきつ音にも袖はぬれけり

同百首にいのるこひ

こえぬまを關もる神にうれへても手向そたえぬ逢坂の山

新六帖題にあひおもふ

梓弓よはまてとをすふせ竹のはなれかたくもちきる中哉

こと人をゝもふ

〔續古〕末の松あたし心の夕鹽にわかみなうしと波そこえぬる

人しれぬ

戀しなはつゐにつらさのはてそとも誰かは夢を思ひあはせん

人にしらる

下もえのけふりや雲とうきぬらんたつ名もあたに人のとふ迄

わすれす
暁のうきは別になりはてゝおもひいつるも人そ戀しき
たつぬる
草わかきのへもる人に物まうすわれそのそこに妻やこもれる
うらみ
見すいはしたゝよそならんと思へともむかへは落るわか涙哉
五社歌合にひさしきこひ
われは戀人はわするゝとし月をおなしつもりと思ひける哉
建保五年内裏歌合に
新勅撰 東路のふしのしは山しはしたにけたぬ思ひに立けふりかな
同御歌合に
新後撰 なをさりに一度ちきる偽もなかき恨の夕暮の空
みうもむの大納言の歌合にたひの戀
新勅撰 くれにともいはぬ別の暁をつれなくいてし旅の空かな
貞永元年前攝政殿五首題百首にしのふこひ
いかにせん人めもいよゝもる山に下のしくれの雲のふかさを
壬生二品人々に戀歌よませられ侍しに
ふしの山それも思ひのはてには猶ゆく方ありて立烟哉
前藤大納言家百首
新後撰 我戀はやみれのつはき思ひかれときはなからや色に出らん
稀ならんことをやかれて契りけんたゝにもたのむ心なかさは

續古今 さらて又おもひありとやしくるらん室のやしまのうき雲の空
京極中納言家にてしのひて待戀
こぬ人のつらさをたにもあらはさて枕のみしる小夜や更なん
三條の侍従三位百首にたゆるこひ
つらかりしたゝそのまゝの別より又もいとはぬあか月の鐘
貞永五首題百首にあふてあはぬこひ
續古今 あはさりし戀にやかれてならひけん後のつらさにいける心は
西園寺卅首に
同 きぬ〴〵の袂にわけし月かけはたか涙にかやとりはつらん
大宮三位入道會にわかれてのちの戀
あひ見しはさなから後のつらさにてわかれや戀の初なりけん
六イ 九條前内大臣家にて卅首歌かうせられ侍しにまれ
なるこひ
しかすかにたえぬ物からあはぬよのつもりそなかき契そける
家長朝臣人々に歌よませ侍しに月によするこひ
續千載 いつまてとしらぬかたみの月かけをやとす涙に袖やくちなん
すみよしの卅首に
藻刈舟さしてなきさによる浪のたつ名くるしき戀もする哉
かすかの歌合に
戀ゆへもかひなき老のわか命あふてふことにかへはをよはし
家に兩社歌合とて人々にすゝめ侍しに逢てあはぬ

戀

湊舟われいたつらにすてられてわけし芦まもえやはかよはん

藤大納言家五十首にいとによせてたゆるこひ

さしも社あはする糸のうはよりのすきて思ひのきれにける哉

同家月なみの會に戀

つゝめとも涙は色にもりにけりさのみはなそと人のとふまて

雑歌

新六帖題にあか月

ふかき夜にまつ一しきり聲たてゝゆふつけ鳥は又ねしてけり

よゐ

此夜はゝまた更なくに老らくのかたねふりする燈のもと

あまのはら

身のうれへ天つそらにはみちぬれとをよふ所のなきそ悲しき

てるひ

やふかくれさてしもあふく日の光うき身もらさぬ哀ともかな

くも

かへり見ぬ雲のかけはし古のあとをはしるや數ならすとも

みね

見わたせは嶺あらはなるふしの山高くや雲のかゝりかぬらん

つかひ

さしなから櫻やま吹つゝけともふちはあまたもなきかさし哉

わし

またはよも羽をならふる鳥もあらし上見ぬ鷲のそらの通ち

ふるさと

あともなきむかし語の古都のころなにはゝうらさひにけり

くるま

老か世にまたしちたてぬ小車のつとふちからもなきそ悲しき

ぬま

わかみ今猶もかしらにかみつけのいかほの沼のいかゝ悲しき

ふち

古川やくつるゝ岸の下はやみいとゝわたみのふかきふちかな

やまかは

いはまより落あひせはき山河のくゝるもゆくも音たきる之

もり

ふりゆけは杉の緑も色つきて梢さひたる山もとの杜

うら

はすくなにふきからさるゝうら松の鹽風寒み猶たてる哉

さき

見わたせは梢ひとしきならひまつしまさき遠くたれかうへ劒

うたゝね

床の上に手枕はかりかたかけてしはしと思へはねそ過にける

つゐ

七十になよひかゝれる杖なれはすかりてのみそ足も立ける

五社のうたあはせの北野に

九重のきたのゝはるはかすめとも君にへたてのなきまもり哉

かすかのやしろにはるの月

月のきるみかさとやいはん春日山おほろに見ゆる春の霞を

經のれうしの百首に

すへらきの七よのみよにあへる身はさこそ重ねて老と成らめ

なからなる橋もとてらもつくるゑおこさぬ家を何にたとへん

我身今よものつかさをよそに見てえならす物を思ふくるしさ

家をゝしみ子を思にそ出かての道をやみともまつまよふらん

流石我身に生ぬへきあらましのなけきそいたく悲しかりける

霜雪の色にゆつりて高砂のまつもわれをはともとやはせむ

續後撰 なき數にいまゝてもるゝ老の身の又くはゝらん程のかなしさ〔私號〕

難波江に又たてとなき澪標なとかさのみは朽はてにけり

とてもすきかくても過る身のうさの爲こそやすき此世ゑけれ

さらてたにすむ程せはき山のゐにむれてや影のしつみはて南

そまいたにとる所なきかたおちのくつなるものは我身ゑけり

月にのみあかぬ心のなれ〳〵てかきからみなんあとの悲しさ（くイ）

前藤大納言家五十首にあか月かすかなるとり

續拾遺 きゝわかぬゆふつけ鳥の聲よりも老のねさめそ時はさたむる

うらのまつ

しほかせにえやはむかはぬ枝も葉もそむきにたてる浦の松原

すみよしの卅六首にたひ

露にぬれ風もさむしとかこてとも猶うらめしくかさぬ宿かな

釋迦善逝

みなしこになりてや誰も迷はましはくゝむ佛世にしいてすは

すみよしの卅六首にたひ

ふる里をおもふあまりのあしこしにいとゝ程ふる旅の悲しさ

同百首に述懷

わかの浦にそれと計のも屑にてかきよする名のなきそ悲しき

續後撰 數ならて思ふ心にみちもなしたかなさけにかみなうれへまし

月歌

同 くもれとや老の涙にちきりけんむかしより見る秋の夜の月

大宮三位入道會に述懷

をのかとちさてのみ年は武隈に松の二木のくちやはてなん

あはれいついかにぬるまの枕とて夢も限のみえむとすらん

貞永五首題百首にたひ

續拾遺 道とをみ思しよりも日はくれて更行宿はかす人もなし

駒なつむすかのあら野の道遠みゆくさきしらてひなつ暮さん

續古今 しほ風にとまのうはふきひま見えて浮ねの枕明ぬ此夜は

前藤大納言家五十首にたひ

津の國のあしのまろやのまろ柱すみもならはぬ旅の悲しさ

右大辨入道歌合に夕のたひ

續古今
またしらぬはらのゝ末の夕附日しはしな暮そ處さすまて

貞永の五首題百首に山家

新拾遺
きかさりし嵐のかせも身にそひぬ今はすみかの秋の山本

五十首歌の中に

つれ〳〵と山への庵にくらす日の木のした闇は露のみそふる

百羽かきはれかくしきも音過てあした夕はわれそ佗しき

八幡卅首とて人々よみ侍しにうらのけふり

續古今
里とをく鹽やく浦は見えねともけふりにかへる興津しら浪

攝政殿御百首にてうはう

山たかみふもとめくりのとを海にひとかたならぬ沖のつり舟

同百首に述懷

わか身よに足もやすめすならひきて道ゆきつかれ今そ悲しき

前藤大納言家十五首に月

さやかなる月みる事のみにおはてわかあたら夜の空そふけ行

入道二〔衍歟〕品親王の御會にはのまつ

庭もせにのとかなる草もある物をうへしなからの松の一本

新六帖題歌にかゝみ

すてやらぬ影はつかしき古鏡さもそおもてのつれなかりける

八條院かくれさせ給て御正日八月十五夜にあたり

て侍りしかは

新拾遺
やみのうちもけふを限のそらにしも秋の中はゝかき暮しつゝ

貞永元年きさいのみやの御かたにて鞠ひさしきよ

はひをちきろといへるたいをかうせられ侍しに

いとゝ又雲井のたつのわか齢君か八千代にとりやそふらん

前藤大納言家に月なみの歌人々によませられ侍し

にさう

老らくの猶なからへてありぬやといさ心みに身をもいとはし

名所述懷

まつならて又世をひさにふる物は老その森の歎なりけり

寛治九年前攝政殿にて詩歌合はへりしに江上眺望

みますゐのゆきあひの湖崎しほみては入江へたてぬ興津白浪

野亭景氣

なをさりの野中のかこひかたあれてさすとしもなき草の門哉

此一帖信實朝臣集。依父卿命以家本令書寫。被附屬于藤原光芳者也。後年依所望加奧書畢。

享保二十一年二月三日　左中將爲村

〔右信實朝臣集以丹鶴叢書校合了〕

續群書類從卷第四百四十一

和歌部七十六

和歌

春

從三位侍從俊長

七十首歌中に立春霞

たちかへる神代のはるのおもかけも霞にこもる天のかく山

早春霞

山かせのはらふかすみのうす衣たちかれてこそ春も寒けれ

朝霞

あさなきの松浦かおきのはる／＼と霞にきえてこく舟もなし

澤若菜

春はなをあさゝは水の朝こほりいつとけ初てわかなつまゝし

春雪といふ事を讀侍

いつのまに跡をもつけむ積るかとみるよりきゆる春のあは雪

柳

日にみかき風にはちるかぬきみたる柳のいとの露のしら玉

百首歌中に若木梅と云事を

うへたつるわか木の梅の花見てそ我老らくの春もしらるゝ

簷梅

よそまてはしらする程の風もなし軒端にふかき梅の匂ひを

春月

老てなをことしの春はかすむ夜の月を涙になにかゝこたん

春雨

はる雨の空はかすみてくるゝ日におつるも見えぬ軒の玉水

花

見るまゝに家路忘れておのゝえもくちはてぬへき花のかけ哉

身の程の春をはしらていたつらに老となるまて花になれつゝ

落花
雲にのみまかひし花のうらみさへのこらぬ春のあとの山風
留春不駐といふ事を讀る
心して誘はぬ風のひまもあらはちるをやいと丶花にかこたん
花鳥のなこりをあとに殘しをきていつくにけふは春の行らん

夏

人々すゝめける百首歌中に首夏
色も香も袖にとまらて花ころもたちかへてうき夏はきにけり
夏はきぬうす花そめの袖の香もかはるみとりの衣手のもり
杜郭公
ましはしむかしかたらむほとゝきす我も老そのもりの下影
岸卯花
うの花のさきそふころは玉川の岸による波よるとしもなし
郭公過といふ事を讀侍りける
聞殘す人のためとやほとゝきす里をもつか〔わに〕すれなつくすらん
五月雨
ほしかねていくかへぬらん河内女か手ひきの糸の五月雨の比
さきなかすにふの河水まさるらし舟もかよはぬ五月雨のころ
鵜川
かゝりさす早瀬の川の鵜かひ舟のほれはあくるみしかよの空
七十首歌の中に池蓮
風わたる水のこゝろもすゝしきは露の玉ちる池の蓮葉
夏草
をとはかり影ゆく水のすゝしきはしけるうき田のもりの夏草
夏祓
河風もみそきの袖に吹たちて秋にそかゝる涙のしらゆふ

秋

早秋
音かはる風のほかにも夕日さすおかへの松に秋は見えけり
荻風
吹たひに露はとまらてなみたのみ袂に殘る荻のゆふかせ
河荻
あき荻のしたゆく水もをのつから花の色なる野田の玉河
秋夕
山かせの身にしむ色のいかならんみやこの空も秋のゆふ暮
なかめわひ身のうき事もあはれさも思ひそわかぬ秋の夕くれ
露
我なみた秋のあはれにおもなれてをくともしらぬ袖のゆふ露
寢覺鹿
つま戀のおもひつきせぬ鹿の音によその寢覺の袖もぬれつゝ
五十首歌中に嶺月といふを
あらしふく嶺の木のまを出かれて松の下てるゆふくれの月

人々によませ侍ける月歌中に
うき秋をなくさめなからはては又なかむる月に袖ぬらしつゝ
河霧
朝日やまみれもふもともたつ霧に漕いてゝまよふ宇治の川舟
夕霧といふ事を
殘るかと見えし日影もくれはてゝきりにしつめる遠かたの山
紅葉瀉（寫歟）水
龍田河うつろふ影もかはりけり嶺のこすゑをそむる時雨に

冬

冬歌中に
夕つく日うつろふ雲のくれなゐに又ふりいつる村しくれかな
路落葉
山かけのみちは落葉やつもるらん雪よりさきもとふ人はなし
三十首歌中に落葉
庭の面の木葉の秋の色をさへしはしとめしと吹あらしかな
浦雪
わかの浦やいり江の松は雪はれて日かけにみかく玉津島山
禁庭雪
今朝はなとともの宮つこたゆむ覽はらはぬ雪のこゝのへの庭
千鳥
ふけにけりみつのとまりの小夜衛友まち戀て月になくこゑ

戀

七十首歌中に寄野戀
思ふ方に心ひき野の青つゝらくる夜やあると待もはかなし
尋空戀
尋ぬともあとさへ見えし身を秋の霜をく野へのもすの草くき
祈戀
いのれはと賴むをやかて命にてこひしなぬ身を神にまかせん
通書戀
玉つさの通ふをやかてしるへにて戀のたゝちに迷はすもかな
寄簾戀
なにはなるあくやの簾ひまとめてとへかし人のかけて思はゝ
曉逢戀
いつの間にうき鳥の音をいとはましあふも別れとあか月の空
恨久戀
とし月もつもろうらみの戀ころも涙になるゝ袖やくちなん
片戀
とけかぬる人の心はかたいとの苦しやさのみこなたはかりは
五十首歌の中に戀の心を
下にのみいつまて思ひ亂れあしのねにあらはれて人を戀はや
みなといりの芦まをわけて漕舟のいかなる江にか又さはる覽
いかさまにわか兼ことを殘さましわすれん後も思ひいつやと

別路のうきにもたへておなし世につれなやひとり有明の月

雑

浦松

千代ふともよも盡はてし和歌の浦の松をたれなる大和ことのは

七十首歌中に覊中潟

あかし潟宮こもとをしありかよふ夢さへ浪のよるのうきねは

けふいく日都へたてゝあまさかるひなの中やま雲そかゝれる

述懐

我みちも今はあさかの山の井のくみたえなはと袖ぬらしつゝ

うつゝかと思ふまよひの世の中を夢としるより驚かれつゝ

逢後懐舊といへる事を

[illegible]うきをたに昔といへはしのふかな老はいかなる心なるらん

祝言

四方の海や風おさまれる君か代に露もみたれぬあし原の國

九世戸にまいりて夜もすから月をなかめ明して讀侍りける

浪のうへにかたふく月のいり海や夜も明わたるあまの橋たて

松岩寺左府に古今を傳授し侍ける時讀る

この道をあふけは高しあさか山あさくはいかゝ思ひいるへき

返し

あさか山あさくはあらぬ道そとやふかくも人のたつね入らん

春

花になれ行春のうくひす

たくひなきはるの物とやむめかゝの色にも香にと心そむらん

ふる郷の軒端の月のかすむ夜にむかし忍ふとにほふ梅かゝ

なく露は風にみたれてあを柳のはなたの糸をそめてほすらん

しらみあふ木のまの花をひかりにて霞むもしらぬ春の夜の月

くもるとも霞める空はみえわかてふるとしもなきけさの春雨

行すゑの雲のなみちやかすむらんいやとをさかる春の鴈かね

いかにせむおなし山路のさくら狩花にはあはてけふも暮なは

萬代の春をうつしてかゝみやまちりもくもらぬ花の影かな

あかて見る心のいろはうつろはて花にちとせの春もへぬへし

さけはちるならひは花の恨みかな誘ふを風のとかになしても

いつくともかせのやとりはさたまらて空にみたるゝ花の白雪

春ひさすひかりのとかに匂ふらし君かちとせの松の藤なみ

山吹の底にうつろふ影しあれはおられぬなみの花かとそ見る

けふとにしたひなれぬる花鳥のおなしなこりの春の別れ路

夏十首

夏ころもたつをやすきならひともおもはてしたふ花の袖かな

夕やみは月にかはりて白妙にさく卯の花や光そふらむ

まとろまぬ心つくしのそのまゝにまつ夜ひさしき郭公かな

村雨のもりのしつくにぬれつゝもしゐて語らふほとゝきす哉

身をつくしふかきしるしも中〳〵に見えぬ入江の五月雨の比
あやめふく軒の下露おちそひてにほふもすゝしむら雨の空
たれとしもわきてしのはぬ袖の音のむかしこひしき軒の橘
なには人おのれはたかぬあし火そとみるやいり江の螢成らん
かゝりさす早瀬の河のうかひ舟のほりもはてすあくる夜半哉
かた岡の楢の葉わけてふく風にうつる夕日のかけそすゝしき

秋二十首

闘へなるわさ田のいなは吹風にはやうちなひき秋はきにけり
心してたちなへたてそあまの川八十のふなつの秋のゆふ霧
我ならぬ人の袖にもをくつゆやなへての秋のあはれなるらん
ひとこそあれ軒端の荻のをとはして秋風かよふ山したの庵
あたなりや露もてゆつる秋はきの花のまかきの風のやとりは
女郎花おほかる野への草枕名にのみめてゝいく夜むすはん
ふけて行秋もよさむになく虫のねさめかれぬる蓬生のやと
とをさかるあまのをふれにまかふらし浦のとわたる秋の初鴈
高砂の尾上の月のふくる夜にあらしをわけてかよふしかのね
名のみしてくもるもつらし久かたの中なる里のあきの夕霧
秋はなをわきて見よとそてりまさる雲ゐの月のおなし光も
さゝなみやにほてる月にとゝはん古きみやこの秋はいかにと
あくかるゝ心のかきりなかめてもはてなき空の月のかけかな
おもひ出のある昔をもおほえぬに月にはいつの戀しかるらん
なかめやるあはれひとつに行すゑも思ひわひぬる秋のゆふ暮
人とはぬむくらのやとの秋風に思ひある身も衣うつなり
そめわけし露も時雨もあらはれてかたえ色そふ秋のもみちは
ちりかゝるもみちなかれて山川の行瀬の水もふかきくれなゐ
はかなしやしくるゝ雲に誘はれて行衛もしらぬ秋のわかれは

冬十首

曉のねさめの空のしくれまて袖にしられて冬はきにけり
見るまゝに月は空行山のはのおなし雲間にふるしくれ哉
をく霜にかれ野のま葛埋もれてかへらぬ秋をうらみかれつゝ
いたつらにちるや紅葉のあすか風わたるもつらし瀬々の岩橋
よし野河はや瀬のなみのよるをによとむやむすふ氷なるらん
さゆる夜は氷のとこにふしわひてうきねそたえぬ池のをし鳥
代々まてもたえぬ道とや濱千鳥かはらぬわかの浦になくらむ
猶さりにわけこし人の跡たにもけふはたえぬる庭のしら雪
夜のほとにつもりにけりな今朝はゝやまかきの竹の雪の下折
はつ瀬河せきもとゝめぬ年なみに老のほかなる袖もぬれつゝ

戀二十首

限なく思ひいりてもいかならんまよふ戀路のはてをしらすは
見てもなをいつ面影をうつさまし涙にやかてくもるかゝみは
我にのみしけるもつらししのふ草忘るゝたれを人もをしへよ
おほえすよいつの人間にゆるしけん袖よりほかにあまる涙は

おもひかれおつるなみたの瀧津瀬は心の中にせくかたもなし
いたつらにおはぬなけきの數そへてちきらぬ中に行月日哉
我袖もれにあらはれてしほかせになみこす浦の松はつれなし
たえすたつふしの煙にたくへてもなを時しらぬ身の思ひかな
袖はなをなみたのほかにそほちきぬつらきわかれの道芝の露
思ひねの夢のたゝちやいたつらに行てはかへる心なるらむ
なれし夜のおなし袂にやとりきておも影はかりありあけの月
底ふかみ入江におふるあしのねの下ふしならは人にしられし
猶さりの心にかけてまつよひのふけぬほとこそたのみ成けれ
いかにせん我玉のをもたえぬへしいまたになけの情かけすは
はかなくもまとろむ程を契にてあふとみる夜の夢そまたるゝ
ひとりぬる床のさむしろしきしのひ幾夜かつもる恨なるらん
見る月のかけもくもらてあふ夜にそ涙の雨のはれまなりける
さゝ島や磯こす浪のよる／＼はぬれもせて袖をぬらしそへつゝ
むくひとやさきの世かけて恨みまし今更つらき人のこゝろを
須磨のあまの鹽やき衣いかにしてなれにし中のまとを成らん

雜二十首

吹かはるあらしにつれてかへるこゑおのへの鐘のあかつきの聲
あはれしるゆふつけ鳥のねにそへて涙おちそふあかつきの空
かなしきはそのことゝなき夕暮のなかめにかゝる空のうき雲
しつかなるねさめの友とおもふにも泪にくもる閨のともし火
行すゑの山またやまにかゝるこえつる跡の嶺のしら雲
忘れめやみほのおきつのはるかなるきよみか關のあけ方の空
なにはかたなきさたる蟹の浪間よりほのかに見えていつる釣舟
行水のなみのたかせのはやけれはさゝぬにくたるよとの河舟
日の本やみつのはま松年をへてくもらぬ千代の影やそふらん
いく千世も君そみるへき九重や御かきの竹のおなしみとりを
たちかへりみやこの空の月みても思ひそいてむさやの中山
たれにかはやとをもからむ草まくら夕風さむし野路のしの原
うらかせにほかゆく舟のうき枕袖こそぬるれみる夢もなし
こゝろのみ又うき世にやかへらましみ山のさとの夕暮のそら
たちのほる田なかのいほの夕烟よそにみるこそ心ほそけれ
つかふへき道は一つそ君のため神のためにと名をはわけても
[illegible]さても我か身のおもひてになにをして今行末の人にかたらむ
人とはゝいかゝこたへんことの葉もおよはぬ法のふかき心を
くもりなき御世をそてらすます鏡うつす光の日のくまの宮
龜のおのいはねの松のかくしつゝとにもかくにも萬代そへん

僻案愚點廿首

戀歌

たいしらす

新後拾遺卷第十七載之
すまのあまの鹽やき衣うらみわひなをもまとをにぬるゝ袖哉

たいしらす

新古今巻第十二載之
あくかれて我身にそはぬ心こそこひのたゝちのしるへ之けれ

松田丹後守平貞秀集

〔端闕〕

けふみれはあやめをふかぬ軒端こそ中〳〵くさの庵なりけれ

早苗

いそけとも五月も末になりにけりこれやおくての早苗成らん

聖護院五十首歌に

こしかたを思ふにつけて今をさへ花たちはなにまたや忍はむ

よそはゝや明ゆくまてにともしゝては山隠れにのこる夜半哉

五月雨

ひつ河にふれさしわたすかち人の木幡にかよふ五月雨のころ

水邊螢

とふ螢うつれる影やいけ水のそこの玉ものひかりなるらん

かゝりさす影かとみれは大井河いり江をかけてとふほたる哉

三輪社法樂に螢を

そこまてもかけをうつしてみわ河のきよきなかれにとふ螢哉

鵜河

ふきおろすあらしの山の麓にもきえぬ夜川のかゝり火のかけ

納凉

さそなけに涼しかるらんいつみなるしのたの森の千枝の下風

秋

聖護院五十首歌に

しの薄しのひにきゝし風の音のほにあらはるゝ秋はきにけり

色ふかくうつりにけりなあきのゝにさくや眞萩の花のした露

草花

みやきのゝ木の下くらき夕霧に萩のにしきのなかやたえなん

薄露

秋かせの露ふきはらふ花すゝき袖にたまらぬ玉かとそみる

聖護院五十首歌に

秋の田のいな葉をしなみそよくえむれたつ鴈のをのか羽風に

鴈

たちこむる霧のとたえの夕日影さすかに見えて鴈はきにけり

天河こほりをわたるふれなれやさやけき月にわたる鴈かね

朝鹿

をくら山あさ霧かくれなく鹿ははれぬおもひに妻やこふらん

鹿

山の端をいてつる月にきこゆなりおなし尾上のさをしかの聲

聖護院五十首歌に

高砂の尾上のいほやいてそむる月のあたりにちかくすむらん

月

露ふかき野邊のおはなを分ゆけは袖もひとつに月そやとれる

しかの浦やたかよの月の名殘とて昔なからのかけをみすらん（新後撰集に入）

いつるより入まてみるな秋の夜の月には誰かねさめしつらん

聖護院五十首歌に

暁虫

わたの原はるかにみえてかきりなく波の千さとをてらす月影

風をいたみ淺茅か露もなくむしもわかれさめさへ心くたけて

聖護院五十首歌に

夜をさむみ闇ふきこゆる秋風にころもうつなりすまのうら人

紅葉

千しほにもあまりてそめよ雨露の恵をうくるよものもみち葉

聖護院五十首歌に

うつりゆく秋の日數もくれなゐの色とそみゆる峯のもみち葉

冬

初冬

ふみわけて誰かはとはん木葉ちるいまよりのちの冬の山さと

時雨

かくてたに色をやそむる紅葉はのちりしく庭に時雨ふるなり

聖護院五十首歌に

晴くもる夜半の時雨やみすもあらすみもせぬ夢の枕すくらん

寒艸

住吉の岸なる草の共名さへわするはかりに霜かれにけり

冬月

山河のこほりのひまを行水にたえ／＼やとる冬のよの月

氷

これやこの海にもいてぬしかま河さなからこゆるみつの白浪

千鳥

冬さむみふけゆくよさの浦風にいくたひわたる千鳥なくらん

水鳥

あしかものこやの池水こほる夜は猶をしとりのなかや隔てん

雲

とはれぬをならひと思ふ山さとにいまさら人をまつのしら雪

はては又あらしのをともとふ人もまつにたえぬとつもる白雪

難波江やなみもこほりてふる雪になをうつもるゝたま柏かな

たこの浦やさこそは富士の陰ならめふらぬ日もなく積る白雪

聖護院五十首歌に

箸鷹のおふさのすゝにふりそへて霰たまちるうたの御かりは

神樂

あけぬるかのころ庭火の影なから空にまれなるはしうたふ也

聖護院五十首歌に

うつりゆく月日のかすも今さらにおとろかれぬる年のくれ哉

戀

初戀
分わひぬ思ひ〔や覧典〕かてしろへとはたかゆるしける戀路成らん

寄風戀
たのましなめにたにみえす吹風の跡なき空のしろへはかりは

忍戀
我袖にありとはしらし〔さ覧典〕しのふ山したゆく水にかくるしからみ
涙河せくにつけてやまたるらんかけしよいまは袖のしからみ

寄笛戀
徒にれをのみたつる笛竹のあなうとたにもいかてしらせん

寄筏戀
あさき瀬にたゝむ筏も末つゐにかよふたよりはありと社きけ

祈戀
なからへて猶祈りみん戀しなは身のつれなさは神やうくらん

契戀
むすひなく契のまゝに下ひものとくるはやすき心ともかな

待戀
今こむとまつ夜もふけぬ逢事はかたふく月のかけになるまて

絶戀
右の集に入
さもこそはあさき契のすゑならめやかてせたえし中河の水

寄筵戀
なみたにやはや朽はてん限なく身にしきしのふ閨のさむしろ

恨戀
忍ひきて思ふはかりもいはれぬやなを身にのこる恨なるらん
うき人のつらさなからもおなし世にあるを頼むや命なるらん

雜

古寺鐘
なはつせの鐘もまちかしすか原やふしみのさとの夕くれの空

橋上苔
もろとなき岩やのまへの岩橋も露をくはかりこけむしてけり

聖護院五十首歌に
久方の雲井をわけてひゝくなり音さへたかき山のたきつせ
通路をたれのこすらん山ふかみ岩ねにつゝくこけのかけはし
何故に猶いにしへを忍ふらんありてかはらぬもとのうき身は

述懷
つかへつゝ三代にもおひぬ數ならぬ身の思出とこれそ成へき
水くきにかきなかしてやとの葉のみしかき心あらはれもせん

崇德院御影堂法樂歌にり文字をかしらに置て懷舊
を
りうひむのにほひも殘るさむしろを誰しきしのふ昔なるらん

寶篋院贈左大臣かくれ給ひて又のとしの春よみ侍る
ことしこそ泪に月をやつしつれ霞むならひをなにかこちけん

元妙法師新千載集にもみちの歌を撰入られて四月

に身まかりての丶ち僧正宗緣すゝめ侍し歌の中に

哀傷を

言の葉にそめし紅葉やのこしけん秋をもまたぬ人のかたみは

一切天人皆應供養

あまつ風ふきにけらしなたむけ山花の色かもそらにみつまて

首楞嚴經妙性圓明離諸名相本來有無世界衆生

まよひつる身のうき雲にさはら｜こゝろの月の光なるらん

普門品若爲大水所漂稱其名號即得淺處

名取河ふかきにしつむ埋木もあさきせよりやあらはれにけん

寄花神祇

名にしおふさくらの宮の榊葉にまたかけそふる花のしらゆふ

神祇

住よしの神のちかひをまつの葉にかけてそたのむ和歌の浦波

十禪師

末つゐにまよひもはてぬやみちとやいく有明の月もいつらん

北野社にて

さりともとたのみをかけて祈る哉あら人神のあらたなる世に

祝言

和歌の浦や道おさまれる時をみてあつむる玉は千代の數かも

點歌詠草歌數百卅二首とあり。

社頭早梅

神かきの冬木の梅のにほひさへ夜のさむきにあらはれにけり

湖雪

みれは又きり立こめてさゝ波のをとまてしなきおきつしま山

鹿

花すゝきたかたまくらとなりにけん結はぬ夢をたゝか鳴なり

旅月

わかれこし都の秋のおもかけを月にそのこすまのゝかや原

秋田

あま人のかるてふ袖のみなと田にいなはもさはく秋風そふく

橋落葉

山風のたち葉衣をかたしきてねぬ夜やさむき宇治のはし姫

橋霜

かさゝきのわたさぬ橋もかつらきや霜夜のかれにあくる空哉

水郷

わすれしな花と月との名殘まてなにはにみつの春秋のそら

螢知夜

ふけゆけはあまのいさり火たきすつる跡まてもえてとふ螢哉

江雨鷺飛

難波潟おなしふるえにたつさきのみの毛もしろき雨のうち哉

不逢戀

おしからぬ命なりともなからへて人のつらさの限をもみん

絕恨戀

右の集に入

かくはかり絕ける物をくすかつらくろ夜をかけて何恨みけん

懷舊

古へにかくやはありし老て身の何につけても果しうけれは

渡船

いつとなく人をも身をもうき船のうきてやわたすうちの川長

旅

行すゑを月にやたのむあつまのゝ道にくれぬるけふのたひ人

湖上千鳥

亦人のやかぬしほつの山かせもさゆるみきはに千鳥なくなり

礒巖

さゝれ石のなれるむかしを人とはゝいかゝいはほの礒の松風

續群書類從卷第四百四十二

和歌部七十七

心珠詠草

榮ふへきたからをおします。たもつへき國を捨て。佛の道にいる人は。五天のいにしへよりためしおほかれと。あかりての世にはさもやありけん。すえの濁にはかたかめりかし。さるを此禪人は志賀のうらはの波しつかに。つくまの野邊の草なひきおさまれる世をへしかとも。とこの山の床はなれて。雲風に身をまかせしより。石のうへをたのしひ。うへ木の下をしたひて。三衣一鉢を具し。無法の法を心にえしかは。其名を長くつたふとそいふならし。されとやまとことの葉は天地とともにひらけしをはりなれは。世を捨ても身にしたかふをわさにて。花に染月にめつるも。おのつから佛祖の正覺なれは。道にふけるとはなけれと。言葉の塵數おほくつもり。むかしの濱松の一木も。今は和歌の松原としけりあひにけり。かくいふおきな。もとより庭のおしへおろかにして。なをきもゆかめるも。わきまふへきならねと。愚夫のまなこにも光ある玉はしろき物なりけれは。水莖の岡の葛葉。あまたかきあつめし中を折々ゑらひとりしかは。もゝちも六はかりにやあまり侍りぬらむ。代々のみかとのあとをつきて。ふることもとめ給ふ世にあふこともあらは、こと葉の海に年ふる龜のうき木をまちいつる。おりもなとかなからむ。番々出世の佛ひしりも。言の葉をはのこすわさなめれは。修多羅といふとも此一まきにはすきさるへし。よりて心珠詠藻と名付けるにこそ。

于時永祿壬戌季夏下澣　江東遊子實澄記之

心珠詠藻

春部

年内立春

春はけふまたとし越ぬ空とてや雪にしられぬ四方の山のは

このみちにあひともなひし駿河國津穂寺慶雅律師青蓮院のもとより元日に申送られし

むすふてに氷は消て年波の猶さへかへる今朝の若水

返し

若水と汲かふる春も年波の越てかへらぬ老そくるしき

山家立春

たれこめて雪のみ深き山里は日数かそへて春やしる覧

早春山

年越てあふ坂山の霞むより關のこなたも春を知かな

早春水

老の波身に社こゆれ年毎に立かへり汲春の若水

甲斐國居住の時武田大膳太夫晴信亭の會初に天下皆春

世を惠む春は東の君なれは八隅もらさて立霞哉

同會當座に子日

春毎にけふひく松の數そはゝ幾千とせとも君は限らし

同しこゝろを

子日して幾萬代か君はへん松のよはひに年を重て

子日する野邊に一木の松高みたか世の春か引殘しけん

永祿三年駿河國居住の時三條大納言殿御旅亭御會に霞遮月

秋のよもさやかならすは霞にやまかせてみまし老の月影

若菜

二道にしな社かはれ春くれは年も若菜もともにつむなり

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉りし時求若菜

かき分て野をやつくさむ袖寒み若菜は雪に色みえすとも

田若菜

野邊はまた雪間なけれは袖ぬれて外面の小田に若菜をそ摘

殘雪

吹ためし去年の嵐に（のイ）ほとみえて消るもおそきたにのしら雪

木殘雪

常盤木の色に心を留てや雪の梢もつれなかるらむ

梅

誘きてたえすも匂へ梅花袖にはとめぬあらし成とも

雪中梅花

匂ひをそ留ておらまし白雪に咲そふ梅は色わかすとも

雨中梅

色も香も親のいさめの春雨をうけてまつ咲花のこのかみ

白梅

白妙の梅は色にし染かへて匂ひや花の千しほ成覧

梅風

誘とも木のもとさらぬ匂ひ哉花の盛の梅の下かせ

大空におほふはかりの梅かゝは乙女の袖や誘ふはるかせ

軒梅

一木にもあたゝかなれや埋火のかたへうめ咲やとの軒はゝ

植置し人の心のいろまてもしられてにほふ軒の梅かゝ

行路梅

吹送る梅の匂ひにゆく／＼も木の下さらぬ袖のはるかせ

梅處々

何れより先とひて見ん咲梅のひとかたならぬ宿の立枝を

梅花久薫

くりかへし猶あかなくに梅花匂ふむかしや賤のをた巻

紅梅

紅に猶やこそめの梅ならむ花に時雨のふるよなりせは

落梅浮水

梅かえのしつみし影も池水にちりてはうかふ花のさゝ波

若草露（ねイ）

もえ初てまたしもしらぬ若草に露の契もいかゝ結はむ

柳

河そひの柳木ふかき朝な／＼水も梢もけふるいろかな

柳弁春

いとよはくなひく柳に春風のちからすくなき程そ知るゝ

武田大膳大夫正月會始に同し心を

佐保姫の手染のいとか色はへて露の玉ぬくはるの青柳

おなしき宿所へ冷泉大納言殿おはしまして當座一續けしに岸柳

たをやめの打たれ髪か青柳の岸のひたいにかゝるみとりは

柳風

春風のよに長閑きも枝よはき柳より社吹習ひけめ

朝露のしらぬ計に音信て風は柳のいともみたさす

春風にうこくと見えて道芝の露のみはらふ青柳のいと

天文十八年三條大納言殿へ百首奉りし時柳似煙

絶す立煙とみえて春風に吹もとかれぬ青柳のいと

歸鴈

住里の遠近さそと歸鴈をくれ先たつ日數にそしる

みよしのゝ春をもよそにみつゝ行鴈は心の花やなからむ

常世にて月にさこそと思ふかな花にうらむる鴈の別を

遠歸鴈

遠さかる名殘いまはと行鴈のあと消やすく霞む空哉

かへり行雲のはしかき絶々に霞てうすき鴈の玉章

見るか内につはさは消てかへる鴈雲のはつかに聲そのこれる

雲端歸鴈
更にいまかへるや雲のはしかきもうはの空なる鴈の玉章
歸鴈越峯
住かたのなのれ〳〵にかはれはや峯もあまたにかへる鴈金
浦歸鴈
うす墨のあしてゝ見えて難波江や霞む夕に歸る鴈金
春駒
もえ出る芝生を床とふし馴てのへをはなれぬ雲雀毛の駒
名所春曙
難波江や蘆のみるめのすさひにも心やはなき春の曙
志賀山越
ふるさとゝ成にし跡の春までも花はむかしの志かの山越
花
徒にいつまて我身あくかれん咲やらぬ花に行かへりつゝ
あくかれて幾えか越し山櫻人たのめなる雲のよそめに
目にはみて手にはとられす守花の色香を何と家つとにせん
先たつもおくるゝも今花見にといはぬ人なき春の山ふみ
いとはしな花に立とも山櫻色わくほとの霞なりせは
曙の峰に霞の色こきは花や八重たつ雲と咲覽
櫻花人の爲にもうへ置ん我よのすへの春はなけれと
芳野山花より花にうつりきて袖もをすそも匂ふ春風

見もあかぬ心は花にそひなから誰か身なれはか立歸る覽
春までの心つくしや櫻花まつとちるとの梢なるらん
花のみも都は花の錦かな柳のいとを折ませすとも
かつちるもさかぬも咲も様々に一木を花の千本にや見む
かれて見ぬさはりも嬉し色も香も今を盛の花にきぬれは
年毎にまつとちるとの二道に思ひをつくる山櫻かな
花の色も一しほなれや此春をかきりと老はおもふ名殘に
春の頃花澤と云山寺にまかりてかへさに文次齋孝
阿彌へ花につけて遣はしける
君か爲手折てそこし山櫻いさとさそはん山路ならねは
返し
ゆきてみぬ恨はあれと一枝の情の色は花もおよはし
春寒花遲
うち出る波の花さへさえかへる谷の氷にむすほゝれつゝ
待花
時の間もしたふ習をおしまぬや花まつ春の日數成らん
天文十九年三條大納言殿へ百首奉りし時同し心を
待ほとの恨やをはむ山櫻花は心のなきよなれとも
漸待花
あくかるゝ心もあやし咲頃の花の日數は兼て知れとも
山家待花

柴の戸に猶そまたるゝ山櫻のかれ世をのかれさくイ本ノマヽ花とみしより

翫花

をのつから散をかきりに手折もてさそふ風には花をまかせし

折花

手折もてかへる人社花に入山くちしるきしるへ成けれとイ

木の下に旅寢居イして猶ちるまても思はぬ花や折かへる覽

いつれそと見れは心のうつりつゝ分て手折ん花の枝もなし

盛なる色もおしまて折人の花には風を何いとふらん

見る人をうしとや花を手折もて歸る山路に鶯の啼

花錦

いたつらに霞のたつもをしきかな四方の梢の花の錦を

雨中花

花もうきよには心をとゝむなといさめかほなる春雨の空

はなやしるあかぬ木陰に立よりて雨にはぬれぬ心なりとは

武田大膳大夫年始の會に朝花

天の戸はにほふ霞にとちられて花より明るよもの山のは

終日對花

めかれせす花にそむかふ櫻戸のあくれ（脱歟）は出てくるゝかきりは

四辻中納言殿武田大膳太夫尋程寺といふ所に花見

におはして當座に題をさくりて見花日暮

くるゝをもあかぬ色香に忘られて花に驚く入相の鐘

夜思花

あくかれて思ふ頃とや春のよの夢にもさらぬ花の俤

花未飽

色香とてあく時やあらん山櫻花は千代ふるならひ成とも

板垣東光寺と云禪院に武田大膳太夫おはして詩歌

有しに同し心を

露の身は消ての後もあかすのみ思ふ心や花にのこらむ

見花忘恥

わすれつゝ色香にめてゝむかふ哉老ては花もいとふへき身を

寄月花

春のみとかきるもつらき花盛とことはに住月もあるよに

永祿四年駿州國府一花堂といふ時宗寺に三條大納

言殿おはして連歌の後一續有しに同し心を

ちる習ひなき花もかな月のことみちてはかくる色か成とも

山路尋花

今日も又いくえの峯か越つらんまた咲やらぬ花をこゝろに

霞めたゝ心にかけて櫻花たつねはまとふ山もあらしな

二月の頃建穗寺へまかりて莊嚴坊といふ所にて一

續有しに同し心を

またきより雲の空めに馴〳〵て花にそよイまかふ春の山ふみ

山花

嶺高みたてるも花の姿とはしらてや雲の猶かくす覧
見てそ猶みぬ春ことのおこたりの花にくやしき山櫻かな
先さけと都の花を待かほに春をいそかぬ山櫻かな

花滿山

咲しより雲も霞も消なくに花のみ埋む四方の山のは

永祿九年明融（冷泉大納言爲御息(爲和)）御旅亭御會に同し心を

降つみし去年のみ雪の俤を花にのこせる山櫻かな

天文五年冷泉大納言殿より名所廿首の題給て芳野

花をみてうき世わするゝ所とや山はよし野と入はしめけん

同しく春高砂

高砂や尾上の花にうつもれて聲おほろなる入相のかね

故郷花

朽のこる木のもとことに思かなみぬよの春の志賀の花園

駿州今林寺花盛に今川治部大輔（義元）おはして一續有しに同し心を

これも又よるの錦か舊郷〔昧樂〕にみる人もなき花の色香は

武田大膳太夫尊䅣寺花見におはして當座に題をさくりて古寺花

よしや花明日は雪とも古寺や年にまれなる君しきませは

同しく晴信術所庭の花盛に木の元にて酒宴有て人々歌よませられしに

木のもとは花の光のさたかにて櫻をよそにくるゝ空哉

落花

春風よ誘ふはあたにちる花の根にかはる心をやしる
櫻花ちらはよるちれ名殘あるやみのうつゝにも夢やまかふと
一かたにおしみもはてし櫻花ちらすは後の春も咲めや

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉りし時花雪

ふりくるもちるもかはらぬ木の下に消ぬや花の雪とみてまし

花隨風

春風の心もしらすひたみちにさそはれて行花そあたなる

花

梢をは嵐と共に落そひて花も岩越す瀧のしら浪
山風にちり浮花のよしの河あやなく春のよとむ瀬をなみ

落花浮水

ちり浮をよし野の山（河イ）のよしやとも思はぬ花のうき名殘かな
風のみのとかにはなさし春の花散ても誘ふ水のこゝろを
雪とふる名殘やいつこ山櫻きえすは有とも花の下水

花

吹たひに風そみせける殘るともしらぬ青葉の花の梢を

曲水宴

行水にまたことの葉はよとめとも流てはやき花の盃

喚子鳥

鳴聲を聞て中々喚子とりおほつかなきは山路成けり

苗代

しめはへて種かす小田の苗代にあまりて落る水のみなくち

路苗代

いく千町かくる田面そ川そひのみちまてこゆる苗代の水

春月

有明の影きゆる迄霞つゝ明て中々空そよふかき

春月幽

分てよも春とて空（かけイ）はくもらしを霞や月の名立成覽

霞さへ月にはつらき春のよを猶あやにくのむら雲の空

さらてたに霞ならひを老か身に又ひとしほの春のよの月

武田大膳太夫月次會に同し心を

霞をも涙にくもると計に老をそかこつ春のよの月

雲雀揚

あらはなる芝生の床に臥侘て雲井かくれに鳴ひはりかも

大空はくもる計に霞む日もあかる雲雀の聲のさやけさ

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉りし時同し心
を

鳴あかる聲はかりして夕雲雀それともわかす霞む空哉

春虫

梢よりかつちる花は亂れ飛小蝶に似たり庭の春風

藤埋松

咲藤の花はみとりをうつめとも松をあらはす風のをと哉

藤遶松

うきみるのよるかとみえて藤浪の風にたゝよふ磯の松かえ

藤花盛久

松かえの梢をこゆる色のみか夏まてかゝる春の藤浪

咲かゝる松に習てつれなくも夏のかきほをこゆる藤浪

武田大膳太夫宿所に三條前内大臣殿冷泉明融をは
して一續有しに池上藤

池の面にうつろふ藤の花かつら水底かけて深き色かな

浦藤

色ふかく咲そふ藤の花かつらかけてそ匂ふ田子のうら波

春欲（にイ）暮

老か身もはやき日數をかそふれは暮行春のをしきのみかは

暮春

暮て行春の別も老か身は是やかきりの名殘ならまし

暮行をいかゝはすへき又もこん春と思はぬ別なりせは

花は根に鳥は雲路と行春にをくれてひとり立霞哉

暮春殘鶯

春ははや名殘すくなき日數とや鳴音もよはき老の鶯

閏三月のこゝろを

かされても花しさかれは甲斐もなし日數計の後の彌生は

夏部

更衣

衣をはうすくかへても染あかぬ心の色や花にかへらむ

世をうしと思ひ捨ぬる心もてけふたにかへぬ墨染の袖

すつる身はかふる名殘の夏衣花の色にもそめぬ心そ

けふきても春のかたみに櫻色をかへぬや雲の衣成らむ

新樹

時雨をもしらぬ梢のわか楓たか染いたすちしほ成覽

秋は又ちしほに染る色やみむ花も青葉にかはる梢を

人の夢想の歌を句のかみに置て人々によませられしに卯花（羅）

らむ菊に霜置色もかく社とくるゝ笆に咲る卯花

里卯花

卯花をしるへにそこしゆふつくよ光待まの玉川の里

あやにくに春を隔る垣根とや夏をも埋む雪の卯の花

端午

色々の花にあやめを引そへて今日は玉ぬく袖そわかれぬ

夏祝

玉の緒もあへれと誰も長き根をけふことふきに引あやめかも

郭公

春も又近き名殘かほとゝきすやまふきの色に染る心は

いほり多き名には立とも時鳥誰か住里も鳴音かたらへ

聲しけくなけ子規いかて（いはてまつイ）さす世のことはりは人に有とも

時鳥聲なをしみそ人にこそことは多きはうきふしもあれ

ほとゝきすなのか五月を花になけ聲ちらすなは誰もおしまし

啼さして日數をおくる郭公またはつ聲と人にきけとや

待郭公

難面と思ひ捨ても待なれし心はさらす山（にイ）ほとゝきす

人傳郭公

深山よりいく人つてそほとゝきす都に語るけふの初音は

霍子鳥鳴つといふにけさは先人のもらせる初音をそ聞

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を

ほとゝきす人の語にしられけり我に難面聲の日數は

郭公未遍

世の人のこと葉おほきを時鳥思ひ知てや鳴音すくなき

聞郭公

まち佗て明せしかひの限（すイ）り有てあふよに成ぬ山時鳥

まち侘て（えつるイ）心も更にほとゝきす中々つらき一聲の空

夜郭公

夢とのみたとりし聲を現そと今宵定よ山郭公

（ねられねよ老ゆへそきく時鳥更行月のよはの一こゑイ）

曉郭公

ほとゝきす寢覺の空に聞しより老も嬉錦初音成けり

時鳥驚夢

思ひ寢の夢と定めむほとゝきす覺て現の聲なかりせは

文治亭旅の宿所へ三條大納言殿をはして一續有し

に郭公早過

ほとゝきす夢路わかれぬおやなさをうつゝにかへす一聲も哉

山家時鳥

世をうしと思ひしらすは山里みなと出かてに啼ほとゝきす

よの中をなれもうしとや出やらて我にともなふ山時鳥

時鳥初聲きくを山深くのかれ住身の思ひ出にせん

住人はまたて初音や聞てまし世に出ぬ先の山ほとゝきす

杜郭公

時鳥たゝ一聲の名殘ゆへはや立ぬるゝ森の下露

海邊郭公

ほとゝきすつなてにはあらぬ一聲に引とゝめたる湊船哉（とめらるゝイ）

菖蒲

故郷はいとゝ草にややつれまし刈葺けふの軒の菖蒲に

池菖蒲

ひく袖の匂ひにわかん菖蒲草まこもましりにしける池水

天文十九年三條大納言殿へ百首奉りし時早苗

いとまなみ小田のますら男五月雨に晴間もまたす早苗とるへ

潤五月十三夜雨はれて月さやかなるを興して武田

大膳太夫亭にて酒宴ありて人々歌よませられしに

よころへて思ひし月も五月雨のはるれは晴る影をみる哉

瞿麥

とこ夏に咲ことの葉の種ならてしけれはいとも花もましらす

うすくこく置しを見れは撫子の花社露の色を染けれ

慶雅律師の許よりなてしこの花につけて

ことの葉ゝかゝる夏野の茂みにもひとり色わく撫子の花

返し

なてしこの夏野の露はしけくともかゝる言葉の玉やなからん（にイ）

夏草

百種のことの葉しけき夏野とや花咲しなもすくなかる覽

かよひこし道も今更夏草にまとふ斗も茂る野邊哉

天文十七年三條大納言殿へ百首奉りし時おなし心

を

かすかすに繁き夏野の百種に一花もなきことの葉そうき

夏月

すゝしさのむかへは袖にうつりきて月にをほえぬ夏の夜の空

夏月易明

ほともなく明る雲路を行つくす月やくるしき夏のよの空

草庵月次會に同し心を

夏刈の芦のよわたる影みれはつかのまもなき月の頃かな

水邊夏月

水の面にうつろふ影は夏なから結ふ氷とさゆる月哉

夏月凉

月のうちに秋やはやとる見るたひに夏としもなく影の凉しさ

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉りし時螢

いへはえの思ひなれはや飛螢うきれになかてもえてみす覽

夕立

夕立のもよほす雲に大空のくもる計も袖そすゝしき

山風の先誘ひきて村雲に雨はなくるゝ夕立の空

あま雲のよそにも夏の成行かさすかにきほふ夕立の空

蓮

池ひろみはらふ風なき蓮葉にひとりもゝろき露のしら玉

蓮葉の色はにこりにしまれとも匂ひはうつる袖のうへかな

荷露成珠

にこりにもしまぬ心にみかきてや玉をあらはす露の蓮葉

納凉

すゞしさは立よる影も住吉の松に吹くる興津鹽かせ

納凉忘夏

夏の日の暑もいまは忘れ水せき入てあかすむすふ袂に

樹陰納凉

岩枕なるゝ清水の柳かけ秋にそむすふうたゝねの夢

文治亭旅の宿所三條殿おはして一續有しに納凉遊

興

むすふより夏の日影を忘井にしゐていそかぬ月の暮哉

泉

世ににころ身をはちてみよ泉川結手清き水の心に

六月立秋

みたらしの御祓はまたき六月の夏の内野の秋は來にけり

夏祓

御祓して河瀬凉しき夕風に積る心のちりものこらす

夏の日もけふ六月の御祓する川瀬に秋そ立はしめける

天文廿年三條前内大臣殿甲府御旅亭に武田大膳太

夫參られ御會有しに同し心を

御祓する河瀬の波に風越て夏のこなたに秋はきにけり

秋部

武田大膳大夫月次會に早秋

夏の日の名殘もしるく今朝はまた袖におほえぬ秋の初風

早秋風

荻の葉はおとろかさても月かくす雲霧にふけ秋の初風

初秋風

吹あへぬきのふけふさへ身にそしむましてふけなむ秋の夕風

初秋露
荻の葉のおとよりも先秋そとは露にしちろゝ野への淺茅生
七夕
數ならぬ言葉の塵も天河けふの手向に書やなかさむ
あふことのかはらぬほしは僞のなき世の先や契初けん
七夕のこよひひとよの程はかり涙のふちもあふせとやなる
天文十五年冷泉大納言殿より七夕七首の題を給はりし中に同し心を
織姫のまれにしとくる下紐や長き契に結ひかへてん
七夕雲
あやにくにたちな隔そ稀に逢ニの星の中のうき雲
七夕草
七夕の稀にしかよふ道しははたとろ斗やおいしけろ覽
七夕木
七夕の袖の時雨や今朝よりも木の葉を染る初めならまし
七夕船
織女のけふのあふせにいく年そわたりなれけん天の河船
七夕橋
逢ぬまもかよふ心は諸共に絕すやわたる天の河橋
七夕後朝
今朝は猶袖や露けき七夕の又こむ秋を思ふ涙に

星河槎
天河渡るもつらし逢かたき龜の浮木を中のしるへに
永祿四年三條大納言殿御旅亭七夕御會同し心を
天河のりしうき木のよかたりに星の契やあたにもれけむ
同しく大納言殿七夕御會に星夕晒書
七夕や手向うくらし鬼神も哀ふふみの大和ことの葉
明河如練
織女のなるてふきぬの白妙にほすやと計あまの川波
天河波も折はへ白妙の袖かとまかふほし合の空
永祿九年七夕三條大納言殿御旅亭にて御息侍從殿御會初に織女契久
七夕の絕ぬを賴む契とや稀なる中にかへて逢らん
萩
見もあかて手折人社萩か花思ふ色こきこゝろ成らめ
はらふへき風をは置て啼わたる鴈の聲まて萩の葉の露
忘めや萩か末野の朝露に月影のこゝ花の匂ひは
庭萩
うつし置庭の小萩に同くは鹿の音そへて聞暮もかな
天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時行路萩
舊鄕にかへる袖ともみえやせん道行すりの萩のにしきは
秋心寄萩

いささらは手折て袖に秋萩をすれる衣となしてたにみん

萩盛待鹿

露の上の風にもあらて鹿の音を花やはまたぬ庭の萩原

今川上總介氏眞家の會に人にかはりて同し心を

うつし植て見しにはあらぬ宮城野もよそにたつれぬ庭の萩原

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉りし時萩風

吹しきて音にはたてぬ小夜風のよはれはそよく庭の萩原

夕萩

暮毎に吹よる風の音聞は荻こそ秋のやとりなりけれ

永祿三年三條大納言殿相州御下向の時御供にめし
具せられ侍て小田原御旅宿御會當座に寢覺荻

老ぬれは寢覺になれて荻のはも夢にさはらぬ風の音哉

軒荻

軒近く植しもくやし秋風の憂をしらする庭の荻はら

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉し時初鴈

常世出し別も近き名殘とや初鴈金の鳴てきぬらん

初鴈幽

秋の夜の寢覺の空にたとる也それかあらぬか初鴈の聲

武田大膳太夫月次會に寄鴈思友

年毎に秋をたのむの鴈ならは雲井へたつる友もうからし

草庵月次會に外山鹿

露しくれぬれて思ひをしからきや外山の鹿の音に立てなく

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉りし時鹿隱霧

秋の色は峯もふもとも埋れて霧の底なる小男鹿の聲

夕露

いかにして數もしられぬ夕露にくたけて月の影やとすらん

露結成霜

おく露の契も霜にかはれはや草木も友に色枯ぬらん

川霧

霧の内に河をしるへと渡船河せまとはす行かへるらん

霧

行袖はそれとわかれす霧の内に遠方人の聲はかりして

槿

淺からぬ契りかあやな朝かほのともに消ぬる露の心は

駒迎

名に高き月を雲井の庭にみて心くもらぬ霧原の駒

八月十五夜

秋きての其名そ高き久方の月も桂やこよひ折けん

名にしおふ今宵の空にくらふれはなへての秋の月は月かは

秋のよをかそへぬ先になかはそと空にしらする月の色哉

八月十五夜雨ふりけるを

月社あれ名をはかくさし秋のよのなかは時雨る空もあやなし

永祿九年三條大納言殿御旅亭名月御會當座に十五
夜晴
名にしおひて人の心の雲霧も月に晴たる秋のよのそら
月
風の音置露よりも秋きぬと目にさやかなる月の色哉
誰もみよ世に住からの月に社かけやすからぬ雲のかゝれる
山月
影さはる木の間ならても出入に心つくしや山のはの月
天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉りし時見月
老てみる光そあらぬ秋のよの月はむかしの空にめくれると
逍遙院殿（三條内大臣實隆公）十七年同御嫡孫大納言殿御誓有
し時人々歌よませられしに雲間微月
村雲にかはれる月の影なれや木の間をよその心つくしは
月明風又冷
雲霧もはらひつくしゝ風の跡に身にしむ斗すめる月哉
永祿六年三條大納言殿御旅亭にて御夢想の連歌の
後一續有しに晴後月
はるゝともたのみはてし村雲に空定なき秋のよの月
永祿三年三條大納言殿相州小田原御旅亭三首の御
會に雲不及月
風ならぬ影もやはろふ更行は月にかくるゝ秋のむら雲

月色如昔
むしの音のすたかさりせは照月を空にはいかて夜と知まし
依居月明
一しほに見はやすやとに哀なる月はいつくの空もかはらし
明豐御旅亭御會に月前遠情
見る人は千里の外もかく社と思ひやらるゝ秋のよの月
草庵月次の會に山家月
山に入心を月に習ても世にいてゝすむ影はうつさし
天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時翫月
諸共にやとりならふる身にしあれは影をもわけそ秋のよの月
永祿四年三條大納言殿御旅亭御會三首に月前來客
とはれつる今宵の空を思ひ出は月みるたひに友やまたれん
永祿四年三條大納言殿駿州三保の明神御參詣の時
於神前御會二首に砂月
月にめてゝ積りしよゝのとの葉に濱の眞砂のいつれつきせん
河月似氷
龍田川水にやとれる月影はわたれと絕ぬ氷なりけり
永祿四年三條大納言殿三保に詣給ひて濱邊にて夜
更るまて御酒宴有て人々に歌よまれしに浦月
めくりくる月にむかへは違世も俤うかふ三保の浦波
遠島月

今そ思ふみぬをこたりも松島やをしまの月を老と成まて

舟月

朝霧に明は中々まよふとや月の明石をいつる船人

永祿四年三條大納言殿御旅亭名月御會三首に月隔松

つれなさの色に光をかはすなよ月まつ山の峯の松原

武田上野介宿所に四辻中納言殿おはしまして御酒宴の中題をさくりて竹間月

吳竹の末葉をわたる小夜風にしくれぬ月も晴くもる哉

月前鐘

ふけて行身をも忘れて向ふよの月におとろく鐘の聲かな

永祿四年三條大納言殿御旅亭御會三首に月磨鏡

月影やくもらぬ空にみかきても神代をうつす鏡成らん

永祿三年三條大納言殿九月十三夜相州小田原於御旅亭三首に月似玉

明らけくみかきなさはや光なき心の玉よ月をうつして

九月十三夜

長月のころもあやな名に高き影は今宵をかきりと思へは

廣澤池眺望

いつくにも月はすめともわけて猶光はこゝに廣澤の池

永祿三年三條大納言殿御旅亭名月御會三首に月見思盈虧

人の身に思ひ知れとや月もかつみちてはかくる光みす覽

惜月

老か身はかたふく月をしたひても哀いつれの秋迄かみん

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時惜月

なかしとは名のみ成けり秋のよも猶有明の月そつれなき

秋夕

むしの聲荻のうは風萩の露ことをあまたの秋の夕くれ

老らくの身にそおほゆるうき秋もむかしはかゝる夕ならぬを

天文十九年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時同し心

なにゆへと思ひもわかすうきとの心にあまる秋の夕くれ

秋夜長

秋のよは鳥より後もいく度か覺て夢路に又かへる覽

秋夜夢

秋風に夢はたひ／＼おとろけと長き眠の覺る夜そなき

秋雨

佗人の袖ならすともしほれまし秋の時雨の晴間なき頃

野分

花のうへにかへてみまくのほしき哉野分の後の庭の松かえ

秋風

ちらさすも猶吹むすへ草の原露やはよその秋の夕かせ

秋草

花さへもさかぬも色をこきませて野邊は千種の錦をそしく

あたにしも移ひやすき色をいはゝ月草ならぬ花もあらしな

墻葛

秋風にたへぬ籬の葛の葉にならはゝ我もよをや恨ん

秋の頃國々修行に出侍りしに美濃國野上の里を過侍るとて

草枕むすはぬ袖もしほれけり野上の里の露の名殘に

それより青野か原を分行侍るに千種の花盛にみえけれは

みたれ咲秋の千種にうつもれて名のみ青野の花の色々

擣衣幽

佗てうつしつか儘かさよ風のたゆめはたゆむをとゝ聞にて

近擣衣

いをそねぬ枕のいつく衣うつ碪のをとの霜ふかくして

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時寄虫

鳴聲を夕暮毎に尋ねはきかてもなるゝ野への松虫

虫近枕

まはらなる草の庵は虫の音に夢もはかなき露の手枕

武田大膳太夫絶句の詩を作りて四辻中納言とのへしんせられし其和韵人々にすへきよし侍りしに

夕暮の露ふき結ふ秋風に音さへよはくなひく淺茅生

くみ絶し詞の泉わく玉のなかれ久しきよゝのみつくき

さらてたにつらきかり寢の秋のよに涙を添るむしの聲〳〵

紅葉

露時雨いかに染てか薄くこくならふ梢の色をわけゝん

立ならふ中に一木の色こきは時雨の思ふ紅葉成らん

霜をゝてつれなき松を思ふにはいかなる木々の色に染覽

紅葉映日

やま姫のさらすもみちのから錦あかれさす日に色を染つゝ

夕紅葉

〔歌闕〕

紅葉增雨

もみち葉の千入も今はほともあらし時雨る度に色しまされは

嶺紅葉

しくれねと染ます色の一しほや入日に近き峯の紅葉は

重陽の朝武田大膳太夫によみてつかはしける

けふことに君か爲にと折菊は秋を千代ともかきらさらまし

菊

せきあへすなかれてはやき年波を汲てかへさん菊の下水

菊盛開

めかれせす人もみる籬菊の花色も匂ひも今日を盛に

愛菊

見る心うつりやはせん白菊の後に又さく花し有とも

河瀧菊

汲みはやそのもろこしの山川や齡をのふる菊の下水

菊の露落そひしより河水を誰も老せぬくすりとや聞

武田大膳太夫重陽會に閏九月菊

長月のくはゝる年や八重咲も九かされの花のしら菊

殘秋

秋の野はうらかれはてし露霜によはりても猶のこる虫の音

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時九月

盡夜

うしと見し夕も今はしたはれき今夜をかきる秋の名殘に

冬部

時雨

神無月時雨るゝ雲の晴くもり定なき社定なりけれ

人の夢想の歌を句の上に置て歌よませられしに時

雨雲

ぬれてのみほすひまやなき冬のきて時雨につるゝ雲の衣手

初冬嵐

松に吹嵐のをとの高砂や尾上もしろく冬は來にけり

落葉

老ぬれは木の葉しくるゝ音にさへしほれそまさる曉の袖

吹からに一葉殘りて木枯や月にたとらぬ森の下道

天文十九年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時同し

心を

干しほまて時雨の染し木葉とて音さへ雨に習ひてそちる

同しく百首の歌奉し時原寒草

冬枯の淺茅か原の霜の下に殘る小草の色そすくなき

天文十七年同しく百首奉りし時篠霜

さゆるよの霜の篠原さら／＼にとけて寢ぬへき風の音かは

冬朝

風寒き霜の朝けに鳴鳥の聲とけかたき日の光かな

篠霰

小篠原夜半の嵐のをとさえて篠にくたくる玉あられ哉

屋上霰

まとろまてみるよの夢そ覺ぬへしあられふるよの槇の板屋は

遠山初雪

朝ほらけ外山にみゆる初雪やよのまに聞し時雨成らん

天文廿一年三條大納言殿駿州御下向の初御旅亭に

て御會に山峯

ふる雪のうつめは更にいや高き名にあらはるゝ山やふしのれ

山雪

つもりこし山共みえす芹まてうつむ雪には塵ひちもなし

庭に待雪を心の朝な〳〵山のはとのみ今いく日みむ

目にたゝむ聲さへもなく風さえて山はかゝみをかくろ雪かな

半穂寺荘嚴坊にて題をさくりて雪朝眺望

梢まてふりつむ雪の朝といてに目なれぬ山を軒はにそみる

松雪

吹風の音をうつむにしられけり松越す磯や雪の松かえ

永祿六年三條大納言殿御旅亭御會に同し心を

音にてやそれとわけまし白妙の雪の波こす末の松山

雪松樹花

色かへぬ松の梢を白妙の雪もて咲る花そあやしき

庭雪

音たてゝさゆるとのみそ聞しよの風を今朝みる庭の白ゆき

閑居雪

問人のなき身にしあれは我ならて誰かあとつけん庭の白雪

永祿二年三條大納言殿御旅亭御會に雪中保梅

降埋む雪におほはん袖もかなおゝしたてつゝ咲やこの花

水邊雪

冬河やみろ〳〵雪のふる柳をとせて落る瀧の白絲

雪中殘鴈

名殘あれや雪のうちまて故郷を立かくれくろ鴈の一行

武田大膳太夫雪朝申をくられし

我やとはあとないとふと告やらんとはぬよ今朝の庭の白雪

返し

とに出て先とふ君か水くきにいとはぬ雪のあともみえけり

雪の朝三條大納言殿へ申上侍りし

水くきの跡もさこそはしけからめわきてし君か雪の砌に

御返し

君ならて誰かはと待し水くきの跡社雪のあとはみせけれ

寒芦

行船も猶社さはれ霜枯て氷にとつるあしの下おれ

千鳥

月更て河風さむし啼あかす聲もみにしむ友ちとりかな

夜千鳥

寒きよはおのか浦々立ぅかれ空に音をなくむら千鳥哉

河千鳥

河かせも更行まゝに聲消て霜夜の月に千鳥啼なり

冬月

更行は嵐にさえてたえ〳〵の雲の波間の月そ氷れる

冬山月

山の端の色はみなから埋れて雪に出入冬のよの月

氷

落つもりせきし朽葉も今は又氷にゆつる庭のやり水

河氷

更行は音は嵐に殘りつゝ氷にむせふよるの河水

池氷

さえしよの池の氷の朝かゝみ手にとる計清き影かな

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を

夜あらしや吹とちぬらんさゝなみのよりにしまゝに氷る池水

水鳥

水とりのうき寢の夢や亂るらんあしへなみこす夜は（の脱歟）あらしに

鷹狩

かり衣いや袖寒し降雪のましろの鷹のはろふ羽風に

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時炭竈

朝夕のやとの煙にたてかへは冬は炭やく大はらのさと

爐火

年ふけて思ひおこすもかひそなき身はうつみ火の消殘るよに

雪中早梅

あし垣や雪降年の防さへ春にわかれすにほふ梅かゝ

明融御旅宿の御會に同し心を

ふりうつむ雪もおよはす梅の花色より外にもるゝ匂ひは

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時歳欲暮

人の身に月日の數を殘し置てとしはいつくに暮て行覽

歳暮

ゆく年の我身ひとつに積らぬをせめてや老のなくさめにせん

除夜

老の身は夢のまもおしあすからは春そと待し年も有しな

戀部

戀

つれもなき心なりともしたひみよえにしあれはや思ひ初けん

つれなさもよはるをやみん命たに心にかのふ習ひなりせは

つれなさも我こふらくのをく深くしらせはてゝの後や恨みん

かく計誰かなすわさの思ひそと思ふに人をうらみやはせぬ

世中に戀てふことのなかりせは哀もしらしものも思はし

戀わひて寢られぬまゝにみる月を待更すよと人やいはまし

えそいはぬ有しよ頃の根をもあふうれしさに思ひまけつゝ

袖の香の園の戸口に匂ふよりそれと計におもかけそたつ

稀にあふ契は夏にあらぬよもまた宵なからあくる手枕

人の身にならふよもかな秋きても秋なき中のほしの契に

あたし名もせめてあふみとたゝは立ならぬ思ひのよ語はうし

鳥の音にわかれかなしき關路かなまたあふさかと契置ても

衣々を思ひもしらぬつらさゆへ手飼くやしき鳥の聲かな

衣々にしほる袂もあふよはのあかぬ名殘のかたみならすや

閨の内もなくらてかへす衣〳〵の道にまとはゝ人やとかめん

分てなと我しもつらき戀ならんかゝらぬ中の人も有よに

我ならぬ人にも人のつらからは厭はるゝ身もなくさみやせん

身のほとをしらぬ我社はかなけれうきを厭ふは人のとかかは

聞もうし思ふもつらし我よりは人には人のふかき情を

思ひわきつあふ嬉しさにうき數のまさる別のあるよなりとは

さりともの頼計にしたひきてつれなきはてのうきにあひぬる

生る間はかくつらくとも戀しぬときかはさすかに哀とやみん

數ならて人は難面いまはみに恨をさへや思ひ絶なん

且見戀

しらせはや淺香の沼の花の名のかつみし色にうつる思ひは

未通詞戀

鳴音をはいつさたかにもかはすへきはかなき鳥の跡計にも

契二

明日しらぬうき身と思へと涙河なかれてのよを猶や頼む

今の身はたゝかりの間そ諸共に又こんよまてかけて頼ん

契空戀

つれなさのこゝろしらるゝ僞に淺く頼し暮そくやしき

經年待戀

つれなさを待とせし間に幾年の花や紅葉にわかれきぬ覽

不逢戀

あふことを頼む心のつよきにや思ひよはらぬ我身成らん

僞の心のはてをみても猶あふなかきりと頼はかなさ

あふことの有世を頼む心にてつらきなからもしたひきにけり

來不逢戀

あひみてもむすほゝれたる心哉いもゐにとけぬ君か下紐

忍逢戀

世にもらすならひならねと知といへは今夜は共に枕たになし

逢戀

哀いかにあふとしなれはむつことをもまたつきなくに明ぬ此夜は

契二世戀

なかゝらぬ玉の緒とても何か思ふこんよをかけてむすふ契に

逢増戀

かなしさの數まさりつゝあふよはもうれしき事も玉の緒計

隱名戀

恨めしやみるめ計に袖ぬれてなのりそをたにかるよしのなき

後朝切戀

今日よりは長かれとたに祈哉またあふまてと思ふ命を

天文十七年武田大膳太夫亭に三條前内大臣殿冷泉大納言殿おはしまして一續有しに後朝戀

今朝の間にきえは消てよ露の身の又結ふへき契ならすは

天文十九年三條大納言殿へ百首奉し時同し心を

きぬ／＼のあかぬ別にまたそぬる其俤に枕ならへて

朝戀

又つもる思ひ成ともせめて先心のちりの朝きよめせむ

夏戀

露深くしけき夏野の草よりも人の心の道そしられぬ

被厭戀

君かなとかくしもいとふ我を思ふ人もなきよを何の報に

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を

いとふをも報と聞は先のよに我も人にやつれなかりけん

戀のこゝろ

立添てきけはかたらふむつこともしつまる閨の内はねたしや

老後戀

なそらへて老の習の袖そともえも言あへすせく涙哉

何ゆへの涙と袖を人とはゝ老とこたへてよにはもらさし

戀のこゝろを

難面てさかり過なはかひもなし老て哀は思ひ知とも

共僞戀

誠とは思はて契る夕社我もいつはるこゝろ成けれ

寄風戀

たのめこし契は秋の夕にて荻にうらやむ風の音つれ

とはゝへき有增の本此所文字不詳いく度か夜半におとろく軒の松風

寄月戀

向ひては涙しくるゝ秋なれは月さへうとき袖のうへ哉

木の間もる月の影さへつらき哉待夜更行こゝろつくしに

寄露戀

憂人の袖やはぬれん戀侘て身はあたし野の露と消とも

寄曉戀

別路をしたふ思ひの名殘とや猶おもかけは有明の月

寄山戀

くるしさの末いかならんはてしらぬ戀の山路に思ひ入身は

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時寄隣戀

程近きかひたにあれな中垣につらき心の隔のみして

寄下草戀

枯のこる色も何せんつれなくもあはての森の霜の下草

寄菊戀

白菊の花の紐とく秋風に人の心のなとかうつろふ

寄薦戀

十布をさへしき社侘すかこもの逢夜はこふと思ふみなれは

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉りし時寄柚木

戀

あちきなく繁き思ひと成にけり人は柚木のそまぬ心に

寄山鳥戀

何かせんおのへ隔て山鳥の結ふ契はすゑなかくとも

寄虫戀

頼めをゝ人しなき身はよな〱に待てふ虫の名さへなつかし

寄螢戀

螢かと思ひまかへてうき人のむれにたく火をとふよしも哉

寄衣戀

ほし侘て返す涙の小夜衣つらきうつゝをみぬゆめもかな

寄枕戀

假初の其手枕のうつり香の消なて殘るかたみともかな

寄玉戀

拂ひえぬ袂の露を白玉か何そとたにも問ふ人のなき

寄弓戀

あちきなく恨侘ても梓弓戀しきみちに又かへるなり

寄船戀

のりえても何にかはせん渡船あふせにさゝぬ棹のしるへは

寄夢戀

思ひ侘ぬるよも人の難面て現なからの夢の俤

わすらるゝ身にしもはかなあふとみる夢やうつゝの命成らん

思

くり返しかきやる筆の便にも思ひの程をえ社盡され

片戀

つれなさの限とみてもいかなりし世々の報にしたふこゝろそ

恨戀

うき數をいはてや過ん恨てもかひ有ほとの中にしあられは

生れあふ身そうらめしきつれなさに報有よのほとも知れて

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉りし時同し心を

つらくともかこたさらまし我ならぬ人にも同し心と思はゝ

絶戀

今は又何にかゝりて玉のをのわすらるゝ世に難面かる覽

わすらるゝうき身の科は何故と今はとふへき便たになし

絶久戀

消のこる身そうらめしき逢事は絶てとしふる道しはの露

雜部

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時曉鷄

戀路にはまたきといとふ鳥の音を老の寢覺に待てこそきけ

天文廿一年三條大納言殿御旅亭にて宗祇法師月忌爲追善大原和尚(勝林寺)屈請し給て詩歌有しに隣家鷄

蘆垣のまちかきやとになれてたに夢路へたつる鳥の聲哉

雲

定なきよのことはりに習てや空行雲も晴くもるらし

雨

色々に染るはひと〔つ脱歟〕雨なれや春のみとりも秋の紅葉も

砌松

千世經へき砌の松も限なき君かみかけにいかて及はん

天文十九年三條大納言殿へ百首の歌奉し時砌松

いくそ度軒はの松に時雨きて月にさえ行夜嵐の聲

甲斐國居住の時明讀草庵へおはして一續有しに砌下竹

時もよも治る風に習てやみきりの竹のすなを成らん

窓竹

晴くもる空そひまなき呉竹に風わたるよの窓の月影

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時同し心を

うへ置と友とやは思ふ窓の竹心むなしき我身ならねは

窓前竹

月に猶心つくしそまとの竹木の間のみとは何思ひけむ

武田大膳太夫年始會三條前内大臣殿御出題にて爲

師竹

唐のとりもなれきて住はかり直なる竹のよにも有かな

庭苔

數ならぬ身にはとはれし跡もなし庭はみとりに苔深きまて

雲居鶴

いつよりか馴て雲井にかへる覽ひなの世遠き老の白鶴

名所山

つもりもて山とや成しもゆれとも消る時なき富士のみ雪は

名に高き所々のしなはあれとわけて上なき山やふしの根

ちりひちの初めもあやし分てよにおよふ山なきふしの高根は

天文十九年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を

雲霧のへたても冬にあらはれてそれとしら根の雪のま近き

武田大膳太夫會三條前内大臣殿御出題に河

なかれきて白波たゝむ河水も苔の雫やはしめ成覽

山中瀧水

かさなれる山にさはりて水の音のむすほゝれくる瀧の白糸

寄水雜

人の身に過るよはひのためしとやかへらぬ水のあはれよの中

海邊眺望

立そふをのかもしほの煙にて一しほ霞む三保の松原

冬海

氷るよのみきはしられてにほの海おきに成行水鳥の聲

浦船

三保のうらや海つら遠き夕なきに入日をさして歸る船人

漁舟火

いさり火の影は小松にてらすとも終に消なん後のよの闇

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時夜燈
身にまなぶことわさもなく徒に獨かゝくるまとのともし火
山家
のかれすむ身とやは思ふ山とても君か惠の外ならぬよを
すてはてゝ山に住とも何ならす心うきよに立かへりなは
入とても何か浮よの外な覧こゝろを山に住なさぬ身は
我心いかゝはすへきよのうきの見えぬ山路のおくもなけれは
やまとのみ何思ひけん住なからよをのかるゝも習ある身を
よそに見る心社あれさひしさを住身はしらし山陰の庵
山家嵐
まれにくる人いか計山里に聞てさへつらき嵐を
ともすればよのうき事のしたひくる心の塵に山風も哉
天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を
住うきにかへて思へは杉の嵐聞しのふへき嵐ならねと
遠村煙細
あもはるにさたかならねとあまの住里のしるへや煙成覧
天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉りし時薄暮
煙
むら／＼に夕けの煙打なびきまつ暮初る遠のやま本
おなしく田家水
波數もすくなき賤か住家とて門田の清水み草ゐにけり

春田
くるゝ日につれてそ遲きすき返す春のあら田の牛の歩は
旅
又こえむ逢坂もかな鳥かなく東の旅に年經ぬる身は
やつれきてみえん人めのくるしさに笠かたふけてかへる故郷
人の夢想の歌を句の上に置て人々に歌詠せられ
しに里旅
里をたゝしおさむる國は旅人の行かふ道も直なるかな
天文十九年三條大納言殿へ百首の歌奉し時同し心
を
白川の關路に春の花やみん紅葉にこゆるおふ坂のやま
天文十六年武田大膳太夫亭三條大納言殿四辻中納
言殿おはしまして當座に秋旅行
旅人の袖いか計さらぬ身も秋の夕はしほるならひを
旅宿
露霜の草のかり寢を思出は古郷人も袖やしほらん
旅宿嵐
ふる里にかよふ夢路もあらし吹松かれ〔落字〕枕おかしわひつゝ
永祿元年三條大納言殿御歸路の時鹿杖と言ところ
まて御送申誰歸朝申上侍し
舊郷にかへる心に旅衣草のかり寢も露うからめや

別てはいとゝ命のおしからん又あふまてとたのむ心に

御返事

行先のあふ嬉しさも何ならす跡の名殘に身をし分れは

年ふへき別なられは行末の命のほとを何かかけまし

慶雅律師高野登山の時申遣はし侍り

汲て猶光そまさん高野山法の衣の玉河のみつ

返し

立歸り猶やくまなん光ある君かこと葉の玉川の水

旅泊

日も今は入あひの鐘に舟とめて波を枕のうきねをそする

羇中嵐

松か根の枕するよは夢路まて都をよそにあらし吹なり

羇中野

茂りあふ草の繁みに道絕てゆくゑもしらぬ武藏野の原

羇中枕

武藏野やゆく〳〵結ふ草枕いくよねてかははてをしるへき

眺望

山のはに朝日のかけはあらはれて尾上の里に〔本字不詳〕雲そかゝれる

朝朗〔は脫歟〕月入江の波の上にこき行船の跡そ殘れる

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を

吹はろふ嵐に空の雲きえてなかめにもるゝ海山もなし

おなしく故鄕雨

忘れぬれは袖にも雨のふる鄕やむかし忍ふの軒の雫に

おなしく披書逢昔

いにしへのすみ濁世のためしをもみるにそしるき水莖の跡

夢

しのはるゝ心の道の行衞とてむかしにわたす夢のうきはし

曉夢

鐘の音になかき眠は覺やらてはかなくみつる曉の夢

おもふこと名殘の末をつきてみる寢覺の後の夢そ短き

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時思往來〔事歟〕

哀けに我みし程を思ふにもかはり行世の限しられす

懷舊

いやましに過にし方そ忍はるゝくたり行世をみるにつけても

おなしく百首の歌奉し時同し心を

末のよの〔本文字不詳〕にころにつけていにしへの心すみにし人そ戀しき

武田大膳太夫〔女か文字不詳〕母の〔此所不文字不詳〕舊宅梅花盛にいさなはれて去年の春背し世にてあるしせられ終日酒宴有し事思ひ出て人々歌よませられしに

詠こし心そあらぬ宿の梅花はむかしの春ににほへは

今川治部太輔氏親卅三回忌經文に懷舊をそへて人々歌よませられし時人にかはりて

道〳〵にほまれ有こし人のよは名のみ聞ても忍はぬはなし
月前懐舊
更に今向へは戀しわか涙くもらてみつる月のむかしを
無常
雲となり煙と消し行衛とや涙の雨の袖にしらるゝ
先たつを世のうきたひにしたひてもまとは急く道としもなし
草の原とふにこたふる聲も昔かたちはそれとなきよ成とも
玉まつる秋は一しほかす〳〵にぬれそふ袖やあたし野の露
明暮に先立かすの人のよをむかしと見んもいつまでの身そ
忘れては夢かとそ思ふ常ならて人はむかしの有しうつゝを
人の身まかりし吊によみてつかはしける
むは玉のよるをそ頼むなき人も夢路には又あはさらめやは
あたし身と思ひなからもさすか猶驚かれぬそ世のならひなる
みな人のしたふ涙のうつせ川みかさまさりて立や歸らん
友なひし人の子におくれしもとへ申つかはしける
哀はむ親もあらしなまして子も生れぬ先の身に成てみは
見し影をなきとは侘そたれもみな昔にかへる道しはの露
此道に友なひし人妻にをくれしもとへ申遣しける
あすしらぬ命わすれて人毎に此世の爲の身をいのろ哉
誰もよを夢とは言てさすか又驚くまてに知人はなし
年老たる友たちの子におくれしもとへ申遣しける
老鶴の子を先たてゝ歎よを思ひやる身も音社鳴るれ
一竹入道子におくれし時申おくられし
なき數に老はをくれてこはいかに泪先たつ野への秋かせ
返事
哀さは音に聞ても身にそしむ歎のもとの秋の夕風
親におくれし人のもとより申送られし
有と見しほとはうきよの夢そかし是や誠のうつゝならまし
返し
有なしの道に心のとまらすは夢とも本ノマヽうつゝとも見し
武田大膳太夫繼蕣浅からさりし身まかりて大禪忌のわさ營れし時六字名號を旬の上に置て人々歌よませられしに
泪川流て早き月日にもよとむや人の思ひ成らん
みちもせすかけもせぬ身の月をみはうはの空には心くもらし
誰もみなむかしにかへる道しらて先たつを先哀とそ思ふ
祝
つかへんと山に住身も出るよに道ある君をあふかぬはなし
ゆたかなる御代にしあれは玉の緒もなかゝれとのみ猶祈る哉
天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時同し心を
天の戸を出る日影にむかひても君か千年を先祈る哉

おなしく祝言

國榮へ民ゆたかなるほとみえてはこふ御調の時もたかへす

寄日祝

めくる日のかはらぬかけや君か代の限しられぬためし成覽

寄月祝

をしなへて戸さしせぬ代は夜な〳〵に心なきみも月やみる覽

武田大膳太夫正月七日會三條前内大臣殿御出題寄若菜祝

春は先いく年々も若菜とや猶ことふきに摘初めけん

おなしく重陽會寄菊祝

今日毎にかはらぬやとの菊の花露も幾世か契置けん

同しく年始會水石契久

さゝれ石の其むかしよりなかれてや岩ほにかゝる山川の水

寄鶴祝

なれきつゝ砌の池に住田鶴や君か千年にかけてならへん

水石歴幾年

わきかへりなかるゝ水は幾千代も白雲かゝる山の岩根に

同しき大膳太夫年始の會に同し心を

千早振神の岩戸の昔より御裳すそ河も流初劔

寄弓祝言

武士のとり傳へたる梓ゆみ八百萬代の末もかはらし

弓

梓弓やまともろこしをしなへて世を治ぬるためしにや引

述懐

誰か上もよきは隱れてあしき名の立あやにくの恨めしのよや

代々かけて家の爲しろ人の身はなき跡の名を猶やをしまん

我心よせしもはかな數ならて五十をこゆる和歌の浦波

鋪嶋の思はぬ道のことの葉に身をかへてもや分まよはまし

鋪嶋と法との道のさかひをはこゝろにわけよ二つやはある

花見にとなへて尋るよしの山うきよの爲に入むやはなき

出ぬ間は思ひ定るあらましも世のことくさと人やいはまし

徒に我身五十に武隈やまつこともなくなすわさもなし

思ひ出の有身はさそな情覽うき我さへに捨かたき世を

あたに過る命よいかに武士の名をおしめるも身の爲そかし

憂身をもしやと猶も賴哉定なきよと思ふ心に

僞の有世なれはや誰も身をうしとは言ていとはさる覽

憂身をは住るゝまゝに住なさんとてもかくても長からぬよに

思ふ事兎にも角にもいはて只心にくたせ世にすまんみは

すつる身の爲に思へはよの人の情なき社情成けれ

人なみの身ならはかくはいとはしを憂も嬉しきよの習哉

明日も有と思ふより社つれなくて今日も捨へ(え歟)ぬ憂身とはなれ

心々おもむく道のうちにても御法にすゝむ人そまれなる

道々に思ひは辰の市なれとあはれひとつもうることのなき
先のよの我からなれは今の身のあしきむくひを誰にかこたん
後のよのちかつけは猶あやにくに法に心の遠さかるかな
我よりも猶たらぬ人をみて安からぬ身のなくさめにせん
憂世そと思ひ知てもさすか又いとふはかたき身の習かな
憂なから猶しもよにはつれなきや捨ぬも有と身を思ひつゝ
（本ノマヽ）今のつらさに思ひかへすかなむかしもうしと見しよ成とも
行末をもしやと頼心にてへかたきよにも猶そつれなき
和歌の浦の玉とはよらて藻鹽草波にかすかくことのはそうき
老なはと契置てしあらましを心にくつる山の下いほ
世間をさのみ歎かし数ならて身はうしとてゝ捨ぬものから
何となく月よ花よと詠つゝ身の老らくと成にけるかな
いにしへはいとひし我もましはりに老と成より身をそ忘るゝ
孩子の物いはぬにも（身カ）たにふれて友となくさむ老の哀さ
いつまてか哀此のなき数にをくれてつらき世を歎かん
物思ふ袖とやよそに誰も見む老の習ひの涙もろさを
まなひうる道しなけれはあらさらん此身の後を誰か忍ん
曉をしらて過しも老の後寝覺になれて身をそをとろく
降まさるかしらの雪はつれなくて我身そ今は先消ぬへき
老か身に寝ぬを便のやくとては後のよならて何か願ん
つたなくて及はすとても學置んこんよにむくふよしも有やと
道〳〵にさかしをろかの人の身を一かたの名にいかて定ん
世にもれぬ春の光を待得ても鏡の影の雪そつれなき
何ことも報としれは身の爲に世もつらからす人もうからす
あやにくに老はひかめる心もてにくまるゝにや猶なからへん
和歌の浦のなきさを遠み踏まよふ道しるへせよ老の友鶴
何ことも思はしいはし世中はとすれはかゝりかくて社へめ
身の程を思ひもしらす年を經ていつまてよをは出かてにせん
定しはみな僞となる身にてかはる習そよのまことなる
さりともと思ふ心に捨かれて有にもあらぬよをもふる哉
物ことに悔しくもあるかかそいろのいさめし頃は思ひしらすて
子を思ふ心のやみの迷をは親ならぬ身のよそ人やしる
道もなき心そつらき足常はかゝれとてしもいさめさりしを
末のよに是やむかしの俱ならん花の色香も月のひかりも
憂をしる心の河と殘覺物忘する老らくの身に
花も色もうつろはぬ身にみし頃の思ひなかりし春そ戀しき
世の外の山しならねはうき事のきこえぬ住家いつちもとめん

　人の詠歌みせられし返事に

心もていかにみかきて置露のことの葉毎に玉とみゆ覽

　おなしくまた

更に今心の玉の光をもこのこと（本文字不詳）の葉の露にみるかな

　甲州一蓮寺といふ寺の時宗此道に友ひしもとより

おくられし
和歌の浦の曙くらく露ふりていつくを船の道と定ん
返し
藻鹽草かきあつめなく和歌の浦の古き跡社道しるへなれ
佛道修行に相伴し長岡法師と云人病限なるよし聞
て山深き閑居にはる〳〵訪に行て歸る朝申されし
別行今日の限の袖の露きえての後はもとのふる郷
返し
わかるとは何思ひけん袖の露きえぬ身とてももとのふる里
人の歌双紙かゝせられしおくに
なきよには是もかた身と水莖や跡はつたなきすまひなれとも
天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時奥に添て
被下し御歌
ことの葉のねさしもあやし百種の中に色こきやまとなてしこ
天文十九年同しく百首の歌の奥に添て奉し歌
和歌の浦にかきあつめてももしほ草玉と成へき言の葉そなき
御返事
光ある玉もよりきて吹風の便嬉しき和歌の浦波
弘治二年詠歌あまた御目かけし時おくに添て被下
し御歌
あつめ置此ことのはに墨染の衣の玉の光をそ見る

永祿元年御上洛の砌詠歌御目に懸しをくに遊し添
られし御歌
和歌の浦の釣に馴ぬるあま人はさほのしるへも我やとはまし
同しく詠歌御目にかけしをくに
和歌の浦に年ふる田鶴のふむ跡に霧ぬ眞砂の數やみすらん
色添む今一しほや住吉の松をためしの老のことの葉
述懐涙
嬉ともうしとも思ふ折ことを忍はぬ物やなみた成覽
獨述懐
又も身のたくひはあらしとゝへは誰も浮よとかたりなせとも
永祿元年三條大納言殿御旅亭江同内大臣殿おはし
まして御會有しに同し心を
身にかきるうきよならねと物毎にたゝ我のみと思ひける哉
天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時同し心
、を
數ならて世に秋風の眞葛原我ひとりとや身をも恨る
寄浦述懐
和歌の浦に心をかけてはかなくも我身たゆたふ老の波哉
老人夜長
老かよの更るにつけていかなれは寢ぬるよなゝ明しかね覽
神祇

神代より契置てや君と臣心あはする國となしけん

さま〳〵に神の惠はかはるともよの爲ならぬ誓ひやはある

おろかなる身はいかゝせん神心かしこきなのみ分て守らは

人はよにともいかゝいへよしあしは道をたゝすの神に任せん

天文十七年三條大納言殿へ百首の歌奉し時同し心を

安からぬうき身なからも世に住は神の惠にいかてもろへき

社頭

かしこきもをろかなるにも一かたに隔すまもれ伊勢の神垣

仰みむ此日本に宮居してあま照します神の惠を

社頭祝

絶すよを守る心はみさほなる松のしるしを三輪の神垣

嶺榊

そのかみの鏡もかくと更に今嶺のさかきのかゝる月かけ

弘治三年夏の頃大神宮に參詣して下向の道より例ならす心地煩次第に病をもく成てなからへかたくおほしけれは三條大納言殿へよみて奉侍し

萌ぬとも露うからめや學ひこしことの葉草を殘す身ならは

御返事

敷〔島〕鋪はいかゝわけえぬ道芝ややとれる露の心まよひに

おりえては露のはえあることのはの花にも花や猶思ふらん

敷〔島歟〕鋪や神代の月の光あれは心の霧もひとにのこらし

又永禄〔[illegible]〕五年立願有て大神宮參詣にまかり立しに老後歸路の頼もなけれは三條大納言殿へ御暇乞に參りよみて奉し

哀しれ身は老らくの旅衣立かへらんも頼なきよに

御返事

思ひ出よ歸るに波のたゆたはゝ身に大淀の松はつらきと

同し時文治亭許へ申つかはし

海山を越つくすとも隔なくなれこし心忘れすもかな

返し

忘すは海山こゆともろともに馴こし心いかてへたてん

古寺松

通路は露ふかきまてむす苔のかゝれる松のおくの古寺

釋教

とく法はひとつ流の水なれと淺き深きを人やわく覽

すみ染は濁にしまぬ袖なれと胸の蓮の花はひらけす

皆人の心に種は有なから御法の花のひらけぬそうき

あひかたき浮木の龜の身を請て又千尋の海にしつまん（本ノマヽ）

天文十七年三條大納言殿へ百首歌奉し時同し心を

迷をもさとりをも又心より外にはとはん法の師もなし

天文十六年三條大納言殿勅使として甲斐國御下向

の時信濃國善光寺へ御參詣ありし御供申せし後寺
にて
古寺はかりの名なれや人との心の月そよき光なる
翌日開帳に御參ありて三條殿
あかなくに開きもあへぬ戸ほそをもよしみつとのみ人に語ん
御供にてとりあへす
をしむらく心に彌陀は有物を扉計と人やみるらん
御宿坊にて曉起の念佛の聲をきこしめして
名殘なく浮世の夢も覺ぬへしとなふる御名の曉の聲
御宿にさむらひて
覺ぬへき夢さへ更になかりけり南無阿彌陀佛の聲のうちには
定惠院（今川治部大輔義元室 武田大膳太夫晴信姉）遠行中陰の間武田大膳太夫人
々に十如是の歌よませられしに如是相
消のころかたちもつらし雲となり煙とのほる夕暮の空
如是體
かりの身は有にもあらす盡もせすまことの姿尋てをしれ
如是作
よしあしの道社かはれよの中になすわさなくて住人はなし
如是報
今の身のつらきにつけて我なせし昔の科の報をそしる
逍遙院殿廿五年忌大納言殿御營有し時人々十如是
に十戒そへて歌よませられしに如是體
むなしきと何思ひけん大空のはかりなき社かたち成けれ
妄語戒
物毎にうき僞の人の世はみないひまくる（本字不詳）ふしと社なれ
敎我院殿（三條公相 號[illegible]堂）御一周忌御いとなみ有しに參て申
上侍し
佛のうつらぬやうき別にし去年に月日はめくりあへとも
おなしく敎我院殿大禪忌に申上侍し
足常のみとせのあとはほろふとも歎のもとの塵や殘らん
御返し
限けんみとせもつらし足常のあとの月日もけふをなこりに
相州小田原にて敎我院殿御忌日九月十三日成は月
に寄て經文の歌人々よませられし三首に普皆平等
隔あるよのましはりに誰もみよ澄も濁も水の月かけ
在拾閑慶（此經文題本字者不詳）
月影に移りはてなは窓の内にすます心のかひやなか覽
唯獨自明了
我をいきて（本字者不詳）よそには何と尋へき心に晴る月の光を
後定護院殿（三條公頼卿 御息）御ちうゐんの間に經文の歌人
々によませられしに壽命能限量
はかりなき命よいかに鶴龜も千代万代のかきり社あれ

地獄
みかきをく玉の御にれかはくは露の間をたに馴てみまほし
下輩
位山のほる世遠く（本ノ字ハ詳）いつまてかふもとに（本ノ字ハ詳〔マヽ〕）つもる塵の身ならん
同御小祥忌に東谷和尚（林際寺）哀悼の頌作てさゝけら
れ其和韵人々によませられしに
子を思ふ心の道も一しほに闇にやまよふほまれある家
なかゝれと願むよはむはかなくて殘らんもうし名のみ過に
號待し心にかれて思ひきやかはかりあたにちらん花とは
同御一周忌に同しき和尚頌奉らせしに和韵人々に
つかふまつるへきよし仰ことにて
ぬれても又覺ても夢のよの中を思ひしれとやかく生きし
いとはしき此世をかりのやとゝてやもとの都に立かへるらん
みるもうし只花のみの俤は去年にかはらす匂ふ梅かゝ
瑞雲院（實相院大納言夫人）ちういんの内に六字名號を上に置
て人々歌よませられしに
なきかけの名殘を野邊にしたひきて煙にさへも別ぬる哉
みなれつゝまとろまぬよの夢とてや身をおとろかぬ心成覧
妙珠院殿（三條前右大臣實香公御娘）御めくみ淺からさりし間御中
陰のうちに六字の名號を句の上に置て歌よみて御
牌前に奉りし
なきあとに名を傳ても忍はましほまれ有つる人のむかしを
むくひつゝ馴にし人もともなはて獨をもむく道そ悲しき
〔あたし歟〕あし野の煙と空にきえぬとも猶たちのこれあかぬ俤
みゝなれや聞はかなさに誰もみな身を驚かぬ夢のよの中
たえ成ととく御法こそえもいはぬ詞の玉の光成けれ
二つなき心の月や後のよの闇路まよはぬしるへならまし
一竹入道といふ人これも多年御こうかんを得し事
にて御中陰の間に愚僧かたへ申おくられし
殘てもはかなき夢のみしか夜になく郭公五月雨の空
返し
時鳥啼音もともになきかけをしたふ涙か五月雨の空
惜からぬ身は猶もよになからへてはかなき夢をみるそ悲しき
月影は消てはかなき五月雨にのこるも夢のみしかよの空
敎殺院殿第十三回忌拈香の偈の韵に
捨る身のやとりと頼む木陰さへ夜をかさねてはすまん幸かは

右三光院實澄公家集

此詠藻二帖三光院殿御集之由奥書有不審。序者西三條殿
書給。歌者見他人。猶可考。　百花庵

和歌部七十八

大江元就詠草

三位陸奥守大江元就

歳內立春

いつくより年のこなたの春霞立きてけふの色をみすらん

元陽先發して歳のつくるをまたす。和氣うかへるよし言外に顯る。

春立ける日鶯をきゝて

あら玉のとしはいつかと思ひしをけさ待えたる鶯の聲

四序の時をたかへさるは聖代の瑞之。されは幽を出る鶯も春にをくれぬさま尤感あり。

鶯

玉簾まくてふひまのなそもかく鶯の音に立うかれけん

詩中に謂あるかとし。

霞

天津空くもらす照す春の日に霞たなひく風の長閑さ

たけたかき體といふへし。

春はたゝあくかれ出んと計も霞もまかふ遠近の空

野遊の道を霞の遮れるさま。眼前の風景なり。

いつはあれと風靜なる春の夜の霞たな引有明の空

靜中に動あり。

若菜

若菜とはたか僞のその葉そつむ年のはに老にし物を

昨日の少年二たひかへらされは。たかうへも如此。可歎息々々。

雲州に石見といふ處に在陣し侍し比大庭加賀守運參たりしかは古とし對顏をへたて侍りしに理りと

ともかくも聞ゆれはむつきの二日かのもとへ遣はしける
石見かた雪よりなるゝ友とてや心のかきりうちとけにけり
賢兼返し
石見かたかたき氷も雪もけふとくる心のめくみうれしも
此贈答一篇のへたてもきこえす。誠に上下怨なしといふ明文にかなへり。

梅

年の内に咲てふ梅はさもあらはあれたゝ打霞む春風の比
さく梅の深き色香を詠れはあさはかなりと花や恨みむ
かく計若木におはぬ色香より千年をかぬる梅かとそみる
毎首の梅雅にして艶なり。
前栽の梅を見侍りて
我宿の梅の立枝やあかすみん世になすらふる色香なりせは
謙遜かへりて有興。
ふりはへてみはやすからにけふや猶梅の色香も千入なるらん
常心之事備はれりと見ゆ。
今日みれは猶も色香をますけもてぬふてふ鳥か梅の花かさ
心詞相應絶言語甘心々々。
河水（行イ）に色や一入ます鏡うつろ計の梅の木のもと
風流自變。
ある木のもとにて梅のはなのさかりに人々いさなひて
大かたの袂なりとも梅のはなかゝる色香にひかれさらめや
物毎の境界に染着の躰殊勝。
背觸し袖の梅かゝ身にしみてかはらぬ月そ名殘えける
西對夜月の思もおもかけ眼前に候。
源氏一部書寫終し供養とて賢兼勸進の五十首の中に行路梅を
したひくる梅の匂ひの追風に侶（イザナ）ひくらす野への衣手
一唱三歎。

柳

青柳の糸くり出すそのかみはたかをた卷のはしめなるらん
下句たくみにして。珍重の趣味有。
昔たかをた卷ならん青柳のいとくり出す庭の春風

歸鴈

又來むとたのむの鴈の別路は待まひさしき名殘なりけり
離鴻去鴈に秋を約せむと。まとにまちとをなるへし。

花

えならすや今日咲花に薄霞立そふ色を何とかはみむ
霞のにほひ花に映しけん。みところある様とそ申へき。
俤にたゝすは何にしたはまし花ちる跡の嶺のしら雲
殊勝々々。秀逸感悅無極。

花を見侍しにやう〳〵暮かたになりてみな人うた
よみける中に
けふの日もよしさは暮ねくれてこそ枕もからめ花の下影
やとを花に投せむのこゝろより。日の暮るゝをおしまぬよし。禪閤尤珍重。
春な春春を惜むとすさびしは只花のみの思ひならすや
三春たゝ花を思ふにあり。感慨あさからさるにや。
ある前夜の花を見侍りて
足引の山路に身をはつくすともかゝる色香の花をみましや
殘りてもかひやなからん櫻花散ての後の春の日數は
前首者深詞淺なり。
田家の花といふ事を
ちる花を惜ふすしもの里人の只春雨に小田返すらん
農夫は困窮の甚之。櫻花の時節をしらさらむも。理りときこゆ。
興禪寺にて竹英東堂の花を見せられしに
かく計情ありしの宿なれは花の色香を何にたくへむ
主客の相互雅達と見えたり。
隆元朝臣より一枝送られしに讀てつかはしける
折袖の色香も深き一枝にゆかてやたへん山櫻はな
一枝を榮得て。猶桂林のふかきをおもへる。其情淺きにあらす。
永禄十一年三月の比中の丸にて
獨みるわか家櫻問人によりてや花も色を添らむ
元亀（ニイ）年三月十六日人〳〵たつれきたりて花みむ
と催し侍るに
友なえて猶そ嬉しき櫻花昨日にかはる今日のいろ香は
賓筵をひらきて色の花をましけむも。仁德の故とそおほへ侍る。
中の丸にてみな人相伴てはなを見侍りて
とめゆかむ山路の花の色香にもをとらましやは庭の木の下
その趣をみるこゝちし候。
隆元朝臣おなし席のうたに
常盤なる松に咲そふ櫻花千とせを契る穗とそ見る
年々歳々の花は松の不變にもをとらさるへし。
まんくはん寺にて椿を見侍りて
傳は深山木なから花そともけさ白露の玉椿かな
梓弓春の光の玉椿八千代もおなし色をやみむ
八千歳を春とし。八千歳を秋とするよし侍れは。分別のさかへなしはかられ候。
永禄三年三月廿日井筒のもとの櫻はなを隆元隆景
もろともに見侍りて

きみならて言かよくへきつゝ若菜あつとはさけ不機の下水
　取なし近比奇妙候。
　藤
あひにあひて藤のしなひの永日を上なき色になかめくらしつ
　是も一かと面白候。
　暮春
うつり行日数を何といはつゝしいはても春を残しけるかな
岩つゝし岩ねの水にうつるひの影とみるまゝ詠暮しつ
　躑躅は常盤の山を思ひ、おくは火春をやくの心みえたり。此
　以後美なるにや。
　款冬
おしむとはいはぬ色なる山吹のをのれ咲てや春は残れる
　暮をちきれる花は。さく故に春のすくるうらみふかゝる
　へし。
　夏のうたの中に
今ははやそれもそしたふ青葉吹風に散にしはなそと思へは
限ありて青葉はよしや山櫻花なからなゐ夏にあははや
夏きてのためとや花も我袖の形見に殘す匂ひなるらん
　新詠の三首ともに滋味あり。
　更衣
ぬきかへし花の袂もおしけれと又めつらしき今朝の衣手

花の香をわするゝにはあられと、春衣にめつつりけるも。
　世ときなしうつるといふ。歌人のみちをかもへるにや。
　聖護院御門跡御興行詩歌の中に緑陰勝花といふと
　を
春過て花やはたへん若みとり風にしたかふ青柳のかけ
　下句青園の手に属する事。かくこそとなしはかられ候。
　郭公
杜鵑初音をきかは世の中をいとはすとても山に入はや
　時鳥のために居宅をしたへるこゝろ。深切なるものか。
夏またゝ鳥か良にそ住ぬへき山郭公きくや初ると
　是又目前候、
山里は日らん音を杜宇うちねぬ空に待こ侍ぬる
　凡一切の事踏ふかためには遠く。もとむるかためにはえ
　かたきも、理り顯れ侍り。
　常楽寺にて詩歌の會侍りしに郭公幽といふ事を
足引の山のはつかに子規たゝ一聲はきくとしもなし
ねぬる夜にたゝ一聲の子規夢かさめてかかすかなるそら
五月雨のはれまの空の月よりもわか待わふるほとゝきす哉
あやなくもいくみしかよを子規待と計にあかしはつらん
　右數首の子規。韓信か兵を用かとし。おほけれは多してま
　す〳〵よしといへり。

里卯花

卯花の雪ともまかふ山里はいつも冬木の垣ほとそみる

めつらしきたとへ物にて與有之候。

夏くれは賤か垣ほに引はへてさらせる布とみゆる卯花

賤か調布にて里といふ題の心よく顯候。

冬ならは人めやかれん卯花の雪は垣ほもうつみはてつゝ

人めやかれむの一句まめやかに。一首の眼目候。

夏の歌の中に

夏くれは更に心を奥山の山あひの色にめくかれやはせん

人間の暑を避へきは。山より山のおくなるへし。

七月七日雨の降けるに

待えたるかひも涙のふる雨に逢せへたつる天の川浪

待えたるけふのなみたの天の川のさはりあるよし。ふるは涙かといへるにも差別なきにや。

人〳〵風雅の事なとかたりあへりしに江家の末流

なとありしもはゝかりおほくて

立田川うかふ丹葉の行衛には流とゝまる事もあらしな

藤氏菅江の儒家。其流ひろしといへとも。和漢の名儒は江家のみ盛なりし事なりしを。なかれの末にも。かくはかりふかき哀ひも有ける事よと。立田川のくみしらさりしその世さへ。くやしくこそ侍れ。

初逢戀の心を

あやなくも今夜はしめの契とて心の程を殘しぬる哉

さかならすしもつくさすと云本文。自然にうかへり。

逢初てうれしきにさへ思ふ哉此まゝならてもしやかけると

掣電の一歡に。綺羅の人の世をかねてなけくよし。眼の至れるにこそ。

契戀

問かしな契しまゝの我心程はふるともいかてわすれむ

泰山黄河のちかひもをしはかられて。虚なく情ある散言の葉にあらはれ候。

惜別戀

そふ程もかさ計の夜にしあらは契らし物を衣〳〵の空

歡樂極て哀情多と漢武帝のゝたまひしも。こゝろはひとつむねなるへし。

後朝戀

今朝の間も猶そ戀しき我なから心のはての更にしられぬ

今朝はなを袖こそぬるれあかさりし夜半の契の広かたきに

紫蘭のかたらひは國家のもとなり。あさかるへきにあらす。

巽門御與行詩歌の中に依涙顯戀

わか戀を人はしらしな白露の袂にやとる月そ曇而

つゝみてもかひやなからん袖の上の涙は月のやとる計に

尚書に。隠よりあらはなるはなく。微より明なるはなしといへる。したのこゝろかよひそ。道に相かなへり。

常栄寺にて詩歌の中に祝を

常盤や立そふ松もおひにあひて猶若みとり万代や経む

祈つゝ猶年毎にひくしめの長き齢は神のまに〳〵

神の威徳は人の尊敬にあらはれ。人の福壽は神の加護によるといへり。

祝言

四方はみな霜枯るゝ野の秋にしも松の緑や千代をかくらん

末法壊劫の世にも不壊不朽の道有へし。

治れる世にこそしけれ松のはの散も盡せしやまとことのは

をのつから頌の聲あり。

松はなをくる春との若みとりさすや千年も限なるらん

本有常住のうへには變すへき物なきなるへし。

やまとことの葉は。あめつちとゝもにひらけしより。神代の理りとして。我國をたすくるまつりことゝ成ぬ。五聲七音をのつから邪なるを破して。たゝしきに歸せしむ。さればにや亂たる世のこゝろのうらみいかれるをやはらけ。おさまれる世のこゝろのやすくたのしめるを悦ふことゝなりて民をなてむはかりをためくらし。国をおさむる謀をむねとす。鬼神を感せしめ。人倫を化するのみにあらす。天これにくみし。地これに應せすといふことなし。こゝに鎮府の藩臣陸奥守大江元就は。そのかみ三尺を提て防より興りしかは。忽に千軍万旅にして。七雄六国の呑澄を戮し。百萬百勝ともに行をあらそふ人なし。されは山陽西海の兩道みな左より袒て。その威海内にくはゝれり。かの高祖の沛より立て。漢室を定めたりし世も。かくこそはありけめ。然れは天のしたにその勇士なる誉をのみ申しゝ。風雅の場にあそふこゝろさしのふかきゆへを。いまたしるへなかりき。かくてなからん後のわすれかたみにとやこうらなみのおり〳〵よせけんあまのかる藻かきあつめたるくさ〳〵ののこりとゝまれるを。人〳〵みな見おとろきぬるまゝに。これをたゝにやはとて。一巻となしつゝ。あをうなばらのしほあひをしのき。八重たつ雲の山路を分て。あまつ朝のつてまちえたるを。いかてかは洩くも見侍らん。かやうにあつめしるしけむ人こそは。又いやつきにその名もあらはれ侍ぬへけれと。おもふさへそむつましきや。しめやかなる窓のうちに。此ことはを巻返しつゝ心をつけ侍るに。道にふける好士もちからをつくさゝれは。そのさかいに入ことかたし。いはむや干戈を枕とし甲

艦にはかろいとまなき世には。いつのまの琢磨の功にかよりけむ。樊噲か楯(胥イ)に墨を磨すると云ろためしはあれと。只生れなからの道に叶へるなるへし。誠に句ことに玉をつらね。篇ことに錦をかされり。いつれをいつれとも更にをとりまさりのけちめわくへきにもあらねは。列子か批語になすらへて。心にうかへるまゝのかたはしを。さなから書選はし侍るはかりになむ。おなし世にてかゝることの葉をもみましかはと。うらみのこゝるやうなれと。墓にかけゝん心さしにおもひなして。昔をしのふ泪は苔の下露にもあらそひぬへくこそおほゆれ。おほよそ一の道に通しぬる人は。物ことにまとい有事なし。禹稷顔回地をかへなはしかりとかいふなることの侍るも。かゝる折にこそおもひあはせられて侍れ。頼政の三位といひしも。弓はり月のと雲井にきこえあけし一ことにてすゑの世まての名をとゞめ侍しそかし。まして今の一卷にて。文武の美譽芳聲は千歳にもいかてか朽侍らん。いにしへ武王の殷を率けし時。左に黄鉞を杖き。右に白旄をとる。是文をさきにすへき心を天下にしめし給ふとなり。兵は凶器なれとも。此器を得されは是を用ふ。勝ことを得ては戈を止るを武とすといへり。此ことはりをはかりしるに。大江元就朝臣は武王の心をもて心とすとみえたり。しかれはたゝ今の世をひするに成王にあたれり。國家の祚是よりして周の八百歳を全くせむこと。うたかひなかるへきにこそ。

ほとゝきすしたひもあへぬ一こゑに名殘露けき杜の下草
神やしろうけつく道も我國と世をしき嶋のやまとをの葉

予時元龜第三曆仲呂吉辰　野草老翁特進實澄

私云。西三條殿正二位内大臣實澄公。法名豪空。號三光院。稱名院右大臣公條公之御息也。正親町院御宇天正七年紀薨。六十九歲。〔[illegible]〕御父公條公。法仍覺。號稱名院。永祿六年七十七歲。御祖父實隆公。正二位内大臣。法名堯空。號逍遙院。永正十三薨。六十三歲。

連歌

もえ出る春の木々の色〳〵
朝またき日影うらゝに雨はれて

雨後の朝日春の梢にうつろひたるけしき。みるやうにて侍る。一句たゝしくして。しかも付所大かたならぬものなり。

源氏物語夕かほの卷のをはりに。ものほめかちなると。つ

くりことめきてとりなす人のものし給けれはなむとあり。此一巻のうち。一字にても引直し侍るものならは。佳吉なる詞あつみ。さり所なくそならまし。

岩なる岩井の岩ま水おちて
ますけかくれや氷とくらし

谷の氷のおつるをみて。春の根のいろもひとしほにとくらしと。こまやかなるこゝろかな。

古郷の方にし今やいそくらむ
三月の空に帰る雁たれ
たれもみな過行春やおしむらん

雲とまる所にて。帰るにたよりありて有。文の句法とか。

かすみにもろこゝ入あひのかね
付所もたゝしく。一句正風躰也。

物さひしきや古寺のうち
残りぬる一木の陰もちるはなに

古寺の庭上に。夕闇のかたはらのちるをみんさへさひしかるへし。

かすみに深し夕暮の色
月は山花は木のまに匂ひきて

月花に夕暮のいろ深き春のそら。一句のうちに。景物二の首尾珍重〳〵。

山もとのかへるさたとる雲の下に
あらしや花の名残なるらん

花はみたいろならすして。嵐はかりの名残ならん事。

まとに更ふかき雲の山もとなるへし。
こほれつる小雨の名残長閑にて
はなにほふよはしめゝめの山

付所一句不及是非ものなり。

いつをとたるこゝろとはせむ
散なむをおもはて見はや花さかり

人間の實光にも。為花香はしたかは道理を御らむずる事。歌道の眼なりけむかし。

つねにはとしゐなく山を過かてに
待しさくらのかつひらくかけ

かつひらくにて。つねにはとしゐなくによく付侍りぬ。

都出て思ひしよりは山のおく
かゝるはなにはとの葉もやは

思ひしより色香たへなる花下にては。との葉もきえなむか。

むかしにはかはる姿を猶はちて
老はひとりや花にゆかまし

数ならぬ身の程〳〵をわするゝならひなるに。遠慮ふか

き行衛にてこそ。数國の主共成たまひけめ。
たとりそくらすゝの篠原
芳野山こなたかなたの花を見て
今宵たれすゝ吹風を身にしめてよし野の嶽の月をみるらむ
月の歌にて花の佳句。以四季歌詠戀雜歌。以戀雜歌詠四季歌とあるにかなへり。
しめなく山や我を待らん
わすれすも去年みし花を思ふ身に
こゝろふかくしめをかれたる人をは。はなもまつへきのみ。
眞柴たく賤か家居はうちけふり
あさ夕わひし五月雨のころ
五月雨の比に玉しきの内さへしめりかちなりと。しつ山かつまて御憐愍のありかたさよ。
うちはへ庭の露ふかきころ
虫の音にさそはれ出る野はくれて
いまこむ秋をまつかせのこゑ
日くらしのなくより月のほのめきて
両句有心幽玄躰。言語道断云々。
伏見の田面秋やふけゝむ

さひしくも澤邊の水に鴫鳴て
ひくらしのなく音にいつれならむ。
行衛とけむもおもほえぬ中
とつてむ程は雲井の鴈のこゑ
ほとは雲井の中を鴈にとつてやらんは。まことにとけかたからんかも。
かゝるかりほや露の世ならむ
槿のはなのまかきもかれはてゝ
かゝるかりほや露の世ならむ。前句理りたしかならぬを。何となく朝かほの枯たるにて。やす〳〵と付られたる。作者のものなる哉。
露の名残をいかゝはらはむ
わけすくる花のゝ袂うちかほり
よしのゝ山の春のはなにひとしかるへき、秋の花の句なるへし。
初鴈の浪や汀によせくらん
尾花にまかふ風のはま荻
めつらしき一躰一句なり。
霜白たへの眞砂地の秋
菊かほるまかきの月や更ぬらん
正風にして付所珍重〳〵。

秋になくさむ旅のかりふし
岑入山の丹葉のかけくれて
　秋はなを悲しかるへき旅行なるに。かしこきもみちのかけかな。

暮かゝる日もうす雪の野を遠み
宿かり衣袖そ寒けき
　すなほなる玉句なり。

うかれからすの雲になく峯
さゆるよのあらしのうへに月落て
　あらしの上もなき閑なるに。月落てなとゆへあるへきにこそ言葉の及へからむや。

氷れる月も白たえのかけ
水清き川つら寒く鷺鳴て
　まことにひえさひたる句法。一ふしなきにしもあらす。

雪を問くる友は嬉しも
いつよりか人目かれ野の山のおく
　山さとは冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは
　草を野へにふくみ。さひしきをうれしきにひきかへられける御作意。等閑にみんとかは。

立さはきたるむら鳥のこゑ
奥行のたけゝに[illegible]つらるらん
　くれたけの世にたへなる句にこそ。

うく[illegible]わさはたゆまし
雨にぬれ雪にとまやのあま小船
　百姓[illegible]うちにては。いやしきわさな耳にきへふれさせ給はぬ[illegible]山かつの[illegible]あかし。秋の夜さむの衣うち。冬は商[illegible]の炭かまい[illegible]はけしき[illegible]つらのおよおかつきのわさまても。[illegible]にてこそしろしめせ。稽古今[illegible]。其實[illegible]落。其花[illegible]榮。至有好色家以此為花鳥之使。[illegible]以此為活計之媒とあり。大臣のまたる[illegible]の[illegible]に。[illegible]へき[illegible]れけるかな。

神やれかひをうけすなるらん
たいめこし夜半のいかつち雨の音
　是亦[illegible]なるもの也。

うらみわひてや鐘はきくらむ
たまさかに逢夜も心とけはせて
　待よひわかるゝ。逢の鐘のうらみをこそ聞ならひつれ。逢夜のこゝろとけかたきうちに。明かたにならむ空。おしはかられにけり。

うちそよくきぬの音なひゆかしくて
たのめをきつる中のものこし

清少納言の枕草子のおもかけおもひ出られ侍ぬ。

はるの夜の枕の月やうつるらん
夢はかりなる衣〳〵の空

はるのよの夢はかりなる手枕にかひなくたゝん名こそおしけれ

本歌の詞をおきかへられて。衣〳〵のなみた浅からぬかな。

それとしもしらす往來のうちかすみ
わかまつ人ににたる笛の音

夕くれふかき霞のたと〳〵しき空に。人まつかたの笛の音には。こゝろもうかれぬへし。

いつまてさてもまたれむとする
身のかきり久しからぬをつけまほし

戀の句の本意なるかな。

まくらに殘る面かけはうし
ともにみし月やはかはる空ならむ

心あらはなり。

かよひなれしもたゆるほそ道
わすれ草なをもしけろをいかゝせむ

たゆるほそ道を。わすれ草のしけるにて付られけるこそ。奇特に侍けれ。

めおてもいさやとなき山のは
風むかふ舟はおもはぬかたにきて

おもはぬかたの舟ならては正風躰とか。

あはらやの月は有明のあけやらて
たひをし須磨のね覺さひしも

かの須磨の卷は源氏一部に故ある中にも。霜の後の夢とすんし給月いとあかうさし入て。はかなき旅のおまし所は。おくまてくまなし。ゆかの上に夜ふかき空もみゆるに。たゝ是西へ行なりとひとりこちたまひて。いつかたの雲路に我もまよひなむ。月のみるらむこともはつかしとひとりこちたまひて。例のまとろまれぬあかつきのそらに。千鳥いとあはれになく。とも千鳥もろこゑになく曉はひとりね覺の床もたのもしのあたり。ひきしゝめられて。物語のあらはならぬも幽玄の躰とや。

所〳〵にとまふける庵
暖きやしたしき中もうとからむ

あるはさかへをこりて時なうしなひ世にわひ。したしかりしも疎くなりと。貫之の心にひとしかるものならし。

時雨つる空さりけなく寒き日に
竹に鳩なくかたをかの里
きけはむかしのやとの秋風

松一本残るはかりの蓬生に
山のさひしき事限なし。
つれなきはいやはかなくもへたてきて
なからふへくもあらぬ世のうさ
大人の句にて猶殊勝にや。
かきほあるとも引やかこはむ
水清し住つかはやの山のかけ
同前。
たよりの文にゆらく玉のを
故郷のかたは風さへなつかしみ
うらはもとをく舟出する比
ふる郷の山は昨日を名残にて
いつれも故郷を思ひやりての旅行。文にてなくさめらるゝも理そかし。
風のまへなる空のうき雲
さためなき世にしも何か憑まゝし
侘て世に住人さへ常住の思ひをなすならひなるに。榮花のうへにての詠吟ありかたし。悪心僧都歌道はほたひの縁とのたまへるとなむ。
いふはかりなき君か代のかけ
たれとてもめくみあるをやしらさらん
當句ほと〳〵のめくみをわするゝ人のをしへとなるへければ。かみはしもにたすけられ。下は上になひきてひさしかるへきのみ。

發句

鶯の春をわくてふ太雪かな
うくひすの聲なかりせは雪きえぬ山さといかてはるをしらまし。
古歌の面かけこもり。詞つゝまやかにして風体長高しけつかに十七字のうちに三十一字の心を含み。時節を違へす所にしたかふ。あへしらひ有物なれは。特に發句は大事なるを。情以新爲先。詞以舊可用。風体可効。堪能先達の秀歌の心をたかへられぬ。かしこさは云にたらすそ侍る。
梅か香の鶯さそふ軒端哉
是又古今集に。
花の香を風のたよりにたくへてそうくひすさそふしるへにはやる
紀友則の花とよめるを梅に顯さるゝ心。殊勝にこそ。
梅さけは月も匂へる霞哉
いくさとか月の光もにほふらん梅咲山の嶺の春風
家隆卿のいくさとさへなるを。月中までの匂ひいか計にや。

霞ふくあらしを梅の色香哉

嵐の色を先達ののこされしもあやしきかな。

朝露のいとにたまらぬ柳哉

あさみとりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

遍昭のぬけるいとに引かへて。たまらぬは珍しき物ならし。

木のもとに積みたるゝ柳哉

眼前の景氣なるへし。

すむ月に春をしらする霞哉

陽氣の陰氣の月をかすむるありさま。心をつけてみは。なとかはと思ひなから。等閑の作意にてはいか〔い脫〕む。

待程をはなにしらする春もかな

花のたより春に增らむ物あらんや。

初花はちらて匂へるあらし哉

源氏乙女の卷に。風の力けたしすくなしのあたり思ひ出られて。御作意とそおほえ侍る。

薄色のはなにこかるゝこゝろ哉

薄の字程なきのみなるを。こかるゝこゝろにて。いろふかくそ侍る。

むら／＼に花のいろわく霞哉

おしなへて花の盛に成にけるを。霞のわけたる風情は。詠吟にたへすして珍重／＼。

鳥の音に霞をわけぬ花もなし

鳥の花に宿したるかと。聲をしるへに分行朝かすみ。さもこそとなしはかられにけり。

夕露の花に影ひく月夜哉

影ひくの心詞。あたらしき哉／＼。

花におく露や中立夜半の月

月花の媒肉身の人にまさり。清淨の露相應せる物なり。

身はひとつかけて野山や花の春

うち吟したるは。花の北野山にこゝろをかけてうかるゝ身一之。下のこゝろは一身の工夫にて國／＼の平安の發憤顯れ侍り、歌にも表の說裏の說有とそ。

山里のはなにわするゝ都哉

花ならてわするへき都ならめや。

岩木にもならはや花に山のおく

山のおくとある所。岩木の首尾玄妙なるものなり。

世にひろき匂や花の春霞

千句萬句の卷頭にもかなひて。しかもひろき御めくみのかけつくは山と。貫之の筆のにほひさへ加り侍り。

春はたゝ野山を花の都哉

國主弓箭にて山野に春ををくらるゝ處。則花の都なりよ

し野に皇居のとき。かの山にて名歌とそ。君すめは嶺にも
尾にも家居してみ山なからの都なりけり

一こゑはせめてきかしを郭公
此みちの口傳のをもしにて切侍るのみならす。せめてきかしなにて。一聲の殘多さの顯れけろにや。

かほり來て袖ひく澤のあやめ哉
あやめをこそひくへきに。袖のひかるゝかほり。めつらしきかな。

五月雨はおもはぬ浦の住居哉
所々御在陣の當意即妙なるへし。

涼み居ておもへは花の木かけ哉
納涼の樹下に花の春の名殘思ひ出らるゝ心尤なり。

薄霧やまかきの花の小萩原
小萩原を霧の籬にかこひなしたる心こまやかなり。原と云字眼なるへきか。

千入にもひかりやそめし秋の月
草木のみ色ふかきといひならはしたるに。月色まとにめつらしく侍る哉。

秋の月霧にやにほの濱千鳥
霧ににたる月に。千鳥のもよほされたるこゑきくはかりなり。

夜を寒み寢覺てきけはおしそなくはらひもあへす霜やをくらん。
此歌を吟すれは。夏のよもそゝろさむくなるとなむ。古人のかたりつたへられけるとそ。

藍よりもこきは時雨の丹葉哉
あゐの色を紅にかへらるゝ事珍重なり。

初雪は時雨のつもる行衛哉
ゆふにやさしくて。こゝろこまやかなる歟。

薄雪の尾花につゝく冬野哉
いまよりはつきてふらなむわかやとのすゝきおしなみふれるしら雪
此名歌のつきてをつゝくと云かへられたる詞。作者の御手から哉。

ふらてたに雪を汀のしら洲哉
雪をみると白洲をとりなされたる心詞。濱の眞砂の數つきぬ道なれは。朝夕に先達の風躰をこゝろにかけはと。此一卷をみるに。行末たのもしく成ぬる物え。

此一卷は鎭西の主毛利奥州元就芳作也。抑わかみかと六十よ國のうち。三か一を平けらるゝ戰場にして。夜々つらねをかるゝとなむ。そのかみ日本武尊のあつまのえひす

しつめにつくはを過て。甲斐の國酒折の宮にとゝまりし時。にゐはりつくはを過て。いくよかねぬるとありしを。火ともすわらはの。かゝなへて夜には九夜。日には十日をと付て侍るより。此道いまにたゆる事なし。末の世とをき西のかたのみならす。八雲たつあたりまてしろしめせは。歌のみちいよ〳〵さかゆへし。爰に三好修理大夫慶長撰集のもよほしありしかと。時いたらさるにや徒になりぬ。しかはあれと後生にたのみをかけて。かの元就のこゝろさしをしたはむ人〳〵は。身をはなたすもてあそひのものとなとかせさらん。あやしき鳥の跡をのこすへき鈞命にしたかひ。又一はのはせをかるゝ正本を都にとゝめ。時節をまち。文を捨て武を事とする人をいさめむたよりになさむと。元龜三年二月はしめ是をしるしをはりぬ。

紹巴在判

〔右贈從三位元就卿詠草以內閣記錄課所藏二本校合〕

木下勝俊朝臣集

立春

秋風を末葉にこめてけふめくむ荻のやけ原春や立らん

せいほ

なかむてふ月こそすへて老はなせ獨名に立年の暮かな

落花埋道

雪とちし冬も人こそ通ひくれ花に待みぬしかの山こえ

元日

昨日といひけふと重て立春の霞にあける山やかへさん

春の社にて

小鹽山神代の櫻面白く雪をめくらす袖の春風

あさましく人わらへなり雪かとてみのしろ衣花にきたれは

櫻花さけるやいつく時鳥山のかひより出る初聲

せいほ

年暮て雪はふれゝと山里にたのしきをのみ我そこりつむ

かくてこそ名には立らめあはれ〳〵程なかりける年の暮かな

年暮ぬ柴のあみ戸を打たゝき老そ尋ぬる有とこたへし

元日

けふしもあれたちかさねたる春の袖霞にあける山やかへさん

立春

身をかくす山こそ霞めなれも又世にすてられし春や立らむ

立秋

今日といへは先草葉にそ玉かなす契か置し秋のしら露

驚かて聞ならへとや秋も又來ぬ夕暮の荻の上風

さすか猶煙をたゝはさひしさのましは求る山の下菴
虫の音はかはらぬ秋のうらみにて住捨てゝけるあさいふの宿
草のはら露のよすかになく虫のうらみやなそと誰に問まし

八月十五夜

色まさる月の桂の紅や今夜千しほの秋のもみちは

月前虫

月はよし小野の篠原忍ひかねあまりて誰をまつ虫の聲

九月十三夜

我物と大和諸人ほこり見よ外にしられぬ秋の夜の月

暮秋

いとによりてぬきもとゝめぬ秋ならて何かはほそき有明の月

宗貞身まかりにければ公軌方へ

はかなさをよそにはぬれぬ袂哉只老らくは身の上にして
飼飯の海や跡の白浪立別こき行舟に世をなかさらん
いかさまに人の哀をとひやらんうつゝも夢を夢もうつゝを

音信はかりにていまた對面せさる人今はあかたへまかりける名殘おしといひおこせたるに

見ぬ人は面影もなしよそなから只聞渡る音に別れて

花の木とも手からうつしうへなと老の心をなやますもよしなくて

花も月もいさ浮世とて詠め捨ん終にそひはてゝ誰かみるへき

春雨

つく〳〵とふりもすさめぬ春雨に山のはにけてかすむ夕くれ

小遠州東より小袖なと送られしに羽衣のめくみを

かさねきてふけともしらぬねやの中に今夜驚山颪の風

同遠州へ上洛を待わひて

死ぬはかり待そわひぬる武藏鐙さすかに懸て春をたのめと

見歳暮戀

かつにほふ年のこなたの梅か枝に心の花をなと積むらん

雪の朝人のもとよりよし野の花の盛もかくこそといひおこせけるに

朝ほらけ吉野の花の面影も都の雪に有明の月

金龍寺へ花見にまかりけるに散過にければ

散る花も其夜風やさそふらん分て身にしむ春の山里

途中行吟一首

夏衣花山あらしかほるなり鞍馬路遠く花や尋む

鞍馬にて

春はいぬ鞍馬の山のうす櫻水なき空に殘る色哉
雪かとや北のおきなも驚む鞍馬の山の花のさかりは

本堂前に伊勢櫻たゝ一本有

昔聞今も鞍馬の伊勢櫻忘れ形みの名にこそ有けれ

鞍馬寺は藤原伊勢人建立。仍而如此詠之。

うす櫻殘る鞍馬のつゝら折行かとすれは歸る春かな
繚而如往而復。
是より貴布ねへ參詣
きふね河岩こす花の波枕山こえ暮て宿やからまし
大原野へまかるとて前日人のもとへ
別行涙よさらは雨とふれ空をかとにけふはとまらむ
白雲溪たかゝみねにて
獨ふす窓にたゝよふ白雲の外はもとめぬ溪陰の菴
風前薄
心とを人はまねかすはなすゝきあたなる風に袖ならひけり
萩露
たはむ枝も露にまかせて宮城野の本あらの小萩風なはらひそ
田家秋興
帶にせる細谷河もせき入て槇の戸めくる秋のふもと田
かくし題たかみね
圭やたか香みれとも衣の空燒にぬきをく妹か面影そ立
雪五首
一色に玉敷かへて天地の又ひらく世や雪の明ほの
山里は五百重ふり敷雪とちて空にのみ有月の通路
草も木も花ほしけなる冬の枝に先なくさめて積る雪哉
情あらはとへかし人も消かての雪さへ友を松の下菴
都人かよふ心やふみ分し跡もはかなき雪の山里
寒月
人心立かくれ見んくまもあらし身にさへとをる冬の月かけ
遠望山雪
高砂の尾上の雪に年ふりて遠山眉はくろき筋なし
河上朝氷
跡もなく絕て幾代の橋は今朝氷そつくる昔なからに
海邊雪
今朝も又おきにをれ波こよろきの磯の初雪よせはけぬへし
月前梅花
閨の外もさなからみつる梅か香や色によこきる月のうす雲
十五夜
猶つらしたのめてとはぬ雨よりも月にさはれる秋の半は
月前擣衣
唐衣まなく時なく打袖にたまれる霜やさゆる月影
月前雲
行としもはれまはみえす秋の空雲ゆへ月はかたふきにけり
名所月
出と入と山のはしらてわたの原八重のしほちや武藏野の月
月前述懷
いさゝらは月に任せて誘はれむまとふ山路のしるへもそする

父法印の三十三回忌に
めくりあひぬ古き涙もわきかへるいよのゆけたの數の御法に
立秋
今朝よりはうらふく秋をみせかほにまくすかたらふ山颪の風
七夕
此くれと七夕つめや待わたる紅葉の橋の身もこかれつゝ
秋戀
花の色も心の秋にうつろひて我家ひとつか本あらの萩
濱雪
ふりつもるはま松か枝の雪おれやしほ瀬にくたるつるの一聲
初冬
今朝見れは鳥羽山松に雪白し田面を戀て冬やきぬらん
忍戀
よな〱の枕も口はかためてきつゝむうき名のいかにもれ劔
月前懐舊
はれくもり昔に月の十寸鏡おはれ寢夜の夢うつすらん
野雪
鹿の聲虫の音も冬有馬山いなの笹原そよや初雪
久戀
影とめて涙のふちに年もへぬ物思ふ袖や月の故郷
山家
あつさ弓つよきいてやもとしあれはえ引とちぬ山の櫻戸
さかにて
嵐山麓の時雨峯の雲河音さやかにすめる月哉
ちる紅葉たれおほすらん嵐山たみのゝ島の名にはかくれす
定家卿舊跡
小倉山とへはこたふる跡ふりて嶺に忘れぬさほしかの聲
あたら櫻と詠しゝ西行舊跡
形見そと是もいつまて忍はれんあたら櫻のふりにける哉
大井河
大井河きしの岩ほにさく花を波のあやしと色に立見る
せいほ
思ふ事老てつゐにや山鳥のかゝみの影もくるゝとし哉
はふれけん身もはつかしく門さして暮行年にあはしとそ思ふ
忘れめやたゝかりそめの草の菴に情をきける露の一こと
とひきても昔の跡と誰か見ん老木の櫻つゐにくちなは
うき事は身のさかなれと亀山の岩かきぬまに尾はひかまほし
かもの長明を繪にかきて其さんを人のこひければ
すなはち長明は五十にして世をそむけりく濤□の
江を思ひやれる心さしをいさゝか詠しくはふる物
ならし

音さへうき世のちりは出けん
百とせの半の月も身にしれる

寛永八年かのとのひつしの年むすめの墓所にて

はからすよ飛をくれにし老の鶴の五とせ跡に音をなかんとは

又除夜に

なき人の来る夜と待し袖の上に涙の外の玉は見さりき

七夕草花

天河水かけくさも七夕の花のかつらに今やさくらん

八月十五夜

さのみやはかたふく月もしたはまし君か心の秋の半に
月の内に誰やとしけん秋の夜のなかきをぬすむ人もうらめし

社頭朝霜

神垣や森のしめなは今朝見れはうかひて結ふ霜の一すち

山家懐舊

又いそくつま木の路のさか衣君かためにはいつまてかきし

海邊七夕

吹はらふ石のみましや七夕に今夜かしまのおきつしほ風

萬葉集にもよみて侍り。かしまの明神天くたり給ひし時。此石のうへにてさせん有し名を。石の見ましとよむ也。

點爾何如

松風は吹しつまりて高枝に又鳴かはす春の鶯

松風は瑟也。高枝は氣象のたかき也。春の鶯は曲の名之。鳴かはすは孔子の點と也。

子在川上曰

夜ひと行河邊につけし水の泡の消ても消ぬ玉のをのは

山梁雌雉時哉々々

むかし人今も逢みて思ふにはたゝその山の雉子鳴なる

九月の末つかた鴨長明の遺跡日野の外山と云所を見にまかりて　　長嘯

先生丈室掃塵痕。同入維摩不二門。遺跡回首山自是。蒼苔惺蹇永無言。

朽もせぬ世々の形見と成にけり昔へたてぬ庭の岩かき
あれはつるもとの垣根を尋ぬれはすゝきかうれに秋風そ吹

歸鴈

都へやにしき飛すて行鴈にとこよの花のねたきけふ哉

若草

うちそよき先もえ出ぬ行末の秋風こもる荻のやけはら

春夜

心有る身にまて成ぬ春のよのあはれなしゆる月と花とに

郭公
聞しなやかひなくたゝね時鳥夢はかりなる一聲により
貝
晝思ふ袖にそひろふ忘貝かひあらは又それもうからん
足引の山の雫も音たかし岩ねの枕夜や更ぬらん
竹霰
いかにねていかにあかさむ竹の葉に霰みたれて霜こほる夜を
海上晴霞
朝もよひきの海懸て住の江のくるゝ波路に立かすみかな
松殘雪
吹はらふ嵐のいかにうつもれて春まて殘る松のしら雪
落花隨風
散ぬへき時にいたれはさそへともいふはかりなる花の下かせ
杜郭公
時鳥歸るさいかにさそはれて來にし心の神なひの森
納涼忘夏
岩波のいつくに夏はへたつらんたゝ涼しさは秋の川かせ
秋風驚夢
誰か夢をさそひ殘してうたゝねの枕に過る荻の上かせ
對山待月
つくゝゝと月待暮はかねてより心もかゝる山のはの雲

古郷秋夕
古里を心かろくも出やせん世の有様の秋の夕暮
寒草處々
霜かれを誰かあはれと思ひ草小花か本の秋を戀つゝ
關路雪
風そよく竹の下道分過て雪に宿かるあしからの山
忍泪戀
さらは又其まゝなかせ涙川せゝに波こす袖のしからみ
逢不會戀
逢見つるほとは現とまたしらて夢になせとも契らさりしを
恥身戀
いかにして人にむかはん老はてゝ鏡にさへもつゝましき身を
山家送年
年月をふるにつけても思ふそようき山住にまさる浮世を
旅泊波
ゆらの戸の行衞はるかにこく舟もとまり定むる和歌のうら波
月蝕
なく虫も今宵そつらき久かたの中なる桂をからす類ひに
待月
待人の里をはかれすとふ月やくるしき物といつ習けん
故郷月

里はあれて燕ならひしうつはりのふるすさやかにてらす月影

野月

淺ちふの小野のしのはらをく露にあまりてやとる袖の月影

海邊月

淡路島かたふく月は住吉のきしにむかへる鏡なりけり

月前虫

秋もやゝ夜さむの月にはた織て里めもよほす虫の聲かな

月似氷

月なれや氷はてたる池の面によかれぬにほの遊ふ玉もは

橋上月

橋姫の待夜の月や更ぬらん河音すみぬ宇治のあしろ木

月如弓

山の端にほそくかゝれる月をいたみおとろく鹿や聲を立らん

月前薄

こほさしと月影なから白露を玉にもぬける糸薄かな

月前萩

をく露は枝もとをゝの影と消て月にやをれん秋萩の花

月前萩

村雨の空をやはらふたえ〴〵に月も出そよ萩の上かせ

月前擣衣

すみのほる砧のひゝきや通らん月さへ雲の衣うつ之

中秋

佳期愼說嬋娟態。有狂雲妬美姸。圓缺年々三四夜。就中最愛一回圓。

雨中三月盡

鶯の涙やけふはそゝくらん雲に入ぬる跡の春雨

海邊月

をく網の中にしつめる月影をなのか物とや海士の行らん

秋の夜のね覺の床はたゝならし思ふ事こそ人にかはらめ

落葉

ねやの上によはる木の葉の音信も今幾夜かはね覺とはまし

とへかしな道こそあらめ山里の煙はうつむ木葉ならぬを

庭の面に風うちそよくならのはのなれはまさらぬ山のおく哉

寒月

夜をさむみ氷れる庭のうす雪につもりそへたる月の影かな

深夜雪

やとりなは明ぬと出て雪も夜も深きにまかふ野への旅人

橋下納涼

夕されはにほの海吹風こえて衣手すゝしせたの長橋

七夕

七夕の夢路たのまぬ一夜こそおもてはぬれめ天の羽衣

ひこほしのたち待いもは此夕へ河の光に舟出すらしも

寄繪戀

又も見る其なくさみは有なまし繪にかく程のすかた成せは

樵

さゝれ石のそこなる數もあらはれて清くなかるゝ山河の水

くもりなくうき世そ見ゆる山里のすますます心やかゝみなるらん

春光院七回忌

霞とも成ならぬ別をあはれいかに立へたてけん七とせの春

我涙今日なきつくせ老らくの三たひの後はあはしと思ふに

佛に花を奉るとて

今日の佛花ならぬ此花にをきあまる露はいかゝ見るらん

櫻花なとせなはやみ行水に浮て、かへらん春と成けむ

もろくちる花につけても悲しきはたゝ其夜の夢の面かけ

ひかし山に有無の瀧と名つけて時／＼岩のはさまより落る瀧の有けるを人のかくいひける

今こそけにしられけり有なしの瀧せ〔す〕いるゝ人の心は

又當のとくさに

さむこ閑を待はくるしき夢の世のうきを忘るゝしはの菴

この返しに

せき入る音はかはらて心こそ昔と今は有なしの瀧

山里に身をかくさすはうき夢のさむる待間もいかてたへにし

ひてよし關東御ちんの時分

いつ消てなのか春なも待えましふしの高ねの雪の下草

左慈か分盃蓬洲ふと思ひ出ゝまさむれみちの國へ

歸へきよしきゝて

朝たゝは雲もかすみの白河にいさ一坏のなさけわかたん

八月十五夜

あやまたる半の秋の夜はの月はれもくもりもわこそつらけれ

さらしなや風の雲もかきくもる月には今夜つきまそへけん

不逢戀

忘れては其夜もありとみるはかり情にはらふれやの袖なに

忍待戀

引たてし物からさゝぬれやの戸を吹とく風の待夜にそあらん

江邊萩

くたすとや小野のふる江に寄て見れは月も折敷いせの濱荻

初尋戀

初尾花ほのめかさはやと計なる風のつてにもむすの草くさ

今夜とはめにたつ月の雲消てなかむる影もあらすそなから

人や誰月をは華と岩橋も戀て今夜の秋はちきらす

月前萩

よしなしや月もこたへぬ萩の葉の忍ひかねたることはゝ詞りは

さえまさる月の下萩そよかすは思ひとかてやうつしゝら雪

月前虫

すへてたゝ是皆秋のすることそ月も夕も虫もうからす
ふきちふにきけは心もすむ月の光となける松虫の聲

山鹿

山そむる沼の色もさこそしかの時雨やうすきつまやこふらん

九月盡

名にしおはゝけふくり返せ行秋の重木のかつら長月もなし

菊を見て

紅葉かは染なす菊の色〳〵も時雨の糸のをる錦哉

月前菊

出るより花にかきなる月影は友待得たる霜の白きく

初春

年のうちは春のぬきもとりかへし何を手向の山の初春

九月十三夜

名にたてしうらみもはるゝ今夜哉月といへは雨花といへは風

遠州の蓮葉閣

樓の上の葉をたく秋もを遠しまつもる小簾の月にかこたん

秋のくれつかたに

しけかりしあさちか原の虫の音もひとつふたつによはる秋哉
袖の露なのか雲から行秋のかたみかほにや明は忍む
時雨れとまた一入の下紅葉冬まてそめよ秋のかた見に
誰か爲そ青葉紅葉一葉つゝこきませておる山の錦は

初冬

木のまもる柴の戸たゝく山嵐よ今朝こそ冬と音につくらん
四方の空更しつまりて花の上にたゝおほふなる月霜のゝ

山家秋暮

なかめすてゝ獨こもれる柴の戸を心にさゝぬ秋の夕暮

舊人ほとひさしくとはさりし時

中〳〵にとはれしほとそ山里は人もまたれてさひしかりつる

尊温本松花堂

形見かなおつとは見れと音なしの瀧もとゝろに袖はなかれて

道恩子より栂尾の詠を送りし贈答なとつかはさる比にや

初雪のまゝのつき橋中絶てはれぬ雲路にけふそふみみし

歳暮

年くれてあらふうないもほり出は春のまうけは事こりにけり

月前擣衣

唐衣まなく時なくうつ袖にたまれる霜やさゆる月影

時鳥數聲

宿ことに一聲つゝはゆつらはや餘りてたえぬ時鳥かな

山家

庵むすふわれにてしりぬ獨すむ深山の月のいとひもそする

月前戀

ちりはらふ待夜の床はおしけれと君ならて又やとす月影

世中のせめてもうくはとはかりの山のは出る月そあやしき

茂あふ草のは山を末に見て夏遠からぬ武藏のゝはら

〔六・三〕題しらす

かす月雲咲とくな宿はの風秋のおほろそ春のさやけさ

人またし有へくもなき我宿と梅咲ぬれはえこそ覺ね

櫻の枝にみのむしの居けれは

主なしと花をや思ふ雨そゝく櫻か枝にかゝるみのむし

老らくの世もうく人も情なしさもあらはあれ幾程の身そ

五月五日ある人のもとよりちまきをみすとて

近き山まかはぬ住居さゝなからとゝひもせす春そすくせる

題し

千代ふともまた猶あかて聞へきはこのをとつれや初時鳥

玉くしけ二夜の月を一度に見するや池のかゝみ成らん

秋のも中何氷らん袖ひちて結ひし池の水の月影

雲の波光に消て池の面もひとつにてらす秋の夜の空

秋は今夜も中ならすと見さらめやこの池水にやとる月影

落葉

山風をなにゝふせくと人とはゝ落葉衣の有とこたへん

月

おきてみる霜よの月の影清し人はしつまるれやの戸ほそに

せいほ

小車のめくりて空に行影もこよみの軸にうつる年哉

八月十五夜

今夜とはめにたつ月の雲消てなかむる影もあらすそなから

九月十三夜當座

禁庭月

み垣もる衛士も今夜はいとまあれやをのかたく火を月に忘て

山家月

さゝめかる袖にも月のやとる哉思ふか物をしつのをた卷

松間月

幾秋かきさ山松の木の間より心つくしにみよしのゝ月

山里の松の葉かすも月よみのもらぬはかりにすめる空哉

山家雪

ふる程は小野のあさちふあさけれと餘て積る嶺のしら雪

閑庭冬月

霜さやく軒の下荻跡たえて人こそとはれ月そよかれぬ

長明の像の讚

はしたかの外山の正木跡とちてかりにや露の身をはをきけん

せいほ

瀬をはやみなかれて年も犬上や何にかたけき床の山川

見わたせは山もあらはに年くれぬしつか門松今やきるらん

落葉在簷

物いはて散にし花の山櫻紅葉にくふる枝の別路

山家月

吉野山すゝのしのやは花よりもむすふとならて月にならへて

深夜月

相思はて更も行かな月はたゝうはの空なる心ならひに

はやく住給ひし山莊の藤の花いますみ給ふむかひにてみえけれは

わか物と又吹迺ゆ鵜鳥川ふちは瀬にさく宿のまつ風

かたふきたる（行書）さかとつくりにやせ僧と云名を付て

なれよなれなれなれはやせ僧時にあはす頭打な（いに）物はしけなる

宿に白藤のさきける比九條の大將殿なとおはしける時

行春に誰か手向とや藤の花しらゆふかつら懸てさくらん

まく霜と白きをわれはかさゝきや雲にも渡藤の橋はし

夕顏のさける軒はの下すゝみおとこはてゝれぬ（ナイ）はふたの物

右天下至樂也。有誰知之。

日斜睡足黄牛背。不信人間有廣輿。

此古詩此歌書たる重衛門所にあり。

文殊院にて朝の眺望と云題いたし給へる有けれは

物申歌よみたうへむすふ句に今朝のもしこそ冬の眺望

ふる雪に跡もをしほの山人は柴とりたえよ冬の通ち

年内立春

年の内の春せき入て音羽河先鶯の心をそ見る

三と云むすめの墓所にて

いかにせん常ならぬ世は遮莫さかさまならぬはかなさも哉

ひろきすとはかなき人をうらみしや心のやみの錦成らむ

河ほとりにてあゆをとらせなとして遊ひてけうか

あいすくふあみた佛の御利生かはらみつはかりくひふくれ哉

安樂菴策傳もとより女郎花を一枝送る

女郎花すかたを霧にかくしても色にある名はいかて忍はん

返し

色にある名は誰かもらす女郎花八重立こむる霧のまかきに

人のもとへ松虫すやるとて

まそてかす月の爲そとむへ霧をしかけはてや影はやとせる

七夕

ひこほしのまれに逢夜は絶／＼の雲の衣やうはき成らん

虫

袖やかく聞ぬ夕はしほれつる涙成けり松虫の聲

秋[illegible]野は人そ絶せぬ花薄まそをの糸のくるとあくとに

入相を

[illegible]のゆふへつくらん小初瀬や雲より落る入相の鐘

たま人の出つる宿を尋ぬれは[illegible]さす峯にをのしい〔ママ〕聲々

くらまにて

紅葉はを光にきつるくらま山秋こそ道はたとらさりけれ

貴布禰にて

貴舟河玉ちる瀬々も紅にこかれて落る峯の紅葉は

とかにて

[illegible]河代々の御幸の跡ふりてとなせの瀧のいともかしこし

[illegible]清岩きりとをし行舟のはやくはきかぬ若い御代哉

野宮にて

[illegible]草の茂るにつけてゆかしきは花虫の音の秋の野の宮

擣衣

[illegible]に月はかくれて衣うつ遠の里人ねぬ夜しるしも

荻

[illegible]ふ花の葉[illegible]守はそよかぬ程やぬる夜成らん

落葉

すくる嵐の後[illegible]音もせぬ木のはにつきてふる泪かな

雪[illegible]花

雪の光を花の色とみてさかぬもさける今日のしら雪

さきあへぬまかきの菊にをゝはんけふや先立花やをくるゝ

朝日さすそなたのませの色も見すさそな待らん春のとなりは

はかなき事を思ひて

思ふとち一日もうとく過さめやいつと定めぬ世のはかなさに

草のはらとはれんまては白露の消ぬかきりそうときこころ哉

春夢階紹三を夢にたに見ぬ事とおひて

思ひねの千夜に一夜もさやはみるたゝ其夢い名こそおしけれ

はかなくて消にし露をとめ葉にかけもかけすも戀ぬ日そ無

雪の夜い中に

日數ふる雪も絶への山とちてうつみ殘すは月の通路

年のくれ

老の身にふりそふ年の雪ならはつもれるとても打やはらはん

時雨

染もえすまきたつ山の村時雨あらそひかねてはるゝうき雲

母のなく成ける比とはさりけれはていとくか許に

つかはしける

とへかしなともにつゝみしうれしさよ今はよそなる袖の立花

題しらす

浦風に聞えこゆる村千鳥須磨のと渡る木の葉なりけり

それなからおき行舟の浪間よりみえし小島もあらす來にけり

待わふる都は冬の夏衣たよりにつけきほとをかそへて

一村も枝に殘らぬ錦哉昨日の秋やきて歸けん
冬は猶岩間のかけひ絶〳〵に峯の絲すちくる人もなし
霜のはしら氷のくさひうちつけに是とそ見ゆる冬の住居は
寛永五年十月朔日父娘みまかりしに
はかなさの形見にくめる水の淡よ手にもたまらす消る面かけ
是をとひて元成と云者のよみけるうた
山里も定なき世の初時雨歎きより先色はそむらん
此返
初時雨かさなる袖やいかにとも定なき世を知人そとふ
述懐の歌の中に
無數に入てや人のかそふらん生る心ちもせぬうき身かな
有人の許につかはしける
生る日の宿の煙も先たゆるつゐのた木々の身は殘れとも
こかれなんこせけれは返しつかはすとて
しはしとて木火土金をかりの身は誰か一度かへさゝるへき
雪
山里のつま木の道もゆきとちて心ほそかる年の暮哉
時鳥
待〳〵てつゐに聞つる時鳥心盡ぬ人は有へき
今ははやまちもけぬへし時鳥たゝ一聲そ命なりける
時鳥しちのはしかき百夜ともたのめぬ聲をいつと待らん

きよはく堂にて子ともなとかれ是つとひて遊ひけ
るに紹三の事まつ思ひ出ゝ
遊ふ子の數にもいらて君獨苔の下にや今は數かむ
吉野山花
見渡せは吹もすゝまて吉野山花にけ[雪歟]たる峯の春風
風吹は吉野の櫻春も猶天きる雪のなへてふる覽
思ひます春ならうらみそ吉野山秋も櫻の紅葉成けり
宇治川落葉
紅葉ゝにいさよふ浪も染はてゝ錦をあらふ宇治のはし姫
年内立春
年の内に關守神やゆるすらん逢坂こえて復む春かな
雪
ふみ分ん程こそあれの山里にとはぬつらさやうつむ雪かな
しちやうのうた
白雪はねやの枕をうつめともいかてなこやか下と成らん
たんほの歌
寒き夜も身にそへてこそ伏にけれ此君なくはあらしとそ思ふ
ありとても夜のにしきのふすま哉夢ならてやは春も通はん
冬丸の許よりつくしにくたらんとて
思ひ立心つくしの旅衣春とゝもにや歸りきなまし
心やはへたてん雲のよそにても同し契の山のはの月

[illegible]

[illegible]

跡こん跡をは春の別たにいさしらぬひの心つくしや

月影は雲井ちかはす詠めそと頼むたのみの涙くもらは

折〳〵の宿し情を忘れすは鶴の羽風の便すくすな

[illegible]山に[illegible]は

すゝ思ふきゝす鳴之音の下いかに聞らん我そかひなき

[illegible]

[illegible]

[illegible]にも

春の歌の中に

夕闇も軒に[illegible]月こそ[illegible]花[illegible]

人の許より[illegible]桜を[illegible]こせたる返しに

紅のうす花桜わきて見ん手折心は色によらすと

時鳥

[illegible]かならすきたく[illegible]に[illegible]まつ

いな寝くねてもあかさし時鳥初音あらそふ此比の宿

忍ひねにやかてかたらふ時鳥心にかなふ今朝そくるしき

[illegible]有明の月も[illegible]らて似たるを友とつれなかるらん

桜花一樹

二もとの杉[illegible]の花を人とはゝふる川野へにみきとこたへん

寛永五年七月四日九條殿忠榮おはして初秋風と云

題にて當座遊はしける

袖涼しならす扇も昨日けふとらて音する秋の初風

同題にて

吹も[illegible]にしられぬほとなれや氣色はかりの荻の上風

同し十四日月あかゝりける夜春光院の葉[illegible]になか

め明して

我ならて又そことゝふ君忍ふ草にやつるゝ古郷の月

秋のうたの中に

身の[illegible]の又[illegible]そへる夕へ[illegible]秋の[illegible]

[illegible]に秋のうれへ[illegible]はかる山かつか身も哀知らん

虫の音[illegible]秋のあはれはつき草の花の色かすさかしかの[illegible]

[illegible]か宿の[illegible]にほのみえて朝かほかゝる紫いそとかき

いとふなよ[illegible]のかつら秋かけて枯葉にやもるみすの月影

住[illegible]し都の宿はわすれきやといつ山里の月にとはまし

[illegible]葉[illegible]かそふはかりに月すめは影たしかなる庭のときは木

よそならぬとき月をなかめて

こよひ我月をまとひの數に入て又獨そふ思ふとちかな

荻の葉に秋かせ立し夕へよりいてそよさらに誰か戀しき

八月十五夜

うなはらや思ひとそやれすむ月に草はの露も玉そ數そふ

　九月十三夜
見るほとにまた夕付のしたりおの長しや月も明る夜の聲
　道子にをくれて歎くに父もなく成ぬときゝてつか
　はしける
色〳〵にかはかぬ袖に秋の來てをきそはるらん露をしそ思ふ
　永喜同父なく成ぬる事を
かつしかやかつなくさめよをくるゝも哀親子のまゝのつき橋
　過し年の十月〔時雨忌〕晦日なく〳〵成し人の事を思ひて
こそのけふ思ふ涙の村雨袖こそ冬のはしめ成けれ
　春のうたの中に
春きての雲そ初花おそ櫻まかへる物と何いとひけむ
　花見て春うせにし人の事を思ひて
幾度か散にし花は咲ぬらん別し春の人はかへらて
　春のうたの中に
我宿の花さきしより誰となく夜な〳〵夢に逢いもやそれ
吉野山花見に行む出立も宿の櫻に思ひとまりぬ
野への色は春の心のあさみとりまた下染の露の一しほ
さほ姫のけふの細布織ぬらしめにたに見えぬ春雨の絲
とゝはん古きよしのゝ宮木守いつよりかゝる花はありやと
　寛永六年卯月のはしめつかた春光院榮花紹三をい
とたしかに夢にみて樣〳〵物なといひかはすと見
て覺ぬれはいと悲しくて
さめてこそ有へかりけれ無人にうれしく逢と見つる夢かな
　九條の右大將忠象おはして雨後落花
ぬれつゝもしゐてとへとや春雨のはれ間を花も待てちりしを
はれ間いかに待て散らん春雨の露よりもろき花のえなから
　萬事休
歎れん思ふ事のみかなはぬもあめのふたけとかれてしらすは
　題しらす
とまり居て誰か見はてん形見社思ひかへせはよしなかりけれ
ちれは彩見咲はしろへの峯の雲まかふとてや花にうらみむ
音もせて春日長閑けし時守のつゝみやけふは打わするらん
旅人夢にいる野のはつ尾花手枕かれて秋風そふく
來ぬ人の枕につもるちりみすはたゝ大かたの夕暮の山
このねぬる夜の間の夢に散にけりさかぬはかりの山さくら哉
待わふる花と先さくよそめこそ高根の雲の情成けれ
初櫻白雲の名や龍田山世はをしなへて花さかぬころ
白露のおきてをみんと秋の夜の長きをかこつ朝かほの花
　五月五日
あやめ草今日そ軒はにみちのくや忍ふの里もかつみふくらん
　すゝきを
むれたてる野をなつかしみ花薄すみれならても一夜ねなまし

玉をなす秋の花野の露のうへに色〳〵やとる月のかす〳〵

昔人の心もしらす花薄秋をほにあけてなとかみすらん

夜もすから野守か巷は枕より跡より虫の聲を聞らむ

霧

晴きてはほすゝにかゝる山からも猶雲かはすつるならひを

をのれのみ茂る物から刈小花世にはふとはぬ山かた

菊

吉野川きしのそか菊色も似すいかゝうつろふ大和との葉

月

自見る月も心もすみけてゝやとるにしらき衣浦かな

九月九日

とたかふ身には中〳〵かさしてん浮世成けり今日のしら菊

九月十三夜

ぬひきする今夜の雨の糸もうし空行月の雲の衣は

河ヶ初秋

早見むきそ涼しき大井河西こそ秋の水の上

秋の野の露わけうつる衣手は濡れてのみそ萩か花すり

八月十五夜

名にめてゝ問人もなくさよふけぬあやしや月を誰とみつらん

、いなかより上たる人の許へ萩の花すゝきつかはす

とて

萩か花ちらすのみかは待人にさはるもつらき秋のむら雨

まねくてふかひこそなけれ花すゝき來ぬ人故に露こほれつゝ

題しらす

よそになと昔を遠く思けんたゝ今日の日の過る成けり

何事もかきりあれはとをいつから待より外の無世成けり

立秋

それなから軒はの松を吹風も秋のしらへそ今日はとなる

松に吹荻にそよくも今朝よりは音こそかはれひとつ秋かせ

善光寺にまうてゝ聖徳明神の像を拝して

無影に又袖ぬれてつかへけん昔を今のしつのをたまき

春の雪ふりけるに聞人の許へ

雪はまた世にいつくに有明の月より降る雪あらはせ

むさしへ下る人に送る

思ひやる旅の衣のうはきとはまた白雲の峯の通ひ路

むさしの國に行こと有ける比たよりにつけて

このまゝにおはて消なは老らくをいかて頭の雪としもみん

せいほ

春立て今朝何となく嬉しきは花に心の先かよふらむ

初櫻

待わひて今はと消む朝露の玉の緒となる初櫻かな

たひの宿花

山櫻ちるしたふしのもとゆひよ花にはあらぬ雪の明ほの
　仙洞よりみな月十日あまりの比かえて紅葉したる
　木にうけてたまはせける
春秋も君にまかせてくれなゐのいともかしこき紅葉をそみる
　立秋
風の音につけの小櫛のさすかけふ秋とはしるやなたの鹽やき
　遠州伏見に有ける比ひしほとにうめとつかはすと
伏見山近きもうとくはる〳〵と思ひしほとにうめる道哉
　秋立日雨のふりければ
をはりや雨やとりせてくれにけり昨日もさはらすきたる秋哉
　公任卿の哥を思ひて詠。
　はちす
見せはやな池のはちすの白糸はこひちにさけとそまぬ色香を
　螢
池水のもに住む螢あはれなと我から身をもたきはすつらん
　忍涙戀
かた〳〵に忍ひははてし思ひあまるむねの下もえ袖の上露
　寒草纏霜
深草やうつらの床のあれまくに情置けん野への夕霜
　秋のくれ
茂かりしあさちか原の虫の音もひとつふたつによはる秋哉
時雨れとまた一入の下紅葉冬まて染よ秋の形見に
袖の露をいか物から行秋の形見かほにや明日は忍はん
　初冬
木の葉もて柴の戸たゝく山風よ今朝こそ冬と誰につくらん
　しか
山鹿の涙の色もさそなしかの時雨はうすきつまや戀らん
誰か爲そ青葉もみち葉一葉つゝこきまぜておる山の錦は
　寄年戀
かつ匂ふ年のこなたの梅かえに心の花をなほたのむらん

〔右若狹少將勝俊朝臣集以輪池叢書校合〕

續群書類從卷第四百四十四

和歌部七十九

法印珍譽愚詠

春哥

梅

里となくむめの下風にほひきておらぬそてさえ花のかそする

花下過友

めくりあふひときかもとの契まて思へは花のしろへなりけり

落花

やま櫻ちりしくみねを今そしるあらしに春のかへるみちとは

河上落花

散花のなかれていつるみなと川いつくか春のとまりなるらん

夏歌

瀧上五月雨

五月雨にみなかみしろく浪こえてさらす數そふぬのひきの瀧

海邊納涼

夕立の雲ふきはらふうら風にひくてすゝしきあまのたくなは

雨後夏月

ゆふたちの晴行あとのにはたつみやとるほとなき月の影かな

橋上螢

ゆふされは人もわたらぬまろき橋おのかひかりにゆく螢かな

秋哥

杜早秋

思ひおえすいつより秋にならのはのこかけすゝしき杜の夕影

松風入秋

いつもきく松のあらしのおともなをわきてかなしき秋の夕暮

七夕

ひこほしはあふ夕くれの空はれて雲のはたてにものは思はし

山路霧

やとからん里はいつくにありま山いなのをたとろきりの夕暮

萩

こはき咲野中のいほの跡にきてすみけん人のこゝろをそしる

田家にすむ人につかはし侍

露霜のおくてのいなはかりにたに山たのなる子音つれもなし

冬歌

落葉

朝な〳〵このはちるらし神無月もりのあらしの聲そすくなき

冬河

つらゝゐるほそたにかはの音たへてみ雪ふるらしきひの中山

山家冬

いぬかみやとこの山風さえ〳〵ていさやかはせの水こほるゝ

月前水鳥

冬こもるみやまのさとの夕嵐たつるもなをそさひしかりける

ゆきかとやうちはらふ霜し鴨のうはけもしろくやとる月影

山路雪

今日もまたさやの中山越わひぬよこほりかけて雪はふりつゝ

恋歌

しのふ山かよはゝ道もありぬへしさても心のおくそしられぬ

いたつらにゆきて帰らん道もうししはしまとろぬよひの關守

雑

妙荘厳王品

あらためし心のすゑをしるへにて法のみちにはまよはさりけり

あつまへまかる時ふしの河にて千鳥なきゝてよみ

侍

あつまちや都もとをくなるさはの富士のかはせに千鳥鳴なり

右曜の労によりて法印をのそみ申し時よみ侍

よゝをへてほしの光をあふけとも心のやみをなをそてらさぬ

本書慈鎮和尚筆

右以鹿嶋貞吉本書寫文化六己巳春

法印珍誉之系譜

桓武天皇 — 葛原親王 — 高棟 — 惟範（中納言従三位） — 時望（中納言従三位） — 真材（従四位下伊勢守） — 親信（参議） — 重義（従四位下守） — 致成（従五位下） — 惟綱（従五位下） — 家能（従五位下） — 珍也（六位） — 珍誉（六位侍）

一 參擇
一 參考 華古記

寂身法師集

百首中　題文集詩　建保六年

沙彌寂身

春

今日不知誰計會　春風春水一時來

けふそとは誰出風に契なきてうちいつる浪に春を知けん

春風先發苑中梅

さま〳〵の花のしろへと吹風にいかてか梅のさきはしむらん

白片落梅浮澗水

蘆引のやまちの梅やちりぬらん色こそにほへ水のしら浪

黃稍新柳出城墻

見わたせはかきほの柳うちなひき宮こにふかきあさ緑かな

春來無伴閑遊少

たれゆへにむかしは花をみけん我とのとけき春の心を

夏

薰風無衣吹　不寒夜不熱

朝またき日影もうすき衣手にいつより風の遠さかる覽

野鶯賞思盡　新蟬除涼多

さそはれし花のかもなき夏山のあらぬみとりに鶯そなく

盧橘子低山雨重

あしひきの山のむら雨いくかへり花たちはなに露をそふらん

不是禪房無到熱　但能心靜卽身涼

しつかなる心そ夏をへたてける照る日にもろゝ宿ならねとも

夏臥北窓風　枕席如涼秋

しきたへの枕に秋のちかゝらん風にみたるゝ夏の夜の夢

秋

夜來風雨後　秋氣颯然新

あま雲のはるゝならひの風そとて驚かぬにも秋そ見えける

團扇先辭手　生衣不着身

てになれし夏のあふきに吹かへてうすき衣にたゝぬ秋風

黃茅岡頭秋日晚　苦竹嶺下寒月低

夕露や岡のあさちにのころ覽影こそなひけ山のはの月

不堪紅葉靑苔地　又是涼風暮雨天

紅葉ちるこけの緑をあかすとや夕をそむる嶺のむら雲 雨來

草物秋霜能壞色

くれて行秋をおもはぬときは木も霜にはもろゝ色なかりけり

冬

簾々窓戸前　又聞新雪下
風さやく松のとほその明かたにとしまたみぬ雪を見る哉
雖有數叢菊　新凋籬落間
のころ色は秋なき時のかたみそと契しきくもうつろひにけり
南窓背燈坐　風霰暗紛々
山めくろあられの風もはれぬめりしはし殘れ宵のともし火

戀

夜深方獨臥　誰爲拂床塵
ふす床の涙のちりはつもれともよそにふけゆくかたしきの袖
夕殿螢飛思悄然　秋燈挑盡未能眠
夏虫の影にはまかふともし火もおよはさりける身の思ひ哉
行宮見月傷心色
うき色の草のはことに見ゆる哉月もいかなる露にすむらん
舊枕古衾誰與共
ぬししらはいつくの夢を尋ねてもをのれくちぬとつけのを枕

山家

從今便是家山月　試問清光知不知
いまよりはおなしみ山の秋そとて契もなれぬ月をとふ哉
始知天造空閑境　不爲肥人富貴人
身にさむき嵐もとをくならひにし人はしのはす山のはの庵
何時解塵網　此地來掩關
みねにゐる雲のさかひは遠けれといるへき山と松風そふく

舊里

前庭後苑傷心事　只是春風秋月知
ぬしやたれ里はあれにしふか草に見ぬよの秋をのこす月影
蒼苔黃葉地　日暮旋風多
木葉ふく夕の風はわたれとも跡はかもなき苔のかよひち

閑居

但有雙松當砌下　更無一事到心中
心にはそむるおもひもなきものをなにのこるらむ軒の松かせ
山林太寂莫　朝闇苦喧煩　唯玆群闇內　囂靜得中

閒

世をすてゝ入たつみちはあさけれと心のおくの宿そすみよき
深閑竹間扉　靜掃松下地
ならひある夕の空をしのへとや竹のあみ戸に松風そふく
頽然環堵客　蘿蕙爲巾帶
いにしへはおもはて過し身のはての中々やすき苔の袖かな
欲留年少待富貴　富貴不來年少去
陰あらはもれしといひしゆかりまて賴みむなしき松のおい末
春去有來日　我老無少時
猶春をみれの霞にたのめても待日すくなき老の行すゑ
我有一言君記取　世間自取苦人多

しろや君なれもみるめの心からをのれと浪に袖そしほるゝ

生死倚復然　其條安足道

きえてをく身は朝露のあたなれは夕風をまつ恨たになし

身心一無繫　浩々如虛舟

つなかれぬ心をいへはうき舟の風のたよりをまつ心地して

秋風雙衫淚　泉下故人多

なかきよに消にし露の名殘とや秋の淚の袖にみつらむ

幻世春三夢　浮生水上漚

世中は春の夢路にせく川のみなはにめくる程そはかなき

法門

追想當時事　何殊昨夜中　自我學心法　万緣成一空

いつまてかむなしき空にたとりけん雲も霞も色そのこらぬ

同念發弘願　願此現在身　但受過去報　不結將來因

浅くちぬ猶身にむすふ契あらは此世なからもとはまほしきに

百首中　無題　承久元年

春

ふるすしめしいつれの谷の鶯かまつ里なれて春をつくらん

芦のはに枯にし冬の色なから身にさむからぬうら風そふく

山かつのかきほとてこそとはすともをのれ忘るな春の梅かゝ

みよしのゝ吉野は春のをそけれは宮この花をまつや尋ん

嶺にゐる雲のいつくにさく花の櫻とわきてよそに見ゆらん

春風のしのひて花をさそへはやかつ色まさる山のした水

山人のふくてふまきのいたつらにをしの花も色やうつろふ

ちる花をまてとはいはししのふ山しのはれぬへき嵐ならねは

鴈の行みちゆきふりの春雨に雲なかされそこしの山風

宮こいてゝ春はいくかにゆく人のぬれて折らむたこの藤浪

夏

あかつきそなきて行なる郭公いく夕くれの雲をまちけん

みしか夜のあしまのうきね深にけりなにはの浪に月も殘らす

五月雨にありて行水はやけれはにふのいかたし棹も取あへす

夕やみの空よりつゝく五月雨に行ゑもしらす有明のつき

みたれあしの末葉の露はむすへとも秋とはよせぬまのゝ浦浪

夕立の雲のたよりは過はてゝ風もかよはぬ山のかけくさ

木のまもる山のしつくやまさるらむ夕はよはき蟬のこゑ〳〵

ぬしやたれ浪のしらゆふかけなから川瀨ふけゆくあさの一枝

秋

ふく風も秋はかなしといひなからまたるゝものは夕なりけり

七夕の契あらはす今夜しもとたえなそめそ雲のかけはし

たなはたのあかぬ淚やあまるらむかさぬにかへす袖の朝露

した荻の露をはいたくはらへともむすひもしらぬ秋の夕風

秋をへてまたとふへしと思きや忘しまゝの庭のよもきふ
なのかなく花の色にそむすひけるいつかは秋の露は白玉
たのめなく露のゆかりのひろけれは影もあまらす武藏野の月
しゝはやないかはかりなるよのうさに思すてけんふか草の秋
山本のしらむ浪まにいてにけり月はさなからあけのそほ舟
まはきさく野へにや秋のかきるらむみ山は鹿のねこそ遠けれ
遠からぬとはたをさしてゆく鴈は雲ゐなからも聲そまちかき
秋ふかき野原のいほの虫のねはかならす暮を待としもなし
松風は今夜そさむき高砂の尾上の霜やをきはしむらん
思そめし花の使も秋くれてなけかんための野へのかりいほ

冬

秋の色をいかに時雨の染はてゝかはらぬ空に冬をつくらん
あらしふく山の木葉のをしなへてもろきや冬の始なる覽
今朝はまた霜より露そむすひけるさすや日影の岡のかや原
かきりあれは菊の籬も枯はてゝ秋なき宿にのこる月影
さそはれし秋のもみちに見ぬ夢もをとろきはつる木枯の風
蟬のはにむすひし露のなこりとや猶色うすき森の夕霜
時雨つる雲もあらしも過やらぬをなしね覺にあられふるゝ
雲はみな雪けになりぬ旅の空跡あるみちの末もいつまて
あしひきの山里いかにふかゝらん宮こも雪の日數つもりぬ
忘れてはつもれる雪をかこてともいつかとはれし山のはの庵
ふけにけりつまとふ千鳥いたつらに行てはかへる浪の通路
いつもよとむ物とはなしに山川のわか身こす浪けふそ知るゝ

戀

玉ほこの使に見えし夕より雲のはたてはなかめそめてき
いかに我あきの時雨に身をなして思ふはかりの色を染まし
いかにせんたつ名もたかき夏山にこかくれはてぬ空蟬のねを
かる草のねをはなれたる露そ共とはねは袖をえこそこたへね
こひ衣露のなくへきひまそなき涙なからや袖にかきまし
浪かゝる袖のうらみのよな〳〵もなとなき露そ色にそみゆく
かへるさのあかぬ涙をゝきそへて我としほるゝしのゝめの道
ふかき夜のかたみをのこす山のはにくもらぬ月の影そ絶ぬる
忘しとたのめし人のいつはりをむかしになさておもひしる哉

雜

世を秋の空たのめせし山のはにわれ松風や猶もふく覽
いりそめし心のみちをまたとへと涙のしほり跡もかはらす
うき色そことの葉ことにかはれとも涙の露のをかぬまはなし
春はうく秋はかなしといふもみなものを思はぬ心とそしる

百首中　題名所　承久四年

春

音羽河

山風の霞にもるゝをとは川うち出る浪の花もさくらん

玉島河
玉しまや春とも見えすすむ月に光そへたる瀬々の岩波
高砂
やへ霞たつなはかりか高砂の松こそ春の色はそめけれ
伊勢海
いせの海や浪のよるなくあし鶴の子を思ふ空にかすむ月影
蘆屋里
春雨も染こそやられ冬枯の蘆屋の里のあしのうはふき
吹上濱
はる風の吹上のはまにちる花やよせてかへらぬ奥津白波
湯等三崎
紀の國やゆらのみさきによる舟の夜るさへかすむ跡のしら波
田籠浦
しほくまぬ袖ともいはし藤浪の色ふきよせよたこのうら風

夏

大井河
山のはそうつれはかはる大井河岩まに夏のかけは見えれと

秋

泊瀬山
はつ瀬山風のをとこそ秋ならめおのへのかれも昨日にはにす
龍田山
たつ田山夜はにこえ行秋風にひとり時雨る杉のむら立
水莖岡
みつくきの岡へのあさちかりなきて秋風寒ししのゝめの空
小倉山
木下のをくらの山になく鹿は月待えてそ遠さかるなる
常盤山
した草もいかてか色のかはる覧染ぬときはの杜のしつくに
伊駒山
いこま山秋はたかねもたえぬへしゆるさぬ雲に時雨降つゝ
伊吹山
木枯のいふきの山の紅葉ゝやすそ野の秋の色をそふ覧
佐良科里
有明の月をたのめてまつよひに虫のねふくるさらしなの里
白河關
さと人のねぬよのころか旅衣うち時雨ゆくしら川の關
野島崎
露こほる野しまか崎のあさちふにあはれいつまて松虫のこゑ

冬

片野
かり人のかたのゝみのゝあつさ弓かへる家路ははつ雪そふる
田簑島

たれかきむたみのゝしまもるはかり雨より雪のきゆる空哉

因幡山

たのめても待へきものか身につもる年もいなはの山のはの空

戀

益田池

なれぬよりいとゝます田の池水にうつる心を身にそいさむる

磯間浦

興津風あらきいそまのうら浪もおもふはかりはくたけさり兒

守山

しのへたゝ露はならひそもる山の下葉の色は猶かはるとも

鳴海浦

たかゝたに人のしろへもなるみかた影たにみえすあまの漁火

名取河

あらはれて後やしつまん名取川うき名にこりぬせゝの埋木

雜

不盡山

たれか見ん雲より上のふしのれにけふりはかりの在明の月

還山

かへる山かよひなれたる旅人はとまらぬ里のほともたとらし

飛鳥河

淺きより深きをたのむ飛鳥川あすはうき世やいとはれもせん

鳥羽

遠からぬ旅の枕もあはれなりむすふとはたのいれかての露

布引瀧

世をいとふ袖の色にそをりてけるきりたつあさの布引の瀧

玉河里

ぬしやたれ露のまかきそあれにけるとへとこたへす玉川の里

角田河

いとはるゝ名におふ鳥のすみた川かはる心のうき名なかすな

若浦

ふくかたもしられぬわかの浦風にまたさたまらぬ浪そあれ行

三津濱

ひかりさすにしの山邊の夕付日たれかはよそにみつのはま松

百首中　題四季　貞應二年

春風

鶯もいてぬる谷の山風に花のかまよふ春の明ほの

春曉

梅かゝの枝にきへゆく古郷にわすれぬ月の有明のかけ

春山

風ふけは櫻にまさる瀧の上のみふれの山に雲そうつろふ

春池

花をまつ池のかゝみにちりつもる雪には水もくもらさり兒

春河
よしの川春ゆく水のうたかたのあはれよたれも花のかそする
春鳥
うくひすのをのかは風をしるへにて花の香さそふ明ほのゝ聲
夏月
かやり火のけふりのまにそ深にけるしはし軒端にくもる月影
夏雨
夕立も山をやめくるつくはねの嶺よりみねにうつるいなつま
夏夕
しかすかに秋とは吹す夏衣ひも夕くれのならのはかしは
夏野
思あらは袖の露をもやとしてむたゝひきむすふ野邊の夏草
夏田
みたやもりけふやのとかに詠むらんきのふは早苗あすは秋風
秋月
草葉にも秋こそやとれ夜はの月わか衣手の露なわすれそ
秋夜
長きよのね覺の數はつもれともたゝおなし身のうきをしそ思
秋海
徒に月やすむらんすまのあまの秋のよとたにしらぬ枕に
秋花
やとろへき月に契やなかるらむ夕露またぬあさかほのはな
秋戀
ふけねたゝひとりぬる夜の秋の月とありかほの影もうらめし
秋述懐
いかにせんいへはうき世の秋をたに思もすてぬ心よはさを
秋無常
はかなしやあらき風ふく草の上にかれにし枝をしのふしら露
冬日
冬の日は影もあらはにてらせとも草葉の霜は猶そつれなき
冬夜
冬の夜の霜のうはきやらすからん身はならはしの鶴の毛衣
冬山
山たかみ雪を分入たひ人のいや遠さかる跡のしらくも
冬河
みなと川冬行舟のさはりおほみあしのたえまもらす氷して
冬杜
これそこのつもれは人の跡たゆるおいその森の雪の明ほの
冬花
くれなゐににほふはさかす年のうちは雪の色なる梅のはつ花
冬山家
みちたゆる雪とや今はなかむらん時雨ゝやまのおくの里ひと

冬無常
人の世そ猶もはかなき草の原きゆへき雪も春を待つゝ

百首中　寛喜二年

春

鶯告春
鶯のこゑ待えてやさと人の花をそしとおもひわくらん

行路霞
はる霞たなひきにけりあつさ弓末のゝ原の道たとるまて

島若菜
旅人の宮このつとにわかなつむみつのこしまをけふ見つる哉

梅久薫
おる人の袖こそかはれ色もかもおなしむかしににほふ梅かえ

浦春雨
墨染の袖たちぬれぬあまつたふひかさのうらの春の明ほの

夏

橘五月雨
五月雨にしたゆく水やまさる覧浪にちかつくふるのたか橋

山五月雨
白妙のふしのしは山しはらくもはるゝまそなき五月雨の雲

秋

暮天初雁
とまるへき田のもの宿や遠からん夕くれいそく初鴈の聲

冬

歳暮雪
みな人のよわたる道にとしくれていそくもしらすつもる雪哉

戀

寄玉戀
をのつからあふなゝわたのたま〳〵も心の筋をえ社とをされ

寄鏡戀
かはるらむ我身もしらすますかゝみ戀せぬ時の影をとめれは

寄舟戀
人こゝろ沖つ潮あひにうかふてふたなゝし小舟よる方そなき

寄綱戀
わたつ海や底をふかめてをく網のめにたにかけぬ人を戀つゝ

寄火戀
あふをのかたき石よりいつる火の打あらはれてもえぬへき哉

寄弓戀
なけきつゝおきふす弓のすゑにまくとふ人もなき戀もする哉

寄薪戀
すゑとをきみ山につゝく椎柴のこりはつましき身の思ひ哉

雑

寄日祝
里わかぬ光なれとも春の日のさしてのとかに見ゆる宿かな

朝旅

宮こいてゝいく朝露のぬれ衣ほすまもしらす山ちこゆらん

其旅

行なやみしはしやすらふ山かけにまた時しらぬひくらしの聲

夕旅

くれぬとて野中の庵に宿かれはさきたつ人そあるしかほなる

思往事

うき身ともしらて過けん昔とてこのいくとせのほかを忍はん

百首中　題堀河院　寛喜二年當座會

春

殘雪

けふまては冬こそ見ゆれ松の葉にありて白雪はてはなけれと

梅

すみすてしむかしの人の袖の香に軒はの梅は猶にほひつゝ

喚子鳥

里となきみ山のおくのよふこ鳥人もこたへぬねをや鳴らん

苗代

しつのおかせくや苗代ひき〳〵に心とゆかぬ山川の水

秋

七夕

久かたのあまの川浪たちわたりもみちの橋のかへさゆるすな

擣衣

山かつのわらやの床におきゐつゝさとありかほにうつ衣かな

冬

初冬

人とはぬ山のかよひちいとゝしく雲のけしきそ冬こもり行

氷

をしなへて氷そしける蘆田のいつぬき川の冬のあけほの

除夜

玉きはる命をいそくならひにてのとかにくるゝ年のなき哉

戀

初戀

戀しともおもひならはぬ袖の上にたれとかぬよと露のをく覽

雜

河

神よゝり名をなかしけるみ吉野のあきつの川は今もたえせす

懷舊

うたかたのあはれ昔としのへともなかるゝ水の歸りくるかに

夢

まところまぬ夢や世中さてもまたさむる現もしらぬならひを

雜々會等

立春

春のくる春日の山のみれの雪消あへぬはては霞なりけり

山立春

朝日さす山の霞はうすけれとなのれときゆる嶺のしら雪

立春霞

み吉野の山もかすまぬけふならはいふはかりにや春を知まし

霞

はる霞たゝるや宮こさほ姫の花のにしきはをりもはしめす

（題春雨歟）

雪消ていくかもあらぬ春日野の草も緑に春雨そふる

深山霞

たちぬはぬ霞の袖やかさぬらんすむ山人の春の衣に

關路霞

春のきる衣の關をゆく人の袖さへかすむ夕暮のそら

霞中鶯

かすみゆくをちかたのへの梅か香に色こそ見えね鶯そなく

寒野梅

たひ人の野原の梅をおる袖にこほれてにほふ春のあは雪

江邊柳

み舟こくなにはほり江の玉柳枝もたはゝに風そ吹しく

田家柳　八幡宮三十首中

せく水に岸の柳のかけ見えてうへぬ田のもになひく春風

花

古郷の花のあるしとなりしより年にまれなる人そまたるゝ

春風にまつそみたるゝさほ姫のまたをりはてぬ花の衣手

名所花　住吉社歌合

さほ姫は春のかさしとそむれともあたなる花のかつらきの山

河上花

あすか川きのふもけふもふく風にふち瀬もわかす花そ流るゝ

暮山花

花のかのありとは風にのこれとも夕くれいそく山のはの雲

花遠匂

み吉野はやへたつ雲のそこなれとそなたの空は花の香そする

夕山花

はつせ山花の光に暮やらぬ夕すゝむるかねの音かな

欲散花　八幡

よしの山花は雪けになりにけり分こし道もあすや絶なん

浦歸雁　住吉歌合

かへる雁やすくな過そ櫻あさのをふの浦なみ色はなくとも

行路落花

かへる山こゆる嵐を先たてゝふまて過行花のしら雪

落花委庭

庭の色はそれかあらぬか木本に猶ふく風は花の香そする

水邊欵冬

影ひたす川瀬の水はさそはねとをのれとまらぬ山吹の花

三月盡鶯　　八幡、、

暮にけり雲のいつくにまよふらん春はかきりの鶯のこゑ

旅三月盡

おなしくはをくりやせまし玉ほこの道のゆく手の春の別を

夏

夕卯花

みちのへや川と見なからなかれぬは夕浪しろくさける卯花

樹陰卯花

時しらぬ卯月の雪とさく花に猶あとたゆる松の下みち

溪卯花

雪の色にさくや卯花ちらぬまは夏なきとしの谷の通路

郭公

五月とてなくへき頃の空なれとまたてはきかぬ郭公かな

尋郭公

あるしからはつれもとはん郭公なかなく里はあまたありとも

傳聞時鳥　　八幡、、

おなしくはをのれとなのれ時鳥きゝつとつくる人をやは待

橋郭公

なきわたるかひこそなけれ郭公たゝ一こゑのまゝのつき橋

山五月雨

さらてたにたえす雲ゐるまきもくの檜原の山の五月雨の空

草間螢

野への風ふくともきえし夏草の下てる露は螢なりけり

山夏月

芦引の山のいつくの里人かしはしも夏の月を見るらむ

夏山　　住吉歌合

ふく風にみたれやすらむ春のきる霞の跡の山の夏くさ

夏浦　　同

花の色に猶たちやます夏衣袖しの浦によする白浪

原夕立　　八幡、、

ふみまよふすゑのゝ原は遠けれとつゝみのこさぬ夕立の雲

田家初秋

秋やくる門田のいなは風ふけは衣てちかくなひくしら露

草花露

をしなへてちくさか花におく露のわきて色こきをのゝ萩原

初雁

伏見山たつ秋きりのうちつけに田面たつぬるはつ雁の聲

朝初雁　　八幡、、

はつ雁のこしちの雲をいてしより今朝はいくかの空に鳴らん

暮雲雁

夕つくひ山のはさしてゆく鴈の聲さへやかて雲に入ぬる

月歌中に
風さはく草はの露によかれして我手枕にやとる月影
ふく風のたよりにきゆるしら雲の跡なき空は月そのとけき
野月
尾花ふ〻野へのかりいほの下露やかたふく月の影を待らむ
海月
明石かた里のしろへとすむ月にとはて宿かる秋の旅人
風前月
久かたの空もたよりの秋風に月よりはやく過るむら雲
秋日
秋の色にさすや日かけの岡のへにまたきうつろふ松の下草
秋山
しら露もまた染やらぬ秋山の色をひとつにふくあらし哉
秋樹
身にしむをいかなる色と尋ればをのれひとつの庭の松風
虫
よはり行聲なきかせそきり〱す秋ならぬよといひて忍はん
秋歌中に
久かたの月なは秋とたのめても涙くもらて見る夜はそなき
ふみ分し籬の露もいたつらにたのめぬよはの深草の里
なか月やまた霜をかぬきくのはに雲まの月の影そうつろふ

對菊惜秋
ゆく秋にうつろふ色のよそならは霜にゆるして菊を見てまし
紅葉見秋
今よりは木々の紅葉ののちを見ん野にも山にも秋をいそかて
故郷紅葉　賀茂橋下社歌合
もみち葉も色にてりけりたつた姫をのか涙のふるさとの秋
紅葉秋深　八幡、、
龍田川嶺のもみちのうつる色に水の秋さへふかき比かな
紅葉半散
吹わけて嵐やさそふたつた山をくれさきたつ木々の紅葉に
落葉
うすくこき木々のもみちを吹たてゝ枯行草をうつむ木からし
冬
旅時雨　八幡、、
いく度か空さためなき時雨ゆへとまりもはてぬ宿をかるらん
冬江月
冬かれの玉江の芦のよやさむきこほらぬ月にをしそ鳴なる
苔上霜
みつくきの岡のやかたのこけ莚ひとりそはらふ霜のふりはも
冬歌中に
霜さゆるをかのくすはららみてもかひなき色の風わたる也

涙さへ氷にけりなみる夢も宮こをかけてむすふ枕に

冬松

たひ人の夢の枕はたえはてゝ霜ふきむすふ野邊の松風

島松雪

冬くれは松のはしろき興津島なみかあらぬか雪はふりつゝ

袖雪　八幡ヽヽ

しらかしのおちはを雪にふみなしてたれ袖山に道まよふ覽

磯千鳥　八幡ヽヽ

村千鳥とわたりかへるこゑす也をのかいそへの鹽やひぬらん

戀

戀歌中に

袖にをく涙の露の玉かつらかけにも見えぬ人を戀つゝ

待變戀　八幡ヽヽ

たのめをきしその葉今はかはるとも待らんとたに思おこせよ

互絶戀　同

わするらむと思ふ心のせきゆへによひ〳〵その道はたえにき

難憑戀

今そしるあたなる人の心ゆへこそのさくらののこるうらみを

春夕戀

たちわたる霞もふかく物そ思ふ雲のはたての春の夕暮

秋驚舊戀

涙かも秋を便に露そをくかひなくくちし袖をたつれて

隔遠堺恨戀

おもはれはかよはぬ人の心かな雲をわけてもみちはある世に

隱後朝戀

むすひつる夜はの契のいかならむ明て影見ぬ草のはの露

寄月戀

憂身からくもらぬよはそなかりける思ひいるさの山のはの月

寄草戀

人しれぬ心のうちのおもひ草あたにもいかて露のをく覽

寄木戀　住吉歌合

かしは木やはもりの神のひくしめのゆるくは物を思やはする

寄雲戀

なかめやる心のすゑのあらはれてそこはかとなくまよふ浮雲

寄烟戀

ものおもふ里のしるへとたつけふり知人なくて山にたなひく

寄名所山戀

そめしより戀すてふ名はたつた山木々の紅葉も色に出つゝ

寄關戀

よひ〳〵に今はなこその關すへてかよはぬ中の道そはるけき

雜

瀧苔　八幡ヽヽ

山ひめのをるてふ布にかけそへてたかほす苔の衣なるらん

浦煙　同

浦にやくもしほの烟うちなひきめにみぬ風そあらはれて行

旅行山雨

雨によるみのゝを山も名のみして袖ふきほさぬ松の風哉

古杜雨

くちのこる杜のしめ繩うちはへてふるひつもれる雨のころ哉

夕隴望限海

なかめやるすゑの松山暮にけりあたなる浪のよるをしらはや

久愁身　八幡ゝゝ

年〳〵のへにける數に見ゆる哉うき身嘆けとむまれける世は

社頭秋雜

色かへぬ神のめくみかくれ竹の一夜の松は秋もつれなし

秋祝

いく秋もくもらぬ空をあふくへき月の都の影そうれしき

寄松祝

みねの松君によはひをかすか山千とせの後もおもかはりすな

夜述懐

こしかたをおもひつゝくるむは玉のよるの枕に夢そたえ行

秋催述懐

えそしらぬ物思ふとのかきりなる秋の日かすの後の心は

まかきのおきに風のをとつれ侍しよれさめて、

荻かこふねやに秋風ふくからにとはれしとのならひかほなる

法輪寺にて秋の暮侍し日

かたみそと木々の木葉をちきれとも秋嵐もの山のなそうき

涙の露をかこつ人またありときゝし人のもとへ

袖にぬくおなし涙の玉のをゝたれか契にむすひはつへき

あはぬよあらはなからへても侍らしなと申侍し人にはなれてのち

わかれなはいけるへしとはいはさりきいつはりになる我命哉

修行し侍しに山ちに日暮てはへりしに

そことなきふもとの雲にきこゆる里とふ山の入相の鐘

伊勢よりおはりへこえ侍しに浦ちかくとまり侍しかは

與津風あらきいそへにあかす夜は浪そおりしくいせの濱荻

神無月の比おいその森のはしらにかきつけ侍し

つもりけるおいその杜の木葉哉あはれいく世の秋にあひけん

にし山にすみ侍しころいほりにかきつけ侍し

行するをいかに契てなくさまん今はかきりの山のはのいほ

雪まをわけてとて人のせりをたひたりしに

心さしみかきかはらのせりなれはうれしきれにも袖はぬれ鳧

おほはらよりかへりてそこなりける人のもとへつ

かはしける
つねならぬ世にすみかまの夕けふり心ほそくも見えし空哉
春つくしのかたへ思たち侍しにある人にいとまな
と申侍しついてに
海山をはるの霞にへたてゝむ心つくしそかねてしらるゝ
返し
うみ山の涙のいくへはかすむともたのむ心の道しかよはゝ
おなし頃又ある人にいつくへとは申侍らて
をのつからにしふく風の便あらは跡なき浪のあともしらせん
返事　樋口、、
にしふかむ秋をたのむる浪の上はまつ春風に思ひやる哉
あつまのかたへまかり侍しみちにて
夕つくひ入山のはを都とていくへの雲をなかめわふらん
はゝ身まかり侍にしとしの秋ある人のもとより
おもひやる袖たにかなしうつせみのむなしき跡の古郷の秋
返し
うつ蟬のなくねを袖にとゝめてもえそしのはれぬ古郷の秋
母身まかり侍りて後その跡にて慶忠法印經をよみ
て歸り侍しかもとへ申つかはし侍し
なきたまのかけにもいかにうつりけんとなへし法の淸き光は
已上三百首。先々有御合點歌候。自建保比至寬喜間。

雜々歌　寬喜三年貞永元々等

春

霞
あらしふく尾上の霞たちやらて松の梢そ猶もかくれぬ
河上霞
をとは川せきいれし人の心まてかすめは見えぬ春の明ほの
鶯
鶯のいかなるかせにさそはれてまた花さかぬ宿に鳴らん
若菜
今いくかあらはといひしかすかのゝ野守も出て若菜つむらん
窓梅
かた枝さす軒はやちかきくらき夜の窓うつ雨の梅かゝそする
落花埋水
うちいつる色こそわかねちりつもる花の下行水のしら浪

夏

あふひ草かさす契のふかけれは神も心や我にかくらん
郭公
こと里もをのか五月の空なから山時鳥まれになくなり
遠郭公
なくこゑのをよふはかりそ郭公なそしも雲のほかをとふ覽
鵜河

うかひ舟夕やみいそきさすさほの取あへぬまにあくる夏の夜
野夕立
なら柴やしはしと見つる夕立になかれてはやき野ちの玉河
螢
ほにいてぬ尾花か本の草の名の色に見えてもとふ螢かな
秋
七夕
ひこほしの紅葉の舟のよるへまて川瀬たつなあまつ秋風
行路草花
玉ほこの道ゆき人は過ぬとも尾花か袖やのへにのこらむ
草露
をく露になひきにけりなしの薄夕のかせの跡なられとも
故庭荻
秋を猶わすれぬ色そあはれなる人めかれにし庭の荻原
秋
むさしのゝ野原の萩のからにしきしきあまりてもみゆる色哉
秋田
うへすてゝもる人もなき小山田のわさたもちかく鹿そ鳴なる
行路鹿
ゆきくれて野原の色はみえねとも萩さきたりと鹿そ鳴なる
月
花すゝき袖ふる山の尾上よりほのめく月の影そ見え行
心なき雲ゆへものを思ふかなあまつ空なる月なながめて
山月
ふく風のあなしの山のやまかつらくる秋ことに月そさやけき
海月
わたつ海はつれなく見ゆる山もなしあくるそ月の限成ける
秋歌
さきにけりをちかた野辺の小萩原夕の風の色かはるまて
夕まくれたかねの月に先立てまつ雲いつる初鴈のこゑ
羇旅紅葉
このたひは我身時雨にふりやせん紅葉にあかぬ山めくりして
時雨
野も山も今そ色つくいかにして冬の時雨の秋をそむらん
隣家擣衣
をちかたや軒はの松の秋風におとろかされて衣うつなり
曉時雨
いくめくり時雨て夜はの明ぬらん夢の跡とふ軒の玉みつ
雪
夕つく日さすやおのへにふる雪の松の葉うつむ程そすくなき
冬竹
霜さゆる色にそ見ゆる川竹のなかれてはやき年の日數は

戀

袖はみな左も右も朽はてゝ涙をせかんしからみそなき

忍戀

秋山の木葉を袖にこきもちて涙の色をとはゝこたへん

忍逢戀

あふ夜とは心にたにもいはしとてえこそ恨ね曉のそら

戀

おもふこといはての山のやま人のくちぬる袖や谷の埋木

おもひやるすゑの原のゝ夕露に分ぬ袂も先そしほるゝ

戀しなは人のつれなきはても見しある身に過てうき物そなき

たのみけるわか身そつらきしのふ山まよふ心の道のしるへを

あふとにさすかにかへぬ命にてうきあかつきの月を見る哉

恨戀

をのつから朽のこるへき袖そなきはては恨の涙かけつゝ

不眠戀

をのつからねしよの夢のたのみまて昔かたりの床の山風

不忍戀

よしさらはをさへぬ袖の涙にてふかきこゝろの色をたに見よ

雜

寄海雜

なにはかた鹽ひにけらし奥津すにむれゐるたつの聲そ聞ゆる

河

木枯にもみちなかるゝ立田川秋より後そ色にいてゝ行

眺望

とまるへき里のしるへにおほえ山いく野ゝすゑに烟たつ之

殘夢

老ぬれはうちぬる夜はもあか月のかれより後は夢をたにみす

あつまにて人々海のほとりの月見侍らんとてはまにあかし侍しに十五日のよなりしかは

久かたの月さへ今夜みつしほの入江にちかき影を見る哉

同ころ月をなかめて

よひに見しあつまの月はかたふきぬ今や都の有明の空

ちゝにをくれて侍けるときく人のいろきて門にたちて侍しを見て申つかはし侍し

なかれける涙の川のふち衣ふかきおもひの程そしらるゝ

詠百首和歌　寛元三年於關東詠之

寂身法師

春廿首

あさみとりかすみもあへぬ山のはゝ昨日の雪の色そつれなき

谷のとを雪のうちよりいてそめてかすむとすれは鶯そなく

なにとなく軒はを過る春風のにほひはしむるやとの梅かえ

いく春のぬしなきあとににほふ覽あれたる宿の梅の初花

風わたるたかつの宮の梅かゝにいかなるあまの袖にほふらん
しろたへの袖の春風猶さえてわかなつむ野に雪は降きぬ
春雨に山の緑はまされともふる野ゝ草の色はかはらす
かりのこす入江のあしの枯はまて染ぬものから春雨そふる
たつた川岸の柳やなひくらん春の色なる瀬々のしら浪
うかりけりさしもあたなる花よりもまつ別ゆく春の雁かれ
おもかけにおりゐる雲をさきたてゝまたれかほなる山櫻哉
いとふへき雲とはみえす山のはの櫻にくもる春の夜の月
我うへぬかきれの櫻枝こえてあるしかほなる花の頃哉
うちたへて人こそすまね櫻さくよし野は花の都なれとも
おそくとき色もましらぬわか宿の一本さくらみる程もなし
あかなくにさきてちらすは山櫻うき世の花とおもはさらまし
嵐ふくたかねの雲の色よりもうつろひやすき花さくら哉
ちると見は神やはうけんみむろ山花な手向そ春の山かけ
花ゆへはいつもおしみし春なれとわか身老木の末そかなしき
をのれのみさかりそ見ゆる藤の花春の日かすは限なれとも

夏十首

おなしくはけふよりきなけ時鳥春のなこりも忘るはかりに
なきそめぬ時こそあらめ郭公初音の後はまたれすもかな
人すまは山のおくにやしたふらん里なれにけるほとゝきす哉
人ことにひくやあやめの草枕たひ心ちする夢や見ゆらん
をとは川關のこなたとおもへとも人こそこえね五月雨の頃
五月雨もかきり有ける空なれは遠き山邊に雲そかゝらぬ
山のはをうらみなれたる月影のさなからあくる夏のよのそら
むら雨のなこりはしろきあさちふに心とをかぬ夏の夕つゆ
螢とふあまの磯屋に風過てきえぬあし火の影そみたるゝ
あすよりの夕の空をさきたてゝ秋風ならす荻のをと哉

秋廿首

いつも吹風の音ともきこえぬは秋の分くる庭の荻はら
雲の色のなかむるまゝにかなしきは夕そ秋のはしめ成ける
七夕の涙の雨のそめをきて紅葉をわたす天のうき橋
夕まくれいつくもおなし秋風のうらみて見ゆるま葛はら哉
秋をしる空にまかせてみる月は中々雲をいとふ物かは
里わきてくもらはくもれ秋の空月をあはれと見る人もなし
浪よする磯まに影はさはけとも空にのとけき秋の夜のつき
もろこしの山のは遠き浪ちにもあくれは月の影はとまらす
さをしかのくるすのをのゝま萩原しからむ色のおしき頃哉
あさちふのをのゝしの原露しけし鹿と虫との涙そひつゝ
露ふかき野原の草にすみわひてわか身鶉とれをや鳴らん
ひたはふる野田のをしねやかりつらん鴫かてなく棹鹿の、ゑ
しほち行友とや思ふあまを舟はつかりかれのこゑそ聞ゆる
さらぬたに衣てぬるゝ秋の田のかりほの軒に時雨すくゝ

はつ時雨いつの人間に染つらんけさ色かはる神なひの森
たつた山のこる色なき紅葉ゝをいかて時雨のあかす染らん
はれのころたゝ一むらのうき雲に月はくもらて時雨ふるなり
さゝ浪やしかのうら風さむけれは舟のうちにも衣うつなり
限ある秋なうらみそきりく\すたのむ草葉の霜はなくとも
長月のなこりはおしといひく\ていつかわか身の秋に別ん

冬十首

山風にたへぬ木葉のふりそひて時雨をそむる神無月哉
ま柴たくけふりの末そ中々にさひしく見ゆる冬の山里
ぬれく\も山のつま木はこるものを時雨の雪にならぬ限は
あしひきの山かけさむき朝霜のきえぬか上に初雪そふる
空よりも光やまさる白妙の雪待えたる庭の月かけ
衣ての雪うちはらふたよりには野中の庵も人はとひけり
夕けふりあらそひかれて消にけり雪ふりうつむをのゝ炭かま
うきねするなにはの奥やあれぬらん鴨そむれゐるこやの池水
さして行かたもさためすむら千鳥風のまゝなる浦つたひして
あかさりし花さく春のちかけれはおしみおしまぬ年の暮かな

戀廿首

たつれてもやすく入へき道そなき人のこゝろのふかつしま山
いかにとようきもつらきもならはぬにはつ戀衣袖そしほるゝ
契なきよのことはりもわすられてつらき人ゆへ身をそ恨る
色にいてゝいはゝ田の杜のいはすとも見ゆらん物を袖の千入は
わか戀はしのふか原にかる草の露のみたれや涙なるらん
人しれす思ふこゝろの下もみちあらはれぬへくふる時雨哉
しほたるゝ袖しのうらに宿もかな海士のならひといひて忍ん
なかれてもあふせそしらぬよしの川いは浪たかく人を戀つゝ
いかて我戀せぬ身ともむまれきてたゝ大かたに月をなかめん
夢にたにみぬめのあまのさよ衣かへすにつけてぬるゝ袖かな
みなの川おつる涙のつもりぬるこひのふちにや身を捨てまし
いつよりもわか身にそはぬ心かな今夜や君か夢に見ゆらん
はかなくもたゝ時のまのあふことにつらき月日を忘ぬるかな
あはれとやいふことのはを思ふらん君か涙に袖そぬれぬる
ほのかなるゆふつけ鳥のはつこゑに別をいそく人そつれなき
別路をゆるさぬ關とおもはゝやふみはしめつるあふ坂の山
在明のうかりし空のしのはれてあかつきことの月を見る哉
わすれしといひて別れしいつはりも思へは人のなさけ成けり
夕まくれまたれしものと思ふこそ心にのこるかたみなりけれ
はかなしな契もをかぬおなし世に猶もある身と思ふはかりそ

雜廿首

さきかはる色は見えねと山櫻宮この春そ猶も戀しき
玉江にはあしかりを舟入にけり奥のしらすにたつそ鳴なる
たか山のふもとの里のならひにて外に出たる月そまたるゝ

衣手をまきもく山の夕時雨木葉しのきて冬をつくなり
吹をくるいらこかさきのしほ風にやすくとわたるあまの釣舟
又やこむら路はるかに出にけり塩にひかるゝあまの捨舟
空よりはおつともきかぬみよしのゝ吉野ゝ瀧に雲そかゝれる
一むらの里とそいまは成にけるさひしく見えし野へのかり庵
はる〳〵となかめにかゝる白雲はいくかを限るさかひ成らん
歸こし心ならひにこのたひも古郷人やわれをまつらん
いまはさて住へき里とおもへとも心そ猶も身をさそひける
野も山もおもへはひろき世中に身をかくすへき木本そなき
あつさ弓いそちあまりの老の浪かゝらさりけん時そ戀しき
見し人のなきも嬉しく成にけり身の有さまのうきにつけては
すてかたき宮こも近しいそのかみふるの山邊に宿やからまし
み山邊に心やゆきてたのみけん我松風のこゑそきこゆる
蘆引の山下道のいかなれは思ふこゝろのすゑもとをらぬ
とにかくに思ひみたるゝしら糸のへかたく見ゆる身の行ゑ哉
うつ蟬の世をはかなしと思ねの夢のうちなる夢そ見えける
なからへてあられはあらんとはかりの我住方のよをや祈らん

詠百首和歌　寶治二年九月於瀧山詠之

春廿首

たちこむる空にや冬ののこる覽霞よりふる春のあは雪
こきなるゝ春の霞のうら舟も涙ちたとらぬ夕暮そなき
夕霞みねたちのこすかひもなく春はおほろにいつる月影
春きてもまたうらわかし山里のかきねをつたふ鶯のこゑ
我おもふ心つからよ鶯のはなををそしと聲のきこゆる
風わたる谷のふるすの花のかにさそはれかへるうくひすの聲
たをらしな人のかきねの梅花我にてしりぬおしき心は
夜のまにや花の下ひもとけぬらん朝こちふけは梅かゝそする
ぬふといふ春の柳のかた絲のほころひやすき梅の花かさ
つく〳〵と春のねなかき春の日も花さかぬまそくらし侘ぬる
心せよやよひの山のうす霞花かあらぬか雲そ色つく
雲まよふ遠山さくらさきぬとも嵐のをよふ里やしるらん
見ても又あかぬこゝろのおくかれゝ木ことにおしき花の色哉
春へさくおほくの花の中になとあたなるたれの聞なるらん
梢ふく風にそまさる櫻川ゐてこす浪の色にいてつゝ
ちらぬまの色そあたなる山河のきえせぬあはゝ閑なりけり
こし秋はつはさにかけし白雲をみねにのこしてかへる雁かね
暮かゝるこしちの海を行鴈やいそへの浪のよると鳴らん
名をとめてをのれは浪にしたかひぬ山ふきの瀬の欵冬の花
おなしくは我世も暮れとゝまらぬ春の使に人やおしむと

夏十首

けふといへは花色衣ぬきかへしむかしをかけてしたふ春哉
野へ見れはてる日にかるゝ夏草の一むら青き杜の下かけ

この夏はまたれてきなけ時鳥宮このいはの果てにせむ
山のはにむら雨過るあま雲のたちゐまたるゝ郭公かな
郭公たか待そめしならひより夕をわきてなくれ成らん
月のいる山よりいてゝ時鳥人をねさせぬこゑきこゆなり
はつこゑはおしみしものを郭公なきふるしてし五月きに鬼
さはた川ひとつたなはし水こえてわたる人なき五月雨の頃
たつたみのやむ時もなき五月雨に川瀬をやすく宮木引なり
みつしほにかくれもはてぬみたれ蘆のすゑ葉の螢行方もなし

秋廿首

朝またきめに見ぬ秋のくるかたをなしへて過る荻の上風
さらてたに夕はものゝおもはるゝ雲のはたてに秋は來にけり
このころそ人もとひこしわか宿の庭のはつ萩はやもさかなん
分過るのへの尾花のすり衣色こそなけれつゆはまたひす
月ゆへの秋とや雲の知ぬらん嵐もふかぬ空にきえぬる
おしましな山のはあらは出ぬへし今夜の月にかきる秋かは
わたの原入山見えぬ月たにもおしむこゝろのたゆむものかは
一すちの秋の氷をくたきつゝ月の上こくあまのつり舟
うきもせすしつみもはてぬ月影の底になかるゝ山川の水
秋も猶よそにそ月をなかめつる我すむいほは山かけにして
たれしかもうき世中となつけゝむ雲なき夜はの月を見なから
いとはれて鳴なる鹿のをとすえひたの庵のよその夕くれ
明わたるよさみかはらにふす鹿の一こゑ鳴て山に入ぬる
夕まくれ露ふきはらふ秋風に草はみたれて虫そなくなる
長夜にたれをたのめてうらむらんをかやか本の松虫のこゑ
うすきりのたえまに見ゆる色もなし常磐の山の秋の草木は
こめてけりさらてもせはき山かつのかきへの谷の秋の夕霧
暮ぬれはけふりもみえね道のへに里のしろへとうつ衣かな
このころは野なる紅葉も色そこきなへてや染る山のはの雲（雨イ）

冬十首

たえ〳〵に秋はしくれしむらくもの晴まも見えぬ神な月哉
紅葉ゝは雨とふれとも槇の屋の軒にしつくの音はきこへす
我ならぬあとたになくはまよはまししらぬ野原の雪の夕くれ
み山ちは雲のたえまも空さえて日影にまけぬ松の白雪
しつのおかつま木の道のたえしより雪ふる山は山守もなし
しみかへて今朝は氷になりにけり苅田のおもをうつむしら雪
浪のまにしはしふりつむ雪島のいはほにさける花そあたなる
なみ風も今夜はたゝす興津島かものうきねの床やのとけき
冬川の石まの浪の立かへりおなし瀬になくさ夜千鳥哉
あら玉のとしの一夜をへたてたる春のとなりといそくけふ哉

戀廿首

袖の色を君たにとはゝいひてましうとき人には答へかねつゝ
中々に涙の色もとゝまらてくちぬる袖そ人はとかめぬ

をのつからあふとも見えぬ夜な〳〵に夢をまこと憑つる哉
一筋につらきにぬるゝ袖ならは身を恨みてもなくさみなまし
涙をはいひなすかたも有ぬへしうき名もらすな袖のしからみ
こひ衣草はにあまる露たにも袖にしをけは涙とそなる
戀せよとなれる夕のけしきかなむら雲まよひ秋風そふく
今そしるわきてかなしきとき衣こひのみたれは心なりけり
あつまなるするかの海の濱つゝらつれなき君にくるな敎へよ
あはてたゝ人をはこひん中々にしのはれぬへき我身ならねは
なにとして心のとめんあふ度にいや戀まさるあちきなの身や
わすれねよ我も忘ん若草のあさましかりし新枕かな
鳥のねもかねのひゝきもつらからすあふ夜をしらぬ曉そうき
あふよのおもひたえたる曉は我ためつらき鳥のねもなし
ふけし夜もわかれし空のうかりしも思へは人のかたみ成けり
むすひけるちきりあさのゝ恨わひ涙の玉もからぬ日そなき
めのまへに人の心のかはるこそあひ見し夢のうつゝ成けれ
わひつゝはさても心やなくさむと戀しといはん僞もかな
もろ共におもはぬ人の戀しきやふかきこゝろのしるし成らん
一ふしのうきにいのちの絕もせて猶も恨の身につもるらん

雜廿首

あさ明のふし山おろし吹にけりすそ野にくたる嶺の白雪
三和の山ふもとの杉のおひあひに松をも神のしるしとそ見る
きのふ見しふちはかはらす飛鳥川とにもかくにも定なき世は
山ちかく行野のすゑは成にけりいてつる嶺に月そかくるゝ
ゆく水のあはをによりてみたる也嵐におつる瀧のしら糸
山のみなうつりて見ゆるわたつ海の浪まを分てかゝる白雲
こもり江のなかるゝ鹽に棹さしてひかたをいつるあまの釣舟
谷川のせゝにはわたす岩はしのみねにたえたるかつらきの山
むさし野の草の下みち深けれはすゑはの露に袖もをよはす
衣てにをくへき程の露そをくならひにけりな旅の夕くれ
三和のさき降くる雨にさきたちてさのゝわたりをいそく舟人
みちのへのそかひの里の夕烟いつれをやとゝわきてからまし
はかなくも都はかりをいとふとてうき世の山に身をかくす覽
なき人のあふと見えつるうたゝねの夢そ昔のなこり成ける
現とは思はてくらすけふなれはあすもいかなる夢か見るへき
けふまてのいける命にはかされてあすも有へき世をおもふ哉
草も木も見なれぬ色の山里は人のこゝろも宮こにはにす
うき身からあさくやならんすむ人の心の色のふかき山ちも
この山の日吉のみ神ねかはくはてらせ心のうちもかゝみて
いすゝ川あまくたります神か瀬に君か千とせの影やうつらむ

詠四十八首和歌　寶治二年七月日或所勸進

立春

ほの〳〵と年の明ゆくあまの戸をいつる朝日の影そのとけき

残雪

ふく風も今は春なるみ山へにかくろへはてぬ松のしらゆき

霞

いつくにもいたらぬ春はなけれとも遠き山へそまつ霞ける

鶯

鶯のこゑの色をはさきたてゝまたさきやらぬ花になくなる

若菜

けふ暮ぬ野守か庵に宿かりてあすさへさらはわかなつみてん

梅

春をしりはるにしらるゝわかやとのわか木の梅の花を見る哉

櫻

野も山もなかめわくへき何もなく春は櫻にうつもれにけり

春雨

かきくらすこのめ春雨いかにして野への草葉をまつは染らん

春駒

あはつのゝ草にはなれすはむ駒をつなきかほなる杜のしめ縄

款冬

かはつなくゐてのしからみ浪こえて影やすからぬ山吹のはな

藤

あかさりし花のなこりとなかむれはその色となき池の藤浪

三月盡

年〱に身をはかなしといひなからいくたひ春を惜きぬらん

更衣

花の色はよそにそしたふ蟬のはのうす墨染の衣かへして

卯花

しめゆはぬさかひもしろし卯花のかきねあらはす玉河の里

郭公

むら雨の雲まの月にねさめしてやすくきゝつる時鳥かな

螢

ほたるとふ野原の草に風ふけはきえぬものから露そみたるゝ

五月雨

そことなくむかひの山もうつもれて軒はにちかき五月雨の雲

荒和秡

めに見えぬ神の心のあらはれてなひきかほなる麻のゆふして

立秋

雲の色は今朝よりかはるいろなから夕をわきて秋風そふく

荻

わか宿をとひくる人の僞にそよきなれたる荻の音かな

露

旅衣しはしほらてゆくかはに露をきもらす草のはもかな

薄

夕つくひ入野の薄しけゝれは山のこなたにけふそくれぬる

萩

こき色はちりてそまさるをとめ子か玉もにうつる庭の萩原

雁

つらかりし春の別もわすられてまたるゝ物と鴈は來にけり

鹿

さほ鹿のこゑそみ山に聞ゆなる夜かれしてけり野への草ふし

月

草の露袖の涙やあたならん心にやとる秋のよのつき

虫

こゑたてゝなくなるむしのおもひ草しけぬく露を涙にやかる

擣衣

ことはりや河風さむしさよ衣うちのわたりはさそいそくへき

紅葉

露さえて朝をく霜の下そめに時雨ぬ山も色かはりけり

九月盡

まてしはしまたやはけふを惜へきむそちなれぬる長月の暮

初冬

いつとても人はとひこぬ山里の草葉に冬と枯はしめける

時雨」

中〱に冬こそかはれ峯の松さひしきいろに時雨ふりつゝ

霜

岡のへや日影うつろふ玉さゝの葉分にのこる霜そつれなき

雪

嵐ふく木々のこすゑはあらはれて庭に跡なき雪の山さと

水鳥

をしかもの氷のひまのうき枕とけてれぬへき冬の夜はかは

除夜

おほかたに過る月日もうは玉の今夜明てそ身につもりける

初戀

ならはれは戀てふこともこりぬへしつらき夕を人なをしへそ

忍戀

たれゆへと涙の袖のしろからはぬるゝか上もえやはしのけん

後朝

おもひなす夢の別もうかりけりたゝしのゝめの露と消なて

鶴

あま小舟をしてる宮にきこゆえなにはにかよふたつのもろ聲

竹

木にもあらす草にもあらぬをとたてゝ籬の竹に風わたるなり

山

うしと見る我世のほかとき〱しより吉野の山の宿はしめてき

關

あふさかの山のはしろく成やらて關路ゆるさぬ鳥の聲哉

田家

あはれなり田つらのいほのあるしとて秋より後も行方そなき

旅

ふみまよふ山もかきりの有ければなれぬる雲に袖そわかるゝ

懐舊

もゝ草のかすにもあらぬ下葉まて哀をかけし露そわすれぬ

無常

定なき世のことはりとなくさまは人の別をかくはなけかし

祝

君かためちよのひつきをかためける神のめくみの末そ久しき

所々會歌等

久かたのあまのと山のかすむより櫻にしらむ春の明ほの

あらたまる杉の緑をしるしにて春のとひくる三和の山本

かけろふの野原の霞たちこめて猶下もえの春の若くさ

をしなへて夕ゐる雲も白妙のさよの中山花やさくらん

なのか野ゝ霜に鳴なり寝あさちかすゐの秋な恨て

吹かゝぬ時雨に成ぬまきもくのひはらの山のみねの木枯

たつねこぬ人の恨もつもりけり木葉にふれる雪の山里

かたしきの袖の湊にちかつきぬ涙の海の海士のつり舟

ものゝふのしなのゝま弓引わひてよる方もなき身をや恨ん

庭上花

をそくさきとくちる色もうかりけりなにしか宿に花を植けん

河邊花

嵐ふく水上遠き山川にきえすなかるゝ花のうたかた

春風

鶯の里なれそめし朝よりよはりかほなる風のをとかな

春旅

さかぬまはやすくこゆへき山のはになにしか雲の花とみゆ覽

野五月雨

むさし野や所々にせく池のひとつに見ゆる五月雨の頃

郭公

おもひねの夢なかりせは時鳥なかぬはつれないかてきかまし

故郷郭公

あれにけるたかつの宮の郭公むかしまたしれ（[illegible]）なや鳴らん

秋風

なをさりにそよくときけは夕まくれ風になり行荻の音哉

深雪

限あれはこれより雪もふかゝらし我行さきのこしちならねは

河月　參河國於瀧山詠之

たきつ川はや瀬の浪はさそへともそらにそ月の影はなかるゝ

野虫

風ふけはみたれにけりなしら絲のすかのあら野ゝむしの聲々

山家秋風

枝かはす軒端のましはしけゝれとまつにこたふる秋の夕かせ

水邊草花

花すゝきおきふしなひく影見えて底に浪たつ野田の玉河

紅葉

をりそめていくかもあらぬ山姫のちえのにしきをふく嵐哉

寄名所戀

よそにたに殘れなにはの澪標袖こそあさき江にはくつとも

かの山のふもとのいほりにかきつけて侍る歌の中に

立わたる春の霞をたよりにてうき世へたつる山のはのいほ

いとひても春は猶こそわすられね軒はの梅の花の宮こは

時鳥をのかみ山のちかけれは待もなやまぬはつね鳴なり

いほむすふ山よりにしも山なれはかたふく月にをしかなく之

このころはまさ木のかつら散はてゝとやまもはては霰ふる之

夕まくれ我すむ山の嶺こえてまた里ありとたつ烟かな

なにとなくすむ山人の庵までうき世をいとふ友と見えつゝ

續群書類從卷第四百四十五

和歌部八十

閑谷集

それわかみうき家をいてゝ。鷲山□つこゝろにはまかせたれとも。法のみのすかたもあらはれすして。なををくるまのなかきうき世にめくらんことをしつかにおもひまはせは。□

□

そひたはふれもみを□をのみちにいるためし。しきのはねかきかすあまたあり。かすみたなひく春のあしたには。いたつらにこゝろを花のもとにちらし。しくれのそゝく秋のゆふへには。むなしくおもひを紅葉の色にそむる人。しつのをたまきくりかへし。あるをはよろこひ。なきをはなけくほとに。かゝるむなしき物ゆへにこゝろをつくすことを。よく〳〵おもひとくおりには□

あかぬなこりにはきぬ〳〵にもなりやらて。あかつきの鐘をよひとおもはましかはとなけき。こゝのへのみすのたえまよりほのみし人のゆかりとて。さはのねせりをつみ。ふかくそのかたみとおもひ。かやうにはかなくみをたきけんむかしの人々も。つゐにはちすのみとなるへきことなれとも。もとのさとりのたますたれ。こゝろにもかけす。たゝくろかみのひとすちならす。おもひみたるゝことはいと愚之。これはみねの松風たにのらくひす。千種の花の匂ひ。はまのまさこの数ちもらさす。みのりのむしろにあつめて。なつかしき色をも香をも。つのくにのよしあしもいはす。やまとことのはにつけて。ほとけにたむけたてまつらん心さしのふかきに。呉竹のめつらしからぬふし。よゝの人めをもつゝます。生田の河のいくらともな

くいひなかしたれとも。なからのはしのひさしくなりぬれは。そのありころ〔よ脱歟〕をもしらす。すきにしかたよりたまさかに心のせきにとゝまりて。さそとおほゆるを命〔　　〕かつゆ。もとのしつくと。ならぬさきにとおもひて。建久九年卯月のころほひ。はしめてなにはの浦のもくつなれとも。ひとなみなみにおもひよるにしたかひてかきあつむるなり。なきさにゆらるゝ舟のかたはら。いたくこのみちをこのむにはあらす。いそのかみふるき世より。わかしきしまにもてあそふことのはなれは。かすならぬさゝかにのいとを。かつ〳〵かきつらねておもひをのふるなり。もしはまちとりあとをふみ見る人もをのつからあらは。かならすひとつほとけのくにゝむまれて。たまのみきはにかたをならへ。うへきのもとに袖をつらねて。うき世の外の月にむかひつゝ。さはりの雲のなかくはれぬることを。をの〳〵よろこはん〔以下十九行闕〕

みやこにすみけるころある人のもとより梅の花おりてをこせよこれにある花にみくらへんといひつかはされたりけれはおりてやるとて枝にむすひつけゝる

君かすむ軒はの梅そなつかしきうす紅に匂ふとおもへは

あひしれる人はるかなる所へまかるときゝてつかはしける

梅の花色をはかすみへたつともかはかりをたに匂ひをこせよ

返

春霞立へたてなは梅の花匂ふあたりをたれかたつねん

花さかりおほはらの〔　　〕ふみといふ所にまいりてかへりはへりけるにおほいとのゝ法眼のこもらせたまひたりけるかいとをこせ給ひたりける

なつかしき匂ひなりせは山櫻見すてゝいそきかへらましやは

返し

心あらは花の匂ひにたくへつゝすかたはかりそ立かへりぬる

かへりてつきの日梅の花にむすひつけてたてまつりはへりける

谷かくれ人にしられぬ梅かゝもつゝみそかぬる君かためには

かへし

なつかしき匂ひをゝくる梅花宿の梢そ今はゆかしき

三月盡のこゝろを

山ふかみ草の庵のすみうきは春にわかるゝことよひ成けり

おほはらにすみけるころねはんかうをとなはれけるに人〳〵その心の歌よみはへりけるによめる

めくりくるけふにあふたに悲しきに思ひこそやれ鶴の林を

花下逢友

我ひとり見てやゝまゝし古郷の花を尋る友なかりせは

春日閑居

なれならてとふ人もなし鶯よみやこの花に心うつるな

法蓮述懐

今そしるうき世の闇にまよふ身をみちひく法の光りありとは

閑中暁月

かすかにも虫のこゑたにせぬ宿をかたふく月のさして入哉

ひえの山にて雪のふりたりけるにかゝのくにゝす
みはへりしをおもひいてゝよめる

雪ふりてみな白妙に成にけりこれもやこしのみ山とはいふ

みやこにすみけるころ山におひしれる人のもとへ
さくらの花につけてつかはしける

心さしふかくも君にみせはやと都の花をたをりてそやる

返

うれしくそ都の花の匂ひくるまた山櫻さかぬすみかに

おほはらにすみけるころいつもちのついなしのも
とよりすみこひにつかはすとて

冬くれは都の風のけはしさにすみのほしさを空にしるらん

かく申たりけれはつかはさんとておほはらうこに
すみをたつねけれは鄰のうちにていかにもかなは
なよし申けれはかゝ人のも
ほとそかなしき

養和元年二月のころほひかゝのくにあはつのうつ
なみといふ所にすみ侍けるに越前の國よしはらの
ゐむすのゆあみにまうてきたりけるか申をこせた
りける

うつなみにいそなれぬへき身成せは立よる人もあらまし物を

かへし

くり返しいそなれはやとうつ波を立よらすとは恨むへしやは

かのゐんすかへるとて申をこせたりける

立かへる浦もおほへす春霞たなひきこむる人はなけれと

かへしはそはなる人よみてつかはしたりけるを後
にかくまうさてとおほえける

さもこそはやへの霞はこむれとも猶かきわけてかへる鴈かね

同とし十月のころほひたちまのくにゝくたりてす
み侍けるにゐなかのすみうきよしをおほはらなる
ともたちのもとへ申遣すとて

思へたゝ賤のあやしのすみかにて古里こふる夜はのねさめを

同し國にてあひしれる人はゝになくれたりときゝ
てとふらひにつかはすとてよめる

まとにやはゝその紅葉ちりはてゝ木末さひしき歎のみすと

おなしくにゝすみけるころ山寺にて侍けれははるのはしめのをこなひのれうに三十二相にはかせつけてたへと人々申あひたりけれはつけてとらすとておくにかきつけゝる

うくひすの羽風を花につけをきてこの山里にちらしつるかな

修行しありきけるに心とまる所もなきやうにて心ほそくおほえけるにこゝは住吉と人の申をきゝて

いつくにも心とまらぬよのなかにこゝ住吉とたれさためけん

ひえの山にありける人をうらむることありなからあまのりをやるとてつゝみたるかみにかきつけてつかはしける

つらし共云にかひなき君なれは恨みてもあまの□そやらるゝ

文治元年八月のころほひよりするかの國おほはたにすみ侍けるにあやしの草の庵むすひてわたりはしめたりける夜まつむしのよもすからなきけるをきゝてよめる

おほつかなうき世をいとふ住家にて誰松虫の鳴あかすらん

あしたかにまいりてはへりけるによろつわひしきことをおもひつゝけよめる

はくゝみを深くそ頼むとやかへるこのあし鷹に身を任せつゝ

おなしみやにまいりて紅葉の枝にむすひつけてたてまつりける

龍田姫そむる紅葉のから錦わかうちかみの手向とそなる

はうのまへにさくらをうへたるをかせのふきちらすをみて

谷かくれ花をうへをくかひそなき猶たつれきてちらす風には

山櫻ねにかへるともわするなよおしむ心のあさからぬとは

正月にある人のもとよりいはひをこせたるかへりことにこれかやうにそいはまほしきとて

今はたゝ鷲の山水なかれきて心をすます身とそなりぬる

あるひとりの人のにくむよしをいひをこせたりけれはかへりことによみてつかはしける

そしるとも人のためにはつの國のあしかる心おこさゝらなん

おほはたにてねはんゑの心ひと〳〵よみはへりけるに

かくれけん月を忍ふのすり衣みたれてけふは物そかなしき

月かくれくらきこの世にのこりゐて幾度あさの袖ぬらすらん

すみそめの袂そけふは露しけき鶴の林を忍ひかれつゝ

花爲山家友

匂ひくる花より外の友そなき霞こめたるふしの山さと

以花供佛

春風のちらすはおしき花なれとけふは佛にたむけつるかな

閑居鶯

さひしさにとほちの里へ思ひやるわか心をもとむろうくひす

山家霞

あつさ弓はる山里のまとゐには霞の衣かけぬ日そなき

ある人のもとよりほとゝきすのひところをきゝて待よりもなか／＼ものおもふをになりぬと申したりけれは

時鳥たゝ一こゑのしのひ音は待よりもけに物そかなしき

舍利施利生

隱れにし月のすかたをかた／＼にわかちて後も世をてらす哉

山花示無常

咲は又かつちろふしの山さくらみろにかしこ〔ら歟〕の雪そかなしき

放一淨光照無量國

いかなれはひとつ光のを／＼くよろつの國を照すなるらん

伊豆山にのほりて侍けるにみやこにてあひしれる人おやまにすむよしをきゝてたつねあひてなにとなきとゝも申てあそひけるにはかなきほとのものをあなかちにかくしけれはかへりて後遣しける

古へはさゝ磯なれし身なれともなとあさりしてかひなかる覽

かへし

かひなしと恨なはてそ心さしありその海を猶も尋よ

あやめふきたるところを見て

いかなれはよもきとゝもにあやめ草五月は宿のつまと成らん

螢をよめる

夕やみに野澤のほたるおもしろや玉うち散す心ちのみして

ある人のもとへ酒をつかはしたりけれはかへりをによみてをこせたりける

秋萩の花の情をわれひとりみるよりかねて色に出ぬる

かへし

秋萩の露の情の花ゆへにさしもや君か色にいつへき

往生講の七門のこゝろをよめる

發菩提心

梓弓そむく心を引とめてまとの道に思ひいるかな

懺悔業障

つくる罪くゆる思ひのふかけれは今はわかみに露ものこらし

隨喜善根

うれしくも世々の契のくちすしてかゝる御法にけふは逢ぬる

念佛往生

みたにのみ心をかけて紫の雲にのるみとなりにけるかな

讚嘆極樂

月のすむにしのみ國はを／＼くたへなる法のこゑのみそする

因圓果滿

いとひ出し猶ふる里にかへりきて今そあまれく人をみちひく

迴向功德

露はかりつとむる法の光にてみなくらきよをてらせとそ思ふ

蓮花來迎といふ𪜈あり極樂へまいる人のむかへに
はちすの花のきたる之其心をよめる

はちす花のれはうきよを捨はてゝさとりの池の水に社すめ

火車來迎といふ𪜈ありちこくへ行人のむかへには
をんなのたまの車に乘てきたる事のある之それを
みてめてたしと思ひてのれは火の車となるその心
をよめる

僞の玉のをとめにはかされてたけき思ひの車にそのる

ものすゝむるひしりのある人のもとへすゝむるよ
しの文つくらせんとてまかりたりけるにたゝ今さ
しあふ𪜈のありしはしまてと申けるにかくともい
わてかへりたりけれはその文つくりてをこせたり
けるにそへられたりける

秋霧のたちもとまらてかへりにしひちりのむけに恨めしき哉

かへしひしりにかはりて

濱千鳥ふみみてあとをとめよとて立そかくれし秋の夕霧

ある人のもとよりおほはたにゐたれはくりおほく
あるらんすこしをこせよと申つかわしたりけるかへり
ことによめる

おほはたにかけてはなれと白糸の思亂れてくりもやられす

極樂にめてたき事の十樂あるなりそのこゝろを

聖衆來迎樂

身をすてゝつとむる法のしるしにはさとりの人そ來迎ふる

蓮花初開樂

はちす花ひらけて今そあきらかにさしくる月の姿をもみる

身相神通樂

我身にも人にも光ありけれはたかひにくらき𪜈のなき哉

五妙境界樂

いつくにもかゝる境はあらしかし五たへなる𪜈のみゆれは

快樂無退樂

うれしくそたへぬみ國に生れぬるなにはの𪜈もよしと思へは

引接結緣樂

さきの世に情をかけし人をみな今日はみちひく身とそ成ぬる

聖衆俱會樂

いにしへは其名をたにもきかさりし聖とゝもに肩をならふる

見佛聞法樂

朝夕に月のみかほにむかひつゝとかるゝ法のこゑのみそきく

隨身供佛樂

心さす花をさゝけてとり〳〵によもの佛の御もとへそゆく

增進佛道樂

思ひとる佛の道のたへすしていよ〳〵すゝむ國そうれしき

十戒といふものありよくたもてはほとけになるつきにたもては天にむまるそれよりわろくたもつものは國王となるそのかいのこゝろをよめる

不殺生戒

情なくいけるたくひの玉の緒をたつ人そみな後（は歟）そくるしき

不盜犯戒

世の中の人のもくつに成とはおきつしらなみたつるゆかりそ

不婬欲戒

諸ともにさしかよはせる手枕はつるきにのほるはしと社なれ

不妄語戒

僞のけにとおほゆるとのはのたきゝとなりて身をそやくなる

不飮酒戒

春風のゑひをすゝむる情ゆへくさ〳〵のつみかきなあつめそ

不說四衆過戒

人のためよきとのはをあらはしてとかをは露ももらさゝら南

不自讃毀他戒

數ならぬ我身をほめて人をのみそしるはおもき罪としらすや

不慳貪戒

ちらさしと花をも惜む報にはこのみをとれはほむらとそなる

不瞋恚戒

かきみたりあしかる人はつのくにのつくる難波の法もこすへ

不謗三寶戒

かきくもるやみをいとはぬ心から月をくらしと恨むへしやは

空假中の心を

あるもなしなきもあるよのくるしきに思入らはやかりの悟に

秋のころなにとなくきゝならしたる人さまかへにとてはなのみやこへゆくをみて

旅衣たつ人ゆへにあやなくもよその袂に露そしほるゝ

ちゝのみやこに侍けるか建久五年十月のころほひやまひにわつらふよしをきゝていそきのほりけるにふはの關にて雪のふりたりけるかかきりなくおもしろくおほえて

かくはかりいそく心をとゝむるはふる白雪やふはの關守

みやこへ入侍ける日あふさかの關にてなにとなくこゝろほそくおほへけれはよめる

たらちおにけふあふ坂の關にさていかにとまらぬ涙なるらん

同十一月二十二日みまかりにけれはおほはらにこもりゐて我も〳〵とのちのをとふらひ侍けるに四十九日にもなりにけれはほとけくやうなんとはてゝその日なゐ〳〵ちりはへりけるかあはれにかな

しくおほへてかくてもあらはやとおもへともさて
　もあるへきにもあられはまかりいつとてよめる
歎つゝおほろかに水すみなれてけふ立出る袖そ露けき
　ある人のもとへおもひにて侍よしを申つかはすと
　て
今さらに思ひもよらぬ藤衣たちきてかゝる歎をそする
かへし
墨染にぬきかへてきる藤衣うらなる玉をつゝまさらめや
　しつかに思ひつゝくれはいとゝあはれにおほへて
数しらす涙のかゝる藤衣日をへてなをも歎きとそなる
たらちねの立かくれにしそのよゝり思ふ闇にたかぬ日そなき
　かくしはへりたるところなれはおほはらも思ひい
　てられて
おほはらやかけひの水のとたへても出る岩まのわすられぬ哉
かくれにし人のゆかりに大原やゝくすみかなを思ひやらるゝ
み草ゐしせかひのし水思ひいてゝひとへに秋の袖そぬれぬる
おほつかなせれうか谷いほそ谷にふみなかへてや君隠れけん
　おほはらのかつらたにといふところにくもかゝり
　ぬれは雨のふるをおもひいてゝ
かつらたに心の雲のかゝるより涙の雨とふるそかなしき
　竹間鶯といふことを
我宿の外もの竹を住家にて春の日くらし鶯そなく
　みやこにあひしれる人のもとよりあつまのかたに
　すむをこゝろにくきよにおもひて物なとをかたか
　たこひ侍けれはかく申つかはさはやとおほえける
かすならてとしふる谷の埋木は春とて花のさかはこそあらめ
　六佛くやうにあひ侍らぬよを歎きなからほとけは
　あまねく人をみちひく御心なれはさりともとたの
　もしくおほへて
限なくひろきちかひの月なれはたれかは照すかけにもるへき
　供養の日雨ふりけれはまいりあつまりたる人いか
　にわつらひあるらんと人の事なきゝて
天のしたひらくゝ三笠の山かけはよもゝりぬれし御寺の庭人
　かのみ堂をおかみたてまつりてめてたくおほえし
　心を
きもこそは月すむやとゝいひなからいかにも心およはれぬ哉
　ひとのあまたかくれにける頃わかみの上とのみお
　ほへて
見し人はもとの雫と成ぬるにいつまてゆらくわか玉のをそ
　うちつゝきなけくをありつゝよめる
さらぬたに思ひにしつむ身のうへに又歎のみつもりぬる哉
　おなしおもひしけるころ三月盡の心を

歎きのみ□□か身につけ□行春の□のなさけにかくはおし□そ

みてといふ所の山吹はおもしろきよし人の申たりき
ゝて

おらはやと思やるこそかひなけれ音にのみきくゐての山吹

雨中苗代といふ心を

賤の男か苗代水もひきやらてふる春雨にまかせてそみる

卯月二日郭公をきゝて

昨日より夏はくれとも時鳥けふはおもはぬ初音をそきく

修善のこゝろを

されかつら長きうき世のたへせれはみ法に契りむすひつる哉

あすは日吉の宮へまいらんと思ひける夜雨のあさ
ましきほとふりけるかまいり侍けるつとめては空
さりけなくはれたりけれは神もうけ給ふにやとう
れしくおほえて

かくはかりてらす日吉のうれしさに心のやみもはれぬへき哉

都にてあひしれる人のまうてきたりけるかしやう
のとをたへんと申てかへりのほりてのちをとつれ
もしはへらさりけれはよみてつかはしける

朝夕に松吹風の身にしみて契りしことのわすられぬかな

七月にはたへんと申てかへし

身にしみて契りしことの忘れねは待へき物そ秋の初風

落花□路

日□□な白雲にちるこゝろはいかゝ岩ねのみちもつたはん

ある人の日吉の宮にてはなくしけるついてに明神
増威光といふ心を

ます□いとゝ光のさやけさにてりこそわたれあけの玉垣

落花似雪

春風の吹おつめたる花みれはたかは鳥庭の雪のむら消

月□閑居

數ならぬすゝのしのやのまろふしも今宵の月にかくれなき哉

寄鹿述懐

鹿の音をきくにくるしき此世哉さこそは人も身をくたくらめ

法□霑露

なかれくるみ法の水にきよみかた闇もろ神やすゝしかるらん

正月二日子日にてはへりけるにあひしれる人々ま
うてきたりけれはよめる

姫小松けふ引つれてくる人のよはひはともにひさしかるへし

日吉の宮にて人々あまた歌をよみて御神の手向に
し侍けるをあはれとやおほしめしけんとしよりた
ろくそうの夢にらてんの御戸をしあけてかくおほ
せいたされたり

千早ふる神はちとせとおほしめすわかを心にかけてみすれは

このよしのかたるをきゝてよみてたてまつりける
言の葉のめくみいてたるみ椿はちゝのさ枝の數そうれしき
霞をよめる
おほつかな野へのさわらひもえいつるけふりや春の霞成らん
あひしれる人なけくよありなからしなのゝ國へす
行しはへるときゝてよめる
めもくれて君は渡りもやらしかしまた踏なれぬきそのかけ橋
旅衣なみたと共に立出ていかにかすらん袖のしつくを
みはらのゝ露かけわけて墨染の袂やいとゝぬれまさるらん
みやこにあひしれる人まうてきたりければめつら
しきまゝに物語なとし侍けるつゐてに霧中月とい
ふこゝろを
まはらなるあのゝしのやに旅ねして細江にやとる月をみる哉
山家雪
高ねにもをとらぬほとに夜もすから雪つもりぬる富士の山里
海上霞
あま小舟こきそやられぬ清見かたこむる霞や波の關守
深山鶯
こもりゐる我をみ山の友としてふるすないてそ谷のうくひす
れはんかうのつゐてに人々歌よみ侍けるに
始發道心
黒髪のなかきみたれを法のためけふひとすちに思きるかな
梅花薫室
窓近き若木の梅のかほるかなとこなつかしきよはの寝覺に
眞木の屋にもりくる梅の匂ひこそ人をとゝむるあるし之けれ
あひしれりける人ひよしのみやにてはなくしはへ
るついてに
社頭月
あけの戸のみすにかゝりて世を照す鏡にいとゝつとる月影
草花露
面白き玉とはみえてとりかたやこのかるかやにむすふしら露
おなしきところ神はうらやましとやおほしめすらん
とて人々をすゝめてをかのみやにてはなくしはへ
りけるに
社頭紅葉
世をてらす神の光に紅葉はの錦をさらすしめのうち哉
霧中千鳥
なみ枕ならはぬ旅の友千鳥これやきよみかかたみ成へき
夢にひかりたうのほうゐんとてやんとなくおはせ
し人のかくれてひさしくならせ給ひたりけるか大
はらのひしりのかくれさせ給ひたるをとふらはせ
たまふとてよみてつかはしたりける

淺ましやこの世いかなる所にてむろのちりたにとまらさる覽

　夢さめて後御かへし

とまらぬはけにそ悲しきむろの塵歸るはもとのさとりなれ共

　あひしれる人のいつの山にはへりけるか文をかりてをそくかへしけれはたつねにつかはしたりけれはふみをかへすとてつゝみたるかみにかきつけてをこせたりける

ふみ分てかりて久しく成ぬれはみたれやすらんまのゝかや原

　かへし

亂れしも思ひそなをすかろかやのくちぬを君か情にはして

　またさきにはこれをつかはさんとしけるを人々はしたなしと申けれは思ひとまれるをかくまうさてとおほえける

かりちらす人の心の秋風にさもそみたれしまのゝかやはら

　十界といふものあり心あるものゝつみのありなしにしたかひてむまるゝところなりさらにこのほかをいつるゝなしそのこゝろを

　地獄

さきの世のあしき思ひの身にそひてもえこそあかれ同し畔に

　餓鬼

露をたに結はぬ身にてしかすかに玉のをはまた長しとそきく

　畜生

思へたゝうたろゝ駒の身をいたみはやきはをのかゆく心かは

　修羅

淺ましやくるしき海のあら磯にいさかひをのみひろひける哉

　人

九重のみやもあやしのすみかにも露かはつゐにとまる人ある

　天

たのむ方なきこのもとにすてられて袖をそぬらすあまの羽衣

　聲聞

塵はひとやかて成ぬる夏ひきのいとゝ思ひのたえは社あらめ

　緣覺

色／＼の紅葉や花のいちろのみや心とさとろしるへたるらん

　菩薩

諸人のしつむをあみにもらさしとみちひくあまの心つよさよ

　佛

曇りなきさらぬ世のほかの月影はひかりをさゝぬ所あらしな

　十如是といふをあり心あるものゝみなそなへたることなりその心をよめる

　相

思ふをそのかたちとはあらなくにいかて色々わきてみゆらん

　性

なかき夜の雲はひかりをへたつれとつれにわか身に有明の月

體

今までもすかたのいけのあはれこそ思いてゝも人はとひけれ

力

風はやみわかとる纖のちかられによにかへらしなあまの釣舟

作

つくりゐる繭のいとすち引かへてなかきみたれは今そ絶ぬる

因

身のうちにくちぬ蓮のたねのみや心のそこのたからなるらん

緣

あひみてはしかまのかちの色深くともに物をは思ひそめぬる

果

かりそめの此身なれとも草のはにしはしも露のをくそ嬉しき

報

ききの世に結ふ契やあさからぬ人めはかりも家をいつれは

本末究竟等

――はかりひとつしなにはあらねとも共にかはらす末の松山

おほはらのかえてかしはといふところにて落葉の

心を

吹わたる風にまかせて立田姫かえてかしはに錦をそしく

おなしところのゐたのしみつをよめる

みた人のとはぬ日そなきかき分て結へはにこるゐたの清水を

おなし所のをやまのしみつを

いはゝしるをやまの清水よそなから思ふ心のうちそすゝしき

社頭竹

あかめをくわかうちかみの吳竹ははるかにみえの世注枝さす

雨中郭公

時鳥こゑ五月雨にうちそへていくらもりきぬ眞木の板屋に

旅宿螢

螢をもやかてこすけにかりこめて玉ぬきむすふ草枕かな

關路月

淸見かた立よる波に影とめて空ゆきやらぬ夏の夜の月

人もうへ侍らぬ庭草のなかにゆふかほのおひたり

けるをとりたるに花の咲たるをみて

たつるてにかゝる姿の日にそへてよにおもしろき夕かほの花

秋のはしめとなりて風のいたくふき侍けるか七月

七日の夜はしつかなりけれはよめる

天川なみ吹ちらす風もゐていかにあふせのとけかるらん

ゆめにおほはらへまかりはへりたりけれはらいか

うゐんのうしろの山にもみちの一村し侍たりける

をみて

おほはらやたゝひとむらのうすもみち――

ともたちなりしひちりのみまかりてひさしくなり
たるかつけ侍たりける

こゝろにそめて人やみるらん

あひしれる人のもとより薗をつかはして歌よみて
たへと申たりけれはよみて侍ける

立春

朝またき立くる春のしるしにやさゝ波よするしかのから崎

花

見わたせはあをれか峯の櫻花ちるこそ雲のきゆるえけれ

三月盡

暮かねし春の別にあはしとやけふよりさきに立かへりけん

郭公

小倉山すきややられぬ郭公おなし梢にねのみきこゆる

六月祓

津國のあしかることはみなつきぬこやになこしの祓しつれは

九月盡

いつとなく長月ならはこの暮に秋のわかれを歎くへしやは

初冬

此間七行闕

なないかにせん

祝

君か世にしけく波うつはま松のはことに千々のかすとなる迄

七種中ありけるとしおほはたに人々あつまりてそ
のよは文武詩なんとをこなひてよもすからゐあ
かしはへりけるつゐてによめる

建仁二年正月十四日夜

立春祝

春霞たつほともなくみよしのに心の行やちよのはつ花

隣家梅

またなれぬ人の軒端の梅なれと匂こそ我宿にもりくれ

同三月十九日夜

尋花入深山

花さくはみ山のそことしられ共心のそらに尋こそ入れ

柳臨岸上

一すちにきしにのみゐておしめはやわれにかたよる青柳の糸

同五月十六日夜

海上時鳥

郭公なみちの空を過ゆくはしるしとめすやもしの關守

雨中菖蒲

をのつからとる人もなき五月雨にうきねをなかすあやめ草哉

同七月十八日

行路秋花

夕暮にかゝらし物をいとすゝき波よるまのゝ濱路ならすは

七夕後朝

星合の空さりけなく過ぬれとたへやかれぬるけさのわかれは

煩惱即菩提

いつとたゝ人は浮よの花ならてやかて此身そさとりとはなる

同九月十九日

暮秋曉月

ねさめして詠る空の月影や過行秋のかたみなるらん

賤宅殘菊

思ひよらぬ人もふせやを尋けりまかきの菊の花の盛は

同閏十月十九日

山路落葉

ならかしはちる二村の山ちにはみないそかるゝ音のみそする

寒夜水鳥

汀より來る霜夜の鴛鳥はせめてや沖のうきねをはする

同十二月二十日夜

松上雪

雪ふれは波も遙かに白雲のかゝるとみゆるすゑのまつ山

旅宿埋火

夜をこめてたちそやられぬ埋火のしたにこかるゝ草の枕は

山家歲暮

としのくれ過る數のありけれは猶山里もこりそはてぬる

都にあひしれる人のもとよりあふきをつかはしてありけるなかに玉津島の社をかきたりけるあふきをかの明神に思ひよそへたてまつりてくやうしはへりけるつゐてによめる

宿善生利

さきの世にあつめし雪と螢こそ我をさとりの身とはなしけれ

海邊月

しらはやな玉つ島もるあけの戸に幾度かゝる月はやとると

元久元年十月のころたうときところなんとおかまんとおもひたちておなしき霜月の五日みやこにいりはへりたるになにとなく心さはきしてものあはれなるやうにおほえけるにたのむ人のもとへなにとかはへるなとたつねたりけれはけさの曙に木たかき花風にちりはへりてよものなけき空にみちぬるよし申をこせたりけるをきくに心も心ならすして夢にたにしらさりけるわか身さへうらめしくおほえてすみ染の袖しほるはかりにてそのよもあけにけりなつかしかりしすかたしつかにおもひつゝくるにいよ／＼かなしくおほえてよめる

なさけなくちらす風こそ悲しけれまた冬こもる花の蕾を

數なからつく／＼とあかしくらしほとにしはすに
もなりぬれはさてもあるへきにもあらすとてとし
のうちにくたり侍るに花ちることなさけなしとは
おもひなからあとなたにそのかたみとみるへきも
のをなと思ひつゝくるにはなれかたくおほえて
しかすかに立うき花の都かななこりを思ふ袖のしつくに
たそしなとともたわにすゝめられて心ならすよの
うちにいてはへりてあふ坂の關をとをりはへりけ
るになにをもうらめしくのみおほゆるまゝに
相坂のはかくへたつる身とならてとはぬもつらしせきの關守
なとは山のかたに風のふきけるをきゝて
身につもるうきをいはゝ色ふかくつらき嵐の音羽山かな
おなしみちなれともおりゝにもあらぬ心ちしてあ
はれつきせぬまゝに
しらさりきおなし野原をかへるさに涙の露のかゝるへしとは
道すから心もきえて霜かれのかやかしたおれわけそやられぬ
なるみかたをすきはへりけるにしほのみたぬさき
にといそきあひたるにつけても思ひわするゝこと
なけれは
なるみ潟はやくうてともみをつくし波にしほるゝ歎とそなる
さやの中山に
日をへつゝおもき[illegible]身にそひてくるしさゝきるさやの中山
うつの山をとをりてはへるにかのまうけしたりし
所なんと人の申をきゝて
うつの山うつゝともなしかり初のすみかを夢にみる心ちして
もとの一みかにくたりてまとのみちにかのいるた
めしよりほかのとふらひなかりけりおもひかたたか
きもいやしきもわれも／＼といとなみはへるよし
を人の申をきゝて
後の世もなにを思へはくらからんさしもあつむる法の光に
かのためにとてうき島かはらにいてゝ八萬きのた
うたてはへりけるに
心さしおきぬる石の數をにかの光さすさとりなるへし
波ちはるかにみえつるにつけても忘れかたくおほ
えて
身をすてゝ浦はなれにし海士小舟はや彼岸によるときかはや
夕暮さまに嵐にしたかふなみたもとにかゝりはへ
りけれは
さらぬたにかはきもやらぬ墨染の袖のみぬらす浦の鹽風
彼御をな佛にむかひたてまつりておはするよしを
夢にみたりと人の申をきゝて
しかはかりさとりのつきと友ならは浮世に廻る我もみちひけ

都にまかりのほりてはへりしときとしころたのみ
をかくる人おはしたりけれはわれも人もめつらし
きまゝにすきにしかたゆくすゑの物かたりなとし
てはへりけるついてにあつまのかたにはよき梅の
花のはへらぬよしなにとなく申たりしをきゝて心
にそめてある宮はらにめてたき花とてほかへもい
とちらさぬをにてはへりけるおろしえたをひとつ
とりて十二月八日つかはされたりけれはもちてく
たりはへりたれ共日数つもりておひつかんをはい
かゝと思ひなからおなしきつこもりの日あやしの
京きの板屋の軒ちかくうへはへりたりけるかつき
のとしおもひのほかに□おもひよら
れぬ□やしろな軒□
おなしころ虫のこゑ〳〵みたれあひたりけるをき
ゝて
虫の音を聞に思ひのまされはやうれへを秋の心とはかく
こもりゐたりけるところに菊の咲たりけるを見て
我宿の花は浮身ないとへ共そたてぬ菊は友と成けり
同十三夜にあはれなるをゝもおもひつゝけてこも
りゐたりけるに月のあかきよしを人の申を聞て
名にしおひてこよゐの月のさやけきも只浮雲の身をそ隔つる
かのかくれけんとき子とものをや心にかゝりけん
とおほえて
子を思ふおやの情はすてやらてなをうき世にや心とめけん
そのなかにもをにあはれなかくるもやあるらんと
おほえて
たらちめは誰をわけてか忍ふらんこの内ならぬ子はなけれ共
夢に東大寺の大仏をみたてまつりて心もすゝしき
やうにおほえて夢さめてのちによめる
三笠山もろ月かけやさそふらん夢に心のゆきてみゆれは
光さすさとりの空の心ちして夢にし見ゆる春日野の月
同二十四日日吉の新宮の御まつりた思いてゝ
ます鏡玉のみこしにかけさして今やはまへのみゆき成らん
つきの日おほはたのあしたかの御まつりにてみか
くらなにくれなんとのゝしりあひたるをきゝて
こもりゐて数のみとはなりなから神のさかゆる音そうれしき
おなしおもひしけるころあきしもなとかゝるなけ
きのみとなすらんとうらむるほとに九月の小にて
はへりけれはよめる
つらしけふ心を秋のうらみてや今ひとひたにあらて別るゝ
十月一日けふはころもかへなと人の申をきゝて

衣かへ思ひもたゝてけふもまた涙そかゝるおなし袂に

もとのすみかにきくなうへをきたりけるを人にお
つらへていへなんとつくらせはへりけるかうつろ
ひたるよしを申をきゝて

はつしもにうつろふ菊そうらめしきさこそは花の情なれ共

おなしおもひしけるころ紅葉のさかりなるよしを
きゝて

時雨ふ涙にくれて紅葉はもとしはよるのにしきなけり

おなしころ寄歎落葉といふをよめる

あさましやこはいかにしてさきにとてたのむ柞の紅葉ちる覧

おなしおもひにてこもりゐたりけるところにみや
こにてしりたりける人のとをりさまにまうてきた
りけるをこのよしを申てへちの所にすゑはへりた
りけれはをこせはへりたりける

大かたのおほつかなさに尋すは君かなけきもしらて過まし

かへし

君たにも思ひもよらて尋すはわかなけきにそ□みそはまし

北叡　念佛のちやうもんなとして申をこせたりけ
る

いかてかは闇にすゝしくうつしけんわかたつそまの峯の松風

かへし

松風の峯よりおろすすゐなれはさこそは闇もすゝしかるらめ

はゝの身まかりけるとき心にかけはへりしにやら
さりけるよしなんとしたしき人のもとよりこまか
に申をこせたりけれは

たらちめのよはる玉の緒たへかねて我をこひけんゝそ悲しき

ふしのみたけにかさとりたるは雨のふるへきにや
と人の申を見はへりて

雨ふらはつもる雪もや消るとて雲のかさきるふしの山かな

その夜雨いたくふりたりけれは

今よりはたかれに雲のかさとらはふしの麓の雨としらなん

けに〱しからぬすかたしたる法師ひたちの國の
三井の村よりして修行しはへるよしいひてものを
こひけれともうたかふ心ありてとらせさりけれは
まかりにけるをもしたうとき人にてやあるらんと
おほえて

あはれ共いはぬ此身や罪深きそらひろひせぬしゐのおならは

いつのおくにいはちといふところにおほきやかな
るいしのひらきおりその石はこひいしとなつけて
ふむ人はかならすあしにこひのつくよしを人の申
すをきゝて

いかなれはいはちの石を踏みての後にこひつゝ身とは成らん

おなしところにてもゐといふうらよりはるかにうみをみわたしたるかおもしろきよしをまうせは

思ひやる心さへこそおよはれね雲井につゝく沖つしら浪

おなし所にあられといふ浦にいはのうへに浪のうちちらしたるかはなのやうにておもしろかりしよしを人のまうすをきゝて

としふれとあられの岩にうつなみは猶めつらしき石のはつ花

はきわかさきといふ所を

住人の情をやつれにぬらすらんはきわかさきにかゝるしら浪

おなし所におくゐの浦のとを人のかたるをきゝてさそおもしろかるらんとおほえて

またみねとほのめかすにそ隠なきおくゐの浦の饗のかゝはひ

いろうかさきはかせなとふけはとなるもとにわつらはしきよし人の申をきゝて

しふけにいかに心のうかるらん色ふかさきをまはるあまふね

おなしきみなみ浦にしらさまの大明神と申てしるしあらたにはへるよし申をきゝて

ちらさすて我もみちひけ白濱のまさこの數にあらぬ身なれと

おなしきにしうらにいしふといふ所にあまのすみかいそたちかくして岩うつなみしけきよしをかたるをきゝて

いつとなくいしふの岩にうちゝらす波やとまやの雫成らん

おなしきみなみうらにていしといふ所はうらよりすこし［　　］とかや人の申はへれはそのさとの人はいそなのありところもこまかにしらすやあるらんとおほえて

浦なれぬ人はみるめもとらしかしおのかていしのしるし之共

はまゆふといふものはこのうら〳〵にもはへるよしを人の申をきゝて

かさなれる數はまさらしなに高きみくまのならぬ浦の濱ゆふ

するかの國たこの浦といふ所はしほやく浦にてはへるにちかころはもしほのけふりたちわたるともみえねは

田子の浦のあまの思ひや絶ぬらん今はも煙もやくとみえねは

しつかなる所にてなにとなくすきにしかたなと思ひいてられて

待ものなきにつけても住吉のきしかたのみそ思ひやらるゝ

濱邊松といふ心を

あとゝむる神やしるらん浪たちていくよかへぬるみよの松原

むかしみやこにてともたちなりし人すきしとしの秋修行しはへりけるついてに立よりて草花幽深といふこゝろをよめと申てとゝりはへりけれは

暮むすふまゝの清瀧いとすゝきこれや入江の渡りまよふらん

寛元々年十一月十九日北條常住僧のはへりける
よしをきゝてちやうもんまでは思ひもよらすみく
ゝろしからぬさきにそのにははかりをたにもふまん
と思ふ心さしのふかきによのうちにまいりはへり
けるに月のくまなくあかゝりければ

さみるまとの道のともなれはこれやさとりの有明の月

まいりて九輪のひかりなおおみはへるに心もあき
らかになり寶鐸のひゝきをきくにつけても身もす
ゝしくおほゆあけのやしろは花のとひらをひらき
さとりのやとはこかれのきならふのりをとなふ
るとりはみきはの波にたはむれ玉をかされるふれ
は池の水にうかふかやうのをゝも見るに浄土もか
く

〔以下闕〕

閑谷集巻第三

秋歌

あきたつ日老にのそみてもなをいけるをたおもひ
て

我そのみふけまさりとやなにたてゝ又も命にあきのきぬらむ

立秋露を

袖にこそおもひわかれとくる秋の草葉にしるきやとの露けさ

建長五年のをにやはつあきかせいと身にしむこゝ
ちして

おもへたゝ老のみにしむかなしさもいそちすきぬる秋の初風

田邊早秋を

きのふとはさすかさ苗のたとられていなはにまよふ秋の初風

山里早秋蝉

秋くれはさらてもものゝかなしきに夕の山にせみのなくなる

七夕のうた

鵲のはしはかりをやわたすらん秋まつかはのもみちあへすは

渡る瀬を何ことゝるらんかさゝきの橋は雲井にありとこそきけ

なたもかくくるしあにまたる暮やすのやすく渡して

天河くもゐなからもたなはたやあふをいつこと待わふらん

七夕のあさせたとらんかたしらすこそのわたりのあまの川霧

いまこそはやそ瀬の霧のたえまよりほのかにみゆれ天の河舟

玉匣にいとよもちりをはらはすはあまの河原や山とならまし

たゝ一夜思へはつらし遠妻と手まくらかへてぬるはぬるかは

秋を待まれなる中とたなはたのよにしらすこゝ思ふなるらん

七夕もたのめはこそはなからへて神代のうらみ猶のこるらめ

あけぬとも梶棹かくせわたし守またふたゝひと年にやはまつ
しつこゝろあらしとこそは思ひやれあまつ星合のあけ方の空

荻を

たのめたる人やはあるにあちきなく聞すくされぬ荻の音かな
夕されはいさ何事としらねとも風にかたらふにはのをきはら
今更になにかうからむとしわれきゝはしめたるをきの音かは
物思ふなみたやたねとなりにけむさも袖ぬらすをきのをと哉

閑中荻

うきなからよすかとたのむ宿なれといへてしぬへき荻の音哉
音するはをとせぬよりも淋しきにあはれなかけそ荻のうは風

深夜荻

夜もふけぬをきのはよ（マヽ）あはれしれしはしまとろむ老の枕に

薄を

はなすゝきなとかほにいてゝ秋風の心もしらす人まねくらむ
しけきのゝ露におれふすはな薄かたみに袖をしほるとそみる

草花露濕と云ことを

いかはかりなにおふ草のしほるらむを花かもとにあまる白露

女郎花

たか袂のつらさなれはをみなへし思ひの色に花のさくらむ
山穴のもとのまかきのをみなへし春より秋のいろそかはらぬ
かきほにあさかほのさきつゝきたるをみて
かきにほすはなたの帯とみゆるまて露にむすへる槿のはな

槿

うきをしる涙とやみむ袖かきのうへにかゝれるあさかほの露
山さとにすみはへりしころきりのたちたるあした
にあさかほのいとこゝちよけにさきたるをみて
柴の戸のあくるもしらすきりこめてわかよとみゆる朝顔の花
春日榎本明神によむてたてまつりし三十一首のな
かに
たのまれぬうきよのなかをいまみれは猶さきあへす朝顔の花

野徑草花を

はなにさくのをなつかしみ分ゆけはうつりかこくも袖風そ吹

雨中草花

花にさく草のみたれに露をきてしつかにもふる秋のあめかな
老のゆかにいとねられぬまゝにふるきうたともを
おもひいてゝ
さならても老ぬるみにはいねかてな荻の下葉におこちつる露

あきのうた

秋萩の花のまきれに露わけてつまやとふるとしかそ鳴なる
いつ方へつまりかれすと秋萩のうつろふのへに鹿のなくらむ
誰かきく飛火かくれにつまこめて草ふみちらすさをしかの聲
夕されはくすはふ小野の秋風にたつのはつまと鹿やなくらん

春日若宮三十六首のなかに
ふかきよのね覚からかとおもへともあはれなりつる庭の萩哉
あきかせを
鹿のたつさやまかすその秋風にくさはをしなみ露そこほるゝ
野へみれはうらみてもなを葛のはにやますそ秋の風は吹ける
としにそへてはあはれまさるすまゐにあきのかせ
をとふく夕くれもたゝにやはとて
すみわひて野となるやとの夕くれはあらしよりけに秋風そ吹
あきのうた
野へみれはくさのはことにをく玉をなにそは露とあき風そふく
いまさらにはらはゝ袖やそほちなむしけき蓬のあきのしら露
暁露
かきりあれはよもの草はにをく露も老のねさめの涙はかりは
暮露
なにゆへのなみたなるらしたつた姫の山をしなみをける白露
野草秋興
色〳〵の花みてくらす秋のゝはよるもとまれと虫そなくなる
草間虫
色かはるあさちか露のやとりまて風にみたれてむしそ鳴なる
あさち原しめゆふものゝ秋風にこりすやたれをまつ虫のこゑ
のをすき侍し夕くれにくさむらの虫をきゝて
うらやまし野原にわふる虫たにもたのむ草葉のかけはあり鳧
うきはみな我身ひとつと思ふよに又いかなれは虫のわふらむ
古集に螢火兼虫促織鳴
ほたるとふゆふかけくさの白露にはたをる虫もおきとなくなり
閑庭夕虫
くれゆけはたれまつ虫の聲ならし人をもしらぬ宿のまかきに
秋夕
あはれともうしとももものを思ふより外には秋の夕くれもなし
いかなれは日をにかはる心にもおなしつらさのあきの夕くれ
今さらになとかなみたと思へともいとなかるゝはあきの夕暮
西山にすみはへりし比
露ふかき山のおくこそかなしけれいつちゆかまし秋の夕くれ
古集に滝深山水景寒
あきのひのさすや夕への山かけはした行みつも音そさむけき
人過遠村秋日暮
たひ人やとをちの里にすきぬらん秋風さむみ日そくれにける
待初鴈と云ことを
かりかねはたか玉章としられともかけてまたるゝ夕くれの空
雲間鴈
うき雲のゆきかふそらの秋風にかたへみたれて鴈そなくなる
月をまつとて

たまきはる夕さりくれは老らくの命もしらす月そまたるゝ
建長八年八月十五夜月いとくまなくはへりしを見て
久堅は月とうものなれはやひとつにすめるこよひ成らむ
ひろとのみみゆるにしろしいつ方によはなりぬらむ秋の月影
水邊秋月
みなそこに深くうつれる月影やふちにしつめし玉とみゆらむ
磯邊月
あつさ弓はるかにとをく月さえていそへの小松あき風そふく
古集に呉苑秋風月滿頻
なかめはやいかなるそのゝ秋風にみちては月のくまなかる覽
心懸秋月照呉關
そらはれていつれのせきかてらすらむ心にかゝる秋のよの月
風高秋月雁行齊
空はれてよわたる風やをくるらむ月にひとしきはつかりの聲
故人心似中秋月
みれはまつむかしの人のこゝろまて思ひしらるゝ秋のよの月
行月明星稀
中〳〵にくもらぬ夜半の月にこそ空なる星はまれに見えけれ
水流無限月明多
すゑとをくなかるゝ水にやとりても猶あまりある月の影かな

月明江上笛聲多
ふけゆけは笛の音あまたきこゆ之いかなる江にか月のすむ覽
江鷗散霧夜無伴漁父
かもめとふ入江をさむみさよふけて友なきあまや月をみる覽
夜半鐘聲到客船
船とむるいり江の楓しもさえてよふかきかねを月にきくかな
月穿疎屋夢難眠
わひぬれは夢みるほとのなくさめを閨もる月にかなはさり鳧
月のよおもひをのへて
我やとを月にたつぬる人もあらはあれたるほとを哀とやみむ
關東にさふらひしとき月をみて
思ふこそあはれ之けれあつまやのまやの隙もる月をなかめて
雨後月
村雨のなこりのとこに影とめてあかしのこやに月そやとれる
九月十三夜あめふりはへりしあくるあしたに尊家法印かくこそおもひしかとて
ふる雨のいとはれぬ哉もろともに月をみるへき我身ならねは
かへし
君はなを雲まの月もなかぬけむうきみはかりそ時雨はてにし
閑見月　建長六年とにや
見てすきぬ年のいそちにあまるまて世間もしらす秋のよの月

あらはさぬかけにはなとかおもひけむ心にすめる秋のよの月

月のうたいなかに

いかはかりゆかしからまし秋の月うきよのほかの光なりせは

法なはさて侍ゐへすてし身なれはうきにとまりて月をみる覧

あちきなし空すみわたる月みれはものうらやみの限なりけり

月告遷老

みな人のすてゝともとはならぬよにあはれなりける月の影哉

にふ九年八月十五夜こそつねよりもけに月さやかにてまはゆきほとなるをひとりなかめをれはさてもことしたかきいやしきはかなきとのみうちつゝきゝこゆるに□も木臈のたくひはなをもつれなくてすくし侍かなとおもひつゝけて

つれもなくおほくの人をさきたてゝひとり今宵も月をみる哉

月のうたあまたよみ侍るなかに

かくはかりうきにたえたる程ならは月にわするゝ涙ともかな

なかむれはなとてそほつる我袖そ月やは人のなみたならぬに

なかむるにこけの袂のしをるゝは月やうきみのなみた成らむ

ねさめしてひとりそみつる手枕のしつくにやとるよはの月影

むかしにはあはれ心のかはるかな老ていまみるあきのよの月

月前風

やとるへきくもるかとてやはらふらむ老のなみたの袖の秋風

月をみて

かつみれは老の涙やへたつらむうとくもあるかなあきの月影

旅宿擣衣

ころもうつ聲するかたにやとかりてわか心から夢もむすはす

擣衣待人

まつ人のこぬかつらさやかさぬらむ宿をかへてもうつ衣かな

故宅擣衣

なに人か衣うつらむあれはてゝ風もたまらぬやとゝみゆるに

萱葉深隣擣衣

衣うつをとこそをちにきこゆなれ山のこのはに風やふくらむ

殘菊

しら菊をうへしやいつこ霜をへてむらさきおふる籬とそみる

[illegible]

露よりもれいの泪そつもるらむあれたる庭のきくのふちとは

秋のうた

初鴈のこゑきこゆなり朝またきうへてもいにし秋田かるらし

夕くれはいなはもそよとふく風に人こそとはれをやまたの庵

山家のきり

かへるさのみちもしられす山里にあはれをそふる霧の夕へは

霧のうた

露はなをおくと見えけり夕きりのなにともなくてぬらす袖哉

きりたつあしたにひとりこちて

秋霧のたつのとはやくなりしよりはれす物思ふやとの淋しさ

山路のきり

朝々のいはねのみちも見えぬまて秋きりふかしまきたてる山

秋日な

いとゝわか袖はほされし長月のしくれのときにはや成にけり

黄葉

よろつよに十度すむへき河水のいろにいてたる秋のもみちは

山紅葉

やまひめのうはきなるらし紫のこきいろましろ峰のもみちは

雨添山色

こさまさる山にこのはの夕時雨誰にみすへきいろにそむらむ

霧中もみち

夕霧やふかくたつらしくる人もなくてやみぬるみねの紅葉は

柞

しはしこそ霧もへたつれはゝそ原終に色にそあきかせはふく

行路落葉

散かゝる木のはの露の山おろしにひとやりならすぬるゝ袖哉

あきのうた

たかために錦をしくとみゆるまて紅葉なとこにあき風のふく

露霜のあきの別のころなれはなみたならてもそてはぬれけり

暮秋雨

袖ぬらす時雨を空にとゝめをきてかたみにせよと秋や行らむ

九月盡の日おもひをのへて

くれぬれはまたもや秋と思ふにそおいそしられぬ心なりけれ

よもすから惜秋と云ことを

おしと思ふよのまもいたく悲しきにねてあかさはや秋の別を

右一卷者紀伊國[illegible]集和何[illegible]書[illegible]

[illegible]津東[illegible]家藏[illegible]記之。

續群書類從卷第四百四十六

和歌部八十一

權大僧都心敬集

百首和歌

春二十首

立春

あらぬよにくれまとひぬるいとなみも一にわれはなれる春哉

朝霞

春とたにまたあへぬ色を門はらけとなき計にかすむ山かた

谷鶯

帶にせる細谷川の朝かせにむすほゝれぬる鶯のこゑ

殘雪

山ふかみ苔のしつくの聲そそふ梢の雪や春になるらん

若菜

あさちふや露にしほれてよゝの跡忘れかたみに摘若な哉

里梅

あるしたに折かけ垣の梅の花誰にかかれす春を待らん

軒梅

われなくはしのふの軒の梅のはなひとり匂はん露そかなしき

面かけは春やむかしの空なから我身ひとつにかすむ月かな

春曙

花とりの色にも音にもとほかりによはうちかすむ春の曙

歸雁

わかうへに歸るならひの春もかな老の涙ちに遠き雁かれ

春雨

さほ姫の霞の袖にかみすちをみたすはかりの春雨の空

岸柳

名もしろく霜にくつれし河きしの根白の柳あらふ浪哉

待花

おほつかなたか心より下紐の人につれなき花となるらん

初花

朝またき空も匂になひくまてよをほのめかす花の色哉

見花

一もとに今年そなれぬ旅の空心にむかふ花はあれとも

花盛

うちきらしよは花なれや玉鉾の道ゆき人もさりあへぬ比

落花

花ならぬみをもいつちにさそふらん亂たるよの末の春風

欵冬

色に出て露そこほるゝいへはえにいはぬやつらき欵冬の花

池藤

沈むまは匂そうすき水鳥の羽風になひく池の藤なみ

暮春

物をによはおとろふる色みえて人の心にはるそ老行

夏十五首

更衣

花のいろに昔や心そめさらんならひうきよにかふる袖哉

卯花

しくいろや今もなからん雨そゝく卯花山のおほろ月よに

待郭公

あやにくに今や過らんほとゝきす待あかすよのうたゝねの空

聞郭公

子規過にしこゑを殘す哉くろゝふもとの杉のむら立

郭公稀

ほとゝきす稍もしらぬ一花を青葉の山にのこすこゑ哉

盧橘

なき人や舊にしやとに歸らん花たちはなに夕風そふく

早苗

さおとめのなに心なくうたふにも旅行袖は露そこほるゝ

五月雨

かゝらんとかねて思ひしかひもなし萱ふく庵の五月雨のころ

鵜川

しまつ鳥うかへる浪のくるしきも陸に沈める人そ知らん

叢螢

さしも草もゆるとみれはくるゝよの蓬かはらにぬる螢哉

夏草

末野ゆくをちかた人の袖みえて茂ゝ草葉の程そしられん

夕立

をちかたの雲に一こゑなる神にやかて降きぬ夕立の雨

夏月
夏のよや行かたちかき武藏のゝ草のは山にかゝる月影

杜蟬
うつ蟬の羽にをくつゆも待あへず忍ひにかよふ杜の秋かせ

夏秋
おもふ事御秋に捨て歸るさもよはおやにくに秋風そ吹

秋二十首

早秋
うちつけに思ひのこさぬ一葉古秋たつ今朝の木からしのかせ

七夕
契よりかさしの玉をしるへにて歸るやつらき天の川なみ

荻風
色も賓宿からふかき夕暮の荻の露吹おきの上かせ

萩露
古もさそな雲ゐの秋の袖つゆ吹むすふはきの夕風

女郎花
東路の野上にたてる女郎花うかれしつまや花と成らん

夕虫
草のはら滾しきかせや渡るらん夕つゆまた鈴虫のこゑ〳〵

夜鹿
濡ぬるお月ははるけき手枕に鹿のねなからおろす山かせ

初鴈
たなひきて帶をそ結ける春日のゝ若紫の衣かりかね

秋夕
いとはしよわかよを秋のさひしさはなれにしまゝの宿[傍イ]の夕暮

山月
むら雨のはるゝもまたぬ月影を袖にまちとる山端のくも

野月
宮城のゝ夜の錦のいろならぬこ萩かつゆにやとる月哉

河月
月のみそ形見にうかふ紀の河や沈みし人の跡の白浪

江月
ふけにけり音せぬ月に水さひ江のたなゝしをふね闇なかれて

浦月
袖しほる磯のね覺の松かせも月にかこたぬ夜のにしたて

籬菊
今朝みれは花ふさおもみさく菊のませゆふ計なけるつゆ哉

擣衣
たかためそ夜はの衣のうら風にうつこゑ絶ぬ秋のしらなみ

暁鐘
鐘ふかみあかつき月は霧深き横かはの杉の西に殘りて

閑紅葉

染にけりまゆみの岡の秋の露古にしみやにとのゐするまて

庭紅葉

せきいるゝ水なき庭に紅葉はをなかす音羽の山おろしのかせ

九月盡

かたみこそ今はあたなれとはかりのうき夕暮を殘す秋哉

冬十五首

初冬

すさましき空のけしきも風の音も悲しさそふる冬はきにけり

時雨

神な月いかに時雨る雨ならんさとわく比もしらぬ袖哉

落葉

あすもふけ木葉にそよく（さはくイ）風ならて誰山里の冬をとはまし

朝霜

あさとのよもきかいろやますかゝみ我白髪にむかふ霜哉

寒草

玉鉾の道行人も袖ふれぬ草葉を冬は結ふ霜哉

千鳥

袖さむみゆく人たえて千とり鳴そかの河原の夕暮の空

水鳥

かへりさすつはさに霜やおもろらん浮ねの鳥の夢さます聲

氷初結

今朝はまた細によする汀のみ冰りてのこる池のさゝなみ

冬月

山里はやもめからすのなくこゑに霜よの月のかけをしる哉

鷹狩

はしたかの巣よりそたてし人そあるころす心を何をしふらん

野霰

ゆふされはあられ亂てとふ宿もいなのゝを篠山風そ吹

淺雪

草も木も我名かくさぬ雪（深イ）までそ宿の行ゑは人にしられん

積雪

山もとの杉の一むら埋かれ嵐も青くおつるゆき哉

閑中雪

思ひたえまたしとすれは鳥たにも跡せぬ雪の夕暮の山

歳暮

年寒みまつの色にそつかへては二心なき人もしられん

戀十五首

寄月戀

なかめつゝさても忘れぬ涙哉たかなくさめと月はなるらん

寄雲戀

詠てもおもひや出るとはかりにうきみをかくる夕暮の雲

寄露戀

よもきふに殘るもかなしおき出しあかつきつゆの袖の[illegible]

寄雨戀

ぬれ／＼も今夜の雨に我のみかは人や心を哀ともみん

寄海戀

うきみをも海にいれとやいさむらん枕の下の沖つ白浪

寄山戀

わか涙雲こしくれはいこまやま雲ゐかくさぬ時はありとも

寄橋戀

古にけるよゝの板田のはしよりもこほるゝ物は涙なりけり

寄鐘戀

聞もうし鐘はあすむ春のから我あふ夜の闇の秋かせ

寄衣戀

うはのそらになしへし衫の情にも心は見えて吹かせそ吹

寄虫戀

つれなさをかたみに落しけきのとなりてよな／＼虫も恨よ

寄鳥戀

よゝかけて叙ふへにきなにしつ寄鳥とりの跡の白雲

寄跡戀

朽んよをおもふもかなし莖ふての跡みるよはに鳴こゑ

寄獸戀

かひそなきむなし形見のなくれつみ夜はもすその床にゐれ共

寄枕戀

消かへり思ひしつむもかひそなきさよの枕のふかきよの夢

寄衣戀

あふ事を夢にもなさす白妙の色うらめしき衣／＼の空

雜十五首

浦松

待こふる人ありとても何ならんよはあた浪のみつの濱松

窓竹

はかなしなまとのくれ竹うつこゑによはの嵐をさとる計は

山家嵐

音信し人に歸りて日くるれは松にあらしのかたる山かな

山家水

柴の戸にふるきかけひの音聞も命の水の末そかなしき

田家

をのつから心の種もなき人やいやしき田ゐの里に生れし

故鄕

立歸り[illegible]しはかす／＼なきよりものこゝろにおふそ涙落ぬる

[illegible]

思出る今夜そなきかから泊とをき扇か風も身にしむ

羇旅

うらめしき[illegible]の[illegible]守かかたみ哉春ををくれる弓張の月

羇旅

いそかしよ旅にさまよふ程はかり物の哀はいつかしらまし

述懷

音羽山なれしふもとのやとはあれて今廓（いちくら）に身をかくす哉

懷舊

なきはみなうつゝに歸る昔にてひとり今みる夢そかなしき

眺望

今日はきて手に取るはかり霞むにもふてなそ捨る（なくるイ）和歌の浦浪

神祇

ひとり猶我氏神や捨さらんさらすはかゝるよにものこらし

釋教

なのつからおはりに向夕くれや日來の法もさはりならまし

祝言

ひとりたゝみをなくさむる言葉も三のほかなる樂しひにして

隱士釋心敬

寛正第四曆暮春下旬。於紀州名草郡田井莊宮巻籠中。爲備法樂。早卒詠之。毎首狂歌。左道々々。

右百首心敬眞蹟之本ヲ以校了

天保六二ノ十六　忠寧

百首和歌

春二十首

關路早春

都まて關の東のたひ衣空にやつさて霞む春哉

湖上朝霞

朝ほらけ霞むもつらしわかれてはいつかあはつの舟の行末

霞隔遠樹

今朝はまつ心つからや遠からん涙にかすむやとのこすゑは

羇中聞鶯

たれとれぬ草の枕もうとからすわかるゝのへの鶯のこゑ

隣家竹鶯

中かきを我にへたてす雪折の竹の葉傳ふ鶯のこゑ

田家若菜

まちてつめ雪まのね芹朝鳥の氷をたゝく春の小山田

野外殘雪

露ならてたまるはみえす下もえのみとりにかゝる野への淡雪

山路梅花

たかためとほかにそみゆる山かつの爪木におれる梅の一枝

梅薫夜風

梅かゝによふかき閨の空たきもむすほゝれぬるこすの春風

水邊古柳

をのつから土に枝さす河岸の折ふし柳かるゝよもなし

雨中待花

それなからいろも匂ひも花ならて面かけむかふ春雨の空

野花留人

野にひとり残るやつらき我袖にかゝれは花も落す夕つゆ

遠望山花

行くらす花にたをやめ足引の遠山櫻あすやたつれん

古郷夕花

おくふかくしのふの軒のこす絶て散人花にゆふ風そ吹

曉庭落花

みる人は深行月に音もせて有明の庭におつる花かな

河上春月

うきかけに昔や人の定めましかすむ雨夜の品川の月

深夜歸鴈

さよふかく月はかすみて久かたの雲ゐに遠き鴈の一こゑ

藤花隨風

しゐて猶さそふそつらきぬれつゝも手折かよの花の春かせ

橋邊款冬

岸かけに人そわたれる款冬のせゝに花さくうちの川はし

船中暮春

春のはて花の湊や尋ぬ共むなしき舟の跡のしらなみ

夏十五首

卯花埋路

里人のわたるはぬれぬもすそ哉卯花ちれる白河の浪

初聞郭公

去年聞し人そ偽郭公此世にもあらぬ今朝の一こゑ

山家郭公

山里に住ぬる人は中〳〵に名をたにきかし郭公とも

池朝菖蒲

庭の池のかりふのあやめ朝とにわきはなしたふ露そすゝしき

閑居蚊火

をのつからともす爪木の一すちにかのこゑほそき山の下庵

廬橘驚夢

ほのみしそ枕にさめぬ橘のにほひやのこすふかきよの夢

杜五月雨

かたをかのもりの柏木末たれて若葉か月雨はるゝ日もなし

野夕夏草

まちわひて草葉の末もよしならん夕暮遠きむさしのゝつゆ

燭庭螢火

おほつかなたか身をなけし上ならん千尋の谷に螢飛かけ

行路夕立
ぬれにけりむかへにきつる蓑笠も取あへぬ日の道の夕立

秋二十首

初秋朝風
草木たにぬれぬはかりの朝つゆに夕暮深き袖の秋かせ

閏月七夕
恨なも今年そのへむ秋の星あふよかさぬる空を待えて

野亭夕萩
野へのはな庭のこ萩の色わかす亂てにほふ露の夕かせ

江津曉荻
物の音も聲たえ月もくらきえにひとりこゑする荻の上かせ

山家初鴈
山もとの軒はの夕日影さえて袂にちかくおつる鴈か音

海上待月
待なれしみやこの山の面かけも立そふ浪にぬるゝ月哉

松間夜月
朽のこるあねはの松の一曲を思出つれはくもる月かな

深山見月
ほのくらき杉まの月に下葉行谷のさゝ水音計して

草澤曉月
人そうきあさちか末の月かけは吹たにのこせ露の秋かせ

關路惜月
送りこし月も都に歸らん杉のはくらきあふさかの山

鹿聲夜友
たひまくら山里人は聞なれてぬるよ訪ふさをしかのこゑ

田家擣衣
かり人のかへさ待わひみよしのゝ田のもの村に衣うつらん

古渡秋霧
雲くたり霧ふゝ天の龍のなたさなから舟をまける浪哉

秋風滿野
をちこちのこゑもひとつに篠のはの廣野にやとる秋の夕かせ

籬下聞虫
色みえぬ花こそなけれ夕暮の籬ににほふむしのこゑ〳〵

紅葉浮水
立田川時雨の雨のまふりてに紅ひたす秋のしらなみ

山中紅葉
おくふかくたれに山姫もらさしの心のつゆの下葉染らん

露底槿花
枯やすき色とは見えすひやゝかによはの露なく朝かほの花

河邊菊花
大ゐかは汀のきくの一もとにおもひ合する古のあき

獨惜暮秋

一とせのよは此ころそうきみにもしはしやすらへ長月の空

冬十首

初冬時雨

空にのみ過るもつらし神な月時雨る袖のよその浮雲

霜埋落葉

色こきもむもろゝ人のことのはを紅葉にみする庭の朝霜

屋上聞霰

宿はあれぬつき身そ消し玉霰此よのこけの下に聞よは

古寺初雪

夜はの雪[illegible]に鐘なうつまさや常よりくもる明ほのゝこゑ（そらイ）

庭雪厭人

跡つけはよもきあさちそ顯れんまたしよ人を庭の白雪

海邊松雪

うらかせも今朝はわたらすはし立や松のは遠くつもる白雪

水邊寒草

よをわたるよすかも今は難波えやあしの枯葉をになふわひ人

湖上千鳥

からさきや夕なみ千鳥ひとつ立洲崎の松も友なしにして

寒夜水鳥

いつくにかひとつはなきて明すらん霜夜の鴛の床はなれして

歳暮澗氷

谷ふかみ氷も且やひゝくらん春まつむめの一花をみて

戀二十首

初尋縁戀（[illegible]）

おろかなるしる人はかりのあふせ哉よふかくたとる中河の浪

聞聲忍戀

音なたてしのふる[illegible]の草葉を山時鳥なにもとむらん

忍親昵戀

かたらしよ我にしたしき人も猶心あさくはよそにもらさん

祈不逢戀

いたつらに今夜もまたやはつせ山むなしきかれの夕暮のこゑ

旅宿會戀

九重の都のうちもかりね哉忍ふるころのよな〳〵のやと

兼厭曉戀

待わひぬねよとの鐘の行すゑをおもふもかなし衣〳〵のこゑ

歸無書戀

つらかりし八こゑは過し朝床にむなしき鳥の跡をたにみす

逢不偶戀

たか心其よは君に入ぬらんとはかりみゆる今のつれなさ

契經年戀

いく秋かわするゝ草の種ならて霜にもかれぬ人のことのは

疑眞僞戀

吹かへす帷の下葉のうら面ある世なみせそ外の秋かせ

返事増戀

そのまゝの跡やは君か付さらん細に見えしふてのすさみに

被厭賤戀

あさましとよそにのみしてみるもうし歎こるみになれる姿を

途中契戀

逆のへゆ補引醍のとのはもおもへは遠きよゝの契りを

從門歸戀

たゝくまに君かとちめぬ天のとは明るそむなしかへるさの空

忘住所戀

涙のみさきたちぬれと方〳〵に末ふみ迷ふ道の芝草

依戀祈身

はかなしな天のさかてをうつたへに思ふ此方の曾もしらすて

隔遠路戀

われそたゝ鳥のねをなく住田かは袖になかれぬ都とも哉

借人名戀

かり枕かほれる花に身をなして秋にしむろうちの山かせ

絶不知戀

あさまーな此よのうちのありなしもしられぬ程の人よ月日よ

互恨絶戀

うきしつむよをうらかせの契哉かたわれを船かなたこなたに

雜二十首

曉更寢覺

跡もなくつらきわかよの夢なから曉のかれのさそはましかは

薄暮松風

三十より此よの夢は破れけり松吹かせやよその夕暮

雨中絲竹

古の涙のそめぬ竹のはゝぬるゝはかりにふるしくれかな

涙洗石苔

松かねやいはほにさかるあら磯の苔のいとなく寄する涙かな

高山待月

雲にやは月も急かぬくろゝよは面かけたとるふしの白雪

山中瀧水

布引やみぬもろこしのもの瀧に心なすゝく水の白浪

河水濟清

白妙の卯の花月夜それよりも秋にそみかく玉川の月

春秋野遊

面かけは花鶯の野へなから下草うつろこ松むしそなく

關路行客

清見かた心やとむる關ならんをちこち人の過かてにする

山家夕嵐

暮ぬとて歸い人ら歸るより心にそ吹峯のあらしは

山家人稀

音羽山おたに出し昔のとを思ふもかなしたれか影せん

暮路眺望

山もとのおけのそほ舟紅葉はに色わかれ行袂いうらかせ

月羇中友

月にたゝみぬ海山をかたる哉さても都の人はしらしな

旅宿夜夢

忘られぬ心つからの夢もうし古郷人は思いてしを

海邊曉雲

明ぬるか松にはこしに引雲の浪にわかるゝあのゝ遠山

寄夢無常

大かたに此よを夢としるはあれと夢の心をみる人そなき

寄草懷舊

わすれしよなれし都の草の陰思はぬ野へのつゆにきゆとも

寄木述懷

かくはかりよもかたふけるうつほ木に今一花を何たのむらん

寄日懷舊

さのみよもかくはあらし老か身の終をいつの日とはしらねと

社頭祝言

あふけとてうつす計そ萬神人の心のほかの宮ゐは

此百首之趣以外之難儀にて。凡此迄の難題ありかたく侍る歟。異遂志。旅宿題者など依無所持。自申將中慰時詠之。則可被捨也。依難宥頗之志侍。自廿五日始之。種々臨時分吟之。今日皆詠滿之。頗作左道々々。

應仁元年八月廿日

百首和謌

花二十首

曉暮は旅にしあれは老かよにあへるはまれの花もかひなし

あやなしな月のさかりに問あへる花も都のよその夕暮

我なくは花こそあるしみし跡を心のまゝにつゆもおらすな

木のもとの昔に殘ぬる花ならて出にしやとは誰か音せん

見し人を忘れぬやとにひとりちる花の心や秋の夕暮

わすれ見ぬよもきかつゆに立ぬれて覺備や花に見えまし

散つもる秋の木葉もそのまゝの花にやくつる春のふる郷

一もとも花やは殘るものゝふのあら山おろしさはく都は

かたゝに人ゝ散にしれ雲の花にはいとふ風やなからん

數かすやかくおとろふる世間に昔なからの花のいろ哉

なれてたにしらぬは花の心哉かゝるよにしもあかすさくらん

思出て去年みし人をあたしのゝ夕のかせに花も散らん

去年ちりし色やはかへる世中に又間はなと詠かみるらん

惜ましようきみの上を忘ぬる此よの人に花はちるらん
なかめつゝ花とふたつのあはれをも忘るゝ程を此よとも哉
みるうちにあらぬ思ひのいろそゝふ花に夕やふかく成らん
花もよにをくれさきたち末のつゆもとあらの[illegible]風そ吹
かゝるよにつれなくちらぬ（のこるイ）花なくは人は哀の猶そなからん
苔の下もかゝらましかはちる花に埋るゝ野の春の夕かせ
いつの春心の花のふるさとになりてうきみも露にくちまし

月二十首

待なれし音羽の山の月かけをかたふく方におもひやる哉
かたれ月遠き都のあはれをもみるらん物をよな／＼の空
袖の浪かけてもしらぬ此よ哉おもはぬいその月をみんとは
忘れすは有明の月の空にみよよな／＼ひとりむかふ（露のよの月イ）心を
恨らん都の人に深行をいそくあつまの空の月かけ
やとりきてしのふの軒の面かけを旅ねの袖にぬらす月哉
いまはたゝ心の底にやとす哉都の袖になれし月かけ
西にいり東にいつるいきのをにかけていつまて月をなかめん
深にけりをもふもさひしみる人はぬるよの空の月の心を
立かへり月は心の故郷にまたこの秋もすめるひかりを
老かよに契れる月や秋のよもそらにみしかき行末のかけ
かす／＼になかめし人の哀をもしらすはつらし古きよの月
ふくるまて物いふこゑに月もみぬよその心を法にしる哉
さてもよに誰かは老と成さらんめてすはつらしよな／＼の月
こしかたもかへる所もしらぬよをおもへはそらにみする（すむイ）月哉
よな／＼の欠行月のかけをみてみてる此よと誰かおもはん
よのうさはみちて欠ゆく空もなしたか僞そ有明のかけ
此よたに心のやみにくもる月くらきにいらんかけもたのまし
ともにみし都の月の面かけは涙なからにくもるよもなし
さても猶さかひは雲をへたてゝもおなしそなたの月をみる哉

露十首

故郷のよもきかつゆの情は袖にこほれぬ夕くれもなし
たのむそよ袖のかたみの露もをけ主は枯しやとの草葉に
おろかにそかゝるうきみに類へにし露は草葉の宿もあるよを
秋の風しほるはせをのつゆよりも破れてのよはをく影もなし
はかなさをなくさむ露のうたてなと人の涙となりておつらん
うらめしなたかよの袖の夕より人にこほるゝつゆとなるらん
しゐて猶はかなさみする夕かな草はのつゆに稲妻のかけ
さゝかにの糸にかゝれる夕くれのつゆを我身とみる人もなし
よは猶そ心なからん空の雲草はのつゆの人に見えすは
とにかくにみのつれなさもはかなさも残ひとつのつゆの上哉

述懐十首

かはるへき人にもそはぬ老か身は惜むにならんことそ悲しき
たのみつる人のゆくゑに身をすてぬならひかなしき墨染の袖

大空に飛たつはかりおもへとも老は羽なき鳥と成ぬる
何事も思捨つといふ人も命のうちはいつはりにして
誰もみな姿はかりは思いれて捨えぬものはこゝろえけり
大かたの人をのみ見て心をはみる人もなき末のよそうき
かくはかりうき身なれとも獨たにうらやましきはなき此よ哉
九重の都のうちに生れなて賢き人をみるそかなしき
大海をのむとも猶やあかさらん限なきよの人のこゝろは
ことのはも旅のふせやにおとろへてたとりし程の佛もなし

懐舊十首

覚よゝり生れぬ身をやかへぬらんあらぬ世の人となる哉
かくはかりうきめを見るに末遠くなからへむよの人そ悲しき
歎かしよたとへは若き人のみもおなし風まつ露のこのよを
たゝ今を誰もおしまておろかにもよはり行身の末をまつ哉
そのよにはそれもさこそは憂ふらんむかし賢き人とかたるも
歎かしなとてもかひなき老かみを忘るゝ時そ心のとけき
姿たに老となれるはかなしきを見えぬ心いなによはるらん
秋のひの影よりよはき老かみや昨日のつゆのあさかほの花
われなみはさこそは年をぬす人といさめんよゝの杖も耻かし
よそにふけみしよの夢は跡もなしとはす語りのさよの松かせ

無常十首

草も木もうくろかたちのしほれ行此よをみせて秋風そ吹
大かたのみにたにとなる秋かせを古き枕に誰か聞らん
おほつかないつちよりきていつくにか行らん鐘の夕暮のこゑ
雨となる涙はわれに先立てなきよすゝめぬ夕暮もなし
かりそめに我こし後も数しらすかはるあつまの人そかなしき
かしこしとおもふ心の誰ならんみは主もなき幻にして
いとはしよかたみにとなる風なれや空しきむねにやとる思は
かゝれとてたかたらちねの撫つらん尾花かもとに[illegible]かみ
夏虫の火をとるよりも武士の道をおもふはおろかなるらん
あさましな亂てのよは秋の霜にうけかたきみを散らぬもなし

旅十首

みにかへむと思ふ人の行衛をもきかぬ計のさかひかなしも
つえとたにたのめる人もなき老の坂の東にみそよ[illegible]ぬる
[illegible]清むおはなかもとのみのはてを思へはちかきむさしのゝ原
終に行道のこなたのやすらひはたかみか旅のやとりならぬを
いつまてか故郷人の捨を舟思はぬいその浪をたのまん
おもへたゝすまぬ人たにあるものを忍はしみにはなれし都を
忍へたゝもとのさとりの[illegible]をも住ぬはしらし九重の空
よにかはる都のよろつ心をも住すは誰か思ひしらまし
亂たる都のたれと思ふにも笠かたふくる人そかなしき
歎かしよ一の塵もみにそはて前のよ出したひの行末

釋教十首

行まゝにまかする法の舟のかちとろもさはりなるらん

あをとちて心ひとつに尋すは誰かはしらん法のまことを

をのつから迷ふもおなし道なれはさとらぬ人もなき此よ哉

地水火風にかへして後やたゝなしとおもひし身をも忘れん

くらきよの空にはなてろ箭さきよりあたらぬ物は御法之けり

大空をたゝ我ものとおもふ哉むなしき法をわかつ心は

さま〲に色もかたちもなき法をわけすは誰かよをも救ん

のほりては峯にさやけき月なからくたれは水をてらすかけ哉

わか佛たうとしといふ人のみは迷へる末のよにおほくして

民を撫ものをころさぬ心より外に悟を誰もたつぬな

右百首和謌備卿法樂。且爲慰羇中病心。午卒爾兩三日之間吟之。特依述心懐。顚狂謌廉言。憚外見多之。則令奉納者也。

應仁第二暦寅則中八日　桑門釋心敬

右百首心敬眞跡之本ヲ以校正了

天保六二十六　忠璐

軒梅　和歌草山

ふかきよの梅のにほひに夢覺てこす袂あへね軒の春風

松契齡

よゝくちぬ心の種のあひ生はしろや住のえ高砂のまつ

若菜

岡のへや梅のかこめの初わかな摘袖したふ花の朝かせ

見戀

消のほるかけは雲ましたのまれすほのみろ月のよその夕くれ

田家

いろ〱の春の小草の花そまつ秋にはかへすしつかをやま田

遠村煙

なかれ洲にを舟漕すて煙たつ入えのむらにかへろつり人

山寺

寺なれやひはら杉むら立双ふ木陰をのほる峯の通路

連峯霞

ひとりくる春とは見えす朝霞袖をつらぬるをちこちのみね

簷松

吹くたろあらしやみれによはろらんふもとの軒を埋しら雲

納涼

岡のへやをちこち人も日さかりは猶過かての杜の下かけ

行路梅

紅は色もすさまし一重にそ哀もとまる梅の下かけ

山家

住はやなとふ人まれに水清く湧ふりたる山の下いほ

懐旧

朽てさへわするゝ草は生るよもなきなや数く古き枕に

春雨

哥枕のしろ衣花にかせいとふ方なき春のむら雨

杜鵑

わたつみの浪やうつせみこゑ〳〵にさはく昔の杜の下かせ

早秋

此夕きり下葉も涙にはなくれておつる秋の初かせ

千鳥

楸散沖のこしまのむらちとりさはくとみるやしたはなるらん

寄木恋

よそにのみうつろひはてん色もうしつゐに折られぬ峯の櫻木

花下逢友

花さけは草枕にもうとからすくらせる春の野への旅人

寄月恋

しれかしな恕うつ秋のよるの雨夕の桐のはの落るとき

江春曙

ふかきよの月に四のをすゝめるえもしはしなにはの春の曙

雨後花

をちこちの花にうき雲あしはやく門比苦よ春のむら雨

遠村烟

たえ〳〵の道も煙も日くるれはむすほゝれ行末の山本

柳風

朝みとり空はかすみて降雨の柳にはるゝ庭の春風

立名恋

ならへ人つらきものいひさかの山峯のあらしはこゑ立ぬよに

旅宿衣

衣てにつゐにうつさぬすみそめの夕の山は我やともなし

古寺鐘

薪こるをちの山人いそくえ夕くれはこふ鐘のひゝきに

朝花

山さくらいろもにほひもうちしめり花に散さぬ春の朝露

花雲

浪かりこゝろは花に行引てむなしきみねにきゆる白雲

無常

わか心たゝ花のみを幻とおもひわくれはみたれてそちる

花下送日

夜をへてもよゝの巌の床の夢さめしな花の峯の松風

寄花別恋

衣〳〵の色みぬ夜はの道芝に行衛かすめる花のかもうし

苗代

あさ露のなかへの早田わきてまつみとりそ高き春の苗代

戀枕

千代かけて契をきてし夢なれや舊き枕のさよの秋かせ

寄玉戀

今はたゝまことの玉のをゝよはみ袖のちしほは替よもなし

山家花

花さけは三府も七ふも所せき山櫻戸の苔のさむしろ

夕木枯

はらひかれ夕暮□て雪白し松のは山の木からしのかせ

花形見

あさな／＼なこりの露の玉のをもしほるゝ花に夜はの春風

春夕

花のかけ人もかへりて夕暮のいろもあはれもふかく成ぬる

春夢

さくらかりかりねの夢もみし花もまきれて明るのへの松かせ

尋殘花

尋ぬへき山ちの花はうつろひて我身をしほる春風もうし

寄鳥戀

よの中のうつろふいろに花鳥もかたらひはてぬ春の衣／＼

暮春月

櫻かはあさけのつゆの月をたに青葉にさそふ春の山かせ

山家煙

わかいほのけふりそほそきあさ市にはこふやしけき峯の椎柴

被忘戀

おもひたに出すや心つらきをは忘られぬよのためしある身を

行路市

さと人はかへるおのへの市や形かりねのやとに誰たのむらん

卯花

浪やとる椎のわかはのうら風も猶白妙の峯の卯のはな

郭公

一こゑは青葉を出て青はより色こきをのゝ山ほとゝきす

杣木

つらしとや直き木を切そま山のすそわのを田に鷹の鳴らん

寄夢戀

をさゝ原かりなる夢の中道もたえてふるのゝよはの秋かせ

卯花初開

夕月夜かすみも匂影なれや咲出ろをちの嶺のうのはな

寄舟戀

つみわけむかたもなきさの蚕小舟心つからのおもき歎きは

水郷早苗

棹さしてうたふ河長もろこゑにさなへ取之宇治の山さと

田家鳥

むら雀落ほなひろふさとの子の袂にさはく秋の山かせ

蚊遣火

かやりたく空にすゝけて夕月よ光かすめるしつか山さと

白遣火

あま小ふねこきちかふまも早鹽にこゝろひかるゝせとの浦風

行路夏衣

くろしとは君か御衣のかろきにもおはれぬ民の夏のあゆみを

夜聞鐘

をろつかさむなしき法を唱ふらしよふかきかねの遠近のこゑ

卯花

雲のなみ越ても消す岩かねによる白なみや岸のうの花

夕立

遠方にふりくる雲も足はやみ行人さそふゆふたちの空

急早苗

さなへ草老たるしつも行末の秋をうきみにかけて取らん

閑戀

玉たれもへたてゝかけし契さへかれ行こゑのおくふかくなる

往事夢

なにゝかはむなし心のうちに猶とまりてよゝの夢のみゆらん

曉觀念

去來こゝろの雲もさはかぬやおきゐる空の有明の月

鵜川

うかひ舟ちかき河せの石ふしもさはしる鮎につれておつらし

夏雨

天水をこほすことくに降雨ははるゝそ安き夕たちの空

夏竹

夏そなきさ枝きりすて竹のひに水はしらかす山の下陰

螢似露

螢かもなひくすゝきの末の露猶吹とかて過る夕かせ

照射

甲斐かねやさ山のともし影白しよこおりふせる鹿やなからん

篝火

ならひすむ賤ゝかひのうつりかも袖にうるさき旅のかり哉

顯戀

よせきてもつらき心の下草は猶うきいつろいそのしらなみ

不逢戀

衣〳〵にのこるはつらき命ともまたしらぬよにみをや捨まし

松風秋近

夕くれはみにしむいろの松の風誰にうかれて秋をそふらん

忍戀

忍山こゝろのおくや時雨らん下葉を袖の色にそめぬる

曉時雨

さよしくれうきたる夢は跡もなき枕の月に殘る雲哉

別戀

消れたゝなかきわかれの道芝もかくやはつらきしのゝめの露

懷舊

よの中はわたるそ更に早せかは去年をことしの夢のうきはし

苅萱亂風

朝のまはなひきふしつる露おちて末葉かろかや秋風そ吹

山家秋夕

おもひたく夕もつまきうき事を取あつめたる秋の山さと

釣舟

よの中は秋かせ吹と誰しかも名をすてふれに艫つるらん

居待月

まちわひぬ立出るやとの秋の空山のはしゐを月はいそかて

寄月戀

戀しさを又おとろかすゆふへ哉わすれすなから袖の月影

浪上月

しら浪のかけはさはきてあしのはの露にそふくる秋のよの月

立名戀

うきなのみよにはけたれて月に雲胸に烟のたゆるよもなし

江鵜

日くるれは入江を立て草かくれふしみのゝへにうつらなく之

秋田風

雁鳴て秋風寒し我やとの門田の柳したはちるころ

蔦風

うつの山つたのはもろき秋かせに夢路もほそき曉の空

秋霜

霜なれやれての朝けの花の紐みしかくとくる秋の日のかけ

遠擣衣

をちこちの末ははかれて草衣うつこゑなひく野への秋かせ

古郷雨

すみそめの夕の雨の故郷に誰にひいろの袖しほるらん

鶯

ふる雪にむすほゝれぬる鶯のなく音吹とけのへの春風

萩

花はみなうつろひはてゝ夏萩のをからに庭のもとあらぬしも

寄露戀

枯のこる草葉もつらし契しは末のゝ秋にかゝる夕つゆ

落葉

絶まなくさそふ風よりたゝ一葉心とおつる庭そ淋しき

橋霜

朝またきみれの梯かすむ之をちかた人に霜迷ふらん

閑居

友とせし心や山を出ぬらん眠にうつるのきのまつかせ

河邊柳

亂ぬる柳のかみのくし田川とくこそ水の春のあさかせ

山家夕

簷ちかく雲もかへらす鳥もねすこゝろや山の夕なるらん

旅宿

あさちふにくちなんのへの旅ねまておもふもかなし行末の空

旅宿時雨

ふかきよの夢の故鄕あれはてゝ雲しく山にもる時雨哉

寄矢戀

よはりてはむなしき空にいる矢よりたへすもおつるわか泪哉

忘戀

厭つる心をかけて忘れなは絹にしすゑを猶やたのまん

海路

旅にたゆたふ月も跡にうき枕にきゆる沖津白浪

椎柴

日かけさす霜の椎柴けふる也折たく袖や峯のしらくも

戀涙

ねにたてはよふかき衣に埋れておもふ心もいろやみえまし

海戀

みなうみやはや霧わたる舟のかち取返しみぬせとのうら風

祈戀

祈てもつゐになひかぬ神かせや我世間の秋とふくらん

月照網代

くらきよりくらきを思へあしろ守わたらん河は月もやとらん

寄獸戀

堪わひぬとらふすのへのはけしさもかくやはつらき中の秋風

冬雨

神な月秋の紅葉の一しほに雪けの雲をそむる雨哉

冬蓮

み山風木のは吹まく音たえて苔のむしろに月そ更行

冬雪

春ふかき山櫻田とみるはかり雪にむもるゝ秋のいなかき

曉千鳥

霜さゆる袖の河原のさよ千とり誰かかへるさの涙とふらん

里竹

竹のはゝ雪にしかれて朝またき簷は數そふをちの山もと

遠戀

わか袖そあふせにとをき石ふしの住はかりなる河はなかれて

松契齡

友とみん雪まの二葉さしくみに千代を顯はす松の行末

松積年

庭ふりぬ松の下葉のちりひちもよゝの塵の山となるらん

寄心戀

草木にもかよふ心の色そめは君かあたりや秋ふかきやと

梅久馥

よろつ春庭のよもきか島かせにちきりてにほへやとの梅かゝ

磯浪

あらいそやたひ行人もいそくえめなみおなみのひまを數へて

納涼

すみ染の袂にうすき深山かせ月にすゝ吹ゆふ暮の空

曉露

跡もなきよもきか末の露寒み有明の庭や月の故郷

埋火

あま衣袖もぬれ木を埋をく床のうら風猶こほるらん

松作友

ちきりをく庭のま砂のこまつ原千代のかけみん末そはるけき

山花遲

むら柴やすゝ吹風の音寒て花には春をつけぬ山かな

名所海

夕浪やしほせは海もあさちふにうら風よはきいなみのゝ原

松鶯

つたひきて双ふ都の門松をわか山さとゝうくひすそ鳴

暮春月

消わひぬ春の末のゝあさつゆに花も落そふ有明のかけ

鹽屋煙

夕煙うすき萠か戀わひてたれよをうらにもしほやくらん

依花待人

春とたに問こぬ中のかはるせにわたせな老の夢の浮はし

花形見

にほへ猶花のきぬ／＼跡もなきあさちか庭に殘る春風

夕花

山櫻花に夕を告きても我いろしらぬ入あゐのかね

〔右權大僧都心敬集以東京帝國大學圖書館本校合〕

續群書類從卷第四百四十七

和歌部八十二

道堅法師詠草

詠五十首和歌

初春待花

雪のうちに思ひしよりも春の色をまちえてをそき山櫻哉

山路尋花

山風の春さむけなりけふは先帯の花にかへりてや見む

山花未遍

ふかゝらぬ春に先咲花もあれと猶傍は峯の白雲

朝見花

梢より色つく露の袖かけて花に涼しき庭の朝風

遠村花

いひしらぬ片山もとの家櫻うへても誰か花をみつ覽

故郷花

咲花のけふのあらしに身をなして忍ふも悲しふる里の春

田家花

庭さす苗代かきに折そへていふかひもなき花の枝かな

古寺花

世のうさも又やあひみん初瀬山いのりしみちは花そふりしく

花似雪

梢にてうつろふまては見し花の色にあとなき庭の白雪

河邊花

くれ行はたゝ春風の音羽河おとに聞ても花そ悲しき

深山花

なれぬれはみやまの花も思ふ覽あはれうきよの春やいかにと

暮山花

えもいはすさすかに花の宿なくは歸らんとせしを山のはの月

古溪花
花ゆへや風のつらさもうきよとて又住すてん谷の下いほ
關路花
春よたゝ霞の關の朝ほらけ花にとゝめし心のみかは
霧中花
春風の朝たつ峯に思ひおきし花の行衞もいかゝなりけん
湖上花
朝霞さゝなみちりて行水のうみ吹風も花の香そする
橋下花
わすれすや花に露ちる夕暮も紅葉のはしの秋のむら雨
花下送日
吉野より外にはいてす日數へて同しかけなる花はみれとも
庭上落花
月そとふ庭の松風心せよ我ために社花もおしまれ
暮春惜花
いまはとてうつろふ花の木かくれにあるをみるたに春風そ吹
初秋月
思ふにもかきりそしらぬ今よりの秋に心は月の行すゑ
月前草花
月は猶あかぬ物かな萩に露おはなに風のなひく夕くれ
雨後月
雨おちし桐のひろ葉の露のうへに心もおかすやとる月哉
松間月
伏見山松より遠の河風に浪も聞えて月そふけゆく
山家月
なにことのうきをもいはぬ山にても月みる秋はこゝろ社あれ
月前竹風
袖の露やもろくはならん呉竹の葉分の月に秋風そ吹
野徑月
里遠く今は成けり長（夜イ）月の月の行衞をとふとせしまに
澤邊月
すむ影もふかきえに社よるの月水草かくれの秋の澤水
月前聞鴈
契あれやかならす秋のよなかされ月たにすめは鴈もなくなり
海上月
秋ふかくなるとの海のはや汐におち行月のよとむせもかな
月照瀧水
あかなくに何をか月のくまの河清きなみかく瀧の白玉
杜間月
夕露の杜のしめ縄くるしくもおもふ木の間の月そかゝれる
月前秋風
雲霧もおよはぬ月のうへまても誰をいさめて秋風の吹

江上月

哀なりよる鳴鶴の聲ひとつすめる古江の水の月かけ

月前虫

露の間とみるもはかなしなく虫の命のすへのよもきふの月

月前聞鹿

月に社涙のこされ野の鹿の獨あるくれはしのひてもみつ

旅泊月

浪風の今朝の船出にさはらすはかゝる所の月を見ましや

月前草露

消さらは花にも契れ朝かほの青葉におもき露の月影

籬月

しら菊の籬の月の霜を置ていかなる色に心うつらん

暮秋曉月

わかれては又もこんよの秋の月殘る寢覺そ猶たのまれぬ

寄雲戀

うはの空に思ひたちしは契にもあらぬ身なからまよふ浮雲

寄風戀

思ひいつるはたより成へき山風をはけしとのみも歎つるかな

寄雨戀

あさましやくもる計の心をもはらはん袖のかゝるむら雨

寄草戀

しられぬやおもふあまりの草に社消ぬ露とは身を歎とも

寄木戀

もらしても色なかるへきことの葉や花さかぬ木の陰にくたさん

寄鳥戀

我ねをもなかすは終に鶏のこは時しらぬ物や思はん

寄嵐戀

淺からす契りし暮の松をたにとはすはあらしいかゝ吹覽

寄松戀

契こそ遠津海原行舟のほのかなりしもあかぬ名殘よ

寄琴戀

おもへ君歎くはゝることはりもたゝ佗人の宿に社あれ

寄衣戀

いとはるゝ身はいとひても墨染の衣のいとの亂れてそおもふ

詠三十首和歌　北野法樂

釋　道　堅

早春霞

四方の空霞の色もかはらねと春は都の雲井成けり

澤春草

水さむき野澤のあしの下もえもましる枯葉の春の朝かせ

曉梅

梅か香もよふかくうつる有明のかけさへ袖にもれやあふらん

花満山
さそふ風もおよはぬ里の梢まて花社かゝれ嶺の白雲

江上暮春
春もけふかへる浪路の同しえにわかとも船もこきや別れん

渓卯花
光なき谷の心を卯花の咲かくしてもてらす路かな

野郭公
夕日さす野中の杜のほとゝきすやすろふ影を誰かいそかむ

雨後鵜河
鵜飼船かゝりはやさせ夕たちの水のにこりはまよふ流に

月前萩
月にさへみへぬ心をいたつらにうこかすものか萩のうは風

夕虫
はかなくて残る思ひのいつまてと身を夕霧に松虫のなく

海邊鹿
我か秋になるとはしらて白波のよるなく鹿やねれて立覧

閑庭薄
かれやらて軒の葛葉は恨ともなを夕風の薄一むら

名所擣衣
衣うつ音や外山にしからきの里はよふかき月の遠方

朝寒芦
朝な〳〵ほなみも氷とち添て汀さひしきあしのむら立

深夜千鳥
ふけぬともよろこそ月の友ちとりあけてうきねは誰に恨ん

故郷雪
今日わきて思ふに路も残りけり雪より先のよもきふの宿

聞聲戀
いかならん同し岡へにくれ行をまつとはきかぬ風の便よ

稀戀
あふよとて七夕はかりまちみるもいつかは人の秋の行する

増戀
さりともと命かけてし夕暮をけふは頼のなき心地して

怨戀
兎に角につらきか中の思ひには誰ことはりもなきよ成けり

被忘戀
取かへす物にもあらは俤を今まて残すかたみならめや

旅行
我も行てをしそみつろかへる山ありとたのみし道のまことは

旅宿
旅のよはこゝもかしこも我やとゝ思ふかたとて行もとまらす

旅泊
舟人もそことはさゝし沖津浪風の心によるのとまりは

山家松
山風よ靜に老のかきりなも松のかけとはいふへくもなき
山家橋
うきて猶世にわたる路と見えもせは跡な絶れ雲の梯
山家苔
岩のうへの苔の衣を昨日ともけふともしらで身そふりにける
寄神祇祝
神代より人いやすきにたのしむも心つくしや道と成けん
寄水懷舊
年月のはやくもうつる行末にとまらんかけやいさらゐの水
寄雲述懷
誰も社思ひのほらめのとかにておさまる雲のうへかうへまて

詠三十首和歌　春日社法樂

早春鶯
又さえん嵐もしらす春の日のひかりにむかふ鶯の聲
朝霞
日いのほる山成けりな紅のふかくもにほふ朝霞かな
夕梅
夕まくれまつ人ならぬうつり香に袖もおとろく梅の下風
庭春雨
眞砂しくふかさあさゝも庭にみえて宜あなみゆく春の雨哉
見花
色も香も思ふにさすか限あれはむかし今とも花なやはみん
聞子規
ほとゝきすねてもやまたん一聲は夢にまさらぬ小夜枕して
五月雨久
はるゝかと見えてもしはし打そゝく小雨ほとふる五月雨の空
水邊螢
下水に見えしは消て芦の葉のそよ空たかく行螢哉
遠夕立
ゆふ立ははるかにみえし一むらの雲のみなにてはやきほふ之
樹陰納涼
立よりしほとは夏の日いつのまの袖より秋にならの下露
草花露
露ならぬ心、露よ花よとて花の千種にくたく秋かな
雲中雁
またれしは幾重の霧の雲井にもまきれん物か初雁の聲
野鹿
さなしかの秋ははてなき妻戀やいつくに聞も武藏野ゝ原
深夜月
おほえすつ霜も置覽秋のよの月に鶴なく松風の聲
山紅葉

花はいさ紅葉にたくふ色はあらし時雨てきえれ嶺の白雲

初冬時雨

我袖ははやくの秋を初時雨ふりにし物と冬や來ぬらん

河氷

絕すゆく水も何をか思ひ河冬は氷に結ひかほなる

連日雪

都にも山とそつもるめつらしと見しやいく日の峯の白雪

浦千鳥

啼ねをもそへさらめやは浦千鳥あら磯涙の身をくたくよに

夜神樂

いく度の霜をか君にかさねましかはらすうたふ榊葉の聲

忍戀

もらされは思ひしらぬもことはりを人にかこたん泪とはなし

不逢戀

いつのよに生れてとたに定はや此身の契よし遠くとも

待戀

こぬよとて恨もはてす頼てもふかき心のひくにまかせて

遇不逢戀

しのふなよ消ぬは消ぬ命かは何そはもとの露の契を

恨戀

ことはりはさすかに知やしらすともまつ一ふしは恨てを見ん

曉雲

雲しろく月影きよし出てみよ我よはいつか曉の空

夜夢

憂ことはなとかみしかき夢ならて明かたきよにまよふよの中

羇中燈

昔さとの便のふみを巻かへしあかぬ旅ねのやとの灯

山家嵐

おもふには月日過ぬと山里に住はあらしの身をやしほ覧

社頭祝

若葉さす松を見るにも春日山恵をそ思ふ神は知覺

詠三十首和歌

春

浪の色に花をうつして水の上のゑしまの梢春風そふく

こゝろにもあらぬ日數を花に馴て都に思ふ春そすくなき

かへりこん春とは人に契れとあはれみやこの花も咲らん

つく〳〵と思ひくらして咲花のけふの盛にみぬ春もなし

契置も我か偽の後の春思ひ侘てや花にわかれむ

夏

月のこる山ほとゝきす忍ねもこゝろあるへき松の朝露

いつかたに聞きかさらん春夏のさかひかすめる山ほとゝきす

またて聞人も寝覺の有明にことはりかほて鳴時鳥

秋

今宵誰船濟とめん三保か崎月もおき行秋の汐風

夕月の出しほも遠く引弓の濱のしら洲にまとひをふせん

よの中はかゝる物かな雲もなく照月かけに秋風そふく

秋の露かゝるよまては我はかりうきをもとはん蓬生の月

なかめても同し空とはなくさまて泪よいかにふる郷の月

冬

夜や寒きわら屋のあし火たく島の浪よる松に雪は降つゝ

わけきても道とはしらす谷も峯も深きを埋雪の梢に

おく山の千尋の雪の梢をもわくれはわけつ杉の下道

戀

もれぬへき泪を今は誰か爲もせかぬ袖とてくたしてやみん

あちきなくむなしき空の俤や身はそふものゝこひしかるらん

我戀は夕の雨にふく風の色社みえね雲そしくるゝ

哀また人にうからんむくひをも此よにいかて思ひ絕まし

露霜の身も消わひてあかすよにとはす語の閨の秋風

戀しなはさすかに人のよをうしと思ひしらんも猶そかなしき

おもひ侘ぬ終の情を見る人もはしめうかりし心はかりは

雜

船渡すみちもくるしき八橋にあらぬくも手の恨つる哉

吹風の空にさこそは思ふ覽おやの路にも我をつたへよ

夢の内のゆめまち侘ていつ迄か旅のよつらき旅寢をやせん

思ふ社遠きもうけれ行となれは我路ならぬ海山もなし

都やはうきよもれたる宿ならん身を忘ても歎きな哉

旅衣いく度きてもやと毎に馴ぬ習のうき身成けり

神もしれ人と成よのまよひゆへ祈るも例うきも習を

詠二十首和歌

立春雲

天つ日の霞をいてゝのとかなる國の八雲も春や立覽

殘雪

きえて社ふるもみるらめ埋し雪を梢の山のした庵

山家梅

たか春よそこともいはぬ梅かゝに山路わすれて人や住けん

歸雁

ゆくもをしかへ覽路は我も思ふ哀はかなき春の雁金

旅春雨

そてぬれて古鄕人は思ふともいさまたしらしやとの春雨

水邊春月

汐やかぬ水のうみへの夕霞見るめはしらす月そうつろふ

尋花

花ならは同しなかめもいかな覽此明ほのゝ峯の白雲

花隨風

はる風のさそふならてはちる花の根をかくす友やなか覧

見花思昔

遠きよのあたくらへせし花よりもこその櫻にかへるはる風

暮春

はかなくて身には思はぬことはりの外にくるゝもおしき春哉

不逢戀

よるへやは有磯のゆくえおほ船の泪のみほにこかれ侘つゝ

祈戀

あふことのいのるによらは神代より後の人やは戀にまよはん

別切戀

又いつといひなくさめんことの葉もあらぬ心のみえし物哉

契戀

たのめ置んかはる心の僞はとてもしられぬ人の行衞に

恨身戀

うきをしも思ひしらすは身のとかをさてたにあらて歎侘つゝ

旅宿夜夢

ちあれは同し旅寝の人やもし我思ふかたの夢もみつ覧

曉望

雪消ぬ山のふもとの松もあれと遠きしら洲にまよふ春風

山家水

住とならは水のおとする石のうへ木の下露のかゝる所を

述懐

なにとかは世にもおもはん徒になからへけんはおしき命を

寄道祝言

行末の道のいつくにわかすとも直なるのみはよにも殘らん

點者姉小路相公

永正六年閏八月十五日當座 三條西前內大臣家

空の色も今宵一しほ時雨せし後の葉月や照まさる覧

まつ空にはやくもいてゝくる雲をいそくや遠き山のはの月

いひやらんかた社なけれすむ空は四方の嵐の秋のよの月

あかす思ふその海山の秋もたゝ都の月の行衞成けり

松浦かたもろこしかけて思ふにも浪路へたてし月の行末

あくるよのかきり有ともかへらてや暮を待みんむさし野の月

ふかきよの宿をはいてゝ我なから行かたしらぬみちのへの月

小鹿なく月のふもとの小松原くもらぬ空をゆく嵐かな

花薄みたれ乘たる虫の音も袖よりあまる露の月影

山かけはこゝろや住と大空に賴むいくよも月を社みれ

月をさへ老の泪のふる里にうらみてぬれは雁もなくゑ

かゝる身の夢を忘てみる月に露の侍やなかきよの床

消てよに見さらん後の秋の月おもへはかなし空のうき雲

つく〳〵とおもへは月にふかきよの心もしらぬ涙落つゝ

新中納言 公條 正月元日詠歌十首の和答

釋　道堅

氷ゐし志賀の浦波春立や音羽の瀧の音まさりゆく

山の端は嵐の雲の色なから明て霞る松の一むら

とけて行音も聞えて谷河のうへはつれなき雪の下水

梅か香も同し枕にかくる夜を獨やしたふ鶯の聲

花咲はたくれん色もうしとてや兼て亂るゝ青柳のいと

下もえは思ふあたりの草葉にもいかゝ色つく露をみせまし

あはれとは今みん人の傳にてもうきみのつらき程は知まし

柴の戸の哀いかにとゝふ人にこたふることはよ社つらけれ

山高みつれにあらしのすむ月に心をくたく滿なくもかな

袖の浪枕の月の沖津洲による啼鶴の霜はらふ聲

聖廟法樂

雪中鶯

いつれ先いそきし聲そ鶯の谷より出る雪の下水

行路梅

ゆきつれて風のあとなき梅かゝを又木の下にかへりてそとふ

春月幽

はるやあらぬふかき垣ほの夕露もこほれて霞よもき生の月

嶺上花

さそへとも花の盛は強面てひとり空吹峯の春風

河欵冬

思ひ河せくともなみの岩根よりあまりて落る山吹の露（花イ）

寄雲戀

まよふとて誰か心にかけてみむ月より後のよはのうき雲

寄鳥戀

まちあかす枕につらきためしをは我未しらぬとりのはつ聲

寄關戀

あけは又いつともさゝぬ逢よはをさらに岩戸の關守もかな

曉述懷

何ゆへの涙もしらぬ寢覺さへ老は枕のうくこゝ地して

社頭祝

ちりうせぬ色をもそへよ姫小松ことの葉もりの神のまに〱

永正十一年十月十五日夜於前内府家當座十首

初冬時雨

冬きぬといかに時雨も染つらん空のみとりの色かはるまて

河上落葉

山河の水も落葉に成にけり梢は風の柵やなき

殘菊

うつろふをふかくもみすは哀たゝ霜にふりたる庭の白菊

池水始氷

夜をふかみ袖の氷の下風もかよひて寒き庭の池水

野寒草

露をたに何にかけてか分し野のかやの枯ふに殘る夕風

曉霜

置添る枕の霜よ消はてん世を社誰も思ふ寢覺に

冬月

さえ侘てねられぬまゝにあかすよを月はみるやと山風そ吹

山家冬朝

ふかゝらぬ心や見えん柴の戸を明て悲しき峯の白雲

冬夜戀

ならひこし我獨寢のうきねをもしらぬよとこにおしや鳴覽

冬祝

霜雪のふかき色よりあらはれて後の幾よを松のことの葉

住吉社法樂

浦霞

浦風はよるのもしほの煙にも立つゝきてや今朝霞覽

柳風

山もとの日影の霜のふる柳絲きかたえに春風そ吹

述懐

住の江の(やイ)よの浪ならて行ことのかきりにたにも哀かけなん

文龜三年侍從大納言家着到千首中に

早春水

むすふ手の雫もけさは氷ゐて關の清水に春風そ吹

故郷霞

何はかり思ひもわかん古郷の霞はしらぬ春の隔を

求若菜

うちむれて日影尋る朝霜に若菜摘野は遠さかりつゝ

谷殘雪

とちはてし谷の柴屋の春の色に初てむかふ峯の白雪

鳴鶯

ことのはの花も咲らし數鳴の路にきこゆる鶯の聲

彌生の頃政爲卿播州細川庄へ下向のあらましきこえけるを尋まゐらす消息のおくに

誰袖に春を添て(つれイ)か印南野の梢ゆかしき花の下道

秋の風またてもかへれあかし潟おかへの月は名殘有とも

思ひたつ雲井には又かへるさの道を心にまかせてやみん

返し

色をしる心をつれはいなみのゝ花の下みちひとり行とも

あかし潟岡部の月の秋迄も身をは頼まて行空はうし

思ひ立雲井はろかに君か代のおさまるみちはいともかしこし

永正元年七月二十九日宗祇法師第三回追善とて侍從大納言勸進五十首の中におのへの鹿

いかに見し松さへあかぬ夕霧にたへておのへの鹿は鳴覽

永正二年七月廿九日おなしき月忌とて侍從大納言

勸進

閑中燈

思ふことおはれなき身の誰世にもこの曉の鐘は聞覽

大永五年十月濃州下向のとき曇華院とのへ詠進之

賴こし君か袂を重てや雪のみやまの風もふせかん

綾の小袖を添られて御返し

重ねてもかひもあらしの烈しさをふせかんほとの袂ならねは

あるをみるたに

やみの中にあるをみるたに月草に移行よはくまなかりけり

檜原

薄霧のふもとの檜原くもるとも只秋風の峯の月影

詠百首和歌

聖廟法樂　一夜詠

春二十首　道堅

音羽河

春や今朝みれ立越しとし浪もかはる音羽の谷の河風

玉嶋河

白浪の玉しま河のあさ氷いつとけ初めて霞立覽

高砂

春立とよはゝん聲も高砂の峯にこたふる松の風かな

春日野

誰爲とおもひわかても春日野の雪まの若菜けふやつまん

三輪山

春のくるしるし計を三輪の山杉の一むら立霞哉

葛城山

佛にあけ行く雪の葛城や霞のまゆにまよふ頃哉

手向山

鶯の聲も誰か爲手向山春のゆくてもさはりやはある

伊勢海

伊勢の海や清き渚の春の色に霞る浪の行衞しらせよ

志賀浦

さそはれぬ花もこの頃さゝ浪の色にやむせふしかの浦風

三嶋江

みしま江やつのくむあしの下水も枯葉の風にむすほゝれつゝ

鹽竈浦

しほかまの煙なれつる夕煙かすみの月にいかゝ見ゆ覽

宇津山

分くらしうつの山風うつゝともみぬかたたとる春のよの夢

あしや里

立まよふあしやのさとの夕霞花にやとゝふ行衞のみかは

吹上濱

ちる花を吹上の濱の白浪にまかふもつらし沖津鹽風

由良御崎
はろの日の由良のみさきに舟漕て遠くも浪の花をみし哉
忍山
暮て行春をはいかゝ忍ふ山風にしられぬ花は有とも
水無瀬河
わきて見は此さとひとも水無瀬河山本かすむ花の下道
大淀浦
うつり行浪に心は大よとの恨かねてもかへるはろかな
田籠浦
のとかにて田籠の浦風たゝぬ日も又ちりかゝろ藤浪の花
末松山
年越し空もほとなくみろか内にかはろや春の末の松山

夏十首

大井河
大ゐ川いせきによとむ春の色も浪間にさらす夏衣かな
篠田森
立ぬれて誰か聞覧ほとゝきすしのに信田の森の下露
猪名野
郭公又やはたのむ慾すてしいなの丶小笹かりにあふよを
御裳濯川
神風やみもすそ川の浪枕心すゝしき旅にも有かな

伊香保沼
菖蒲ひくいかほの沼のいか計うき身はなかきねをも鳴らん
天香久山
このほとの月日もいはし朝朗五月雨つゝく天の香久山
大江山
露をたれ幾野にわけん大江山越行かたは夕たちの跡
難波江
なには江や芦のしけみの下くゝろ音にも近水の秋風
美豆御牧
かりのこすみつのみ牧のまこも草生行まゝにしほれんもうし
松浦山
身の秋や松浦の山に行としの中はをしたふ波も越つゝ

秋二十首

初瀬山
はつせやま河音すみてくろゝ日の影よりむかふ秋の初風
龍田山
薄霧の立田の山の木のまより先色かはろ秋の初風
須磨浦
暮渡ろ須磨の浦船をひ風に早くも出てみゆろ月哉
宮城野
袖ぬれて木の下露にやとりせは物や思ん宮城のゝ原

水莖岡
水莖の岡の葛葉は恨とも月待ほとの秋の夕暮
小倉山
あま雲の小倉の山になく鹿やよそにつれなき妻も侘らん
宇治川
河音も誰か枕にかくたく覽秋風寒きうちのやまかけ
常盤山
袖の色もかほるときはの杜の露かゝるをみすは秋やうらみん
三室山
時雨こしみむろの梢いかな覽この山陰も秋風そ吹
高圓野
たかまとの小野の萩原分來ても我すり衣色にやはみん
伊駒山
時雨ては紅葉やすらんいこま山みつゝ行衛の空なかくしそ
生田池
誰か思ふ生田の池にゐるをしの聲もあはれにふくるよの月
清見關
清み潟沖ゆく月の跡まては誰をかとめん波の關守
武藏野
なをさりの袖たに露はふる里を秋立初し武藏のゝ原
伊吹山
さゝ浪や鳰の浦かせすゑはれていふきのとやま月たかくみゆ
更科里
おもふにも今更しなの秋のみかたえてよ渡る月の宮人
白河關
露の身もいつさそはれん秋の風思ふみちなる白河の關
野島崎
もゝ草のゝしまか崎の夕風に秋なき浪の花もちるゝ
明石浦
別てはいつくの波にあかし潟うらすむ月にかよふふな人
阿武隈河
なみのまも猶せきかへせ又いつかあふくま川の秋のしからみ

冬十首

清瀧川
水上のやまもくもらて清瀧や木の葉おち行末の白浪
小鹽山
をしほ山ふもとの野邊の夕霜に寒き空吹峯の松風
住吉浦
すみよしの浦の濱松雪白し里とふあまの袖やさゆ覽
交野
ふりにける片野のみゆき今はとも誰とひ出て跡をしたはん
田簑島

雪にきる田簔のしまの夕わたりそれや誰ともみえぬ里人

有乳山

あらち山嶺にこりしく雲も雪もいくえかはれぬ日を重ぬらん

浮島原

色かへぬ松をみるたにかなしきをけさ白雪の浮島か原

安達原

霜さゆるあたちか原のしらま弓しられぬ色もをしき冬かな

稲葉山

なけかしな今かへりこん春をのみ松はいな葉の山ふかくとも

鏡山

かゝみ山終にくれ行とし毎にもとみしかけのかへる物かは

戀二十首

伏見里

さゝ竹のふしみのさとのかり枕しきもならはぬ袖の露けさ

霞浦

思ひ立こゝろの末もおほろけの霞の浦にまよふ舟人

岩瀬杜

おもふ事いはせの杜のいはすとももろき木葉の色やみゆらん

筑波山

いつよりか君に心を筑波根のしけき歎の露かゝりけん

袖浦

浪こゆる袖のうら風立名をも思ふかたにはよる舟そなき

益田池

くらへみよ我そますたの池水にふかさもしらぬ袖の涙よ

高師濱

あた浪の高師の濱の夕ちとりおもひしつまもかよひ絶つゝ

阿波手杜

人心はけしゝ見つるけしきよりさてやあはての杜のこからし

志賀須加渡

あはれとはおもふ心やしかすかのわたり館つゝかよふ舟人

濱名橋

戀わたる濱名のはしの夕しほにさすか心のひくはみえつゝ

磯間浦

貝ひろふいそまのうらのあま乙女ほさぬ袖とて誰にみせまし

守山

木のまよりに身しむ月は守やまのうきかり枕とふ人もかな

佐野舟橋

絶にけるさのゝ舟はしいかさまに思ひ渡りて身を寵らん

淺香沼

名殘とて何かはおしきいたつらにかへる淺香の沼のれぬなは

松嶋

かきりさへ浪にいつまて松嶋やをしまぬ命あふにかへすは

緒絶橋
ぬる玉の緒絶の橋に行かよふ夢をはかなみ猶や頼ん
三熊野
あさくもや人は心をみくまのゝ浦の濱ゆふいくへならぬを
鳴海浦
哀とも思ひかけすや沖津波よそになるみの恨はてゝは
二見浦
歎ゆく二見の浦の二みちや風の小筵浪の手まくら
名取河
涙にや身はうもれ木の名とり河さらはこのよに朽はてもせて

雑二十首

吉野河
よし野河河音遠く行水のあをねか峯に月すみわたる
鈴鹿河
我こゝろとゝめはてし鈴鹿河せきもる涙も行かへるらん
富士山
我そたゝふしの高根の雪みんと思ふことのみよそにつもれる
還山
別越しみちにや我もかへる山ありてよの中定めなければ
天橋立
袖ぬれて宿とふ松の夕波に見しよも遠し天の橋立

飛鳥川
うかふせそ猶頼まるゝ飛鳥川けふまてのよに身はしつみても
鳥羽山
秋風のいをもりすてし人はとへとは山松の雪のあけほの
辰市
うきにふる身をかへてさへ思ふかないへにある名は辰の市人
吹飯浦
なみ風も吹飯の浦のかち枕いかにしてかは夢を頼む
布引瀧
白妙の雲ゐに見えて山姫の心をさらす布引の瀧
長柄橋
絶る名をのこさんよりは橋柱ありしなからの道を立はや
玉河里
やとりてもいかゝいほ寝ん小夜風の霰くたくる玉河の里
生浦
思ふ事ならすは憂身朽もせてよにある名をやおふのうらなし
小夜中山
かきりあれはこれより越る峯もなしけに月雪の小夜の中山
嵯峨野
わひはてゝいまは我身のさかのにや消へき露の行衛求めん
隅田川

思ふ人や有明の月の角田川渡を遠く先（船イ）さして行

餝磨市

市人のおもき荷をおふ馬はあれと侘てしかまのかちよりそ行

若浦

終に我よるへとまては頼ねとかよひ馴たるわかの浦人

相坂關

下りこしみちを思へは行すへのいかなるよにかあふ坂の關

御津濱

君か代にあふみの海の静なるときやれかひもみつの濱松

〔此册圖書館本載前內府(西三條實隆)和答百首〕

此百首之題依難得風情。往年以來未詠焉。爰去年冬道堅法師爲聖廟法樂一夜詠之。忽有神慇之子細矣。件草一見不堪吟興。試綴連々。早卒初一念。同類等不能引勘之。風體言語頗□。忽不可佗見。

永正十年正月廿日

〔右道堅法師詠草以帝國圖書館本及圖書寮本加校合畢〕

續群書類從卷第四百四十八

和歌部八十三

和泉式部續集

ひさしうをとせぬ人の歳冬につけてひころのつみ
はゆるせとてをこせたれは
後拾遺　とへとしも思はぬやへの山吹を許すといはゝおりにこんとや
かたらふ人のゐなかよりきたりときくに
ありやともとはゝこたへん誰いへにうき世中にあるも有身そ
つねにうき人のうきをしらぬにやなといひたるに
うき身をししらぬ心のかきりしてたひ〳〵人を恨つる哉
雨のふる日なみたのあめのそてになといひたる人
に
後拾遺　見し人に忘られてふる袖にこそ身をしる雨はいつもをやまね
おなし人のひとやりならすからてはいきたる心ち
もせすなといひたれは
ありとても今は恋まぬ中なれはひたすらなくはなかれとそ思
八月十余日のほとに夜半計に
まとろみは吹驚ろかす風の音のいとゝよさむに成をこそ思へ
九月はかりにものにまうてゝとまりたるにかたは
らのつほねにすこし人のこゑのすれはしきみのは
にかきてをかす
うき世には嵐の風にさそはれてこし山川に袖をぬらしつ
陸奥国へいひやる
たかゝりし浪によそへてその国にありてふ山をいかにみる覧
二月斗に返事せぬ女におとこのやるとてよませし
新古今　あとをたに草のはつかに見てしかな結ふ計の程ならすとも
かよひける人のすこしまとをなるころその人にな
たつ人のもとになまみるやるとて

かりにこし蜑もかれなてうらさひて只みる儘に已かしわさそ
いといたうあれたる所になかめて
語らはん人聲もせすしけれともよもきのもとはとふ人もなし
ひさしうあらすやあらんとおもふ人のものいひそ
めてたえてあはぬに
〔玉葉・萬代〕つらからん後の心を思はすはあるにまかせて有へき物を
いまこの二十余日のほとにたのむるをいかてさま
てはといひけれは
〔後拾遺〕君はまたしらさりけりな秋のよの木間の月ははつかにそみる
人とものかたりしてゐたるほとにまた人のきたる
をたれも〳〵かへりたるつとめて
〔玉葉・續詞花〕なか空にひとり有明の月をみて殘るくまなく身をそ知ぬる
田舍なる人のもとよりかやうにはおもはしといひ
たるに
我はかりたれかなけかむ都にもそこにも人はおほからめとも
雨ふる夜きていそきかへる人に
まつ人のなき夜（身イ）なりせは閑すとも雨降めりといはまし物を
とまらぬものとなみたにてしりにけんといひたる
に
とゝまれと思ふといかて知にけんおしけなく〳〵おつる涙を
あるみやつかへ人のもたるあふきにはきなとかき
たる所に
露はらふ風もやあるとみやき野におふるこ萩の下葉ともかな
あやしき事をおもふころ
〔玉葉〕ぬきすてんかたなき物はから衣たちと立ぬる名にこそ有けれ
たのめたるほとえまたしゝぬへしといひたるおと
こに
〔續後撰・萬代〕逢事をありやなしやも見もはてゝ絕なん玉のをゝいかにせん
まつ人あるころかとのまへより夜ふけつゝ人のい
くをきゝて
わかやとをかれやしなまし人をまつ人はよそにすきて行にも
の心うくおほゆる比物に詣てしはしありてかへ
る日ゐたるはしらにかきつく
すてゝましうき身なからにいきたらは故鄕人もいかに待みん
をとせんといひたる人のをとせねは
わかとにたかはさりける心哉わするなとこそいふへかりけれ
二月つこもりかたに風のいみしう吹に
花ちらす春の嵐は秋かせの身にしむよりも侘しかりけり
春比蟬のからのものゝなかにあるを
けふりなん事そ戀（ガイ）しき空蟬のむなしきからもあれはこそあれ
廢なる所にて月をみて
〔新續古今・萬代〕春の夜の月はところもわかね共猶すみなれし宿そ戀しき

おとこ六月許女のもとへわか紬ひめやといひにや
るを見て
わかためはかけてもいはす夏衣なけの哀もいはすやあるらん
上東門院
宮にはしめてまいりたりしに祭主輔親かむすめた
伊勢大輔
いふといふ人をいたさせ給たりしと物語なとして
局におりてたいふのもとに
伊勢大輔集
おもはんとおもひし人と思ひしにおもひしともおもほゆる哉
返し
同上
君をわかおもはさりせは我を君おもはんとしも思はましやは
月あかき夜人のきて消息いはせたるに
よそにのみ雲ゐの月に誘はれてまつといひぬるきたるたれ之
ものおもひはんへりけるころ
後拾遺
かるもかき臥井の床のいをやすみさ社ねさらめかゝらすも哉
せきてらのうし佛に
聞しよりうしに心をかけなからまたこそこえね相坂の關
道長
入道殿法師にならせたまひてのころもかへの物具
たてまつらせたまふとて
新古今
榮花
から衣花のたもとにたちかへよ我こそはるのいろはたちつれ
とありけるをきゝて大宮にたてまつりける
榮花
ぬきかへんをそ悲しき春の色を君かたちける心とおもへは
大宮の宣旨の返事
榮花
たちかふるうき世の中は夏衣袖になみたもとまらさりけり
つねの事とはいひなからいとはかなうみゆるころ
三月晦比に
世中はくれゆく春のすゑなれやきのふは花の盛とかみし
こゝちいとあしうおほゆるころ
我にたれ哀をかけんおもひてのなからん後そ悲しかりける
[illegible]
宮の四十九日誦經の御そものうたする所にこれを
八月十八日
みるかかなしき事なといひたるに
うちかへし思へはかなしけふりにも立をくれたるあまのは衣
又人のもとよりおもひやるらんいみしきなといひ
たるに
藤衣きしよりたかきなみたかはくめる心の程そかなしき
同所の人の御許より御手習の有けるをみよとてを
こせたるに
なかれよるあはとなりなて涙河はやくの事をみるそかなしき
しはすの晦の夜
後拾遺
なき人のくる夜ときけと君もなし我住里やたまなきの里
夫木
一日人の許に
聞人やいはゝゆゝしと思ふとてかすむ雲ゐを見にのみそみる
又おなしやうなる事思ふ人に
よそなから心のうちのかよはぬに思ひやらるゝ人のうへかな

長保五 七日雪のいみしうふるにつれ〳〵とおほゆれは
君かためわかなつむとて春日野の雪まをいかにけふは分まし
君をまたかくみてしかなはかなくてこそは消にし雪も降めり
三月つれ〳〵なる人のもとにあはれなる御事なと
いひて
すかのねのなかき春日もある物をみしかかりける君そ悲しき
おなしわたりの人のもとに
數ならぬ身をはさ社はとはさらめ君とはなとかかけて忍はぬ
南院の梅花を人のもとよりこれみてなくさめよと
あるに
よにふれと君にをくれておる花はにほひもみえす墨染にして
つきせぬ事をなけくに
續拾遺 萬代 かひなくてさすかにたえぬ命かな心を玉のをにしよらねは
雨のいみしうふる日いかにとゝひたるに
いつとても涙の雨はをやまれとけふは心の雲またになし
なをあまにやなりなましと思ひたつにも
新拾遺 すてはてんと思ふさへこそ悲しけれ君に馴にし我身と思へは
思ひきやありて忘ぬをのか身を君かかたみになさん物とは
新拾遺 今はたゝそよそのことゝおもひ出て忘る斗のうきふしもなし
萬代 かたらひしこゑそ戀しき俤はありしそなから物もいはねは
めにみえて悲しき物はかたらひしその人ならぬ涙なりけり

袖のいたうぬれたるをみて
千載 おしきかなかたみにきたる藤衣たゝこの比に朽果ぬへし
月ひにそへてゆくゑもしらぬこゝちのすれは
しぬ計ゆきて尋ねんほのかにもそこにありてふことをきかはや
又ほとへておはしましゝ所をものゝたよりにみて
思ひきや塵もゐさりし床のうへを荒たる宿となしてみんとは
冬の夜ねさめして
かたしきの袖はかゝみとしほれ共影にも似たる物たにもなき
ひをけにひとりゐて
夫木 むかひゐてみるにもかなし煙にし人をたけひの灰によそへて
つく〳〵とたゝほれてのみおほゆれは
萬代 はかなしとまさしくみつる夢の世を驚かてぬる我は人かは
ひたすらに別し人のいかなれはむれにとまれる心ちのみする
いかにせんとのみおほゆるまゝに
かすならぬ身をも歎のしけゝれはたかき山とや人のみるらん
なくさめにみつからゆきて語らはんうき世の外に知人もかな
なそやこは石やいはほの身ともかなうき世中を嘆かてもへん
あさましや世は山河の水なれや心ほそくもおもほゆる哉
萬代 身はひとつ心はちゝにくたくれはさま〳〵物のなけかしき哉
やまふきのさきたるをみて
われかなをおらまほしきは白雲のやへに重なる山吹の花

雨のつれ〳〵なる日

おまてらす神も心ある物ならは物思ふ春は雨なふらせそ

［夫木］我袖はくものいかきにあらねとも共うちはへて露のやとりとそ思

月日のはかならすくるをおもふに

すく〳〵とすくる月日のおしき哉君かありへし方そと思ふに

かしらをひさしうけつらてかみの亂たるにも

［夫木］物をのみみたれてそ思ふ誰にかは今はなけかんぬは玉のすち

ならはぬさとのつれ〳〵なるに

悲しきはなくれてなけく身なりけり涙のさきに立なましかは

［萬代］いつこにと君をしられは思ひやるかたなく物そ悲しかりける

［同］身よりかく涙はいかゝなかるへき海てふうみは鹽やひぬらん

たえしとき心にかなふ物ならは我玉のをよりかへてまし

おほつかな我身は田子の浦なれや袖うちぬらす浪のまもなし

君とまたみるめおひせはよもの海の底の限はかつきみてまし

思へとも戀しき物はしりなから人のたつねていらぬふち哉

身をわけて涙の川のなかるれはこなたかなたの岸とこそなれ

［夫木］あかさりし君を忘れん物なれやあれなれ川の石はつくとも

［萬代］あけたてはむなしき空を詠むれとそれそとしるき雲たにもなし

わすれ草われかくつめは住吉の岸のところはあれやしぬらん

つかはせ給ひし御すゝりをおなし所にて見し人のこ

ひたるやるとて

［續古今］あかさりし昔のことをかきつくる硯の水は涙なりけり

おほんふくぬきて

かきりあれは藤の衣はぬきすてゝ涙の色をそめてこそきれ

御ふみとものあるをやりて經紙にすかすとて

やるふみにわかおもふとかゝれねは思ふ心のつくる世もなし

御はてに經なと供養して

今もなをつきせぬ物は涙哉はちすの露になしはすれとも

御忌日に

めのまへに涙にくちし衣手はこその今日まてあらんとやみし

なに心もなき人の御ありさまを見るもあはれにて

わりなくもなくさめかたき心哉こゝそは君かおなしことなれ

［寶弘元］正月一日人々の事いみしてものいふをきゝて

きく人のいめはかけてもいはて思ふ心のうちはけふも忘れす

七日

思ひきやけふのわかなもしらすして忍ふの草をつまん物とは

子日の松を人のもてきたるをみて

年もふれてみにのみそみる万代をまつ引かけし君しなけれは

うくひすのなきつるは聞つやと人のとひたるに

［萬代］いつしかとまたれし物を鶯のこゑきかまうき春もありけり

むめのはなをみて

梅のかを君によそへてみるからに花の折しる身とも成かな

手をれともなに物思ひもなくさまし花は心のみなし成けり
三月晦かたに
誰にかはおりてもみせん中〳〵に櫻さきぬと我にきかすな（續千載・萬代）
櫻のいとおもしろきをみて
花みるにかはかり物の悲しきは野へに心を誰かやらまし
四月一日
かの山のどやかたるとほとゝきすいそきまたるゝとしの夏哉
草のいとあをうおひたるをみて
わか心夏ののへにもあらなくにしけくも戀の成まさる哉
世の中をひたすらにえおもひはなれぬやすらひに
われすまは又うき雲もかゝりなん吉野の山もなのみ社あらめ
又ひとりとに
命あらはいかさまにせん世をしらぬ虫たに秋はなきに社なけ（千載）
又
侘ぬれはゆゝしと聞し山鳥のありときくこそうらやまれぬれ
又
なけやなけわかもろ聲に呼子鳥よはゝこたへて歸りくはかり
御禊のありし見あはすへき事なんあるとて人のこ
ひたろやらんとてもとむるになけれは
もとむれと跡かたもなし蘆たつは雲の行衞にましりにしかは
見てゝやるとて
根もたえすあしのおふらんかたをみ
世の中をおもひはなれぬへきさまなきゝてとなる
事なきおとこの我になすてよといひたるに
類あらはとはんと思ひし事なれとたゝいふ方もなくそ悲しき
かたらふ人のをともせぬにおなしおほん思のころ
なくさめん方のなけれは思はすにいきたりけりと知れぬる哉
又人に
さるめみていけらしとこそ思ふらめ哀知へき人もとはぬは
田舍なる人にかくものおもふよしなといひやりて
いかてかは便を只に過すへきうきめをみてもしなすとならは
二月はかりにまへなるたちはなを人のこひたるに
たゝひとつやるとて
とるもうし昔の人のかにゝたる花橘になるやと思へは
おほん服になりしころ月のあかきはみきやとある
に
なくさめんとそ悲しきすみ染の袖には月の影もとまらて
つれ〳〵のつきせぬまゝにおほゆる事をかきあつ
めたる歌にこそにたれ　ひろしのふ　ゆふへのな
かめ　よひのおもひ　よなかのねさめ　あかつき
のこひ　これをそかきわけたる
ひろしのふ

ひる忍ふをたにことはなかりせは日をへて物は思はさらまし
かきろらん命いつとも知すかし哀いつまて君をしのはん
君をみてあはれいくかに成ぬらん涙の玉は數もしられす
やみにのみまとふ身なれは墨染の袖はひるとも知れさりけり
諸共にいかてひるまに成ぬれと流石にしなぬ身をいかにせん
日をふれと君を忘れぬ心こそ忍ふの草の種と成けれ
きみを思ふ心は露にあらねともひにあてつゝも消かへる哉
君なくていくか〳〵と思ふまに影たにみえて日をのみそふる
かくしあらはしにゝをしなんひとたひも悲しき物は別成けり

ゆふへのなかめ

山のはにいる日をみても思ひ出る涙にいとゝくらさるゝかな
（玉葉）今のまの命にかへてけふのをあすのゆふへをなけかすもかな
（萬代）夕暮はいかなる時そめにみえぬ風の音さへあはれなる哉
たくひなく悲しき物は今はとてまたぬ夕のなかめなりけり
をのかしゝ日たにくるれはとふ鳥のいつ方にかは君を尋ん
（萬代）夕くれは君か通路みちもなくすかけるくものいとそ悲しき
ひのやくとなけくなかにもいとせめて物侘しきは夕ま暮哉
忘れすは思ひをこせよ夕暮にみゆれはすこき遠の山かけ
（新古今）夕暮は雲のけしきをみるからに詠しと思ふ心こそつけ

よひのおもひ

さやかにも人はみるらんわかめには涙にくもるよひの月かけ
不盡のねにあらぬ我身の燃るをはよひ〳〵と社云へかりけれ
（夫木）こぬ人をまたましよりも侘しきは物思ふ比のよひゐ成りけり
宵ことに物思ふ人の涙こそちゝの草葉の露となくらめ
いとへともきえぬ身そうきうらやまし風のまへなる宵の灯
月にこそ物思ふことはなくさむれみまほしからぬ宵の空哉
人しれす耳にあはれと聞ゆるは物思ふよひの鐘の音哉
悲しきはたゝ宵のまの夢のよにくるしく物を思ふ成けり
（万代）慰めてひかりのまにもあるへきをみえてはみえぬ宵の稲つま
（同）おきゐつゝ物おもふ人の宵の間にぬるとは袖のをにそ有ける

夜なかの寢覺

衣袖はくらきよなかのね覺にもさくるもしるくぬれにける哉
物をのみ思ひねさめのとこのうへにわか手枕そ有てかひなき
戀てなくねにたにねはや夢ならていつかは君を又は見るへき
いかにして雲と成にし一聲にきかはやよはのかくはかりたに
夢たにもみるへき物をまれにても物思ふ人のいをねましかは
（新古今　同代）ねさめする身を吹とをす風の音を昔は耳のよそにきゝけん
まとろまてあかしはつるをぬる人の夢に哀とみるもあらなん
いをしれは夜のまも物は思はまし打はへさむるめ社つらけれ
中〳〵になくさめかねつ唐衣かへしてきるにぬのみさめつゝ

あか月の戀

（新勅撰）住吉のあり明の月をなかむれはとをさかりにし人そ戀しき

こふゐみはとものなれや鳥の音に驚かされしときはなにとき
新勅撰詞花 夢にたにみてあかしつる曉の戀こそこひのかきり成けれ
よもすからこひてあかせる曉はからすのさきに我そなきぬる
我胸のあくへき時やいつならんきけははねかく鳴もなきけり
玉すたれたれこめてのみねし時はあくてふ事も知れやはせし
萬代 曉は我にてしりぬ山人も戀しきによりいそくなりけり
明ぬやと今こそみつれ曉の空は戀しき人ならねとも
わかこふる人はきたりといかゝせんおほつかなしや明暮の空
　宮の御服にてもの見ぬとしみそきの日人の車にそ
　れそときくはまとかととひたる君達のありけるを
　のちにきゝていひやる
其なからつれなき物は有もせよあらしと思はて問けるそうき
　みあれの日葵を人のをこせたるに
葵草つみたにいれすゆふたすきかけはなれたるけふの袂は
　月のあかき夜ほたるをおこせたる人のもとに又の
　日あめのいみしうふるに
新古今 おもひあらはこよひの空をとひてましみえしは月の光なりけり
　又雨ふりし夜ほたるをみて
かくはかりほたる光のおかけれは雨夜の月もまたれさりけり
　松の木にくものいかきたるに露のをきたるをみて
蜘蛛のいとゝはかなき露といへと松にかゝれは久しかりけり
　と見ゆるほとにきゆれは
夫木 はかなしや朝日待まの露をみてくもてにぬける玉とみけるよ
　やまとなてしこからのなとをみて
千載 見るに猶此世の物とおほえぬはからなてしこの花にそ有ける
かくはかりそほつる物はいつこにかからにもあらし大和撫子
　みやにてはやう見し人の物語なとしてかへりて扇
　おとしたるやるとて
夫木 浦さひて鳥たにみえぬ嶋なれはこのかはほりそ嬉しかりける
　正月一日人のもとに
とふ人そけふはゆかしき老ぬれはわかなつまんの心ならねと
　かものみちに詣てあひてかたらはんなといふ女の
　たれそと問にこと人のなのりをしたれはこの人も
　またさやうにいひしをかたみにそれときゝてのち
　にやりし
我に君をとらしとせし僞をたゝすの神も名のみ成けり
　梅花のあるをみて
萬代 霞たつ春きにけりとこの花を見るにそ鳥のこゑもまたるゝ
　かたらふ人の日來山寺に籠て還ていかゝといひた
　るに
なくさむる方もなかりつ詠やる山も霞にへたてられつゝ
　月のあかき夜むめの花を人にやるとて

新勅撰 いつれともわかれさりけり春のよは月こそ花の匂ひ成けれ

ひとりことに

玉葉 萬代 命たに心なりせは人つらく人うらめしき世にへましやは

たゝの梅紅梅なとおほかるをみて

梅の花かはこと〳〵ににほへとも色はいろにもにほひぬる哉

説經すとてそなたみきしになん心はよせたるとい

ひたりしに

遙なる岸なこそみれおまふれにのりにいてすは漕出さらまし

十二月はかりものそめさせて花やあると人にこひ

たりし二月二十日あまり許におこすとてはなとも

しき春かなといひたるに

さけとちる花はかひなし櫻色に衣染さて春はすくさん

心のつらきに山へも入ぬへしといひたる人に

かく計うき世をいとふ我にたにさそふ心はなきとこそ見れ

五月雨ふるゆふくれに

萬代 足曳の山時鳥われならは今鳴ぬへき心ちこそすれ

同月の十餘日に月のいとあかきに

みな月はこの下やみと聞しかとさ月もあかき物にそ有ける

心ちのなやましうおほゆるころ時鳥の鳴をきゝて

萬代 郭公かたらひなきてしての山こえはこのよの知人にせん

祭のかへさ見るに齋院の御車のうちに知たる人の

もとに葵にかきて

きのふけふゆきあふ人はおほかれとみまくほしきは君獨かな

まつりの日あるきんたちのまとのかたた渝車の輪に

つくりたるをみて

夫木 とをつらの馬なられとも君かのる車もまとに見ゆるこけり

いねておはんとおもひつゝとしころからうして四

月よひのほとにきてほとなく明ぬれは

とし月もありつる物を時鳥かたらひあへぬ夏の夜にしも

五月五日にある人に

かくれぬにおふる菖蒲の殘らぬに人のふるれそ悲しかりける

二月許みそを人かりやるとて

花にあへはみそつゆ計惜からぬあかて春にもかはりにしかは

又尼のもとにたらといふ物わらひなとやるとて

見せたらは哀ともいへ君かため花をみすてゝたをるわらひを

花のいとおもしろきをみて

風雅 おちきなく春は命のおしき哉花そこの世のほたしなりける

ひとへ山吹を見て

夫木 さもこそはふかき谷にはさかさらめ色さへあさきひとへ山吹

夜いもねぬに障子をいそきあけてなかむるに

戀しさも秋のゆふへにをとらぬは霞たなひく春の明ほの

よみはなのさきたるを見て

かへらぬはよはひなりけり年のうちにいかなる花か二度は咲
にはやなきのいとしろうさきたるをみて
夫木 にはやなきおりたかへるは長月の菊の花ともみゆる春哉
花のなかに柳のあるをみて
いかにして花のあたりをゆりすてん月のよりくる青柳の糸
春の夜くもりて月の見えぬに
くもらすは月に見てまし折人も花は夜のまもうしろめたさに
繪に野邊に雉のたてる所
夫木 かりのよと思ふなるへし花のまに朝たつきしのほろゝとそ鳴
なくなりたりける人のもたりける物の中にあさか
ほを折からしてありけるをみて
朝かほを折てみんとや思ひ飢露よりさきに消にける身を
ある人の返事に
はやからは猶せきとめよ涙河なかれてのなに成もこそすれ
かたらひし人の春のころ田舍よりきたりときゝし
にいひやる
あちきなく思ひこそやれつく／＼とたひにやゐての山吹の花
二月晦かたに物に詣つる道なる法住寺のさくらみ
んとていりたれは花もまたさかさりけりしりたり
し僧のありしとはするもなし
咲ぬらん櫻かりとてきつれともこの木のものは主たにもなし

おなしみちなりし所にいりてみれはそこのもまた
しかりけれは柱にかきつく
それまての命たえたる物ならはかならす花のおりに父こん
あふさかの關にていとくるしけれはやすむとてつ
く／＼とゐて
雲非まて心はゆけとあふ坂のせきこえぬへき心ちこそせね
もろともなる人のかへりなんといふに
とまれともゆけともいはて心みんなにのためなる相坂のせき
山しなといふ所にてくるしけれはやすむそのいへ
あるしの心あるさまにみゆれはいまかへさにさこ
えんなといひて
後拾遺 かへるさをまち心見よかくなからよも尋てはやましなのさと
かくてまたゝ（ウイ）てつきてはなさかさりけりなともろ
ともなる人のつれ／＼かりけれは
ときは山春は綠に成ぬるを花咲里や君は戀しき
あはれにおほゆれはてすさひに軒檻にかきつくひ
ところこもりていてなんとするに
うき世には猶かへらてややみなまし山よりふかき谷も有けり
返とて山科の家にいひやる
君ははや忘れぬらめとみかきれをよそにみ捨ていかゝ過へき
とき／＼見ゆる人のもとより松にふみをさしてを

こせたるに
まつ見てもまつは悲しき今はとて浪こす〳〵に成ぬと思へは
　おなし人さはるとありてほとふるよしをいひたれ
は
萬代 難波かたあしのをりはをゝし分て漕はなれ行舟とこそみれ
　あやしき事ありてにはかにほかへ行たりとてつれ
にせしまくらにかきつく
かはりゐるちりはかりたに忍はなんあれたるとこの枕之とも
　装束ともつゝみてをく革のをひにかきつく
續後拾遺 なきなかす涙にたえてたえぬれははなたの帶の心ちこそすれ
　よそ〳〵になりたるおとこのもとより位記といふ
　ものこひたるやるとて
哀わか心にかなふ身成せはふたつみつまてなはもみてまし
　怨するとあるおとこのこのたひなんわすれはてぬ
　るといひたるに
忘草つみけるたひと住吉のきしにこすまて波のたてかし
　ものよりきたりときく人のをとせぬに
きたり共いはぬそつらきある物と思はゝこそは身をも恨みめ
　ある人のもとに
千載 とも角もいはゝなへてに成ぬへし音に社泣て見せまほしけれ
　おとこの人のもとにやるにかはりて

後拾 おほめくな誰ともなくて宵〳〵に夢にみえけん我そその人
　かたらひし人の受領のめになりていきしきたり
　ときゝて
有やともとはゝこたへん誰ゆへとうき世の中にかくて有身そ
　かたらふ人のものいたうおもふころ
新古今 いかにしていかに此世にありへはかしはしも物を思はさるへき
　おほえぬ事とものきこゆるころ
春の日のうら〳〵見れと我はかりぬれ衣きたるあまのなき哉
　三月庭鶯のなくをきゝて
万代 哀にも聞ゆなるかな我宿の梅ちりかたのうくひすのこゑ
　おなし比夕くれの風のふくに
花さそふ春の嵐は秋風のみにしむよりも哀之けり
　おとこの女のもとにやるとてかはりて
ふしのねの煙絶なんたとふへきかたなき戀を人に知せん
　人のおひやあるといひたるに中のやれたる
ひきたらはかくつく物を我中は中〳〵おひの中にそあらまし
　蟬のからの物の中にあるをみて
煙なん事そかなしきうつ蟬のむなしきからもあれはこそあれ
　春雨のふる日
千載 つれ〳〵とふるは涙の雨なるを春の物とや人のみるらん
　人のをとしたるに

いにしへを忘れぬ人に哀わかかすまん空も見すへかりける

、かたらふ人のよにてよならぬ所をなんみてわひたるといひたるに

萬代
もとむれと巖はの中のかたけれは我も此世になをこそはふれ

かたらふ人の心ちをもく煩ひてこれをかたみに見よとてうたかきたる草子をみせたるに

忍ふへき命もしらてけふよりは君かかたみをみるそ悲しき

秋夜

おきゐつゝ忍ひそかぬる秋の夜は君とたにせし秋のね覺は

うらみんなと思人にあひたれはたれかつらさのなといふやうにけにおほゆる事もましれはものとにいはてのちにいひやる

とはりにおちし涙はなかれてのうき名をすゝく水とならなん

かへりをさらにせぬ女にやるとてよませし

たけからぬ涙のかゝる我袖になかるゝ水といはせてしかな

しはしほかにありて例の所にきたれは忍ひて人に物なといひし所のいたうちりはみたるをみていひやる

あふとのありし所をきてみれはさしも思はぬちりそゐにける

或男つねにはあらす更に隔たる事なくかたらはんなといひ契て後いかゝおほえけんひとまにはかくれあそひしつへき心ちなんするといひたるに

後拾
いつこにか立も隱れんへたてたる心のくまのあらは社あらめ

いかなるふみにかありけんかくとて

つく／＼とおつる涙の水莖にならはよろつを人はみてまし

世の中いとさはかしきころとはぬ人に

世の中はいかに成ゆく物とてか心のとかにをとつれもせぬ

おとこのもとに女の返事のふたつみつあるを見てやる

橋々をとふみかくふみふみみれは只身のうきに渡すなりけり

忍ひて人にものなといふやりとほかにいくとてさすとて

みはゆけとからをは爰にとゝむれはやりと口社留められけれ

山寺に籠たるをとかくするひのみえけれは

後拾遺
立のほる煙につけて思ふ哉いつまた我を人のかくせん

九月はかり物へゆく人きぬそむとてはなこひたるやるとて

あきゆかん旅の衣をいとゝしく露草にしもなとか染へき

或所に中將とて候人にかたらふ男いまはいかすと云て後に雨ふる夜いきたりときゝて

後拾遺
三笠山さしはなれぬと聞しかとあめもよにとは思はさりしを

冬比人のこんといひてみえす成にしつとめて

おきなから明しつる哉ともねせぬかもの上毛の霜ならなくに
　待人ある所門のまへより夜ふけて人のいくを聞て
我宿をかへやしてまし人のまつ人は誠に過て行之
　海つらに夜とまりて船なからあかして
千載 水の上に浮寢をしてそ思ひやるかゝれは鶴もなくにそ有ける
　攝津の國いくたのもりと云所にて
夫木 なにはめにいく田の杜の有けれはむへなからふと人も云けり
　いかゝさきにて
新後拾 我はたゝ風にのみこそ任せたれいかゝさきには人の行らん
　遠所に人待し比近く草の許に蟋蟀の啼をきゝて
萬代 わかせこは駒にまかせてきにけりときゝにきかする蟋蟀哉
　二月許人のたのめてこすなりぬるつとめて
よのほともうしろめたきは花の上を思ひかほにて明しつる哉
　いたう物おもひに風のふくころ
萬代 續後撰 みにしみて哀なる哉いかなりし秋吹風をよそに聞らん
　思ふとか云人のともすれはうち怨しつゝいてゝゆくかほかにてしぬはかりなんおほつかなきとあるに
今はとていくおり〳〵もおはかれはいとしぬ計思ふとはみす
　露より世のはかなき事もあるに
萬代 草の上の露とたとへぬ時たにもこは頼まれしまほろしのよか
　あちきなき草のみてくれは人の返事たえてせぬに
　いかなれはかゝるをといひたるに
月草のかりに立名のおしけれはたゝその駒を今はのかふそ
　たえなんとおもふ人のたちのあるをやるとて
かへせ共こはかへされす思へとも立にし名社かひなかりけれ
　久しくみえぬ人のもとよりひんなかるましくはこんといひて月のいりたるにきたる人に
いつこにかこゝらひさしくなかゐつる山より月の出て入まて
　かたらふ人のひさしうをとつれぬに
きゝはつる命ともかな世の中にあらはとはまし人はなきかと
　七月七日まつ人のもとに
そのほとゝちきらし中は昨日まてけふをゆかしと思ひける哉
　時〳〵くるひとすこしまとをになるころなまみろをその人の親屬たつ人の許にやるとて
かりにこし蜑もかれにし浦さひてたゝみる儘に已かしわさそ
　忍ひたる人きて雨のいみしうふるにかへりてぬれたるよしなといひたるに
後拾 かく許忍ふる雨を人とはゝなにゝぬれたる袖といふらん
　忘ぬるかなといひたる人に
わすれすや忘れすなから君をまた扨とややまん心見はさそ
　七月許人の許に

たれそこのとふへき人になもほえてみゝ〻まりゆく荻の上風

いといたうあれたる所をなかめて

みわの山杉にをとらすしけゝれとよもきの宿はとふ人もなし

きゆるまつかきり所やこれならん露とおきゐる淺ちふの宿

かたらはん・聲もせすあれにけるたかふる鄕ときて詠むらん

わすれにける人のふみのあるをみて

（玉葉 萬代）かはらねはふみこそみるにあはれなれ人の心は跡はかもなし

たのめたるほとをえまつましといひたるおとこに

逢事のありやなしやもみゝはてゝ絶なん玉のをゝいかにせん

いかゝはなゝうたかはしくおもふ人のなとせぬに

（萬代）なき身ともなにおもひけん思ひしにたかはぬ事は有ける物を

雨のいといたうふりける夜ゝのへいきけるみちに

やとおもふ人のきたるになしとてあはてつとめて

雨もよにいつち成らんふりはへてきたりときかは哀ならまし

くれにかならすといひたるおとこあさかほにつけて

今のまの露にかはかりあらそへはくれにはみえし朝かほの花

ひさしくはあはすやあらんとおもふ人のもとに物をいひそめてたえてあはぬにつれにくれは

（萬代 玉葉）つらからん後の心を思はすはあるに任せてあるへき物を

あはんとおもふ人いまこの二十日のほとにと賴むれはいかてかさまてはといそけは

君はまたしらさりけりな秋のよの木間の月ははつかにそみる

九月二十日あまりにあり明の月はみるやといひたる人に

ねられねと八重むくらして槇の戸はなし明方の月をたにみす

なほあるまくらにかきつく

かゝりきと人にかたるな敷妙の枕のおもふ事たにしらき

わかあやまちにてたえたるおとこに心ちあしうおほゆる比

ある程に昔かたりもしてしかなうきをはあらぬ人としらせて

かたらふ人なくならん事は忘れしといふをこゝちなやむころひさしうとはぬに

（萬代 續後撰）しのはれん物とはみえぬ我身哉ある人をたに誰かとひける

よのつねならぬちきりしてかたらふ人のなとつれぬに

忘らるゝ憂身ひとつにあらすともなへての人にいはぬと〱

おもひかけすはかりてものいひたる人に

（千載 續詞花）これもみなさそなむかしの契そとおもふ物からあさましき哉

いとさかなき妻もたりときく男のこゝになん[illegible]してゐたるといひたるに

おそろしき人のおまへと謹みてゐたらんさまのおもほゆる哉

ものよりきてかくなんといはぬ人に

誰にこの花をみせましわれおれは山子規そたにきなかす

ものにまうてぬときゝてたつれんかたもなき事と

いひたるを歸きて見ていひやる

いきてまたかへりきにけり郭公しての山ちの事もかたらん

はかなき事につけて男のうらみてたえなんといふ

に

（玉葉）（萬代）うけれともわか身つからの涙こそ哀たえせぬ物には有けれ

田舍なる人のもとよりわかやうにおもはしなとい

ひたるに

われはかり誰かなけかん都にもそこにも人はおほからめとも

そらをにつけてうらむる人に

かくそとて見せにやれとも我袖はたゝぬれ衣に成こそはせめ

雨のふりて返るになまれたかりければ

まつ人のなき身なりせは聞すとも雨ふるめりといはまし物を

（新古今）枕たにしられはいはし見しまゝに君にかたるな春のよのゆめ

人とはゝいかゝこたへんおほかたは君も忘れ我もなけかし

とき〳〵くる人疊あつう敷てをきたれといひたる

に

たまさかにとふの菅菰かりにのみくれはよとのに敷物もなし

過にしかたはたゝおほかたにて見し人のつらきに

（玉葉）（萬代）よこそ猶定めかたけれよそなりし時はうらみん物とやは見し

おもへともおもはすとうらむる人に

まこも草まことに我は思へともなをあさましき淀の澤水

ひさしうをとせて人のありしをたにしらしとする

とゝいひたるに

音せぬはなきなるへしと思ひしに有てはとはぬ今こそはしれ

雨のいたうふる夕暮に人のこんといひたるに

そのとにをひときてれし雨もよにふりてはいもか袖もぬれ南

忍ひたる人のとのゐするに紫のひたゝれをやると

て

色にいてゝ人にかたるな紫のねすりの衣きてねたりきと

おとこつとめてとまらぬものとはしりにけんとい

ひたるに

とゝまれとおもふにいかてしりにけんなをしと鳴〳〵落る涙を

いとあつきころあふきともはらせて外なるはらか

らとものかりやるとて

（後拾遺）はかなくも忘られにけるあふき哉おちたりけりと人も社みれ

七月一日

夜をかさねふきこむ風を思ふ哉木々のこの葉の落そむるより

七月七日こむといひたる人に

（玉葉）七夕にかして今宵のいとまあらはたちよりこかしあまの川浪

いとひかすとて

彦星のふなてしぬらんけふよりは風ふきたつなくものいと筋

物うらやみしてきぬへしといひたる人に

銀河またわたりくなかさゝきのはしたなくして歸りもそする

あやしき事をのみおもひて

ぬきすてんかたもなき物は唐衣立とまりぬる名にこそ有けれ

雨のいみしうふる日

山といへは憂身そむきにこしかとも同しき雨の下にそ有ける

或人のありやととひたれは

萬代　とふやたれ我はそれかはいか計うかりし世にや今まてはふる

正月朔日に雪のふるに

あら玉の色もかはらてふる雪は□

物なといひたるおとこのたえてのちあやしき事を

なんいふときゝていひやる

そはさてもやみにし物を中〳〵に忘れぬ事のうきをみる哉

みそきのまたの日女のもとへやるとておとこのよ

ませし

萬代　けふをわかあふひ共かなみる人のかさす其日は嬉しからまし

六月朔雨のいたうふるに

五月雨はさても暮にきつれ〳〵のなかめにまさる昨日けふ哉

人のふみのはしにおもはんなといひたるを見て

人しれす頼み渡るとしろらめやかけりし文のはしを見しより

或男のひとすちならすかたらはんなと云てをとせ

ぬに

うかりけむひとこそは忘られめいつらさま〳〵いひし契は

むかしかたらひし人の許に

それならぬ事も有へしいにしへをおもふにまつそ君は悲しき

いと久しくあはぬ人のもとより便なかるましから

んおりつけよといひたるに

たしかにも覺えさりけりあふとはいかなる時のをにかある覽

秋比はやうゆふくれにかたらひし人のきて物語な

とせしに日來へて云やる

いつとてもなかめしよそ増りける昔かたりをせし夕より

或女おとこ田舍にいきてなくなりたるをきゝてみ

にかへまし物をなとなけくをきゝて

逢事もなにのかひなき露の身をかへはやかへん露の命を

正月人の卯杖をおこせたるに

いのりける心もしらてつく〳〵とみのうつえとも思ひける哉

すむ所の梅花盛なる比ほかへわたるとて

玉葉　萬代　みる程にちらはちりなん梅花しつ心なく思ひをこせし

心にもあらぬ事にてほかへいくとて

萬代　我なから身のゆくかたをしらぬ哉たゝよふ雲のいつち成らん

旅なる所にて月を見て
春の夜の月はところも分かれともなを住馴し宿そ戀しき
荒たる所に月のもりたるに
かく計風はふけともいたのまもあはねは月の影さへそもる
夜ひとよやみあかしたるつとめて
すへなくてきえぬるをよとはかりも雪の朝に誰詠まし
世の中にへしなと思ふころおさなきこともののある
を見て
萬代
うき世をはいとひなからもいかてかはこの世のことを思捨へき
或男外にとまりて物嫌はしくな思ひそといひたる
に
濱風に舟なかしたるあまならてよもとはかりのとのうたかひ
かたらふ人のもとより今はむけにおもひはなちつ
るかさらにをともせぬといひをこせたるに
人やさも今やと思ふ濱衛我はまれにもとふをこそまて
七月晦日女のもとに始てやるとてよませし
花すゝきほのめかすより白露を結はんとのみおもほゆる哉
ひるまにまゐらんといひたるおとこに
汐のまもみえぬもの〳〵有けるは蟹のあまたにみせしとそ思
制する人もたる人のもとにおとこのきてみつけら
れてのゝしるを聞て
聞人もしつけからぬをあら磯の立よる波のさはき成けり
こむといふ人のそのひはこて又の日きたるに
樂みにきのふまてこそ惜みしかけふは我身はありとやは思ふ
とてやりつふつかはかりまつにをとつれぬに
さもこそはしぬともいはめいつしかと悦ひなからとはぬ君哉
そのほとゝたにいはむをきかんといふおとこに
續後撰
ふへきよの限をしらてその程のいつとちきらんとのはかなさ
とこなつ　ほとゝきす　あやめくさ　これを人のよ
ませし
はらはねと塵のをきふすとこ夏はちりも積らぬ物にさりける
萬代
わかやとゝまたれし物を時鳥きかぬ人なくきゝはてつらん
すさめねと心のかきりおひたるは人しらぬまのあやめ成けり
十二月人のもとよりよみにをこせたりし
雪
夫木
雪ふれは都のうちもよもなからみなしほ山の心ちこそすれ
氷
をとたかくたきりておつる瀧つせの水は氷もあへすそ有ける
冬山
夫木
ちりはてゝ一はたになき冬山は中〳〵風の音も聞えす
神樂
神山とさかきをさしていのる哉ときはのかきり色もかへしと

千鳥
今朝きけはさほの河原の衛こそ妻まとはせる聲に鳴なれ
霰
竹の葉にあられ降なりさら〳〵に獨はぬへき心ちこそせね
水鳥
けをさむみあしの汀もさえぬれは流るとみえぬ池の水鳥
十月あかつきかたにめをさましてきけは時雨のい
たうすれは
冬の日なみしかき物といひなから明るにたにも時雨成哉
ある所の御前にひともと菊のおもしろきをうへさ
せ給ふと人のいふをきゝて
花のうへをきくに心のうつる哉むへもくるなる名のみ立らん
八月はかり人のもとに
音すれはとふか〳〵と荻のはにみゝのみとまる秋の夕暮
かたらふ人のもとよりなてしこををこせてかゝる
□□たるはなはあらしといひたるに
まとかとくらへてみれと我宿の花の露にはなをたてぬめり
おとこのもとよりたまさかにもあはれといふにな
んいのちはかけたるといひたるに
とことはにあはれ〳〵はつくすとも心にかなふ物かいのちは
なつうちよりしのひて物に詣てやすむとて木のも
とにゐて
おかさりし中〳〵花のをりよりも立うき物は夏の木のした
人のよませしなみたのはま
我袖は涙のはまにあさりせしあまの袂になとりやはする
はこかたのいけ
白波のよるさ音のみ聞ゆるをあけはまつみんはこかたの池
をかはのはし
おり立てをかはの橋はわたれ共なにはたぬれぬ袖にそ有ける
やたのひろの
旅人の駒ひきなへてうちたてはやたの廣野もせはくそ有ける
くちきのそま
ひたゝくみいもと間をしつくられは朽木の袖は有かひもなし
四月許人のもとより郭公まつとて山里になんある
といひたるに物おもふ比
時鳥もの思ふ比はをのつからまたねときゝつよはの一こゑ
おとこのみたけさうしとてほかにゐたる日あふ
ひにさして
かさせともかひなき物はそのかひ〳〵しめの外なる葵なりけり
五月五日雨のいみしうふるひとゐとに
けふはなをあやめの草のねところも水のみ増る心ちこそすれ
六日このさうしするおとこのもとより昨日のあや

めもしらてすくしてなといひたれは
うたゝれにやかて淀野もみぬ人はましてなにてふ菖蒲やはしる
　詣つるほとになりて道のほときるへき狩衣なん様
　なる物ぬはするやるとて
うちかはし夜きるましきあさ衣はぬふも物うき物にそ有ける
　とてやりたれは狩衣をきよくうたるともよしとい
　ふをといひたれは
かり衣我によそふる物ならは袂よくしもあらしとそ思ふ
　はなたのおひの所〳〵にかへりたるをきかへてお
　とこのをこせたれは
馴ぬれははなたの帶のかへるをもかへすよとのみ思ほゆる哉
　和泉と云所へいきたるおとこの許よりさのゝうら
　といふところなんこゝにありけるときゝたりやと
　いひたるに
いつ見てかつけすはしらん東路と聞こそわたれさのゝ舟橋
　田舎なる人のもとに三月十余日の程にいひやる
まつこんといそく事こそかたからめ都の花の折なすくすな
　みな月の晦かたに六波羅の說法聞にまかりたる人
　の扇をとりかへてやるとて
夫木 白露にをきまとはすな秋くとものりに扇の風はことゝ
　雨のいたうふる日或男今始てかたらふ女の事ほめ
ゐたるをきゝて
見るまゝにおもひやのきの玉水をもらさぬ中と誰かしるらん
　ほかなるはらからのもとにいとにくさけなるうり
　の人のかほのかたになりたるにかきつけて
もし我を戀しくならは是をみよつける心のくせもたかはす
　十二月はかり雪のいみしうふりたる日野老のある
　をおやのかりやるとて
君かため求たる哉雪降はそことところともみえぬ山路に
　あつきのおものといふ物をひとりのおけにいれて
　おなしところ
夫木 かく計さゆるにあつきけのするは獨のおものなれはなりけり
　七月七日にいととうおきて
織女に心をなけは朝ほらけたゝわかとや露もをくらん
　おなしころいとをいとうたからひきてあをきかみ
　をすきのはにむすひつく
七夕によきもあしきもたれとてそ空にかけたるくものいと筋
　田舎へいくに或所より御こうちきなとたまはすと
　てみちの露はらふなとあるに
めにちかくせきはたもとも思ひやる淺ちか原の露もをとらす
　人のあふきに神のもりかきていのりつるかしるき
なといひたるに

いのりける心の程をみてくらのさしては今ぞ思ひ亂るゝ

　十二月許女のもとにいきてつとめておとこのよませし

うちわひて涙にしみしかたしきの袖の氷ぞけさはとけたる

　これも人にかはりて

きのふまてなに歎けん今朝のまに戀こそはいと苦しかりけれ

　あるやむごとなき人のゆへありと聞しめすむすめのもとに梅花つかはすをみて

花の香に心はしめりおりてみな〔はイ〕そのひと枝にみこそあられ〔かイ〕と

　櫻のをそくさくことを人のよむに

またせつゝをそくさくらの花により四方の山へに心をぞやる

　冷泉院のおはします南ゐのおまへの花を物のはさまよりみて

色ふかく花の匂ひも物こしにみつれはいとゝあかすも有哉

　院の御方の人々の居たる簾よりあらはにみゆれは

あらはにもみゆる物哉玉たれのみ〔春歟〕すかしかほは誰もかくるな

枝ごとに花ちりまかへ今はとてみちのすきゆく道みえぬまて

　四月朔比月のいとゝくいりぬるを人のよみしに

ほのみえて入ぬる月に天の戸の明はつるまて詠つる哉

まつにおもひ入とて歎く夏のよの月ぞ心は空になしける

　五月許雨もふりやみて月のさしてたるにあましたりのするをきゝて

空見れは雨もふらぬに音ぞするたゝ月のもる雫なりけり

　九月九日に菊をてまさぐりにして

おる菊も君かためにと祈つゝ我もすぐへき物と頼まん

　ほかなるこのなてしこのたれすこしたまへといひたるやるとて

なてしこの戀しき時はみる物をいかにせよとや誰をこふらん

　稲荷祭見る女車のありけるをその人なめりと或君達のいひけるをきゝて祭みる車の前よりおとこのすぐるほとにゆふにつけてさしつれ〔る歟〕

いなりにもいはるときゝしなきことをなけふぞ糺の神に任する

　返しにいみしうあらかひたれは

〔夫木〕神かけて君はあらかふ誰かさはよるへにたまる水にいひけん

　秋の夜いりぬへき月をなかめて

見るほとに心にとまる月なれとかけははるかに成もゆく哉

思はても寝ぬへきものを中〳〵に宵より月をみさゝましかは

　七月七日織女にかはりてまつころ草の露を始て見る

そのよひをまつもすへなし鵲の橋もわたらぬ通路もかな

風の音に秋來にけりと驚てみれは草葉の露もをきけり

　月のいとあかき夜初て女にやるとて男のよませし

人しれぬ心のうちもみえぬらんかはかりてらす月の光に
　近き所にかたらふ人ありとき〻て云やる
續千載
天河おなしわたりに有なからけふも雲ゐのよそに聞哉
　又同事かたらふ女ともか許に
織女にをとるはかりの中なれはなな渡らしなかさゝきの橋
　八日男の女許につ〻るとてよませし
いむとてそきのふはかけす成にしをけふ彥星の心ちこそすれ
　おとこの女のかりいきてえあはてかへりきてつと
　めてやるとてよませし
こゝなから戀はしぬ共そこまてはいかすそ絲て有へかりける
　にはかにいたくわつらふほとにきあひて見たる男
　のもとよりいとほしかりしとなといひたるに
ことならは哀とみましめのまへに淚の露と消まし物を
　おとこの女のもとにやるふみをみれはあはれ〳〵
　とかきたり
あはれ〳〵哀〳〵とあはれ〳〵あはれいかにか人をいふらん
　おなしおとこ六月にわかそてひめやと云歌の心は
　へを女のかり云やりたるをみて
わか爲はかけてもいはて夏衣なけのあせにもぬれすやある覽
　いとたうとき法師のきたなけなる帶をおとしたる
　をみて
法の師のときをきてける帶なれとつみふかけにもみゆる物哉
　今はたえてあはしなといひてのちもまたいきあひ
　て
忍ふれとしのひ餘りぬ今はたゝかゝりけりてふなをそ立へき
　おなしやうなる人に
人とはゝなにゝよりてか答へましあやうきまてもぬるゝ袖哉
　はらから田舍へくたるにあふきなとやうのものや
　るとて
おしけれとえやはとゝむる別路になくれてといふしるし計そ
　とき〳〵ふみなとをこするおとこのひさしうなと
　せぬに
玉葉
うきよりも忘かたきはつらからてたゝに絕にし中にそ有ける
　このたひはかりとおもふ人にあひてむねをしぬは
　かりやみてなりしもあはれなりしとなとかきてや
　る
續後撰
萬代
あふとは更にもいはす命さへたゝこのたひやかきり成らん
　陸奥と云所よりきたるおとこのまつ人のもとへは
　いかてほかよりかへるを聞てたひのきぬなとして
　やるとて女のよませし
旅衣きてもかはかりつらけれとたちかへりことおもふへき哉
　世の中はかなき事なといひて槿花のあるを見て

はかなきは我身なりけり朝顔のあしたの露もをきてみてまし
九月晦かたに物思ころ
白露をきゐつゝのみあるへきをいつちみすてゝ秋の行らん
月のあかき夜人のもとに
待わひてつけにやるとも君はこて宿に住らん月をこそ見め
秋のころめのさめたるに鴈の鳴を聞て
まとろまて哀いくよに成ぬらんたゝ鴈かねをきくわさにして
人のもとより對面のほとへぬるをおもふにいとあやしくなんなりにたると云たるに
ほのかにも見てこそやまめ誠にや戀する人のさまやしたると
おとこのもとよりみつからいかゝといひたるに
かけてみは（をイ）われはつかしく成ぬへし音にそきかん山川の水
物忌にてある所に月のあかき夜人のきたるにえあはて云いたす
中〳〵に雲井の月のみさりせは門させりともさはらさらまし
かたらふ人の山里になんいくと云たるに
そこもとゝ杉のたちとをなしへなん尋もゆかん三輪の山本
くれにこんといひたる男に
おほろけの人はこえこぬくみ垣を幾重したらん物ならなくに
雨のいたくふるに忍ひたる人のもとよりようさりはかならすといひたるに
ぬれすやは忍ふる雨といひなからなを夕くれは忘れやはする
人のもとより道にとゝむへきかたのなけれはたゝに聞事と云たるに
（萬代）いとゝしくとゝめかたきはひたみちの惜まれぬ身の涙之けり
五月はかりねぬなくさむといひたる人に
まとろまてあかすと思へは短夜もいかに苦しき物とかはしる
よひのまあひて物なといひたる人のもとよりつとめていひたれは
人はいさわか玉しゐははかもなきよひの夢路にあくかれに鬼
世にあらんかきりにさらに忘れしなといひたる人に
（下葉）程ふへき命成せはまことにや忘れ果ぬとみるへき物を
おとこのよへのほとにいとよくなんみてしといひたるに
今朝のまにきてみる人も有なまし忍はれぬへき命成せは
瞿麥につけて心かはりたりとみゆるおとこに
色みえてかひなき物は花なから心のうちのまつにそ有ける
八月はかりよひとよ風ふきたるつとめていかゝといひたる人に
（夫木）おき風に露吹むすふ秋の夜は獨ねさめの床そさひしき
日に一度はかならすふみををこせんと云たる人の

とはぬひしも心ちの終日くるしきまたの日とひた
るに
〔萬代〕かくやはと思ふ〳〵そきえなましけふまてたえぬ命なりせは
おとこのほかにとまりて夢にたにみえてあかしつ
るをと云たるに
みえぬまて眠むとのかたけれは我もはかなき夢をたにみす
かたらふ人にあひみてのちみそめすはといひたる
に
後まては思ひもあへす成にけりたゝ時のまを慰めしまに
いたうあはれたる所にて女郎花に露のをきたるを
見て
女郎花露けきまゝにいとゝしくあれたるやとは風なこそまて
女院の御まへに秋の花植させ給へりと聞日或人の
参給へりと聞にきこえさする
色〳〵の花に心やうつるらんみやまかくれのまつもしらすて
人のもとにきたりけるおとこかへるにや有けんよ
るきたるにあはれはつとめてわさとまゐりたりし
にうくなといひたるに
宵のまを荻の葉風のうらみれと吹かへさるゝ便とそ見し
よそ〳〵に成たるおとこの遠所よりきたるいかゝ
きくと人の云たるに

さ夜中にいそきもゆくか秋の夜を有明の月はなのみ成けり
九月はかりとりのこゑにおとろかされて人のいて
ぬるに
〔風雅〕人はゆき霧は笆に立とまりさも中天になかめつる哉
十月しくれするにつれ〳〵におほゆれは
花みつゝくらしゝ時は春の日もいとかくなかき心ちやはせし
物なけかしけなるを見て前にいかなる人の心をか
見ならひてといふ人に
さき〳〵になにかならはん今のとも物思ふとのあらは社あらめ
わつらふときく人の許に菊にかきて
かめ山にありときくにはあらねともおいすしなすの藥之
あまになりなんといふをしはし猶念せよといふ人
に
〔新古今〕かく計うきを忍ひてなからへはこれに増りて物もこそ思へ
世の中はかなき事なとよひとよいひあかしてかへ
りぬるつとめて
〔玉葉〕おきてゆく人は露にはあられとも今朝は名殘の袖もかはらす
おさなきちこのあそをみてわかこにせんと云人に
いとにくけなるうりのあるにかきて
種からにかく成にける瓜なれはそのあききりに立もましらし
あかつきに鳥の聲聞ていつる人に

いつしかと聞ける人に一こゑもきかする鳥の音こそつらけれ
よへは雨のいたうふりしかはいかす成にしと云たる人に
人ならはいふへき物をまつ程に雨ふるとてもさはる物かは
人のもとよりえいかぬ事なといひたるに
玉葉 なこそとは誰かはいひしいはれとも心にすうる關とこそみれ
物詣とて精進したる男たちなからきて扇と念珠とをおとしたるとりにをこせたるやるとて
いかてかはひろふ玉しもおちつらんあふきてふなは徒にして
三月許のよのあはれなるをみて
風雅 千載 物思ふにあはれなるかと我ならぬ人にとよひの月を見せはや
月のあかき夜人のきて消息いひいれたる
よそにみる雲ゐの月に誘はれてまつといはぬにきたるゑけり
はやうかたらひし女ともたちの近所にきてあるを見て
大方はうらみられなんいにしへを忘れぬ人はかくこそはとへ
そのかたとさしてもよらぬ浮舟のまたこきはなれ思ふ共なし
假借する男の無便をりにのみきてさりぬへからんをり云おとろかせと云に
難波かたおれふす風の芦のねのまたれぬ人をおとろかすやは
人のきて物なと云とくちに立よりたるにをともせねはかへりてつとめて
夫木 聲をたにかよはんとはおほ嶋やいかになるとの海とかはみし
物へいにし人のもとより今しはしいのちなんおしきいまはとく〳〵いくへしといひたる返事に
續後撰 たのむらん人の命は有もせよまつにたへたる身こそなからめ
世の中いとさはかしきころをとせぬ人に
世中はいかに成ゆくものとてか心のとかにをとつれもせぬ
冬比人のこんと云てみえてあかしつるつとめて
我宿をかへやしてまし人をまつ人はよことに過て行ゑ
二月はかり人のたのめてこす成にしつとめて
夜の程もうしろめたきは花のうへを思ひかほにて明しつる哉
十月しくれしたるつれ〳〵におほゆれは
花見つゝくらしゝ時は春風もいとかくなかき心ちやはせし
かたらふ人の久しうをとせぬに
玉葉 いかにせんいかゝはすへき世中をそむけは悲しすめは侘し
山吹の花いみしう咲たるをみて
一重つゝしはしみるへくさかはちりちらはさかなん欺冬の花
四月はかりつきは見るやさはゆかんといひたる人に
きたりともかひやなからん我みれは涙にくもる夏のよの月
春月のあかき夜いとゝしくいりふして

て人のよませし
此度はかきりとみるに音つれはつきせぬ物は涙なりけり
正月朔雪のうちふるをみて
梅はゝや咲にけりとておれはちる花こそ雪のふると見えけれ
月のあかき夜きたりときゝて人のかみをたゝふみ
のやうにむすひてをこせたるに
きたりけるかたも見えぬは雲ゐゆく月みて人のつくる成けり
十月物憐におほゆるに
めに近き折も有けりつねは猶よそのむら雲すくるとそ見し
人のもとよりよみてとありし
うきしま
いつくなる所をかみし我身よりまた浮嶋はあらしとそおもふ
すゑのまつ山
まとにやあたし心は有けるよ末のまつみよ波のけしきを
しほかま
鹽かまのうらなれぬらんあまもかくわかとからき物は思はし
まかきのしま
思ひやる涙しあれはめにちかきまかきの嶋の心ちこそすれ
よそなれとたえすなとするおとこの人かたらひた
りときゝて
いとゝしく今は限りとみくまのゝ浦のはまゆふいくへ成らん

人のもとより萬葉集しはしとあるをなしかきのも
とゝめすとて
うきなからなからふかたに有物を何か此世にしふもとゝめん
はらたゝしき事のありしかはなのかしゝふして風
のいたうふくにしもみえぬに
風の音もおとろかれまし終夜まろかまろねにねならひにけり
さみたれと云題を
千載 夜のほとにかりそめ人やしたり飯宿のまこもの今朝亂れたる
朝きり
夫木 みそきすとあさきりすてし程もなくけさは夜寒に風吹にけり
秋比おとこの久しくをとせぬに
中〳〵に荻のはをたに結ひせは風にはとくるをともしてまし
田舎へいく人に心ちあしき比
夫木 それとみよ都のかたの山のはにむすほゝれたる煙けふらは
我不愛身命と云心をかみにすへて
我を人なくは忍はん物なれや有につけてそうきもうきかし
れいあらは歎かさらまし定なき命思ふそ物はかなしき
見る夢もかゝる處はある物をいふかひなしやはかもなき身は
いか計ふかきうみとか成ぬらんちりのつみたに山とつもれは
野邊にいてゝ花みる程の心にも露忘られぬ物は世中
近く見る人も我身もかた〳〵にたゝよふ雲とならんとすらん

をしまれぬかたこそ有けれ徒にきえなん事は猶そ悲しき
はかもなき露をは更にいひをきて有にもあらぬ身をいかにせん
（類従續萬代）をゝよはみたえてみたるゝ玉よりもぬきとめかたし人の命は
（萬代）しはしふるよたにか計すみうきに哀いかてかあらんとすらん
幻にたとへはよはた頼まれぬなけれとあれはあれとなけれは
（萬代）過ゆくを月日とのみも思ふ哉けふともをのか身をはしらすて
　萩花盛にきたる客人の心はみなとゝめてなんきた
　ると云たるに
花によりとゝめけるをはをくれたる心とのみも思ひける哉
　人のふみをこせたる返事に
（萬代）たねをとる物にもかなや忘れ草枯なはかゝる跡もあらしを
　四月一日思様ありて
かはしてし衣はかへしむすひをきて露けゝ成と人はみるとも
　今は宮にもさふらはすと案内したる人に
ありとこそいふ計にはあらす共むけになしとは誰かいひけん
　たゝにかたらふ人の物へゆくに
いか計むつましくしもなくはあれとおしきはよその別成けり
　郭公のこゑ今夜聞たるつとめてかたらふ人のもと
　に
時鳥きかはやきくやとゝひてましいとわかとくねさめぬる（かイ）君
　これはひとりとに

子規ふるさぬこゑをいつしかと物おもふ人そ聞へかりける
　かみなる日妻のもとにていかゝと問たる人に
我爲といとゝ雲ゐになる神もまとにさけぬなこそおしけれ
　たゝにかたらふおとこなをこのよのおもひいてに
　すはかりとなんおもふといひたるに
かたらふにかひもなけれは大方は忘れなんともいふと社みれ
　なをかゝるすちの事とのみいふに
さきのよにさはかりこそは契けれわかとさまに思ひし物を
　年來頼かひなき人かくなめりとうらむるおとこに
　物思ころ
たのみけんわれか我にてあらはこそ君を君ともわきて思はめ
　おなし人返事をたにせぬと云に
起ふしになそや〳〵といはるれはたえすいらふる心ち社すれ
　春比雨のつれ〳〵なるに
雨降はもの思ふ事も増りけり淀の渡りの水ならね共
　かたらふ人のもとよりこゝちなんあしきしなは思
　ひいてよと云たるに
うきにかく今までたふる身にかへて君やはかけて我を忍はぬ
　堅根やむと人許に云たる人に五月五日いひやる
けふたにもひきやは捨ぬかくれぬに生る菖蒲のかたれ成とも
　同日忍ひたるに人に

けふとてもひきにやはくる菖蒲草人しれぬねはかひなかり身

つゝましき事あれは日來もいはさりつると云人に

萬代
つゝむとはいひにもいはて程ふれは只池水のたゆるとそみる

と云たる返事に人しれぬ心はたえすと云たるに

よそにたゝ花とこそみめたのみなは人ゐ根に成もこそすれ

四月晦日

たか里にまつ聞つらん郭公なつは所もわかすきぬるを

冬のはしめ

紅葉はやおつると思へと風の吹は涙もとまらさりけり

みやまへに雪やふるらん外山なる柴の庵に霰ふるなり

物へたてゝ尼のをこなひするをきゝて

かひなきはおなしみなからはるかにも佛に夜のこゑを聞哉

有明の月を見て

萬代
眺りあれはかつすみわふる世中に有明の月をいつまてかみん

秋の比たうとき事する山寺に詣たるに虫のこゑこ

ゑなけは

萬代
心にはひとつみのりと思へとも虫はこゑ〳〵きこゆなる哉

人のなくをきゝて

雲葉
よも山もけしきもみるに悲しきはしか鳴ぬへし秋の夕は

曉かたに瀧のをと聲に聞ゆれは

萬代
哀にもきこゆなる哉曉の瀧はなみたのおつる成へし

給に山寺に法師のおたるまへに日くれてきこりと

もの歸る所に

夫木
すみかそとおもふも悲しくるしきをこりつゝ人の歸こ由へに

山守宅の人のゐたるに

ともすれはひき驚す小山田のひたすらいれぬ秋のよな〳〵

八月はかりはきいとおもしろきに雨降日

おしと思ふわれてふれねとしほれつゝ雨には花の衰ふる哉

櫻花のいみしう散つもりたるをみて

櫻花思ひもあらすこのもとに散つもるともはかてこそみめ

祝の歌ともよむに

松竹

すみよしの岸のまに〳〵波たつる松の一葉に千代はかそへよ

年のはに生そふ竹のふしことにつきせぬたけのよをそこめたる

かたらふ人のをとせて日來山寺になむあると云た

るに

玉葉
獨やはみえぬ山路もたつぬへきおなし心に教くうき世な

三月晦に惜春心の文つくりて四月朔になりぬれは

そのつとめてのうたよむに

續千載 萬代
昨日をは花のかけにてくらしてきけふこそいにし春は惜けれ

夏の夜月を見るとて人〳〵あまたあるなかにいそ

[illegible]きたつほとに[illegible]

いつちとて念くなるらんいつこにも今宵は同し月をこそみめ
男のもとの妻あたりいみしうけらたつと聞に箏を
ゝやるとて今の人のよませし
（猶同）かはらしや竹のふるねは一夜たにこれにとまれる節は有やは
六月河原に秡しにいきたるに魚とるを見て
川の瀬につりする人の罪をさへはらひすてつるけふにも有哉
槿花やるなる人にやるとて
今のまの朝かほをみよかゝれともたゝこの花は世の中そかし
人〳〵聞々にある所をよませしに山城かへりふち
ひたすらに憂身を捨ゑ物ならはかへりふちにはなけしとそ思
さやか山
（大木）なにしおへはとにあかくもみゆる哉さやか山よりいつる月影
みとろいけ
たたきけは影たにみえしみとろ池に住水鳥のあるそあやしき
雨のもり
（山木）ありやともとふ人なくてふる里に雨のもりくるをとそ悲しき
もとりはし
（同）いつくにも歸るさまのみ渡れはやもとり橋とは人のいふらん
攝津国　しまいしも
満風やのとけかるらん神のみるしまのしもより舟のほろあり
たまさかの池

浮世には有へん事もたまさかのいけらんとたに思ひやけする
羽束の里
限ありてはつかの里にすむ人はけふかあすかと世をも嘆かし
春の初比和布と云物を梅花につけて人のをこせた
るに
（上六）花みれはこのめも春に成にけり耳のまもなし鶯の聲
さくらのいとおもしろうさきたるをみていにし人
のもとよりちらぬさきに今一度いかてみんと云た
るに
とうをこよさくとみろまにちりぬへし露と花との中そ世の中
といひやりて待に日比になりぬれはいひやる
くましくはおりてもやらん櫻花風の心に任ては見し
といひたれは中〳〵あたの花はみしとてなんと云
たるに
あた也と名にこそたてれ櫻花霞の内にこめてこそたれ
おなしころ女客人のまうてきて物語なとしてかへ
りぬるに
我宿の花をみすてゝいにし人心のうちはのとけからしな
松竹なとある中に櫻のさけるをみて
ときはなるものともやかてみてしかな松と竹との中に櫻を
懸子な、手箱もたる人の、子のかきりみにあるを

みてこへはとらせたるをあはすとてかへしゝにい
　ひやる
くやしくも見せてける哉浦島のこめて置たる箱の懸子を
　ことなる事なきおとこのあるかねんと云たるに
ねられねはとこなかにのみおきゐつゝ跡も枕も定やはする
　しりたる男の女假借するにえあふましき氣色を見
　ていみしうなけきて思ひやみなんとおもふにやま
　ねはわふるに
かくなからやむへき中とおもふにもあやなく我そ心くるしき
　たまさかにあひて物をたにいひあかす云たるに
逢事によろつまさらぬ我ならはいひにはいはておもひにそ思
　雪のいたうふりたるあかつきに人のいてゆくあと
　あるにつとめていひやる
とゝめたる心はなくていつしかと雪のうへなる跡をみゝし哉
　とき〳〵くる人の門の前よりわたるにおほゆる
いはましを己かてなれの駒ならは主にしたかふあゆみすな共
　冬比荒たる家にひとりなかめてまたるゝことのな
　かりしまゝにいひあつめたる
夫木 つれ〳〵と詠くらせは冬のひの春のいくかにとならぬ哉
玉葉 　荒たるやと
中〳〵に我かひとかゝ思はすはあれたる宿もさひしからまし

　ね覺のとこ
かたらはん人を枕とおもはゝやね覺のとこに有と頼まん
　曉の月
千載 有明の月みすさひにおきていにし人のなごりを詠めし物を
　埋火
萬代 まとろむをおこすともなき埋火をみつゝはかなく明す比かな
　朝霜
かたしきてねられぬ閨の上にしもいとあやにくにをける朝霜
　袖氷
朝とに氷のとつる我袖はたかほりをけるいけならなくに
　庭雪
詞花 まつ人のいまもきたらはいかゝせんふまゝくをしき庭の白雪
　晩思
萬代 夕暮になそも思ひの増るらん待人のはたある身ともなし
　うたゝねのゆめ
はかなくもよを頼む哉宵のまのうたゝねにたに夢やみゆやと
　正月子日人の許に
春霞けしき立にし朝よりまた鶯のはつね成せは
　たゝかたらひたるおとこのもとより女にやらんと
　て歌ひとつといひたるにやらんとて
後拾遺 かたらへはなくさむ事も有物を忘れやしなん戀のまきれに

世にありなはときこえんと思人の許にくらきまき
れにさしをかす
夕暮は忍ひあまりぬありけりと思はん事を思ふ物から
いとしけくふみをこする人の返事もせねはたえぬ
なりといひたるに程へてやる
いまはしもとはゝこたへんさはかりと心見けりと心みつれは
と云て例ののち〳〵返事もせねはまたなにとにこ
とつけんするそといひたるに
今も猶たえは絶なんかきつくるくものいかなる事ならすとも
またうき心はへ見る事なと云たる人に
いとひやる方をしらねはある程によその人さへうきをみつ覧
三月許に一夜物なといひかはしたる人のもとより
いと事ありかほにけさはいとゝものなんおもはし
きと云たるに
新古今
今朝はしも歎きもすらんいたつらに春の一夜の夢をたにみて
けふはいつよりも空のけしき物あはれにおほえて
暮かたにをちの山へは成にけりいとゝ計に駒とゝむらん
と思ほとに月もいてぬれは空も心をしるにやおほ
ろなれは
やとらてもこよひの月はみるへきを曇はかりに袖のぬるれは
とひとりごつを聞給けるそわりなきや

思ひしる事有かほに月影の曇氣色のたゝならぬ哉
いとつれ〳〵にふれは雨のとおほゆる
雨もよにさはらしと思ふ人により我さへあやなながめつる哉
くれぬれはなこりなく空はれてくまもなき月を見
て
昨日てひけふひ暮していつのまにこてふにゝたる月をみる哉
九日わたおほはせしきくをこせてみるに露しけ
ゝれは
おりからはをとらぬ袖の露けさを菊のうへとや人のみるらん
ひさしくなりぬ御くしまいらんといふいらへはあ
やしや
いとゝしくあさねの髪は亂るれとつけの櫛はさゝまうき哉
十日もしもやとてかの大津に人やりたれは唯今あ
りつるとてあるを見るにも
思ふ人おほつよりとそ聞からにあやしかりつる袖のぬれぬる
さてあけてみれは思にたにもとあるにも
萬代
忘らるゝ時そともなくうしと思ふ身をこそ人の形見にはせめ
十月物忌して旅につれ〳〵とおほゆるまゝに
けふの日をくらす計はいもかりとゆかぬ計はくるしかりけり
くれぬれとおくへもいらて月見るほとに夜はあけ
ぬるなるへし空の氣色あはれなるにも

まどろまて明しつるにも今しこそのへに宿れる露もゝくらめ
　三日例の所にかへりきてなきてもいはんなとなか
　むるほとに曉にいくへ侍をふみといふやらんとお
　もふもちらんかつゝましうおほえて
さゝかにやうはの空にはかきやらて思ふ心のうちをみせはや
　二十四日風のをとみゝにとまるにも
つねならはよそにきかまし風の音を身にしむ物と思ひける哉
　五日曉につまとをあけてみれはうちくもる空のけ
　しきむしの音よりもうちそへつへき心ちして
あけくれに過ゆく秋ちいつまてと聞ゆるむしのねにそ鳴ぬる
　明ぬれは人のいそくとありしものかたみるとてう
　ち忘れたるさまにてもくらしつへきかなとおもふ
　ほとにはかにさはるとありてものへまうてんとす
　る人あるほとなれはほかにわたりてはしにてあは
　れなるやまきはなとみゆれは
夕日さすかけに山とはみゆれ共いらぬほたしになれは成らん
　十七日におもしろきかへてのあるをみてとらせて
　とりいるゝほとに假にいとおほくちりぬれはくち
　おしうて
（後拾遺）いかなれはおなし色にておつれとも涙はめにもとまらさる覽
　つれ〳〵とすきにける日かすをのみなかめて

人つてに聞こし山の名にしおはゝ忘れゆくとも思はましやは
　九日午時許ある人もみとかむへき人もなき所にて
　心やすくみるまゝに
白露のうちをきかたきとのはゝかはらん色のおしき成へし
　二十日今日のほとはとおもふにもむかしあはれに
　て
有はてぬわか身とならは忘しといひし程へぬ我身ともかな
　心におほゆるひとひあめのいとしめやかにふるに
　ふしなからきゝて
物思へはしつ心なき世の中にのとかにもふる雨のうち哉
　二日風いたう吹にみたるゝくもを
いつまてかけふりとならて風吹はたゝよふ雲をよそに詠めん
　つとめてはしめかたをなかむれは空いとようはれ
　てかりのつらねて鳴わたるを
（夫木）とふかとて旅の雲にひまもなくかきつられたる鴈かれを聞く
　四日例の所にわたりたれはみさりつるほとに荻薄
　も萩のませなともみなこほれにけれは
（夫木）我宿はすかはらのへと成にけりいかにふしみて人のゆくらん
　その夜もかさはしにてうらやましうもとみるまゝ
　に
よそにてもおなし心に有明の月みはそらそかきくもらまし

五日おかつきめをさましてきけはかしかましききてありしむしのをとせぬに
れをたにも今はなくへきかたもなしまきれし虫の聲絶ぬれは
ひろつかた人のもとよりなにとか身つからきこゆへきとなんおほくとのたまへる返事に心にもかく、まて
落とまるときはしりにし時そとてけさは涙のいふかひもなし
とかゝれぬさるはそてよりほかのとおほえし物をとをき所にまうてにし人もけふはかへりたまひぬらんといふをきくにもかくのみおほゆるにそ
これにつけかれによそへて待程は誰をたれともわかれさり凫
七日人のものかたりするをきけはその人のせちにかたらひつる人も忘れぬなといふをきくにも
いかにとてなをなけかるゝ忘ぬといふ人數にあらぬ身なれは
二十八日物詣し人のかへりきてうちふして物語するをきくにもまつ
きたりとそよそに聞まし身にちかくおなし心の妻といふとも
今日晦日になりにけりとおもふにも
萬代
したはれて心にかなふ身也せはけふまたあきに別ましやは
くれつかた霧のたゝすまひそらのけしきなとあはれしれらんとて
今はとてたつ霧さへそあはれなる有し朝の空ににたれは
十月一日
かはしてし衣はかへしむすひてし露けゝなりと人はみるとも
二日ひまなくあはれなる雨になかめられて
玉葉
今日は猶隙こそなけれかきくもる時雨心ちはいつもせしかと
三日ありし所なとをみるにも
身はゆけとなをは愛にし留むれはやりと口社とゝめられけれ
その夜のゆめにふみのありけるをみるとてさめてはきしによるなみ
さめてこそみるへかりけれ現にも跡はかもなき夢としりせは
四日まちかきもみちを風の吹ちらすをとりあつむとて
木枯の風のたよりにつけつゝもとふとのはは有やと思はん
とみゐたるほとに西なる牛なんしぬると云を聞て
じぬるにも増りて物をうしとのみ思ふ我身にかへまし物を
五日おきふしものをとおほゆれはふしなからみいたしたれは霜いとしろうをきたり
はつ霜もをきにけるまておきぬ哉物うかるへき物ならなくに
六日の夜時雨なとまめやかにするをよゐなる僧の經よむに夢のよの見しらるれは
夫木
物をのみ思ひのいへをいてゝふる一味の雨にぬれやしなまし

かくとおもふにも

たれをとる物にもかなや忘草おひなはかゝる跡もみえしを

とおもふにさきにも所々ありけり一品の宮なるし
かく〳〵の人にはこのたひもありけりときくにもと
りわきたるこゝちもなき心ちして

とほつらにたつる成けり今はさは心くらへに我もなりなん

おほかたにあるふみとも殿の御物忌おまへなるほ
とはえみぬにそひたるふみはこのうはつけの心も
となさにはしをあけてみるまゝに

これにこそなくさまれけれ傍にみゆるにはにぬ

ようさりまかりいてゝふみみるにとのなりけるも
のをまつあけていみしういはれてもみつからのみ

ありはて内命まつまの程はかりいとかくものを思はすもかな

〔右和泉式部續集以圖書寮本校合〕

以宮内省圖書寮所藏堀氏原本再校了　芝葛盛

大正十三年十一月二十日印刷
大正十三年十一月廿五日發行
昭和十三年四月一日四版發行
昭和十六年九月二十日五版發行

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
發行者　太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
印刷者　永島喜代次郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
印刷所　新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
發行所　續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八

（第十六輯の上）